
龍の旗の下に

雨霧颯太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍の旗の下に

【Nコード】

N2516G

【作者名】

雨霧颯太

【あらすじ】

翼竜と人間が共に暮らす世界、アルマダ。この世界では数百年の間、人間が3つの国に分かれ、世界の覇権を巡って相争う時代が続いていた。ワイバニア、フォレストル、メルキド。星王暦2182年、戦いの歴史が変わり始める・・・

序章 その一

翼竜と人間が共に暮らす世界、アルマダ。この世界では数百年の間、人間が三つの国に分かれ、世界の覇権を巡って相争う時代が続いていた。

一つは最大の国土と肥沃な大地を持つ翼竜の国、ワイバニア帝国。
二つ目は国土西部に世界最大の大草原を持ち、多様な動植物と鉱産資源に恵まれた巨兵の国、メルキド公国。そして、三つ目が水産資源に恵まれた大河を有し、その国土の多くを森に囲まれた国、フォレスト王国であった。

これらの国々が永きに渡る戦いを繰り返す中で、一つの自然の法と呼ぶべきルールが生まれた。

「龍騎兵は兵士に勝ち、巨兵に負ける。巨兵は龍騎兵に勝ち、兵士に負ける。兵士は巨兵に勝ち、龍騎兵に負ける」

龍騎兵はその名の通り、戦闘用に調教された翼竜に乗った兵士のことを指す。遙か上空から急降下し、猛スピードで襲い来る龍騎兵に、兵士達は文字通り手も足も出なかった。

巨兵はメルキド公国だけが持つ独自の兵科である。メルキドは国土西部に大草原を有しており、そこには多種多様な生物が棲息していた。十メートルはある巨大な象もその一つで、メルキド人は捕獲した象を戦闘用に調教し、五、六人の兵士を乗せる櫓を象の背中に据え付けて、戦車代わりにした。これを戦獣といい、その巨体は翼竜の牙をもってしても倒すことは出来なかった。

また、メルキドは独自の技術を持ち、屈強な兵士を作り出した。これがゴーレムと呼ばれる石兵であった。ゴーレムは木と金属で出来た主骨格に鉄で出来た装甲板を貼付けた身長三メートルほどの巨大な機体で、兵士が胴体部に乗り込んで操縦し、動力の伝達には死んだ巨象の革から作ったバネを用いていた。

この戦獣と石兵を合わせて巨兵といい、翼竜の牙すら届かず、不用意に突撃をかければ逆に翼竜の牙と首の骨が折れて死んでしまうと言う、龍騎兵にとっては極めて相性の悪い相手であった。

しかし、巨兵はその頑強さに比例して動きが鈍重で、歩兵の身軽さと機動力の前にはことごとく敗れていった。

このルールのおかげでワイバニア、メルキド、フォレストルそれぞれの勢力が拮抗し、数百年の間、戦いを繰り返しながらも微妙な均衡が保たれていたが、四〇年前、その均衡を破る衝撃的な出来事が起こった。

星王暦二一四二年八月七日、ワイバニアの探検家であり登山家のグスタフ・フォン・ハウスフォーファーが前人未踏と言われたワイバニア帝国北方のアルケミー山脈の登頂、縦断に成功し、ワイバニア本土から分けることが出来なかったアルケミー山脈の裏側斜面に、翼竜の大規模営巣を発見したのである。

この知らせを聞いた当時のワイバニア皇帝アドルフェーII世はただちにアルケミー山脈へ軍を派遣。生息していた翼竜を捕獲するとともに精強な龍騎兵軍団を十年かけて作り上げた。

そして、星王暦二一五二年五月八日、ワイバニア皇帝アドルフェーI世は龍騎兵隊六〇〇〇を含む六個軍団、六万人という史上かつて

ない大軍でフォレストル王国に侵攻した。

序章 その二

この兵力は当時のワイバニア軍のほぼ3分の2にあたり、その圧倒的な兵力はフォレストアル辺境の各都市を数日のうちに失陥させた。

対するフォレストアル王国は病身の国王に代わり、当時若干20歳の王太子、ジェイムズ・エル・フォレストアルが自ら陣頭に立ち、近衛旅団5,000を初めとする4個軍団、4万5千の兵力で迎え撃った。

この軍団も当時のフォレストアル王国において投入出来る精一杯の軍団であった。当時、フォレストアル王国は隣接するメルキド公国と和平条約を結んではおらず、ワイバニア侵攻に乗じて、メルキドも攻勢をかけてくることが予想されたため、対メルキドのためにも兵力を割かねばならなかったのである。

1.3倍の兵力差、そして、かつてない規模の龍騎兵軍団を前に王太子ジェイムズ率いるフォレストアル軍は果敢に戦ったが、空から襲い来る龍騎兵の前に精強で知られたフォレストアルの兵士達は、一人、また一人と倒れていった。

そして、星王暦2153年3月24日、フォレストアル軍は最終防衛線でもあるハムレット砦を死守し、ワイバニアを退却させることに成功した。

だが、これは退却というよりも、ワイバニアが戦略目的を果たしたことによる撤兵と言い換えた方が適切であった。このワイバニア帝国侵攻により、フォレストアル王国はその国力を著しく下げることになってしまったのである。

フォレストル北部の穀倉地帯であるリア平野を含む、領土のほぼ半分を奪われ、国庫の歳入が低下しただけでなく、人的損害も大きかった。フォレストル第三軍団長、トマス・ペンドルトン將軍を初め、将兵約3万5千人の命がこの侵攻で失われた。

さらに追い打ちをかけることがフォレストル王国に起きた。国王、エドワード・エル・フォレストルの崩御であった。

この報に接し、いち早く動いたのはメルキドであった。メルキドは3個軍団、3万の軍勢をフォレストル王国との国境線となる大河、カスパール川河畔にまで派遣した。ただちにフォレストル軍は水軍約1万を出動させ、これに対応した。

まさにカスパール川で一触即発となる情勢の中、これを解決させたのはフォレストル王国宰相、ロバート・リードマンであった。リードマンは国王の死後、3日の服喪とあと、すぐに王太子ジェイムズを即位させ、メルキドと和平条約の締結を進言した。

和平交渉にはリードマンと即位したばかりの国王ジェイムズ自らが赴き、メルキドの国家元首である総帥との会談に臨んだ。

フォレストル王国の指導者二人が敵国に入国したことは明らかに無謀きわまりないことであり、彼らは常に暗殺の危険にさらされた。

彼らが死ぬことはすなわちフォレストル王国の滅亡を意味していたからである。彼らはそれを十分すぎるほど理解していたが、戦争を回避するためには、自分たちの命を危険にさらす他に方法はなかった。

序章 その三

しかし、彼らは何の目算もなくメルキドへ入国した訳ではなかった。メルキドは代々武勇を尊ぶ国家であり、暗殺は下策中の下策とされていた。故にメルキドは古来より暗殺によって国内の政敵を殺めたことも、国外の指導者を殺めたこともなかった。

だが、今回の場合は事情が異なった。フォレスタルの国王と宰相がそろって入国したのである。彼ら二人が死ぬことがあれば、それは世界の半分を手に入れるに等しく、さらにフォレスタルとの戦争で疲弊しているワイバニアに侵攻出来れば、誰もなし得たことがない世界統一が成功する。これはメルキドにとって十分すぎる誘惑であった。

しかし、もっとも下策とされる暗殺という手段をとるということは、メルキドにとって後世許しがたい恥辱となるであろうことは明らかだった。

メルキド公国は武人としての矜持か世界の覇権のどちらをとるべきか揺れに揺れていた。公国首脳部は賛成派、反対派、ともにまっぴらたつに分かれ、三日三晩会議が続けられた。

これはリードマンの仕掛けた心理工作であった。彼はメルキド首脳部に心理的に揺さぶりをかけることで、交渉を優位に運ぼうとしたのである。

三日間、ほとんど寝ずの会議が続いたが結論は出ず、最終的にメルキド総帥ギムレットに判断が委ねられた。

ギムレットは当時27歳と若かったが、政治家としても軍人としても突出した才能を持っていた。最終的にギムレットは暗殺という手段をとらなかつた。彼のメルキド人としての誇りが、政治家としての彼の判断を凌駕したのである。

後世、彼を認めない一部の人間達は彼を「メルキド一の愚者」とののしかったが、大多数の人々によってこの考えは否定されている。

ワイバニアの歴史家、アレクサンダー・フォン・キルヒアイスはワイバニア正史の中で以下の一文を記している。

「ギムレット最高の偉業はメルキド人の誇りを守り抜いたことにある。彼がもし、暗殺の判断を下していたら、以後、メルキドは恥辱にまみれた歴史を残さねばならなかつたであろう」

ギムレットは敵中深く入り込んで来た彼らの勇氣に感嘆し、二人を厚くもてなした。

ジェイムズもまた、敵ながらその勇氣を称えるギムレットの度量の深さに感じ入り、年齢も近かつたこともあって、二人の間に友誼が芽生えた。

しかし、ギムレットは交渉のテーブルにつくと、政治家としての能力を余すところなく発現させた。彼は撤兵を条件に、カスパール川の漁業権と川底の浚渫権を要求したのである。

メルキド、フォレスタル国境であるカスパール川は良い漁場であり、川底は金などの鉱床があり、地下資源の宝庫であつた。カスパール川の権利を譲ることは、フォレスタルにとって手足をもがれたに等しい大損害であつたのである。

老練な政治家であるリードマンはこの若き総帥の手腕に舌を巻いた。フォレストアルにとって、メルキド側の提示した条件は飲むことが出来ないものだった。

序章 その四

会議が止まりかけたとき、フォレスト王、ジェイムズが口を開いた。アーク・プリマス港の開港と貿易利益の約七〇%をメルキドに譲渡することをギムレットに提案した。

アーク・プリマス港はカスパール河畔にあるフォレスト唯一にして、最大の軍港であり、ここを開港してメルキド、フォレスト両国の川上貿易から生まれる利益は莫大なものになると試算された。

また、河畔唯一の拠点を解放するということは事実上、フォレスト水軍の武装解除を意味していた。

フォレスト王の突如にして、大胆な提案にメルキドの総帥は驚き、しばらく考える時間をくれるよう申し出た。

その申し出に間髪入れずに、ジェイムズはさらなる案を提示した。実弟である、ウォルター・エル・フォレストを人質に差し出すというのである。若年のため、実子を持たぬジェイムズにとって、最大の提案であった。さらに、嫡子が生まれた場合には、代わりに嫡子を人質に差し出すとジェイムズは提案した。

ギムレットはついに折れ、交渉は合意に達した。彼らの間でなされた合意は以下の通りである。

・アーク・プリマス軍港の開港と貿易上の利益の7割をメルキド公国に譲渡する。

・フォレスト王族、ウォルター・エル・フォレストを人質とすること。ただし、王家に嫡子が生まれた場合は、直ちに交代するも

のとする。

そして、ギムレットからも新たな提案がなされた。

- ・メルキド総帥家とフォレストアル王家との婚姻
- ・ギムレット嫡子、スプリッツァーをフォレストアル王国への人質とすること

「一方的に人質を出されては、メルキド公国の名折れ。相応の人質を出して、和平の証としたい」

それがギムレットの意志であった。こうして、星王暦二一五三年五月六日、メルキドとフォレストアルの間に和平条約が結ばれた。

この和平条約はメルキドの外交戦の勝利と言う意見が支配的であるが、それに反対する意見も多数出ている。この和平条約を結んだことはメルキドの世界統一の好機を逃さただけではなく、国力の低下したフォレストアルにとって、メルキドとの外交の足がかりを作ることにつながったからである。

事実、武勇を尊ぶメルキドの国家元首、ギムレット総帥は勝算有りとはいえ、少数の供しか引き連れず敵国に赴いたジェイムズの勇気と決断力を認めており、ジェイムズも野望よりも誇りを貫いたギムレットの姿勢に深く感じ入っていた。

彼らは政治の場では互いの国の重責を担い、相争わざるを得なかったが、一度外交のテーブルを離れたときには無二の親友同士となっていた。

こうした互いのバランス取りによって、フォレストアルとメルキドは

戦火を交えることのない関係が十年以上続き、三十歳になったフォレスト王、ジェイムズ・エル・フォレストは、メルキド総帥、ギムレットに同盟締結を申し入れた。

若き王の親友はこれを快諾し、国内の意見をまとめあげてことを約束した。

星王暦二一六四年七月七日、国境線であるカスパール川上で、フォレスト王国とメルキド公国との間に安全保障条約が締結された。世に言う「船上の盟約」である。

国境線、相互不可侵、ワイバニア侵攻の際の増援要請などがまとめられたこの条約の締結によって、ワイバニアと二国の国力比は拮抗し、ワイバニアは双方の国に六個軍団以上の大規模侵攻が事実上不可能になった。

小規模、または一から二個軍団規模の戦闘はあったものの、世界は大きな変革もなく、緩やかにして危うい平和を保っていった。

それから、二十年。星王暦二一八二年六月四日、世界は再び動き始めることになる。

第一章 オセロー平原の戦い 第一話

船上の盟約の締結によって、20年以上の間、世界は安定を保ちながら戦乱の傷をいやしていた。争いが全く無くなることはなかったが、それでもアルマダに暮らす人々は緩やかな日々には安眠を見いだしていた。だれもがこの時間が永く続いていくと信じていたが、星王暦2182年6月4日、安息の日々は突如終わりを告げた。

「ヒーリー！ヒーリー！！」

フォレストアル王城の広い敷地の中を侍女のポーラ・ワイズマンはある人物を探し続けていた。彼女は彼がいる場所にあたりをつけては、広い王城の中を走り回っていた。

「ヒーリー！……あ」

城のはずれにある植物園のベンチで彼女はようやく探し人を見つけた。探し人は彼女の苦労を知らずに眠っていた。ポーラは息を弾ませながら、彼の近くに寄ると、彼を起こそうとした。

「ヒーリー。起きて！国王陛下がお呼びよ！！」

ポーラは彼を揺らして現実世界に呼び戻そうとしたが、当のヒーリーはいやそうに寝返りをうって言った。

「うーん……あと5分……」

能天気と言うか、自分勝手ともいえる彼の態度に、彼女はキレた。ポーラはヒーリーの耳たぶをむんずとつかむと、大きく息を吸い込

んで叫んだ！！

「こら！ヒーリー！！いい加減、おきろー！！！！」

城中に響き渡るかと思う大声に、ヒーリーはベンチから飛び起きた。彼らの周囲では、ポーラの声に驚いて、たくさんの鳥が羽ばたいていった。

「うあー………ポーラ。頼むから、もう少しエレガントに起こしてくれ。頭ががんがんする」

だるそうにヒーリーは給仕服姿の侍女に言った。

「何言ってるの。ヒーリーが起きないから悪いのよ。いつも夜更かししてるから朝が弱くなるの」

ポーラはまるで弟に言い聞かせるかのように言った。

「あのなあ、ポーラ。俺は25歳で君より年上だし、一応、第3王子なんだから、多少敬ってくれてもいいだろう？」

ベンチに腰掛けたヒーリーは2歳年下の侍女に上目遣いで言った。ポーラはヒーリーの抗議に意に介すこともなく、腰に手をあてて言った。

「別に、ヒーリーはヒーリーなんだし、いいじゃない。それに『あいつは少し厳しいくらいがちょうどいい』って陛下のお墨付きももらっているのよ。………あ！それより、早く仕度！！陛下がお呼びよ」

「面倒臭いな。これでいいだろう？」

ヒーリーは濃緑色の寝癖まじりの頭をかきながら言った。

「だめ！正装して、身なりをきちんとしてGO！よ！！」

のっそり歩くヒーリーを蹴飛ばして、活発な侍女は言った。

第一章 オセロー平原の戦い 第二話

国王の間。ここは御前会議など、国政を左右する重要事項が話し合われる場であった。二式正装と呼ばれる執務用の正装に身を整えたヒーリーは国王の間の大きな扉の前に立った。

「第三王子、ヒーリー・エル・フォレストル。陛下の命により参内いたしました」

元気さと気怠さを足して二で割った少し大きめの声で、ヒーリーは扉に呼びかけた。すると、彼を圧していた大きな扉が開いた。

「遅い！ 何をしていたのだ？ ヒーリー！」

玉座に腰掛けたフォレストル王国国王、ジェイムズ・エル・フォレストルは不肖の息子を叱りつけた。

「申し訳ありません。陛下」

息子の謝罪とともに、王はため息をつき、円卓への着席を促した。円卓には王太子エリクシル・エル・フォレストル、王国宰相マクベス・エル・フォレストル、近衛旅団司令官デビッド・ウオズマリー、国王直属龍騎兵隊長アレックス・スチュアートら、フォレストル軍の首脳部が座っていた。

「四時間前、オセロー平原でワイバニア軍一個軍団がフォレストル国境に向け進軍中という情報が入った。ヒーリー、お前は近衛旅団を率いて、ワイバニア軍を迎撃し、これを退却させよ」

ジェイムズの勅命に、ヒーリーは色を変えた。

「お、お待ちください。父上。どうして俺……いや、私が？ 他に軍団も、適任者もいるでしょう。ピット將軍は？」

ヒーリーの抗議に応えたのは、彼の兄でもある第二王子にしてフォレストル王国宰相、マクベス・エル・フォレストルであった。

「ピット將軍率いる第一軍団はオセロー平原西方のロミオ峡谷でワイバニア軍一個軍団と交戦中だよ」

「第二軍団は？」

「第二軍団もオセロー平原東方のテンペスト湖で、ワイバニア一個軍団と対峙しているよ」

兄の言葉にヒーリーはため息をついた。

「父上。情報は正確に言ってもらわねば困ります。これはワイバニア三個軍団による大侵攻ではありませんか。第一、第二軍団と交戦中の軍団は恐らく陽動でしょう。本命は今進軍中の軍団、ワイバニア十二軍団の中でも最も機動力があるとされる第十軍団だと思われませんが、いかがですか？」

国王のジェイムズはヒーリーの考えに頷いた。

「確かに。偵察の龍騎兵からの報告では旗印は第十軍団のものだそうだ。現在、我が第三、第四軍団は南方にあり、北方の国境線であるオセロー平原での戦いには間に合うまい。残っている人間で軍の指揮が出来るのはお前しかおらん」

ヒーリーは黙ってしまった。勅命を拒否すれば、それは国の滅亡を意味する。争いごとが嫌いなヒーリーとしても、拒むことは出来なかった。

第一章 オセロー平原の戦い 第三話

さらにヒーリーにとどめを刺したのは、ヒーリーのもう一人の兄、王太子エリクシル・エル・フォレストルの一言だった。

「ヒーリー。俺からも頼む。本来なら、俺が軍を率いていけば良いのだが、父上を補佐して、政務を取り仕切らなければならない。許してくれ」

王太子ではありながら、現在は国王代理として国の政務の大部分の司る兄に頭を下げられたヒーリーはうろたえた。

「兄上。頭をお上げください。王太子がむやみに頭を下げられてはなりません。それに、兄上にもしものことがあれば、それこそ国の重大事です。出撃の命、謹んでお受けいたします」

「ありがとう。ヒーリー。何か必要なものがあれば、俺とマクベスに言ってくれ」

王太子エリクシルは頭を上げると、五つ下の弟に礼を言った。

ヒーリーはしばらく顎に手をあて、考える仕草をした。

「……では、近衛旅団と各都市の守備隊から弓兵隊を合わせて三〇〇〇名、あと一個攻城兵大隊と一個龍騎兵大隊各一〇〇〇名ずつお貸しください」

ヒーリーは兄二人に、今回必要となる戦力を無心した。兄二人は、お互い顔を見合わせた。

「ヒーリー、寄せ集めの一個旅団、五〇〇〇名で戦うつもりなのかい？」

マクベスはあまりの戦力の少なさに驚いた。

「はい。そのかわり、相手はワイバニア第十軍団、進軍の早さは折り紙付きです。必要な武装のほぼ全てをハムレット砦に集めてください。そうすれば、我々は最短、最速で戦場で展開することができます」

マクベスは五年前に宰相に就任してから、来るワイバニアとの戦争に備えてフォレスタル各都市に武装と補給物資を備蓄させておき、兵力の展開に合わせて戦場に最も近い都市に移送させることで兵力の迅速な移動を可能にさせるネットワークを完成させていた。

ヒーリーは、初めてそのネットワークの実戦使用に踏み切った。これがうまくいけば、ヒーリー軍はほとんど身一つで最前線まで向かうことが出来るため、通常の軍団の倍は早い進軍が出来る試算された。これはワイバニア第十軍団を遙かに上回る行軍速度だった。

「それでは、私は出撃の準備に入ります」

ヒーリーはそう言うと、席を立った。ヒーリーが国王の間を出ると、父王ジェイムズ・エル・フォレスタルは大きなため息をついた。

「普段も、あのように頭が回ればいいのだが……」

「彼の面倒くさがりは王国随一ですから、余程のことがないとあはなりませんよ」

次兄のマクベスが父に言った。

「それにしても、寄せ集めの一個旅団でワイバニアの精兵に勝てるでしょうか？」

龍騎兵隊長のアレックス・スチュアートが言った。

「ヒーリーが勝算があるというのなら、大丈夫なのだろう。ああ見えても、彼はフォレストル最高の戦術家だ。直に行って確かめてくるといい」

王太子エリクの言葉に、アレックスは頷いて席を立った。会議の進行役であるジェイムズは会議の解散を宣言し、対ワイバニア侵攻のための御前会議が終了した。

第一章 オセロー平原の戦い 第四話

会議が終わった頃、ヒーリーは城の一隅にある宮廷魔術師兼錬金術師の研究所の扉をノックしていた。ヒーリーと同じ年くらいの白衣の若者が研究室の扉を開けた。

「やあ、ヒーリー。今日はどうしたんだい？ やけに不機嫌じゃないか」

宮廷魔術師兼錬金術師のラグニール・ド・ビフレストであった。

「父上に、対ワイバニア軍の臨時司令官に任命されてね。……まったく、軍なんか早く辞めて、悠々自適に暮らしたいものなんだがなあ」

ヒーリーは仏頂面で目の前の親友に話した。宮廷魔術師は笑うと、ヒーリーに言った。

「僕は君にこそ、軍にいてほしいと思うんだけどね。ヒーリー。僕が発明した道具をうまく扱ってくれる人間は君の他にいないからね」

腰まで伸びる艶やかで黒い長髪を翻して、ラグニールはヒーリーをテーブルまで案内した。研究所の中は普段見られない道具や資料で埋め尽くされており、狭い空間がただでさえ狭く、そして迷路のようになっていた。ヒーリーは研究所の道具や資料を踏まないように注意して歩きながら、今回のことの顛末を話した。

「というわけで、ラグ。君にまた道具を無心しに来た訳なんだ。例のものを使わせてもらいたいんだけど、どうかな？」

ヒーリーの申し出にラグはのけぞった。

「メルの発明したあれかい？ あんなのでいいなら、倉庫に一〇〇個ほど転がっているから持っていきなよ。それにしても、笑い話で出したものが意外に掘り出し物になるとはね……」

「お師匠様！ 笑い話とはなんですか？」

ラグの背後で女の子どもの声がした。ラグが振り向くと、そこには一二歳くらいの女の子が立っていた。ラグの弟子、メリクリウス・ビフレストであった。メルはその小さな体に不釣り合いな大きさの白衣を引きずって、二人にお茶を運んで来た。

「あれは私の最高傑作なんですよ！」

そう言うと、メルは乱暴にカップを置いた。

「わかった。わかった。じゃ、今度は僕の最高傑作をヒーリーに進呈するでしょうか」

ラグは立ち上がると、研究室の奥まで歩いていった。

「メル、君の師匠は何を作ったの？」

ヒーリーはメルに聞いた。メルは唇に人差し指をあてると「秘密」のジェスチャーをした。

「もうすぐわかります。でも、少なくともヒーリー様好みの品です」

五分ほどして、ラグは嚴重に封印された箱を持って帰って来た。ラグは鍵を開けて、箱のふたを開けると、ヒーリーにその中身を見せた。

第一章 オセロー平原の戦い 第五話

「これは……。なんだい？」

ヒーリーはその中身がなんなのか理解出来ず、ラグに尋ねた。

「そうか……。確かに分からないだろうね。これは銃。魔術銃だよ」

魔術銃と呼ばれたそれは、現実世界で言う少々大きなオートマテイツク拳銃に酷似していた。二丁あるうちの一つは青く輝き、もう一丁は銀色の輝きを放っていた。

「銃身に『加速』の護符が彫り込まれていて、そこを鉛の銃弾が通ること、弓矢より遠くにいる敵を倒すことが出来る。しかも威力も弓矢とは桁違いだよ」

この世界には魔術と呼べる人外の技術も存在する。それは遙か太古、神々との戦いのため、人間が生み出したものとされているが、遙か永い時を経たことでその技術の多くが失われてしまい、今ではわずかにフォレストルで伝えられているのみである。魔術は特殊な加工を施された布や金属などの素材に「護符」と呼ばれる古代文字を書き込むことで完成される。

宮廷魔術師のラグは魔術を錬金術と織り交ぜることでさまざまな発明を成し遂げた。その発明は軍事のみならず、民生用にも使われていた。病院における天井光もその一つで、手術の際、視野を明るくすることに重宝され、フォレストルでは病死者の一割を減らすことに成功したのだった。

ヒーリーは魔術銃を手に取って真正面に構えた。

「へえ。弓矢よりもずっと軽いな。しかも、扱いやすい」

ヒーリーはラグ自慢の逸品を右手に持ち替え、左手に持ち替えして、ひよひよいと弄んだ。

「気に入ってくれたようだね。ヒーリー。ついて来てくれ。使い方を説明するよ」

ラグはヒーリーとメルを研究室の外に連れ出した。研究室は城の外れにある。城内の一部は森になっており、的にはおあつらえ向きの大木が多くそびえ立っていた。

ラグはそのうちの一本に狙いを定めると、銀色に輝く銃を持って構えた。

「いいかい。ヒーリー。これはこう使うんだ」

そう言うと、ラグは魔術銃の引き金を引いた。銃口がわずかに光り輝いたかと思つた次の瞬間、大木に大きな風穴が一つ開いていた。魔術銃の威力を目の当たりにして、ヒーリーは一瞬惚けた表情になったが、すぐに親友に賞賛の言葉を贈った。

「すごいな。さすがはラグ。天才だよ」

宮廷魔術師は美形の顔を恥ずかしそうに赤く染めた。

「ははは。ありがとう。引き金を引けば連射が可能だし、この銃自体も頑丈に作ってあるから、格闘戦だって出来るよ。ただし、全部

で弾は七発。撃ち尽くしたら、マガジンを交換するんだよ。……メル」

メルは魔術銃が入っていた箱から予備のマガジンを取り出し、ヒーリーとラグに手渡した。ラグはヒーリーにマガジンの交換方法を丁寧に説明した。

「ありがとう。ラグ。だいたい使い方が分かった。それじゃ、まあ、いっちょ使ってみるか！」

ヒーリーは青と銀の魔術銃を両手に持つと、一気に引き金を引いた。何発も銃弾が発射され、ラグの打ち抜いた大木を幹ごと倒した。倒したシヨックで大きな枝が一本、宙に舞い上がった。ヒーリーは青い銃で狙いを定めると、枝を一発で撃ち落とした。

「これはすごい。ヒーリー、君は思った以上に素質があるみたいだね」

ラグは初めて銃を握ったはずのヒーリーの射撃の腕に驚いた。

「扱いやすいよ。ラグ。ありがとう。この銃に名前はないのか？」

「その青い方が『カストル』、もう一方の銀の銃が『ポルックス』だよ」

「カストルとポルックスか。気に入った！ありがとう、ラグ。ありがたく使わせてもらっよ」

ヒーリーがラグに礼を言ったそのとき、三人の上空で翼竜のいななきが聞こえた。上を見ると、エメラルド色をした美しい翼竜が彼ら

の上を旋回していた。翼竜は彼ら三人を見つけると、一陣の風とともに降り立った。

第一章 オセロー平原の戦い 第六話

「あ、いたいた！ ヒーリー！ やつと見つけた」

「ヴェル！ それにポーラ！」

エメラルド色をした翼竜の背にはポーラが乗っていた。

「ポーラ。なんで君がヴェルの背中に乗ってるんだ？」

ヒーリーは不満そうにポーラに尋ねた。

「だって、私がヒーリーを探してたら、ヴェルが乗せてくれたんだもん。ねえ？」

ポーラがヴェルに同意を求めると、ヴェルは短く鳴き声を上げた。

「この裏切り者！」

ヒーリーは、美しき翼竜に言った。

ヴェルは世界でも珍しいエメラルドワイバーンと呼ばれる翼竜だった。高い知性とエメラルド色の美しい体の特徴で、この世で最も美しい動物の一つに数えられていた。

ヴェルは仔龍のときに親とはぐれてしまい、たまたま父親の狩りについて来ていたヒーリーに拾われた。以来、ヒーリーと共に長い時間を過ごして来た。

エメラルドワイバーンは誇り高い性格でも知られ、ヴェルもまた、

ヒーリーを含め、数少ない人間にしか心開かず、自分の背に乗せるのも、ヒーリー以外に許すことはなかった。ヒーリーにしてみれば、ヴェルの気まぐれとは言え、ポーラをのせるのは、納得がいかないことでもあったのだった。

そんな事情も知らず、ポーラはヒーリーに連絡した。

「ヒーリー。マクベス様からのご伝言よ。武装の件の手配は終わってたって。それから、近衛旅団からの選抜兵が集合したから、広場に来てくれって」

「わかった」

そう言うと、ヒーリーはヴェルの背中に乗った。

「ヒーリー。魔術銃はあとで部屋までメルに届けさせるよ。あと、例のものは攻城兵隊長にとりにこさせるように連絡しておいてくれ」

「わかった。……ヴェル！」

ヴェルは甲高い声を上げると翼を羽ばたかせ、一気に空まで舞い上がった。ヒーリーとヴェルの眼下には突風に耐えるポーラ、メル、ラグの姿があった。

第一章 オセロー平原の戦い 第七話

大空を翔る翼竜にとって、広大な城など大した広さを持たない。わずかに、三分の飛行で、ヒーリーとヴェルは兵士達の集結する広場に降り立った。

「ヒーリー殿下、近衛旅団弓兵大隊一〇〇〇名、攻城兵大隊一〇〇〇名、国王直属第一龍騎兵隊一〇〇〇名。集結いたしました」

エリクシルの命で副将をつとめることになった龍騎兵隊長、アレックス・スチュアートがヒーリーに報告した。フォレストル王国にも、ワイバニアに比べて小規模であるが、龍騎兵隊は存在する。

アレックス・スチュアートはこの年、二八歳。金髪碧眼、隆々とした筋肉を持つ丈夫で、若年ながら確かな経験と、技量を持ち、史上最年少で龍騎兵隊長に任命された。槍術の達人として知られ、槍を手携えての突進の優雅さと絶対的な強さは敵味方を問わず嘆息させた。

また、極めて真面目な性格で、規律を何よりも重んじ、自分だけでなく部下にも規律を守ることが徹底させていた。そのため、非常時でもない限り軍務をさぼってはかりのヒーリーとは何かと合わずにいた。

ヒーリーが軍を率いるに足る器かどうか、この戦で分かる。スチュアートは眼光鋭く、ヒーリーに目を光らせていた。

「ありがとう。スチュアート隊長」

ヒーリーは短く礼を言うと、設置された壇上上がった。

「総司令官のヒーリー・エル・フォレストルだ。諸君、我々は明朝、ワイバニア第十軍団迎撃のため出撃する。敵軍は精兵、名将数多く、強大だ。だが、我々は勝つ。皆が戻ってこられるように。皆で勝利の美酒を分かち合うために。そのために諸君、私に力を貸して欲しい」

ヒーリーが演説を終えたとき、あたりは静寂に包まれた。兵士の中から、その静寂をやぶり、一人拍手をするものが現れた。拍手は一人増え、また一人。最後には三千人の拍手になっていた。

「はたして、一個旅団の兵力で、ワイバニアに勝てますかな？」

演説を終えたヒーリーに弓兵大隊長のウォーリー・モルガンが尋ねた。立派な口ひげを生やした弓兵大隊長はヒーリーよりも威厳があった。

ヒーリーは応えた。

「ああ、もちろんだ。各隊長は、夜七時に俺の部屋に来るように。今回の作戦について説明する。攻城兵大隊長はその前に、宮廷魔術師殿の研究室に行くよう、部下に伝えてくれ」

数時間後、ヒーリーの部屋に集められた隊長達は、ヒーリーの作戦案を聞いて驚いた。

「なんと、無茶な……」

モルガンがのけぞった。

「だが、これがうまくいけば、歴史が変わることになりますな」

攻城兵大隊長のジェイムズ・ローリーが言った。

「龍騎兵隊長の意見はどうか？」

ヒーリーはスチュアートに尋ねた。スチュアートは作戦案を聞いたあと、目を閉じて黙りこくってしまった。

数分の沈黙のあと、若き龍騎兵隊長は重く閉じた目と口を開いた。

「一龍騎兵として、殿下の策は現状において、最良だと考えます。いま少し、お許し願えるなら二、三追加したい案がございます」

そういうと、スチュアートは自分の腹案をヒーリー達に聞かせた。ヒーリーはスチュアートの提案にうなづくと、作戦の細部に変更を加えた。

午前〇時、三人の隊長が作戦内容を確認しあい、この日の作戦会議は終了した。

第一章 オセロー平原の戦い 第八話

「さて、明日は早いし、寝るか」

作戦会議が終わり、3人の隊長を見送ったヒーリーは明日に備えるべく、ベッドに潜り込んだ。ヒーリーが夢の世界への扉を開こうとしたその時、彼の耳にかすかにノックの音が入って来た。

「ヒーリー？ 起きてる？」

音の主はポーラだった。ヒーリーは気怠そうにベッドから出ると部屋のドアを開けた。

「あー。どうした、ポーラ？」

「ごめんね。起こしちゃって。けど……」

ポーラが目を横に向けると、廊下でメルが眠っていた。メルはポーラがかけたであろう毛布にくるまってすやすやと眠っていた。

「あの子、会議が終わるまでずっと待っていたみたいよ。……これ」

ポーラは魔術銃が入っていた鞆をヒーリーに手渡した。

「しまった……。メルにカストルとポルックスを届けさせるとラゲが言っていたのを忘れてた」

ヒーリーは顔に手をやった。

「帰ったら、メルに謝っておくことね。この様子じゃ、出陣の時間にはまだ眠っているだろうから」

「ああ、すまない。ポーラ」

ヒーリーは頭をかいてポーラに謝った。

「私にじゃなくて、メルに謝るのよ。それから、生きて帰って来てね。ヒーリー」

「なんだよ!? いきなり」

「私、今度の戦いが厳しいの知ってるもの……ヒーリーがいなくなったら、私……」

ポーラは今にも泣きそうな顔をしてヒーリーに言った。

「大丈夫。ポーラ。皆生きて帰ってくる。俺が皆を死なせない。こっとうときしか、俺が頭を使わないのを知ってるだろう?」

ヒーリーは優しくポーラに諭した。ポーラはうつむくと、ヒーリーのお腹に抱きついた。その動きがあまりに急だったのと、ポーラの抱きついた勢いが強かったせいで、二人はバランスを崩して転んだ。

「あいたた……」

ヒーリーはポーラのタックルを真っ向から食らい、尻餅をついた。

「ヒーリー……」

ポーラはヒーリーの腹に顔をうずめたまま、顔を上げようとしないか
った。

「なに？」

「お願い。もうちょっとだけ、こつさせていて……」

「はいはい……」

そう言つと、ヒーリーはポーラのショートカットの髪を優しく撫で
た。

星王暦二二八二年六月四日、出撃前夜はこつして更けていった。

第一章 オセロー平原の戦い 第九話

星王暦2182年6月5日、午前10時臨時司令官ヒーリー・エル・フォレストル率いる、ワイバニア迎撃軍、約3,000名はフォレストル王城を出撃した。

途中、タイタスとアンドロニカスに所属する守備隊弓兵、それぞれ1,000名と合流したヒーリー軍は6月15日フォレストル軍北方の拠点であるハムレット砦に到着した。

その頃、ワイバニア第十軍団はハムレット砦から北方100kmの距離にあるオセロー平原中央部に野営していた。

「軍団長!!」

第十軍団長副官のアレクサンダー・クラウスが上官である第十軍団長、ジークムント・フォン・ネルトリンゲンのテントにやって来た。

「なんだ？」

ジークムントは昼寝を妨害されたらしく、やや不機嫌に部下を睨みつけた。

「失礼しました！先行していた偵察龍騎兵が戻ってまいりました。フォレストル軍がハムレット砦に入場したそうです。その数、4,000」

「4,000だと！？我々の半数以下ではないか。歩兵だらけのフォレストルがその程度の戦力でよく我々に勝とうなどと思うものだ

な。……もつとも、フォレスタル主力は我がワイバニア軍に引きつけられているからな。よくこれだけ出せたと言ったところか」

ジークムントは低く笑った。ワイバニアの基本戦略として、3個軍団の内の2個軍団がワイバニア主力軍団をひきつけ、残りの1個軍団が、国境を急襲、突破。続いて突破した軍団が、背後からフォレスタル軍を挟撃し、各個撃破すると言った。極めて高度な戦術指揮能力を必要とされるが、それ以上に部隊の機動力が不可欠であった。

ワイバニア正規軍、十二個軍団は軍団長の作戦指揮能力、兵の精強さなどの総合力に依じて強い順に一から十二に序列される。

ジークムント率いる第十軍団は十番目の序列、すなわちワイバニア十二軍団のなかでも比較的下位に位置する軍団であった。それは軍団長であるジークムントの指揮官としての能力が相対的に低いことによるものであったが、それを補う能力を第十軍団は獲得していた。機動力である。通常の軍団よりも多くの騎兵を配備し、戦場での移動を迅速にさせることに成功していた。その早さは今回のフォレスタル侵攻作戦には必要不可欠なものであり、第十軍団が、真打ちに選ばれた理由であった。

「ふふふ……フォレスタルの弱兵どもめ。わが第十軍団の龍騎兵と騎兵が貴様らを粉碎してくれる」

テントの中でジークムントの笑い声がこだましていた。

第一章 オセロー平原の戦い 第十話

ジークムント・フォン・ネルトリンゲンは今年38歳になる軍団長で、短く刈った黒髪と、隆々とした筋肉が特徴だった。彼はワイバニアの下級貴族に生まれ、幼い頃より上級貴族への反発心を持ちながら育って来た。

幼少期から喧嘩に明け暮れており、その腕っ節の強さは軍に入ってから大いに役に立った。彼は瞬間間に兵卒の中でもエリートである龍騎兵に抜擢された。龍騎兵となった彼は、水を得た魚のように空と陸を縦横無尽に暴れ回り、龍騎兵にとって相性の悪い巨兵すら何度も倒して来た。

故に彼は、「巨人殺し」と呼ばれ敵味方を問わずに恐れられる存在になった。武勲を重ねた彼は星王曆二一七七年八月三日、ついに第十軍団長に昇進した。直情径行の性格で用兵家としての才能は決して恵まれているとは言えなかったが、戦場では常に陣頭に立ち、味方を引き連れ突撃するジークムントは兵士達の信望も厚く、一万の兵を束ねる軍団長としての資格は十分に備えていた。

「相手は、ジークムント・フォン・ネルトリンゲン……まともにぶつかつたら負けるな」

ハムレット皆で各隊長を集めた作戦会議におけるヒーリーの第一声がこれだった。

居並ぶ隊長達は戦う前から「負け」を口走る若き司令官に口を開けていた。

「殿下。そのようなことはおっしゃいますな。兵達の士気に関わります」

副将であるウォーリー・モルガンが言った。

「だが、事実だ。彼はワイバニア十二軍団の中でも指折りの猛将だ。近衛旅団が出ばったとしてもまず勝ち目はない。だが、猛将であるが故に、我々にも勝機がある」

ヒーリーは出撃前夜に隊長達と話し合った作戦案をさらに修正して各隊長に伝えた。

「これなら、いかに猛将としてもやすやすと我々を破れはしませんな」

タイタス警備隊、弓兵大隊長のフィリップ・ホーソンは言った。

「確かに。殿下がなぜ我々を集められたのか、分かりました」

アンドロニカス警備隊弓兵大隊長のアーサー・ワットが同意した。

「各隊長指揮下の兵士達にもこれを通達させてくれ。この作戦は、各隊の連携によって勝敗が決まる。そのことを忘れるな」

作戦の細部を確認しあったヒーリー軍の幹部達は、それぞれ指揮する隊に向かった。

ワイバニア軍第十軍団とヒーリー軍の死闘の時は刻一刻と近づいていった。

第一章 オセロー平原の戦い 第十一話

一方、オセロー平原西方のロミオ峡谷では、フランシス・ピット率いるフォレスタル第一軍団と、ヨハネス・フォン・ハイデルベルグ率いるワイバニア第三軍団が対峙していた。

急峻な斜面と森林に守られたこの峡谷は翼竜から身を守る天然の防壁であり、ピットはこの地の利を生かして峡谷の両側に弓兵隊を主力とした歩兵部隊、六〇〇〇名を配置してワイバニア軍を待ち構える態勢をとった。これがうまく行けば、ワイバニア軍は左右から挟撃される形になり、大きな損害を被るはずであった。

「だが、敵はあのワイバニア第三軍団。そうそううまくいかせてくれんだろうて」

森林に身を隠したピットは低い声でひとりごちた。

フランシス・ピットはアルマダで最長の軍歴を誇る將軍の一人で、七〇を超える老齢に似合わぬ鍛え抜かれた筋肉と、白いあごひげが特徴の武人だった。

若き頃より、武術の鍛錬に明け暮れた彼は槍、剣、拳闘の達人としても知られ、フォレスタルの王族をはじめ、現在の軍幹部のほとんどが彼の手ほどきを受けていた。

また、長年の経験から裏打ちされた彼の用兵は、老練にして巧緻極まるものであり、ワイバニアの上位軍団長にもひけをとるものではなかった。

対するワイバニア軍第三軍団長、ヨハネス・フォン・ハイデルベルグはピットほど恵まれた体躯に恵まれた訳ではなかった。これは彼が常に最前線の指揮官として戦場を駆け回っているわけではないという証であった。

この年、三四歳になる彼は、ワイバニアの上級貴族に生まれ、一族の敷いたレールの上を歩くかのように軍に入った。それは彼にしてみれば、ごく当たり前のことでそれ以外の道を思いつくことが出来なかったのである。

配属後しばらくの間、軍官僚として本国の大臣府につとめていたが、研修としてメルキド前線の第七軍団に出向することになった。このことが彼の軍人としての人生を一変させることになる。

彼の属していた第七軍団とメルキド第二軍団との間に戦闘が始まったのである。

龍騎兵と相性の悪い巨兵軍団を相手に第七軍団はよく戦ったが、最前線で指揮していた当時の軍団長が戦死すると、第七軍団は統制を失い総崩れになった。

軍団長を初めとして、主立った幕僚が全て戦死した司令部の中で数少ない生き残りだったヨハネスは傷ついた身体を引きずりながら指揮を執った。

彼は肋骨を初めとして身体の数カ所を骨折しており、発熱にも悩まされながら、それでも冷静に、そして迅速に事態に対処した。

ヨハネスは比較的損害の少なかった騎兵隊に殿軍を任せ、遊撃戦を展開させた。巨兵軍団と言っても、そのすべてが戦獣や石兵ではない。陸戦の主力は歩兵であり、それは三国ともに変わらなかった。

騎兵隊はその機動力を活かしてメルキドの歩兵部隊に出血を強いた。騎兵隊が時間を稼いでいるうちにヨハネスは第七軍団の戦力の再編を図ったのである。

彼の対処が素早かったため、幸いにして軍団兵力の損害は少なかったものの、指揮系統の損害は目を覆うべきものがあつた。

そこでヨハネスは巨兵による攻撃で数を減らされていた龍騎兵を命令として司令部に配置した。このことで、各部隊に速やかな命令の伝達が可能になった。

戦力の立て直しに成功した彼は、騎兵隊を退かせると、直ちに反撃に転じた。

騎兵隊によつて出来た隙をヨハネスは見逃さなかつた。彼は歩兵三個大隊、三〇〇〇名に突撃させてメルキド第二軍団を二手に分断した。

分断に成功すると、すかさず分断された小集団を包囲して、攻撃を開始した。その攻撃の凄まじさは敵はおろか、味方すら恐れおののくほどでありこの会戦に参加した兵士達は「まるで、雷のようだ」と話したと言つ。

分断されたもう一方の、メルキド軍団が到着した頃には勝敗はもはや決まっていた。

こうして、メルキド軍とワイバニア軍の戦いは、ワイバニア軍の勝利で幕を閉じた。

ヨハネスはこの時の戦功で第七軍団長に就任することになるが、彼

の実家であるハイデルベルグ公爵家はこのことに猛反発し、ヨハネスに辞退を申し出るように迫ったが、彼はそれを頑として聞き入れなかった。

苛烈な戦闘を戦い抜いた部下達を見捨てることが出来なかったのである。彼自身、それは戦場に出ることがなければ気づかなかったことだった。

戦傷から回復した彼は、一人一人傷ついた部下達と戦死した部下の遺族達を見舞った。一部の遺族からは叱責されることもあったが、その姿勢は軍内外で賞賛され、新生第七軍団長となった彼は十二軍団長の中でも最も人望の厚い軍団長になり、第三軍団長になった現在でも、それは変わることはなかった。

順調に戦果をあげていった彼は、巧みな戦力配置と絶妙なタイミングで仕掛ける猛攻撃から”雷電のヨハネス”と異名をとるようになっていた。

ヨハネスは長身の体躯と黒ぶちのメガネが特徴で、一見すると学者のような風貌をしており、白衣をまえば、研究者と見分けがつかなかったという逸話も残っている。

性格は明朗闊達な好青年であり、穏やかでひょうひょうとした彼の雰囲気は、殺伐とした十二軍団長の中にあって特に希有なものだった。そのため、何かと衝突の多い軍団長の間では緩衝剤ともとしての役割をもち、十二軍団の柱石の一人とも言うべき存在だった。

第一章 オセロー平原の戦い 第十二話

ロミオ峡谷に到着したヨハネス率いる第三軍団は峡谷入り口にて一時進軍を停止した。

「どうして、進軍しないのですか？ 敵は目の前なのですよ？」

副官のヘルマン・プファイルが言った。ヘルマンは今年二〇歳になったばかりの若い将校で、大規模な戦闘はこれが初めてだった。ヨハネスは血気にはやったヘルマンを制した。

「ヘルマン。どうやら、相手はフォレストル第一軍団だ。軍団長のピットは老練な名将だ。木々の茂る斜面に布陣したことで龍騎兵が、狭い峡谷に我々をおびき寄せる騎兵の機動力が封じられることになる。そうなれば、我々は実質足をもがれたに等しい状態になってしまう。慎重にならざるを得ないさ」

ヘルマンはヨハネスの話聞き、我に返った。

「申し訳ありません。初の実戦で、熱くなり過ぎました」

「いや、いいんだ。我々の役目は、敵の軍団を釘付けにしておくことだが、兵力を減らしておくのは後のことを考えると、悪くはない考えだからね」

ヨハネスはかけている黒ぶちメガネを少し上げた。敵の出方を読み、考える時の癖だった。

「重装歩兵隊を前衛と両翼に展開、弓兵による狙撃に警戒しつつ、

前進」

ヨハネスは手持ちの重装歩兵大隊を3隊に分割して、味方の防御を厚くさせ、前進を開始した。

その様子を見たピットはすかさず次の指令を下した。

「ほほう。やっと動いたか。さすがは第三軍団。一筋縄ではいかん。二個機動歩兵大隊を展開し、鶴翼陣形に対応せよ」

機動歩兵はフォレスタル独自の兵科で兜と胸甲のみで防御し、軽装ゆえの素早さで敵を翻弄する部隊であった。扱う武器も多彩で、ボウガンや剣や槍、ナイフなど取り回し容易な武器を戦況に応じて操った。ピットはワイバニア軍の前進に合わせて、攻撃態勢をとった。

森に身を隠したとしても、一〇〇〇人単位の兵力の移動は気づかれる。双眼鏡で敵の陣形変換を見たヨハネスは、直ちに次の指令を下した。

「前進やめ！ 弓兵隊は火矢の用意をさせよ。森を焼き払う」

森からワイバニア軍の動きを見たピットはさらに陣形変換を命じた。

「各歩兵大隊は分隊単位に分かれ分散。各分隊で消火班を組織し、消火に当たらせよ。それから、騎兵大隊に伝達。峡谷を迂回し、ワイバニア軍の退路を絶て」

ピットと時を同じくして、ヨハネスは命令を配下の部隊に下していた。

「そろそろだろう。後衛の歩兵大隊と騎兵大隊に伝達。敵は我々の背後をに展開し、退路を絶とうとするはずだ」

ワイバニアの後方部隊が後ろに下がるのをみたピットはさらに陣形を変換させた。

「まずい。騎兵大隊の攻撃を中止。もどらせろ！」

実際に二つの軍は戦端を開いている訳ではない。だが、壮絶な戦いがこの二つの軍団に展開されていた。

「こんなに張りつめた戦いは初めてだ……」

ヘルマンの隣で、第三軍団参謀長のアルバート・フォン・ヘッセがひとりごちた。

ヘルマンは、アルバートに尋ねた。

「そうなのですか？ 私には絶えず陣形が変化しているだけにしか見えないのですが……」

「おそらく、並の軍団なら、こうはいくまい。最高レベルの将帥だけがなしえる戦いだ。貴公も刮目しておけ。こんな戦、もう見れんかもしれんぞ」

「は……」

ヘルマンは頷いた。ヘルマンの目の前では、各部隊に陣形の変更を命じ続けるヨハネスの姿があった。

この数時間後、両軍の戦闘はこう着状態に陥った。一人の死者、一人のけが人も出さないままで……。

第一章 オセロー平原の戦い 第十三話

同日、同時刻、オセロー平原東方はずれにあるテンペスト湖の両岸で、ハーヴェイ・ウォールバンガー率いるフォレストル第二軍団と、アンジエラ・フォン・アルレスハイム率いるワイバニア第七軍団が対峙していた。

テンペスト湖は周囲、およそ五十キロの湖で、フォレストル王国で第三の面積を持つ湖であった。水質もよく、魚類に恵まれたこの湖が戦場になることはなかったが、ハーヴェイはあえてこの湖を戦場に選んだ。南北にやや長い楕円形をしたテンペスト湖は兵力の展開に有利で、いわゆる距離の防壁をもって、ハーヴェイは龍騎兵を封じようと考えたのである。

龍騎兵は単体としては無敵に近いとはいえ、互いの部隊との連携と言う点では未だ課題を残していた。ワイバニアは龍騎兵だけを先行させたとしても、一個軍団が相手では龍騎兵といえども分が悪かった。ハーヴェイは敵軍がやすやすと龍騎兵を動かすまいと読んだのである。

ハーヴェイ・ウォールバンガーは四五歳になるベテランの軍人だった。もともとはメルキドの出身だったが、彼が一〇歳の頃に家族がフォレストル王国に亡命し、亡命した後すぐに両親と死別し、路頭に迷っていたところを当時、フォレストル第一軍団長に任命されたばかりのピットに拾われ、養子に迎えられた。名前がメルキドの様式のままであるのは養父であるピットの考えからだった。

「俺はお前を成人するまで育てるだけだ。お前を生み、危険を省みずここまで連れてきた勇敢な両親がくれた名前をお前は捨ててはい

けない。忘れてはいけない」

ピットは当時一〇歳のハーヴェイに言った。

軍に入ったハーヴェイはピットの従卒として彼を良く助け、三〇年前のワイバニア大侵攻においても、大小の武勲を上げた。こうしてピットの教えのもと、軍歴を重ねていったハーヴェイは、三五歳で第二軍団長に就任した。

ハーヴェイの用兵は極めて冷静無比だった。冷静に戦局を判断し相手の急所を的確に見抜き攻撃を与える様から、「アイスマン」ウォールバンガーの異名を取っていた。

銀色の髪をオールバックにした髪型で、その冷静な性格から極めて話しかけづらい人物ではあったが、用兵における柔軟性は養父でもあり、師であるピットすら凌いでいた。彼との連携作戦をとった軍団は、

「いて欲しい場所に部隊がいる」

「第二軍団がいる限り、隙はない」

とその連携の巧みさに信頼を置いていた。

対するワイバニア第七軍団長はアンジェラ・フォン・アルレスハイムは女性でありながら、一軍の将であった。そもそも、アルマダにおいて女性が戦場に出るのは珍しくない。重装歩兵、龍騎兵などに腕力が必要とされる兵科は女性は存在しないが、その他の部隊には少なからず女性が存在した。

また、女性の軍団長もアルマダでは珍しくはなく、ワイバニア十二軍団のうち、四人の軍団長は女性であったし、フォレスタル第四軍団長マーガレット・イル・フォレスタルもまた女性であった。

アンジエラ・フォン・アルレスハイムは二七歳、肩までのびた金髪が特徴的な美女であった。ヨハネスと同じで上級貴族出身の彼女は本来であれば軍歴につくことはなく、帝室あるいは他の上級貴族貴族のもとに嫁入りをして一生を終えるはずであった。

だが、彼女はそれをよしとせず、家族の反対を押し切り軍に入った。彼女のずば抜けた戦術眼と巧みな指揮によって武功を上げた彼女は、若干二六歳で第七軍団長に就任したが、その代償は大きかった。過去の戦闘で、彼女は顔を斬りつけられ、消えることのない刀傷を負ってしまったのである。以来、人前に出る時は常に、目と口だけが開いた仮面で顔を隠していた。

凜として堂々と愛騎を借り、戦場を疾駆して戦う様は、神話に現れる戦女神のようであったと彼女の部下は後に語っている。

第一章 オセロー平原の戦い 第十四話

また、彼女率いる第七軍団は攻守の均衡がとれた軍団で、それだけ上層部にとって使い勝手がよく、各地の戦場をめぐりしきく駆け回っていた。

アンジエラはテンペスト湖北方の湖岸に陣をしき、相手の出方をうかがった。アンジエラ前方の対岸にはハーヴェイの第二軍団の影が見えていた。

約二時間の間、両軍はにらみ合いを続けていた。アンジエラはテンペスト湖の湖岸に立ち、腕を組んで敵手となる軍団を見据えていた。湖の風に吹かれて、仮面の女将軍の長い金髪が、美しくたなびいていた。

「この戦い、相手の方に地の利はある。警戒を怠るな」

アンジエラは第二軍団の攻撃を警戒し、臨戦態勢を崩さなかった。

「こちらの方に地の利はある。各隊は手はず通り、冷静に対処せよ」
アンジエラが防御態勢をとったのに対し、ハーヴェイはやや柔軟に雁行陣を敷いた。これは隙あらばいつでも攻撃に転じるように考えたためである。両軍がにらみ合いを始めて二時間後、事態は急変した。テンペスト湖から突如水柱が上がったのである。

テンペスト湖周辺は温泉が多く、湯治場として知られていた。温泉の水脈は湖底を通っており、週に一度から二度は間欠泉を至る所で噴出させていた。

ハーヴェイは過去の記録を調べ上げ、間欠泉が吹き出すタイミングを計算に入れて、テンペスト湖に布陣していた。突如吹き出した間欠泉に、ワイバニア第七軍団は動揺し色めき立った。

「騒ぐな。防御を固め、陣形を崩すな。敵が仕掛けてくるかもしれない。偵察龍騎兵を出せ」

アンジエラは後ろの部下に命令すると、前を向いて真っすぐ湖を見据えた。彼女の眼前のテンペスト湖では数十本の間欠泉が吹き上がっていた。

「まだだ。まだ動くな」

上空に龍騎兵の姿を見たハーヴェイは、はやる兵達を控えさせた。事態は刻一刻と変わり、やがて湖の周辺が白みだした。高温の間欠泉が湖水に冷やされ、霧を作り出したのである。数十本の間欠泉から生み出された霧は瞬く間に湖を覆い尽くした。

第一章 オセロー平原の戦い 第十五話

「今だ！ 機動歩兵大隊および騎兵大隊進軍開始。目標、敵右翼。いそげ！」

霧の中、ハーヴェイは直ちに兵を動かした。

機動歩兵の移動にはもっぱら馬車が使われる。そのため、騎兵には及ばないものの、機動歩兵はそれに準じる移動速度を持ち、迅速な兵力展開に適していた。

「この霧に乗じて、仕掛けてくるぞ！ 各隊、警戒を徹底せよ。偵察龍騎兵の数を増やせ！」

アンジエラは直ちに警戒を嚴重にしたが、次第に霧は濃くなり、前方がほとんど何も見えなくなった。一時間後、完全な濃霧となったテンペスト湖畔でワイバニアとフォレスタルの戦端が開かれた。

先行したフォレスタル第二軍団機動歩兵一個大隊一〇〇〇名が音も立てずにワイバニア軍右翼に攻撃を仕掛けた。彼らは離れた場所で馬車を降り、大型ナイフと小型ボウガンで至近距離から敵部隊を急襲した。攻撃を受けたワイバニア兵は断末魔の声を上げることなく一人、また一人と殺されていった。

ワイバニア兵が敵の奇襲に気づき始めた頃、フォレスタル軍第二陣が突撃を開始した。機動歩兵二個大隊、二〇〇〇名からなるこの第二陣は密集隊形をとって、第一陣が攻撃したワイバニア軍右翼に側面攻撃を仕掛けた。

「大軍だ！ フォレスタルの大軍だ！」

霧の中でワイバニア軍兵士は叫んだ。実際のところ、兵力で言えばフォレスタル軍よりもワイバニア軍の方が遙かに優勢だった。しかし、ワイバニア兵にこのように誤認させたのは第二陣が大声を上げながら突撃したためであった。これにより、フォレスタル軍は実兵力よりも多くの兵がいることを相手に思わせたのである。フォレスタル軍の奇襲により、ワイバニア軍右翼の戦線はたちまちのうちに崩壊した。

このままフォレスタル軍の勝利かに思われたが、ワイバニア第七軍団長アンジェラの動きは素早かった。

「右翼を後方に下げよ。左翼部隊を鶴翼陣形にして対応する。龍騎兵大隊は低空飛行し、戦場の様子と戦況を知らせよ」

彼女は司令部警備のための龍騎兵と騎兵を伝令として全て出し、指揮系統の回復させると同時に、傷ついた右翼部隊を後退させ、戦力の再編を図った。また、彼女の指揮下の龍騎兵大隊はあえて戦わずに戦場を飛び回り、戦況の把握につとめた。こうしてアンジェラはフォレスタル軍が実はそれほどの大兵力ではないことをつかんだ。

「どうやら、ここまでだな」

龍騎兵が飛来したのを見たハーヴェイは第二陣と第三陣として待機していた騎兵大隊に退却を命じた。

「遊兵を作ってしまったな。私もまだまだ完璧とは言いがたい」

ハーヴェイはぽつりと漏らした。

一方、龍騎兵からフォレストル軍の動向をつかんだアンジエラは反撃に転じた。

「このままでは我々がこけにされただけだ。第七軍団の意地を見せてやれ」

仮面の女将軍は全軍に号令を発した。龍騎兵の威力偵察によって、敵軍の配置を把握したアンジエラは敵軍の退路を塞ぐべく移動速度の速い龍騎兵と騎兵を先行させた。

戦端が開かれて三時間、テンペスト湖の霧は次第に晴れ、次第に両軍の全貌が明らかになった。

「龍騎兵、来ます！」

第一章 オセロー平原の戦い 第十六話

フォレストアル軍の兵士が声を荒げた。その報をうけたハーヴェイは直ちに対空防御を命じた。

「重装歩兵、長槍構え！」

ハーヴェイはようやく追いついた重装歩兵に長槍を高く掲げさせた。この時代において、龍騎兵に対して最も効果的であった一般的なであった対空防御戦術は重装歩兵による長槍防御であった。弓矢の命中率は決して高くはなく、一騎一騎撃ち落とすのは不可能と考えられていたためである。そのため、三〇年前のフォレストアルとワイバニアの戦争において生み出されたのが長槍防御だった。あえて龍騎兵を味方陣深くまで攻め込ませ、そのスピードを逆用して間合いの長い長槍を敵龍騎兵に突き立てるこの攻撃は見事に効を奏し、一時期、ワイバニア皇帝自らが龍騎兵による単独出撃を中止させたほどだった。

「ひるむな。軍団長閣下が見ておられるのだ。急降下攻撃中止。落石用意！」

ワイバニア第七軍団龍騎兵大隊長、ヨーゼフ・フォン・シユタインベルガーは言った。ヨーゼフの指示からほどなくしてひと際大きな翼竜がその大きな脚に一つずつ大きな岩を運んでやって来た。大型翼竜は護衛の龍騎兵をしたがえて、主力の龍騎兵部隊を追い越した。

「あれは……まずいな。総員落石に注意せよ。第三機動歩兵大隊と騎兵隊は左翼の騎兵に対応せよ」

ハーヴェイは軍団全員に上空への注意を促した。

フォレストルがワイバニアに対する防御戦術を生み出したのと同じように、ワイバニアもまた、龍騎兵のより有効な戦術を生み出していた。それが落石戦術だった。

上空から大岩を落とし、一種の質量兵器として機能させ、それによって、崩れた陣形を他の部隊が攻撃するというものだった。シンプルで原始的な攻撃であったが、その分完成された攻撃であると言えた。落石の威力は戦況を左右するほど大きくはない。だが、その大岩を回避するために隊列を大きく崩さなければならぬため、陣形を大きく乱すこの戦術は三〇年近くの間、軍団指揮官を悩ませていた。

大型翼竜はしばらくの間、戦場の上空を旋回飛行していたが、霧が完全に晴れたことを見定めると、陣形の急所になるべき部分に岩を落下させた。

「全軍、回避！」

ハーヴェイは全軍に回避の指示を出したが、陣形の急所をついた落石攻撃によって、第二軍団の陣形は隙だらけになってしまった。

「今だ！ 軍団両翼は前進。騎兵大隊は敵左翼を寸断せよ」

アンジエラはマントを翻して、命令を下した。アンジエラ率いる第七軍団はフォレストル第二軍団を包囲すべく前進を開始した。龍騎兵による落石はなおも続いており、第二軍団は攻撃も防御もままならず、戦線が崩壊しつつあった。

「全軍後退！」

ハーヴェイは兵が動くこともままならないと承知していたが、それでも被害を宰相に食い止めるために後退を命令することしか出来なかった。

「ははは！ この戦、俺たちの勝ちだ！ 騎兵隊、総員抜剣！ フォレストアルどもを蹴散らせ！」

第七軍団騎兵大隊長、ブルーノ・フォン・リリエンタールが叫んだ。ブルーノ率いる騎兵大隊は孤立しかけていたフォレストアル軍の左翼、フォレストアル第三機動歩兵大隊と騎兵大隊に襲いかかった。通常ならばこの騎兵隊の猛攻を前にフォレストアル軍左翼は壊滅していただろう。だが、今回に限って、一気に潰乱の憂き目にあわなかったのは第二軍団副軍団長ブラッド・バーノンの指揮によるものが大きかった。

彼は機動歩兵大隊を正面に出し、騎兵の猛攻を防いだ。歩兵は一般に龍騎兵や騎兵による突進戦術には弱かったが、バーノンは歩兵の武器をボウガンに変えることで見事に対応した。そして、正面の歩兵隊をワイバニア騎兵隊が攻めあぐねているうちにフォレストアル騎兵が両側から側面攻撃を仕掛けた。奇襲攻撃を仕掛けたはずのワイバニア騎兵が逆撃を被っただけでなく、さらに包囲されつつあることを知ったアンジェラは直ちに予備兵力である一個歩兵大隊を投入させ、ワイバニア騎兵の退却を助けた。フォレストアル軍左翼はこの騎兵隊と歩兵大隊に攻勢に出られるほど、士気、兵力ともに十分であつたが、バーノンは追撃に出ることを断念した。本隊の戦線が崩壊の一途をたどっていたためである。

第一章 オセロー平原の戦い 第十七話

間断なく落とされる岩を前に、フォレストル軍の隊列は至る所で寸断され、もはや陣形として機能出来る状態ではなかった。そこに先ほどの復讐に燃えるワイバニア兵達が襲いかかった。ハーヴェイは敵の落石攻撃に耐えながら、損害を最小に抑えることにつとめた。彼は落石の狙いが予想したほど高精度ではないと悟ると、直ちに兵を分隊単位で散開させた。規則正しい隊列を整えたワイバニア兵にとって、散開して後退するフォレストル第二軍団はさながら雲のようであつただろう。フォレストル軍は文字通り蜘蛛の子をちらすように後退した。アンジェラはその後退の狡猾さにいらだちを覚えたが、上空に待機中の龍騎兵隊に追撃戦を命じた。

ワイバニアの代名詞、空の王者とも言える龍騎兵はたちまちフォレストル軍に追いつくと急降下による突進を繰り返した。隊列の整わない集団には龍騎兵は荷が勝ちすぎる相手であり、一人また一人と翼竜の牙に身を引き裂かれて倒れていった。ハーヴェイは後退する中で敗北とその死を覚悟したが、天を覆う翡翠色の旗印を見たとき、ハーヴェイの目が再び輝きを取り戻した。

アレックス・スチュアート率いる国王直属龍騎兵隊が駆けつけたのだ。ワイバニア龍騎兵が精強であるとはいえ、絶好とも言えるタイミングでの龍騎兵の来援はワイバニア軍を驚かせるに十分であった。一瞬の虚をついたフォレストル龍騎兵がワイバニア龍騎兵に襲いかかった。

「まさか、殿下のおっしゃる通りになるとはな」

一瞬のうちにワイバニア龍騎兵を一人倒したアレックスが言った。

戦いに先立って、アレックス率いる龍騎兵隊にはヒーリーからいくつか命令が出されていた。

「スチュアート隊長達はまず戦場を大きく迂回してもらおう。第二軍団が布陣しているテンペスト湖は地の利がある分こちらには有利だが、戦いになった場合は必ず野戦になる。そうなつては龍騎兵を持たない第二軍団は不利だ。そこで龍騎兵大隊はまず、テンペスト湖の上空に一時とどまり、敵龍騎兵を牽制して欲しい。そして必要であれば第二軍団を援護するんだ」

戦況は半ばヒーリーの予測通りになっていた。ただ、唯一の誤算は第二軍団が思わぬ苦境に立たされていたということだった。アレックスはその原因を発見するとすぐに部下に命令した。

「全騎。あのデカブツを片付けるぞ。格闘戦を挑むな。一撃離脱戦法で仕留めるんだ」

アレックス率いる龍騎兵大隊一〇〇〇名は他には目もくれず、落石攻撃を行っている大型翼竜に襲いかかった。

「いやあああつ！」

アレックスは裂帛の気合いをこめ、翼竜の急所めがけて槍を突き立てた。大型翼竜は数も少なく、動きも鈍重であったため、護衛の龍騎兵共々、フォレスタル龍騎兵にことごとく落とされていった。アレックスらは大型翼竜隊をさしたる損害もないまま壊滅させると、フォレスタル第二軍団前方に展開した。

第一章 オセロー平原の戦い 第十八話

迂闊にフォレスタル軍に手が出せなくなったアンジェラは、残存の龍騎兵隊を後退させた。

「くそ……私としたことがここまであしらわれるとは……」

仮面の下でアンジェラはほぞを噛んだ。序盤における劣勢を覆す勝利を逃したばかりか、貴重な大型翼竜を全滅させてしまったのだ。自らのミスとは言え、アンジェラにとっては屈辱に近い戦いだった。霧が完全に晴れ、夕闇が支配する刻限に近づいた時、アンジェラは戦力の再編のため一時的に全軍を後退させた。

ワイバニア第七軍団が後退を始めるのを見たハーヴェイもまた、自軍の戦力の再編のため、指定した場所へ集合させる命令を下していた。フォレスタル第二軍団とアレックス率いる国王直属龍騎兵隊第一龍騎兵大隊はテンペスト湖岸北の約二キロの地点にある高台に合流した。

「救援感謝する。スチュアート卿」

龍騎兵隊に合流したハーヴェイはスチュアートに礼を言った。

「危ないところでしたね。ウォールバンガー卿」

アレックスはそう言うと、第二軍団の野営地を見渡した。落石による犠牲者こそ少なかったが、ワイバニア軍によって与えられた損害は大きく、戦える戦力は8割がやっつたところだった。

「完敗だ。龍騎兵に手も足も出なかった」

ハーヴェイは傷ついた部下を見て無念の表情を浮かべた。

「しかし、龍騎兵隊が来てくだされば、百人力だ。ワイバニアに対し優位に立つことが出来る」

ハーヴェイは言った。しかしアレックスはハーヴェイに対して残酷なことを言わねばならなかった。

「申し訳ありません。ウォールバンガー卿。我々はすぐにオセロー平原中央部に向けてたたねばならないのです」

「第十軍団迎撃のため、というわけですね」

ハーヴェイはアレックスに尋ねた。

「はい。ここに来援したのも、ヒーリー殿下の命によるものです」

「ヒーリー殿下は我が軍団が、窮地に陥ることを見抜いておられたというのか」

「はい。この日、この時間にウォールバンガー卿が攻勢をかけることも予想しておられたようです。そのように、殿下は細かく指示を出されました。まさか私もここまで殿下の予想通りにことがなっているとは思いませんでした」

ヒーリーの予想が的中していたことに驚くアレックスを見て、ハーヴェイは笑った。端から見ればにやりとした程度であったが、それ

はハーヴェイにしては爆笑と言うべき部類の笑いだった。

「そうか、スチュアート卿は殿下と共に戦ったことがなかったな。普段の軍務に関しては貴殿の見た通りだが、いざ戦いの時はなかなかの力をお持ちのお方だ。まだ、お若いので実戦経験こそ少ないがそれさえ除けば、親父をも超える御仁であろう」

「あのピット卿を超える……ですか？」

アレックスは信じられなかった。ピットは「フォレストルにその人あり」と呼ばれる武人であり、軍人ならば誰もが目標にしている程だった。その境地にヒーリーが立ちつつあるとハーヴェイは言うのである。王城に参内するたび、昼寝をしている姿を見かけなかったアレックスはにわかには信じられなかった。

「まだ、納得しかねると言った表情だな。そろそろ、貴殿も行くといい。殿下の命とはいえ、私と世間話している時間はないはずだ。龍騎兵隊がいなくとも、私とてフォレストル四軍団長の端くれ。負けない戦いぐらいはできる。三日は保たせてやろう」

ハーヴェイの目に気が戻った。その様子を見たアレックスはハーヴェイに言った。

「ウォールバンガー卿。三日もいりません。一日だけ持ちこたえてくだされば、勝利は我々のものです」

「心得た。では御武運を。スチュアート卿」

「御武運を。ウォールバンガー卿」

アレックスら龍騎兵隊は午前〇時、真夜中の闇に乗じてハーヴェイの野営地を飛び立った。

第一章 オセロー平原の戦い 第十九話

アレックスら龍騎兵隊は午前零時、真夜中の闇に乗じてハーヴェイの野営地を飛び立った。

「まさか、ここまでやられるとは」

テントの中でアンジェラは頭を抱えた。アンジェラ率いる第七軍団はハーヴェイらフォレストル第二軍団を壊滅寸前にまで追い込んだが、第七軍団の損害もまた大きなものだった。

バーノン率いるフォレストル騎兵と機動歩兵によってワイバニア騎兵は三割の損害を出したばかりでなく、序盤のフォレストル軍の奇襲においても手ひどい損害を受けていたため、実兵力においてはハーヴェイの現状の戦力とほぼ互角であった。加えてフォレストル龍騎兵の来襲によって大型翼竜が全滅してしまい、落石によるアウトレンジ攻撃が不可能になった。これにより、陣形を大きく乱す戦術は使えなくなり、アンジェラらはまだ多くの龍騎兵を擁しているものの、防戦に出られると攻めあぐねることは必定だった。

「大したものだ。敵将も……。そして、その背後にいるものも……」

報告書を机に放り出し、アンジェラはテントの中の簡素なベッドに横になった。仮面を外し、天井を見る。アンジェラにとって女に戻る唯一の時間だった。顔にある刀傷を優しく撫でたアンジェラはその手を天井に伸ばした。

「明日は勝つ……」

伸ばした手を握りしめ明日の勝利を誓ったアンジェラはそのまま目を閉じた。

翌星王暦二一八二年六月十六日、アンジェラ・フォン・アルレスハイム率いるワイバニア第七軍団とハーヴェイ・ウォールバンガー率いるフォレストル第二軍団は再びテンペスト湖北方湖岸で対峙した。

ハーヴェイは重装歩兵を先頭に魚鱗の陣をとったのに対し、アンジェラは鶴翼陣形で布陣した。兵力差がほとんどないにも関わらず、両者がこのような陣形をとったのは前日の濃霧の中の攻防が互いの損害と実兵力を誤認させていたことが大きかった。とくに壊滅寸前にまで追い込まれたフォレストル軍は敵が未だ十分な兵力を残していると考え、一方、壊滅寸前に追い込んだワイバニア軍にしてもフォレストルは戦力が激減していると予測を立ててしまっていた。

陣形だけ見ると、突破力にまさるハーヴェイが有利に見えたが、ハーヴェイは兵を動かさそうとしなかった。

「兵を動かさないのですか？　ここは突撃をかけ、中央突破の後、逆包囲するのが良いかと考えますが……」

フォレストル第二軍団参謀長のモーラ・リードマンがハーヴェイに言った。フォレストル元宰相であるロバート・リードマンの孫娘である。

「確かに陣形だけ見るとその好機だ。私も参謀長の考えと同じようにすぐにでも突撃命令をかけたくなる。だが……あれを見る」

ハーヴェイは前方の空を指差した。

「龍騎兵……」

「そうだ。あれが前線に出て来た場合、我々は防御のために相当数の兵力を割かねばならなくなるだろう。そうなれば、我々は不利だ」

ハーヴェイはモーラに言った。ハーヴェイの読みはアンジエラの作戦を看破していた。しかし、魚鱗の陣を保ちながら前進しないフォレストアル軍の作戦もまた、アンジエラに看破されていた。

「こちらの出方を読んだか。……なかなかどうして、こしやくなものよ。こちらもそのまま動くな。龍騎兵はそのまま上空待機だ」

対峙してから時間をたたえずして、両軍はこう着状態に陥った。

第一章 オセロー平原の戦い 第二十話

星王暦二一八二年六月一六日、フォレストアル軍主力とワイバニア第三、第七軍団が激戦を繰り広げている中、ヒーリー・エル・フォレストアル率いる四〇〇〇の軍勢はハムレット砦を出撃し、オセロー平原中央部に布陣した。

偵察龍騎兵からの連絡を受けたジークムント・フォン・ネルトリンゲンは直ちに配下の部隊に出撃を命じた。両軍が互いにその姿を確認したのは六月一六日正午のことだった。

「さすがは第十軍団、進軍速度は折り紙付きだな」

双眼鏡から敵陣の動きを見たヒーリーは楽しそうに漏らした。ヒーリーは上空の龍騎兵や第十軍団の動き、兵力配置を確認すると命令を下した。

「よし、全部隊、攻城兵大隊を中心に方陣をとれ」

ヒーリー軍四〇〇〇は龍騎兵による攻撃に対応するため、死角なしの方陣を作った。それを見たジークムントは笑った。

「何だ？ 何だ？ あの小さな方陣は。あの程度の小勢、龍騎兵だけで十分だ。龍騎兵隊、敵を蹴散らして司令官の首を俺のところに持って来い」

ジークムントが龍騎兵隊長に命じたのはそれだけだった。ジークムントはごく単純な命令しか発しない。それだけに第十軍団の作戦行動には各部隊の隊長による采配が作戦の成否に大きく影響した。

「第一波、第二、第三中隊で急降下攻撃をかける」

龍騎兵隊長、ブルーノ・フォン・ノイベンシュタインが部下に言った。

ブルーノは、ジークムントが龍騎兵をしていたところからの付き合いだった。作戦指揮能力は高く、ジークムントも高く評価しており、配下の部隊長の中で最も信頼を寄せていた。

ジークムントの陣から翼竜が大量して飛び立ち、本隊から離れるのを見ると、ヒーリーは命令を出した。

「さあ、くるぞ。弓兵隊攻撃用意！ いいか、焦るな。必中距離になったら一斉に撃つんだ」

「全騎、ダイブ！」

第一波攻撃隊長の号令のもと、二〇〇を超える龍騎兵が降下して来た。ヒーリー軍前線の弓兵は張りつめた空気の中、隊長からの号令を待っていた。五〇〇メートル、四〇〇メートル、三〇〇メートル……距離は徐々に縮まっていった。そして翼竜が自分たちを食い破らんと大きな顎を開こうとした刹那、その瞬間は来た。

第一章 オセロー平原の戦い 第二十一話

「撃てえ！」

弓矢の命中率が低いとは言え、必中距離からの弾幕射撃である。攻撃隊はそのことごとくが矢の雨の洗礼を受け、たちまちのうちに壊滅した。

「何が起こったんだ？」

ブルーノは攻撃隊壊滅の報に耳を疑った。しかしこれは厳然たる事実であり、これは第十軍団の全龍騎兵の約二割を失ったことを意味していた。ブルーノはさらに大型翼竜による落石攻撃と龍騎兵による急降下攻撃を命じた。

この攻撃はすでにハーヴェイの第二軍団を壊滅寸前に追い込んだ戦術であり、ワイバニアにとって必勝必殺の戦術であった。

「ついにおいでなすつたな、ワイバニアのお家芸。全員方陣をくずすな。攻城兵大隊、投石機、対空魔術散弾用意」

ヒーリーはメル自慢の新兵器の使用を命じた。

「この攻撃は龍騎兵が投石機の射程内である程度まとまっていな」と意味がない。攻城兵隊長、悪いが指示は俺が出させてもらうぞ」

ヒーリーは攻城兵大隊長のローリーに言った。

「分かりました。殿下にお任せします」

ローリーはそう言うと、直ちに持ち場に戻った。ヒーリーは双眼鏡から、必殺のタイミングをひたすら待った。

「まだ……まだだ……」

龍騎兵が投石機の射程に入るまでの数秒がヒーリーや攻城兵達に永遠とも思えた。

このとき、ワイバニア龍騎兵隊は動揺のただ中であつた。龍騎兵同士の戦い以外で二〇〇名の龍騎兵が壊滅するなど、歴史上ないことだつた。それゆえ、末端の兵士や特に地上から攻撃を受けることのない大型翼竜に乗る龍騎兵は半信半疑だつた。

「第一波攻撃隊が全滅したのって信じられるか？」

大型翼竜に乗つた龍騎兵が後ろの相棒に言った。

「まさか。信じられるかよ。もしかして、あそこにある投石機が新兵器って言うんじゃないだろうな？」

「馬鹿な。投石機なら、俺たちがいる高さまで届いても、余程運がない限りあたらないぜ」

「そつだな」

この数瞬後、彼らには残酷な運命が待ち構えていることになるが、この時の彼らはまだそれを知る由もなかった。一方、投石機の射程に龍騎兵が入つたことを確認したヒーリーは龍騎兵隊が上空攻撃と低空攻撃に分かれる絶妙のタイミングで投石攻撃を指示した。

「撃てえ！」

ヒーリーの司令部に投石攻撃開始を知らせる旗が翻った。旗を見たローリーはすぐに投石攻撃を開始した。投石機によって放たれた砲弾は龍騎兵隊に届く寸前にはじけ、数十個の子砲弾に分裂した。

「うわっ！」

自分たちに届く前に弾が弾けたことに驚いた龍騎兵だったが、その驚きが恐怖に変わったのはそのわずか二秒後だった。子砲弾が一斉に半径一〇メートルの火の玉になり、彼らを巻き込んだのである。龍騎兵隊の大半が火球に巻き込まれ、なす術もなく地表におちていった。

歩兵にとって天敵とも言える龍騎兵隊が地に落ちていく様を見て、ヒーリー軍からどよめきがあがった。

第一章 オセロー平原の戦い 第二十二話

「大した威力だ。さすがはメル最高傑作だ！」

ヒーリーは指を弾いて言った。第二波攻撃隊を火だるまにしたそれは火炎魔術散弾と呼ばれるものだった。

大型の砲弾の中に「火炎」の護符を貼付けた数十個の子砲弾を内蔵した魔術散弾で、投石機による発射数秒後、砲弾が炸裂し、一つの子砲弾につき、半径10mの火球を形成する特殊砲弾だった。

元々は城内の構造物を広範囲に燃やす攻城兵器としてメルが発明したものだだったが、試作品を見たラグは開口一番メルにこう告げたと言う。

「フォレストルの城ならともかく、世界中の城は石造りなんだよ。何を燃やすって言うんだい？」

メルはフォレストル城を基準にこの兵器を発明してしまったため、ラグの言葉に反論出来なかった。しかし、負けず嫌いのメルはこの兵器に少なからず自信を持っていたため、暇を見つけてはこの散弾を作り続けていた。

ラグは苦言を呈したものの、弟子の意欲そのものを奪うことはしなかった。彼はメルの様子を見守り続けていた。

ラグはメルがあきらめずに魔術散弾を作り続けていることを茶飲み話の席でヒーリーに話した。その時はメルの負けず嫌いな性格を示した笑い話としてラグは話していたのだが、ヒーリーの中にはもう、

対龍騎兵の切り札としてこの散弾を使うアイデアが浮かんでいた。

戦場では戦力の大半を失った龍騎兵が色を失っていた。

「何だ？ あれは？」

ワイバニア龍騎兵の一人が後ろを振り返った。

「ひるむな。全騎！ 急降下攻撃だ！」

先頭を飛ぶ攻撃隊長が言った。後続の攻撃隊は散弾のおかげで、ほとんど戦力が維持出来ておらず、大型翼竜隊は全滅していた。降下を始めた生き残りの龍騎兵隊は突撃するしか血路を開く方法はなかった。

「さあ、来たぞ。弓兵隊用意！ 必中距離で弾幕射撃！」

ヒーリーは再び前衛の弓兵大隊に命令を出した。高速で接近した龍騎兵の一部がヒーリー軍の狙いに気づき、二〇騎あまりが上空へ離脱していった。

第一章 オセロー平原の戦い 第二十三話

「気づかれたか？ 撃てえ！」

矢の雨が一齐に残りのワイバニア龍騎兵に降り注いだ。ワイバニア攻撃隊は瞬く間に一〇〇〇近くの矢を受け、地表に叩き付けられ全滅した。

「第二陣、バリスタ、上空弾幕斉射！」

第二陣を指揮していた、弓兵大隊長の一人、アーサー・ワットが配下の部隊に命令した。

バリスタは大型の矢を打ち出す攻城兵器であるが、弓兵隊が用いるそれは異なっていた。馬、あるいは人力で引けるように車輪が取り付けられ、十数本の弓矢をより遠く、より早く連射することが可能な連射弓として使用されていた。

第二陣に配備された三〇台のバリスタから高速で連射された五〇〇本の矢は第一射から逃れた二〇騎に容赦なく襲いかかった。このとき、彼らは急降下攻撃をかけるべく上昇中で、無防備な腹部を弓兵隊にさらしており、その多くが避けることも出来ずに矢を受けていった。矢の直撃を受けた六騎が脱落、墜落し、残り一四騎も満身創痍になりながら、ヒーリー軍本陣直上、ヒーリーの頭上に到達した。ヒーリーの本営にいたフォレストル兵士が叫んだ。

「殿下、敵騎直上！」

「見事だ……。ワイバニア龍騎兵……」

ヒーリーは傷を負いながらも本陣深くに切り込んだ頭上の敵龍騎兵に賞賛の言葉を吐いた。

「全騎、抜剣！ 目標、敵司令官、雑魚に構うな！」

全身に矢を受け満身創痍のワイバニア龍騎兵は剣を抜き、最後の急降下攻撃を開始した。ワイバニア兵が降下を開始した瞬間、ヒーリーは翡翠色のマントをひるがえし、腰のホルスターから青と銀の魔術銃、カストルとポルツクスを抜いた。

「殿下！」

後衛の弓兵隊を指揮していたホーソンがヒーリーめがけて降下する龍騎兵を見て叫んだ。

「構うな！」

ヒーリーはそう言うと、二丁の銃を頭上の敵騎めがけて構え、魔術銃の引き金を引いた。甲高いうなり声と共に十三発の空気を裂く音が聞こえた。

「ぐあ……」

ヒーリーの弾丸は翼竜の体を貫き、絶命させた。コントロールを失った翼竜は次々と地面におちていった。

「最後だ……」

ヒーリーは最後の生き残りをめがけ、引き金を引いた。しかし、弾丸は翼竜に当たることなく空しく空を切った。

「外した？」

ヒーリーの間近に復讐に燃え、その口を開いた龍の姿があった。

「！」

第一章 オセロー平原の戦い 第二十四話

同じ頃、フォレストル王城の王国宰相執務室でティーカップが割れる音がした。

「申し訳ありません！ マクベス様」

ポーラがマクベスにあやまり、破片を拾おうとした。

「ああ、いいよ。ポーラ。わたしがやろう」

マクベスは椅子から立ち上がると、ポーラの足下に行き、破片を拾い始めた。

「申し訳ありません……」

マクベスを前にただ謝ることしか出来ないポーラにマクベスは苦笑した。

「わたしが怪我をした訳ではないし、君に怪我をさせては、あとでヒーリーに叱られてしまう。……ヒーリーのことが心配かい？ ポーラ」

マクベスは穏やかな口調でポーラに尋ねた。ポーラは一瞬体を震わせ、マクベスから目をそらしながら言った。

「はい……」

マクベスはティーソーサーの上に破片を集めながら、ポーラを見ず

に静かに語った。

「ポーラ。わたし達は今、自分のやるべきこと、果たすべきことをしているんだ。ヒーリーはわたし達を、ポーラを守るために戦っているんだ。わたし達が今出来ることは彼を信じることだ。彼が勝つて、そして生きて帰ってくることをね」

カチャカチャとは編がティソーサーに当たる音とマクベスの穏やかで優しい声が執務室の中を支配していた。やがて破片の音がマクベスは執務室の中を支配していた。やがて破片の音がしなくなった。マクベスが破片を拾い終えたのだ。マクベスは破片を集めたティソーサーをポーラに手渡して言った。

「だから君も彼を信じるんだ。ポーラ。彼は必ず帰ってくる。わたし達の前に眠そつな顔を見せながらね。信じて待っているといい」

「はい」

ティソーサーを受け取ったポーラは、マクベスに頷くと部屋を辞した。廊下を歩くポーラは立ち止まると、窓から空を見やった。

「ヒーリー……」

ポーラは空に向かってヒーリーの無事を祈った。

第一章 オセロー平原の戦い 第二十五話

龍のあぎとに食いちぎられると覚悟したヒーリーは思わず目をつむった。だが、いつまでたつても、その瞬間はやってこなかった。ヒーリーが目を開けると、エメラルド色をした翼竜が敵の翼竜のど元に食らいついていた。

「ヴェル！」

ヒーリーは相棒の翼竜の名を叫んだ。ヴェルはヒーリーをちらっと見ると口から火炎を吐くと、龍騎兵もろとも敵の翼竜を火だるまにした。火を吐くことができるのは、この世界の中でもエメラルドワイバーンだけだった。

こうしてワイバーニアの第一波、第二波攻撃隊が全滅し、戦力の四割を失った龍騎兵隊は直ちに撤退を開始した。

この報に接し、ジークムントは激怒した。ワイバーニア龍騎兵が壊滅し、撤退するなど、彼にとっても信じられないことであったからである。

「ブルーノは何をやっている？ たかが四〇〇〇の小勢だぞ！ こうなれば本隊前進！ 敵軍を一気に叩きつぶしてくれ！」

ジークムントは主力部隊に前進を命じた。ジークムント配下の兵力は二個重装歩兵大隊二〇〇〇名、三個歩兵大隊三〇〇〇名、一個弓兵大隊一〇〇〇名、二個騎兵大隊二〇〇〇名、司令部直営大隊一〇〇〇名の約九〇〇〇名だった。ジークムントは両翼に騎兵大隊を配し、鶴翼陣形を保ちながらヒーリー軍を包囲する作戦をとった。

ヒーリーが前方の歩兵大隊と戦闘を行えば、間違いなく勝利はジークムントの手に入っただろう。だが、ヒーリーはそうしなかった。

ヒーリーは騎兵大隊と主力の歩兵大隊との機動力の差を見抜き、攻城兵大隊をのぞく三〇〇〇名でワイバニア軍右翼の騎兵大隊に攻撃をかけたのである。

「そうれ。走れ、走れ！ 全軍鶴翼陣形を展開。ワイバニア騎兵隊を半包囲するんだ」

馬車に飛び乗った弓兵隊三〇〇〇名はヒーリーの命令どおり、素早く兵力展開を行った。騎兵隊一〇〇〇名の前に三〇〇〇名の弓矢の壁ができた。

「全員、ひるむな。フォレストルの弱兵どもを蹂躪してやれ！」

剣を抜いたワイバニア軍右翼隊長のケスラーが叫んだ。

龍騎兵同様、騎兵もまた歩兵に対して絶対的な強さを持っており、相手が弓兵三〇〇〇名と言えど、ひけをとる相手ではなかった。ケスラーは騎兵隊に突撃を命じた。

「撃てえ！」

近衛弓兵大隊長であるモルガンの号令一下、弓の一斉射がはじまった。龍騎兵を一瞬にほふった。その威力は騎兵隊に対しても絶大な威力を示した。

第一章 オセロー平原の戦い 第二十六話

「ひるむな！ 中央突破あるのみだ」

矢の雨にひるむことなく、騎兵隊は持ち前の突進力を活かして、ヒリー軍の鶴翼陣形を突破した。それを見たヒリーは指をはじいた。

「ようし。かかったな。弓兵隊、直ちに騎兵隊の背面に展開。後ろから包囲してやれ」

ヒリー軍は中央突破されたまま、敵騎兵隊とすれ違い、後方に再び鶴翼陣形を形成した。

「ようし、撃てえ！」

近衛旅団弓兵大隊長のウォーリー・モルガンが立派な口ひげをゆらして叫んだ。ワイバニア軍騎兵隊の上から、左右から逃げ場なく矢の嵐が吹き荒れた。ワイバニア軍騎兵はその突進力を逆手に取られ、フォレスタル軍の十字砲火にさらされることになった。ワイバニア軍もこれに手をこまねいて見ていた訳ではなく、ジークムントは陣形転換に時間がかかる歩兵よりも騎兵の機動力と突進力が来援に適していると考え、左翼に展開していたもうひとつの騎兵大隊を救援に向かわせた。

「そうはさせるか！ 馬防柵、一気に引け！」

フォレスタル攻城兵大隊長のローリーが号令を発した。せえのと言う、攻城兵達のかげ声とともに、ワイバニア騎兵の前に巨大な馬防

柵が幾重にもそびえ立った。

「おのれ……こしゃくな！」

ワイバニア第十軍団第二騎兵大隊長、マックス・グーデリアンは愛馬を止めて、地団駄を踏んだ。馬防柵は騎兵の進路を防ぐよう、巧みに配置されており、これを迂回していたのでは、救援に間に合うことは不可能だった。かといって、飛び越えていくことも不可能で、破壊して進むこともなおのこと時間がかかってしまうことが予想された。

「騎兵隊は何をやっている？」

怒気と殺気を全開にして、ジークムントは怒鳴った。機動力が自慢の第十軍団がその機動力を封じられ、攻撃を受けているのだ。ジークムントは今にも血液が沸騰しそうな真っ赤な顔を副官に向けた。

「重装歩兵、ならびに歩兵大隊を敵の背後につかせよ。突進だ！」

「しかし……それでは、陣形転換に時間が……」

「いいからやれ！」

火山が噴火したような大声で翻意を促す副官を一喝した。第十軍団の主力はのっそりと陣形を変え始めた。

「よし、今だ。弓兵隊反転。敵に側面攻撃をかける」

攻城兵大隊と弓兵隊の活躍で、右翼の騎兵大隊を壊滅させたヒーリはすぐに陣形を変え、二個弓兵大隊にワイバニア軍本隊に側面攻

撃をしかけさせた。

ワイバニア軍第十軍団本隊はフォレスタル軍を攻撃すべく、陣形転換の最中であり、離れた場所から矢の雨を降らされたため、ワイバニア軍の方陣側面に配置されていたワイバニア軍第二歩兵大隊は総崩れになった。

「今は陣形が変わるまで待つしかない。なんとしてもこらえろ！」

第二歩兵大隊長、アルバート・フォン・アンドレアスが矢に逃げ惑う部下達を叱咤した。ワイバニア兵達は頭上に降り注ぐ矢の雨を盾で防ぎながら、反撃の時を待った。

そして、ついにその時が来た。ヒーリーが率いた二個弓兵大隊の眼前につわもの共の壁がそびえ立った。

第一章 オセロー平原の戦い 第二十七話

一瞬、ヒーリー軍からの矢の攻撃が止んだ。おそらく、ほんの5秒ほどに過ぎないであろうが、このとき、対峙した両軍の時は止まった。

「全軍、かかれ！」

永遠にも似た刹那の静寂を破ったのはジークムントの号令だった。ジークムントの本営から宝珠を持った翼竜が描かれたワイバニア帝国の紋章旗がひるがえった。全軍総攻撃の合図である。

オセロー平原にずっと大きな音が一つ響き渡った。さながら巨人の足音に似たワイバニア軍七〇〇〇名の足音は初めはゆっくり、しかし、歩が進むに連れて早くなっていった。ワイバニア軍七〇〇〇名がヒーリー軍二〇〇〇名に突進攻撃を開始した。

「全軍後退！ 逃げ！ 退くんだ！」

怒りに満ちたワイバニア軍の突撃を見たヒーリーはすぐに全軍後退を命じた。重装歩兵や歩兵に弓兵が近接戦闘でかなう道理がない。ヒーリーの判断は正しかった。

「ははは！ フォレスタル兵どもめ。我々に恐れをなしたか。だが、もう遅い！ 全軍奴らを全滅せよ！」

力の奔流。ヒーリーは自分たちを猛然と追ってくるワイバニア軍を見てそう思った。ヒーリーは全速力で逃げるように配下の弓兵大隊に指示を出した。その隊列は列の形をなさず、まるで、猛獣に追い

立てられるかのようなていたらしくであった。

「ははは。なんだ。あの無様な逃げ方は。我々と正面切って戦えんとは」

ジークムントはフォレストル軍の逃げ様に笑い、部下をけしかけた。ワイバニア軍の追撃速度はさらに増したが、隊列が乱れ始め、さらに陣形自体も長く伸び始めていた。

ヒーリーはワイバニア軍の陣形の乱れを見て、にやりと笑った。実はこれこそがヒーリーの狙いであった。隊列が整えられたまま攻め込まれたのでは、数と武装に劣るヒーリー軍に不利は免れない。数の劣勢を局地的にでも覆すためには、敵兵達を怒らせ突撃隊形を乱す必要があった。騎兵隊と龍騎兵隊を壊滅させたのも、実はヒーリーの布石の一つに過ぎなかった。

だが、ただ怒らせたのでは決定打にたりず、司令官も馬鹿ではないため、いずれ気づくことは明白だった。そのため、ヒーリーはさらに持ち前の悪知恵を働かせた。それが、隊列を無視しての全速力の逃走だった。ヒーリー率いる部隊を弱兵に見せることで、ジークムントに自分たちが勝っているという認識を植え付けることに成功させたのである。

こうして、ヒーリーの罠にはまったワイバニア軍主力は、次第にその隊列を乱し、陣形が前後に伸び、ほころびを少しずつだが確実に生じさせていた。

「もう一息だ。皆。頑張れ」

背後にワイバニア軍の大軍が徐々に迫るなか、ヒーリーは部下達を

励ました。前方に味方の軍勢を見たとき、ヒーリーも、疲れが見え始めた兵士達も瞳に輝きを取り戻した。

補給と休息を整えた一個弓兵大隊がヒーリー達の眼前に現れたのである。

第一章 オセロー平原の戦い 第二十八話

「全員散開！ のち、弓兵大隊の後方にまわり、順次補給を受けた後は、第一弓兵大隊は右翼、第二弓兵大隊は左翼に展開し、敵先鋒に攻撃を集中するんだ」

ヒーリーは司令部として傍らに残っていた、五〇人の兵士全てを伝令に出し、さらに周囲に命令が行き渡るように徹底させた。

ヒーリー軍は味方の軍勢が敵に見えないように逃げ、味方の目前で左右に分かれ、待機していた第三弓兵大隊の後方に隠れていった。

ワイバニアの最先鋒から見れば、何が起こっているか分からなかっただろう。しかし、左右に分かれたフォレストル軍の間から、ワイバニア軍の迎撃準備を完全に整えた弓兵隊が姿を現したとき、ワイバニア軍の先頭にいた部隊の指揮官はフォレストル軍の敗走が敗走ではなく、意図的な偽装撤退であることに気づいた。

「中隊。止まれえ！ 敵に狙い撃ちにされるぞ！」

ワイバニア軍最先鋒にいた中隊長は全員停止を命令したが止まらなかった。それだけ、力の奔流は凄まじいことを意味していた。ワイバニア軍の兵士でできた人の濁流は速度を落としたワイバニア軍一個中隊一〇〇人を飲み込み、押し出した。すぐ前方には自分たちを死に追いやるものが手ぐすねを引いて待っている。覚悟を決めた中隊長は叫びながら、先頭に飛び出した。

恐れおののいているのは、フォレストル軍第三弓兵大隊も同じだった。目の前には狂気と怒りをない交ぜにして向かってくるワイバニ

ア兵がいる。前線の兵士は乾いた口の中を少しでも潤そうと生唾を飲み込んだ。

「しっかりとしろ。貴様ら。我々は歴史が変わる瞬間を目にするのだ。ヒーリー殿下を信じるのだ」

第三弓兵大隊を率いていたモルガンが胸を張って部下達に言った。モルガンの剛胆さは前線の兵士に安堵感を与えるには十分だった。モルガンはヒーリーがなぜモルガンを指名したのか理解したような気がした。

「いいか！ バリスタの射程に入ったら速射開始だ。もたもたすると、ワイバニア兵に踏みつぶされるぞ！」

モルガンは部下達に檄を飛ばし、剣を持った右手を高く掲げた。ワイバニア兵が弓兵の間合いに到達し始めたのである。

怒号、絶叫が響き渡る中、フォレストル兵士は恐ろしいまでの緊張感でモルガンの合図を待った。ひゅつと剣が空気を切り裂く音を弓兵大隊の誰もが聞いた気がした。その瞬間、周囲の音をかき消すかのようなモルガンの声が戦場に響き渡った。

第一章 オセロー平原の戦い 第二十九話

「撃てえ！」

文字通り、矢継ぎ早に連射されたバリスタの大型矢がワイバニア軍先鋒に殺到した。通常の倍の大きさと射程を持つバリスタの矢は正確にワイバニア兵を射抜き、戦場にワイバニア兵の死体の山を築いていった。

「ひるむな！ 屍を踏み越えてでもフォレストル兵を殺せ！」

先鋒の次席指揮官が叫んだ。先鋒部隊は矢の一斉射撃を受け、軍隊の組織としての機能は麻痺していたが、それでも一人一人の激情は頂点に達しており、雪崩をうってモルガン率いる弓兵大隊に攻め込んできた。

「なんと言う奴らだ。ここが正念場だ。全員、粘れ！」

モルガンは司令部の予備の人員までボウガンを持たせ、猛烈な掃射をワイバニア軍に放ち続けた。ワイバニア兵は仲間の屍を踏み越えてでも突撃を止めようとしなかった。

「狂ってる……あいつら……」

ヒーリーの傍らにいる兵士が言った。

「これが戦争というものだ。どんな人間でも理不尽な死を前にしたら、皆こうして狂ってしまう。もっとも、彼らを狂わせてしまったのは、他ならぬ俺だ。俺は、一生この十字架を背負って生きていか

なければならぬ……」

ヒーリーは自嘲気味に言った。普段の態度との落差に、周囲の兵士達は戸惑った。それに気づいたヒーリーはいつもの調子に戻って、新たな命令を出した。

「いけないな。今はまず勝つことを優先しないと。第三弓兵大隊がピンチだ。両翼の第一、第二弓兵大隊は前進し、敵先鋒の動きを止めろんだ」

ヒーリーは距離を詰められ始めている第三弓兵大隊を助けるべく、両翼に配置した弓兵大隊を前進させ、鶴翼の陣形を敷いた。

「第三弓兵大隊を助けるんだ。アンドロニカス弓兵隊の意地を見せろ！」

第二弓兵大隊長のアーサー・ワットが剣を振り下ろし、一斉射撃を命じた。前方の矢に耐えていたワイバニア軍の右側面から矢の雨が降り注いだ。

「奴らを逃がすな。第二、第三弓兵大隊と共同して敵を仕留めろ！」

ワイバニア兵が前方と右から迫り来る矢から逃げようとした絶妙のタイミングで、ワイバニア軍左側面に位置したフォレストル第一弓兵大隊が射撃を開始した。

第一章 オセロー平原の戦い 第三十話

ワイバニア軍は窮地に陥っていた。先鋒は動くことが出来なくなっており、前と左右からは矢、そして後ろからは復讐心に燃え殺到するワイバニア軍。フォレスタル軍の集中砲火を前に、先鋒部隊はもはや壊滅状態になっていた。

「何をやっているか！ あの程度の小勢に」

三度までも展開が思い通りに行かないことにジークムントの怒りは頂点に達していた。

「どンドン兵を出せ！ 出し惜しみするな。数で圧倒するんだ！」

ジークムントの怒り狂っている様子を副官のクラウスはこの戦闘に参加しているものの中で、誰よりも冷静に見つめていた。この戦いは負けだ。戦線が伸びることも軍団長が怒り狂うことも、全ては敵将の計算通りだったのだ。我が軍が兵力的に優勢のうちに撤退しないと、この本隊までも壊滅する。クラウスはそう考えていた。だが、今怒り狂っているジークムントに意見したところで、何も変わりはない。殺されるか殺される寸前まで叩きのめされるか、理不尽な選択を迫られることは必定だった。

クラウスは軍団長が聞き耳を持つ時をひたすらに待った。

その頃、壊滅状態の友軍を助けるため、ワイバニア軍の増援が追いついた。ヒーリーは増援の姿を見るや、即座に命令を下した。

「第一弓兵大隊は後退！ 敵のパワーを受け流す！」

ヒーリーは左翼に配していた第一弓兵大隊を後退させると雁行陣を形成させた。ワイバニア軍はまるで第一弓兵大隊に引き寄せられるかのように突進力を受け流され、右に長く左に短い奇妙な陣形を作っていた。

「あれは……軍団長！ 直ちに戦線をお下げください！」

ワイバニア第十軍団参謀長のカール・シュタイナーがジークムントに言った。

「なぜ下げる？ 我々が勝って、今フォレスタル兵が逃げている最中ではないか！」

ジークムントが双眼鏡を見ながら、問題の陣形を指差した。

「いいえ、閣下。敵の後退が極めて整然としています。そして、我々の右側の戦線が伸びています。恐らくはこれが敵の狙いだったと思われる。」

「だが、あの陣形でたとえ側面が空きになったとはいえ、どうする？ 敵には我々の側面をつく兵力は残ってはおりん」

「ですが……」

シュタイナーが再びジークムントに翻意を促そうとしたとき、フォレスタル軍から、ひと際大きな龍のいななきが聞こえた。

「なんだ？ いったい……」

「あのいななきはエメラルドワイバーンのものです。エメラルドワイバーンは離れた場所からも翼竜の気配を察知すると言います。…まさか」

シユタイナーは右側の空を見た。翡翠色の旗を翻した、天を覆うほどのフォレストル龍騎兵隊の姿がそこにはあった。

第一章 オセロー平原の戦い 第三十一話

「隊を二手に分ける。第一から第四中隊は俺について来い。龍騎兵を片付ける。第五から第十中隊は敵歩兵を片付ける！」

フォレストアル軍龍騎兵隊長のアレックスは部下達に言った。

「迎撃だ！ 本隊に龍騎兵を近づけさせるな！」

ワイバニア軍龍騎兵大隊長ブルーノ・フォン・ノイベンシュタインは即座に迎撃の命令を下したが、フォレストアル軍の方がさらに動きが早かった。アレックスたちはワイバニア軍よりも高度を取ると、隊伍を組んで急降下し、ワイバニア兵に襲いかかったのである。

「全員、回避いーっ！」

迫り来る翡翠の龍騎兵の群れを見たブルーノは声を限りに叫んだが、間に合わなかった。第十軍団の精鋭ともいえる龍騎兵は、あるものは剣に身を両断され、あるものは龍の顎に食いちぎられ、地に落ちていった。

それでもブルーノが狂躁状態にある部下を束ね戦線離脱できたのは、彼の能力の高さ故だろう。しかし、彼の力をもってしても、フォレストアルの猛攻は止めようもなく、ブルーノが後ろを振り向いたとき、龍騎兵隊はその戦力の三割を失っていた。

「あいつが隊長か！」

アレックスは急降下からの身を翻し、ブルーノに狙いを定めるとま

つすぐ愛騎を敵隊長に向けた。

「奴が隊長か！」

ブルーノは突進して来たアレックスを見つけると剣を抜いた。アレックスもブルーノに合わせて剣を抜き、そのままブルーノめがけて振り下ろした。ブルーノはアレックスの剣を受け、二人は二合、三合斬りあった。

「私はフォレストル近衛騎兵隊長、アレックス・スチュアート。貴公の名は？」

剣を合わせながらアレックスは自ら名乗りを上げた。

「私はワイバニア第十軍団龍騎兵大隊長、ブルーノ・フォン・ノイベンシュタイン。」フォレストルの蒼き閃光”に出会えるとは武人として、光栄の至り。」

「では、いざー！」

アレックスは愛騎の背にマウントされたスピアを手に取った。

「尋常に……」

ブルーノもまた、スピアを手に取り、姿勢低く構えた。

「勝負！」

二人は同時に叫び、突進した。わずか一瞬、そして一撃で勝負はついた。

「見事……」

ブルーノの腹にスピアが突き刺さっていた。ブルーノは腹にスピアを刺したまま、バランスを崩し、地表に向かって落ちていった。

第一章 オセロー平原の戦い 第三十二話

「安らかに眠れ……。ワイバニアの武人よ」

アレックスはそういとうとしばらく動かなかった。いや、動けなかった。ブルーノを倒した代償は大きく、彼は右腕の肩の肉をこっそりえぐられていた。彼の右腕からおびただしい量の鮮血が吹き出し、雨を降らすようにオセロー平原の大地へとおちていった。彼は一番近くにいた龍騎兵に敵将の死と自分自身の状態を知らせ、指揮を副隊長に委ねるように伝えるとヒーリーの陣に向かって飛んでいった。フォレスタル龍騎兵隊本隊とワイバニア龍騎兵隊が激戦を繰り広げている中、フォレスタル軍龍騎兵別働隊は地上のワイバニア歩兵に側面からなだれこんだ。

ヒーリーの策略によって、ワイバニア軍の陣形は伸びきっており、そこを無防備な側面から攻撃を受けたためワイバニア軍は総崩れになった。

「龍騎兵は歩兵に勝つ」世界の大原則はワイバニアにもフォレスタルにも等しくあてはまる。戦場はワイバニア軍の兵士の死体で埋め尽くされた。

「もう勝敗は決した。早く退け……ジークムント」

ヒーリーは心の底から願った。将である限りは敵を倒さなければならぬ。殺さなければならぬ。しかし、虐殺者になる義務はない。敵を殺し尽くしてきたヒーリーだったが、次第に不愉快なジレンマに陥っていた。

味方を活かすために敵を殺す。しかし、敵を生かせば、敵の代わりに味方を殺す。当たり前のことであるが、どちらに転んでも殺人者にならないのである。軍人である限りはヒーリーはこのジレンマと永遠に戦っていくことになるだろう。

「軍団長、勝敗はもう決しました。退却を！」

同じとき、ヒーリーと同じことを考えたものがいた。ジークムントの副官のクラウスである。クラウスは軍団長から怒りを買うのを覚悟の上で意見を具申した。

「俺が負けたというのか……たかだか四〇〇〇の小勢に……いや、退かん！ まだ、まだ兵力はある！ このまま突撃だ！」

「いいえ……我々にはもはや退却出来るだけの力があるかどうか……」

「黙れ！……俺は認めん！」

「軍団長！」

「黙れと言つのに！」

ジークムントはさやに入ったままの剣でクラウスを殴りつけた。ジークムントの陣中にめきと何かが折れる音がした。

ジークムントを見ると、殴りつけた副官の右腕が普段とは逆の方向を向いていた。クラウスは右腕と引き換えにジークムントの打撃を受け止めていた。

「いいえ……。この腕が折れようと、足がもげようと、閣下に聞き入れてもらうまでは黙りません！」

一歩も引かぬ覚悟を決めたクラウドはきつとジークムントを見据えた。

「軍団長。私も副官殿の意見に賛成いたします。戦線も至る所で崩壊し、我が軍は壊滅しつつあります。何卒、退却のご命令を……」

参謀長のシュタイナーもまた、クラウドに同意し、ジークムントに退却を促した。

「ぬう……」

ジークムントはなおも退却をためらっていたが、そのとき、ワイバーニア軍にとって敗北を決定づける情報が入った。龍騎兵隊長ブルーノ・フォン・ノイベンシュタインの戦死である。

第一章 オセロー平原の戦い 第三十三話

「信じられん。ブルーノが死んだだと？ あのブルーノが……」

旧知の間柄であり、最も信頼出来る部下を失い、ジークムントはシヨックを隠しきれなかった。だが、ブルーノの死は単に部隊長を失ったことにとどまらなかった。指揮系統を失ったワイバニア軍龍騎兵隊は総崩れとなり、全滅にも等しい損害を受けていたのである。空の守りを失い、ワイバニア第十軍団はここに戦力のほとんどを喪失したのである。

「わかった。退却だ……。全軍、退却せよ」

ジークムントは小さく声を絞り出した。彼にとって、いやワイバニア軍にとってこれほどの大敗は例のないことだった。彼の命令のすぐあと、第十軍団の本陣から信号旗とのろしが上げられた。

「あののろしは……。直ちに全軍退却だ。後衛はフォレストル軍の進撃に注意せよ」

全軍退却ののろしを見たワイバニア第三軍団長ヨハネス・フォン・ハイデルベルグは直ちに全軍退却を命じた。

「ワイバニア第三軍団が退いてくれるか……十二軍団の三番手である手並み……恐ろしくなるわい。よいか、全部隊に追撃戦は避けるように通達せよ。返り討ちにされるぞ」

フォレストル軍第一軍団長フランシス・ピットははやる部下を抑え、追撃戦の禁止を厳命した。同時刻、テンペスト湖岸に布陣していた

フォレストアル軍第二軍団長ハーヴェイ・ウォールバンガーも同じ判断を下していた。

「全軍、退却」

ヨハネスが兵を退いたのと時を同じくして、フォレストアル第二軍団と対峙していたワイバニア第七軍団長アンジェラ・フォン・アルレスハイムも全軍退却を命令した。

「これ以上の交戦は意味がない。むやみに攻撃を加えても、我々の損害が増えるばかりだ。タイミングを合わせて、こちらも撤退するぞ」

ハーヴェイはワイバニア第七軍団が警戒線から出たことを確認すると、全軍退却の命令を出した。

星王暦二一八二年六月十六日、オセロー平原の戦いはフォレストアル軍の圧倒的勝利で幕を閉じたのである。

第一章 オセロー平原の戦い 第三十四話（前書き）

第一章最終話です。

第一章 オセロー平原の戦い 第三十四話

「勝ったのか……俺たち……」

フォレストアル軍弓兵の一人が小さく口に出した。

「勝ったんだよ……俺たち、あのワイバニアに勝ったんだ!!!」

彼の隣で、もう一人の弓兵が叫んだ。勝利の喜びはヒーリー軍全隊を包み込み、歓声となって沸き立っていた。ヒーリーもはにかみながら喜んでいた。

「ヒーリー殿下……」

ブルーノによつて重傷を負ったアレックスがヒーリーのもとに担架で運ばれて来た。

「よくやってくれた。最高のタイミングだった。スチュアート隊長。」

ヒーリーはこの戦いで最も活躍した将をねぎらった。

「ありがとうございます……」

フォレストアルの蒼き閃光と讃えられた龍騎兵は傷をおして声を絞り出した。

喜びに沸き立つ戦場で、ヒーリーは無数に横たわるワイバニア兵の骸を目にした。苦悶の表情を浮かべたもの。撤退する味方、後退す

る味方にめちやくちやに踏み倒され、原形をとどめていないもの。身の毛もよだつ光景が、ヒーリーの眼前に広がっていた。

「皆。最後の仕事だ。疲れているのは分かっているが、ワイバニア兵を弔ってやるう……」

ヒーリーは自軍の兵士達に言った。ある一人の兵士が前に出てヒーリーに突っかった。

「どうして俺たちが奴らを弔ってやらなければならんですか！？ 攻め込んで来たのは奴らだ。俺たちは奴らに殺されるかも知れなかつたんですよ。」

仲間が何人が止めに入ったが、兵士はヒーリーに怒りのまなざしで睨みつけていた。

「ああ、そうだ。俺たちは奴らに殺されるかもしれなかった。だからだ。戦場で骸をさらすのは今度は俺たちかもしれないだろう。せめて、戦った者の礼儀として彼らを懇ろに弔ってやらなければならぬ。偽善だと笑いたければ笑ってくれ。」

ヒーリーは兵士達を割っていくと、ワイバニア兵の亡骸の前に立った。彼はワイバニア兵の亡骸のそばで穴を掘り始めた。道具も何もない。自分が血と泥だらけになるのも構わず、ただ、手だけで掘り続けていた。

その姿を見つめていた兵士達の中から、一人がヒーリーのもとに駆け寄っていった。彼もまた道具を使わずにヒーリーが掘っていた穴を無心で広げていった。また二人目の兵士もまた、彼に続いた。一人、また、一人、ヒーリーのように死んでいったワイバニア兵を弔

おつとする兵士が増えていった。それは一〇〇人から、五〇〇人、最後は全員が集まってワイバニア兵が永遠に心安らく場所を掘っていった。

「おい、手なんかじゃだめだ。スコップを持って来い！」

「手伝ってくれ！ 亡骸を穴に入れたいんだ！」

兵士が口々に声を上げた。ヒーリーは立ち上がって周りを見た。五〇〇〇からの兵士がワイバニア兵のための墓穴を掘っていた。兵士達は皆、ヒーリーの気持ちを汲んでくれたのだ。

「ありがとう……皆……」

ヒーリーは一人、礼をした。

「何やってるんですか。司令官。司令官が言っただですよ。ワイバニアの兵士達を弔うと。早く埋めて弔ってやりましょう。こんな平原にさらされたままじゃ、さぞかし寒いでしょうよ。」

ヒーリーの肩を叩き、兵士がヒーリーにスコップを手渡した。上空からそれを見ていたヴェルは高いいなないた。ワイバニア兵の鎮魂のために……龍の旗の下に散っていったつわものたちのために。

第二章 戦乱への序曲 第一話（前書き）

第二章開始です！お楽しみください。

第二章 戦乱への序曲 第一話

星王暦二一八二年七月一日フォレストル王国侵攻作戦失敗の報告を受けたワイバニア皇帝アレクサンデルⅠⅠⅠ世は最高軍事会議の招集を決定した。

ワイバニア帝都ベリリヒンゲン中心部にある帝国軍大本営、翼将宮に最高級軍事指揮官である十二軍団長、軍政の最高指導者である左右両元帥、実戦指揮官最高位として彼らをまとめる任にある皇太子ジギスムントが出席した。

「ジークムントめ。軍団壊滅とは無様な戦いをしたものだ」

「俺の軍団に任せておけば良かったんだ。そうしたら、たかが四〇〇〇の小勢、すぐにでも全滅出来たものを」

「ムリムリ。あなたの軍団じゃ、返り討ちが関の山だって」

「まあまあ。誰だって勝ち続けることは出来ない訳だからね」

「ほほ……常勝無敗の第三軍団長がよく言っわい」

「それにしても、我ら十二軍団長が一同に会するのは何ヶ月ぶりか」

「ヴィクターの坊やが軍団長になったとき以来だから、一年ぶりつてところか」

ワイバニア正規軍を支える十二人の軍団長は翼将宮の中で、もっとも豪華で、最も大きな部屋である竜王の間に備えられた円卓を囲ん

で腰掛けた。十二人の軍団長が席についた時、竜王の間の中でもひと際豪華な扉が開き、ワイバニア皇帝アレクサンデル、左元帥ハンス・フォン・クライネヴァルト、右元帥シモーヌ・ド・ビフレストが姿を現した。十二人の軍団長はワイバニア全軍を統べる皇帝を前に起立し最敬礼した。皇帝は無言で片手をあげて返礼すると居並ぶ諸将に着席を促した。

「今回諸将にあつまってもらったのは、先のフォレストル侵攻作戦の失敗についてである。第三、第七、第十軍団長、それぞれ龍の眼を差し出されよ」

極低音だがよく通る大きな声で、会議の進行役である左元帥のハンスは言った。ヨハネス、アンジェラ、ジークムントはそれぞれ手に収まるサイズの小さな水晶玉を円卓の中心に差し出した。

龍の眼。ワイバニアの秘宝にして唯一の魔術兵器だった。兵器とはいつでも、戦闘に直接使用されることはない。記録として使われるものであり、その眼に対象となるものを記録させることで映像をあとから再生することが出来た。魔術の衰退によってその製法が失われて久しく、ワイバニア国内にも十五個しか現存しない龍の眼は、代々ワイバニア十二軍団長の証として受け継がれて来た。

ハンスは近侍の兵に部屋を暗くさせると、龍の眼に優しく触れた。すると、三つの眼から戦いの映像が映し出された。

第二章 戦乱への序曲 第二話

最初にやり玉に上げられたのはジークムントの戦いだった。

「無様だな。ここまで龍騎兵を失い、敵に弄ばれるとは。栄光ある十二軍団長にあつてはならない振る舞いだ」

ワイバニア第一軍団長のハイネ・フォン・クライネヴァルトが言った。十二軍団長の主席でもある美しい青年は劣等生を見下すかのよう映像に視線を向けた。

「あはは！ そうそう！ こんなにあつさり負けちゃって、ばっかみたい！ おつむがゴリラ並だからそんなことになるんだよ！」

十二軍団長の中でひと際派手な格好をした第十一軍団長のザビーネ・カーンが笑う。

「まったく、おつむどころか全身砂糖菓子のような娘っ子にひどい言われ様だねえ。ジークムント」

第九軍団長のマルガレーテ・フォン・ハイネマンはカラカラと笑い声を上げた。

「何？ そんなだから、嫁にいき遅れるんだよ。オバサン」

「ああ？ あたしや、まだ若いんだよ。それにいき遅れてるんじゃないよ。嫁にいかないだけさね。あたしに釣り合っていない男がこの国には少ないからねえ」

今年三二歳になるマルガレーテは机を叩くと、八つ下のザビーネにこめかみに青筋をたてて抗議した。

「まあまあ、二人とも」

第三軍団長のヨハネスが二人を抑えた。

「ジークムントには悪いが、フォレストルの戦術に翻弄されたのは動かし様のない事実だ。それは認めなければならぬが、今回我々が集められたのは我々三人を吊るし上げるためだけではないのでしよう？ 左元帥閣下」

ヨハネスの問いに、左元帥のハンスは頷いた。

第二章 戦乱への序曲 第三話

「その通り。今回の敗戦の要因の一つが敵の対空戦術にあったということだ」

ハンスはそう言うと、ジークムント配下の龍騎兵が次々と撃墜されていく映像を表示させた。自分の部下が炎に巻かれ、地面に叩き付けられていく様子を見ることが出来ず、ジークムントは映像から目をそらした。

「弓兵による弾幕射撃と魔術散弾か……。確かにこれでは避けきれまい。俺の軍団も餌食になっていたかもしれん」

隆々とした腕を組んで、第五軍団長のヴァルター・フォン・ブッフバルトは口を一文字に結んで椅子にもたれた。ジークムントと並び、十二軍団の中でも指折りの剛の者として知られるヴァルターは敵の新戦法の犠牲者であるジークムントにわずかながら同情していた。

「それにしても無様に過ぎる戦いをし、我が帝国の名を辱めたのは事実。ネルトリンゲン軍団長を即刻処断すべきでしょうな。父上」

皇太子ジギスムントは傍らの玉座に座る皇帝アレクサンデルに話しかけた。

「待て。諸将の話聞くのだ。お前はことを急ぎすぎる」

息子の目を見ずに、アレクサンデルは威厳に満ちあふれた声で言った。ジギスムントは舌打ちすると円卓に視線を戻した。

皇帝アレクサンデルは現在五五歳。一代でワイバニアを世界の半分を支配する大国にまで育て上げた人物である。政治手腕は他国の王を凌ぎ、軍事においてもワイバニアの歴代皇帝に比類ない武功をあげた英雄であった。

皇太子時代、弱冠二五歳でフォレストル侵攻作戦の実戦指揮をとり、当時のフォレストル軍を壊滅に追い込みワイバニア帝国の領土を拡大させる武勲を立てている。

その目は鷹のように鋭く、遠くを見渡し、その思慮は海よりも深いというのは皇帝の側近であったカール・フォン・フクステフェーデの言葉である。優れた才覚と年月と共に磨き上げられた経験と判断力によってアルマダ最大の領土を誇るこの帝国を維持し続けていた。

第二章 戦乱への序曲 第四話

「それにしても、敵さんの手並みは鮮やかじゃのう。新戦法を惜しげもなくさらす手口といい、ジークムントを手玉に取る機動戦術といい。なかなかのものだて」

長く伸びたあご髭をもてあそびながら、十二軍団長中随一の戦歴を誇る第四軍団長のグレゴール・フォン・ベッケンバウアーは言った。

「グレゴール翁の言はもつともだが、真に恐るべきは敵将の洞察眼と情報力であろう。まるで全ての動きを予測していたかのような戦いぶり。大したものだ」

第一軍団長のハイネが言った。彼は二四歳と史上最年少でワイバニア第一軍団長の地位にある天才で、戦術眼の高さと、完璧で的確な戦術指揮能力を持ち、「ワイバニアの至玉」と讃えられる将であった。

「なんと言ったかの……かの将は……。どこかで見たことがあるのじゃが……」

「ヒーリー・エル・フォレストル。フォレストル王国の第三王子との情報です」

グレゴールの問いにヨハネスが答えた。フォレストルの姓を聞いたとたん、グレゴールは笑い出した。

「ほほほ……こいつはいい。フォレストルの血族はそろって曲者ばかり生み出しよる。じゃが、それにしても今回はとんだくわせ者を

生み出したものじゃて……」

齡七二を過ぎた老将の目に鋭い光が宿った。

「『歩兵が龍騎兵に負ける』この世界の不文律を壊してしまいましたからね。大変な人です」

第十二軍団長のヴィクター・フォン・バルクホルンが今回の会議の最重要議題でもあるキーワードを口にした。史上最年少の一八歳で十二軍団長の一人に抜擢された少年は、周囲の注目に耐えきれず萎縮した。

「諸将よ」

皇帝の声が会議の空気を一変させた。たった一言だけ口にしたに過ぎないが、その声は周囲のものに無意識のうちに緊張感を与えた。

「バルクホルン軍団長の言う通り、この戦いで世界の不文律が崩された。歩兵が龍騎兵に打ち克つ術をフォレストアル王国が見いだした。歴史が変わったのだ。諸将よ。もはやフォレストアルに対する絶対的優位はない。侮るな。この翡翠の龍將を……」

竜王の間の広い室内に、アレクサンデルの言葉が低く、そして、荘厳に響き渡った。その声と覇気は居並ぶ諸將と息子すら押し続けていた。

第二章 戦乱への序曲 第五話

「陛下。敗軍の将、三名の処遇はいかが致しましょう？ 軍団の損害が皆無であったハイデルベルグ軍団長はともかくとして、ネルトリンゲン、アルレスハイム両軍団長には処分はあつてしかるべきと思いますか……」

ハンスは主君に、二軍団長の処分を尋ねた。ヨハネスはアンジエラらを弁護すべく、発言しようとしたが、皇太子ジギスムントによって一蹴させられた。皇帝はしばらく考える仕草をして、傍らに立っている女性に声をかけた。

「右元帥。そちはどう思う？」

皇帝に意見を求められ、右元帥のシモーヌ・ド・ビフレストは言った。

「……戦いぶりを見れば、ネルトリンゲンの手際の悪さは明らか。敗戦の責任をとって自死というのがよろしいかと。アルレスハイムは敵に与えた損害も大きいので……降格が適当であると思いますわ」

露出の高い服に身を包んだ美貌の女元帥は二人を見下ろした。

「左元帥の意見はどうか？」

「私めの考えは常に陛下と共にありますれば……」

左元帥のハンスは主君に一礼した。

「陛下。私は右元帥と考えを同じくいたします。ここで甘い姿を見せては外にワイバニアの恥を知らしめることになりましようぞ」

父に問われることなく、皇太子ジギスムントは自らの意見を述べた。アレクサンデルは息子の態度に少し表情を曇らせた。

「それでは処分を言い渡す」

若干の思考のうち、皇帝アレクサンデルは静かに席を立った。

「ジークムント・フォン・ネルトリンゲン」

名を呼ばれ、ジークムントは起立した。恐れを知らぬと言われた彼も今回ばかりは額に汗を浮かべている。

「用兵家としての勝敗は常に存在すること。敗戦によるそちの罪は問わぬ。兵を養い、自らの腕を錬磨し、次へ活かせ」

「はは……」

ジークムントは恭しく一礼した。

「アンジェラ・フォン・アルレスハイム」

「はっ！」

アンジェラもアレクサンデルの呼びかけに起立した。

「そちも同じだ。罪は問わぬ。次の戦でそちの腕を存分に見せるが良い」

「は」

アンジェラもまた、アレクサンデルに一礼し、着席した。

「よいか諸将よ。敵を侮るな。歴史は今変わったのだ。だが、新たな歴史は我々が作る。龍の旗の下に」

「龍の旗の下に！」

十二軍団長は起立し、最敬礼と共に唱和した。円卓を囲むワイバニアの最高指揮官達を背に皇帝はマントを翻し、竜王の間をあとにした。

第二章 戦乱への序曲 第六話

「父上は甘すぎる……」

父の判断に不服だった皇太子ジギスムントはそうつぶやくと、父を追って竜王の間を退席した。

「諸将よ。今日のためによくぞ集まってくれた。明日まで休息をとるようにとの陛下のお達しである。次の戦いのために、鋭気を養え」
ハンスの号令とともに諸将は起立すると、それぞれ思い思いのタイミングで竜王の間をあとにした。ヨハネスがろうかに出て、自室へ戻ろうとすると、右元帥のシモーヌに呼び止められた。

「右元帥閣下。私などに何の御用ですか？」

ヨハネスは心底警戒した様子でシモーヌに言った。

「そんなに警戒なならないで。ハイデルベルグ軍団長。何もとって食べはしないわ」

獲物にまわりつく蛇。まさにその形容が彼女にはふさわしかった。シモーヌはヨハネスに密着するくらい近づくと、ヨハネスにささやきかけた。

「ただ、わたしに力を貸して欲しいの。……あなた、ワイバニアの新時代に興味はない？」

「何？ 何を……」

「ワイバニアの新時代」「力を貸して欲しい」ヨハネスはシモーヌの要領がつかむことができなかつたが、どす黒い予感を感じていた。ちょうどその頃、ヨハネスはアンジェラが竜王の間から、出てくる姿を見つけた。

「アンジェラ！……とと、右元帥閣下。私は約束がありますので、今日はこれにて……」

ヨハネスはアンジェラを呼ぶと、シモーヌを体から引きはがし、アンジェラのもとにかけていった。シモーヌは小さくため息をついた。

第二章 戦乱への序曲 第七話

「なれなれしい口を聞くな。わたしとお前とは恋人でもなんでもないのでからな」

アンジエラは自分の名を呼ばれたことに不機嫌さを隠さなかったが、ヨハネスは気にしない感じでアンジエラに言った。

「恋人同士ではないが、同じ十二軍団長じゃないか。それなりの親愛の情はもって然るべきだと僕は思うけどね」

「それで、ヨハネス。私を呼んだのは単にあの右元帥から逃れるためではなからう?」

アンジエラはあえてヨハネスをファーストネームで呼ぶと、ヨハネスに尋ねた。

「話は早いな。君と話がしたくてね……あの右元帥に気をつける」

ヨハネスは人懐っこい笑顔から一転、真剣な顔つきになると、小さくアンジエラに言った。

「いきなりどうした? めったなことを口に出すものではないぞ」

アンジエラはヨハネスの顔を見上げると小さく言った。

「確証はない。だが、何か良からぬことを考えているようだ」

「だがあまり動くな、ヨハネス。お前の立場も危つくなる」

「……」

「どうした？」

アンジェラはヨハネスがあっけにとられた表情をしているのを見て、思わず尋ねた。

「君が僕のことを自然にファーストネームで呼んだからね。驚いたよ」

「な！」

仮面の下でアンジェラが赤面しているのをヨハネスは見逃さなかった。

「そ、それはお前が私のことを……」

冷静な第七軍団長が取り乱すのを見て、ヨハネスは楽しそうに笑った。

「わかってているよ。アンジェラ。ついでにその仮面をとると、なおいいんだがなあ。せつかくの美人が台無しだ」

ヨハネスはおどけて言うと、アンジェラは仮面の下からため息を吐いて、あきれ気味に言った。

「わかった。考えておくとしよう。良い休暇を。ヨハネス」

長い髪とマントを翻し、アンジェラは廊下に消えていった。

「やて、と……どうするかな」

翼将宮の廊下の窓からヨハネスは空を見やった。澄み渡る青空を眺め、対フォレスタル戦略、そして本国の陰謀、ヨハネスはこれから起こりうる事象に思いを巡らせた。そのどれもが国を巻き込む大事になるだろう。ワイバニア屈指の若き知略家はワイバニア帝国に吹き荒れる嵐の予感を感じずにはいられなかった。

第二章 戦乱への序曲 第八話

星王暦二一八二年七月三日、ヒーリー・エル・フォレストル以下ワイバニア帝国迎撃軍五〇〇〇の軍勢はフォレストル王都シンベリンに帰還した。シンベリン市街地を経由したヒーリー軍は市民の歓迎を受けながら凱旋した。

「俺たち、こんな歓迎受けたことない」

「勝つっていいもんだよな。やっぱり」

「いまだにワイバニアに勝ったなんて信じられねえよ」

凱旋した兵士達はこの勝利が信じられなかった。全員が必死に、へとへとなるまで戦ったとはいえ、ワイバニアに対する歴史的な圧勝である。信じられないのも無理はなかった。

「これが勝利つてもものだぞ、ヴェル。いいもんだろう」

ヒーリーは隣を歩くヴェルに言った。地上を移動するとき、ヒーリーはヴェルでなく、馬に乗る。自分の背中に乗らないことをヴェルは常に不満がっていたが、今回はおとなしく、ヒーリーの隣を二本足で器用に歩いていた。ヴェルはヒーリーの呼びかけに鳴き声で返すと、大きな翼を広げ、空に飛び立った。

「あいつめ……」

ヒーリーは相棒が嬉しそうに空を飛んでいるのを見て、街の人々や自分の気持ちやヴェルに伝わっていることを知った。

三十分程ほどシンベリンの大通りを歩いた後、ヒーリーはフォレスタル王城に入城した。城ではシンベリンにヒーリーが入ったと報告を受けた国王ジェームズ、王太子エリクシル、宰相マクベス、宮廷魔術師兼錬金術師のラグ、そしてマクベスに呼ばれたポーラがヒーリーを出迎えた。

「ただいま。ポーラ」

マクベスが言った眠たそうな表情を浮かべて、ヒーリーはポーラに言った。ポーラは周囲が見てるのも構わず、ヒーリーに抱きついた。ヒーリーはどつと湧く笑い声に気恥ずかしそうにしながら、嬉しさに泣くポーラのショートカットの髪を優しく撫で続けていた。

第二章 戦乱への序曲 第九話

ポーラが落ち着くのを待つて、ヒーリーは謁見の間に通されることになった。すでに整列を終えていた文武百官の前でヒーリーは国王に戦果の報告を行った。ヒーリー軍の戦果は一個旅団でありながら、一個軍団のそれを遙かに超えていた。

ワイバニア一個軍団の壊滅。中でも龍騎兵に対し、全滅に近い損害を与えたのは大きかった。これは過去、どの軍団もなしえたことのない戦果であり、「歩兵は龍騎兵に勝てない」というこの世界のルールを打ち破るものであった。ハーヴェイ率いる第二軍団はワイバニア第七軍団とほぼ同等の損害を与えており、ワイバニアの国力がいかにか大きいとはいえ、これほどの損害では、すぐの出兵は出来ないと予想された。ヒーリーもそのことを予想して、ワイバニア軍に壊滅的打撃を与えており、軍務を離れる口実が出来たと内心喜んでいたが、父王、ジェイムズがヒーリーに与えた恩賞は、そんなヒーリーの期待を大きく裏切るものだった。

「ヒーリー・エル・フォレスタル。貴殿を第五軍団長に任命する」謁見の間にいたラグはそのときのヒーリーの様子に笑いをこらえるに必死だったと言う。正規軍団長、もしくは隊長に任命されることはフォレスタル軍人にとって至上の榮譽と言ってよい。本来の軍人ならば大喜びするところだが、ヒーリーは違っていた。

父王に第五軍団長に任命されると聞いた瞬間、ヒーリーは目をむき出し、口はしまりなく開き、肩を大いに落としたと言う。この驚きと落胆の入り交じった反応をした王子もまた、フォレスタル史上初めてではないだろうか。ヒーリーは正装した文武百官が居並ぶ前で

大きなため息をついて言った。

「つつしんでご辞退申し上げます」

「何故だ。ヒーリー。いつまでも兵を持たぬ指揮官では決まりが悪かるう」

父の問いに、ヒーリーは決められた口上を棒読みするかのようにつたえた。

「わたしはまだまだ未熟者の身の上、軍を預かる器ではありません故、この上はどなたか他の適任者に任命をご再考いただきたく思います」

言葉の上では極めて丁寧なものであったが、ヒーリーの態度の端々からは「嫌だ」という意思がはつきり見て取れた。

その親子のやり取りにラグは笑いをこらえるのに必死で、肩を小刻みに震わせていた。

「お師匠様。笑っちゃだめですよ」

ラグの隣に立っていたメルは笑いをこらえている自分の師匠を肘でこづいた。

「だって、ヒーリーがね……」

背の低いメルの視線に合わせるようにラグはかがんでメルに言った。メルは師匠の態度にため息をつくど師匠をもう一度肘でこづいた。

「ほら、お師匠様もしゃんとしないと。面倒臭いことになりますよ。リードマン卿も怖い目つきでこっちをにらんでいますし」

政治顧問のロバート・リードマンがメルとラグをにらんだ。政治の第一線から退いたとはいえ、三十年前にフォレスト王国を救った英雄の眼光はまったく衰えていなかった。普段は好々翁で通っているリードマンであったが、こうした式典の作法には非常に口うるさく、たとえ国王、王子であろうとも容赦なく雷を落としていた。

これはあとでお師匠様もただでは済むまい。徹夜でお小言だけ済むとよいが……メルはそう遠くない未来の師匠の運命に少し同情した。

第二章 戦乱への序曲 第十話

「では、第五軍団長に任命されたくないとお前は言うのだな」

国王が青筋を立てながら、あくまで丁寧と言った。

「はい」

「そんな面倒臭いことやってたまるか」という意思を思いつきりこめて、ヒーリーは心底嫌そうに言った。

「では、勅命だ。ヒーリー・エル・フォレストルを第五軍団長に任命する。これでこの件は終了だ」

国王はついに勅命を引っ張りだした。これに逆らえば、たとえ王族として首がとぶ。ヒーリーは父の奸計についにキレた。

「汚いぞ！ 勅命なんて持ち出しやがって。国王にもなって大人げないとは思わないのか！」

息子に言われて国王もまたキレた。

「大人げないのはお前だ！ 毎回毎回、軍務をさぼりおって！ 四の五の言わず軍司令官に就け！」

国王の怒声が厳粛な式典の場にこだました。あたりは急に水をうつたように静まりかえり、奇妙な緊張感が支配していた。国王とヒーリーとの間の亀裂が徐々に生まれつつあるのを式典に出席した誰もが感じていた。

「ヒーリー……」

緊張感と静寂を解いたのは王太子エリクシルであった。エリクはヒーリーに向けて優しく話しかけた。

「少し落ち着いてくれ。ヒーリー。お前が軍務に就きたくないのも戦争が嫌いだと言うこともわかる。だが、お前以外に新しい軍団を任せられる者はいない。それに、私はお前だからこそ、軍を預けたと思うのだ。ヒーリー。戦争を心から嫌いなお前だからこそ、戦争のない世界を作ることが出来るのではないかと私は思うのだ」

「しかし、兄上……」

ヒーリーは兄に反論しようとしたが、途中でやめた。ヒーリーはエリクをはじめ、兄二人を尊敬していたし、自分が出来ることならヒーリーは兄の支えになりたいと考えていた。ヒーリーは翡翠色のくせっ毛をくしゃくしゃとかいた。

第二章 戦乱への序曲 第十一話

「ヒーリー。私もヒーリーには軍の要職について欲しいと考えているんだ。君ほどの戦術家が私を支えてくれると、これほど心強いことはないよ」

次兄マクベスは長兄に続いて言った。買いかぶりだとヒーリーは思った。今回の戦いは予想以上の戦果をあげた。しかし、これ以上の戦果をこれからもあげられるかどうかヒーリーには自信がなかった。しかし、兄二人の懇請を突っぱねる訳にも、ヒーリーはいかなかった。兄二人がヒーリーを頼りにしてくれている以上に、彼らはヒーリーを様々なことから守り続けていた。そのことをヒーリー自身はよくわかっていたので、兄達の恩に報いるためにも、彼らを支えるためにも、ヒーリーは第五軍団長就任を了承することにした。

「わかりました。陛下、兄上、第五軍団長に就任させていただきま
す」

「ありがとう。ヒーリー」

王太子エリクはヒーリーの決断に礼を言った。

その後、各隊長の戦果報告のあと、つつがなく式典は終了した。

「ああ、いやだいやだ」

王城の広い廊下を歩きながらヒーリーは言った。

「その割には、いつもあの二人に頼まれると、引き受けてしまうん

だよねえ。君は」

ヒーリーの隣でラグは言った。ラグ自身もヒーリーには軍にとどま
って欲しいようで、ヒーリーの第五軍団長就任を歓迎していた。

「仕方ないだろう。二人にはわがままも色々聞いてもらっているし、
役に立ちたいと思っているんだ。特にエリク兄さんにはね」

ヒーリーの兄、エリクシルはこの年二九歳になる。メルキドとの平
和条約上、生後すぐに人質に出され、親元から離れた生活を余儀な
くされた。立太子のため帰国してからは、父王ジェイムズ、政治顧
問リードマンのもとで政治を学び、次期国王として現在は政務の大
部分を行っていた。

また、その実直な人柄は人々の人気を集め、「フォレストル史上も
っとも人徳ある人物」として讃えられていた。

生まれてすぐ人質に出されたこと、その過酷な幼少期と常に国家の
重責を担わなければならぬ立場、だがそれに対して弱音を吐くこ
ともなく、つねに周囲に気遣いを見せる兄に、ヒーリーは並々なら
ぬ尊敬の念を抱いていた。

第二章 戦乱への序曲 第十二話

「君は本当に兄君が好きだからね。まあ、今回は楽しいものを見せてもらったよ。しかし、ロバートにつかまらないようにしなくてはね。彼の小言をずっと聞くことになるかもしれないから」

政治顧問のリードマンをファーストネームで呼び捨てにして、ラグはあたりを見回した。フォレスト王国の中で、リードマンを呼び捨てに出来るのは現在、ラグただ一人だけだろう。

「数百年生きて来た君でも、徹夜の小言は嫌いかい？」

ヒーリーは隣の親友に意地悪く笑って言った。

ラグは人間ではない。人によって生み出された人工生命体である。アルマダには彼を含めて三体しか存在せず、製法も現在はラグしか知らない。もともとラグ自身も完全な人工生命体を作り出しはならず、幼児体しか完成出来なかった。それがメルである。

人工生命体であるラグは年をとることもなければ、死ぬこともない。不老不死の体を持っており、フォレストに流れ着いて数百年、宮廷魔術師兼錬金術師として、国を見守り続けて来た。

「とくにロバートのはね。彼が小さい時なんか僕のラボに入りびたつては、目を輝かせて僕とメルの発明を見ていたものだったのに……年はとりたくないもんだね」

「そうですね。まことに……」

ラグの背後でしわがれた老人の声がした。二人はその声を聞いた途

端に立ち止まり、ゆっくりと後ろを向いた。ラグの白い首筋にうつすらと冷や汗が流れるのをヒーリーは見逃さなかった。

「や、やあ。ロバート……」

「ラグニール殿。まことに結構なご挨拶ですぞ。式典のときも、そのように神妙な態度でいらっしゃればよかったのに……」

リードマンは老獪な笑みをラグに向けた。

「まあまあ、リードマン卿。その、ラグも反省しているようだし……」

ヒーリーはラグに助け舟を出した。しかし、リードマンの静かな怒りはフォレストラーの功労者にも向けられていた。

「これはこれは、ヒーリー殿下。お父君を向こうにまわしてお姿、ご立派にございましたな。しからは、この爺めにも、その態度ご教授させていただきますまいか……」

ご教授？ 冗談じゃない。リードマンの小言に付き合っていたら一日の徹夜どころか、三日は徹夜する羽目になる。何より、リードマンの鋭い眼光がそれを物語っていた。

「ヒーリー、逃げるよ」

ラグは小声でヒーリーに合図すると、持っていた煙幕弾を床に投げ、爆発させた。白い煙幕は廊下中に広がり、周囲を白く包み込んだ。

「今だ！ ラグ！」

「あ、これ！ 逃げるでない！」

ラグとヒーリーは白い煙幕からひと際早く飛び出し、全速力で廊下を走り抜けていった。二人は廊下を抜け、庭園の中にあるベンチに腰掛け、荒い息を吐いた。

第二章 戦乱への序曲 第十三話

「はあ、はあ……ここまではリードマンのじじいも追って来れないだろう。まさか、二五歳にもなって、こんなに全速力で走るなんて、思ってもみなかったよ」

「はあ、はあ……僕なんて、五七六歳だよ。まったく、無茶をさせてくれる……」

荒い息を吐き、二人は互いの顔を見合わずと、大笑いした。ひとしきり笑ったヒーリーの顔の上にぬっと小さな子どもの顔が現れた。

「楽しそうだね。ヒーリーおじちゃん」

王太子エリクの息子トマスであった。トマスは実の父と同じくらいヒーリーとラグにもなついており、子ども好きなヒーリーは暇を見つけては（というよりも強引に暇をつくっては）トマスと遊んでいた。

「さっきこわくいおじいちゃんから逃げて来たからな。久しぶりに遊ぼうか？ トマス」

「うん、おじちゃん。ヴェル呼んで。ヴェル」

ヒーリーは可愛い甥っ子に頼まれ、口笛を吹いた。すると、エメラルド色した翼竜が三人の前に降り立った。

「うわあ〜い！ ヴェル！ ヴェル！」

トマスはうれしそうにヴェルにしがみつく、ヴェルもうれしそうに頭をトマスに差し出した。トマスはヴェルの頭を撫でると、ヴェルは楽しそうな声をあげて、首をひねったりしていた。

「こら、トマス！ ヒーリーおじさまにご迷惑をかけてはいけないといつも言っているでしょう？」

庭園の奥から褐色の肌をした美女がやってきた。エリクの妻である王太子妃アルカディアだった。

第二章 戦乱への序曲 第十四話

「いえ、アルカディア様……俺、いやわたしは迷惑などはまったく……」

ヒーリーはあわててアルカディアに言った。

アルカディアはメルキド公国の出身で現総帥であるスプリッツァーの妹であり、フォレスタルの和平条約の約束の一つとして、フォレスタル王国に嫁いで来た。政略結婚と言う形ではあったが、出会いはエリクが人質としてメルキドに入国したときにさかのぼる。遠く国許を離れ、孤独な思いをしていたエリクを何くれとなく世話をしたのがアルカディアだった。以来、エリクとアルカディアは良き友として、理解者として、伴侶として、長い時を過ごして来た。夫婦仲の良さは三国に知れ渡り、ヒーリーもこの二人に常日頃から憧れていた。

「いつもありがとう。ヒーリー。わたし達にとてもよくしてください。お礼の言いようもありません」

フォレスタルの紅玉と言われる優しく、穏やかで慈愛に満ちた微笑みを浮かべながら、アルカディアは恐縮するヒーリーに礼を言った。彼女の視線の先ではヴェルとじゃれあうトマスの姿があった。

「わたしの力など、兄上に比べたら、全く……」

「ヒーリー。あなたは自分の力を過小評価していますよ。あなたは歴史を変えたのです。自信を持ってよいのですよ。それに、夫エリクもあなたのことをとて頼りにしているのです。無理を言うかもしませんが、よろしく願います」

アルカディアはヒーリーに頭を下げた。憧れの人に頭を下げられ、ヒーリーは困惑した。

「アルカディア様。どうか、頭をお上げください。わたしが出来る限り、兄上の力になります故」

ヒーリーがあわてて言うと、アルカディアは至玉の微笑みを浮かべた。ヒーリーもまた安堵の笑みを浮かべると、後ろから、元気のよい足音が聞こえて来た。

第二章 戦乱への序曲 第十五話

「あー、もう！ ヒーリーこんなところにいた！ 探したんだから
ポーラがヒーリーのもとに走ってやってきた。ポーラは周りの者に
挨拶を済ますと、話を続けた。」

「リードマン様カンカンだったよ。『あの二人め。あとでお灸を据
えてやるわい！』って目を吊り上げてた」

指で両目をつり上げたジェスチャーをして、ポーラはヒーリーに言
った。ヒーリーはおそろおそろポーラに聞いた。

「それで、ポーラの顔に免じて、許してくれる……とか？」

いたずらをしでかした子どものような上目遣いで、ヒーリーはポー
ラに尋ねた。ポーラは「当たり前」と言わんばかりの表情で目を見開
いた。

「よくわかったね！ 『わたしがヒーリーにきつく言い聞かせます
から、お許してください』って言ったら、喜んで納得してくださった
わ！」

「なんでそこにラグは入っていないんだ？」

ヒーリーのもつともな問いに、ポーラは「あっ！」と声をもらした。
ポーラはヒーリーの問いを「あはは」と笑ってはねのけると、ヒー
リーの耳をむんずとつかんだ。

「ほら！ スチュアート隊長が呼んでるわよ！ ついて来なさい！」

ポーラはヒーリーの耳をつかんだまま城内へ歩いていった。

「痛い痛い！ ちぎれるちぎれる！ ヴェル！ 何してるんだ？ 早く助けてくれ！」

トマスを頭の上に乗せ、頭を上下させて遊んでいたヴェルは、ヒーリーの呼びかけに飛び立とうとしたが、トマスに止められた。

「だめだよ。ヴェル、おじちゃん達の邪魔しちゃ」

高い知性を誇るエメラルドワイバーンも人の心情の細かい動きまでは理解出来ないのだろう。わずか五歳の子に止められたヴェルは小さくうなり声を上げ、訳がわからなそうに頭を地面につけた。

「痛いってば！ ポーラ、もう少し優しく！」

ポーラに耳を引っ張られながらヒーリーは言った。

「ヒーリー」

ポーラはヒーリーの耳を少し強めに握った。

「何だいポーラ」

「おかえり……」

ポーラはヒーリーの方を見ずに言った。ショートカットの髪から微かに見える耳が真っ赤に染まったポーラの後ろ姿を見て、ヒーリー

は優しげに微笑んだ。

「ああ……ただいま」

ポーラにひっぱられた耳にじんじんと痛みを覚えながら、ヒュー
はそれを悪くないと感じていた。

第二章 戦乱への序曲 第十六話

「待たせて済まなかった。スチュアート隊長」

ヒーリーの部屋のソファでは近衛旅団龍騎兵大隊長のアレックス・スチュアートが座って待っていた。先のオセロー平原の戦いで右肩に戦傷を負った彼は痛々しく右肩に三角帯を巻いた姿で現れた。アレックスはヒーリーに合わせ立ち上がるうとしたが、ヒーリーは彼を制し、ソファに座らせた。

「単刀直入に言います。ヒーリー殿下」

ヒーリーがソファに腰掛けるなり、アレックスは切り出した。

「新設の第五軍団に私を加えさせていただきたいのです」

ヒーリーは面食らった。フォレストル最強の龍騎兵が自らの陣営に加わると言うのである。ヒーリーにとってこれほど心強いことはなかった。

「しかし、またどうして？ 君は俺のことが気に食わないのではなかったのか？」

ヒーリーはアレックスがヒーリーのことを嫌っているのを知っており、そのアレックス自らがヒーリーの軍団に真っ先に参加を申し出てきたのは意外でならなかった。

「はい。ですが、オセロー平原での殿下の戦いぶりを見て、自分の浅慮を恥じました。近衛龍騎兵五個中隊、新兵五個中隊合わせて一

個大隊で殿下のお役に立ちたく思います」

「僕は君の思うような男じゃない。買いかぶり過ぎだよ」

どうしてこうも皆、自分のことを過大評価したがるのか。ヒーリーは苦笑しつつ、アレックスの申し出を保留しようとしたが、ポーラがそれを止めた。

「あら、いいじゃない。だって、最強の龍騎兵が味方なんて心強いじゃない」

ヒーリーとアレックスに紅茶を出しながら、ショートカットの給仕の少女は言った。

「ポーラ。あのね……」

「お願いします！ 殿下！」

「そんなに簡単なものじゃないんだ」とポーラに言おうとしたヒーリーだったが、アレックスに機先を制されてしまった。断る理由がなかったため、ヒーリーはアレックスを副軍団長に採用した。

「俺は用兵はできても、兵を鍛えることはできない。その点、よろしく頼むよ。アレックス隊長」

アレックスは力強くうなづいた。質実剛健なアレックスの人柄は兵士達には良い刺激になるだろう。ヒーリーは教官としての側面もアレックスに期待した。

第二章 戦乱への序曲 第十七話

次は参謀だ。冷静に戦局を見渡し、献策を行ない、平時には組織をまとめあげることが出来る人物。フォレストル軍の中でヒーリーの眼鏡にかなう人物は一人だけいた。だが、彼女だけはヒーリーは参謀にしたいはなかった。

ヒーリーの部屋にノック音が響き、何者かの来訪を中の人物に告げた。ポーラが取り次ぎのため、人物を出迎えたが、その人物を見た途端、ヒーリーの顔色が真っ青になった。

「メアリ・ピットです。祖父より、第五軍団参謀長として加わるよう、仰せつかって参りました」

長い髪を後ろでまとめ、鋭い三角形のレンズをした眼鏡をかけた美女はヒーリーに敬礼した。

メアリはヒーリーと同年の二五歳、第一軍団長フランシス・ピットの孫娘であり、士官学校ではヒーリーと同期でともに机を並べて用兵学を学んだ仲だった。士官学校卒業後は同じ部隊に一年間所属し、厳しい訓練を耐え抜いた戦友でもあった。

そのような関係であれば、ヒーリーとメアリの仲も良いものである。うと想像がつくであろうが、実際には逆で犬猿の仲とも呼べる間柄だった。

もともと、いやいや軍務についていたヒーリーは万事につけサボりがちで、その度にメアリに体罰を受けていた。その凄惨さは食事抜きからはじまり、吊るし上げまで、ヒーリーは時に悪夢にうなされ

ることもあったと言う。

しかし、戦術家、参謀としての手腕は一流で、祖父であるフランシス・ピットが軍団長をつとめる第一軍団に所属し、幾多の策を献じてきた名参謀であった。その能力はヒーリーも認めるものだったが、過去のトラウマがあるため、ヒーリーは彼女の存在を避け続けた。

「久しぶりだね、メアリ。悪いけど、参謀長はもう決めてしまったんだよ」

冷や汗をかきながらヒーリーは言った。声は少しうわずっていたかもしれない。苦しい嘘だった。ヒーリーは心の底からフランシスを恨んだ。

「そうなの？ ヒーリー？」

眼鏡のレンズをきらめかせ、メアリはヒーリーを見た。蛇ににらまれた蛙とはこのことを言うのだろう。ヒーリーはもはや「あ……」「う……」としか言えなくなっていた。

「参謀長ですか？ 自分はそのようなことをまだ聞いてはおりませんが……」

場の空気を読んでか読まずか、ソファに腰掛けたアレックスはヒーリーに言った。ヒーリーは、アレックスの方を振り向くと「黙ってくれ！」のジェスチャーを送った。

「へえ、そうなの。ヒーリー、この私に嘘を……」

静かな怒りの炎をゆらめかせてメアリはヒーリーを見上げた。

「いや、これは、その……」

数秒後、ヒーリーの叫び声が部屋中にこだました。

第二章 戦乱への序曲 第十八話

「相変わらずね。メアリ姉」

メアリによつて叩きのめされ、床に放置されたヒーリーを見ながら、ポーラはメアリにお茶を出した。

「男はあれくらいしなきゃダメなのよ、ポーラ。いつまでたつてもだらけてばかりなんだから。私がいる限りは、ヒーリーをサボらせるような真似はしないわ」

アレックスはヒーリーを見た。これが王子の姿だろうか。給仕や部下にたたきのめされる王族など聞いたことがない。これもヒーリーのなせるわざなのか。アレックスは奇妙な気持ちにとらわれていた。

「まあ、これで、参謀長と副軍団長がそろつたわけだ。あとは各大隊の指揮官と兵を選抜するのみだな」

ヒーリーが構想した軍団は機動力と遠距離攻撃能力に長けた編成だった。一個龍騎兵大隊、一個攻城兵大隊、一個騎兵大隊、二個弓兵大隊、二個機動歩兵大隊、一個重装歩兵大隊、司令部直衛大隊。これはフォレスタル常設軍団はじまって以来の空陸混成軍団であった。

この編成構想を一目見たメアリはすぐに了承した。

各隊長と人員の人选はヒーリーに一任されていることもあり、メアリとの共同作業で進められた。その多くは地方都市の守備隊から選ばれたが、地方都市の守備上、多くの人員を持つてくることから出せず、大半が新兵、もしくは予備役兵で構成することになった。

「文字通り寄せ集めの軍団……だな」

軍団構成の素案を見たヒーリーは苦笑した。

「しかし、一年後には正規四軍団を凌ぐ精兵にして見せます。それまでは絶対にサボらせませんので覚悟しておいてくださいね」

メアリは眼鏡を上げた。その動きだけでヒーリーは恐れおののいてしまった。やれやれ、ラグのもとでしばらく茶飲み話もできなくなるな。ヒーリーは大切な時間がしばらくなくなるのを残念に思った。

第二章 戦乱への序曲 第十九話

星王暦二一八二年七月三日、フォレストアル第五軍団、のちに”栄光の第五軍団”と呼ばれる軍団の最初の一日はこうして終わった。

星王暦二一八二年九月一日、この日は王都シンベリンにあるフォレストアル王城にて第五軍団の正式な発足式が行なわれることになっていた。各地の軍、守備隊から集められた兵士や幹部らが一堂に会する日であり、式典のためにフォレストアル四軍団長とメルキドの特使が参加する予定だった。

午前六時三十分、寝起きの悪いヒーリーはベッドから急に飛び起きた。隣に十八歳くらいの褐色の肌をした美少女が眠っていたのである。

「な……な……な、ああああああ？」

ヒーリーは声にならない叫び声をあげた。少女はヒーリーの大声で目を覚ましたようで、眠たそうに目をこすって背伸びをした。十八歳という年齢には不釣り合いの大きな胸が下着越しに揺れた。少女はヒーリーの姿を見つけると、ヒーリーに抱きついた。

「お久しゅうございます！ ヒーリー様！」

「い、イスラ？ いつの間ここに？」

「昨日の夜ですわ！ ヒーリー様に一刻でも早くお会いしたくて、お部屋に入らせていただきましたの！」

ベッドに潜り込んだことを悪びれもせず、イスラはヒーリーに抱きついた。ヒーリーはイスラを引きはがそうとしたが、思ったよりもイスラの力は強く、引きはがすことが出来なかった。

「イスラ！……いつの間にこんな力を？」

「ヒーリー様の妻になるために鍛えてきたのですわ！」

「つ、妻だって？」

ヒーリーはうわずった声を上げた。そんな話なんて聞いたことがない。だいいち、自分にそのつもりはない。それにポーラが何て言うか。

「ちょっと、ヒーリー！ どうしたの、さっきの声？ 開けるわよ！」

ドアの向こうでポーラの声がした。年頃の男女が下着姿で抱き合っているのだ。誰であれ、あらぬ誤解をするのは目に見えていた。

「ま、待て！ ポーラ！ 開けるな！……うわっ？」

ポーラに開けさせないように言ったそのとき、ヒーリーの体勢が変わった。イスラは馬乗りになると、ヒーリーに顔を近づけた。

「ヒーリー様。朝のキスを……」

「もう！ ヒーリー！ 開けるわよ！」

イスラとヒーリーの唇の距離がわずか数センチになったとき、ヒー

リーの部屋のドアが盛大な音をたてて開いた。

第二章 戦乱への序曲 第二十話

「ヒーリー……」

ポーラが見たものはうら若き美女とヒーリーが熱い口づけを交わす寸前の光景だった。ポーラは怒りで脳内の血液が沸騰するかの感覚にとらわれていたが、これ以上ないくらいの平静さを装って言った。

「失礼いたしました。ご主人様。どうぞ、ごゆっくり……」

ポーラはお辞儀をすると、さっときびすを返してドアを閉めた。

「ポーラ！ 待てよ！」

ヒーリーはイスラをはね除けると、ポーラを追った。廊下に出ると見慣れたポーラのショートカットの後ろ姿があった。

「なあ、ポーラ……」

「なんでございましょうか？ ご主人様」

「その……怒ってるだろ？」

「何故でございますか？ ご主人様。私達メイドはご主人様に心安らかな毎日をお過ごしいただくのがつとめでございますので、ご主人様がお美しいご婦人とベッドをとみにされているのをじゃましないのもまた、メイドのつとめにございます」

ポーラは次第に早足になりながら、白々しい口上をまくしたてた。

ヒーリーはポーラに追いつこうと、歩く早さを早めて言った。

「やっぱり怒ってるだろう？　べつにイスラとはなんでもないんだってー。」

ポーラはきつと振り向くと、仁王立ちしてヒーリーに言った。

「は！？　アンタ勘違いもほどほどにしなさいよね！　なんでアンタにわたしが怒らなきゃならないわけ！？」

「だって、イスラと俺の姿を見るなり飛び出したし、それにほら、怒ってるじゃないか」

「怒ってないって言うてるでしょ！」

「まったく、朝からケンカとはおだやかじゃないねえ……」

ヒーリー達の後ろからマクベスの穏やかな声が聞こえた。秘書と文官をしたがえたマクベスは二、三指示を出すと、彼ら二人を下がらせた。

第二章 戦乱への序曲 第二十一話

「ヒーリー。君は今回の主役だろう。いつまでも下着姿でいては皆の笑い者になってしまうよ。ポーラ。ヒーリーの着替えを手伝ってくれないか」

「しかし、マクベス様」

「お願いだ。ポーラ」

反論しようとするポーラをマクベスは目線一つで黙らせた。

「兄上。部屋にはイスラが……」

ヒーリーの言葉を聞いたマクベスは小さくため息をついた。

「イスラ公女か……。わかった、私も部屋に行くでしょう。少し待っててくれ。それまでに、ポーラと仲直りするんだよ」

廊下にはメイド服のポーラと下着姿のヒーリーが残された。城の中とは言え、あまりにも変な二人組だった。二人は壁を背にして互いを見ることなく、ただ、窓外の景色を眺めていた。

「ポーラ。その、ごめん」

ヒーリーは自分に非は全くないにも関わらず、小声でポーラに謝った。

「なんでヒーリーが謝るのよ。私が勝手に怒ったんだから、ヒーリ

「は悪くないわよ」

ポーラは部屋の中にイスラがいたことをまだ根に持っているようで、仏頂面を隠さなかった。

「でも、ポーラはまだ怒ってるだろ」

ヒーリーの頼りない様子に、ポーラは腕を組んで大きなため息をついた。

「私が怒ってるのは、ヒーリーの頼りなさよ。もつとしゃんとしなさいよ。軍団長でしょう?」

「ああ、ごめん。ポーラ」

「わかればいいのよ」

二人が話していると、マクベスが一人の若い女性を連れてやってきた。メルキド人特有の褐色の肌をしているが、きちんと身なりを整えた才女の印象を受ける美女だった。マクベスら四人はヒーリーの部屋の前にやってきた。マクベスはドアをノックし、扉を開けると、すぐに少女が飛び出した。

第二章 戦乱への序曲 第二十二話

「ヒーリー様！ ……あれ？」

マクベスは真つすぐ向かってきた彼女の肩を叩くと、その場に立たせて言った。

「おいたが過ぎますよ。イスラ・デ・ピノス公女」

メルキド公国第五公女イスラ・デ・ピノスは飛び込んだ相手がヒーリーでなかったことに腹を立てたようで、そっぽを向いた。

「妻が夫の部屋に入るのが、どうしておいたになりますの？ マクベス閣下」

「そのお話は後日……テイラー殿、お願いします」

マクベスがむつとするイスラの言葉を流し、傍らにいた褐色の美女を呼んだ。

「イスラ様。これ以上、フォレストルの方にご迷惑をかけてはなりません」

「だって、マミー……」

「だめです。わがままをおっしゃるなら、怒りますよ」

イスラ付きの侍女、マミー・テイラーは腰に手を当て、公女をひとにらみした。

「わかりましたわ。自分の部屋に戻ります」

イスラは納得しかねると言った表情をして、しぶしぶヒーリーの部屋を後にした。ヒーリーはずっと引っかかっていたことをマクベスに聞いた。

「兄上、俺の結婚話があるのですか？」

「イスラ公女から聞いたんだね。違うよ。十年前には確かにあった話だけれど、兄上が結婚されたことでフォレストルとメルキドの係もがより深まったからね。ヒーリーの結婚話は立ち消えになったんだ。そのことはメルキド側も了解してる。ただ一人を除いてはね……」

「イスラか……」

ヒーリーが腕を組んだ。

「彼女はどうかやら君のことが好きみたいだからね。政略結婚とはいえ、彼女にとっては嬉しいことだったのだろう」

「そんな！俺の気持ちはどうなるんです」

「だから断ったんだよ。ヒーリー。でも、君も王族のはしくれだ。そろそろ縁談の話がふってくるようになる。早く身を固めるべきだと思っけどね」

マクベスはポーラを見やった。ポーラはマクベスの言わんとしていることに気づき、少し頬を赤らめた。

「ああ、いけない。ヒーリー。そろそろ支度を始めないと、間に合わなくなってしまうよ。ポーラ。手伝ってやってくれ」

「はい」

マクベスはあとをポーラに任せると、廊下に消えていった。

第二章 戦乱への序曲 第二十三話

「けれど、イスラは妹のようなものなんだよ」

礼装に着替えながら、ヒーリーは言った。

「本人がそう思っているとしても、実際は違うものよ……はい」

ポーラは次に着る服を渡した。

「ヒーリーは結婚する気はないの？ あ、動かないで」

ポーラはヒーリーの上着に勲章を着け始めた。フォレストル最高の戦術家であるヒーリーは立てた武勲も大小数多く、勲章もまた多かった。ポーラは注意深く、丁寧に勲章を付けていった。

「好きな人はいないわけじゃないけど……まだ、分からないな」

「そう……」

ポーラはそれから黙って勲章をつけていった。

周囲にはポーラとヒーリーは相思相愛に見えるのだが、二人の考えは違っていた。ポーラはポーラでヒーリーのことを好きなのだが、城の給仕と王子、身分があまりにもちがうとあきらめていたし、一方、ヒーリーは身分という問題には無頓着であったが、こと恋愛、結婚と言う話にはまるで免疫がなく、ポーラに対して素直になりきれずにいた。兄二人はポーラとヒーリーが結婚しようとするれば、諸手を上げて賛成するつもりであった。

「軍団長、そろそろお時間です。広場までお願いします」

参謀長のメアリがドア越しに式典の時刻を告げた。

「ああ、今行くよ」

式典用の第一種軍事礼装と呼ばれる軍服に身を包んだヒーリーはメアリの案内のもと広場へと向かった。

「何とかまとまったな。メアリののおかげだよ。ありがとう」

ヒーリーはメアりに礼を言った。第五軍団編成は想像以上に難航した。地方守備隊の反対にあり、当初の人員の三分の二も集めることができなかった。そこでメアリらは地方軍、水軍司令部と直談判し、一ヶ月の交渉のちに人員の移動を了承させることに成功した。

「いえ、参謀長として当然の仕事をしたまですから」

メアリは人差し指で眼鏡を上げた。庭園にさしかかったヒーリーはさみしそうに笑った。

「しばらくはあのベンチで昼寝出来そうにないな」

「ええ。私の目の黒いうちは」

「たまにはいいじゃないか。参謀長。平時は軍団長だって暇なんだから」

「だめです」

ぴしゃりと否定した美貌の参謀長はふと庭園を見た。なんだかんだ
言ってヒーリーはサボってベンチに昼寝に行くだろう。たまにだけ
なら許してやるか。ヒーリーの方を見ずにメアリーは優しい微笑みを
浮かべた。

第二章 戦乱への序曲 第二十四話

「よお！ ヒーリー！ 久しぶりだな」

背後からひと際大きな声がとどろき、大柄な男がのしのと足音を響かせてやってきた。ウィリアム・バーンズ。ヒーリーの悪友にして、第三軍団長をつとめる、フォレストルきつての剛将だった。

「半年ぶりか。ウィリアム。クレシダの方はどうだった？」

ウィリアムの生家バーンズ家は代々フォレストル南西部のクレシダ地方を治める領主であり、一個軍団長をつとめてきた。現在の第三軍団もすべてクレシダ地方出身者で構成されており、フォレストルの正規軍でありながら、バーンズ家の私兵と言った側面が強かった。

「いいぞ。クレシダは。なんたって風がいい。お前も遊びに来いよ。ヒーリー」

ウィリアムとヒーリーが世間話をしていると、一陣の風とともにエメラルド色をした影がウィリアムの背後に降り立ち、ウィリアムの頭を噛んだ。つーつと一筋の血がウィリアムの頭から流れた。

「なんじゃこりゃあ？ ひえっ！ り、龍？」

ウィリアムはうわずった声をあげた。

「あはは。ヴェルもウィリアムに会えて嬉しいみたいだぞ」

ヴェルはウィリアムから口を話すと、短く鳴いた。ウィリアムは荒

息がヒーリーにかかるくらいに近づくと、鬼気迫る形相で言った。

「お前、俺がヴェルにどんな目に遭わされ続けているか、知らない訳じゃないだろう？」

「まあね」

ヒーリーは苦笑しながらほおをかいた。ヴェルがヒーリーのもとに来て以来、ヴェルはたまにやってくるウィリアムを見つけると頭を噛んだり、火を吹いたりしていた。だが、ヴェルの行為自体に悪意はなく、ヴェルにとってウィリアムは「からかいがいのある相手」とみなされているようだった。もっとも、当のウィリアムのトラウマは絶大で、翼竜は見るのも嫌と言う、大の翼竜嫌いになってしまっている。大隊長以上の上級指揮官クラスで唯一、翼竜が乗れない人間になってしまった。

ウィリアムはうれしそうに近づくと、ヴェルを避けながら、庭園を逃げるように去っていった。

第二章 戦乱への序曲 第二十五話

「相変わらずですね。お兄様」

ヒーリーが後ろを振り向くと、そこには鎧に身を包んだ女性が立っていた。マーガレット・イル・フォレストル。ヒーリーの実の妹であり、フォレストル最速と名高い第四軍団をまとめる名将だった。

「第五軍団長就任おめでとございます。これでお兄様も昼寝から解放されますわね」

「羽衣のマーガレットに言われたらかたなしだな。まったく、しばらくはサボれそうにないよ。参謀長がうるさそうだからね」

ヒーリーの背後でメアリが眼鏡を光らせた。勝ち気な妹は不肖の兄に向かって言った。

「メアリが参謀長なら万事安心ですわ。出来の悪い兄をもつと、妹は常に心配ですの。では、失礼します」

マーガレットはマントを翻し、廊下を歩いていった。

「ひどい言われ様だな。俺って」

両手をあげて、ヒーリーはメアリの方を振り向いた。

「図星にしても、ひどい言われ様よ。ヒーリー。あなた悔しくはないの？」

メアリは同期のヒーリーに遠慮ない質問を浴びせた。

「そんな感情、持ち合わせてはいないよ。俺の頭の中にあるのは、どうやったたら戦わずに済むか。戦ったとき、どうやったたら犠牲を少なくするか。それだけだよ。それに比べたら、俺が悔しいかどうかなんて、小さな問題さ」

ヒーリーの言葉にメアリは少し面食らった。

「あなたって……意外に軍団長の資格あるのね。まずはそこから調教しようかと思ってたけど、見直したわ」

「参謀長にせっかんされる軍団長なんて、シャレにならないからね。そろそろ急ごう。副軍団長もやきもきしているだろう」

ヒーリーらは広場にたどり着いた。広場には新設された第五軍団の人員、約1万名が整列し、その両脇には第一軍団長フランシス・ピットをはじめとするフォレストル四軍団長、近衛旅団長デビッド・ウオズマリーら軍司令官とメルキド公国特使イスラ・デ・ピノス公女ら外交特使らが舞台を見守っていた。

国王のジェイムズがヒーリーを呼ぶと、ヒーリーはのっそりと壇上に上がって言った。

「第五軍団長のヒーリー・エル・フォレストルだ。うまくは言えないが、俺たちは生まれたばかりの軍団だ。今は弱いかもしれない。だが、絶対に強くなる。向かうところ敵なしの軍団になるう！」

司令部直衛大隊長になったモルガンが立派なカイゼル髭をゆらして兵を鼓舞した。広場は大歓声に包まれたが、ヒーリー本人は恥ずか

しさのあまり苦笑した。

我ながら変な演説だったが、メアリやアレックス、そしてモルガンが兵士達をうまく導いてくれることだろう。問題はワイバニアの動向だ。実戦力がほぼ拮抗した今、必ずどちらかに大攻勢を仕掛けてくるだろう。ヒーリーはそう遠くない未来に待ち受けている大きな戦争の予感を感じずにはいられなかった。

第二章 戦乱への序曲 第二十六話

同じ日の夜、ワイバニア帝国帝都ベリリヒンゲンにある皇太子居宮”臨星宮”で皇太子ジギスムントは葡萄酒を傾けていた。夜もふけ、ローブに身を包んだジギスムントは豪華な椅子に腰掛け、窓から見える月を眺めていた。その月の色はグラスの中の葡萄酒さながら赤くきらめき、これから先にまちつける運命を暗示しているかのようだった。

「フォレストル一個軍団が新設。そして軍団長は我々に土をつけたあの男か……面白い」

グラスを傾け、ジギスムントは笑った。その笑みは残忍極まり、目は野心に満ちあふれていた。

「血の匂いがしそうね……ジギスムント」

彼のベッドには一糸まとわぬ美女が寝そべっていた。

シモーヌ・ド・ビフレスト。ワイバニア帝国右元帥だった。シモーヌはベッドから起き上がると裸のまま、ジギスムントにからみつくように抱きついた。

「不思議な女だ、お前は。何故俺に味方する」

「わたしの愉しみは戦乱、そして野心。あなたはどちらもわたしに与えてくれる。ただそれだけよ」

シモーヌは身体をジギスムントに密着させ、耳元でささやいた。

「見ている。俺がこの世界を手に入れてやる。そのためには何であろうと、例えば父であろうと邪魔な者は消し去ってくれる」

シモーヌを抱きながら、ジギスムントは笑って言った。シモーヌはジギスムントに顔を近づけると、むさぼるように唇を吸った。ワイバニアでどす黒い策謀が渦巻き始めていた。

第二章 戦乱への序曲 第二十七話

明けて星王暦二一八三年二月十四日、フォレストル王国王都シンベリン郊外にある演習場で、ヒーリー・エル・フォレストル率いるフォレストル第五軍団の演習が行なわれていた。

軍団の陣形変換は本営の信号旗で決まる。そして迅速な兵力移動ができるかどうかも勝敗を分ける重要な要素だった。

「第三機動歩兵大隊！ 隊列が乱れているぞ！ もう一度やり直しだ！」

副軍団長のアレックス・スチュアートの厳しい声が演習場に響いた。発足から四ヶ月あまり、第五軍団は未だ足並みがそろわず、連日、昼夜を問わずの猛訓練がつづいていた。

「こいつは、ひどいな……」

軍団長のヒーリーは配下の大隊の手際にため息をついた。各大隊の連携は隙だらけで、すぐにでも見破られてしまう動きをしていた。先のオセロー平原のとき、寄せ集めの一個旅団が勝った時と訳が違う。正規軍団である以上は、一糸乱れぬ兵力の移動、陣形転換が要求された。

「命令が行き届くまでのタイムラグも大きいわね。訓練の余地が大いにあります」

参謀長のメアリも第五軍団の体たらくにため息をついた。

「新設四ヶ月目でこの動きなら、及第点かも知れないが、敵の大侵攻が予想できる今、そんなことでは困る」

（これは訓練プログラムと基本戦術を練り直さなければなるまい…。また、サボれなくなるな）

ヒーリーは頭を抱えた。ヒーリーの目の前では再度陣形転換の訓練を行なう第五軍団の姿があった。

第二章 戦乱への序曲 第二十八話

ワイバニア帝都ベリリヒンゲンその中心部にある皇帝の居宮”白晶宮”に隣接する皇太子居宮臨星宮にある皇太子執務室に三人の将帥の姿があった。一人は皇太子ジギスムント。もう一人は右元帥シモーン。そして第一軍団長ハイネ・フォン・クライネヴァルトであった。

「私をお呼びとはいったいいかなるご用向きか」

ワイバニアの至玉と讃えられる若き軍団長は抑揚を押さえた声で言った。本来ならば、ハイネは臨星宮に赴きたくはなかった。ハイネ自身は、この皇太子と右元帥のことを嫌っており、臨星宮に入り、立っていることすら、この上ない屈辱感を感じていた。

皇太子ジギスムントはハイネに背を向け、執務室の大きな窓から空を見ながら言った。

「クライネヴァルト軍団長、貴公の龍騎兵隊は我がワイバニアでも最高の練度と精強さを誇ると聞くが？」

「はい」

いきなり何を尋ねるのか。不快感を表に出さぬよう、細心の注意を払いながら、ハイネは返事をした。

「貴公の龍騎兵隊、一時私に貸して欲しい」

外を眺めながら、ジギスムントは言った。

「失礼ながら、皇太子殿下の真意が小官にははかりかねます」

注意を払いつつも、語気の端々に強い怒気が表れた。

「クライネヴァルト軍団長、殿下はフォレストアルへの奇襲を考えていらっしやるの。少数精鋭で、シンベリンの王城に突入して、フォレストアルの中枢を叩くおつもりなのよ」

シモーヌがジギスムントの策をハイネに明かした。売女め。ハイネは内心、シモーヌをのしった。

「つまり、小官に暗殺の片棒をかつげ……と？」

ジギスムントは振り返った。

「そういうことになる」

「お断りさせていただく」

強い口調でハイネは言った。

「誇り高きワイバニア第一軍団の勇名を汚す行為。断じて承服する訳には参らぬ」

「私の命令でもか……」

さつきとは違い、ジギスムントは冷酷な表情でハイネを睨みつけた。ハイネはジギスムントを気にせず言い放った。

第二章 戦乱への序曲 第二十八話（後書き）

現在、32,000アクセスを突破しました。

お読みいただきありがとうございます！

毎日更新を目標に執筆していきたいので、よろしくお願いします。

第二章 戦乱への序曲 第二十九話

「勘違い召されるな。皇太子、および両元帥には我々十二軍団の指揮権があるが、それは勅命により我々に出撃命令がくだされたときのみ。軍団の出撃命令権を持つのは、皇帝陛下のみです。このことをお忘れになつては困ります。では、軍務がありますれば、失礼……」

第一軍団長のみに着用を許された緋色のマントを優雅に翻し、ハイネは部屋を辞した。

ジギスムントは机を激しく叩いた。

「予想通りの対応ね……」

シモーヌは腕を組んだ。

「どうする？ 奴の龍騎兵がいなくては、フォレストルへの侵入は至難の業だぞ」

ジギスムントはハイネが思い通りにならなかったことにいらだつたが、シモーヌはそれを大して気にしないそぶりであった。

「私の配下の者を使うわ。王城への侵入はできるはず。……影よ」

「これに……」

シモーヌの声に伝えて、どこからともなく黒装束の男が姿を現した。

「話は聞いていたわね」

「はい……」

「フォレストル王族の全ての者の首を私の許に持ってらっしゃい」

「承知……」

影と呼ばれた黒装束の男はそう言うと、また闇に消えた。

「暗殺専門に鍛えた隠密部隊よ。彼らなら苦もなく王族達の首を刈り取るわ」

シモーヌはジギスムントに言った。こんな部隊があることをジギスムントは知らない。皇帝も、この女もまだ手の内を全てさらしている訳ではないのか。自分が置いてきぼりにされたような沸き立ついらだちを覚えつつ、ジギスムントはシモーヌに言った。

「怖い女だ。お前は……」

「女はいつでも怖いものよ。ジギスムント」

シモーヌは妖艶な笑みを浮かべてジギスムントに近づくと、細く長い指をジギスムントの顎に触れた。

「だから、あなたも寝首をかかれなくようにすることね」

ジギスムントは笑った。それが何によるものかはジギスムント自身にも分からなかった。

ヒーリーら、フォレストル王族に危機が迫っていた。

第二章 戦乱への序曲 第三十話

星王暦二一八三年三月十五日深夜、フォレスタル王国王都シンベリ
ン中心部にあるフォレスタル王城は何事もなく、夜の眠りについて
いた。影と呼ばれるワイバニア帝国暗殺部隊は夜の闇にまぎれ、王
城への侵入に成功した。狙うは王城深部にいる王族の首。暗殺部隊
は音もなく衛兵を殺すと、息を殺して廊下を疾走した。三〇人の暗
殺部隊は五つのグループに分かれると、それぞれの標的の場所へ向
かった。

そのうちの一つのグループはヒーリーの部屋を見つけると、静かに
扉を開けた。暗闇の部屋の中、六人の暗殺者はヒーリーのベッドを
見つけると、鈍く光るナイフを抜いた。標的にナイフを突き刺そう
としたそのとき、甲高い大声が部屋に響いた。

「アンタ達！ 何してるの？」

ポーラが部屋の明かりをつけ、侵入者を一喝した。暗殺者はポーラ
の命を奪うべく、彼女に襲いかかった。

「！」

ポーラが目を閉じた瞬間、部屋に六発の銃声がとどろいた。ポーラ
が恐る恐る目を開けると、ポーラに襲いかかった六人の暗殺者は全
滅していた。

「この布団、気に入ってたんだけどなあ……」

穴だらけになった布団から、のっそりとヒーリーが身体を出した。

手には銀に輝く魔術銃が握られていた。

「ポーラ、怪我は無いか？」

「わ、私は大丈夫。それより、この人達は？」

ポーラは床に転がっている暗殺者を見た。

「ああ……ワイバニアの刺客ってところじゃないかな？」

「大変！ それなら、陛下やエリク様、マクベス様が危ないわ！」

「その心配はないんじゃないかな」

ポーラの心配をよそに、ヒーリーは少し頭をかいた。

第二章 戦乱への序曲 第三十一話

「ぐっ……！」

暗殺者は壁に叩き付けられた。肩にはナイフが突き刺さり、動くことができなかった。暗殺者はまわりを見回したが、ことごとくが胸にナイフを突き刺されたり、首を裂かれ絶命していた。

「さて、あなたで最後だ。だれの差し金で私達の暗殺を図ったか教えてもらおうか」

マクベスは手にナイフを携えて言った。その表情は普段の穏やかで優しいマクベスからは想像もつかないほど冷酷なもので、暗殺者をひるませるに十分な迫力を持っていた。命運が尽きたと悟った暗殺者は、何も告げることなく、口に含んだ毒を飲み、みずから命を絶った。

同じ頃、王太子エリクを襲った暗殺者も全て退治されていた。エリクとアルカディアはそれぞれ剣と槍を持って応戦し、それぞれ一閃のもとに暗殺者を切り伏せた。

「怪我はないか？ アルカディア」

エリクは妻を気遣ったが、無用な心配だった。

「ご心配なく、私とて武門の国に生まれ育った身、この程度の賊のあしらい方は心得ています」

アルカディアは流れるように優美な動きで槍を一回転させると、愛

する夫に言った。

王族三人の暗殺に失敗した影達は国王の寝所にも侵入を果たしたが、ここでも暗殺者達は劣勢を強いられていた。国王のジェイムズは愛用の大剣をふるって応戦した。三人の暗殺者を一刀の下に斬り捨てたジェイムズは大剣を正眼に構えた。

標的の意外な抵抗に戸惑った暗殺者達はジェイムズから距離をとると、投擲用のナイフを構えた。ジェイムズに向かってナイフが放たれる寸前、国王の部屋の扉が勢いよく開き、銃弾とナイフが暗殺者をなぎ倒した。

「ご無事ですか？ 父上」

暗殺者を倒したマクベスとヒーリーの間から、エリクが現れた。三人はほぼ同時にジェイムズの部屋に着くと、タイミングを合わせて暗殺者を攻撃したのだった。

「まあ、なんとかかな。それよりもっと早く来んか。危つい目にあっただぞ」

ジェイムズは三人の息子達に悪態をついた。

「何を言ってるんですか。我々が束になってもかなわないくせに」
ジェイムズの強さは折り紙付きだった。達人と名高いピットのもとで腕を磨き、その強さはピットと並ぶとほどの達人と言われていた。ジェイムズはかがんで死体を調べ始めた。

「こいつらは一体何者だ？」

「それは彼に聞いた方がいいかもしれませんよ」

一同が振り返ると、そこには猿ぐつわをさせた暗殺者を引き連れたラグとメルがいた。

第二章 戦乱への序曲 第三十二話

「私のもとにも彼らは来たもので……五人は始末しましたが、一人はこっして……」

マクベスは暗殺者の耳に顔を近づけた。

「誰の差し金で我々を襲った？」

暗殺者は目をそらした。ラグはマクベスに目で合図すると、マクベスを下からせた。

「シモーヌか？」

暗殺者は一瞬だけ目を見開いた。それは注意しなければ分からないほどだったが、ラグはその一瞬の動揺を見逃さなかった。ラグは険しい表情になると、暗殺者を殴りつけた。

「よせ！ ラグ！」

ヒーリーはラグを羽交い締めにしてその動きを止めた。

「放してくれ！ ヒーリー！」

普段の穏やかさがどこにいったのか、ラグはヒーリーを振りほどこうとして暴れた。

「お師匠様！」

メルもラグの足下にしがみつくと師匠を懸命になだめた。

「放せ！　メル！」

「すまないね。ラグ」

マクベスはラグの首筋に手刀を打ち込むとラグを気絶させた。

「シモーヌとはいったい……？　まさか、ワイバニアの右元帥？」

エリクがラグの台詞を反芻した。

「シモーヌはお師匠様の仇なんです」

メルが気を失ったラグを見て、エリクに言った。

「仇だって？　そんな話、ラグからは何も聞いたことがなかったな

……」

ヒーリーは腕を組んだ。

「お師匠様はこのことは誰にも話すことはありませんでしたから」

メルは五四〇年前にラグの身に起こった出来事を話し始めた。

シモーヌとラグは同じ創造主によって作り出された不老不死の人工生命体だった。ラグは彼のもとで錬金術と魔術を学び、シモーヌは彼のもとで政治、戦略を学んだと言う。

「お師匠様を創られた方は、とてつもなくバカで、とてつもなく賢

く、とてつもなく優しく、そしてとてつもなくいい奴だったそうです」

メルはラグの創造主について語った。彼ら三人はともに平和な時を過ごし、ともに笑い、ともに怒り、ともに泣いたと言う。しかし、いつしか、シモーヌの中に野心と欲望が生まれ始めた。彼女は牙を隠し、時を待った。そして、五四〇年前の運命の日、その出来事は起きた。

雷鳴とどろく夜、創造主の研究室でラグは見た。創造主の胸にシモーヌが剣を突き刺した姿を。その時のシモーヌは悲しげな笑顔を浮かべていた。雷の光で映し出されたシモーヌの顔はラグを驚愕させた。

ラグがシモーヌの名を呼んだ次の瞬間、稲妻の閃光がラグを襲った。一時視界を奪われたラグが次にシモーヌを見たときには、彼女はすでに消えていた。研究室には創造主の亡骸だけが残されていた。

「……だから、僕は彼女を許せない。彼女は僕の師を、そして最初の親友を殺した。そして、彼女がいる限り、戦乱の種は消えない。この世で最も危険な女だ」

気絶していたラグが目を覚ました。ラグは怒りを押し殺した表情で暗殺者を見た。いや、その背後にある彼の仇を見据えていたのかもしれない。

マクベスは騒ぎを聞き、駆けつけた衛兵に指示を出すと、一同を解散させた。

第二章 戦乱への序曲 第三十三話

「なんと言うことをしでかしたのだ。影を使うとは……シモーヌ。貴様も何をやっているのだ」

ワイバニア帝都ベリリヒンゲンにある皇帝の居宮白晶宮の龍聖の間、皇帝が審議などの数々の執務を行なうために用いられる白晶宮の中でもひととき大きく、ひととき豪華な広間で、ワイバニア皇帝アレクサンダーは静かだが、強い調子で息子とシモーヌに言った。龍聖の間には皇太子ジギスムントとシモーヌ、そして皇帝アレクサンダーだけだった。息子は悪びれた様子もなく、父アレクサンダーに言った。

「父上、私達がこの世界の覇権を握るために何が最善かと考えただけです。フォレスタルの王族を亡き者にすれば、フォレスタル王国は瓦解し、この世界の勢力図は一気に塗り変わりますよ」

得意げにジギスムントは話したが、皇帝アレクサンダーは一喝した。

「馬鹿者が！ それでも帝室の血を引く者か！ 恥を知れ！」

アレクサンダーは暗殺をよしとする人物ではなかった。それは世界最大の領土を誇る帝国を統べるものとして、堂々と大軍を率いて世界を征服しようと考えていた。それだけに暗殺を行なった息子を許すことができなかった。彼を許すことは自分の王者としてのプライドを傷つけることに等しかった。

「お前は、この国を統べる器ではないのかもしれん」

アレクサンダーが玉座に立ったそのとき、ジギスムントの剣がアレクサンダーの胸を貫いた。皇帝は口から大量の血を吐くと、大理石でできた床に跪いた。

「ジギスムント、お前というやつは……」

アレクサンダーは息子に呪詛の言葉を吐いた。

「父上。この世は力が全てです。たとえどんな手をつかっても力を手に入れる。……そろそろ、玉座を私にお譲りください」

ジギスムントは父の胸から剣を引き抜いた。アレクサンダーは自分の血でできた血だまりに崩れ落ち、絶命した。ジギスムントは横に控えるシモーヌに言った。

「シモーヌ。皇帝の死体を始末しておけ。それから皇帝は急な病気でみまかられたのだ。いいな」

シモーヌはうなづき、ジギスムントを見た。彼の唇はふるえ、父を殺したことへの罪悪感が彼を混乱させているようだった。まだまだ器としては小さい。だが、操るには都合がいい男だ。シモーヌは表面向きはジギスムントに従いながら、彼の価値を冷静にはかっていた。

第二章 戦乱への序曲 第三十四話

翌日、皇太子ジギスムントの名において、ワイバニア皇帝アレクサnderの崩御が通達された。ワイバニアの民は内政、外交、軍事に多大な影響を与えた英雄の死を悼んだ。

さらに皇太子ジギスムントは三日間の服喪ののち、直ちにワイバニア皇帝に即位すると宣言した。このスピードは極めて異例なもので、国内外に衝撃を与えた。

「妙だな……」

ワイバニア第三軍団長、ヨハネス・フォン・ハイデルベルグが第七軍団長アンジェラ・フォン・アルレスハイムの官舎で言った。上級貴族出身であるアンジェラの官舎は、アンジェラの出自には不釣り合いなほど質素だった。よく整理され、掃除の行き届いた部屋には女性らしさが幾分感じられたが、それ以外にはまるで生活色もなく、ヨハネスは貴族の部屋であるばかりか、女性の部屋であることにすら、疑問を抱くほどだった。

「何がだ？」

アンジェラはヨハネスの前に紅茶を置いた。

「陛下の死についてだよ。不自然すぎる」

「だが、急病による病死だろう。あながち不自然とも言い切れまい」

ヨハネスの向かいに腰掛けたアンジェラは言った。白いブラウスに

灰色のパンツ。飾り気のない服に身を包んではいたが、その立ち居振る舞いは、十分にアンジェラの美しさを引き出していた。

「それだけじゃない。今回の皇太子の手際の早さは異例だよ。フォレストルの前例はあるが、それほど事態は切迫していない。フォレストルもメルキドも独力でワイバニアに侵攻するだけの力は無い。ゆっくりと皇帝に即位しても問題はないさ」

「だが、まだ推論にすぎない。めったなことを口にしてると、お前の立場が危うくなるぞ」

アンジェラは腕を組んだ。軍団長にも、国民にも、皇帝の死は急病死としか知らされていない。怪しい部分は数多くある。だが、確かな証拠は何一つない。疑念を感じながらも、表立って動くことはできなかった。

「すまないな。このことは忘れてくれ」

ヨハネスはそう言うと、席を立った。アンジェラはヨハネスを玄関まで見送った。ヨハネスは玄関の扉を開ける前にふと立ち止まり、アンジェラの方に振り返った。

「どうした？」

アンジェラはヨハネスに尋ねた。

「仮面。どうして取らないんだ？」

「傷を負った顔を人前にさらしたくないだけだ」

「僕と君しか部屋にいないのかい？」

ヨハネスは眼鏡を上げると、おどけた笑顔を浮かべた。

「当たり前だ。お前とは恋人でも何でもないのだからな。さあ、もう帰れ！ 私は忙しいんだ」

アンジェラは慌てて扉の向こうにヨハネスを追い出した。ヨハネスはばつが悪そうに頭をかいて、路地に消えた。

「仮面をはずす、か……」

扉を背にして、アンジェラは仮面を外した。顔の刀傷にふれ、アンジェラはぺたんこ床に腰を落とした。こんな顔に大きな傷のある女など、誰も愛しはすまい。あのヨハネスでさえも……アンジェラは傷をかばうように顔を押しさえた。

第二章 戦乱への序曲 第三十五話

星王暦二一八三年三月一九日、皇太子ジギスムントの即位の儀と先帝アレクサンダーの大喪の儀が同時に行なわれた。シモーヌによって巧妙に処理された皇帝の遺体は、誰にも見られぬまま、火葬にふされ、真相は闇に葬られた。ジギスムントは父の死に涙を流し、弔辞を読んだ。その弔辞の文章の素晴らしさは過去のどの皇帝のものよりも比類ないものだったという。

三月一九日午後、ジギスムントは、白晶宮龍聖の間で即位の儀を行なった。ワイバニア帝国史上最速にして最年少の皇帝、ジギスムントI世が誕生したのである。

ジギスムントI世は居並ぶ文武百官の前で言い放った。

「余は史上もつとも早く、そしてもつとも若い皇帝となった。余にとって歴史に残る偉業はただ一つ。史上初めてワイバニアがこの世界を統一することだ。そして、余は三年以内にこの偉業を成し遂げるであろう」

一同は皆沈黙した。この野心と虚栄心に満ちた独裁者を自分たちは誕生させてしまったのかもしれない。ワイバニアの中でも理性ある政治家はそう考えていた。だが、ワイバニアという巨大な帝国はその内部に寄生虫を飼いつづけていた。利権に群がる政治家、官僚と言ふ名の寄生虫はワイバニアという巨竜を徐々に蝕んでいった。

「皇帝陛下万歳！」

その中の一人が両手を上げて叫んだ。一人が二人、二人が四人に万

歳を上げる声は龍聖の間全体に広がった。響き渡る万歳の声の中、ヨハネスは何も言わず、ただ、この茶番に目を伏せ続けていた。

即位の儀が終わり、龍聖の間を出たヨハネスはハイネに呼び止められた。

第二章 戦乱への序曲 第三十六話

「貴公は、先ほどじつと目を伏せていたな。何故だ」

「大したことは無いさ。ただ、恥ずかしくてね。君もやらなかっただろう？ あの万歳三唱」

ヨハネスは眼鏡を上げると人懐っこい笑顔を浮かべて言った。

「あのような茶番に付き合うのは私の美学に反する」

君らしいなとヨハネスは笑った。ハイネはヨハネスに近づくと肩越しに言った。

「皇帝と右元帥に関わるな」

ヨハネスは目を見開いた。ヨハネスの眼鏡が怪しくきらめいた。

「どうして、それを？」

小さいが、殺気のコもった声でヨハネスはハイネに尋ねた。

「私の目は節穴ではない。それに皇帝陛下崩御の一件、あの二人がからんでいることも知っている。二人とて馬鹿ではない。これ以上動き回ると、貴公の立場どころか、命すら危うくなるぞ」

ヨハネスはハイネへの警戒心を解いた。ヨハネスは笑顔を浮かべ、ハイネの肩を叩いた。

「わかった。ありがとう、ハイネ。それから……」

ヨハネスはハイネに小さく耳打ちした。ハイネはその言葉に驚き、ヨハネスに顔を向けた。

「貴公……」

ハイネは目を伏せると、長く美しい金髪をなびかせ、廊下に消えていった。

夜も更け始めたころ、白晶宮皇帝の寢所、昨日まで父が眠っていた場所に、新皇帝ジギスムントはいた。

「これが皇帝の寝台か。何とも寝心地の良いものだ」

「権力者の椅子に、権力者のベッド。ご満悦ね。ジギスムント」

「だが、まだ早い。俺たちのまわりを飛び回る虫がいるのでな」

ジギスムントは皇帝のためだけにつくられたベッドに腰掛けた。

「それはヨハネス？ それとも、ハイネ……？」

「それはな……」

皇帝達が密事をめぐらせているなか、ヨハネスは帝都ベリリヒンゲンの酒場にいた。上級貴族である彼には似つかわしくない場所であったが、軍団長の職について以来、彼はこの酒場に通い続けていた。

第二章 戦乱への序曲 第三十七話

「いつもの。お願いしますよ。おかみさん」

カウンターに腰掛け、ヨハネスは店主の女性に注文した。

「あいよ！皇帝陛下即位の当日にウチで飯かい？あまりおだやかじゃないねえ。軍団長だったら、宮殿でもっと美味しい飯と酒にありつけるだろうに」

「おかみさんの味が病み付きになってしまっただね。こっちの方がいいよ」

おかみさんは料理と酒をヨハネスに出すと、さらに隠して小さな封筒を渡した。

「アンタ、相当危ない橋を渡ってるよ。わかってると思うけど、これ以上はアンタの命が危ないよ。金はいららない。だから、死ぬんじゃないよ」

おかみさんはヨハネスの耳元で小さく言うと、さっと身を引いて他の客の注文を取りにいった。ヨハネスは苦笑して、料理と酒を味わった。料理と酒を平らげたヨハネスは席を立った。

「おかみさん。お勘定、ここに置いてくよ」

「あら、いいよ。今日、私のおごりだよ。新しい皇帝陛下になったから、赤字覚悟の出血大サービスさ！」

「せめて、銀貨一枚くらいはもらってくれ。若い頃、世話になったお返しだ」

ヨハネスは銀貨を一枚、おかみさんに投げた。おかみさんは銀貨の裏に書かれた文字を見て驚いた。

「ヨハネス、アンタ……」

「ごちそうさま。おかみさん。今日はとびきりの美女とデートなんだ」

ヨハネスはそう言うと店をあとにした。

大分おかみさんの店で時間を食ってしまったな。アンジェラとの待ち合わせ時間に遅れてしまう。ヨハネスが待ち合わせ場所へ歩を進めていると、ヨハネスは上下左右に怪しい気配を感じた。数は六人、訓練を受けた身のこなし、右元帥の手の者か。ヨハネスは歩くスピードを速めた。

ヨハネスが路地に入ると、黒装束の男達はヨハネスの進路を塞ぐように彼の前後に立った。殺気を揺らめかせた暗殺者は手にナイフを持つと、彼に襲いかかった。

第二章 戦乱への序曲 第三十八話

ヨハネスが襲撃を受けている路地からそう遠くない場所で、アンジエラはヨハネスを待っていた。普段の軍服や私服とは全く異なる白のドレス姿は通りの人々の視線を釘付けにしていた。

「ヨハネスめ。ここまでわたしを待たせるとはどういうつもりだ」

アンジエラは腕を組んで未だ来ぬ相手を待った。たまには、女らしい格好を見せてやろうと思ったのに。アンジエラはヨハネスの反応を楽しみに時を待った。

「かあっ！」

ヨハネスは暗殺者の一人を斬り伏せた。息は荒れ、肩は揺れていた。敵はあと二人、何とか倒せる。ヨハネスは目の前の一人に狙いを定めると突進した。そのとき、ヨハネスの背後から暗殺者が斬り掛かった。ヨハネスはすぐさま剣の持ち手を変え、暗殺者の胸に突き刺したが、ほんのわずかに隙が生じた。ヨハネスの目の前にいた暗殺者は距離を詰めるとヨハネスの腹にナイフを刺した。

「ぐっ………！」

ヨハネスは口から血を吐きながら腰にマウントしてあったハンドナイフを暗殺者の心臓にゆつくりと、そして最後の力を込めて突き立てると、ヨハネスを刺した暗殺者はそのまま地面に崩れ落ちた。

「あとは、………一人！」

ヨハネスは路地の壁に背中を向けると、暗殺者を壁に叩き付けた。

「ぐっ！」

衝撃はヨハネスにも伝わり、口からさらに血が漏れた。

「さあ、言え！ 誰が、僕を……っ！？」

暗殺者は返礼とばかりにナイフをヨハネスの胸に刺した。ヨハネスは剣の柄をひねると、暗殺者にさらなる苦痛を与えた。

「最後のチャンスだ。お前も、……僕も助からない。……言っただ」

二本めのナイフは肺に刺さったのか、ヨハネスの声から空気の漏れる音が聞こえた。暗殺者はヨハネスに黒幕の名を言うこと切れた。

「そうか……」

立つ力さえ失ったヨハネスは、壁を背に地面にくずれおち、座り込んだ。断続的な息と、血を吐きながら、ヨハネスは胸から龍の眼を取り出した。

第二章 戦乱への序曲 第三十九話

「遅い！ もう一時間も立っているというのに、ヨハネスの奴……」

アンジェラはついに怒り心頭に達し、官舎に帰ろうとした。そのとき、往来の男が叫んだ。

「殺しだ！ 向こうの路地で人が倒れてるぞ！」

普段ならば気にも留めない、警察に任せておけば良い。だが、アンジェラは嫌な予感に襲われ、路地へと走った。路地に入り、暗がりの中でアンジェラはよく知る者の変わり果てた姿を見つけた。血だまりの中で、力なく腰を落としたヨハネスのもとにアンジェラは駆け寄った。

「ヨハネス！」

大量の出血で目もかすみ、ショックで震えを起しながらも、ヨハネスはアンジェラの声のする方向に顔を向けて笑った。

「や……あ、済まない。アンジェラ……食事の約束、遅れてしまったね……」

「しゃべるな。今医者……」

アンジェラはすぐに立ち上がるうとしたがヨハネスに止められた。

「もう、助からないよ……。これを……」

ヨハネスは血にまみれた封筒と龍の眼を差し出した。ヨハネスはアンジェラの顔に手を触れると、硬い違和感を感じて、力なく微笑んだ。

「こんな……ときも、仮面……なんだね……」

アンジェラは仮面を外し、ヨハネスを見つめた。

「そうだよ……君はその方が、美しい……」

そう言うと、ヨハネスは静かに目を閉じた。

「ヨハネス？　ヨハネス……？」

アンジェラはヨハネスに問いかけた。しかし、ヨハネスは二度と動くことも、息をすることもなかった。

「馬鹿が……目が見えなかったら、私の顔など分かる訳がないだろう……。ヨハネス……！」

何年ぶりだろう。涙を流したのは。女を捨てた日だったか。いや、もっと昔かもしれない。アンジェラは白のドレスを紅く染めながら大粒の涙を流し続けていた。

第二章 戦乱への序曲 第四十話

血まみれのドレスを引きずって、アンジエラは官舎までの道のりを歩いていた。往來の人々は血まみれで顔に刀傷をさらしたアンジエラを見ては身を引いていた。官舎に戻ったアンジエラは血を洗い流し、龍の眼を再生させた。そこにはヨハネスの最後の姿が記録されていた。

「アンジエラ……。君をこんなことに巻き込んでしまつて、済まない……。僕を襲つた黒幕は右元帥のシモーヌ。刺客から聞いた情報だ。まちがいない。……。奴は、僕にワイバニアの新時代に興味はないかと言つていた。陛下の死も、彼女らが仕組んでいたんだ。封筒には皇帝崩御の日のことが書かれている……。アンジエラ、何か危機が迫つた時はフォレスタルに亡命するんだ……。」

息も絶え絶えに、最後の力を振り絞つてヨハネスは龍の眼に語つた。いい終えたヨハネスは力なく笑うと映像を切つた。ヨハネスが残した血染めの手紙には、皇帝が殺害された確かな証拠が記されていた。軍服に着替え、証拠を見終えたとき、官舎の扉をノックする音が聞こえた。

「ゴッドフリート……。お前か」

第七軍団副軍団長のゴッドフリートがアンジエラのもとを訪ねてきた。

「軍団長。……。仮面はどうされたのですか？」

ゴッドフリートは仮面を取ったアンジェラに驚いた。ゴッドフリートは、ヨハネスの死と現場にアンジェラの仮面が落ちていたことを知り、アンジェラのもとを訪れたことを説明した。

「わたしがヨハネス殺しの犯人として疑われているということか。だが、わたしは違う。犯人は右元帥のシモーヌ・ド・ビフレストだ。それだけではない、皇帝陛下に直接手を下したのは他ならぬ皇太子殿下だ。彼らは手を組み、ワイバニアを乗っ取ったのだ」

アンジェラはゴッドフリートにヨハネス殺しと皇帝崩御の真相を伝えた。

「そうですか。軍団長は全てを知っているんですね……」

ゴッドフリートの態度が変わった。アンジェラはゴッドフリートの態度を不審に思った。

「ゴッドフリート……お前、何を言っている？」

「右元帥閣下がわたしに命じられたのですよ。軍団長が何かかんでいるようならば、消せと。そして、次の軍団長にはわたしがなるようにとね」

真面目な軍人の仮面を脱ぎ捨てて、ゴッドフリートは下卑た笑いを浮かべた。アンジェラは信頼していた部下に裏切られ、悔しそうな表情をした。

「下種め……」

アンジェラはゴッドフリートを睨みつけた。ゴッドフリートは冷酷

な笑みを浮かべて剣を引き抜いた。

「いやいや、それだけわたしが優秀だということですよ。それでは、ハイデルベルグ軍団長によろしく……軍団長」

ゴットフリートが剣を振り下ろす一瞬、アンジェラは愛剣を手に取ると、抜き様にゴットフリートを一閃した。ゴットフリートは苦悶の表情を浮かべ、床に倒れた。

「まだだな。貴様程度の下種に到底軍団長など務まりはしない。あ
の世でヨハネスにあいさつするがいい。……もっとも、ヨハネスに
は会えないだろうがな」

剣を振り、ついた血を払いながら、アンジェラはゴットフリートの死体を見下ろした。

第二章 戦乱への序曲 第四十一話

アンジェラは身支度を整え、官舎を出た。夜のベリリヒンゲンの闇は深く、アンジェラにとって、姿を隠すのに都合が良いと思われたが、それはアンジェラの口を封じようとする側にも都合が良かった。アンジェラは官舎を出てすぐに刺客に襲われた。

上下左右から襲い来る刺客をひとり、また一人とアンジェラは倒していったが、一人では限界がある。アンジェラはたちまち窮地に陥った。

「こつちだよ！」

路地から手が伸び、アンジェラの腕をつかんでさらなる闇に引きずり込んだ。暗殺者達は路地の終わりまで先回りしたが、アンジェラ達の姿はなかった。

そのころ、アンジェラはベリリヒンゲンの地下を流れる水路の中にいた。飲料水を取水するためにベリリヒンゲン地下に張り巡らされたこの水路の中をアンジェラは手を引かれ歩いていった。

「あなたは……？」

「あたしゃ、ただの酒場のおかみだよ。ヨハネスはあたしの酒場の常連でね。あの子に頼まれたんだよ」

そう言うと、酒場の女主人はアンジェラに銀貨を手渡した。アンジェラが銀貨に明かりをかざすと、「アンジェラを頼む」と言う、ヨハネスのメッセージが書かれていた。

「まったく、首をつっこむなと言ったんだがねえ。少し遅すぎたよ。それにしても、いい奴が死んじまったもんだよ。まったく」

地下水路の出口で、おかみさんはアンジェラに旅に必要な用意を手渡した。水路の外は空が白みかけており、太陽の光がさし始めていた。

「ヨハネスには悪いけど、あたしが力になれるのはここまでだ。達者で暮らしたな」

アンジェラは無言で礼をすると、草原の中に消えていった。

第二章 戦乱への序曲 第四十二話

皇帝の居宮、白晶宮の龍聖の間、ジギスメントは右元帥のシモーヌに言った。

「アルレスハイムを取り逃がしたようだな」

「わたしとしたことが、少し甘く見ていたみたいね。でも、国境で網をはれば、いずれつかまる。そのときに始末すれば良いこと。けど、大丈夫？ 軍団長を二人も失って、今後の計画に支障が出るのではなくて？」

「何、軍団長の二人くらい、いくらでも替えが聞かさ。それより、真相を知る者は何人たりとも生かしておくな。いいな」

「ええ」

龍聖の間の奥、玉座の柱の奥で二人の話を聞く影があった。影は二人に気取られぬよう気配を消すと、音もなく闇に消えた。

ベリリヒンゲンを出て二週間後、アンジェラはワイバニア、フォレストル国境の街、ヘルマンにたどり着いた。ここを抜けると、オセロ平原からフォレストル王国に入れる。気を抜けないとは言え、目的の半分を達成したことにアンジェラは少し安堵した。昼に休憩をとり、夜の闇にまぎれて脱出しよう。アンジェラは街の雑踏の中に身を潜めた。

ヨハネスの死から二週間あまり、大々的に創作の網を広げられているかと思われたが、予想に反し、アンジェラの手配はワイバニア全

土に及んでいなかった。隠密裏にアンジェラの口を封じたかったの
だろう。アンジェラは一応、身の安全は保障された。

夜の闇が支配し、人々が寝静まる刻限、アンジェラはヘルマンの街
を疾走した。夜のうちにヘルマンを出るまでが勝負だった。アンジ
エラがヘルマンを出る寸前、アンジェラは刺客に襲われた。建物の
陰から、屋根から飛び出した刺客の数は三〇人。アンジェラ一人で
はとうてい、勝ち目はなかった。剣を手にアンジェラが立ちつくし
たそのとき、空から影が舞い降り、一瞬で三人を斬りたおし着地し
た。

「お前は……」

アンジェラは目の前の美麗な金髪と剣技に目を奪われた。

「ハイネ！」

ハイネは振り返らずに愛騎の名を呼んだ。

「レイヴン！」

紅の鎧を身にまとったエメラルド色の翼竜が急降下して火炎を吐き、
暗殺者の一団を炎の渦にのみこんだ。

暗殺者たちは、空からの来襲にたじろいだが、すぐに態勢を立て直
すと、ハイネとアンジェラに向かって襲いかかった。ハイネは驚く
ことも退くこともせず、剣をさやに納めて、暗殺者に背を向けた。

「終わりだ。下郎ども。冥府で泣いて盟友に詫びるがいい」

ハイネがいい終えたその時、矢の雨が暗殺者に降り注いだ。その狙いは正確に暗殺者を射抜き、ヘルマンの街の建物に傷一つつけることはなかった。第一軍団が得意とし、しかも第一軍団にしかない得ないとされる龍将三十六陣の一つ、”銀の雨”だった。

第二章 戦乱への序曲 第四十三話

ヘルマンの街に、第一軍団一個龍騎兵中隊一〇〇名が音もなく着陸した。ヨハネスを殺し、自分自身を窮地に追い込んだ暗殺者達を一瞬で倒した。アンジェラは第一軍団の強さをまざまざと見せつけられた。格が違う。アンジェラは国外に出られないと悟り、剣を置いた。

「私をどこへなりとも連れて行け。覚悟はできている」

アンジェラの様子を変に思ったのか、ハイネはアンジェラに言った。

「何を勘違いしている。さあ、行け」

「何故だ？ お前は私を連れ戻しにきたのではないのか？」

「ヨハネスの頼みだ。アンジェラに命の危機がせまったときは守ってやってくれとな。いずれ戦場でまみえる日も来るだろう。その時を楽しみにしている。アルレスハイム」

ハイネは冷静な表情を崩さずに言った。アンジェラは笑ってハイネに返した。

「馬鹿を言うな。私はごめんだ。お前に勝てる訳がないからな」

「そうか……。では、さらばだ」

「ああ」

二人の軍団長は互いに背を向けると、それぞれの道を進んでいった。それから四日後、アンジェラ・フォン・アルレスハイムがフォレスト王国の亡命を希望しているとのお知らせがフォレスト王国の軍首脳部に届けられるのである。

「軍団長……」

フォレスト王国の廊下、フォレスト第五軍団参謀長のメアリ・ピットがヒーリーに呼びかけた。

「わかっているよ。大変なことになったな。これは……」

ヒーリーは会議室の扉を開けた。そこにはジエイムズ、エリク、マクベスらフォレスト首脳、フランシス、ハーヴェイ、ウイリアム、マーガレットらフォレストの各軍団長がすでに円卓についていた。

第二章 戦乱への序曲 第四十四話

「遅いぞ。ヒーリー」

ジエイムズは遅れてきた息子を叱った。時間は会議の開始時刻よりも20分も前であり、ヒーリーは父の理不尽さに反論した。

「何を言ってるんですか。皆が早すぎるんですよ。まだ開始時刻まで時間があるというのに」

「それだけ、事態が大事だということじゃ。さっさと席につかんかい。ヒーリー坊」

第一軍団長のフランシス・ピットが言った。40年近く、国の軍事の柱石にいる存在に言われては、ヒーリーも形無しである。ヒーリーは苦笑しながら着席した。

「ワイバニアの第七軍団長が亡命とは……新皇帝が即位し、国内の軍事、内政に今は力をいれなければならないときでは……」

王太子エリクが言った。アレクサンダーの崩御とジギスムントの即位はすでにフォレストルにも伝わっており、新体制への移行による混乱を治めなければならぬと言う点で、エリクの疑問は正しかった。

「恐らく、それが問題なのでしょう。密偵からの報告によれば、皇帝の死には不可解な点が多いということです。彼女はその秘密をつかんでいるがために命を狙われていると思われれます」

マクベスが言った。

「それで……どうする？わしらにとっては、ワイバニア再
侵攻の口実を与えてしまいかも知れんぞ？」

ピットが周囲に目配せしていった。フォレストルは一個軍団を新設
したとはいえ、兵力比は2：1。勝てる相手ではなかった。

「そこまで、深刻な事態にはならないと思いますよ」

ヒーリーが言った。

「それほどのネタを持っているならば、ワイバニアは彼女を秘密裏
に消そうとするでしょう。ですが、彼女は今、フォレストルにいる。
失敗したと見るのが妥当でしょう。それに、皇帝崩御の真相と、優
れた将軍が勞せずに入ります。我々にとっては一石二鳥でしょう」

第二章 戦乱への序曲 第四十五話

「それほど言うのなら、ここはお前に任せる」

ジェイムズが間髪入れずに言った。

「は？」

「そうだな。ここはヒーリーに任せた方が安心だ」

「お兄様。よろしく願いしますわ」

ウィリアム、マーガレットら諸将もすぐに頷いた。しまった。余計なことを口にしてしまった。まさか、自分がこれを言うのを待っていたのではあるまいか。ヒーリーは父の奸計にまたもはめられてしまった。

「しかし、私には、まだ軍団の練成が……」

「頼んだよ。ヒーリー。私もこういうことは苦手なのでね。助かるよ」

反論するヒーリーにマクベスがやんわりととどめを刺した。なかなかかどうして、こんな面倒ごとばかりおしつけられるものだ。ヒーリーは自分の要領の悪さを呪った。

「わかりました。誠心誠意やらさせていただきます」

ヒーリーは不満そうに翡翠色の髪をかいた。

会議が終わり、諸将に続いてヒーリーが勢いよく扉を開けて廊下に出た。会議が終わるのを待っていたメアリはヒーリーに尋ねた。

「会議はどうでしたか？」

「どうもこうも、面倒事を任せられてしまったよ。アンジェラ・フオン・アルレスハイムの一切を俺に委ねるだってさ」

メアリもまた驚いた。

「とにかく、ハムレット砦から、アルレスハイム公を連れてこなければならぬ。手配を頼む。参謀長」

「はい……どちらへ？」

廊下の分かれ道にきて、執務室とは別方向に行こうとするヒーリーに、メアリは尋ねた。

「俺の訓練。大丈夫。サボりはしないよ。君もくれればいいさ。場所は分かるだろう？」

「宮廷魔術師殿のところですね」

「そういうこと」

ヒーリーは心底だるそうに大きな声で言うと、廊下の向こうに歩いていった。

第二章 戦乱への序曲 第四十六話

「そいつは君も難儀な役割を押し付けられたね。ヒーリー」

「そうだろう、ラグ。あのタヌキ親父め、とつとと隠居すればいいのに」

庭園の片隅で銃声がこだました。魔術銃の訓練とメンテナンスのために、ヒーリーは週一回ラグのもとに来ることをメアリに許されている。ヒーリーにとっては大事なリラックスの時間でもあり、銃の特性と戦い方を知るためにも大切な時間だった。

「これはまた、腕を上げたね。ヒーリー。全部ど真ん中を撃ち抜いているじゃないか」

ラグお手製の的に、ヒーリーは全弾真ん中を打ち抜いていた。以前は何発かされることもあったが、ヒーリーの射撃の腕は日増しに上がっていた。

「ラグも魔術銃を持っていたのか」

ヒーリーはふと、ラグの持っている魔術銃に視線を移した。

「このペルセウスはカストルとポルックスの前に作った試作品だ。君に作ったものには及ばないよ」

この日はラグも一緒に魔術銃の練習をしていた。ラグの持つ魔術銃、ペルセウスはヒーリーの持つカストルとポルックスに比べて二まわりほど大きく、連射性能と取り回しの良さの点で劣っていたが、口

径はヒーリーのものよりも大きく、銃身長も長いため命中精度に優れており、暗殺者を撃退出来たのもこの銃によるところが大きかった。

「ヒーリー！ お茶もってきたわよ！ 休憩にしよう！」

ヒーリーが練習を一通り終えたとき、お茶を持ったポーラがメアリとともにやってきた。

「お目付役が来たようだよ。ヒーリー」

「仕方ないさ。こうでもしないと、君のところに来られないからね」

ラグとヒーリーは小声でしゃべりあった。メルとポーラがテーブルと椅子を出し、五人はしばらくの休憩をとった。

第二章 戦乱への序曲 第四十七話

「アルレスハイム公は、明日にでもシンベリンに到着することです」

メアリはヒーリーに首尾を報告した。副軍団長のアレックスがアンジェラの身柄を引き取りに行くとのことだった。ヒーリーはメアリの仕事の早さに改めて感嘆のため息をもらした。

「さすがだね。メアリ」

「参謀長です。軍団長。同期とはいえ、公私の別はつけないと」

メアリは鋭い眼鏡をきらめかせ、ヒーリーに言った。

「本当に厳しいね。メアリ姉。わたしもメアリ姉のことを見習おうかしら」

ポーラが紅茶をすすって言った。ヒーリーは顔を青くした。軍ではメアリ、白ではポーラに厳しくされたら、それこそ心休まる場がなくなる。ヒーリーはポーラに懇願した。

「頼む。ポーラ！ これ以上厳しくしないでくれ！」

「何よ。冗談に決まってるじゃない。バカヒーリー」

しれつと言うと、ポーラは紅茶を飲んだ。

「やれやれ、この国の女性は本当に厳しいな。ヒーリーも少しは強

いところを見せないかね」

高みの見物をしゃれこみ、ヒーリーの姿を見て楽しんでいたラグだったが、そんな彼も、一人の女性にはかなわなかった。

「お師匠様も、もう少ししゃんとして欲しいですね。研究室の片付け、いつになったらしてくれるんですか？」

「いや、あれはね。メル。高度な計算に基づいてだね……」

「いくらわたしが片付けても足の踏み場なくなる研究室がですか？」

五七六歳になる不老不死の人工生命体も、女性には弱いのか。紅茶の香りを楽しみながらヒーリーは自分を棚にあげて思った。

第二章 戦乱への序曲 第四十八話

翌日、元ワイバニア第七軍団長アンジエラ・フォン・アルレスハイムはフォレストル第五軍団副軍団長アレックス・スチュアートに導かれ、新しく用意されたヒーリーの執務室に通された。

王城の部屋を改装したヒーリーの執務室は一万人を率いる軍団長の部屋にしては驚くほど簡素なものであり、応接用のソファとテーブル。ヒーリーの机と大きな本棚がある以外は何もなかった。

アレックスはヒーリーにアンジエラを取り次ぐと、ヒーリーはアンジエラに挨拶をした。

「フォレストル第五軍団長、ヒーリー・エル・フォレストルです。ワイバニアの名将にお会い出来て光栄です」

「ワイバニア帝国第七軍団長、アンジエラ・フォン・アルレスハイムです。もつとも、今はただの亡命者ですが」

アンジエラは自嘲気味に笑った。ヒーリーは苦笑すると、ソファに着席を促した。ヒーリーは国王からアンジエラの処遇をまかされていることを伝えると、亡命を希望する理由を尋ねた。

「実は……」

アンジエラは語った。自分自身が狙われた理由とフォレストルに亡命したいきさつを。龍の眼の再生記録と、皇帝の急死の真相が記された手紙を見たヒーリーは全て了解した。

「分かりました。アルレスハイム公。あなたの身の安全は私達が保障しましょう。……ですが、私としては、あなたを客将としてお迎えしたいのです」

ヒーリーはアンジェラの自分の意志を伝えた。攻守にバランスのとれたアンジェラの戦術家としての手腕は確かで、新設の第五軍団を率いるヒーリーとしてはぜひとも欲しい人材であった。

「身の安全を保证するため、王城で暮らすことになります。自由がいささか制限されることになりましたがお許しください。また、客将については私の一存で、強制はいたしません。アルレスハイム公のお考えにお任せいたします」

ヒーリーは礼儀をもってアンジェラに接した。

「客将の件、ありがたくお受けいたします。フォレストル殿下」

アンジェラはヒーリーに返事をした。その眼は澄み、意志と気迫に満ちあふれていた。アンジェラの意志を受けたヒーリーは頷いた。

「こちらこそ、ありがとうございます。それと、私のことは、ヒーリーとお呼びください。フォレストル殿下というのは、どうも肩が凝ります故」

「こちらこそ、アンジェラと呼んでください。我が盟友が呼んでくれた名です。信頼の証として受け取っていただきたく思います」

フォレストル、ワイバニア。二人の名将は握手を交わした。ヒーリーにとって、またアンジェラにとって、心強い仲間ができた瞬間だった。

第二章 戦乱への序曲 第四十九話

ヒーリーはアンジェラを居室に案内させると、数日の休養をとらせた。

「敵国の、それも軍団長クラスの間人をわたし達の軍団に入れるなんて。反対する者も出ると思うわ。いいの？ ヒーリー」

二人だけになった執務室でメアリはヒーリーに尋ねた。

「そのときは、おれの責任さ。何とかするよ。それより……」

ヒーリーは何度めかの龍の眼の映像を再生させた。

「敵方の右元帥は悪辣ね。厄介な相手になるわ」

映像を見ながら、メアリは言った。

「おれ達も狙われた。こういった陰謀事は奴らの方が上手かもしれないな」

ヒーリーは腕を組んだ。視線の先には血まみれのヨハネスの姿があった。ワイバニアの中でも指折りの知略家を暗殺し、敵本拠に夜襲をしかける手腕にヒーリーは寒気すら覚えた。真に恐れるべきはワイバニアの新皇帝よりもこの女かもしれない。ヒーリーはこれまでにない険しい目で映像を睨んでいた。

ヒーリーは国王のジェイムズ、宰相のマクベス、王太子のエリクを集め、皇帝暗殺の真相を報告した。三人はそれぞれ驚きを隠せなか

つたが、不自然な点にも合点が言ったとある意味納得していた。そして、ヒーリー同様、ラグが警戒するシモーヌに脅威を感じていた。「皇帝の死の真相はワイバニアにとつても、恐らくタブーとされる問題だろう。どうであれ、政権が不安定な今、大規模な侵攻はないと考えるべきか」

ジェイムズは言った。だが、ヒーリー、マクベス、エリクの考えは異なっていた。長兄のエリクが兄弟の考えを代弁した。

「いいえ、父上。おそらく、政権が不安定だと我々が考えている今この時に侵攻を考えていると思います。侵攻がないとたかをくくれば、防御も緩みましよう。敵の狙いはそこにあります。緩んだ防御を電撃的に突破すれば、我々に大きな損害を与えることになるでしょう」

「なるほどな……」

切れ者のジェイムズも敵のねらいを理解した。

「だが、どこから攻め込む？ フォレストアル側か？」

父の問いにヒーリーが答えた。

「前回のオセロー平原の戦いで、おれは歩兵は龍騎兵に勝てないというこの世界のルールを覆しました。もし、おれがワイバニアの指揮官なら、今度はもう一つの世界のルールを壊そうと考えるはずですよ」

「ということは……メルキドか！」

ジェイムズはうなった。

「メルキド、ワイバニア国境のアドニス要塞群はメルキドの生命線です。ここを突破されれば、メルキドは滅亡するでしょう」

マクベスが言った。

「ただちに、メルキドに警戒を促すように連絡を。それから、こちらの国境線も心配だ。ハーヴェイ軍団長の第二軍団をハムレット砦に派遣させよう」

ジェイムズはエリク、マクベスらに命令を下し、会議を解散させた。

広大な敷地を誇る皇帝の居城、ワイバニア帝国皇帝居宮白晶宮、その広場にワイバニア十二軍団全てが集結していた。その数十一万五千人、広場を埋めつくすほどの大軍勢だった。広場を見渡す白晶宮のテラスに、新皇帝ジギスムントが姿を現した。十万を超える大軍勢は水をうつたように静まりかえり、兵士達は出兵を前にした皇帝の話に耳を傾けた。

「諸君、時は来た。我がワイバニア帝国が世界を、アルマダを席卷する時が。三〇年前に先々代の皇帝が歩みだした覇業を我々が完遂するのだ。メルキドの巨兵を巨竜の脚で踏みつぶし、フォレストルの歩兵を龍のあぎとで食い破り、世界はわれらワイバニアのものとなる。世界は、ただ一つの旗印のもとに統一されるのだ。そう、ワイバニアの旗印のもとに。さあ、いざ行かん！ 龍の旗の下に！」

「龍の旗の下に！」

十一万五千の大軍勢が一斉に唱和した。その声は白晶宮にとどまらず、帝都ベリリヒンゲン全体にとどろきわたったと言つ。

星王暦二一八三年四月十日、ワイバニア正規軍十一個軍団はメルキド公国侵攻のため、南下を開始した。

第二章 戦乱への序曲 第四十九話（後書き）

第二章 最終話です。

次回からはいよいよ。メルキド編に突入！

お楽しみください。

第三章 メルキド侵攻 第一話

ワイバニア、メルキド国境にあるアドニス要塞群。ベルクリーズ、カルデーニオ、デミアン、メルヒエン、タツソー。この五つの要塞で構成された要塞群は構成する要塞どれもが強固で、なおかつ相互に連絡しあっており、陥落不可能ともいわれる難攻不落の要塞群だった。

星王暦2183年5月10日、メルキド公国にとって、運命の日となる一日がやってきた。

「しっかりと見張れよ。ワイバニアの大軍がやってくるかもしれないからな」

アドニス要塞群中央に位置するデミアン要塞の見張り台で見張り番の兵士が相棒に言った。

「けどよ。本当に来るのか？上はフォレスタルの情報って言うてるけど、所詮は予想されるってことだろう？来るかどうかなんて、怪しいもんだよ」

相棒は見張り台の壁にもたれてくつろぎながら、一生懸命に望遠鏡をのぞく兵士に言った。

「警戒するのに越したことはないだろう。ほら、サボってないで、お前も見張りをやれよ」

「いやだね。俺はもうすぐ交代時間だし、可愛い彼女とデートの時間なんだよ。……。おい。なんかおかしくないか？腹の中か

らずんとする感じ………」

「お前もか？実は俺も」

見張り番の兵士は不可思議な感覚にとらわれていた。腹に重しを置かれた違和感。まるで巨人の足音のような……足音！見張り番は望遠鏡をもう一度覗き込むと、レンズ越しの地平線に旗が見えた。見まごう訳がない。宝珠を持った翼竜の旗。ワイバニア帝国軍！それも、一個軍団などと言う規模ではない。地を埋め尽くすほどの大軍団！見張りは声を失った。

「おい。どうしたんだよ………」

異変に気づいた相棒もまた、望遠鏡を覗いた。二人は顔を合わせる
と、敵軍発見の鐘を鳴らした。

「ワイバニア軍来襲！！大軍、大軍だ！！」

あまりの大事に二人は見張り台から声を限りに叫んだ。

第三章 メルキド侵攻 第二話

アドニス要塞群が見渡せる位置に、ワイバニア十一個軍団全軍が布陣していた。

「アドニス要塞群全てを陥落させる」

軍議の席で、ワイバニア帝国皇帝ジグスムントは戦いに先立って宣言した。

「アドニス要塞群は相互に連絡しあっている。できるだけ早く、しかも同時に陥落させなければ、我々は退路をふさがれてしまう」

ジグスムントは淡々と、その理由を述べた。実戦指揮官である九人の軍団長はそれを黙々と聞いていた。

「それで、戦力をどう割り振ろうかのう……我々とて一個軍団で要塞一つ抜くのは無理があるうて……」

第四軍団長のグレゴール・フォン・ベッケンバウアーが言った。彼の長い戦歴の中でも、このアドニス要塞群を攻撃したことは数えるほどしかない。それほど、ワイバニアはメルキドとの交戦を避けており、一個や二個軍団程度の戦力で、要塞を落とすのは無謀であると言えた。

「いや、要塞一つ程度ならば、我々だけで十分だ。第一軍団はベリクリース要塞を攻めさせていただこう」

第一軍団長のハイネが言った。

「おい、それはいくら何でも無茶ではないのか？せめて、あと一個軍団くらいは……」

「いいえ。クライネヴァルト軍団長の言う通り、第一軍団単独で要塞を攻略した方が最善です。私の第二軍団もタツソー要塞を単独で攻略させていただきませう。そうすれば、残りの要塞を3個軍団ずつで攻略することが可能になります」

第六軍団長のオリバー・リピッシュの言葉を遮って、第二軍団長のマレーネ・フォン・アウブスブルグが言った。

ワイバニア第二軍団はハイネ率いる第一軍団に次ぐ精強さを持つと名高く、マレーネの指揮があれば、第一軍団とほぼ互角と言われるほどの強さを誇っていた。

マレーネ・フォン・アウブスブルグは今年、30歳になる指揮官で、代々名外交官を輩出した名家であるアウブスブルグ家に生まれ、幼少期から高い教養を身につけた才女だった。その上品な物腰と気品ある美しさから、「ワイバニアの聖女」と呼ばれ、外交にも手腕を發揮する名軍団長だった。

「ほほ……これで、決まりのようじゃの。皇帝陛下」

グレゴールが皇帝を見た。若き新皇帝は自分が軍議を主導出来なかったことに少しいらだちを覚えていたが、表面は平静をとりつくり、号令した。

「いいだろう。第一軍団はベリクリーズ、第二軍団はタツソーを攻略。第四、第八、第十一軍団はカルデーニオ、ベッケンバウアー軍

団長が指揮をとれ。第五、第七、第十二軍団はメルヒェン。右元帥
ビフレストが第七軍団を直率し、攻略の総指揮をとれ。第三、第六、
第九軍団はデミアン。第三軍団は予自らが直率し、攻略の総指揮を
とる。よいか、この攻略は時間が勝負だ。そのことを努々忘れるな。
二日以内に攻略せよ」

軍議に集まった諸将は敬礼すると、直ちに自分が指揮する軍団に散
って行った。

第三章 メルキド侵攻 第三話

デミアン要塞の見張りはワイバニアの大軍がのっそりと、しかし、確実に動く様子を確認すると、鐘を鳴らして叫んだ。

「来るぞ！ ワイバニアが動いた！ 攻めて来るぞ！」

デミアン要塞の司令官クバ・リブレは「ワイバニア動く」の報告に即座に命令を下した。

「首都ロークラインに援軍の要請だ。それから全要塞に警戒警報を発令しろ。総員、戦闘配置につけ」

リブレは悲壮な覚悟を抱いていた。ワイバニアはほぼ全軍、しかも同時にこの要塞を落とすつもりだ。せめて一つなら、戦いようはある。だが、かつてない大軍を相手に持ちこたえることができるだろうか。攻め込まれた時点で、この要塞の命運は尽きているのではないか。リブレは絶望を感じずにはいられなかった。

「さて、どう攻めようかのう……」

カルデーニオ要塞を包囲したグレゴールは、そびえ立つ巨大要塞の前に思案を巡らせていた。第四軍団長グレゴール・フォン・ベッケンバウアーはフォレスタル第一軍団長のフランス・ピットと並ぶアルマダで随一の戦歴を誇る指揮官だった。その経験に裏打ちされた戦術と老獪さは並の指揮官では太刀打ち出来ず、局面によっては、第一軍団ですら一步譲るほどの名将だった。

「もう！ ちゃっちゃと攻撃して、さっさと皆殺しにしちゃおうよ

！ あんな要塞！」

グレゴールが思案していると、じゃらじゃらと悪趣味で派手な飾りをつけた鎧を鳴らして後ろから第十一軍団長のザビーネ・カーンが話しかけてきた。ザビーネは二四歳。十二軍団長の中では年少の部類に入る。二四歳と言う若い年齢にも関わらず、彼女が軍団長になれたのはザビーネ個人の戦闘力と戦闘における残忍さによるものだった。彼女率いる部隊は敵の退却を許さず、敵は全滅するか、戦闘不能になるまでたたきのめされるかの二つに一つだった。血風乱れる戦場で、彼女は敵が全滅する様を悦に入りながら見ていたという。彼女の残忍さは、十二軍団の中でも群を抜いていた。

「ほほ……若い者は元気があってよいのう。じゃが、総指揮官は儂じゃ。求めておらぬのに意見するでない。身の程をわきまえんか」

静かな口ぶりでグレゴールはザビーネを睨みつけた。幾多の死線にくぐり抜けたその眼光は鋭く、ザビーネは恐怖に震えてその場に座り込んだ。

第三章 メルキド侵攻 第四話

「聞き分けがいいのはよいことじゃて……ほほ」

震えるザビーネを見下ろして、ワイバニア軍の長老は言った。

「しかし、グレゴール翁。攻め方が決まりませんと、我々とて、どう動いたら良いか、分かりかねます。ご指示を賜りたいのですが」

第八軍団長のゲオルグ・ヒツパーが言った。現在彼は47歳。十二軍団長の中で、グレゴールに次ぐ戦歴を持つ指揮官だった。年の割には若く見え、短く刈った銀髪と穏やかな風貌が、周囲にごく自然と安心感を与えていた。

「やれやれ、少しはこの老いばれにゆっくり考えませんか……ふむ。ちと、興はないが、ワイバニアの戦と言つものをメルキドに見せてやるか……」

グレゴールは配下の龍騎兵大隊、第八、第十一軍団の龍騎兵大隊に大型翼竜による落石攻撃を命じた。

一方、カルデーニ才要塞守備軍はワイバニアの恐怖に襲われていた。

「おい……なんだよ。あれ。3個軍団はいるぞ」

「俺たちの十倍じゃないか。勝てる訳がない……」

敗北。その先にある死。カルデーニ才要塞の守備兵は絶望感に苛まれていた。

「まだまだ！」

要塞の中で若々しい声が響いた。カルデーニ才要塞司令官マツサリアであった。年齢は23歳とメルキド軍の上級指揮官の中で最年少である彼は、3月に要塞に赴任したばかりだった。絶望的な状況の中、マツサリアは努めて力強く、明るい声を出して兵士を鼓舞した。

「相手は確かに10倍だがこちらは難攻不落のカルデーニ才要塞だ。3個軍団くらい持ちこたえてやるう。逆に押し返すんだ！」

青二才の青臭い演説を聞いていられない。兵士達は士気が上がるところか逆にため息をついてその場にへたり込んでしまった。

第三章 メルキド侵攻 第五話

「おいおい。司令官閣下がそう言っているんだ。お前ら、もっとやる気を出したらどうだ。ワイバニアを追い返せば、生きて帰れるんだからな」

巨兵隊長のボストン・クーラーは言った。戦闘経験豊かで豪放磊落な巨兵隊長の言葉に少しだけ重苦しい雰囲気や和らいできた。

「ありがとう。隊長」

マッサリアは信頼する隊長に礼を言った。

「いえ、気にせんでください。……おそろく、この要塞は一日も持ちますまい。いや、この要塞だけじゃない。デミアン、メルヒエン、他の要塞もです。我々の兵力は5要塞合わせて1万5千。敵は11万。最初から勝負は見えています」

マッサリアはクーラーの言葉を聞き、表情を曇らせた。

「だが、勝たせてばかりでも面白くない。せいぜい歯向かって見せましようや。司令官」

マッサリアはクーラーを見た。すでにこの要塞で死ぬ覚悟を決めている目だった。だが、クーラーには悲壮さは見られなかった。戦う覚悟を決めること。死兵と言つのは子のこと言つのだらう。23歳の若き司令官は目を閉じると覚悟を決めた。

「大型翼竜来ます！！数、およそ300！！」

ワイバニアのお家芸、落石攻撃が始まった。見張りの報告の数分後、空から岩の雨が降ってきた。巨岩は要塞の櫓や壁など、石造りの構造物を次々に破壊していった。

「壁に寄るんだ。そうすれば、落石から避けられる。石兵は格納庫から出すな!!」

マツサリアは兵士達に命じた。攻撃が早く、メルキド群は対空攻撃が間に合わなかった。要塞の中はたちまちがれきの山と化した。

「ほほ………ようし、投石機用意。目の前の厄介な壁も壊してしまえ」

グレゴールは敵が抵抗出来ない様子を見ると、次は地上からの投石攻撃に切り替えた。

第三章 メルキド侵攻 第六話

「投石機です！」

城壁の陰から、外の様子をのぞいていた兵士が叫んだ。彼の報告から数秒後、兵士の頭上を巨岩が通り越した。

要塞の守備兵は自分たちを地獄へと誘うこの風切り音を永劫忘れないだろう。風切り音が響くたび、要塞が崩れる音と、仲間の苦痛に満ちた声を聞くことになったのだから。

「おい！ 応戦しろ！ 矢を放て！」

崩れた城壁の隙間から、守備兵達は矢を放った。全体の指揮を伴わないその射撃は散発的で、ワイバニアの前では何の意味を持たなかった。

「あははは！ ばつかじやないの！？ あいつら！ 投石機はあの馬鹿達を片付けなさい！」

ザビーネは守備兵達の必死の抵抗をあざけり笑った。

「ちくしょう！ ちくしょう！」

自分一人が撃っていても、ワイバニアはまるでこたえやしない。無駄と知りながら、守備兵の一人、バトラーは矢を撃ち続けていた。しかし、彼の眼前が一瞬で真っ黒に染まった。彼はそれを大きな岩だと気づくことはなかった。投石機から勢いよく放たれた巨岩は一瞬にして彼の命を奪い去った。

「バトラー！」

彼の隣にいた兵士が叫んだ。しかし、敵は彼に隣で戦っていた仲間を悼む間を与えてはくれなかった。彼もまた、バトラーと同じ運命をたどった。巨岩が彼の背を守り続けていた城壁ごと彼を吹き飛ばしたのである。

絶え間ない投石によって、カルデーニオ要塞は落城寸前になっていた。城壁のことごとくが崩れ落ち、城内の建物も原形をとどめていないものを見つける方が難しくなっていた。

第三章 メルキド侵攻 第七話

劣勢の中、マツサリアは要塞地下で指揮を執り続けていた。しかし、それは指揮と呼べるべきものではなかった。報告されるのは被害報告ばかりで要塞の中核はその対処に追われ、ほとんど機能していなかったのである。

だが、前線で防戦を繰り広げていたメルキドの指揮官達は武門の名に恥じぬ戦いぶりを見せていた。

とりわけ、ボストン・クラーラー指揮の西側城門は投石機の攻撃にはさらされたものの、石兵の能力をフルに活かしてゲオルグ・ヒッパー率いるワイバニア第八軍団を一步も寄せ付けなかった。その防戦の巧みさはヒッパーも舌を巻いた。

「見事な防戦だ。与えられた戦力を最大限に生かしている。お前達もよく見ておけ」

ヒッパーは後ろを振り向いた。彼の後ろには、まだ少年の面影の消えない若者達が並んでいた。

ワイバニア十二軍団の中で、第八軍団は特に異質な存在と言える。第八軍団を構成する幕僚、兵士達はその大半が新兵であり、中には初陣といったものも少なくない。第八軍団はもともと、兵士、指揮官の実地教育のための軍団である。よって、兵の練度は低く、兵士個人の強さで言えば、十二軍団中最弱であった。しかし、ワイバニア十二軍団の中で比較的中位の序列にあるのは、ひとえにヒッパーの巧みな戦術指揮とリーダーシップによるものであり、ヒッパーがいかにも軍団長として非凡な能力を有しているかを証明していた。

「だが、敵にはかり用兵の妙を見せつけられていては、俺の存在意義がなくなるな。重装歩兵大隊を前面に展開し、敵の射撃を防御しろ。第二陣は弓兵大隊。当てようなどと考えるなよ。敵が撃てなくなればそれでいい」

ヒツパーは自身に満ちた笑みを浮かべた。これでいい。指揮官は常に自信と威厳に満ちていないと兵が不安がるからな。目を輝かせ、伝令に走る若い兵士を見て、ヒツパーは心の中で自嘲した。

第三章 メルキド侵攻 第八話

命令は下したものの、ヒツパーの予想以上にメルキドの防御は固かった。メルキド側の防御指揮官のポストン・クーラーは石兵を城壁の破損箇所配置して城壁として使用しただけでなく、石兵の持つ大型ボウガンを用いて、砲台としても活用した。メルキドの中長距離支援用石兵「ヘラクレス」が持つ大型ボウガンは投石機に迫るほどのアルマダ最長の射程を誇り、長大な射程から繰り出される矢の一撃も通常のボウガンと桁外れの威力を有していた。

「ようし、次は門扉の守りを固めるんだ。弓兵隊とヘラクレスを前に出せ。扉が打ち破られたら一斉に仕留めろ！」

クーラーは城壁を守る部隊が時間を稼いでいるうちに門の防御に取りかかった。要塞でもっとも守りが堅い門は落石と投石にさらされながらも未だ健在だった。クーラーは自分の愛機である近接格闘石兵「オリオン」を後衛として配置し、ワイバニア攻撃の時を待っていた。

「さあ、来い。メルキド武人の真髄。とくと見せてやる」

赤銅色に輝く愛機の腹の中でクーラーは気迫を込めて言った。

一方、城壁側の間断ない矢の雨に耐えながら、第八軍団はじわりじわりと歩を進めていた。

だが、これはヒツパーにしてみれば「亀のようにはろい」と評価する程度の動きだった。矢の攻撃が止み始めていたためである。矢は無限にあるわけではない。特に城内がめちゃくちゃな今は補給は至

難の業だろう。矢の攻撃が止み始めた今こそが攻勢の好機だった。

しかし、初陣の兵士にとっては、生まれて初めて敵意と殺意にさらされた瞬間であり、新兵の多くが実戦に戸惑い、恐れおののいていた。

望遠鏡越しにそれを見たヒツパーはすぐさま愛用の槍を持ち、幕僚達の制止を振り切ると陣地を飛び出した。さらにヒツパーは予備兵力として後方に待機させておいた一個騎兵大隊を呼び出すと、自分も愛馬を駆って戦場へと走り出した。

第三章 メルキド侵攻 第九話

「ひるむな！進め！！！」

前線では小隊長が声を限りに叫んでいた。しかし、小隊長に答えたのはわずかな兵だけで、あとは矢が近くの地面に突き刺さるたび、仲間の兵士が矢に倒れるたび、地面に這いつくばり丸くなっていた。

「立ち止まるな！的にされるぞ！！！」

先任の古参兵が軍事教練から卒業したての若い兵士を叱咤した。戦況はワイバニア圧倒的優勢の中、ワイバニア軍自身が攻撃の手を緩めてしまうという尋常ならざる事態が起こっていたのである。

前線の歩兵部隊が立ち往生している中、後方から騎兵部隊1、000が突進とも言うべき猛スピードで来援した。

「進め進め！！何をしている！？！」

遙か後方にいるはずの指揮官の声に前線のワイバニア兵達は一斉にヒッパーの方を向いた。騎兵隊の先頭にいたヒッパーが槍を高く掲げ、戦場に響き渡る大声で叫んだ。

「勝利は目前だ！今がチャンスなんだぞ！破城槌および、破城鉤用意！！はしごもだ！！勝負をかけるぞ！！突撃だ！我に続け！！！」

ヒッパーは歩兵部隊に道をあけさせると、騎兵隊を率いて突撃していった。

ヒッパールのとつた行動は戦術的には誤りだったが、練度の低い兵士を鼓舞するには指揮官が陣頭に出るしか、方法はなかったのである。

「お前ら、軍団長が前線に出てきたのに、まだ地面に這いつくばっているつもりか！？立て！軍団長を死なせるな！！お前達のために前線に出てきてくれたんだぞ！！」

敵方の矢が尽きかけてきているとはいえ、未だ降り注いでいる矢の雨にさらされながら、ワイバニア軍の分隊長は部下に叫んだ。この分隊長もまた、兵士を率いた経験はない。部下の心情を察するには、彼はあまりに若すぎた。だが、一兵士として、自分たちのために命を危険にさらして前線に赴いた軍団長の気持ちは痛いほど察することができた。

「立つんだ。前に進め！！俺がお前らを守ってやる！」

分隊長は言った。兵士達はそれが気休めではないことは分かっていたが、立たない訳にはいかなかった。自分たちを精一杯守ろうとする彼の気持ちは無視することはできなかつたからである。

兵士達は矢の雨に負けず、一人一人立ち上がると、城壁に向かって突進していった。

第三章 メルキド侵攻 第十話

「突撃部隊は城壁に張り付いたようだ。これ以上は味方に当たる。投石中止！」

望遠鏡から突撃部隊が城壁に到達したことを確認した第八軍団参謀長ギユンター・フォン・ブラウンは投石中止を命令した。不用意に攻撃をしかければ、同士討ちになる危険があったためである。

「扉をぶち破るぞ！ 破城槌用意！」

ヒツパーは扉の陰に隠れ、前線で指揮をとり続けた。騎兵大隊長ら、最前線指揮官達はヒツパーに後方へ戻るよう進言したが、彼は頑として聞き入れなかった。前線の新兵をまとめあげるには、自分の存在が不可欠だと知っていたからである。ヒツパーは命令を出し終えると、槍を掲げて、恐怖と戦い続ける新兵達を勇気づけた。

一方、扉の内側でもワイバニア軍への攻撃準備が整えられていた。扉の外側で、大きな音が聞こえる度、メルキドの守備兵達は生つばを飲み込んだ。

「さあ、ワイバニアが押し掛けてくるぞ！ 防戦用意！」

クーラーは扉の守備兵に攻撃待機を命じた。石兵、そして兵士のボウガンのねらいが扉に向けて定められた。

扉の外側、重装歩兵の盾に守られて、ヒツパーは指示を出し続けていた。そして、全ての攻撃準備が整ったとの報告を受けるや、すぐさま、攻撃開始を命令した。

「そうれ！ ぶちこわせ！」

破城槌を指揮する歩兵中隊長が兵士に号令した。長く太い丸太の先端に巨大な鉄の穂先が取り付けられた破城槌が巨大な要塞の門扉に突き立てられた。

「俺たちもやるぞ！ さあ、城壁をひつぺがせ！」

別の場所で、城壁に破城鉤がかけられた。投石攻撃によって、ぼろぼろに崩れた城壁がさらに崩れ始めた。

「ワイバニア兵が来るぞ！ 防戦しろ！ 石を落とすんだ！」

「はしごをかける！ 要塞内に攻め込むぞ！」

要塞の内外で、それぞれの兵士の怒号が響き渡った。戦闘開始から六時間、カルデーニ才要塞防戦はいよいよ大詰めを迎えていた。

第三章 メルキド侵攻 第十一話

「うわあああ！！！」

城壁で、ワイバニア兵の悲鳴と骨の砕ける鈍い音がいくつも聞こえてきた。メルキドの要塞守備兵は必死で防戦を繰り返していた。メルキド兵達は城壁にかけられたはしごを落とし、城壁の破片の石を落としては、ワイバニア兵の侵入を防いでいた。

「もう落とす石がないぞ！！！」

「北側の城壁の守りが破られた！！ワイバニア兵が来るぞ！！！」

城壁を守るメルキド兵は300人にも満たない。対するワイバニア軍は騎兵を入れて5,000人で攻め込んできた。必死の抵抗空しく、城壁の守備兵は時を経たずして全滅した。

その頃、扉を破ったワイバニア第八軍団本隊もクーラー率いる守備隊の十度目の一斉射にさらされていた。矢は有限とは言え、タイミングをはかった一斉射の威力は強烈で、攻撃隊は多くの犠牲を払っていた。

「盾を2枚重ねにするんだ。前衛部隊で矢を防いで、突破口を開くぞ！」

ワイバニア軍重装歩兵隊長オーギュスト・クルツリンガーが言った。これ以上味方を犠牲にする訳にはいかない。覚悟を決めてオーギュストは攻撃隊最前列に立ち、盾を構えた。

「中隊、突撃！！」

オーギュスト率いる中隊は隊列を整え、矢の嵐の中を突進した。矢が風を切る音、矢に倒れる仲間のうめき声、矢が肉を裂く痛み、それらの感覚が呼び起こす恐怖を狂気に変えてワイバニア兵はメルキド軍に襲いかかった。

「うわああああ！！」

メイスを振り上げ、一気にメルキド兵にたたきおろすワイバニア重装歩兵。もみあいになりながらも、ワイバニア兵の額に矢を放つメルキド弓兵。門の内部は狂気と血が彩る地獄と化していた。

「ようし！突破口が開いたぞ！進め進め！！」

ヒツパーは城壁に取り付いた兵士達全員に突進を命じた。一方、クラー率いる守備隊は壊滅の一途をたどっていた。門の内部の兵力はもはや全滅し、門に配置してあった石兵ヘラクレスはその巨体があだになり、門の中でかく座し、撃破された。

第三章 メルキド侵攻 第十二話

今はただ一人、クーラーが駆る石兵オリオンだけがワイバニア兵をなぎ倒していた。

「縄だ！縄をからめろ！！」

オリオンを取り囲んでいたワイバニア軍の分隊長が叫んだ。彼の命令からほどなくして、オリオンの四方から縄が飛び出した。先端に石が結びつけられた縄は、石兵の体に絡み付くと、その動きを封じた。身動きの取れなくなったクーラーは愛機に乗ったまま地面に打ち倒された。

「くそ！動け！！」

クーラーは操縦桿をひねり、なんとかオリオンを動かそうと努力したが、からみつく縄に邪魔され、指一つ動かすことができなかった。

「とどめをさせ！！槍で一齐に突くんだ！！」

分隊長が指示するとクーラーがいる石兵の腹部めがけて10を超え、る槍が突き立てられた。石兵の腹からクーラーの血が止めどなく流れ落ちた。

クーラーを取り囲んでいたワイバニア兵をかき分けて、銀髪のおだやかな風貌をした男が現れた。銀髪の男は石兵の兜を外し、クーラーの顔を出させた。

「私はワイバニア帝国軍第八軍団長ゲオルグ・ヒッパー。貴殿の戦

いぶり、実に見事だった。遺言があれば戦った者の礼儀として承りたく思う。」

ヒッパーはかがんでクーラーと同じ目線に立って言った。クーラーは血を断続的に吐きながら軽く目を閉じて答えた。

「俺の息子に……誇りある武人になれ……と伝えてくれ。ワイバニアの将よ。よろしく頼む」

「貴殿の意。確かに承った。しからは、御免。」

ヒッパーはクーラーの喉に剣を静かに突き刺した。クーラーの首からは鮮血が飛び出し、クーラーの顔と愛機をたちまちのうちに紅く染めた。ヒッパーは静かに立ち上がると、周りの兵士が聞こえるように大きな声で言った。

「メルキドの英雄に、第八軍団、敬礼！！」

ヒッパーら、入城した第八軍団は全員その場で敬礼した。互いに全力を出し尽くした敵手としての敬意と礼儀を彼らは込めたのである。クーラーの死と共に、カルデーニオ要塞西側城壁はここに陥落した。

第三章 メルキド侵攻 第十三話

「ぐあ……」

メルキド軍の指揮官が倒れた。ザビーネは自分の鎧と同様に派手な装飾が施されたレイピアを指揮官の身体から引き抜くと、一振りして血のりを払った。

「これで終わり？ 張り合いがないわね」

ヒッパーが西側城壁を陥落させたのと時を同じくして、ザビーネは東側城壁を陥落させていた。

東側城壁の守備兵達は矢を放ち、剣を振るい、ワイバニア軍と果敢に戦った。だが、それは兵士個人の心情の話であって、実際の戦況に関しては、非常に拙劣な戦いであったと言わざるを得なかった。

散発的に放たれた矢は、敵兵の身体に食い込むことはなく、剣を振るったところで、圧倒的な数のワイバニア兵に取り囲まれ、串刺しかなます切りにされた。東側城壁はザビーネ率いるワイバニア軍第十一軍団の虐殺の場と化していた。

城内に入ったワイバニア兵達は、彼らに戦いを挑む兵士も、逃げ惑う兵士も分け隔てなく殺し尽くした。流血に魅せられたワイバニア兵にとって、メルキド兵は格好の獲物だったのである。

「こっちはまだ殺したりないって言うのに」

不機嫌そうにレイピアを鞘に納めたザビーネは踵を返して歩き出し

た。すると、物陰から石の崩れる音がした。ザビーネは音の出所へ行ってみると、そこにはまだ、十四か十五歳くらいの少年がうずくまっていた。

「アンタ、メルキドの兵士？」

ザビーネは少年に尋ねた。少年はザビーネの問いにびくつと肩を震わせると、縦に素早く首を振った。

「まだ、ガキじゃない。こんなガキを戦場に出すなんて、とことん変な国ね。ここ」

恐怖で震える少年に構わず、ザビーネはため息をつきながらペラペラと少年の祖国の悪口を言った。

「まあ、いいわ。見逃してあげるから、早く逃げなさい。ガキなんか殺しても、胸くそ悪いだけだしね」

ザビーネが少年に言うと、少年の顔色が変わった。まるで、女神でも見るような澄み切って輝いた目でザビーネを見上げた。少年は立ち上がると、ザビーネに礼を言って走り出した。

第三章 メルキド侵攻 第十四話

命が助かった。少年の目の前はこの瞬間、明るく輝いていただろう。故郷に戻る。家族に会える。少年の心は喜びに満ちていた。不意に胸に鋭い痛みを感じた。少年には時が止まり、一瞬世界が暗くなつたように思えた。少年が下を見ると、彼の身体からあり得ないものが生えていた。細く長いレイピアの刀身である。少年は驚き、ゆつくりと後ろを振り返った。

「あははは！ ばつかじゃないの？ 敵の兵士なんか、あたしが見逃すわけじゃない！」

ザビーネは恍惚と狂気が入り交じった笑いを浮かべて言った。

「いい？ ひとつお姉さんがいいこと教えてあげる……それはね、敵の言うことを信じちゃいけないってこと」

ザビーネは剣を握る手に力をこめ、少年の耳元でささやきかけた。ザビーネが剣を握り、動かす度、少年の目は恐怖と苦痛で見開かれた。

「あ……っ……」

「ね、わかる？ 肉が裂ける音、聞こえてこない？ ザク、ザクつてさ……」

ザビーネは苦痛のあまり声にならない声を上げる少年の口を押さえ、レイピアをゆつくり横に動かした。息をしようとする度に、少年は血を吐き、目からは涙が止めどなく流れ出て、ザビーネの手を

汚した。

「ほら……心臓の近くまで来たのわかるでしょ？さあ、これで本当にお別れね……」

最期の瞬間、少年の目が限界まで見開かれた。ザビーネの剣が心臓に達した瞬間、少年の目から生気が消え、糸の切れた操り人形のようになく倒れた。

「うふ……あはは！ あははははは！ もう、最高！ たまらない！ あははははは！」

東側城壁最後の守備兵を殺したことで、ザビーネの喜びは頂点に達していた。生への希望に満ちた表情を絶望に変える。なんと気持ちのよいことか。兵士も若ければ、若いほどいい。少年兵など最高だ。馬鹿で、純粹で、こちらの言うことをすぐに信じるからたまらない。ザビーネは最高の獲物を殺せた喜びを噛み締め、いつまでも笑い続けていた。

第三章 メルキド侵攻 第十五話

「ふむ……そろそろしまいだて……」

グレゴール率いる第四軍団も要塞内に攻め入っていた。グレゴールの的確な指示のもと、第四軍団は北側城壁の守りを無力化し、ごく少ない損害で城門の制圧を完了した。第八、第十一軍団の任務は城門の陥落までであったが、先任軍団である第四軍団は、さらに要塞司令部を制圧しなければならなかった。

メルキド軍カルデーニオ要塞司令官マツサリアは最終局面にたつて、ようやく際立った采配を見せた。マツサリア率いる司令部戦闘員100名は巧みにワイバニア軍を分隊、または小隊規模で密室に誘導し、包囲各個撃破戦術を行なった。その巧妙さと攻撃の苛烈さは、グレゴールをして嘆息せしめるほどだった。

「ほほほ……やりおるのう。じゃが、この手腕を最初から見せるものじゃったな。惜しいものじゃ」

グレゴールは、すぐさまマツサリアの戦術に対応した。歩兵一個大隊1,000名をもって、地下司令部に一気に攻め込んだのである。守備側の10倍する兵力が狭い地下になだれこみ。メルキド軍は敵を包囲するどころか、逆に包囲され、一人、また一人、廊下や部屋を血に染めて死んでいった。

指揮官のマツサリアも槍を持ち、果敢に戦ったが、衆寡敵せず、命運尽きたと見ると、盛っていた短剣を取り出して自害しようとしたがワイバニア兵の縄に身体を絡めとられ、自害出来ぬまま。グレゴールの前に引き出された。

「お前が指揮官か？」

手足を縛られ地面に押さえつけられたマツサリアを、グレゴールは抜き身の剣のような鋭い眼光で見下ろした。

「殺せ！！」

大声で指揮をとり、戦い続けたマツサリアはしわがれた声で叫んだ。周りからはワイバニア軍の勝ちどきの声が聞こえ、その歓声がマツサリアの自尊心を何よりも深く傷つけた。

「質問に答えんか。お前が指揮官か？」

グレゴールはさらに殺気を込めて、マツサリアを睨みつけた。50年を超える戦歴と幾多の死線を越えてきたものだけが持ちえる強大なプレッシャー。マツサリアは口が聞けない程の恐怖心に襲われ、震えながらうなづいた。

「ほほほ……正直で結構。何、安心せい。お前のような鼻たれ小僧を殺したところで僕の剣がさびるだけじゃ。連れて行け」

グレゴールは左右の近侍の兵に目配せすると、兵はマツサリアを引き立てて連れて行った。

「さて、これで仕事は果たした。他の要塞はどうなっているかのう……」

陥落したカルデーニオ要塞の鐘楼のいただきにたなびくワイバニアの龍の旗を見上げ、ワイバニア最長の戦歴を誇る老将はつぶやいた。

第三章 メルキド侵攻 第十六話

グレゴールがカルデーニオ要塞を落とす少し前、シモーヌ率いる第五、第七、第十二軍団はメルヒエン要塞を陥落させていた。

川の中州にあり、天然の要害であったメルヒエン要塞も空から舞い降りた龍の群れにはかなわなかった。三個軍団混成の龍騎兵隊3,000名の総指揮をとった第五軍団長ヴァルター・フォン・ブツフバルトは配下の龍騎兵に急降下波状攻撃を徹底させた。「歩兵は龍騎兵に弱い。」堅実な勇将であるヴァルターはアルマダのルールそのままに攻撃を行なったのである。

空からの脅威を前にメルヒエン要塞の守備兵は果敢に防戦したが、メルヒエン守備兵の総兵力と同数の龍騎兵相手には分が悪すぎた。ワイバニアの龍騎兵達は城壁、要塞内にと、メルキド兵の死体の山を築いていった。

メルヒエンの守備兵が空に気を取られている隙に、要塞を包囲していたシモーヌ率いるワイバニア軍主力は一斉に包囲を狭め、要塞になだれ込んだ。

この空陸同時攻略作戦にメルキド側はあらがうことができず、戦闘開始からわずか4時間半でメルヒエン要塞は陥落した。これは謀略家としての評価しか得られていなかったシモーヌが、戦術家としても非凡な才能を有していることを証明した初めての戦いであった。

メルヒエン要塞攻略戦もまた、ワイバニア軍の勝利で幕を閉じた。

「終わったな……」

「ええ………何とかね」

荒い息を吐いて、第六軍団長オリバー・リピツシュと第九軍団長マルガレーテ・フォン・ハイネマンは話した。二人の軍団長の頭上に見えるデミアン要塞の鐘楼にはワイバニアの旗がたなびいていた。

第三章 メルキド侵攻 第十七話

デミアン要塞はアドニス要塞群中最も強固な要塞であり、ワイバニア軍に対して最も頑強に抵抗した。要塞司令官クバ・リブレの卓抜した指揮によって、十倍の兵力を持つワイバニア軍を一時後退させることに成功したが、ワイバニア新皇帝ジグスマントは配下の軍団長を一喝し、一斉攻撃を命じると、たちまちのうちにメルキド軍の戦線は崩壊し、攻撃開始から七時間後、デミアン要塞守備兵の全滅によって、要塞は陥落したのである。

その戦いの凄惨さは五要塞の中でも群を抜き、要塞はメルキド、ワイバニア両軍の兵士の死体で埋め尽くされ、後日、夢にうなされる兵士が多数出たという。

「あたしや、軍に入って以来初めてだよ。こんな戦場」

愛用のメイスを地に刺してマルガレーテは言った。今年三二歳のマルガレーテはワイバニア屈指の勇将と名高い。幾多の戦場を駆け抜けてきた彼女ですら、要塞内の惨状は耐え難いものだった。

「ああ、全くだ……」

第六軍団長のリピッシュもうなづいた。軍団長の中でも、グレゴール、ヒッパーに次ぐ戦歴を持つ彼ですらも、この戦いほど凄惨なものを経験したことがなかった。地獄とはこのことを言うのだろう。ワイバニア歴戦の軍団長は血の匂いしか感じない要塞の中で思った。

デミアン要塞を取り囲むワイバニアの軍勢の中で大勢の護衛に囲まれたテントがあった。ワイバニア皇帝、ジグスマントの本陣である。

弓矢の狙撃を防ぐた、鉄板が敷かれた天蓋の下で、若干二一歳の皇帝は要塞陥落の報を聞き、酷薄な笑みを浮かべたと言う。

「おれの道を邪魔出来る者など誰もいない。誰もな……神すらも……」

野望の階段をまた一段上ったことに、ジギスムントはこの上ない高揚感を感じていた。世界をこの手に握りつつある感覚がジギスムントの持つ野心と狂気をさらなる高みに昇らせていった。

第三章 メルキド侵攻 第十八話

ワイバニア帝国軍が各所で勝利の凱歌を上げている頃、ワイバニア第一軍団長のハイネ・フォン・クライネヴァルトもまた、敵の要塞司令官のボルガのど元に愛用の細剣の切っ先を突きつけていた。

「降伏しろ。もはや雌雄は決した。これ以上の戦闘は意味がない」

剣を突きつけられたボルガは、切っ先に恐怖を覚えつつ、現在の状況を冷静に分析していた。一体何が起こったのだ？私は何故剣を突きつけられているのだ？司令官の思考回路は何度計算をしつくしても、導き出される解答はそれだった。

真紅の軍服をまとった男が空から舞い降りると、近くにいた幕僚3人を一瞬で切り伏せると、ボルガのど元に切っ先をつきつけたのだった。その一瞬の早業に、ボルガは何も言えず、身動き一つできずにいた。

雌雄は決した？この男は何を言っていると言うのか。3人の幕僚が斬られたとは言え、守備兵3,000人は未だ健在。士気も高い。まだまだ戦えるはずだ。それなのに、何故、目の前の男は勝負はついたと確信出来る？背筋が凍る感覚を覚えながら、ベリクリーズ要塞を率いる司令官は思考を巡らせた。

しかし、余程有能な指揮官でなければ、ハイネの戦術は理解出来なかつただろう。

ハイネは配下の軍団に要塞の包囲を完成させると、龍騎兵隊に上空からの偵察を反復させた。二十数回に及ぶ上空偵察の結果、ハイネ

はベリクリーズ要塞が極めて上空からの攻撃に弱いと言うことを突き止めた。要塞の弱点を把握したハイネはただちにいつでも要塞への攻撃が可能になるように陣形を変えると、自身は愛騎レイヴンに乗り、みずから龍騎兵大隊の先頭に立ち、奇襲に乗り出した。

つまり、ハイネが動き出した時点で要塞の命運はすでに尽きていたのである。

「もう一度言う。貴公らにすでに勝ち目はない。降伏しろ」

表情を変えずにハイネは言った。その美しい声は戦場でありながら、聞いた者を魅了したという。

大きな足音を響かせ、ハイネの後ろに石兵が立った。石兵は巨大な腕を振り上げると、一気にハイネに振り下ろした。

石兵の剛腕。それは精兵一個小隊に匹敵する。ハイネの死は決まったようなもの。ボルガは思わず笑みを浮かべた。

第三章 メルキド侵攻 第十九話

だが、現実はそのはいかなかった。石兵の拳がハイネを殴りとばしたと思つた刹那、ハイネは残像を残して姿を消し、石兵の腕は空しく空を切つた。

「無粋だな。わたしは司令官と話の最中だ」

次の瞬間、ボルガの頭上からハイネの声が聞こえた。ハイネは石兵の肩に乗り、愛剣を石兵の装甲の隙間から操縦する兵士に突き刺した。その深さは兵士の身体に触れるか、触れない程度の傷であったが、兵士は恐怖のあまり気絶して、石兵ごと地面に膝をついて倒れた。

「三度めだ。降伏せよ。降軍の処遇に関しては、ワイバニア帝国軍第一軍団長、ハイネ・フォン・クライネヴァルトの名誉にかけて寛大なものにするよう約束する」

崩れ落ちる石兵から飛び降りたハイネは、風に流れる緋色のマントをつかんで言った。

「わかつた。降伏する。わたしはともかくとして、部下達にはどうか、寛大な処置をお願いする」

ボルガは握り拳をつくり、うつむいて言った。覆しようのない、絶対の敗北を悟つたのだ。アドニス要塞群、最西端の要塞ベリクリーヌ要塞はこうして陥落した。

「要塞を焼き払え！ 遠目にもわかるようにな」

敗残兵を要塞外に出し終えたハイネは、部下に要塞を焼き払うように命じた。

メルキドの守備兵達は燃え盛る要塞を見て涙し、膝をついた。ハイネは兵士達の姿を見ると、真紅のマントを翻して彼らに背を向けた。

「ベリクリーズ要塞の守備兵は全滅した。まったく、嫌な戦いをしたものだ」

ボルガは驚いた。ハイネは要塞を燃やす代わりに、自分たちを見逃そうと言うのだ。ワイバニアとは幾度となく戦ってきたが、このようなことは一度もなかった。ボルガは思わずハイネに尋ねた。

「何故だ？ 我々は捕虜になるのではないのか？」

ハイネは振り向こうとせずには答えた。

「我々は悪魔ではない。無益な殺生は好まぬ。貴公らは自由だ。故郷に帰るもよし、再び我らと刃を交えるもよし。好きにするがいい」

ボルガはハイネの言葉を聞き、深々と頭を下げた。ボルガ率いる要塞守備兵三〇〇〇名は要塞に別れを告げると、南に向けて歩いていた。

「これで、アウブスブルグとの約束は果たした。タツソーはどうなっているか……」

ハイネは遙か東の空を見上げた。戦場の空は燃え盛る炎に彩られ、赤くゆらめいていた。

第三章 メルキド侵攻 第二十話

タツソー要塞を完全包囲したマレーネ・フォン・アウブスブルグ率いるワイバニア第二軍団は包囲を完了して八時間が経過したが、いっこう動こうとしなかった。

「どうして動かないのですか？マレーネ様。我々は敵の三倍強、要塞を駆逐するには十分な戦力があると思います」

アンジェラ付きの副官兼従卒のエアハルト・フォン・シュライエルマツハは上官に尋ねた。士官学校を卒業したばかりの十七歳の少年将校は、純粹無垢な青い瞳でアンジェラを真つすぐ見つめていた。

「エアハルト。戦いの中で最も大切なことは何か分かる？」

陣中の粗末な椅子に腰掛けたマレーネは優しく副官の少年に問いかけた。

「戦いに勝つこと……ですか？」

「そうね。それも大切。でも、本当に大切なのは誰も死なせないことなのよ。しっかりと、わたし達の戦いを見ておきなさい」

まるで、先生が生徒に教えるように、優しくマレーネは今回初陣である少年に言った。マレーネが言い終わるとすぐに司令部直衛大隊長のエドワルド・フォン・マンシュタインが報告にやってきた。

「軍団長。ベリクリーズ要塞から火の手を確認しました。残るはこのタツソー要塞だけです」

「そう……。直ちに矢文の用意をなさい。降伏を呼びかけるのです。我々は無益な争いを好まないと」

マレーネは部下に降伏勧告を用意するように命じた。アドニス要塞攻防戦の中で唯一流血を生じなかった戦いが始まるうとしていた。

第三章 メルキド侵攻 第二十一話

タツソー要塞司令官のレグロンは包囲をしても、いつこうに動くことのないワイバニア軍にいらだちを感じ始めていた。

「ワイバニア軍め。我々を日干しにするつもりか……」

レグロンは双眼鏡越しに並び立つ兵の群れを見ながら歯ぎしりした。タツソー要塞は平地に築かれた他の要塞とは異なり、巨大な岩山を切り出して作り上げられた堅城である。デミアン要塞には及ばないものの、国境の守りの拠点として、確かな防御力を誇っていた。

「玉砕してでもワイバニア軍を止める」

要塞を包囲するワイバニア帝国の大軍を前に、レグロンが不退転の決意を固めていると、副官のキスールが彼のもとにやってきた。

「司令官。敵軍から矢文です。内容は……」

「言わずとも分かる。降伏勧告だろう。無視しろ」

レグロンはマレーネからの降伏勧告を黙殺した。要塞を枕に討ち死にを覚悟した者に何を言うか。レグロンは心の中で敵の司令官をのしつた。

「敵要塞に動きはありません」

伝令の報告を受けたマレーネは苦笑した。

「どうやら、フラれちゃったみたいね。再度矢文の用意を。敵方に動きがあるまで繰り返しなさい」

マレーネは部下に命じた。

「僕……いえ、わたしにはマレーネ様のお考えが理解出来ません。戦場で敵手と見え、刃を交わすは武人の本懐であると士官学校で教わりました。どうしても、わざわざ、時間をかけて戦わない方法をとるのですか？」

エアハルトはマレーネに尋ねた。純白の鎧を身にまとった女軍団長は、二つ名に違わぬ聖母のような笑みを副官に向けて答えた。

「エアハルト。あなたに家族はいる？」

「ベリリヒンゲンに両親と妹が……」

「では、もしあなたが死んだら、ご家族は悲しまれるかしら？」

「悲しむ……と思います。家族を失う訳ですから」

少年は少しうつむき加減になって答えた。一七歳の士官学校出たての少年には、初めての戦場は辛すぎるのである。少年の身体は戦場にあるが、心はベリリヒンゲンの家族のもとにあるのかも知れない。マレーネは少年を見て思った。

「そう。悲しまれると思うわ。でもね。エアハルト。それは敵も一緒なの。あなたと同じで敵にも家族がいる。戦いとはいえ、わたしは家族を失うことはしたくないわ」

マレーネの口調は優しかったが、その眼には強い意志の光が宿っているのをエアハルトは見逃さなかった。

敵軍から使者がやって来たとの報をマレーネ達が聞いたのは、これから少し後のこと、一四回めの矢文が敵に届いた頃だった。

第三章 メルキド侵攻 第二十二話

「何だあれは？ 私は許可を出しておらんぞ！」

司令室の窓から、ワイバニア軍陣地へ向けて騎兵が一騎駆けていくのを見たレグロンは激怒した。

「誰だ？ 使者を出したのは！」

「私です。司令官」

「キスール……貴様！」

レグロンは自分の副官を睨みつけた。彼の独断にも腹が立ったが、それ以上に降伏の使者を出したことが彼にとって許されざることだった。

「貴様！ メルキドの武人として恥ずかしいとは思わんか？ 恥を知れ！」

レグロンはキスールを一喝した。キスールは司令官の剣幕にひるむことなく、自らの意見を述べた。

「閣下。ここで戦ったとしても、我々は無駄死にです。ご覧ください」

キスールが指差した方向の窓には四つの煙の柱が立ち上っている光景があった。

「あれは……」

レグロンは思わず身を乗り出した。

「四要塞が燃えている煙です。ここで我々が戦ったとて、ワイバニアの進軍は最早止められません」

キスールの言葉にレグロンは打ちのめされた。レグロンとて、国境の守備の一端を任される将の一人である。今の状況がどれほど絶望的で、どれほど無意味かは分かっていた。だが、メルキド武人としての彼の矜持が降伏と言う手段を妨げていた。

「司令官！ 副官殿！ 敵軍に動きがありました！」

張りつめていた二人の空気を伝令が打ち破った。レグロンとキスールは司令室の外に出ると、すぐに外が見える城壁へと躍り出た。二人が見たものは白の鎧に身を固めた騎兵ただ一人だった。

第三章 メルキド侵攻 第二十三話

「信じられん……たった一人だと……」

レグロンは敵中に一騎のみで向かう騎兵に驚愕した。

「撃つな！ 間違っても、弓をひいてはならん！」

キスールもまた、はやる兵士達を抑えるため、即座に射撃の禁止を厳命した。騎兵が門扉の前で馬を止めると、重く閉じていた要塞の城門がゆっくりと開いた。

騎兵は場内に入ると馬から降り、兜を脱いだ。すると、金色の美しい髪が華麗に舞い、彼女を取り囲んでいた兵士をことごとく魅了した。

「ワイバニア帝国遠征軍第二軍団長兼最高外交指揮官、マレーネ・フォン・アウブスブルグです。貴軍の降伏交渉の全権特使として参りました。この要塞の司令官にお会いしたく思います」

兵士達は一言も口をきけなかった。まさか、敵軍の司令官が護衛もなくやってくるとは。兵士達は放心した様子でただ槍だけを構えていた。すると、兵士の間から隊長らしき人物が現れた。

「わたしはタツソー要塞第十歩兵中隊長アンバサダーと申します。使者に対する部下の非礼をお許しください。司令官のレグロン閣下まで、わたしがご案内いたします」

マレーネはアンバサダーに一礼すると、彼の後ろに付いていった。

城壁へと昇る階段で、アンバサダーはマレーネに話しかけた。

「信じられないことでしょうが、わたし自身驚いているのです。敵軍の最高司令官の一人が単騎でこの要塞にやってくるとは……使者なら、他の誰かを立てれば良かったものを……」

「他の誰かでは意味がありませんわ。わたし本人が出なければ、こちらの誠意が伝わりませんもの」

「我々はあなたを殺すかも知れないですよ」

「例え、殺されても構いません。それは、わたしの思いが伝わらなかったと言ふことなのですから。わたしはあなた方の命を救いたいたいだけ、それだけのことです」

アンバサダーは彼女の決意のほどを聞き、何も言えなくなった。敵軍がここまで要塞守備兵の命のことを考えているとは。アンバサダーは階段を上り終えると立ち止まり、一瞬目をつむった。

「アンバサダー隊長？」

マレーネは怪訝そうに尋ねた。

「失礼しました。司令官はすぐ近くにいらっしやいます。こちらへ」

二人が歩き出して、三分もしないうちに、マレーネは二人組の軍人の姿を見つけた。鎧からして、兵士のそれとは違う。恐らく指揮官だろうとマレーネは思った。

第三章 メルキド侵攻 第二十四話

「わたしがタツソー要塞司令官、レグロンです」

レグロンはマレーネに挨拶をした。背筋を伸ばし、堂々とした立ち居振る舞いはメルキド武人の意地をマレーネに感じさせた。たとえ戦で負け、剣折れることはあっても、心は折れてはならない。メルキドの誇りをレグロンは身にまもっていた。

交渉の場を司令室に移したレグロンはテーブルにつくなり、マレーネに言った。

「アウブスブルグ公。我々タツソー要塞守備兵は貴軍の降伏勧告を受諾します」

レグロンは冷静に、そして、堂々と言葉を紡いだが、心の中では未だ葛藤の中にあつた。降伏すると言ったものの、その手がわずかに震えているのを副官のキスールは見ていた。

「つきましては、部下に対する寛大な処置をお願いしたい」

レグロンの声がわずかだがかすれた。口上としては申し分のないものだったが、それを受け入れるのは、また違う。この瞬間、メルキドの武人は自分の敗北を、ようやく受け入れたのである。

「ワイバニア軍最高外交指揮官として、そしてワイバニア帝国軍人の名誉に誓ってお約束いたします。貴官のご英断に感謝いたします」

マレーネはレグロンに深く一礼した。

二時間後、メルキド軍とワイバニア軍との間で、タツソー要塞の引き渡しが行なわれた。要塞内の機密情報は処分されたものの、それ以外は万全の状態であり、ワイバニア軍はいささからながらの時間はかかったものの、メルキド侵攻の拠点は無傷で、しかも味方の損害なく手に入れたのだった。

後年、“タツソーの奇跡”と呼ばれたこの戦いは、アルマダの歴史において数少ない流血のない勝利として高く評価されている。

タツソー要塞の引き渡しのと、マレーネは司令官のレグロンを含む守備兵全員を解放した。

「どういうことですか？ 我々は捕虜ではないのですか？」

レグロンはマレーネに尋ねた。

「降伏交渉のとき、わたしはこう申し上げたはずですよ。寛大な処置を、わたしの地位と名誉にかけて誓うと。わたしはただその誓いを守っただけのことです」

マレーネはレグロンをはじめ、タツソー要塞の兵士に向けて微笑んだ。レグロンはマレーネの処遇に感謝すると、何も言わず深々と頭を下げた。武人としての挨拶はこれで全て十分だった。マレーネはレグロンの意思を汲み取ると、静かに振り返り、自軍へと戻っていた。

「我々はあのように見事な武人を相手に戦っていたと言っただけ……」

歩いていくマレーネを見送りながら、レグロンは言った。

「はい。……ところで、司令官はこれからどうなさるおつもりですか？」

キスールは頷くと、隣に立つ上官に尋ねた。

「わたしは戦う。せつかく敵将がくれた命だがな。メルキド武人として国を守るのがわたしの務めだ。わたしは戦う意思のある兵士を連れて、アーデン要塞に向かう。脱落者は多いだろうが、覚悟の上だ」

「わたしもお供します。司令官。今度は存分に我々の力、ワイバニアに見せつけてやりましょう」

敗軍の将である二人は互いに覚悟を決めた。だが、そこには敗北感や悲壮感は微塵もなく、尊敬に値する敵手と再びまみえることのできる、戦士としての喜びに満ちあふれていた。

こうして、星王暦二一八三年五月十日、メルキド公国国境の堅城、アドニス要塞群はわずか一日で陥落した。

第三章 メルキド侵攻 第二十五話

星王暦2183年5月15日、アドニス要塞群陥落の報告を受けたメルキド公国総帥スプリッツァーは最高級軍事指揮官のみを集めた緊急会議を開催した。

この会議に参加したのは、メルキド公国総帥スプリッツァー、メルキド軍最高司令官である大將軍タワリツシ、第一軍団長ヴィヴァ・レオ、第二軍団長ヴィア・ヴェネト、第三軍団長ボナ・ムール。第四軍団長デイサリータ、第四軍団軍師アリー・ゼファー、第五軍団長ローサ・ロツサ、第六軍団長ラシアン・フェイルードであった。

メルキド軍を代表する9人の武人達はメルキド公国公都ロークラインの中央に位置する城宮の一角、大軍事会議室の円卓を囲み、着席した。

メルキド公国国境線が一日にして破られるという、公国始まって以来の危機に、居並ぶ諸将達は一樣に口を閉ざし、会議室は重苦しい雰囲気にも包まれていた。

「まさか、こんなにも早く落とされるとはな」

第一軍団長のヴィヴァ・レオが真一文字に結んでいた口を開いた。

「あの要塞群は五個軍団規模の侵攻を想定して作られたんだ。倍の軍勢相手では早期に落とされるのも頷けるさ」

ヴィヴァ・レオの隣に座っていた第二軍団長のヴィア・ヴェネトが言った。

「わが軍の総力を結集したとして、勝ち目はない。フォレストルへの援軍要請はどうなっている？」

仮面をかぶった第三軍団長のボナ・ムールが尋ねた。

「アドニス要塞群からワイバニア軍侵攻の第一報が着てすぐに使者を出した。だが、まだ国内も出てはいまい。向こうの準備も考えろと、援軍が到着するまで二月はかかるだろう」

最高司令官のタワリツシがボナ・ムールに返した。

「二月か……敵の進撃速度を考えると、ここロークラインも持たないかも知れないわね」

第五軍団長のローサ・ロツサがため息をついた。アドニス要塞群を破ったワイバニア軍は現在、兵力の合流と補給のため、アドニス要塞群の南30キロの地点で動きを止めているが、いつ動き出すかわからない状況だった。メルキド全軍団の2倍の大軍勢、その背後に見える「滅亡」の二文字に会議室は再び重苦しい空気に包まれた。

第三章 メルキド侵攻 第二十六話

「……ロークラインを放棄する」

メルキド総帥スプリッツァーが静かに口を開いた。その一言はスプリッツァー以外の八人を驚愕させるに十分な内容だった。

「公都を放棄すると言つのですか？」

第四軍団軍師のアリー・ゼファーが椅子から立ち上がった。立ち上がったアリーは軍服の裾を少女の手がつかんだ。今年十五歳になる第四軍団長のデイサリータだった。デイサリータはアリーを見上げると、不安げな顔でふるふるすると首を横に振った。

「お嬢様……」

アリーはデイサリータの言わんことを理解すると静かに席についた。

「軍師が驚くのも無理はない。北方にはアーデン要塞があるとはいえ、アドニス要塞群を落とし、領内に侵攻した敵の進撃速度を考えると、ひと月でロークラインの包囲を完了するだろう。そのときにフォレストルからの援軍が到着したとしても、勝ち目は薄い。ならば、我々はさらに奥地まで軍を退き、フォレストルの援軍と合流した後の決戦に賭けるべきだ」

メルキドの若き総帥は円卓を囲む軍幹部達に自らの考えを述べた。

「総帥のお考えは理解出来ました。しかし、問題点がふたつあります」

第六軍団長のラシアン・フェイルードが重く閉ざしていた口を開いた。

「ひとつは決戦場をどこに指定するか。そして、もう一つがアーデン要塞に誰を派遣するかということですよ」

ラシアンの言葉に彼以外の軍団長は動揺を禁じ得なかったが、ラシアンは構わずに話を続けた。

「決戦場を後方に定めるとして、やはり少なくとももうひと月は時間が欲しい。そのためには、我ら六人のいずれかをアーデン要塞に派遣し、守備兵と合わせて、ワイバニア軍を足止めしなければなりませんまい」

スプリッツァーは目を閉じてラシアンの話を聞いていた。スプリッツァー自身、この言葉を口にするのを何よりもためらっていた。この局面での軍団長のアーデン要塞への派遣は軍団長の一人に「死ぬ」と言つに等しいことだった。

第三章 メルキド侵攻 第二十七話

「決戦場はミュセドーラス平野。ここなら、地の利を活かした戦いができる。アーデン要塞に派遣する軍団長は……」

スプリッツァーは口をつぐんだ。目の前にいる6人はスプリッツァーが最も信のおける人間達であり、「死ね」とは到底口にできるものではなかった。国を守るため、非情になれ。そう自分に言い聞かせ、覚悟の上ではなしたはずなのに。スプリッツァーは奥歯を強く噛み締めた。

「ふ……ふふふははは！スプリッツァー。何を迷っているんだ！？お前は。俺が行こう。こんな大役。皆には悪いが、俺しかできない？」

第一軍団長のヴィヴァ・レオがスプリッツァーに言った。ヴィヴァ・レオとスプリッツァーは士官学校時代からの級友であり、君臣の間柄を超えた関係だった。ヴィヴァ・レオは主君への礼をあえて外して、級友に言った。

「俺に任せろ。スプリッツァー。ひと月の時間くらい、俺が稼いでやる。そのかわり、お前はきっちりワイバニアに勝つ方法を考えておけ」

「ヴィヴァ・レオ……」

メルキドを統べる若き総帥はヴィヴァ・レオの方を向けなかった。国を守るためとはいえ、親友の命を犠牲にするのである。義と情に厚いスプリッツァーは自らの決断の残酷さに耐えられずにいた。

「待て。お前にはかりいい格好はさせん。俺も行くぞ」

第二軍団長のヴィア・ヴェネトが言った。彼はヴィヴァ・レオと共闘することが多く、彼ら率いる2個軍団は5個軍団に匹敵するとさえ言われるほどの強さを誇っていた。

「俺だけで十分だ。ヴェネト。守勢に強いお前がいなくては、誰がスプリッツァーを守ると言うんだ？ヴェネト。スプリッツァーと俺の家族を頼む……」

覚悟を決めたヴィヴァ・レオに、ヴェネトは何も言えなかった。ヴェネトは相棒の肩をたたくと、固い握手を交わした。

「死に急ぐな。若いの」

ボナ・ムールが仮面越しに低い声でヴィヴァ・レオに話しかけた。ヴィヴァ・レオは笑って仮面の軍団長に返した。

「ああ、無駄死にはしないさ。俺たちが時間を稼ぐ。だから、勝ってくれ。俺たちを無駄死にさせないためにも」

ボナ・ムールは静かに頷いた。ヴィヴァ・レオの裾を第四軍団長のデイサリータが引つ張った。デイサリータは今にも泣き出しそうな顔でヴィヴァ・レオを見上げていた。ヴィヴァ・レオは優しく微笑むと、少女の頭を撫でた。

第三章 メルキド侵攻 第二十八話

「心配してくれるのかい？嬢ちゃん。ありがとうな。嬢ちゃんも頑張れよ。ワイバニア軍を倒してくれ」

「死な……ないで……」

15歳の少女は大粒の涙をこぼして言うと、ヴィヴァ・レオはばつが悪そうに頭をかいた。

「お嬢様。ヴィヴァ・レオ殿にご迷惑をかけては……」

「いや、いいんだ。アリー」

デイサリータをたしなめようとするアリーをヴィヴァ・レオは止めた。

「嬢ちゃんを守ってやれよ。アリー。何があってもな」

「ヴィヴァ・レオ殿……」

「ヴィヴァ・レオ……」

周囲の声を消すかのように、スプリッツァーはヴィヴァ・レオの名を呼んだ。

「……頼む」

長年の級友の最後の会話はそれだけだった。だが、彼らの間にはそ

の一言だけで十分すぎるほどだった。ヴィヴァ・レオは笑って親指を立てた。

「さて、そうと決まれば、俺は今日中にアーデン要塞に向けて立つとしよう。準備に取りかかりますので、では、失礼」

そう言うと、ヴィヴァ・レオは足早に会議室を出て行った。ヴィヴァ・レオが会議室を出て行くのを見届けると、スプリッツァーは円卓を囲む諸将に命令を下し始めた。

「ヴィヴァ・レオがワイバニア軍を足止めしている間、我々は一刻も早く戦いの準備を整えなければならない。ボナ・ムール率いる第三軍団は、ロークライン市民の脱出の手助けと護衛を頼む」

車いすに腰掛けた仮面の將軍は頷いた。

「デイサリータの第四軍団は補給物資の確保を」

デイサリータとアリーは頷いた。

「タワリツシ、ヴィア・ヴェネト、ローサ・ロツサ、ラシアン・フエイルドはミュセドーラスに先行し、地形を徹底的に調べ上げるんだ」

タワリツシら諸将も頷いた。

「ヴィヴァ・レオの思いを無駄にするな。メルキドの誇りにかけてワイバニアを叩きつぶすのだ！」

スプリッツァーは語気を強め、握りこぶしをつくって言った。円卓

を囲んだ軍団長達は、車いすのボナ・ムール以外は皆立ち上がると、それぞれの任務に向かうため、散っていった。メルキド、ワイバニアの全面戦争が今、始まるうとしていた。

第三章 メルキド侵攻 第二十九話

帝都ベリリヒンゲンにあるワイバニア軍大本営、翼将宮左元帥執務室では、軍人最高位である左元帥のハンス・フォン・クライネヴァルトが忙しく各所に指示を出していた。

ワイバニア、いやアルマダ史上最大の11個軍団による大遠征である。11個軍団分の補給物資の調達と輸送、負傷者の後送に補充兵の補充などの後方支援は困難を極め、これを完璧に指揮しうるのは左元帥のハンスをおいて他にいなかった。仕事を一区切りさせたハンスは自分の椅子の背もたれに体重を預けると、大きく息を吐いた。

「閣下。少しおやすみになってください。このままでは、閣下のお体が保ちません」

左元帥補佐官のアントン・メーリングがコーヒーを差し出して言った。年齢は24歳と若い、よくハンスを支える有能な補佐官だった。

「私も休みたいものだが、なかなか戦いがそうさせてくれないのでな。この戦いが終わったら、休みも考えることとしよう」

メーリングがくれたコーヒーを一口飲んで言った。

「それはそうと、例の件はどうなっている？ 出撃直後に召喚命令は出しているから、そろそろはずだが……」

ハンスは傍らの補佐官に尋ねた。

「予定では、今日着くとのことですが……」

メーリングが言いかけたそのとき、執務室の扉をノックする音が聞こえた。メーリングが出ると、伝令の兵士がハンスが呼んだ士官二人の来訪を告げた。

「すぐ、二人に執務室に来るように伝えよ」

ハンスは伝令に指示を出すと、メーリングに言った。

「メーリング、二人に渡す辞令と、龍の眼を持ってきてくれ。それにしても、この二人が軍団長になると知ったら、ハイネの奴も驚くかも知れん」

ハンスは少し冗談めかした笑みをうかべるのを見た若き補佐官はわずかに苦笑した。軍記に厳しく、常に冷静な雰囲気を持つ左元帥閣下もまた、人の親なのだろう。そのミスマッチにメーリングは笑みをこぼさずにはいらなかった。

メーリングが辞令と龍の眼を用意し終わると同時に、再び執務室の扉をノックする音がした。

「マンフレート・フリッツ・フォン・シラー、ベティーナ・フォン・ワイエルシュトラス。左元帥閣下の召喚命令を受け、参上いたしました」

第三章 メルキド侵攻 第三十話

執務室に入ったシラーとベティーナはハンスに敬礼した。

「遠路はるばるよく来たな。二人とも」

ハンスは二人をねぎらった。シラーはワイバニア北方の拠点都市、ロウィーナで騎兵大隊長を、ベティーナはワイバニア西方の中心都市、ヴォーティガンで守備隊参謀長を務めており、ベリリヒンゲンまで来るのに二人ともそれぞれ、相応の時間を必要としていた。

「マンフレート・フリッツ・フォン・シラー。貴官を第三軍団長にベティーナ・フォン・ワイエルシュトラス。貴官を第七軍団長に任命する」

ハンスは二人への辞令を読み、軍団長への昇進の旨を伝えた。出撃に先駆けて、ハンスも皇帝ジギスムントも、右元帥シモーヌも、第三、第七軍団長は戦力的に不可欠な存在であることは認識していた。緒戦において、皇帝と右元帥が軍団を直率したが、あくまで皇帝と右元帥は全軍を指揮しなければならぬ立場であり、一個軍団規模の指揮は軍団長に委ねる必要があった。

そのため、ジギスムントは出兵前夜、ハンスに新軍団長の人選と任命を委ねたのである。

ハンスが白羽の矢を立てた二人はともに戦術家、戦略家として有能であり、一万人の軍団を率いるに十分すぎる能力と素質を備えていた。

「どうだ。マンフレート。念願の軍団長になった気分は」

「ワイバニア軍人にとって、軍団長を任命されるのは至上の名誉です。帝国のため、全力をとして職責をまっとうしたく思います！」

シラーはハンスの問いに背筋を伸ばして答えた。

「ふ。そんなにしゃちほこばることはないぞ。マンフレート。その格好で言っても説得力がない」

ハンスはシラーの身なりを見て笑った。ぼさぼさのクセっ毛に無精髭、よれよれの軍服。軍記に厳しい指揮官でなくとも、「だらしない！」と一喝することだろう。実際シラーも軍に入ってから以来、幾度となくハンスをはじめ、様々な上官から注意を受けてきた。しかし、何度注意を受けてもシラーは直そうとせず、ハンスもまた、67回目にしていよいよ注意することを諦めた。以後、シラーはワイバニア全軍人20万人の中で唯一「だらしない格好を認められた軍人」になったのである。

「すみません」

ハンスに言われたシラーは苦笑した。シラーの隣でやり取りを見て笑っていたベティーナにハンスは話をふった。

第三章 メルキド侵攻 第三十一話

「ベティーナ。貴公も軍団長になった気分はどうか？」

「私もマンフレートと同じ意見です。ワイバニア軍人として、最上の名誉ですわ」

年齢の割に若く、高い声でベティーナはハンスに返した。ベティーナ・フォン・ワイエルシュトラスは今年28歳。27歳のシラーとは士官学校時代の先輩、後輩の間柄だった。士官学校卒業後、前線の軍団勤務になったシラーとは異なり、翼将宮の参謀本部、左元帥ハンスの補佐官職、地方守備隊の参謀長を歴任、軍を率いた経験はないものの、その作戦立案能力は高く評価されていた。

「ふふ。そうか。遠路ベリリヒンゲンまで来てくれて悪いが、戦況は貴公らの到着を待っている状況だ。明朝すぐにメルキドへ発つてくれ」

「は！了解しました！」

「貴公らの武運を祈る」

二人はハンスに敬礼すると、踵を返し、執務室を出て行った。

「明朝戦場へ……か。相変わらずハンスのおっさんは人使いが荒いもんだ」

翼将宮の廊下を歩きながら、シラーは小さく毒を吐いた。

「ふふ。左元帥閣下のことをそんな風に呼べるのって、あなたぐらいのものよ。ハイネ君と会ったの、楽しみなんでしょう?」

シラーの隣を歩くベティーナは微笑んだ。

「ハイネのことを君付け呼ぶのも先輩ぐらいのもですよ」

シラーもまた笑ってベティーナに返した。ハンスの補佐官を務めていた頃、報告にやってくるハイネをベティーナは殊の外かわいがっていた。左元帥執務室にハイネがやってくる度、ベティーナはハイネをお菓子責めにしたのである。ベティーナにしてみれば、年下のハイネ可愛いだけなのであるが、ベティーナの態度があまりに直接的すぎるので、ハイネは執務室に来る度、この年上の女性の対応に困っていた。

ベティーナのこのような態度は十二軍団長最年少のバルクホルンに対しても同様で、素直なバルクホルンはこの菓子責め苦慮しつつも、ありがたく受け取っていた。

「それはそうと、いけないわ!急いで、ハイネ君とヴィクター君にあげるお菓子を買ってこなくちゃ!じゃあ、また明日ね。シラー」

「せんぱーい。翼竜に乗せられるだけにしてくださいよー!」

廊下を小走りにかけていくベティーナの後ろ姿をシラーは見送った。やれやれ、この調子だと、明日は翼竜がとべなくなるぐらいの菓子を買ってくるだろうな。シラーは明朝の異常事態を思いやり、ぼさぼさの癖っ毛をかいた。

星王暦2183年5月16日午前10時、ワイバニア帝国新第三軍

団長マンフレート・フリッツ・フォン・シラーと新第七軍団長ベテ
ィーナ・フォン・ワイエルシュトラスはメルキド公国の戦場に向け、
飛び立っていった。

第三章 メルキド侵攻 第三十二話

アドニス要塞群から南に三〇キロ離れた平原、ここではワイバニア帝国軍が各地に分かれた軍団の合流と補給のため野営していた。

堅城、アドニス要塞群をわずか一日で陥落させたワイバニア帝国軍だったが、メルキド軍の抵抗は激烈であり、予想以上の損害を出していた。大隊長クラス以上の上級指揮官の戦死者はいなかったが、中隊長、小隊長クラス以上の指揮官の戦死者は数多く、戦力の再編に想定以上の時間を割くことになった。

ワイバニア軍の野营地の中で、ひと際南に位置する第一軍団の野营地、その中央にある軍団長専用のテントの中で、第一軍団長のハイネ・フォン・クライネヴァルトは手紙を書いていた。

「軍団長、よろしいですか？」

テントの外で、副官兼参謀長のエルンスト・サヴァリツシュの声が聞こえた。ハイネはペンを置くと、エルンストを中に入れた。

「どうした？ こんな夜更けに」

「皇帝陛下からの勅令です。明日、午前一〇時より新軍団長の着任式を執り行うため、各軍団長は集合されたし。第一軍団はその後、先鋒としてメルキド公国を南下、アーデン要塞を攻略せよ。とのことです」

表面では忠誠を誓っていても、内心では忌み嫌っている皇帝の勅令である。従うのには正直嫌気がさしたが、従わない訳にもいかなか

った。ハイネは小さくため息をついた。

「分かった。謹んで勅令をお受けすると、使者に伝えよ」

「は……お手紙ですか？」

エルンストはハイネの机の上に視線を移した。

第三章 メルキド侵攻 第三十三話

「ああ。彼女が寂しがると思ってたな……」

ハイネは顔を少しだけ赤くして、恋人への手紙を裏返した。普段は感情の起伏を見せない冷静な軍団長の意外な一面を見たエルンストは少し笑った。

「……ところで、貴公はどうだ？ 奥方は寂しがることはないのか？」

ハイネは自分の表情をごまかすかのように、エルンストに尋ねた。

「私の妻は『軍人の妻になったら、いちいち夫がいなくて寂しいなんて言ってもらえないわ』と笑って私を送り出しましたが、息子達はまだ小さいので、今頃は寂しがっているかもでしょうなあ」

長く伸びた前髪を後ろに撫で付けた副官はベリリヒンゲンに残した家族のことを思い、しみじみとした声で言った。

「本当は、戦いなどなければよいのだが、一度始めてしまったものは仕方がない。このような戦いなど、早く終わらせねばなるまいなエルンスト」

「はい。私はそれができるのは軍団長だけと信じています。……それでは、報告に行つて参ります」

エルンストはハイネに一礼すると、テントを出て行った。

「本当に早く終えなければなるまいな」

テントの中で、ハイネは一人つぶやいた。この大親征は過去例を見ないほどの規模である。十一万を超える大軍にメルキドとフォレスタルは蹂躪され尽くすことだろう。だが、力に頼る戦いはいつか必ずほころびが出る。ハイネは親征に対する漠然とした不安を感じずにはいられなかった。

第三章 メルキド侵攻 第三十四話

星王曆二一八三年五月二十一日、ワイバニア軍野営地の中心、皇帝専用の大型テントの中で、軍団長の就任式は行なわれた。うち、帝国内土防衛を命じられていた第十軍団長のジークムント・フォン・ネルトリンゲンをのぞくすべての軍団長がテントの中に集まり、新しい軍団長の到着を待っていた。

「新しい第三軍団長は一体誰だ？」

第五軍団長のヴァルター・フォン・ブツバルトが隣に立つ第八軍団長のゲオルグ・ヒツパーに尋ねた。

「さあ、だが、相当の手腕の者にちがいない。あのヨハネスの後任になるわけだからな」

「ロウイーナの騎兵大隊長だと僕は聞きましたよ」

二人の会話の間に第十二軍団長のヴィクター・フォン・バルクホルンが割って入った。

「あのロウイーナの騎兵大隊長だって！？ よく石頭のシュティルナーが納得したな」

ヴァルターがヴィクターの話聞いて驚いた。

「何でも、左元帥閣下が直々に説得されたとかで……」

十二軍団一の情報通であるヴィクターは少し恐縮したように言った。

「来たみたいよ」

第九軍団長のマルガレーテが言うが早いのか、皇帝のジギスムントが右元帥のシモーヌを引き連れて入ってきた。

「諸將よ。集まっているな。知つての通り、新任の第三、第七軍団長が本日到着した。ワイバニア帝国皇帝ジギスムント一世の名において、この二名に、第三、第七軍団長を任命するものとする。二人とも、入るがよい」

皇帝に呼ばれた二名の新任軍団長がテントに入ってきた。礼装に身を包んだ二人の姿を見た冷静無比な第一軍団長は目を見開いた。

「マンフレート・フリッツ・フォン・シラー」

「はっ！」

「貴公を第三軍団長に任命する。ベティーナ・フォン・ワイエルシュトラス」

「はい……」

「貴公を第七軍団長に任命する。余の覇業を助けよ」

「は！ 龍の旗に誓つて！」

二人はジギスムントの背後にかかるワイバニアの国旗に宣誓した。この瞬間、シラーとベティーナは正式に軍団長になったのだった。

第三章 メルキド侵攻 第三十五話

就任式を終えた二人は、先輩となる軍団長たちと挨拶を交わした。新しい仲間を歓迎するもの、冷淡な対応をするもの、軍団長の対応はそれぞれだったが、おおむね、二人の就任を良く思っているようだった。ひととおりの挨拶を終えたシラーはハイネに話しかけた。

「久しぶりだな。ハイネ。カルデーニ才要塞を落とした手腕。さすがだな。親友として、尊敬の至りだ」

「賞賛の言葉、ありがたく受け取っておこう。それにしても、お前が第三軍団長になるとは、正直驚いた。よくシュティルナー閣下が許したものだ」

ハイネはシラーに言った。シラーが第三軍団長になれたことはハイネにとっても驚くべきことだった。それは、シラーに軍団長たる資格がないと言ふことではなく、シラーの上官が彼を手放すはずがないと考えていたからに他ならなかった。

ワイバニア帝国軍の組織は正規軍である十二軍団と地方都市の治安維持、反乱征討を目的とする地方軍の二つに分かれる。地方軍は左元帥直轄の組織であり、その下に東西南北を守護する方面司令官と方面軍が存在する。方面司令官の地位は軍団長と同格とされ、人格能力ともに相応しい人材が配置されていた。シラーが属していた北方方面軍は地方軍の中でも最大の勢力を誇り、ロウイーナ守備隊長兼北方方面軍司令官アウグスト・シュティルナーは上位軍団長にも匹敵する能力の持ち主だった。

しかし、優秀な能力とは裏腹に、シュティルナーは頑固者で知られ、

気に入った部下や子飼いの部下は、例え元帥の命であっても転属させないと言うことで有名だった。ハイネも他の軍団長もそのことを知っていたので、シラーが軍団長として昇進、転属するということは天地がひっくり返るほどの出来事だったのである。

「お前のだらしなさにさしものシュテイルナー閣下も辟易したのかも知れんな」

第三章 メルキド侵攻 第三十六話

ハイネは珍しく皮肉を言った。ハイネにとっても、シラーは親友であり、気の置けないともだった。ハイネにしてみれば、唯一「俺」「お前」と呼べる人間であり、シラーと話している時間こそが唯一、青年ハイネ・フォン・クライネヴァルトに戻ることができる時間だったのである。

「そんなことはないぞ。俺のスタイルを唯一理解してくださったのがシュティルナー閣下だったからな。だいいち、男の価値と言うものは外見ではなく、内面で決まるものだ」

シラーは眉目秀麗な主席軍団長に抗議した。「男の価値は内面で決まる」というのはシラーの持論であり、行動原理だった。彼は外見を注意されながらも常に戦場では、武勲を立てており、逆に言えば、彼の武勲と能力からしてみれば、だらしのない格好と生活は大した問題とはならなかった。

「お前のその持論は聞き飽きた。軍団長になったのだから、そろそろ、その生活態度は……………」

ハイネが親友に説教し始めたその時、ハイネの視界がいきなり暗闇に閉ざされた。

「ハイネ君。だーれだ？」

やや高く、若々しい声を聞いた瞬間、ハイネは憤怒の形相になり、腰に差した愛剣を抜くと、振り向き様の一挙動で背後の相手に一閃した。さながら、閃光に似た一瞬の一撃である。相手もひとたまり

もないと思われたが、次の瞬間、信じられない光景にハイネは目を見開いていた。ハイネの斬撃が受け止められていたのである。ハイネの後ろにいたシラーは思わず口笛を吹いた。

第三章 メルキド侵攻 第三十七話

「……………貴公」

ハインは必殺の斬撃を受け止めた新軍団長を睨みつけた。

「久しぶり！ハイン君。……………いきなりでびっくりしたな。もう」

新第七軍団長のベティーナが屈託のない笑顔で言った。

「よく言う。私の剣を苦もなく受け止めた手練が……………」

ハインは愛剣をさやに納めて言った。ハインにとって自分の領域に
ずかずか入り込んでくるベティーナは最も苦手とする人間だった。
ベティーナがハンスの補佐官を務めている時分も何かと菓子を持た
せるベティーナに戸惑っていたが、何よりも友人でもないのに馴れ
馴れしく接してくる態度がハインには理解出来なかった。いつしか
ハインはベティーナに敵対心に似た感情を抱くようになったが、ベ
ティーナ自身はただ「可愛い男の子がじゃれている」という程度の
感覚しか持たなかったのである。

「そんなの偶然だよ！あ、ハイン君のためにお菓子たくさん買って
きてあげたんだよ！ほら」

そう言うと、ベティーナは懐から菓子の袋を取り出した。

「何度も言わせるな。私は甘い物が嫌いだ」

菓子袋をふるふると振るベティーナにハイネは冷然と言った。

「嘘だあ！ハイネ君、お菓子大好きなの知ってるよ。いつも机の引き出しの中に入れてるでしょ!？」

「な!！」

ベティーナの一言にハイネの顔は真っ赤になった。眼にもとまらぬ早さでハイネはシラーの方を振り返ると、シラーは慌てて首を振った。

「私が左元帥閣下の補佐官だったのはハイネ君だって知ってるでしょ?ちゃんとハイネ君のことはお父さんから聞いてるんだから」

ベティーナは嬉しそうに言ったが、反面、ハイネの顔は蒼白になっていた。なんとと言う始末の悪いことか。最も知られたくない相手に自分の私生活が筒抜けになっているのだから。ハイネは頭痛の種に悩まされることのないこれから先の遠征の日々を呪った。

第三章 メルキド侵攻 第三十八話

「とにかく、いらぬ」

「本当に？ 補給物資だつて、なかなか甘い物は届けないだろうし、いいの？ ハイネ君」

「くどい！」

ハイネにとっては悪魔のささやきにしか聞こえないベティーナの一言を一喝し、ハイネは自軍の宿舎に戻ろうとしたが、一人の男に道を塞がれた。

「あ、すみません！ すみません！ クライネヴァルト軍団長！ ベティーナさん。お久しぶりです」

第十二軍団長のヴィクター・フォン・バルクホルンがベティーナに声をかけてきた。ハイネは帰るタイミングを失したとシラーの隣で二人のやり取りを見守ることにした。

「久しぶり、ヴィクター君。軍団長としてはわたしの方が後輩ね。よろしくご指導お願いします。先輩」

「いや、僕なんて、その……全然、ひよっこですから。先輩の軍団長なら、そこに、クライネヴァルト軍団長という、立派な軍団長がいるじゃないですか」

「だめよ。ハイネ君、わたしに冷たいんだもの。その点、ヴィクター君は殊勝で立派だわ。はい、ご褒美にお菓子あげるね」

ベティーナはヴィクターに菓子袋を手渡した。

「ありがとうございます。あ、ケルンのお菓子じゃないですか！
僕、ここのお菓子好きなんです！」

「よかったわ。ヴィクター君が喜んでくれて。ところで、ハイネくん。ハイネ君も好きだよ。ケルンのお菓子」

ベティーナはハイネに見せつけるように菓子袋を振った。

「新製品なんだけどなあ。これ。ヴィクター君にあげようかなあ？」

「え？ クライネヴァルト軍団長がお好きなら……」

ヴィクターが言いかけた刹那、ハイネは顔を真っ赤にさせてベティーナが持っていた菓子袋を奪い取って言った。

「誰にも……言うな……！」

ハイネは振り返ることなく、長く伸びた金髪と真紅のマントを翻してテントを出ていった。十二軍団最年少の軍団長は普段の冷静な第一軍団長のギャップに目を白黒させていた。

「クライネヴァルト軍団長のおんな顔、はじめて見ました……」

「そう？ わたしの前じゃ普通よ」

「先輩が特別すぎるんですよ。俺の前だって見せませんよ。ハイネのおんな顔」

シラーがあきれ顔で言った。

「先輩も、軍団長になったんだから、少しはあいつをからかうの止めた方がいいですよ。部下達に示しがつきませんからね」

シラーは柄にもなく恐ろしいほど真面目なことを先輩に忠告した。

「えー。面白いんだけどなあ。ハイネ君をからかうの」

ベティーナはむくれ顔をするとシラーに不平を言った。

「だめです。さあ、行きましようか。部下達に挨拶をしなくてはならないし」

そう言うと、シラーはベティーナの手を引いてテントを出て行った。

「……………えへへ」

テントの中に一人残されたヴィクターはケルンの菓子袋を抱きしめた。久しぶりに故郷のベリリヒンゲンの味が食べられる。少年の面影を残した若き軍団長はひそかに微笑んだ。

星王暦二一八三年五月二十一日午後、補給と戦力再編を終えたワイバニア軍はメルキド公都ロークラインに向けて、再び進軍を開始した。

第三章　メルキド侵攻　第三十九話

星王暦2183年5月21日午後、補給と戦力再編を終えたワイバニア軍はメルキド公都ロークラインに向けて、再び進軍を開始した。星王暦2183年5月25日、ヴィヴァ・レオ率いるメルキド軍第一軍団は公都防衛最終拠点であるアーデン要塞に入城した。

アーデン要塞のあるアーデン盆地は二つの峻険な山脈の境に位置し、古くから公都ロークラインとメルキドの北部地方を結ぶ、交通の要衝として知られていた。ワイバニア軍もまた、この盆地の重要性は認識しており、最短でロークラインまで侵攻するにはアーデン要塞を攻略することが絶対不可欠だった。

「これは……………」

アーデン要塞に到着したヴィヴァ・レオは驚いた。思わぬ先客がすでに要塞にいたからである。ベリクリーズ要塞とタツソー要塞の敗残兵、約5,000名が要塞の守備についていた。

「ヴィヴァ・レオ閣下！」

ヴィヴァ・レオの姿を見つけた元タツソー要塞司令官レグロンがやってきた。

「レグロン！生きていたか」

「はい。敵の軍団長に命を救われました。タツソー要塞守備兵2,000名、閣下のお役に立ちたく思います。ボルガ率いるベリクリ

「ズ要塞守備兵3、000名も同じ思いです」

「そうか、ありがとう」

ヴィヴァ・レオはレグロンに礼を言うと、固い握手を交わした。レグロンを見送ったヴィヴァ・レオは頭を抱えた。

「まいったな……」

約5、000の兵力が増えたことで、要塞守備兵を含め、ヴィヴァ・レオが指揮するメルキド軍の総兵力は約2万にふくれあがった。兵力の面から言えば、予想外の戦力の増強であったが、補給、長期戦の観点から見れば、5、000の兵は足かせになっていた。

第三章 メルキド侵攻 第四十話

アーデン要塞はもともと、防衛拠点として他の要塞に比べて多くの兵士が駐留出来るように作られているが、地理的な状況を鑑みても、一個軍団の収容が限界だった。加えて、身一つで要塞にやってきた5,000人分の武器、武具を用意しなければならず、第一軍団がやってきたときには要塞の物資の備蓄はそこを尽き始めていた。ヴィヴァ・レオも長期戦に備えて、多くの物資をかき集めてきたが、2万の兵ではじきに限界に達するであろうと予想された。

実際のところ、ワイバニア軍は寛容さと慈悲だけで捕虜を解放した訳ではない。大勢の兵を捕虜にしたのでは、ワイバニア軍の物資が先に尽きてしまう。しかし、解放して皆なり、要塞なりに立てこもって戦った場合、彼らが敵の物資を食いつくし、戦局を有利に運んでくれる。マレーネやハイネが捕虜を解放したねらいは実はそこにあった。

「ひと月保つかどうか……バクチだな」

ヴィヴァ・レオは当初の作戦案を練り直す必要に迫られていた。

星王暦2183年5月26日、ワイバニア軍最先鋒の第一軍団がアーデン盆地の入り口にさしかかろうとしていた。

「これは……聞きしに勝る光景だな」

第一軍団長のハイネは思わず息を飲んだ。ハイネの眼前には垂直に切り立った絶壁が東西数十kmに渡ってそびえ立っていた。"グレート・ウォール"と呼ばれる大絶壁である。遙か太古、伝説の時代、

神々と人間が相争っていた時代、神の一人が山脈を神剣で切り裂いたと言われている交通の難所だった。

「神が切り裂いた絶壁。……まったく、我々がどれだけ小さな存在かを思い知らされますな」

「そうだな……」

ハイネは副官兼参謀長のエルンストの言葉をやや自嘲気味に笑った。若くして帝国の軍団長の位にもついた。慢心はないが才幹について自負はある。だが、目の前に存在する絶壁はそんな己すら、とるにたらない存在だと感じさせてしまう。神のいや、自然の何と言う偉大なことか。ハイネは自然に対する畏敬の念と言うものを久しぶりに感じていた。

「後方の軍団と陛下に報告せよ。第一軍団はアーデン盆地に到着したとな」

ハイネは部下に命じると再びグレート・ウォールに視線を戻した。もの言わぬ絶壁は万を超える軍勢を静かに、そして冷然と押し続けていた。

第三章 メルキド侵攻 第四十一話

ワイバニア軍がアーデン盆地に到達したのと時を同じくして、ヴィヴァ・レオは幹部を要塞内部の作戦室に集めていた。

参加した将校は元ベリクリーズ要塞司令官ボルガ、元タツソー要塞司令官レグロン、アーデン要塞司令官マルルウーだった。

「我々はうつて出る」

会議室の円卓を囲んだ諸將を前に、総司令官のヴィヴァ・レオは言い放った。

「お待ちください、閣下。ここは籠城戦の方が良いものではありませんか？フォレストルと我が軍主力が合流し、決戦のための時間を稼ぐと言うことが今回の我々の戦略目的と考えます。要塞から出て戦ったとして、十分な時間は稼げないではないでしょうか？」

マルルウーはヴィヴァ・レオに言った。要塞戦の専門家のマルルウーにしてみれば、わざわざ難攻不落の要塞から出て戦うというヴィヴァ・レオの案は納得しかねるものだった。

「たしかに援軍が期待出来るものなら、籠城するのが相応しいだろう。しかし、今回は援軍を期待出来ない。今回の作戦の骨子は敵軍を奇襲し、その心胆を寒からしめることによって、敵の進撃速度を緩めることにある。なあと、うまくいけば、ワイバニアの皇帝だつてうち取れるかも分からんぞ」

そう言うと、ヴィヴァ・レオは作戦の詳細を説明し始めた。ヴィヴ

ア・レオの作戦案を聞いたマルルウーは頷き、籠城案を捨てることを了承した。

「いいか！この戦いはまず初戦が肝心だ。負け戦には違いないが、せいぜい奴らを震え上がらせてやるう！」

ヴィヴァ・レオは幹部達に呼びかけた。レグロン、ボルガ、マルルウーは立ち上がるとヴィヴァ・レオに敬礼し、任務へと散っていった。

「少しでもあいつらを戦いやすくさせてやらなければな……スプリッツァー。あとは頼んだぞ」

一人残った作戦室でメルキド六軍団最強の指揮官はつぶやいた。大胆、剛毅と言う言葉が最も良く似合うヴィヴァ・レオに悲壮の影が付き従っていた。

第三章 メルキド侵攻 第四十二話

ハイネに遅れること約三時間あまり、ワイバニア帝国皇帝ジギスメントもアーデン盆地入り口、グレート・ウォールに差し掛かった。

「俺を威圧するか。身の程知らずな壁よ」

ジギスメントはそびえ立つ絶壁を馬車の窓越しに見て嘲笑した。父の時代、難攻不落と言われたアドニス要塞群を陥落させ、今はメルキドの奥深くまで侵攻している。世界制覇など、存外容易いものだ。支配者になったのちは……

「楽しそうね。ジギスメント」

艶やかな声がジギスメントの思考を止めさせた。向かいに座っていた右元帥のシモーヌがジギスメントにぶどう酒を差し出した。

「ああ、楽しいさ。シモーヌ。世界をこの手にしつつあるのがわかる。メルキド人の流血に比例してな。俺は父にも歴代のワイバニア皇帝にもなし得なかつた覇業を、絶対支配者への階段を一步一步上り詰めているのさ。これが楽しまずにいられるか」

「ふふふ。でも、上ばかり見て、足下を見なければ思わぬときに足をすくわれることがあるわよ」

「ああ、わかっているさ」

体をくねらせて近づくと妖艶な右元帥をひきよせ、ジギスメントは唇

を重ねた。シモー又は唇をつけたまま、皇帝に身を預けた。馬鹿な男、自分の野望にだけ目がくらんで、敵をまともに見ようとしなかった。シモー又はジギスムントと体を重ねながら心の中で彼をあげていった。

星王暦二一八三年五月二六日午後、メルキド軍はワイバニア軍の捕捉に成功した。というより、狭隘なアーデン盆地の中では、大軍であるワイバニア軍の全貌など、丸見えであった。

ワイバニア軍十一個軍団、十一万人は長蛇の陣を敷いて盆地を南下していた。その長い隊列はさながら天を翔る龍のようにどこまでも長く続いており、見張り所のメルキド兵達に恐怖心を与えていた。

第三章 メルキド侵攻 第四十三話

「来たか……」

ワイバニア軍来たるの報を受けたヴィヴァ・レオはアーデン要塞守備兵を除いた全軍に出撃を命じた。ワイバニア軍全軍が恐怖した”悪夢の夜”の幕開けである。

「陛下をお守りするのには名誉の中の名誉だ。お前達、気を引き締めろよ」

長蛇の陣の中央、皇帝専用の馬車近くで愛馬に乗っていた第五軍団長ヴァルター・フォン・ブッフバルトは部下達に言った。ジギスムントは皇帝守護軍団として、第五軍団を指名していた。これは十二軍団の中でジギスムントが信用出来る軍団長の中で最上位だったのがヴァルターだったためである。ハイネは皇帝を忌み嫌っていたし、マレーネもグレゴールも皇帝とは距離を置いていた。シラーは新任であるため、軍団長の力量としては未知数であったので、信がかけると言う訳ではなかった。

その点、ヴァルターは裏表のない性格で同僚にも、部下達にも慕われており、その裏表のなさが皇帝にとっては「御しやすい」と判断されたのであった。

ヴァルター自身にしても、ワイバニア帝室とワイバニア軍に対して忠誠を誓っていると考えており、皇帝守護を任された時は素直に喜んだ。

「背筋を伸ばせ、胸を張れ。俺たちは他の軍団にはできないことを

やっているのだからな」

ヴァルターは背筋を伸ばした。部下達は珍しくあからさまなポイント稼ぎをしている軍団長を見て、笑っていた。

「なあ、こんな杭をいっぱい立てて、何するんだ？よいしょとよいしょと！」

「さあ、何でも、今回の作戦に使うらしいぜ。よいしょと！」

ワイバニア軍前方の丘陵地で、メルキド軍の兵士達は身の丈ほどもある杭をうちつけていた。

「お前ら、口だけでなく、体動かせよ」

二人を注意した兵士が杭にたいまつをくくりつけていた。

「うるさいな。お前の方が楽だろう。たいまつをくくりつけるだけなんだからな。……それにしても、どれだけ杭をうてばいいんだ？」

三人の眼前には、すでに三千本あまりの杭が丘に打ち付けられていた。

「今日の夜までに、あと五千本だとさ」

「間に合うかどうか、ぎりぎりだな」

杭をうっていた兵士はため息をついた。

「だが、これで奴らに一泡吹かせられるかもしれないんだ。やってやるうぜ」

三人は顔を見合わせると作業を再開した。敗北の中の勝利を信じて。

翌5月27日、ヴィヴァ・レオ率いるワイバニア迎撃軍1万5千は戦場となる丘陵地に布陣した。

第三章 メルキド侵攻 第四十四話

「まだ、ワイバニア軍は来ていないな。全軍、所定の場所で待機」

ヴィヴァ・レオは部下達に命じた。空がオレンジ色に染まる頃、ワイバニア軍正規軍11万がヴィヴァ・レオらメルキド軍の前に姿を現した。

「さすがはワイバニア軍。堂々たる進軍だ。全軍、このまま待機。夜を待つて攻撃を仕掛けるぞ」

ヴィヴァ・レオはワイバニア軍の陣容を賞賛し、改めて攻撃の時間を全軍に通達した。ヴィヴァ・レオの率いる兵力は1万5千、11万のワイバニア軍とは7倍近い差がある。起死回生の一撃を与えるためには、夜襲しか方法はなかったのである。ヴィヴァ・レオ率いるメルキド軍は息を殺し、襲撃の時を待っていた。

「全軍を停止させよ。今夜はここで野営する。」

ジギスムントは全軍を停止させた。すでに敵中深く入り込んでいるが、兵は休養させねばならない。ジギスムントの判断は正しくもあったが、今回この場においては誤りだった。また、大軍で進軍してきたことがジギスムントの気持ちを緩ませていた。

「この大軍を相手にそうそう戦いを仕掛けてはこまい。ゆっくりと休めば良い」

余裕のなせる業か、慢心によるものか、この日のジギスムントは饒舌だったという。

星王曆2183年5月27日深夜、眠りについたワイバニア軍の夢が悪夢に変わる瞬間がやってきた。

「お眠りのところ悪いが、奴らの目を覚まさせてやろう。全軍たいまつに火をつける！作戦開始だ！！」

ヴィヴァ・レオは作戦開始の命令を出した。ほどなくして、ワイバニア軍の前方、そして左右の兵に数万のたいまつが輝いた。

第三章 メルキド侵攻 第四十五話

「軍団長！敵襲です！！その数、約3個軍団！！」

「なんだと！？」

伝令の声にハイネは目を覚ました。寝間着のまま、ハイネはすぐさま指示を出した。

「直ちに第一、第二歩兵大隊を前方に展開。敵の攻撃を防ぎ、全軍展開までの時間を稼がせよ」

「了解！！」

伝令はすぐにテントを出て行った。

「さあ、皆。恩を仇で返すのは不本意だが、祖国を守るため、メルキド人の誇りを示すため、今こそ戦いの時だ。全軍、突撃！！」

第一軍団の前方に展開していた部隊2,000人を率いるレグロンが剣を引き抜いて号令した。メルキド兵はレグロンの号令一下、たいまつを掲げて丘を駆け下りていった。

「全軍かかれ！！メルキドの武勇をしかと、見せてやれ！！」

ワイバニア軍左翼に展開中の3,000人を率いるボルガも指揮杖をふって言った。

「一体何が起こったんだ！！？」

「メルキド軍の奇襲だ！大軍だぞ！！」

寝込みを急に襲われたかたちになったワイバニア軍は混乱を收拾出来ず、その巨体をのたうちまわらせていた。

「敵軍、約3万だって！？」

ガウンを着た新第三軍団長のシラーはテントからのっそりと体を出した。彼の周囲では、慌ただしく兵士達が走り回っていた。

「迎撃するぞ。陛下をお守りするのだ。龍騎兵は出すな。この闇だ。同士討ちになるからな。歩兵大隊で時間を稼げ！」

シラーは左翼の守りを固めるため、いち早く行動に移った。シラーの第三軍団はヴァルターの第五軍団のすぐ後ろに続いており、より柔軟に対処することができた。

「まずは、情報収集よ。前方と左右の軍の数と情報をできるだけ詳しく教えなさい」

第五軍団の前方に位置する第七軍団を率いるベティーナも寝間着のまま行動を起こしていた。彼女は兵達のパニック状態を抑えるため、即座に情報収集を命じた。

「今、一番厄介なのは左翼の敵軍ね。私達も第三軍団の援護をするわよ」

ベティーナは部下に命じた。

第三章 メルキド侵攻 第四十六話

「さあ、声をはりあげろ！たいまつも盛大に燃やせ！！ここでけちつたら、後々までの笑い者だぞ！」

ボルガ指揮下の歩兵中隊長が叫んだ。メルキド軍はさも大軍であるかのように錯覚させるため、兵士に大声を上げて突進させていた。たいまつも同様で、丘に大量にかかげ上げられたたいまつはボルガ、レグロン指揮の小部隊を一個軍団規模に見せることに成功していた。

「軍団長、我々はどうすればよいでしょうか？」

「陛下をお守りする。それ以外に我々の役目はない。右翼の敵軍から目を離すな」

幕僚の一人に第五軍団長のヴァルターは言った。皇帝守護を役目とする第五軍団はおいそれと動く訳には行かない。右翼の敵も不可思議だ。たいまつをかかげたまま一向に動く気配がない。もしかしたら、右翼は陽動ではないか。ヴァルターの心に迷いが生じはじめていた。

「陣形転換！魚鱗の陣から鋒矢の陣へ！敵陣を突破するぞ！」

第一軍団の歩兵の壁を見たレグロンは陣形の転換を図った。だが、歩兵二個大隊とはいえ、ワイバニア最強の誉れ高い第一軍団の守りは固く、突破は困難を極めていた。

「敵軍もやるものだな。我が第一軍団を相手に。だが、妙だな」

馬上から敵軍を賞賛したハイネは顎に手をあてて考え込んだ。

「確かに妙ですな。敵軍は突進力こそありますが、厚みがない。・・・陽動の可能性があります」

ハイネの傍らにいたエルンストが言った。

「貴公もそう思うか。いつでも反転出来るようにさせておけ。後続の軍団が危険だからな」

「陛下が」と言わないのがいかにもハイネらしい命令だった。それほどハイネはジギスムントのことを嫌っており、指示を受けたエルンストも不謹慎ながら思わず苦笑した。

その頃、ボルガ率いる部隊は苦戦の最中にあつた。

「全隊後退！敵軍と距離をとって、矢で射かけよ！」

ボルガは前進と後退を繰り返して、兵力で上回るワイバニア軍相手に善戦していた。寝込みを急襲され、第三、第七軍団に実働可能な兵力が少なかったことが彼に幸いした。

「やるもんだなあ。敵も。防御を徹底しろ」

「側面が手薄よ。第二歩兵大隊は左翼に迂回、敵を側面攻撃しなさい」

シラーが守り、ベティーナが攻める。二人の間立ったコンビプレーが展開され始めていた。

第三章 メルキド侵攻 第四十七話

その頃、右翼の丘を警戒していたヴァルターは目を見開いた。

「右翼の丘のたいまつは兵力を分散させるための罠だ。全軍、左翼へ向かえ。敵の本隊を三個軍団で叩きつぶす！」

ヴァルターは全軍に方向転換の命令を出した。第五軍団が慌ただしく左翼に向けて動き出すのをヴィヴァ・レオは見ていた。そのまなざしはさながら獲物を狙う虎のようだったと傍らの副官は手記に残している。

第五軍団全軍が方向転換を終え、ボルガ隊に向かおうとした時、ヴィヴァ・レオの右手がゆっくりと振り下ろされた。その瞬間だった。丘が震えた。

今まで聞いたことのない大音響の叫び声がワイバニア軍の鼓膜に響いた。

たいまつをかかげることもなく殺気をみなぎらせたメルキドの第一軍団の最精鋭がヴァルター率いるワイバニア第五軍団の背後を急襲した。

「なんだ！？いったい何が起きたんだ！？」

「ぎゃあああああ！……！！！」

漆黒に塗られた鎧を身にまとったメルキド第一軍団は虚をつかれた

ワイバニア軍兵士を次々と殺していった。

「へ、陛下をお守りするのだ。直ちに歩兵大隊を向かわせる！」

メルキドの奇襲を聞いたヴァルターは皇帝守護の職責を全うしようとしたが、ヴァルター個人にとってはこれが裏目に出た。戦力の立て直しもできぬまま、貴重な兵力を割くことになったのだから。

ヴァルター率いる兵力は9,000、対するヴィヴァ・レオ率いる兵力は10,000。指揮官としての能力、兵士個人の精強さはメルキドが上回っており、さらに背後を突かれた心理的影響もあって、ヴァルターの第五軍団は総崩れとなり、各大隊が壊滅に近い打撃を受けていた。

「あそこが司令部か。騎兵大隊と第一歩兵大隊、第一巨兵大隊を投入する。魚鱗の陣で突っ込め！」

ヴィヴァ・レオは愛剣を引き抜くと、高らかに号令した。ヴィヴァ・レオは直率する兵力の3分の1をここぞとばかりにヴァルターの司令部に叩き付けた。司令部直衛大隊は参謀などの幕僚、伝令兵、司令部設営隊など、実戦力をほとんどもなわない場合が多い。いかに勇猛でならずワイバニア第五軍団と言えど、鍛え抜かれたメルキド最強の第一軍団の敵ではなかった。

ワイバニア兵達は陣幕を、そしてアーデン盆地の地面を紅く染め、次々と死んでいった。

第三章 メルキド侵攻 第四十八話

「軍団長、お逃げください。すぐそこまで敵が迫っています」

血まみれの伝令兵がヴァルターに敵が目前まで来ていることを知らせた。気が張っていたのだろう。伝令兵は彼に敵軍襲来を告げると崩れ落ち、そのまま息絶えた。

伝令兵の死から1分とたたずに、ヴァルターの眼前に黒の鎧を着たヴィヴァ・レオが現れた。

周囲からは怒号、叫び声が響き渡っていたが、二人がいる陣幕の中は、恐ろしいほど静かだった。

「私はメルキド軍第一軍団長ヴィヴァ・レオ。ワイバニア第五軍団長、ヴァルター・フォン・ブッフバルト殿とお見受けする」

「いかにも」

対峙した両雄は短く挨拶を交わすと、お互い愛用の武器を手にした。ヴィヴァ・レオは大剣、ヴァルターは槍の穂先に斧が取り付けられたハルバードをそれぞれ構え、互いの敵手に相対した。

わずか、数秒の間だろうか。二人には周囲の世界全てが消え、音も目の前の戦いの風景そのものも完全に消えた世界が現れていた。二人の間にあるのは達人同士が持つ裂帛の気合いを発した張りつめた空気だけだった。

その異様な世界を戦いがかき消した。陣幕がやぶれ、メルキド兵と

ワイバニア兵が同時に現れたのである。

ヴィヴァ・レオもヴァルターもかっと目を見開き、それぞれ必殺の一撃を放った。先に仕掛けたのはヴァルターだった。地にめり込むほど足を踏み込み、重さと速さを兼ね備えた一撃をヴィヴァ・レオに見舞った。一瞬の閃光とも讃えられる一撃をヴィヴァ・レオは大剣でさばくと、さらに回転をかけた斬撃を無防備のヴァルターに与えた。こちらにも回転による重さと速さがくわわった斬撃である。ヴァルターは半身を一瞬にして両断され、息絶えた。

「軍団長！」

荒く息を吐くヴィヴァ・レオに兵士が駆け寄ってきた。

「皇帝は……どうだ？」

ヴァルターの遺体を運び出そうとするワイバニア兵を見ながらヴィヴァ・レオは尋ねた。

「申し訳ありません。……まだ……」

「そうか。引き上げるぞ。そろそろ奴らも気づく頃だ」

ヴィヴァ・レオは全軍に撤退命令を出した。ヴィヴァ・レオの兵力ではワイバニア軍にかなうはずがない。陽動部隊がワイバニア軍を引きつけている間がメルキド軍の活動出来る限界だった。

夜の闇にまぎれて、メルキド軍は早々と兵を引き上げた。この戦いのメルキド軍の損害は380名、対するワイバニア軍は5,400名にも及んだ。その中には、第五軍団長ヴァルター・フォン・ブツ

フバルトを含め、多数の上級指揮官がいた。

第三章 メルキド侵攻 第四十九話

「何と言うことだ！ 敵に奇襲を許したあげく、余を危険にさらすとは…… 皇帝守護にあるまじき大失態だ！」

戦いの後、命からがら戦場を離脱することができたワイバニア皇帝ジギスムントは激怒した。彼はメルキド軍が皇帝専用テントに迫る寸前、ヴァルターが遺した歩兵一個大隊に守られ、窮地を脱していた。それでも命の危機に瀕した皇帝の怒りは凄まじく、戦場から派鳴れる間ずっとヴァルターをののしっていた。

「ヴァルター・フォン・ブツバルトの軍団長称号を永久剥奪。ブツバルトの生家、ブツバルト男爵家は家名断絶の上、一族に北方での強制労役を課すものとする」

怒りで全身の血液が沸騰している若き皇帝は同僚の死を悼む軍団長達の前で言い放った。

「お待ちを。陛下。勝敗は戦いの常、それに戦死したブツバルトは責任を果たして……」

ハイネがいい終える前にジギスムントはテントの外に響き渡るほどの大声で言った。

「黙れ！ 一軍団長風情が、余に意見する気か！？ 身の程をわきまえろ！」

ハイネは万の兵士ですらたじろがせるほどの殺気をみなぎらせて皇帝をにらみつけた。よく剣を抜かなかったものだと内心驚きはした

が、誇りを傷つけられたハイネはいかに皇帝と言えど許すことはできなかつた。ハイネは拳を握った。

ふと、ハイネの拳を隣に座っていたシラーが押さえた。ハイネはシラーの方を見ると、シラーは何も言わず、ただ首を振った。

「ほほ、よろしいかの。陛下」

第四軍団長のグレゴールが好々爺然とした調子で口を開いた。

「ブツバルトの歩兵大隊がおらんだら、陛下は今頃戦場から離脱出来ず、こうしてわしらの前で大声で怒ることなどできない体になっておったのかも知れんだぞ。感謝こそすれ、罰するというのはいささかやり過ぎと言ふもんだて」

「貴様も余に意見すると言つのか？」

「わしが、じゃ。もう年じゃからの。わしにはもう、失うものも、欲しいものも何もない。若いもんがくだらんことで地位や部下を失うくらいなら、わしが代わりになってやるわい。北方で強制労働か？ これから熱くなるでう。年寄りにはちようどいいわい。それとも、この老いぼれの首をはねるかの？」

「貴様！」

ジギスムントは怒り心頭に達し、剣を抜いて椅子に腰掛けていた老将の首につきつけた。だが剣は、グレゴールの首に当たる寸前でとまり、一向に動かなかつた。

「どうした？ 小坊主。こんな老いぼれの首すらとれんか……？」

ハインをはるかに上回る殺気のもった目で、グレゴールはジギスマントをにらんだ。ザビーネをすら萎縮させた殺気がジギスマントに叩き付けられ、ジギスマントは白目をむいて昏倒した。

第三章 メルキド侵攻 第五十話

「はてさて、ちいとやりすぎたかのう？」

「まったく、グレゴール翁も人が悪い」

とぼける老将に、第六軍団長のオリバー・リピッシュが苦笑した。オリバーの隣では、第十一軍団長のザビーネが顔を青ざめさせていた。グレゴールの殺気にこともなげに耐えられたのはオリバーと第八軍団長のヒッパーだけだった。ハイネや、マレーネら最上位の軍団長ですら、オリバーのように笑みを浮かべる余裕を持てなかった。

幾多の死線をくぐり抜けた者だけが立つ極み。その圧倒的な戦闘経験の前には、さしもの有能な軍団長達も一步譲らざるを得なかった。

「惜しい男を亡くしたな」

第六軍団長のオリバーは短く言った。普段、口数の少ないオリバーの言葉は、さらに重く軍団長達にのしかかった。

「今年に入って、三人も軍団長を失うとはな。何と言う年だ」

第八軍団長のヒッパーは腕を組んだ。

「戦争しているんですね。僕たちは……」

第十二軍団長のヴィクターが目を伏せた。十八歳の軍団長は、初めて戦場で仲間の死を経験した。十二軍団長の中で最年少の彼にはまだ、死を受け入れるには若すぎる年齢だと言えた。

「今後は敵襲が考えられるだろうし、進撃速度を緩めた方がいいんじゃないかい？」

第九軍団長のマルガレーテが一同に提案した。

「いえ。ここはあえて進軍速度を速めましょう」

第七軍団長のベティーナがマルガレーテの意見に反対した。

「敵のねらいは時間稼ぎにあるわ。おそらく援軍の到着を待っている。だから、私達に攻撃を仕掛けて、敵の襲撃に神経質にさせて進撃速度を緩めようと考えている。けれど、このままでは我々にとって不利になっていくわ。ここはすぐに全軍でアーデン要塞を落とすべきよ」

第三章 メルキド侵攻 第五十一話

一同は頷くと、会議を解散し、すぐに進撃の準備をはじめたが、勅令によってベティーナ案は却下された。

「軍団長どもは、余を殺す気か？ 進撃速度を速めれば、余がまず危険にさらされるではないか。盆地を調べ尽くせ！ 余の安全を確保しながら進むのだ」

意識を取り戻したジギスムントはベティーナ案を聞くとすぐに怒り出し、配下の各軍団に慎重な行軍を徹底させた。常に上空には龍騎兵を飛ばし、前方はおろか、左右にも、安全が確認されている後方にさえも見張りの部隊を展開させ、メルキド軍の奇襲に備えた。その徹底ぶりは病的とも言えるほどであった。

「敵もやるものだ……」

ヴィヴァ・レオは呆れ顔で言った。アーデン盆地上空をひっきりなしに飛び回る龍騎兵はアーデン要塞からでもよく見て取れた。

ヴィヴァ・レオの策は見事に功を奏した。ワイバニア軍はアーデン盆地での緒戦によって見事なまでに進撃速度を落とし、通常2日で通過出来るはずのアーデン盆地を一週間かけても、なお通過出来ずにいた。

「スプリッツァー達との約束を守れそうだ」

メルキド最強の軍団長は静かに自分の作戦の成功を喜んだ。

星王暦二一八三年六月五日、ワイバニア軍は未だアーデン盆地の中央にいた。

時を前後して星王暦二一八三年六月一日、フォレストル王国に亡命していたワイバニア軍元第七軍団長アンジェラ・フォン・アルレスハイムはフォレストル王国第三王子にしてフォレストル第五軍団長ヒーリー・エル・フォレストルに呼び出されていた。

「私を指揮官に……ですか？」

第三章 メルキド侵攻 第五十二話

「そうです。第五軍団の第三機動歩兵大隊と第一騎兵大隊を合わせて一個連隊とし、これをあなたに率いて欲しいのです」

驚くアンジェラにヒーリーは頷いた。

「私を客将としてこの軍団に迎えられたときも、ヒーリー殿は軍団内の反発にあつたと聞いております。この上、さらに私に兵を預けるのでは、さらに反発が起きるのではないでしょうか？」

ヒーリーの隣に立つメアリを一瞥して、アンジェラは言った。アンジェラを客将に迎えた時、軍団の主立った指揮官達はヒーリーに反発した。先のオセロー平原の戦いにおいて、フォレストル軍に最も大きな損害を与えた軍団長であるアンジェラに対する風当たりはメアリはともかくとして、戦友を失った前線指揮官達のそれは特に大きかった。

ヒーリーは指揮官や兵士達を自ら説得し、アンジェラを軍団を入れることを認めさせた。

「わかっています。しかし、あなた以外にこれを預けられる者はいないのです」

一個軍団を率いていたアンジェラの手腕はヒーリーにとって、何よりも力強いものだった。また、配下の大隊長は皆優秀ではあつたが、一個大隊以上を指揮しうる能力までは持っていなかった。唯一、副軍団長のアレックスだけがその資格を有していたが、龍騎兵大隊長でもある彼が、空陸双方を指揮するのは困難であつたため、アンジ

エラが連隊長として選ばれたのだった。

「隊長や兵達については今回も私が説得します。何、今回は前ほど難しくはないでしょう。力強い味方もいますから」

ヒーリーはメアリに目配せすると、メアリは隣室から一人の背の高い、美男子の士官を連れてきた。士官はヒーリーと、アンジェラの前に立つと敬礼した。

「第五軍団司令部直衛大隊参謀本部付次席参謀、レイ・ロックハートです。本日付けでアルレスハイム連隊副隊長兼参謀につくよう拝命いたしました。……よろしく」

名乗り終わるとレイはウィンクした。その振る舞いにメアリは青筋を立てて怒り出した。

「レイ！ そのような振る舞いはやめなさいと何度も……」

「いいじゃないの。この場にいるのは士官学校の同期じゃないか。お固いことは言いつこなしだよ。な、ヒーリー」

「ああ」

ヒーリーはレイに笑って頷いた。

「あなたも、何でこんな軽い男を軍団に入れたの？ 士官学校を卒業して、やっと解放されたと思っていたのに……」

メアリは頭を抱えた。

「これは……いったい？」

場の雰囲気についていけなかったアンジェラが、ヒーリーに尋ねた。

第三章 メルキド侵攻 第五十三話

「彼は、私の士官学校時代の同期なのです。成績では私の上、主席のメアりに次ぐ成績でした。とても優秀な参謀です」

「加えて、軽薄で不真面目。女の敵です。士官学校時代、何人の女子生徒が彼に泣かされたことか」

メアリは片手の手のひらで顔を覆った。士官学校時代、面倒見のよかったメアリはレイに泣かされたという女子生徒のフォローを行っていた。時には毎週とも言えるほどの女子生徒の相談を引き受け、メアリは時にノイローゼになりそうなこともあったという。もっとも、ストレスのはけ口はヒーリーにいていたのだが。

「アルレスハイム卿！ 機動戦術の専門家であるあなたの部下になれるとは、光栄の極みです！」

あからさまにメア리를無視したレイは大げさなりアクションをとると、アンジェラに握手を求めた。アンジェラはレイの態度に戸惑いながらも握手を交わした。

「騎兵運用の柔軟さ、攻守のバランスのとれた戦術。とくに一昨年のメルキド第三軍団との戦いには、目を見張るものがありました」
高揚しているのか、レイはアンジェラにまくしたてた。

「レイは観戦武官として長くメルキド公国に赴任していたのです。ここ最近のワイバニアとメルキドの戦術に精通しているのです」

すかさず、ヒーリーはアンジェラにレイの説明を加えた。レイの知識はヒーリーのみならず、アンジェラにも十分な助けになるだろう。

「了承しました。連隊長の件、つつしんでお受けいたします。それでは、隊長達へのあいさつがあります故、失礼いたします」

アンジェラはヒーリーに一礼すると、レイをともなって執務室を辞した。

「これほど美しい方だとは存じ上げませんでした。戦場では常に仮面を付けられていたので」

廊下を歩きながら、レイはアンジェラに言った。

「よくしゃべる男だな。お前は」

少し不機嫌そうにアンジェラは笑った。

「申し訳ありません！ 以後、気をつけます」

レイはわざとらしく背筋を伸ばした。

「いや、悪いと言っている訳ではない。……やさしい男だな。お前は」

「は………？」

「下手な芝居はやめておけ、信頼をなくすぞ。無理して嘘をつく」とはならない。お前自身、疲れているだろう」

アンジェラの言葉にレイは言葉を失った。アンジェラの洞察はレイのすべてを見透かしていた。

「ばれましたか……。さすがは、アルレスハイム卿ですね」

レイは頭をかいた。メアリからは嫌われているが、レイはもともと女性に軽い人間ではなく、彼の軽薄さは、彼の複雑な性格が生み出したものだった。軍での生活は生き残るにしろ、死ぬにしろ、愛した女性を不幸にしかねないものである。女性を好きになってはならないし、好かれてもいけない。軍人を目指したレイは自分のせいで不幸になる人間を作らないために、「女の敵」と言うイメージを作り出していた。

アンジェラはヒーリーの執務室にレイが入ったわずかの間にレイの所作から彼が努めて明るくしていることを見抜いた。

「無理はするな。お前も見てきただろうが、戦場では力が入りすぎた者ほど先に死んでいく。気をつけることだ」

アンジェラはそういうと、長い髪を翻して歩き出した。レイもまたアンジェラの背後にぴたりとついて歩いていった。

第三章 メルキド侵攻 第五十四話

「レイがアルレスハイム卿の副官だなんて……考えただけでも寒気がするわ。ヒーリー、あなた、何を考えているの？」

二人きりになつた執務室で、メアリはヒーリーに尋ねた。

「あいつはただ女に軽いだけの奴じゃない。それはアンジェラも分かってくれるさ。それに観戦武官として、メルキドとワイバニアの最新の戦術を見聞しているレイは、アンジェラと部下達の橋渡し役としては適任だよ」

ヒーリーはメアりにレイをアンジェラの副官に選んだ理由を教えた。メアリは眼鏡を上げると少し皮肉った笑みを浮かべて言った。

「ふうん。ずいぶん彼のことを買っているのね。私のことは最初、軍団に入れようとしなかったのね」

「ははは……それは、その……」

ヒーリーは苦笑した。そのとき、強くヒーリーの執務室の扉をノックする音が聞こえた。

「どうした？」

「メルキドから特使が参りました。ジェイムズ陛下とエリクシル殿下より、各軍団長はただちに謁見の間に集合せよとのことですよ！」

ノックの主はヒーリーに軍団長の非常召集命令を伝えた。

「わかった。すぐ行く」

ヒーリーは椅子から立ち上がると、メアリは心配そうな面持ちでヒーリーを見た。

「ヒーリー……」

「ついに来たか。ワイバニアめ……」

ヒーリーは歯を食いしばって言った。星王暦二一八三年六月一日フオレストル王国はワイバニア軍によるメルキド侵攻をこの日初めて知った。

第四章 決戦前夜 第一話

ヒーリーが謁見の間に着いたとき、諸将らはすでにメルキドの特使を迎えていた。

「遅いぞ！ヒーリー」

第三軍団長のウィリアム・バーンズがヒーリーに言った。

「しょうがないだろう。それでも、急いできたんだから」

長く伸びた翡翠色の前髪をかき分けて、ヒーリーはため息をついた。

「さて、諸将も集まったことだ。メルキドの特使に現状を教えてください。ただくとしよう」

進行役の王太子エリクが特使に発言を求めた。

「現在、ワイバニア帝国軍は国境のアドニス要塞群を陥落させ、公都ロークラインに迫りつつあります。我が総帥スプリッツァーはロークラインを放棄し、奥地のミュセドーラス平野にて決戦を挑もうとしております。どうか、船上の和約に基づき、援軍の派遣をお願いいたします」

現在のメルキドの状況を伝えると、特使は深くひざまずいた。

「ワイバニア国境から公都ロークラインまではひと月もかからない距離だ。我々として、今から出撃したのでは、メルキド軍との合流までひと月にかかる。間に合わないのではないか？」

第二軍団長のハーヴェイ・ウォールバンガーが特使に尋ねた。

「公都ロークライン北方のアーデン要塞に我が軍の軍団長の一人がこもり、時間を稼ぐ手はずになっています」

「恐らく、ヴィヴァ・レオでしょう。ワイバニアの大軍相手に長い時間を稼げるのは彼しかいない」

ヒトリーは言った。

「援軍を出すのは条約からして当然じゃろうが、問題は規模じゃ。どうするかろう。王太子殿下、国王陛下」

第一軍団長のフランシス・ピットが玉座に座る国王ジェイムズとその傍らに立つエリクを見た。エリクとジェイムズは顔を見合わせる
と、互いに頷いた。

第四章 決戦前夜 第二話

「船上の和約に基づき、貴国に対し援軍4個軍団を派遣することを約束しよう。ひと月以内に貴国の軍と合流すると伝えられよ」

ジェイムズは特使に言った。

「ありがとうございます。必ずや、我が総帥にお伝えいたします」

「すぐにお伝えになるがよろしかろう。龍騎兵を用意する故、直ちにメルキドへ戻られよ」

ジェイムズの言葉に使者は深く一礼すると、足早に謁見の間を辞した。謁見の間には、軍団長と王子エリク、宰相マクベス、そして国王のジェイムズが残っていた。軍の最高責任者であるエリクは言った。

「派遣する4個軍団はすでに決めている。第一、第三、第四、第五軍団だ。再編中の第二軍団は北方のハムレット要塞で、ワイバニアのフォレストル侵攻に備えてくれ」

ハーヴェイは何も言わずに頷いた。

「メルキドへの増援軍の総司令官だが………ヒーリー。お前にやって欲しい」

エリクの一言に、ヒーリーは目を見開いた。だが、驚きを言葉に出したのは違う人間だった。

「どうしてですの！？お兄様……いえ、王太子殿下。今までの例と実績において、第一軍団のピット卿が適任ではありませんの！？」

第四軍団長のマーガレットが長兄エリクに言った。

「ははは、わしを買ってくれるのはありがたいがの。マギーや。そろそろ、わしも年なのでな。肩が凝る役目は卒業したいのだよ」

ピットは笑ってマーガレットに言った。マーガレットは少し不満そうな顔をして引き下がった。

「今回、ワイバニアによるメルキド侵攻を最初に予見したのはヒーリーだ。それに、新編成の第五軍団では、まだ実戦にたえられるか分からない。第一、第三、第四軍団を主力とし、戦局全体を見渡し、指揮出来る人減が必要になる。ピット卿、無理を強いることになるが、お許しください」

エリクはヒーリーを総司令官に選んだ理由を説明すると、ピットに頭を下げた。

第四章 決戦前夜 第三話

「王太子殿下ともあるうものが、そんなに頭を下げるでないわ。これでは嫌とは言えないわ。また、老骨にむち打たねばなるまいな」

ピットは笑って肩をならした。

「ヒーリー、君は不満かい？」

宰相である次兄マクベスが、ヒーリーに尋ねた。ヒーリーは少しづつが悪そうに頭をかき父と兄の前に出た。

「今をにおいて、メルキドを救い、ワイバニアを倒す機会はありません。この戦いで、アルマダの戦いの歴史に終止符が打たれるとは思いませんが、それでもせめて、つかの間の平和だけでももたらしたく思います」

そう言うと、フォレスタルの若き戦術家は跪いた。

「総司令官の任、謹んでお受けいたします。陛下、殿下」

ヒーリーの返事に、エリクは頷き、全員に言った。

「今度の戦いはメルキドにとっても、フォレスタルにとっても決戦だ。ワイバニアを撃退することができれば、今後、我が国にも、メルキドにも侵攻する力を失うだろう。平和をもたらすためにも、我々は勝たねばならない。各軍団長は明朝直ちに軍団を率い、出撃せよ」

謁見の間に並んだ諸将は最敬礼すると、それぞれに部屋を後にした。

「お兄様！」

謁見の間を出てすぐの廊下で、ヒーリーはマーガレットに呼び止められた。

「どうしてお兄様なんですの！？ぐうたらで、いつも居眠りばかりのお兄様が私達を率いるなんて……………」

マーガレットは不満を露にした。マーガレットは史上最年少で軍団長になった天才で、「羽衣のマーガレット」の異名を取る、フォレストル最速軍団を率いる軍団長だった。だが、彼女の天才は彼女自身のためまざる努力による部分が大きく、それ故に、毎日軍務をサボってばかりのヒーリーに対しては常々から不満を感じていた。自分自身が努力と研鑽を重ね、現在の地位に就いたのに、まったくそれとは縁遠いヒーリーが、いかに才能があるとはいえ、軍団長や増援軍総司令官など軍務の要職に就くのは彼女自身許されざることだった。

「俺が軍を率いるのが不満か？マーガレット」

言葉を荒げる妹にヒーリーは静かに言った。

「不満ですわ。私だって……………」

「そうか……………」

ヒーリーは悔し涙を浮かべるマーガレットに背を向けて、廊下を歩

き
去
っ
た。
。

第四章 決戦前夜 第四話

ヒーリーが執務室に戻ると、メアリ、アンジエラ、アレックスら第五軍団の主立った幹部達がすでに集まっていた。

「軍団長、メルキドにワイバニア軍が侵攻したと聞きましたが……」

一同を代表して、副軍団長のアレックスがヒーリーに尋ねた。

「その通りだ。使者の話では、現在ワイバニア軍は国境線を突破し、公都ロークラインに向けて進軍中と言うことらしい」

ヒーリーは椅子に腰掛けると、皆に説明した。

「……そして、第五軍団もメルキド軍支援のため、明朝出撃することになった。今日は皆、親しい者達と過ごしてきてくれ。ワイバニアとは決戦になるからな」

各隊の指揮官は敬礼すると、それぞれ執務室を出て行った。

「メアリもいいんだぞ。ピット爺や家族と過ごしてきたらどうなんだ？」

ヒーリーは執務室に一人残ったメアリに尋ねた。

「私は大丈夫。ピット家の血筋はタフなの。これくらいのことでは感傷に浸っていたら体がいくつあっても足りないわ」

「その通りだな。あのピット爺じゃ、何度殺しても生き返ってきそうだ」

ヒーリーは笑ってメアリに返した。メアリは執務室の窓辺に立つとぼつりとつぶやいた。

「ついに始まるのね。ワイバニアとの全力衝突が」

「ああ、この前の比じゃない。メルキドもワイバニアも、そして俺たちも本気の大戦争だ。激しい戦いになる」

執務室の机で指を組み、ヒーリーは言った。ヒーリーの頭の中ではすでにワイバニアとメルキド、フォレスタルの戦闘がイメージされていた。いかにして敵に勝つか。フォレスタル最高の戦術家は思案を巡らせていた。

「さて、メアリ。俺はそろそろ行くよ。一緒に過ごしたい相手がいるんだ」

ヒーリーは席を立ってメアリに言うと、執務室を出て行った。誰もいない執務室で、メアリは小さくため息をつき、かけていた眼鏡を外した。

「ようやく、腰を上げるのかしら、あの朴念仁。頑張りなさい。ヒーリー」

メアリは優しい微笑みを浮かべて、主のいない机を撫でた。数分前までヒーリーの座っていた机の上にひと雫、きらめくものが落ちた。

第四章 決戦前夜 第五話

同じ頃、フォレストル王城庭園の一隅にあるラグの研究室に珍しい客が訪れていた。

「これは……ようこそ、ピット卿。あなたがここに来るのは5年ぶりではないですか。相変わらず、狭いラボですが、どうぞ中へ」

ピットを出迎えたラグは彼を中のテーブルまで案内した。

「それにしても、あなたが僕のところを訪ねてくるとは珍しいですね」

お昼寝中のメルに代わって、茶の準備をしながら、ラグはピットに言った。

「ラグ……」

「これはまた、懐かしい。僕をあだ名で呼ぶなんてどういう……」

ラグは茶の準備をする手を止めた。ラグは数十年来の友人に振り返ることなく、穏やかな声で訪ねた。

「逝くのかい？ フランス」

「ああ」

遠い昔、ピットとラグ、王室政務顧問ロバート・リードマン、そして数代前の第三軍団長、トマス・ペンドルトンとは親友同士だった。彼ら4人はよく笑い、よく泣き、そして、よく酒を酌み交わした。いつまでもその関係が続くと信じていた。三十年前、ワイバニア大侵攻があるまでは。

凄惨な戦は4人の仲をいとも容易く引き裂き、一人を永久にこの世から失わせた。快活で4人のムードメーカーだったペンドルトンの死は残された3人に深い傷を与えた。

「ロバートはトマスのことを弟と同じように思っていたからね。戦争の後は見ていられなかったよ」

ラグはポットに火をかけた。ペンドルトンが死んでから、ロバートは執務室にこもりがちになった。それは国を守るためでもあったが、何より長年の親友を失った悲しみを忘れるためと言うことが大きかった。

「かつこいい死に方をしたものだよ。ラグ。俺を守って、兵を守って、国を守って死んで行ったのだからな」

普段とはまるで違う、若々しい口調でピットは話した。二人の間の時間はまるで、共に青春を過ごした時までさかのぼっているようだった。

第四章 決戦前夜 第六話

「そうだね……」

ラグは穏やかに言うと、ポットに視線を戻した。

「それで、今度は君の番と言う訳かい？」

ラグは後ろのピットを振り返らずに尋ねた。

「ああ、今度の戦いは前以上に厳しいものになるだろう。このアルマダ始まって以来の大きな戦いだ。犠牲は計り知れない。だが、せめてヒーリー坊やメアリ、ウィリアムら若い者達は死なせたくはない」

ピットは静かに決意を述べた。

「……まあ、無駄死にするつもりも、死に急ぐつもりもない。もしかしたら、笑って返ってくるかも知れんぞ」

そう言うと、ピットは破顔した。ちょうどそのとき、湯が沸いた。ラグは茶葉をいれた別のポットに湯を入れ直してピットに振り返った。

「それを聞いて安心したよ。フランシス。出撃前だから、酒というわけにはいかないな。茶で乾杯といこうじゃないか。君の武運を祈って」

ラグはテーブルにカップとポットを置いた。60年来の友人はそれ

その時間が許す限り、思い出話を語り合った。

「ポーラ!!!!!!!!!!!!!!」

ヒーリーは廊下を歩いていたらポーラを呼び止めた。城中を探しまわったヒーリーは息を切らしてポーラのもとにやってきた。

「ヒーリー!?!?どうしたの!?!?」

いつもとは逆の展開に驚きながら、ポーラはヒーリーに尋ねた。

「な、なんでもない。それより、今、時間、いいかな?」

数分後、二人は空の上にいた。翼竜ヴェルの背に乗り、王城を飛び出した二人の眼下には森に恵まれたフォレスタルの風景が広がっていた。

第四章 決戦前夜 第七話

「すごいー!!」

息を飲むほどの美しい光景にポーラは思わず叫んでいた。

「こんなに高くヴェルと昇るのは初めてじゃないか？ポーラ」

ヒーリーはポーラに聞こえるように大きな声で話した。

「うん。いつもはお城の上だけだったから」

ポーラもヒーリーに聞こえるように大声で言った。

「そりゃいいな。ヴェル、もっと遠くへ行こう!!」

ヴェルは甲高い鳴き声を上げると、両方の翼を羽ばたかせて加速した。空を飛び、風を切るのは当たり前のはずなのに、ヴェルはことのほか上機嫌だった。大好きな二人をその背に乗せているからか、ヴェルにはよくわからなかったが、それでもヴェルは心底気持ち良さそうに空を飛んでいた。

「ねえ、ヒーリー。あれは!？」

ポーラが指差した先には海のように広大な水のかたまりがあった。

「ああ、あれがガスパール川だよ。ポーラは見たことはないのか？」

ヒーリーはポーラに言った。フォレストルの国力の源、そしてかつ

てメルキドとフォレストルがその利権を争った大河、ガスパール川だった。数週間後にはヒーリー達はあの川を渡ってメルキドへと行くことになる。

「うん。私はシンベリンから出たことはなかったから」

「そうか。今度……」

「色んな場所に連れて行く」といいかけて、ヒーリーは口をつぐんだ。ワイバニアとの戦いは厳しく、ヒーリーとて命の保証はなかった。だからこそ、ヒーリーはポーラを空の旅に連れ出したのである。後悔しないために。

「なあ、ポーラ……」

「ヒーリー！！あれ見て！！きれい……」

ポーラに言われて、ヒーリーは眼前の景色に視線を移すとその光景に目を奪われた。夕日がガスパール川に沈もうとしていた。空は夕焼けのオレンジ色に染まり、対岸が見えぬ程の幅を持つ大河は日の光を反射して金色に光り輝いていた。夜の闇が支配する直前、そのわずかな間の一日の最後のひと光。あまりに美しく、そしてあまりに寂しげな光をヒーリーは見つめていた。

第四章 決戦前夜 第八話

「なあ、ポーラ……」

ヒーリーは意を決した。

「なあに？ ヒーリー」

「……」

ヒーリーが一生で最大の勇気を振り絞った告白はいたずらな風によつてかき消された。辛うじて音だけを聴き取れたポーラがヒーリーに尋ねた。

「え？ 何……？ 聞こえな……きゃああああ！」

「ポーラ！」

再び急な風が二人を襲い、ポーラがヴェルから振り落とされた。ヒーリーはすぐさま急降下してポーラを追いかけた。

「ポーラ！」

地面へと真っ逆さまにおちていくポーラに追いつくと、ヒーリーはポーラを抱きしめた。

「……ヴェル！」

ヒーリーの声に応え、ヴェルは落下と急降下の衝撃を最小限に食い

止めて滑空した。

「はあ、はあ……」

ヴェルが速度を緩め、安定した飛行に移ったとき、二人は荒い息を吐いた。ポーラはヒーリーの胸の中で大好きな人の心臓が脈打つ音を感じていた。

「ポーラ、大丈夫か？」

ヒーリーは心配そうに胸に抱くポーラを見つめて言った。ポーラは少し顔を青ざめながらもヒーリーの服をぐつつかんで返した。

「うん。大丈夫。ヒーリーが助けてくれたから」

「そうか……そろそろ、帰ろう。もう夜になってしまっからね」

ヒーリーはヴェルに王城に帰るように言った。エメラルド色の翼竜はゆっくりと、そして大きく旋回すると二人の家に向けて進路をとった。

「ヒーリー……」

「うん？」

「生きて帰ってきてね。負けても、いいから」

ポーラはそう言つと、再びヒーリーの胸に顔をうずめた。

「ああ、帰ってくるわ。……必ず」

なぜ、「必ず」と言えたかはヒーリー自身にもわからなかった。ただ、自分の帰りを望むポーラの気持ちに応えたい。それだけをヒーリーは考えていた。

空を飛ぶ二人の前に慣れ親しんだ街の明かりがぼんやりと輝いていた。

第四章 決戦前夜 第九話

星王暦2183年6月2日、フォレスタル王国第五軍団長ヒーリー・エル・フォレスタル率いるメルキド公国増援軍はシンベリン王城を出撃した。途中で合流する第三、第四軍団主力を合わせると、総兵力は四個軍団、約4万名フォレスタル王国正規軍の8割以上になる数だった。

「これほどの大軍を率いていても、ワイバニア軍には遠く及ばない。国力の差というものを思い知らされるな」

メルキド公国に向かう馬車の中で、ヒーリーは参謀長のメアリに言った。

「珍しく弱気というか、不安みたいね。司令官の弱気は軍全体の士気にも影響するわよ」

鋭い眼鏡をかけた冷静な参謀長はぴしゃりとヒーリーに言った。

「わかっているさ。メアリ」

「けれど、目は死んでいないわね。不安そうな顔をしているけど、策はないわけじゃないでしょう?」

「よくわかるな」

「あなたとは長い付き合いですからね」

そう言うと、メアリは書けていた眼鏡を上げた。

「まあ、策はない訳じゃないよ。ただ、ちょっとね」

ヒーリーはメアリを呼び寄せると、そっと耳打ちした。

「ちょっと………それ、本気？」

メアリは目を見開いて言った。

「誰にも、特に他の軍団長には言つな。今のところ、知っているのは君と俺だけだ」

「間に合うの？」

「だから、時間が必要なのだ。メルキドのヴィヴァ・レオ軍団長がうまく時間を稼いでくれるといいのだけれど………」

ヒーリーは馬車の窓越しに空を見上げた。最前線はどうなっているだろうか。メルキド軍最高の軍団長であるヴィヴァ・レオですら、ワイバニア11個軍団の前では分が悪すぎる。メルキドに入るときにはできるだけ詳しい情報が欲しい、ヒーリーは空に思いを馳せながら、ワイバニア帝国に打ち克つ算段を考えていた。

第四章 決戦前夜 第十話

星王暦二一八三年六月十三日、ワイバニア帝国軍はアーデン要塞前面に布陣した。ワイバニア軍の前方には要塞を背にしたヴィヴァ・レオ指揮のメルキド混成軍団一万五千が展開していた。

「先鋒は第一軍団、後衛は第十二軍団とする」

軍議が始まり、開口一番、皇帝ジギスムントは言い放った。ジギスムントの一言に軍団長達は色めき立った。

「お待ちください。陛下。敵はメルキド公国の最強軍団、しかも要塞を背に布陣しております。二個軍団と言えど、破るのは困難を極めるかと思考いたします。何卒ご再考ください」

親友を死地に追いやるかのような過酷な命令に第三軍団長のシラーが皇帝に翻意を求めた。だが、皇帝は冷笑を浮かべてシラーに言った。

「愚考だな。シラーよ。メルキド最強の軍団が出てきたと言うのであれば、こちら最強の軍団を出すだけのこと、それとも、お前はワイバニアの兵がメルキドよりも弱いと言いたいのか？」

「いえ、そのようなことは……」

皇帝の言葉に返す言葉のなかったシラーは押し黙った。横目で親友が論破された姿を見たハイネは席を立ち上がると、わざとらしく皇帝に跪いた。

「先鋒は武人の名誉。ハイネ・フォン・クライネヴァルト、メルキド軍を撃ちやぶってごらんにいれます」

「お、おい……ハイネ」

「よくぞ言った。クライネヴァルトよ。ワイバニア最強の名にふさわしい戦いをせよ」

「は、龍の旗に誓って！」

心配そうなまなざしを向けるシラーをよそにメルキド攻撃の陣容が決定されていた。

「第一、第十二軍団は直ちに出击、他の軍団長は別命あるまで待機せよ」

皇帝ジギスムントの号令に一同は席を立ち、敬礼した。事実上一人で2万の軍勢と戦うハイネは我先に軍議の場を後にした。

「ハイネ！」

軍議に使われたテントを出たハイネはシラーに呼び止められた。

「お前、一人で大丈夫なのか？ 相手はあのヴィヴァ・レオだぞ」

「それがどうした。俺もワイバニア最強の第一軍団長だぞ。心配が過ぎると、俺に対する侮辱にもなるぞ。マンフレート」

心配そうに言うシラーにハイネは笑って言った。

「それに俺自身、武人として一度立ちあってみたいと考えていた。今回の命令はかえって嬉しいくらいだ」

「……そうか。武運を祈るぞ。ハイネ」

「ああ」

二人は拳を突き重ねると互いに背を向けて歩いて行った。自軍の宿営地に向かうシラーを皇帝の伝令が呼び止めた。

「シラー軍団長、陛下がお呼びです。軍議用テントにお戻りください」

「どつした？」

シラーは伝令に不信感を感じつつも、テントに戻って行った。

第四章 決戦前夜 第十一話

「ついに始まるか。全面对決が」

ワイバニアの大軍を目の前にして、メルキド軍第一軍団長のヴィヴァ・レオは言った。

「はい、この間の戦いは奇襲でしたからなあ」

傍らの参謀長のブリオンが悠然と言った。

「奇襲も戦いのうちだぞ。参謀長。さて、この狭い盆地だ。大軍の運用はできまい。どう出るか。ワイバニア軍」

ヴィヴァ・レオは盆地を埋め尽くす大軍に視線を移した。アーデン盆地は非常にせまい盆地であり、三個軍団を並べれば、たちまちのうちに動けなくなる。先だってワイバニア軍が長蛇の陣をとって移動した理由がここにあった。そして、それはメルキド軍の唯一にして最大の勝機でもあった。ワイバニア軍はその地形上、せいぜい二個軍団ずつでしか展開出来ない。そこをメルキド軍が要塞と連携して各個撃破することで、ワイバニア軍の兵力を減らし、さらに時間を稼ぐというのが、メルキド軍の基本戦略であった。

「まあ、うまくいくといいがな」

ヴィヴァ・レオは小さくつぶやいた。病的なまでに慎重になったワイバニア軍がメルキド公国の最強軍団を相手に、生半可なレベルの軍団長をぶつけるわけがない。初手から最強の軍団を投入してくるに決まっている。ここが正念場だろう。ヴィヴァ・レオは腹を据え

た。

「……………ん？ 敵に動きがあるな」

双眼鏡越しにワイバニア軍の動きを見ていたヴィヴァ・レオは敵軍から二個軍団が突出してくるのを確認した。その旗印を見たヴィヴァ・レオは手で顔を覆った。

「どうしましたか？ 軍団長」

ブリオンがヴィヴァ・レオに尋ねた。ヴィヴァ・レオは無言で双眼鏡を手渡すと、前方を指差した。

「真紅の龍の旗印……………第一軍団ですか。敵さんも奮発してきたというわけですな」

ブリオンは軍団長の行動の意味を理解した。

「まあな。楽な戦いはないと思っていたが、考えられつる最悪の事態の一つだ」

「しかし、我々とて、メルキドの最強軍団。互角の戦いができましよう」

「……………だと、いいがな」

ヴィヴァ・レオは迫り来るワイバニア二個軍団に視線を戻した。激突の時間が刻一刻と迫りつつあった。

第四章 決戦前夜 第十二話

「さすがは、メルキド最高の将、ヴィヴァ・レオの布陣だ。つけいる隙がなさすぎる」

馬上から、ハイネは彼らの前に立ちふさがるメルキド軍とアーデン要塞の威容を見て言った。

「そうですね。峡谷を背にしての鶴翼陣形、まさに鉄壁と言えます。加えて要塞のクロスファイアポイントに我々が誘い込まれれば・・・
・・・我々として、全滅しかねません」

ワイバニア第一軍団参謀長のエルンスト・サヴァリツシュが傍らのハイネに言った。

「貴公の言う通りだ。あの布陣を崩すのは容易ではない」

ハイネは顎に親指を添えて考え込んだ。

「・・・あの、すみません。僕、いえ、私はどう動けば良いでしょうか？」

副将として第一軍団に帯同してきた第十二軍団長のヴィクター・フオン・バルクホルンがハイネに尋ねた。ハイネは初々しいヴィクターの態度に微笑むと、ヴィクターに返した。

「貴公には悪いが、今回は私のわがままを通させて欲しい。第十二軍団は第一軍団後方で臨戦態勢のまま待機。ただし、必要であると判断したときには、戦線に加わることを許可する。後方で、我が軍

団の戦いを見て、後学に活かせ」

「はい！」

尊敬する先輩の軍団長に言われ、ヴィクターは紅潮して言った。後輩とは可愛いものだ。ハイネはいつになく優しいまなざしをヴィクターに向けたが、すぐにかぶりを振って、前方を見据えた。ベティーナと同じような思考を持つことがハイネ自身には許せなかったのである。

「バルクホルン軍団長は直ちに第十二軍団と合流！我々はこれより、敵第一軍団と交戦する。敵はメルキド最強軍団。気を締めてかかれ！第一歩兵大隊を戦闘に魚鱗の陣を形成し、中央突破をはかる！！」

真紅のマントと金色の髪をなびかせて、ハイネは号令した。ハイネの背後では威風堂々と、真紅の龍の旗印が風にたなびいていた。

星王暦2183年6月13日午後1時、第二次アーデン盆地の戦いが幕を開けた。

第四章 決戦前夜 第十三話

「ワイバニア軍に再び動きが見られました！第一軍団、歩兵大隊を前に出し、魚鱗の陣で突撃の模様！！」

最前線から少し離れた場所に設置された野戦指揮所に戻ったヴィヴァ・レオは伝令兵よりワイバニア軍突撃の報を受け取った。

「ついに来たか！この突撃は生半可な隊では防ぎきれまい。第一巨兵大隊の出撃を許可する。敵を押し返せ！」

ヴィヴァ・レオの命令からほどなくして、戦場に巨象の鳴き声がとどろいた。

「お、おい………」

最前線のワイバニア兵は巨象のあまりの大きさに言葉をなくした。まさしく山のように最前線の兵は感じたかも知れない。数十頭の巨象がワイバニア歩兵大隊に襲いかかった。

「ぎゃあああああ！！」

「落ち着け！動きは遅いぞ………うわあああ！！！」

ある者はその大きな足で踏みつぶされ、ある者はその長い鼻ではじき飛ばされ、ワイバニア、メルキド軍の最前線は阿鼻叫喚の地獄絵図と化していた。

「第三歩兵中隊、潰乱！！」

「第二歩兵中隊、戦線を維持出来ません!!」

相次ぐ被害報告に最前線部隊を指揮していた第一歩兵大隊長のヘルムート・フォン・シュナイダーは舌打ちした。

「くそ。巨兵にここまであしらわれるとはな。第三中隊、第二中隊は後退、代わりに第七、第九中隊で対応せよ。各中隊長に伝達。アルマダの掟を忘れるな。歩兵は巨兵に勝つ。機動戦で敵を翻弄せよとな」

何と言う醜態をさらすとは……ヘルムートは自分たちのふがいなさに憤りを覚えていた。もともと、第一軍団はその練度、士気、指揮官の能力。どれをとってもワイバニア最高ではあるが、その性質上近衛軍団と並び、帝都ベリリヒンゲンから出ることはなく、巨兵との戦いは不慣れであった。このことがワイバニア軍にとって、予想外の損害を出すことになってしまった。

「いいか！俺たちはワイバニア最強の第一軍団だ！軍団長にも、敵にも無様な戦いは見せるなよ!!」

大隊長からの檄を受け取った中隊長達は自分の部下に叱咤した。兵士達が巨象や石兵に踏みつぶさぬように散開し、槍や縄で応戦した。

「奴らめ……動きが見違えたな。負けるか！ワイバニア軍を押し返せ!!」

巨象の背中に取り付けられた櫓からワイバニア歩兵の動きを見たメルキド軍巨兵大隊長テコニックは全軍総力戦の旗を掲げた。

力と力の激突は動の均衡状態を生み出し、メルキド軍もワイバニア軍も双方他の動きをとれずにいた。

第四章 決戦前夜 第十四話

「……………均衡状態に入りました。鶴翼陣形を縮めますか？」

伝令からの報告を受け取ったメルキド軍参謀長のブリオンがヴィヴァ・レオに尋ねた。ヴィヴァ・レオはブリオンの案に頷くと、全軍に通達した。

「レグロン隊、ボルガ隊に連絡。敵軍団を包囲し、撃滅せよ！」

ヴィヴァ・レオの命令を受けとった両翼の将は直ちに軍を動かした。

「ようし、今度もワイバニア軍に土をつけさせてやろう。全隊前進」

「進め！ボルガの兵と合わせて、敵を挟撃するのだ！」

鶴翼陣形を縮めたヴィヴァ・レオの判断は正しかったが、今回はこれが裏目に出た。左翼のボルガ隊がわずかばかり他の隊より遅れてしまった。そして、このわずかな隙をハイネは見逃さなかった。

「今だ！第二陣の第二、第三歩兵大隊を敵左翼と本隊の間に割り込ませろ。敵を分断する。第一歩兵大隊は巨兵大隊を牽制しつつ後退！敵左翼を鶴翼の陣で包囲する！」

ハイネは全軍に命令を下した。第一軍団の機動はまさに電光石火とも言うべきものであり、敵将のヴィヴァ・レオを愕然とさせた。

文字通りあつという間にハイネ率いる第一軍団に包囲されたメルキド軍左翼指揮官のボルガは色を失った。

「何だ………いつたい、何が起きたというのだ!？」

「わかりません! 敵に包囲されました!！」

そんなことはボルガ自身にも分かっていた。そのあまりの早さにボルガは何もできなかった。包囲された時点でこの隊の命運は尽きた。ボルガに理解出来たのはそれだけだった。

第四章 決戦前夜 第十五話

「また、敗れると言うのか……あの男に……」

ボルガは膝をついた。一度命を助けられた相手に命を奪われるとは何と言う皮肉なことか。ボルガは低く笑った。

「軍団長……あれは、どうやら、ベリクリーズ要塞の敗残兵のようです」

エルンストはハイネに言った。ハイネは一瞬だけ目を伏せた。一度助けた相手を倒すのは、ハイネですら気のすすまないことだった。ハイネは愛剣をゆつくりと鞘から引き抜くと、高く頭上に掲げた。

「エルンスト……私は一度彼らの命を助けた。だが、二度目はない。我々は軍人だ。目の前の敵が再び我々に牙を向けるのであれば、容赦はしない。倒すまでだ。だが、彼らには我らの力を見て死んでもらおう。せめてもの手向けだ。……龍将三十六陣、”月牙”発動。全軍、攻撃開始！」

ハイネは高く掲げた剣を一気に振り下ろした。鶴翼の陣、左翼に配置された弓兵大隊から一斉に矢が放たれた。連射力に優れたロングボウから放たれた矢は一分間に数千本にもおよび、メルキド兵をことごとく突き刺していった。

「逃げる！後ろだ！後ろに……」

矢の雨に堪えられず後方に離脱しようとしたメルキド兵が凍り付いた。彼らの側面から凄まじい勢いで騎兵が襲いかかってきたのである。

る。最初の弓兵の一撃で戦意を喪失していたメルキド軍は戦場に屍の山を築いていった。

包囲されてから一時間も経たないうちにボルガ隊は7割に近い損害を出していた。

第四章 決戦前夜 第十六話

「ばかな……こんな馬鹿なことが……」

ハイネ率いるワイバニア第一軍団の前に、ボルガはなす術がなかった。

「敵軍の7割を撃破しました。少しばかり、敵軍に同情しますな」

エルンストは狼狽する敵軍を見ながら言った。彼の遙か前には第三陣の重装歩兵達が今か今かとハイネの命令を待っていた。

龍将三十六陣” 月牙” 鶴翼陣形で包囲した敵軍に次々に新手を繰り出して倒していく。その様はさながら欠けていく月のように見える、最後には三日月のようになりながら壊滅する様からその名がついた。ボルガ隊も過去に月牙にかかった敵と同じように陣形を蚕食され、破壊されていった。

「ボルガ隊を救え！敵軍を側面から攻撃するのだ」

ヴィヴァ・レオは左翼のボルガ隊を助けるべく、ワイバニア軍に側面攻撃を仕掛けた。鶴翼陣形は側面からの攻撃に弱い。ヴィヴァ・レオはそこをついたのである。しかし、ハイネも当然のことながら、このことを予期しており、第二、第三歩兵大隊を使って、重厚な防御陣を敷いてメルキド軍に対応した。

「よし、どうやら敵の攻撃は食い止められたようだ。第一重装歩兵大隊突撃！敵軍左翼にとどめをさせ！」

ハインネは重装歩兵大隊を突撃させた。強固な鎧と長槍で武装した重装歩兵が瀕死状態のボルガ隊に雪崩をうって襲いかかった。その凄まじい力の濁流に、ボルガ隊の兵士達はことごとく討ち取られていった。

「これが……ハイネ・フォン・クライネヴァルトか……
・ふふ、憎い男よ」

これがボルガの最後の言葉だった。この言葉を発した直後、陣幕を破ってボルガの眼前に紅の鎧を来たワイバニア重装歩兵が姿を現した。

第四章 決戦前夜 第十七話

椅子から立ち上がることもできなかつたボルガが最後にできた動作は「見る」ことだけだった。明確な殺意を抱いた歩兵が長槍を振りかぶる動き、その槍が自分へ向かって飛んでくる様子、槍が自分の体に深く突き刺さる瞬間、ボルガはその全てを見つめていた。腹に鈍い痛みを感じた瞬間、ボルガは口からおびただしい量の血を吐き出した。

最期の瞬間、ボルガは少し笑った。何故笑ったのか。それはボルガの命を奪ったワイバニア兵にも、ボルガ本人にも分からなかった。

腹部を長槍で貫かれたボルガは前のめりになつて椅子から崩れ落ち、絶命した。

ほどなくして、両軍の将にボルガの死が伝えられた。

「そうか……ボルガが逝ったか。……第一軍団はこのまま敵陣を突破して側面攻撃をかける。陣形を魚鱗の陣へ。一気に突き崩す!!」

ワイバニア第一歩兵大隊にくぎづけになっている巨兵大隊を除いたヴィヴァ・レオ直率の兵力9,000がハイネらワイバニア第一軍団本隊を守るワイバニア第二、第三歩兵大隊に殺到した。

9,000対2,000。4倍差の兵力ではあつたが、通常のレベルの軍団であるならば、十分に時間稼ぎできるだけの実力をワイバニア軍は持つており、事実、ヴィヴァ・レオの軍勢ですら防ぎきつていた。

しかし、ヴィヴァ・レオが突進力と機動力に秀でた騎兵を前にした魚鱗の陣に転じたとき、その均衡は一気に崩れた。ハイネが用意した重厚な防御陣は崩壊し、ヴィヴァ・レオはその勢いを殺すことなく、ハイネの本営に突撃していった。

「軍団長！第二、第三歩兵大隊、突破されました！！」

「何だと！？今、側面をつかれれば、我々として壊滅は免れんぞ！！」

伝令の報告にエルンストがいち早く反応した。戦力を集中したヴィヴァ・レオに比べ、ハイネはその兵力を分散して運用しており、形勢は極めて不利だった。しかも、現在、ヴィヴァ・レオはハイネ率いる本隊の側面をつく形で移動しており、ハイネは絶体絶命の危機に陥った。

第四章 決戦前夜 第十八話

「間に合うかどうかは分かりませんが、第十二軍団に救援を！！・・・
・・・軍団長？」

エルンストがハイネに意見を具申すべく、ハイネを見た。エルンストはその表情を見て驚きを隠せなかった。絶体絶命の危機であるはずなのに、ハイネが笑みを浮かべていたからである。

「ふ、ふふふ・・・面白い！こうでなくてはな！！」

ハイネはこの戦いで初めて高揚感を感じていた。全力を出し尽くせる敵手と見た武人としての悦びが、彼の精神を支配していた。これほどの窮地に陥っているはずなのに、戦いを愉しむとは。ハイネ・フォン・クライネヴァルトはやはり戦士なのだ。エルンストは少しばかりの不安をもって6つ下の若き軍団長を見つめていた。

「第二、第三歩兵大隊は敵軍後方に展開。蜂矢の陣で背後より急襲せよ。司令部大隊はただちに方向転換。敵の攻撃に対応せよ。第一騎兵大隊は敵軍左翼、第二騎兵大隊は敵軍右翼に展開せよ。龍将三十六陣”虎吼”で敵をむかい討つ！！重装歩兵大隊と、弓兵大隊は本隊に合流させよ」

ハイネはすぐさま命令を下した。

「第一歩兵大隊はいかがしますか？巨兵大隊を抑えるのもそろそろ限界かと思いますが・・・」

「わかっている。エルンスト。そろそろ、彼らを出してやらねばな

るまい」

「では、やりますか！？アレを……」

ハイネの言葉にエルンストは問いただした。ハイネは少し笑うだけだったが、エルンストには、それだけで十分にハイネの意図が理解出来た。エルンストは伝令の龍騎兵に命じた。

「第一龍騎兵大隊は合図と共に出撃し、攻撃を開始せよ。ひっくり返してやれ！世界を」

第四章 決戦前夜 第十九話

一方、ヴィヴァ・レオ率いるメルキド第一軍団主力は、ハイネのいる司令部大隊をその眼前に認めた。

「ボルガ隊長の仇だ！けちらしてやれ！」

メルキド軍の騎兵中隊長は叫んだ。メルキド軍は騎兵を先頭に真っすぐハイネの本営に向かってきた。

馬のひづめが放つ地鳴りと、復讐に燃えるメルキド軍の叫び声が、ワイバニア軍にも伝わってきた。

敵軍の鋭鋒を真っ向から受け止める司令部大隊の中の司令部直衛5個中隊がメルキド軍への迎撃準備を整えていた。弓を構えた直衛中隊の若い兵士が生唾を飲み込んだ。

「怖いか？」

隣で弓を構えた熟練の兵士が尋ねた。

「い、いえ！怖くありません！！」

恐らく、初の実戦なのだろう。兵士はうわずった声を上げた。

「そうか。それでこそ、ワイバニア第一軍団だ。だがな、俺は怖い。戦争は全てを狂わせ、失わせる。一瞬でだ。覚えておけ、若いの。何も失いたくないのならば、生き残りたいのならば、臆病になることだ」

熟練兵は声を抑え、静かに語った。優しいが、厳しい表情を浮かべて。

「はい」

若い兵士は頷くと、眼前の大軍勢を真つすぐ見据えた。メルキド騎兵の蹄の音が、大きな地鳴りとなって、ワイバニア兵の鼓膜を叩いていた。

「メルキド兵を食い止める！撃ち方用意！！」

司令部大隊長のバルトホルト・フォン・ポラーが兜の下から見える長く白いあご髭を揺らして号令した。第一軍団に属して40年になる歴戦の大隊長は一片の臆面も見せず、剣を引き抜き頭上に掲げた。

「放てえ！！！」

周囲の音をかき消すほどの音量で、バルトホルトは叫び、剣を下ろした。バルトホルトの号令とともに400本の矢の雨がメルキド騎兵隊最前列に降り注いだ。

第四章 決戦前夜 第二十話

「ぐあああああ！！！！」

「ぐっ！！」

バルトホルト率いる司令部直衛中隊が放った矢は正確にメルキド軍騎兵大隊の最前列の一団を射抜き、そのことごとくを落馬させた。騎兵の多くはその勢いを殺すことができず、まだ息のある味方兵を踏みつぶしたり、転んだ騎馬に後続の騎兵がつま付き、倒れていき、最前線は混乱の様相を呈していた。

「落ち着け！矢など、当たらなければどうと言うことはない！陣形を崩すな！多寡の知れた敵の直衛など蹴散らしてしまえ！！」

メルキド軍騎兵大隊長のガルフ・ストリームは部下達に言った。ここで足並みが乱れては、後続の本隊に悪影響が出てしまう。それだけは避けねばならなかった。しかし、ガルフの思いとは裏腹にメルキド騎兵は初期の交戦でわずかばかりの隙を生じさせてしまった。このことが、ワイバニア軍に時間を与える結果になった。メルキド騎兵の両翼からワイバニア軍2個騎兵大隊が攻撃を開始したのである。

「大隊長！大隊両翼がワイバニア騎兵の攻撃を受けています！我々は挟撃されました！」

「なんだと！？」

ガルフは左右を見渡した。真紅の龍の旗印。ワイバニア軍第一軍団

の旗が見て取れた。

「く……………やつら、いつの間に……………」

ガルフはほぞを噛んだ。これでは、ワイバニア軍本営を急襲するどころか、逆に壊滅させられてしまう。ガルフは後退か、交戦か決断に迫られていた。

「後退だ！ここから退くんのだ！！まだ戦力があるうちに……………」

「

……………どうやら、虎吼は間に合ったようですね」

メルキド軍と自軍の動きを双眼鏡越しに見たエルンストはハイネに言った。ハイネはエルンストの言葉に無言で頷いた。

龍将三十六陣の一つ” 虎吼”。鶴翼陣形を虎の口に見立て、陣形中心部へと敵をおびき寄せ、両翼の騎兵大隊が機動力と突進力を活かして左右から急襲、挟撃する、攻撃力にとんだ陣形だった。

虎吼によってとどめられた敵兵力を後方からの2個歩兵大隊と、再編が終了した重装歩兵大隊と、弓兵大隊で合わせて撃滅する。これがハイネの戦略であり、その準備は着々と整えられつつあった。

第四章 決戦前夜 第二十一話

「敵将はまさに天才だな」

馬上からハイネの用兵を見たヴィヴァ・レオはその手際に嘆息した。

「自軍の窮地をこつもあつさり覆すとは。憎らしいを通り越して、かえって清々しくありますな」

メルキド軍参謀長のブリオンは苦笑しつつも軽口を叩いた。ヴィヴァ・レオは信頼する参謀長の軽口を笑って流すとあごに手をあてた。

「このままでは、我々は敵に包囲されてしまうな……よし。騎兵大隊の救援に2個歩兵大隊を前面に展開、敵に横撃を加えたら、全速力で後退、全軍も合わせて後退する。一目散に、必死を装ってな」

「そうすると、軍団長は……あれをやるおつもりですか？」

「そうだ。当初の予定通り、敵を要塞のクロスファイアポイントにおびき寄せる」

ブリオンの問いに、ヴィヴァ・レオは不敵に笑って答えた。

「敵歩兵大隊に張り付いていた、第一巨兵大隊を敵の騎兵大隊に攻撃させよ。機動力を奪え」

ヴィヴァ・レオはハイネらの機動力を奪うべく、巨兵大隊を投入することを決めた。しかし、これが歴史を変える一瞬を演出してしま

うことになった。

メルキド軍巨兵大隊が第一歩兵大隊から離れたと言う報告を受けたハイネは目を見開き、傍らの愛騎の名を呼んだ。

「レイヴン!!」

ハイネの愛騎レイヴンは、ハイネの声に応え、高いいなきを発した。エメラルドワイバーンは翼竜の中でも極めて希有な種で、他の種の翼竜と交信が可能であり、かつそのいなきは遠く離れた個体にも届くと言われている。後方に待機していたワイバーニア軍第一軍団第一龍騎兵大隊の翼竜達はそのいななきに体を振って反応した。

「いよいよか……」

第一軍団副軍団長兼第一龍騎兵大隊長ゲルハルト・ライプニッツは愛騎の反応を見て、攻撃開始の時を悟った。

「全騎離陸！これより、メルキド軍巨兵大隊を急襲する！」

ゲルハルトは直ちに離陸命令を出し、陣を発った。世界の不文律を変える時が、今始まった。

第四章 決戦前夜 第二十二話

「敵歩兵大隊は追撃してこないようです」

メルキド軍第一巨兵大隊長付副官のプレヴューが大隊長のテコニックに報告した。

「そうだろうな。敵歩兵の損耗は限界に達していたからな。追撃するだけの力は残っていない」

ワイバニア軍優勢のこの戦いの中で、唯一局地的に勝利をもたらしていたのが、テコニック率いる第一巨兵大隊だった。この時点でも、巨兵が歩兵に打ち克つという世界のルールを覆す事態が起きてはいないが、拳兵隊がワイバニア歩兵に極めて大なる損害を与えていた訳ではなく、ワイバニア軍も整然と後退したため、歴史を覆すほどの事象にはならなかった。

もともと、メルキド軍にとっては、世界のルールを覆すということよりも、目の前のワイバニア軍本隊が気がかりであつたらう。

ワイバニア軍は騎兵大隊を使い、メルキド軍先鋒を挟み撃ちしていた。これによって受けたメルキド軍の損害は小さなものではなく、先鋒のメルキド軍騎兵大隊は3割の損害を出していた。

「………後退、後退だ！」

メルキド軍騎兵大隊長のガルフ・ストリームは指揮下の大隊に後退命令を出した。しかし、後退命令は出したものの、その実行は困難を極めた。

虎吼によってメルキド軍騎兵大隊はほぼ前後に分断されており、特に、最前線の部隊はバルトホルト率いるワイバニア軍司令部大隊の猛烈な射線にもさらされ、潰乱の様相を呈していた。

「くそ………ワイバニア軍め」

馬上から崩壊する戦線を見て、ガルフは悔しさに拳を握りしめた。

第四章 決戦前夜 第二十三話

その時だった。後続のヴィヴァ・レオ本隊から、二個歩兵大隊が救援に現れたのである。歩兵大隊はメルキド騎兵を蹂躪するワイバニア騎兵に横撃を加えた。

「しまった!」

「ふっ」

このとき、両軍の司令官は同時に異なる表情を浮かべた。

形勢は再びメルキド軍に傾いた。鶴翼陣形の変化形である虎吼の弱点は側面攻撃にある。さらに騎兵はその突進力と早さ故に側面が死角になる。ヴィヴァ・レオは虎の口が閉じたその瞬間に見定め、兵力を投入した。

虚をつかれたワイバニア軍はしばらく狂躁の中にいた。死角から槍を突かれ、落馬するワイバニア騎兵。彼を取り囲むように、剣と槍の雨が降り注いだ。

「ぐっ!」

「ちくしょう!」

次々と落馬する騎兵達は、剣や槍、そしてボウガンと、それぞれ手に応戦したが、数が違っていった。追いつめられたワイバニア騎兵が剣を一閃する度、その倍する斬撃が彼らに見舞われたのである。

「私としたことが、このような醜態をさらすとはな……」

虎吼の崩壊を目の当たりにしたハイネはほぞを噛んだ。

「並の将では、ああも鮮やかに挽回出来ないでしょう。やはり、恐るべき敵です」

参謀長のエルンストがハイネに言った。ハイネは後ろに控える参謀長の言葉に頷いた。

「貴公の言う通りだ。強いと思っていたが、これほどとはな。騎兵大隊は後退。第一重装歩兵大隊を前に出せ、両翼は弓兵大隊を展開、援護射撃せよ」

ハイネはすぐに命令を下した。通常ならば、歩兵に対し、騎兵は余りある程強大な戦力ではあったが、陣形が大きく崩れた今、すぐに戦力を再編する必要があった。

第四章 決戦前夜 第二十三話

「どうやら、窮地は脱したようだな」

後退していく敵騎兵を遙か遠くに見ながら、ヴィヴァ・レオは言った。これで、味方は予想外の損害を受けることは無くなった。あとは、敵の攻撃に合わせて、要塞におびき寄せただけだ。ヴィヴァ・レオの中で、勝利へのシナリオが描かれつつあった。

「あと一戦交えたら退くぞ。目一杯悔しがりながらな。歩兵大隊長達に伝えよ。盛大に負けて来いとな」

ヴィヴァ・レオは伝令兵に命じた。伝令は一礼すると馬に乗り、軍勢の中に消えていった。

「軍団長、間もなく巨兵大隊が合流します。後退のタイミングを少しずらして、敵軍を側面から攻撃してはいかがでしょうか？」

参謀長のブリオンがヴィヴァ・レオに意見を述べた。ヴィヴァ・レオはあごに手をあて、少しの間考える仕草をすると、信頼する参謀長に言った。

「うまくいくと、要塞を使わずに敵を壊滅出来るな。よし、その手でいこう」

ヴィヴァ・レオは頷いた。ヴィヴァ・レオ達の右側に戦象と石兵と巨体が姿を見せ始めていた。

「本隊が見えたな。全員、気を引き締めろよ。まだ、奴らの真打ち

が出ていないようだからな」

戦象に据え付けられた櫓の上で、メルキド軍巨兵大隊長のテコニックが櫓の中にいる部下達に念を押しした。

「しかし、アルマダのルールでは、巨兵は龍騎兵に勝つとあります。いかにワイバニア最強の龍騎兵といえども、我々巨兵大隊には容易に手出し出来ないでしょう」

副官のプレヴューがテコニックに返した。テコニックはプレヴューをじっと見ると、呆れたように語気を強めた。

第四章 決戦前夜 第二十四話

「副官、お前は今年のオセロー平原の戦いを知っているか？」

「はい。歩兵が龍騎兵隊を壊滅……」

「『全滅』だ。世界の不文律などあてにはならん。我々とて、どうなるか分かったものではない。油断するな」

プレヴューの言葉を遮って、テコニックは副官の言葉を言い直した。

「大隊長。9時の方向に翼竜多数。龍騎兵大隊と思われまます……」

龍騎兵見ゆの報告に、テコニックは急いで左の方角を見た。山陰から、たなびく雲のように紅の翼竜達が姿を現した。

「来たか……総員、対空戦用意！対龍装甲板閉鎖。ヘラクレス隊を直ちに展開し対空射撃用意。アキレス、オリオンは対空防御を徹底させる。急げ……」

テコニックはすぐに対空戦を命令した。龍騎兵対巨兵。両軍の最強戦力同士の激突が始まるうとしていた。

「……いよいよだな。エルンスト」

「はい。メルキド巨兵最期の時です」

遠くに龍騎兵の姿を見た二人は互いに話した。ワイバニア軍の戦術研究の成果が今、実を結ぼうとしていた。

「第一、第二中隊より攻撃開始。いいか！訓練通りやれば、何の問題もない。臆するな！我々はアルマダ最強の龍騎兵だ！」

ワイバニア軍第一龍騎兵大隊長のゲルハルト・ライプニッツが部下達に檄を飛ばした。

「全騎、ダイヴー！」

第一中隊長のオスヴァルト・バウアーが中隊に号令した。中隊長の号令のもと、100騎の龍騎兵が地面めがけて急降下していった。

第四章 決戦前夜 第二十五話

「うひゃあああ！」

第一中隊所属の龍騎兵、テオドル・フォン・ヘルツォークが不謹慎な叫び声をあげた。テオドルの目の前にはアーデン盆地の大地が凄まじい勢いで迫りつつあった。

「いつもながら寒気するな。急降下つてのは。なあ、トール。これから少し重いかも知れないけど、我慢してくれよな」

めまぐるしく変わる景色の中で、テオドルは愛騎の首を撫でた。地面に触れる刹那、ワイバニア龍騎兵達は翼竜の体を引き起こした。

「そつら！」

テオドルは手綱をひくと、がくと引かれるような重い感触を感じた。翼竜が携えた岩が落下のスピードを加えて、さらに重さを増したためだった。それでも、地面との激突をぎりぎり回避すると、ワイバニア龍騎兵隊は巨兵に向けて必殺の一撃を放った。

「いけえ！」

テオドルは手綱をひねり、愛騎に命令を伝達した。すると、大岩が翼竜の足から離れ、メルキド巨兵めがけて殺到した。

「回避い！ かい……」

背中に巨大なボウガンを抱えた中長距離支援用石兵「ヘラクレス」

隊長が言えたのはそれだけだった。二個中隊分、二〇〇個の岩の津波が石兵を押し流した。

「よっしゃー！」

愛騎トールの翼を羽ばたかせ、上昇していたテオドールは思わず拳を握った。石兵に対するワイバニア軍の完全勝利だった。

「跳弾だと……。やつら、何て技を……」

龍騎兵の刃や牙を防ぐ、対龍装甲板に空けられた小さな窓からテコニツクは石兵隊が全滅する様を見せつけられた。

アルマダの中でも最長の射程を誇るヘラクレスの大型ボウガンの間合いの外からの攻撃。龍騎兵は全く損害をうけることなく、石兵や戦象への攻撃が可能になる。テコニツクは悟った。自分たちがいかに無防備で無力な様をさらけ出しているのかを、そして自分の最期のときを。窓の外には、さらに三〇〇の龍騎兵が急降下を開始する姿が見えた。

第四章 決戦前夜 第二十六話

そのわずか数秒後、さらなる岩の津波が戦象隊に押し寄せた。あるものは腹をえぐられ、あるものは膝を砕かれ、ほぼ全ての戦象が地に倒れ込んだ。それはテコニツクの座乗する戦象とて例外ではなかった。

「うおっ！」

戦象の頭部に跳弾が直撃し、戦象はぐらりと横に倒れた。ほんの一瞬间のことではあるが、テコニツくら、櫓の中の間人は、皆天地が変わったと感じただろう。

ぐしゃと言う、不気味な金属のひしゃげる音と共に、テコニツクの視界が暗闇に閉ざされた。星王暦2183年6月13日午後4時35分、メルキド軍第一巨兵大隊長テコニツク戦死。戦闘開始から、わずか10分のことだった。そのさらに5分後、メルキド公国が誇る最強の巨兵大隊は全滅した。

「ばかな………」

あまりの光景にプリオンは色を失った。龍騎兵に強いはずの巨兵大隊がたったの15分で全滅したのだから。だが、メルキド軍の悲劇はこれだけにとどまらなかった。巨兵大隊を全滅させた龍騎兵達はその余勢をかって、メルキド軍に襲いかかったのである。空から襲い来る翼竜の牙や爪に、兵士達は無力だった。メルキド兵達は翼竜達にその臓腑を食い破られ、次々と地面に倒れていった。

「うるたえるな。演技する必要がなくなっただけだ。総員対空防衛

姿勢のまま、後退だ！！」

ヴィヴァ・レオは総大将たる威厳をもって命令した。なんと滑稽なことか。敗走を威厳を込めながら命令するとは。ヴィヴァ・レオは心の中で自分を笑った。切り札を失いメルキド軍の敗北はほぼ決定的となっていた。未だ1万にせまる兵力を残していたが、巨兵を失った兵士達の動揺は大きく、陣形に隙が生じ始めていた。

「今だ！敵を突き崩せ！！」

ハインは最前線の重装歩兵大隊と龍騎兵大隊に追撃戦を命じた。

第四章 決戦前夜 第二十七話

ハイネとヴィヴァ・レオが激戦を繰り広げている戦場の遙か後方、ワイバニア帝国軍第十二軍団は方陣を敷いたまま待機していた。

「やっぱりクライネヴァルト軍団長はすごい。あのメルキド第一軍団を圧倒している」

第十二軍団長ヴィクター・フォン・バルクホルンは双眼鏡から目を離して言った。

「あの陣形転換のタイミング。よく見ておけよ。ヴィクター。ピンチをチャンスに変えるのが上位軍団長の証だからな」

隣に立っていた第十二軍団第一龍騎兵大隊長のコンラート・フォン・シュレヒトが野太い声で言った。

「ちょっと、呼び捨ては止めてくださいよ。コンラートさん。僕はもう、第十二軍団長なんですよ」

自分もまた部下をさん付けしたことを忘れて、ヴィクターはむくれ顔でコンラートをたしなめた。そのあまりに初々しい様子にコンラートは思わず破顔した。

「何言ってるんだ。坊主と呼ばれないだけマシと思え。なあ、ヴィクター」

翼竜の手綱だこまじりのごつごつした大きな手で、コンラートはヴィクターの肩を何度も叩いた。もう子どもじゃないのに。コンラ

トにはしばし叩かれる度、ヴィクターは顔を赤くしてむくれた。

自分の年齢の半分ほどの年齢の軍団長をからかっていたコンラートの頭を後ろから誰かが殴った。予期せぬ一撃にコンラートは振り向き、その相手を見ると、長い髪を後ろで縛った士官が立っていた。

「馬鹿が。軍団長を呼び捨てにするなど何度言ったら分かるのだ。兵達に示しがつかないだろうが」

第十二軍団参謀長のローレンツ・フルトヴェングラーだった。

「もともとは俺の生徒だった男だぞ。それぐらい大目に見てもいいだろう。ローレンツ」

「参、謀、長、だ。いかに士官学校の同期で同僚とはいえ、軍務の時は礼節を重んじる。シュレヒト隊長」

同期の遠慮のない言葉をローレンツはぴしゃりとはねのけた。そんな二人のやりとりをヴィクターは微笑ましく見守っていた。

第四章 決戦前夜 第二十八話

ローレンツとコンラートはヴィクターの士官学校時代の教官にあたる。豪放で大胆なコンラートの実技と理論的で論理にかなうローレンツの戦術論はヴィクターのお気に入り授業だった。

ヴィクターが第十二軍団長に任命されたとき、彼は幕僚として二人の名を真つ先に挙げた。軍としても史上最年少で軍団長になったヴィクターには未知数な面が多く、知略と武勇の両面からの補佐役が不可欠だと考えていたため、ヴィクターからの推薦人事を二つ返事で承諾した。

尊敬する教官に出会えるとヴィクターは素直に人事を喜んだが、彼を待っていたのは士官学校時代とは違う二人だった。

コンラートは教官気分が抜けきれないのか、ヴィクターを呼び捨てか坊や扱いであったし、ローレンツはローレンツで、ことさらに自分の地位とヴィクターの地位を強調し、参謀長として一線を引いて接した。

二人とも、士官学校を出たで、軍団長に就任したヴィクターを慮つての態度であったが、しばらくの間、ヴィクターは二人の態度の違いに頭を悩ませていた。しかし、反面楽しみも増えた。それは二人の掛け合いだった。性格が正反対である彼らは、ことあるごとに衝突を繰り返していたが、彼らの衝突はいい意味で軍団内を活性化させる起爆剤になった。くわえて、漫才にも似た平時の二人のやり取りがヴィクターにとっては何よりも微笑ましく、楽しいものになっていた。

いい軍団になったなあ。最初は不安だったけど。ヴィクターは今が臨戦態勢であることも忘れて、優しい笑みを浮かべていた。

「軍団長。今は臨戦態勢のただ中。くれぐれも油断なさらぬように」

野太いが、どこか安心感を与える声でローレンツはヴィクターをたしなめた。

「は、はい！」

かつての教官の一言にヴィクターはつい、背筋を伸ばした。そんな軍団長にローレンツは苦笑まじりのため息をついて尋ねた。

「……それで、我々第十二軍団はどうしますか？　いつでも攻撃出来る準備はできています」

「まだです。ローレンツ参謀長。敵軍右翼二〇〇〇が我々に張り付いています。こちらがいくら兵の数で勝っていても、今動けば、逆撃をくらうでしょう。第一軍団の動きを見ると、敵本隊が後退をはじめていきます。おそらく、近いうちにこの兵力を予備兵力として投入するでしょう。動くならこのときです」

ヴィクターの考えに理知的な参謀長は大きく頷いた。これこそが、ヴィクターが軍団長たる由縁でもあった。その洞察力と戦機の読みは同輩に並ぶものではなく、軍団長クラスと言えども、彼にかなうものは少なかった。そのため、第十二軍団は比較的弱兵でありながら、効率の良い兵力運用で戦果をあげることができていた。

第四章 決戦前夜 第二十九話

「……しかし、僕はそのときでも、兵を動かす気はありません」

「何故です？」

好機にも関わらず、兵を動かさないことに納得のいかないローレンツがヴィクターに尋ねると、ヴィクターはかつての師に真つすぐなまなざしで返した。

「クライネヴァルト軍団長がそれを望んでいないからです。クライネヴァルト軍団長はメルキド最強の軍団長と一人で戦うことを望んでいる。無用な横槍はあの人への侮辱になります。僕は武人として恥じる真似はしたくない」

「よく言った！ それでこそ、俺たちの軍団長だ！」

豪快な笑い声と共にコンラートがヴィクターの背中を思いっきりひっぱたいた。ヴィクターは突然のことに目を見開き激しく咳き込んだ。

「コンラート！」

「俺あ、軍団長の考えに賛成だ。男を下げる真似なんざ、命令されたってするかよ。お前はどつなんだ？ローレンツ」

「私も軍団長の考えには賛成だ。ただし……」

ローレンツは咳き込むヴィクターを一瞥した。それだけで、ヴィク

ターにはローレンツが何を言わんとしているか理解出来た。

「……は、はい。こちらが攻撃を受けた時は全力で応戦します」
息苦しそつにヴィクターは言った。

「決まりだな。ヴィクター。それじゃ、全軍に命令だ！」

「軍団長は僕なんだけどな……」

ようやく呼吸苦から解放されたヴィクターは不満そつに口を尖らせた。ローレンツもまた額に指をあて、小さく首を振った。

戦端が開かれて4時間、形勢はワイバニア軍有利に傾いていた。

第四章 決戦前夜 第三十話

「よく戦っているようだな。第一軍団は」

戦場の最後方、第二軍団と第四軍団を両翼に従え、絶対安全圏を確保した皇帝本陣で、ワイバニア帝国皇帝ジギスムント一世はにやりと不敵な笑みを浮かべた。

軍団長を指揮下の軍団に飛ばし、最上級指揮官の少なくなった皇帝本陣には、戦況を報告する伝令兵が次々とやってきていた。ジギスムントはベティーナ・フォン・ワイエルシュトラス率いる第七軍団に詳しい戦況を報告するよう命じていた。

これは、参謀出身であるベティーナが最も的確かつ正確に情報収集ができるジギスムントとシモーヌが考えたためであり、ベティーナは二人の期待に見事に応えた。

彼女は手持ちの龍騎兵を戦場の空に飛ばし、空から戦況を把握すると共に、2個大隊の兵力をアーデン盆地周囲の山に分隊規模で分散して配置させた。これにより、戦場のより詳細な様子がジギスムントらに伝えられた。

「クライネヴァルトは本当に良く戦っている。自分がただの囿に過ぎないということにも気づかずにな」

ジギスムントはさらに底意地の悪い笑みを浮かべて低く笑った。ジギスムントの前に広げられた陣形図には、ハイネ率いる第一軍団がヴィヴァ・レオ率いるメルキド軍を要塞へと追いつめている様子が描かれていた。

「ふふふ……もうすぐね」

露出の高い服に身を包んだ右元帥のシモーヌが腕を組んでジギスメントの背後の暗闇から現れた。ここが戦場で、しかも右元帥と言う称号がなければ、娼婦と勘違いされてもおかしくない格好だった。

「ああ。もうすぐだ……」

ジギスメントはそんなシモーヌに一瞥だにせず言った。陣形図の第一軍団はなおも前進を続けていた。

第四章 決戦前夜 第三十一話

「第二、第三歩兵大隊、突破されました!!」

ハイネのもとに、メルキド軍後方を攻撃していた2個大隊が突破されたとの報告が入った。

「敵も必死と言う訳ですな。本気で退却しているとなれば、2個大隊などひとたまりも……失礼しました」

報告を受けたエルンストはわずかに余計なことを発したとハイネに詫びた。

「いや、気にする必要はない。第二、第三大隊を本隊に合流させる。他に分散させていた全部隊も本隊に合流させる。急げ」

ハイネは金の長髪を風になびかせて、部下に命じた。

「まだだ。要塞の射程に引き込めば、勝機はある」

ヴィヴァ・レオは剣を高く掲げて、後退する全兵士に向けて呼びかけた。

アーデン要塞は盆地の出口左右に築かれた二つの砦で構成される。石レンガで作られたがへ気は矢も龍の牙も通さず、兵士がよじ上ることができない高所に備えられた無数の矢口からは敵兵に向けて容赦なく矢の雨が振らされる、完全無欠の要塞だった。

ヴィヴァ・レオは要塞からの十字砲火にすべてを賭けていた。

ヴィヴァ・レオ率いるメルキド第一軍団はその傷ついた体を引きずりながら、ワイバニア軍をアーデン要塞の射程に巧みにおびき寄せていた。

「敵軍の先鋒はまだ、我々を追撃しています。このまま敗走を……いや、後退を続けますか？」

「敵がそれを許してくれるのならな」

参謀長のブリオンの問いにヴィヴァ・レオは返した。全軍集結のためだろうか。いささかながら敵軍は速度を緩めている。こちらがタイミングを間違えなければ、十分に要塞の射程に誘い込める。ヴィヴァ・レオは考えをめぐらした。

第四章 決戦前夜 第三十二話

一方、ハイネ率いる第一軍団はヴィヴァ・レオによって突破された第二、第三歩兵大隊との合流を果たしていた。戦闘中に合流した第一歩兵大隊と合わせて、第一軍団の全兵力がここにそろった。しかし、その全兵力は8,500名にまで落ち込んでいた。これは、第一軍団創設以来最大の損害であり、優勢にあるとはいえ、ヴィヴァ・レオとの戦闘がいかに激烈であったかを物語っていた。

「これで、全軍揃ったな」

一堂に会した大隊長達の前でハイネは言った。

「いよいよ、最終局面と言いつ訳ですか!？」

第一歩兵大隊長のヘルムート・フォン・シュナイダーがハイネに尋ねた。ハイネは頷くと目の前に広げた陣形図を指差した。

「現在のところ、敵軍は敗走を続けている。我々はこれに追いつき、敵を殲滅する」

図上ではらばらになっているヴィヴァ・レオの陣形をハイネは指差した。

「それで、陣立てはいかがなさいますか？」

副軍団長のゲルハルト・ライプニッツが尋ねると、参謀長のエルンストが詳しい陣形を説明した。

「第一陣は第一から第三歩兵大隊。第二陣は第一、第二重装歩兵大隊と弓兵大隊、左翼は第一弓兵大隊、右翼は第二騎兵大隊だ。中央には司令部大隊、後衛は第一龍騎兵大隊とする」

「これは……」

「そつだ。龍将三十六陣”臥龍”にて敵にとどめを刺す！」

陣容を聞いて驚くゲルハルトに、ハイネは陣形図に手を叩き付けて言った。ハイネの目には自信の光がたゆたっていた。

第四章 決戦前夜 第三十二話（後書き）

雨霧颯太です。

龍の旗の下に アルファポリスファンタジー大賞にエントリーしました。

ご投票いただけたら幸いです。

第四章 決戦前夜 第三十三話

「敵軍が陣形を変えているようです。いかがしますか？」

メルキド軍参謀長のブリオンがヴィヴァ・レオに尋ねた。

「隙がないわけではないが……無理だな。逆撃を食らって、損害が増えるだけだ」

「私もそう思います。ここは、一度バラバラになった陣形を元に戻してはどうでしょうか？」

「少しは動いたフリを見せねば怪しまれると言っ訳か。よし、少しだけ守りを固めるぞ。奴らにもう一泡吹かせるためにな」

ヴィヴァ・レオは全軍に守りを固めさせた。空が血の色に染まる夕暮れ時。戦いの最終局面が迫りつつあった。

「全軍、突撃！」

紅のマントを翻し、ハイネは全軍に突撃の命令を出した。ワイバニア軍最後の攻撃が今、始まったのだった。

「さあ、来たぞ!!!レグロン隊を前に出せ。敵先鋒の動きを鈍らせるんだ！」

ヴィヴァ・レオは本隊のやや後方に予備兵力として控えていたレグロン隊2,000に前進を命じた。

「信号旗を確認しました。前進です。レグロン隊長」

副官のキスールの報告に隊長のレグロンは小さく頷いた。

「我々と対峙している敵一個軍団はどうされますか？」

「放っておけ」

「は？」

上官の意外な命令にキスールは思わず声を上げた。

「お前も分かっているように。一個軍団の兵力を前に我々などひとたりもないくらい。それに、我々を倒し、ヴィヴァ・レオ閣下を後方から襲う機会など、いくらでもあった。だが、そうしなかった。やつらのはあの敵の第一軍団長一人で戦わせたいのだ。最高の武人同士に最高の戦いをさせたいのだろう」

「なるほど……」

「さあ、前進だ。キスール。我々も華を添えようではないか。この戦いのな」

キスールは頷いた。アドニス要塞群の陥落以後、レグロンは変わった。冷静さと剛胆さを併せ持ち、将としての高みに到達していた。もし、この方に多くの兵力があったならば……キスールは由のないことを思った。

第四章 決戦前夜 第三十四話

レグロン隊は全速力でヴィヴァ・レオ本隊を追い越すと、先鋒の歩兵大隊側面に回り込もうとしたが、ワイバニア軍左翼の騎兵大隊がレグロン隊を遮った。

「そうはさせるか！！予備兵力を叩きつぶせ！！」

ワイバニア軍第一騎兵隊長のキール・フォン・ワグナーが先陣をきって突撃した。勇猛でならずキールを先頭に、1,000名のワイバニア騎兵がレグロンの巨兵、歩兵の混成部隊に向かっていった。

「もうすぐ……もうすぐだ」

ヴィヴァ・レオは高鳴る心臓を抑えきれずにいた。

あと少しでワイバニア軍を要塞の射程に引きずり込める。一発逆転の好機の到来を彼は待っていた。

そのころ、アーデン要塞の最上階、要塞司令室では司令官のマルルウーが戦況をじっと見つめていた。要塞の射程に入るまであとわずか。敵がじりじりとクロスファイア・ポイントに入り込む瞬間をはかっていた。

「全弓兵に攻撃準備」

マルルウーは攻撃準備を命じた。伝令兵がすぐに要塞に張り巡らされた伝声管に命令を伝えた。あとは命令を下すだけ。メルキド側の準備は整いつつあった。

「そろそろね……………影よ」

遠く離れたワイバニア軍皇帝本陣で、シモー又は影を呼んだ。

「これに……………」

「例の作戦をはじめろわ。城崩しをはじめなさい」

「は……………」

そういうと、影は姿を消した。

「伝令兵をこれに」

ジギスムントは直属の伝令兵を呼び出した。

「第三、第九、第十一軍団長に伝えよ。直ちに予の勅命を実行せよとな」

伝令兵は一礼して本陣を出て行くと、ジギスムントは高笑いをはじめた。その様子をシモー又は何も言わず、ただ若き皇帝を見守っていた。

第四章 決戦前夜 第三十五話

その頃、ハイネは敵軍の動きに違和感を感じ始めていた。参謀長のエルンストも同じことを考えていたようで、ハイネに意見を述べた。

「先ほどから敵軍の抵抗がさらに強くなりました。もしかしたら、今までの敵軍の敗走は罠かもしれません」

「貴公もそう思ったか。だが、罠と言われてもな……まさか!！」

ハイネは周囲を見て愕然とした。ヴィヴァ・レオに夢中で、自分がどれほど致命的なミスを犯していることに気がついていなかった。ハイネ率いるワイバニア軍団全軍はアーデン要塞の弓兵の射程に見事に誘い出されていたのだった。

「してやられた……ヴィヴァ・レオ!！」

ハイネの脳裏に「敗北」の二文字が浮かんだ。

「よし、攻撃開始!！」

ヴィヴァ・レオは攻撃開始の信号旗を掲げさせた。しかし、要塞からは何の動きも起きなかった。

「マルルウー。何をやっている……?」

ヴィヴァ・レオは要塞の司令室を見上げた。

「がっ………!!!?」

マルルウーは自分の身に何が起こったのかわからなかった。攻撃開始の命令を出そうとした瞬間、自分の胸からナイフが生えていた。

「何………者っ!!?」

振り向き様にマルルウーは言うつと、そのままこと切れた。一瞬の事態に司令室の兵士達の対応がわずかに遅れた。メルキドの軍服に身を包んだ暗殺者は、もう一本、長大なナイフを構えると、瞬間に司令室の幕僚や兵士を皆殺しにした。

司令部の兵士達に断末魔の声すらあげてことを許さなかった暗殺者は伝声管の前に立つと、懐から笛を取り出し、勢い良く吹いた。伝声管を伝って、甲高い笛の音が要塞内部に響き渡った。

「なんだ!!?何の警報だ!!?」

「司令部、おつと………ぐああああ!!!」

要塞内の至る所で悲鳴が上がった。さつきまで、味方だったはずの男達が突然刃を向けてきた。兵士達は盛んに応戦をしたが、誰が敵か味方かわからない状況の中、兵士達は混乱し、同士討ちする者も出始めた。マルルウーの死からわずか10分後、アーデン要塞から火の手が上がりはじめた。

第四章 決戦前夜 第三十六話

「ばか……な」

ヴィヴァ・レオは目を疑った。ワイバニア軍が動いた気配すらないのに、後方のアーデン要塞から、火の手が上がるとは……ヴィヴァ・レオには到底信じられることではなかった。

しかし、火の手が上がった次の瞬間にはヴィヴァ・レオに、その事実を信じざるを得なくなる事態が起きた。要塞後方の山々に3つの龍の旗印が翻ったのである。

「あははははははは！ メルキドのやつら、皆殺しにしてやるよ！」

桃色の龍に死神の旗印、ザビーネ・カーン率いるワイバニア第十一軍団。

「本当はこんな畜生働き、趣味じゃないんだけどねえ……勅命とあれば、逆らえんさね。野郎ども！ 油断するんじゃないよ！ 気を締めてかかりな！」

黄色の龍に斧の旗印、マルガレーテ・フォン・ハイネマン率いるワイバニア第九軍団。

「山を下りるぞ。敵軍の後方に出て退路を絶つ。……ハイネには恨まれることになるだろうがな」

青色の龍に稲妻の旗印、マンフレート・フリッツ・フォン・シラー率いるワイバニア第三軍団。三個軍団、三〇〇〇〇の兵力はそれぞれ

れにメルキド軍に襲いかかっていた。

要塞の火の手と、味方軍団の旗を見たハイネは、拳を握って激怒した。

「やってくれた……。やってくれたな、ジギスムント！」

その美しい金髪を怒りに揺らせ、ハイネは皇帝の名を叫んだ。この戦闘は、最初から茶番だったのだ。自分は敵軍の注意を引き、他の軍団を攻撃位置へ布陣させるための囿に過ぎなかった。それはハイネの誇りを著しく傷つけた。しかし、ハイネにとって何よりも許せなかったのは、卑劣な横やりによって、一対一の戦いが汚されたことだった。

「く、くくく……あーっはははは！ あのクライネヴァルトの怒りにふるえる姿が目には浮かぶ！」

伝令から戦況を報告されたジギスムントは皇帝本陣にしつらえられた椅子から転げ落ちる程、腹を抱えて笑った。

「ひどい人。あの気性の第一軍団長がどう出るかわかっているくせに」

シモーヌが体をくねらせてジギスムントの隣に腰掛けた。

「この作戦を考えた魔女が何を言うか。シモーヌ。悪い女だ……」

「あら、女は皆、悪いものよ。気づかない男が馬鹿なだけ」

シモーヌは妖艶な笑みを讃えて広げられた陣形図を見た。そこには、

ワイバニアの大軍に囲まれて、苦痛にのたうち回るメルキド軍の姿があった。

第四章 決戦前夜 第三十七話

「もはや……これまでか……」

近くに火勢の強まったアーデン要塞を見て、ヴィヴァ・レオは肩を落とした。メルキド軍はここに、完全敗北を喫したのだった。

「軍団長。退却出来る兵は退却させましょう。少しでも兵力は必要のほずです」

参謀長のブリオンがヴィヴァ・レオに言った。

「そうだな。第一歩兵大隊と第二歩兵大隊を残し、あとは戦場を離脱させよ」

ヴィヴァ・レオは決断を下した。だが、兵士達は戦場から離れようとはしなかった。陣形も何もかもおかまいなしで、彼らはワイバニア軍に向かって行った。

「何をしている？ 早く逃げろと伝えろ」

「彼らはここで戦い、死のうと考えているのでしよう。メルキド武人の誇りと共に」

「馬鹿が……。あれでは、犬死にはないか。重装歩兵大隊を前に出せ。両翼は歩兵大隊に固めさせる。全軍、密集隊形で突撃せよ」

ヴィヴァ・レオは目頭を熱くさせながら指揮をはじめた。夕暮れが終わり、闇が空を支配し始めた刻限、メルキド軍は最期の突撃を敢

行した。

「メルキド軍は突撃を開始したようです。……何と言う男達でしょう。敵とはいえ、尊敬に値します」

ワイバニア第一軍団参謀長のエルンスト・サヴァリッシュユが前に立つハイネに言った。

「エルンスト」

「はい」

「わたしは今、これほど敵を尊敬したことはない」

「はい」

「そして、これほど、皇帝を憎いと思ったこともない。奴は我々のそして、彼らの戦いを汚した」

今の自分の表情を見せなくなかったのだろう。ハイネはエルンストの方を振り返ることもなく言った。

「軍団長、お気持ちはお察しします。しかし、めったなことをおっしゃらないでください。軍団長のお立場どころか、お命すら危うくなります」

エルンストは真剣な顔つきで言った。ハイネは少しだけエルンストの方を振り返ると、笑って言った。

「ああ、わかった。せめて、我々の手で彼らを倒そう。龍将三十六

陣”臥龍”発動！ 敵軍を包囲、殲滅せよ！」

眠っている龍が翼を広げた。少なくとも戦場にいた兵士達はそう感じただろう。密集隊形で突撃したメルキド軍を空と陸から包み込むようにワイバニア軍は攻撃を開始した。

ハインとヴィヴァ・レオ。三国でも随一の戦術家同士の最後の激突が始まった。

第四章 決戦前夜 第三十八話

激突するヴィヴァ・レオの軍の後方にマンフレート・フリッツ・フオン・シラー率いるワイバニア軍第三軍団は布陣した。

「……………ハイネには切り刻まれても文句は言えないだろうな」

シラーはひとりごちた。シラー自身、ハイネとヴィヴァ・レオの戦いを邪魔したくはなかったし、何よりもハイネがこのような行為を嫌うことを一番良く分かっていた。おそらくは、このことをもジギスムントとシモー又は考慮に入れて勅命を発したのかもしれない。ぼさぼさの寝癖頭をかきむしりながら、シラーはため息をついた。

「軍団長……………戦況は我が軍にいささか不利かと思えます。ここは一度退却してはいかがでしょうか」

第三軍団参謀長のアルバート・フォン・ヘッセがシラーに意見を述べた。しかし、どこをどう見ても第三軍団有利の戦況だとわかっていた第三軍団長副官のヘルマン・プファイルがヘッセに反発した。

「何故です！？我々は敵軍の後背をおさえており、第一軍団と挟撃すれば、敵をいち早く殲滅出来ませぬ。極めて有利な戦況ではありませんか！？」

ヘッセは若き副官を睨みつけた。ヘッセはシラーとハイネの関係を知っていた。また、第三軍団の参謀長を長くつとめていたヘッセはハイネの人となりもよく知っており、新任の軍団長を慮って自分に責任が全てかぶるのを覚悟の上でシラーに進言したのだった。

シラーもまた、ヘッセの気持ちをよく理解していたので、副官をたしなめると、ヘッセに礼を言った。

「ありがとう。そして、すまないな。参謀長。参謀長の言う通り、我が軍団は有利とは言えない状況にある。第一軍団の臥龍の包囲は未だ完璧ではない。反転して、こちらに向かってくる可能性も考えられる。第三軍団は密集隊形のまま待機だ」

「しかし……」

「命令だ。ヘルマン」

シラーはヘルマンに念を押した。ヘッセは戦況を黙って見守るシラーに尋ねた。

「よろしいのですか？」

「ああ、貴官の気持ちはありがたいがな。勅令の手前もある。動けはせんよ」

「迅雷の第三軍団改め、不動の第三軍団ですか？」

ヘッセはにやりと笑うと、軽口を言った。

「不服か？」

「いえ、最高ですよ」

「ありがとう。これからもよろしく頼む。参謀長」

シラーは参謀長に笑顔で礼を言った。無精髭まじりの顔はお世辞にもさわやかとは言えなかったが、ヘッセにはそれで十分だった。以後、シラー率いる第三軍団は守勢に長け、どんな状況でも退くこともたじろぐこともない、不動の第三軍団として勇名を馳せることになる。

第四章 決戦前夜 第三十九話

メルキド軍はもはや全滅に等しかった。レグロン隊は隊長のレグロンをはじめ全滅し、メルキド軍は今や、司令部大隊数名を残すのみになっていた。

ヴィヴァ・レオも軍団長専用石兵「マルス」を駆って奮戦したが、心身ともに限界に達していた。「マルス」も激戦によって満身創痍の状態で腕は落ち、駆動部は不気味な音を立てていた。ヴィヴァ・レオは「マルス」から降りると、愛剣を杖代わりにして立った。

「はは……切り疲れてしまったな。……プリオン……」

ヴィヴァ・レオのすぐ横には、プリオンの遺体があった。信頼する参謀長も有能な部下も皆逝ってしまった。歩く力すら残っていないヴィヴァ・レオはただ、自分を遠巻きにしている兵士を見ることができなかった。

やがて、兵士達をかきわけて、紅のマントを羽織った若い男が現れた。男は自分が血に汚れるのも構わずに血だまりを踏みしめてヴィヴァ・レオの前に立った。

「わたしはワイバニア軍第一軍団長ハイネ・フォン・クライネヴァルト」

「メルキド公国軍第一軍団長ヴィヴァ・レオだ」

名将二人は互いの名を名乗った。戦場での礼儀であるかのように。

「貴公は……」

「なあ、ハイネ……お前さんには家族はいるか？」

「父と兄が帝都に……」

「俺には女房と子どもが二人、まだやんちゃな年頃でな。家に帰れば、襲いかかってきやがって、大戦争だよ」

ヴィヴァ・レオは笑った。この状況で何を話すのか。ハイネはヴィヴァ・レオの様子に戸惑っていた。

「何を……？」

「なあ、ハイネ……俺は家族に胸を張れる戦いをしたか？ 子ども達に『父ちゃんはすごい』と言える戦いぶりだったか？」

ハイネは目を閉じて愛剣を鞘から引き抜いた。剣を構えると、悲しい目をしてヴィヴァ・レオに告げた。

「貴公はアルマダ最高の勇者だ。貴公の家族に出会えたなら、そう伝えよう」

「ありがとう……やってくれ」

ひと雫、涙が落ちた。それが誰のものであったか、誰にも分からなかった。涙が地に落ちた瞬間、ハイネは神速と謳われる早さで剣を振り、ヴィヴァ・レオの首をはねた。

「全てを燃やせ。灰すら残すな。それが、皇帝からこの勇者たちを

守ってやれる唯一の手段だ」

そう言うと、ハイネは血のりを落として納刀して、踵を返して歩き出した。

「軍団長……」

エルンストはハイネを見送ることしか出来なかった。この時のハイネの背中はとても悲しげであったと、彼は日記に残している。

星王暦二一八三年六月十三日午後八時一三分、アーデン要塞陥落。
アーデン盆地の戦いはワイバニア軍の勝利で幕を閉じた。

第四章 決戦前夜 第四十話

星王暦2183年6月13日午後8時13分、アーデン要塞陥落。アーデン盆地の戦いはワイバニア軍の勝利で幕を閉じた。

翌日、ワイバニア帝国皇帝本陣にて今回の戦いにおける論功行賞の式典が行われることになった。式典で勲章を賜るのは4名の軍団長、ハイネ、シラー、マルガレーテ、ザビーネだった。

「軍団長、めつたなことはお考えにならないように」

ハイネのただならぬ鬱陶気を察した参謀長のエルンストが念を押した。ハイネは微笑むとエルンストの肩を叩いた。

「大丈夫だ。エルンスト、貴公に心配をかけるような真似はしない」

「しかし……」

「大丈夫だ。皆、よく戦ってくれた。あとで、傷兵を見舞ってやらねばな」

そう言うと、ハイネは宿営地のテントを出て行った。宿営地を一人歩いていたハイネはその所々に傷ついた兵士の姿を見つけた。メルキド最強であるヴィヴァ・レオの軍団と戦ったハイネら第一軍団の損害は3割を上回っていた。通常ならば、大敗とも言える数字であったが、それに対する敵の損害率が99%を超えていたため、どうか勝利と言えていた。ハイネは傷ついた兵士を見つける度に一人一人に声をかけ。戦いの労をねぎらった。宿営地を出たハイネを待っていたのは、白い鎧に身を包んだ金髪の美女だった。

「マレーネ殿……」

「クライネヴァルト軍団長、お待ちしておりました。宿営地へお戻りください」

ワイバニアの聖母と讃えられる美貌の軍団長は高級な楽器ですらかなわぬ美しい声でハイネに告げた。

第四章 決戦前夜 第四十一話

「何故……?」

「陛下と右元帥を斬るおつもりなのでしょう? あなたの殺気が遠く離れた場所からでも感じましたから」

「で、どうするおつもりか」

ハイネは鞘に手をかけてマレーネをにらんだ。

「戻らなければ、カづくでも……」

マレーネはそう言うと、愛槍の鞘を抜いた。

「わたしに勝てるとお思いか? アウブスブルグ殿」

「ここでわたしが死んでも、あなたをお止めしなければならぬ。わたしはそう覚悟して参りました」

「そうか……」

ハイネは静かに愛剣を抜いた。ほんの数瞬の対峙の後、マレーネはハイネに攻撃を仕掛けた。反撃も反応も許さぬ程の超高速の突き。槍の穂先はハイネの攻撃の起点である右肩を確実に貫いた。……はずだった。マレーネの渾身の突きはハイネの残像を貫き、空しく空を切った。

「すまぬ。マレーネ殿。貴公の気持ちだけ受け取っておこう」

マレーネの耳元でハイネはささやき、剣の柄でマレーネの腹を突いた。

「ハイ……ネ……」

急所をうたれ、遠のく意識の中、マレーネはハイネの背中を見送った。

マレーネを倒し、一人皇帝宿営地にやってきたハイネはよく知る二人に出会った。

「マンフレート、ワイエルシュトラス……」

「お前には済まないことをしたと思っている」

「いや、いい。ここを通してくれ、マンフレート」

「だめだ。通す訳にはいかない」

「通してくれ、マンフレート」

ハイネの懇願にシラーは身を前に出し、一向に動くそぶりを見せなかった。

「通せば、お前は陛下と右元帥閣下を斬るだろう。そんなことをしてみる、お前、死ぬだけでは済まないぞ」

シラーはハイネに言った。そのとき、白銀の切っ先がハイネののど元に突きつけられた。ハイネとシラーはその剣の持ち主に目をやっ

た。

第四章 決戦前夜 第四十二話

「先輩……」

「貴公……」

「戻りなさい。ハイネ君。これ以上進むことは私が許さないわ」

第七軍団長ベティーナ・フォン・ワイエルシュトラスは切っ先を動かすこともなく言った。

「ハイネ。少し休め。陛下と他の軍団長には俺たちがうまく言うておく」

シラーがハイネを見下ろした。シラーにしても、他の軍団長にしても、ハイネが皇帝と右元帥を斬り捨てて何の益もなかった。それはハイネ自身が最も良く分かっていたが、ハイネとしてもけじめをつけられずにはいらなかった。武人同士の立ち会いを汚された痛みは皇帝と右元帥をなます切りにしてもなお、消えるものではなかった。

「どけ、マンフレート、ワイエルシュトラス。どかぬなら、貴公らとて斬って捨てる」

ハイネは声低く言うと、鞘に手をかけた。

「ハイネ！」

わずか一瞬、二秒にも満たない時間だった。ハイネは膝を折って崩

れ落ちた。

「無、念……」

ワイバニア最強の剣士の一人を倒した二人の軍団長は荒く息を吐いた。

「はあ、はあ……ありがとう。シラー。あなたがいなければ死んでいたわ」

「先、輩こそ、あのハイネを倒すなんて……お見それしました」

シラーは苦笑いを浮かべた。シラーの左腕からは鮮血がとめどなく流れ落ちていた。ハイネが剣を抜いた一瞬、シラーはハイネの剣を左手で握りしめ、ベティーナが斬撃を加える一瞬の隙を作り出したのである。シラーが剣を止めていなければ、今頃ベティーナの美しい首が宙に飛んでいたことだろう。

「たまたまよ、たまたま。……なんて人。これほどまでに強かったなんて。前に私が彼の斬撃を受け止めたとき、彼は実力の半分も出していなかったのね」

ベティーナは気絶して地に伏せたハイネを見て言った。

「こいつは俺たちに必要な人間だ……今ここで、むざむざ死なせるわけにはいかない。……レイヴン！」

シラーはハイネの愛騎の名を呼んだ。本来、主人と認めたものしか心を開かないエメラルドワイバーンも、主人と特に仲のいいシラーの言うことを聞くことがあった。シラーの呼び声を聞き、主に切迫

した事態が起きたと察したレイヴンはシラーのもとに降り立った。

第四章 決戦前夜 第四十三話

「レイヴン。ハイネを少しの間休ませたいんだ。ベリリヒンゲンまで、ハイネを送ってやってくれ」

ハイネを抱きかかえたシラーがレイヴンに頼んだ。レイヴンはシラーの前に首を差し出し、低く唸った。Yesのサインである。

「ありがとう。レイヴン」

ハイネをレイヴンの背に乗せると、出血の止まらぬ手をかばいながら、シラーは笑った。レイヴンは高いいななくと、空高く舞い上がった。

皇帝本陣ではジギスムントが豪華な装飾が施された簡易型の玉座に腰掛けていた。

「第二軍団長と第一軍団長はどうした？」

ジギスムントは不機嫌そうに尋ねた。

「第二軍団長殿は、体調が優れぬ故、欠席するとの報告が入っております」

皇帝側近のフリードリヒ・フォン・ヘンデルがそつと口添えした。

「第一軍団長はどうした？」

眉目秀麗な側近は表情を崩さずに皇帝に言った。

「第一軍団長殿に関しては、報告は入っておりません」

「あやつめ。余の式典を愚弄するか……」

ジギスムントは舌打ちした。式典の刻限は過ぎていると言うのに、功のあったハイネもシラーも現れなかった。気に入らないハイネを、面前で侮辱することが今回ジギスムントが式典を開いた目的だった。軍団長の誰もがこのことを分かっていたので、出席するのも気が進まず、ただ目を伏せていた。そのとき、テントの幕を開けてシラーが入ってきた。

「遅いぞ。シラー軍団長」

「申し訳ありません、陛下。それと報告いたしたいことがございませぬ。第一軍団長ハイネ・フォン・クライネヴァルト、先の戦闘で受けた戦傷が重く、わたしの独断でベリリヒンゲンまで返しました」

「何だと！」

ジギスムントは玉座から立ち上がった。それを見たシモーヌが前に出てシラーに言った。

第四章 決戦前夜 第四十四話

「シラー軍団長、独断が過ぎたわね。軍団長の処遇に関しては皇帝陛下とわたしにその権限があるの。わかっているわね」

「はい」

「まして、第一軍団は我々の切り札。その長をわたし達に無断でベリリヒンゲンまで帰したとなると、あなたも処分を免れないわよ」

「覚悟しております」

シラーは粛々とシモーヌの話聞いた。どんな理由であれ、皇帝側の言い分の方が筋が通っている。シラーは軍団長位剥奪を覚悟した。

「まあ、いいんじゃないの？怪我なら仕方ないさね」

手を頭の後ろに組んでマルガレーテが右元帥に言った。

「そうだな。第一軍団の損害も大きい。戦力の再編と兵の休養も必要だ」

第八軍団長のゲオルグ・ヒッパーも頷いた。

「ほほ。わしら軍団長はシラーのしたことを悪いとは思ってらんぞ。戦傷が重くなれば、最悪の場合死に至ることも考えられる。わしらにとっては、それこそ大きな損失ではないかの？」

第四軍団長のグレゴール・フォン・ベッケンバウアーが言った。実

戦指揮官である軍団長達に逆らわれては皇帝と右元帥といえどもなにも言えなかった。右元帥は、シラーの勲章剥奪と引き換えに、ハインのベリリヒンゲン帰還を許すことを皇帝に進言した。皇帝のジギスムントは不機嫌そうにシモーヌの案に頷くと、戦いに功のあったマルガレーテとザビーネに勲章を授けて式典を終わらせた。

ジギスムントは諸将を解散させた後、側近のフリードリヒを近くに呼び寄せた。

「ヴィヴァ・レオの生死はどうなった？」

「報告ではクライネヴァルト軍団長自ら討ち取られたと……」

「報告などあてにならない。首はあるのか？」

「いえ、戦闘による火勢強く、回収出来なかったとのことですよ」

フリードリヒの報告を聞いたジギスムントは玉座に肘をついて考える仕草をした。

「フリードリヒ。余が世界をとったその時、クライネヴァルトは消せ」

ジギスムントは眼光鋭く側近に命じた。

「罪状はヴィヴァ・レオを逃がしたことだ」

「しかし、多数の兵士がヴィヴァ・レオの死を目撃しておりますが……」

「余が生きていると言えば、生きているのだ。よいな」

「御意」

そう言うと、フリードリヒは一礼し、本陣のテントを出て行った。

「悪い人ね。死者を生き返らせるなんて」

二人だけになった皇帝本陣の中で、シモーヌはジギスムントに言った。

「死人に口無しだ。ヴィヴァ・レオにはハイネ失脚の役に立ってもらうとしよっ」

そう言うと、ジギスムントはシモーヌの体を乱暴に引き寄せた。

「お前もだ。シモーヌ。俺に何か隠していたら、その時は……」

シモーヌは服を脱ぎ、下着だけの姿になると、妖艶な笑みを浮かべながらジギスムントにささやいた。

「わたしはあなたの協力者。この声、この体。何も隠すものなどないわ……」

シモーヌはジギスムントに唇を寄せると、手に持った扇を投げ、ろっくの明かりを消した。

第四章 決戦前夜 第四十五話

「ここは……」

二日後、ハイネはベリリヒンゲンの自邸のベッドの上で目を覚ました。朝の陽光が窓から差し込み、純白の調度品を美しく照らしていた。

「私の部屋……いったい、どうして……?」

ハイネは周囲を見回した。ハイネのベッドの隣には豪華ではあるが、きらびやかでない刺繍が施された椅子があった。さらに視線を伸ばすと、レースのカーテンが風に揺れていた。ハイネは起き上がると、ガウンを羽織り、庭に出た。そこには金の長い髪を後ろに束ねた美しい女性が一人、鎧を脱いだレイヴンの頭をいとおしそうに撫でていた。

「クリスチーネ……」

ハイネは女性の名を呼んだ。クリスチーネは声の主の姿を認めると、優しげに微笑んだ。

「ハイネ様。お目覚めになられたのですね?」

「私は、どうしてここに……」

クリスチーネはハイネのもとに歩み寄ると、一通の封筒を手渡した。

「少し前、マンフレート様の使いの者がハイネ様にと」

ハインはシラーからの手紙を開いた。そこにはシラーの謝罪の言葉と、式典の顛末が書かれていた。最期にハインに2週間の休養がハインに許されたこと、クリスチーネと仲良くするようにとの旨が記されていた。ハインは親友の下手な字でしたためられた手紙と気持ちにいつになく優しい微笑みを浮かべた。

「あいつめ……」

「ハイン様。クリスチーネは嬉しく思います。久しくハイン様とお会い出来ないと思っていたのですから」

ハインは恋人と会えたことを素直に喜んだ。ハイン自身、クリスチーネと過ごす時間が何よりも幸福だったのである。だが、武人としての理性がハインに幸福な時を過ごすことをとどめさせた。未だ戦場には数千を超える部下が、恋人や家族と会えずに戦っているのだ。ハインはすぐにも戦場に戻らなければならなかった。

クリスチーネにすぐに戦場にもどると伝えようとした時、ハインは二通目の手紙に気がついた。エルンストがハインに宛てた手紙だった。

『軍団長。この度の戦いでもっとも傷つき、疲れているのは軍団長だと、軍団の者達は皆分かっています。幸い、第一軍団は戦力再編と兵力補充のため、アーデン盆地にとどまる予定です。ですから、軍団長はしっかりと休養なさってください。寂しがりやの婚約者様となかよく。』
エルンスト・サヴァリツシュ』

部下達もハインを思い、気遣ってくれている。そのことがハインの心を打った。ハインは観念して、休養をとることを決めた。

ハインは恋人を抱き寄せると軽く口づけを交わした。

第四章 決戦前夜 第四十六話

星王曆二一八三年六月二十三日、ヒーリー・エル・フォレストル率いるメルキド増援軍約四〇〇〇〇人はガスパール河畔のアークプリマス港に到着した。メルキド、フォレストル国境であるこの大河は幅五〇キロにおよび、渡河には船を必要としていた。河岸に立ったヒーリーは海にも似たガスパール川の大きさに圧倒されていた。

「毎度のことながら、この大河の大きさには恐れ入るな」

ヒーリーは河原に寝そべると、ヴェルにもたれた。兵士達には港町で問題を起こさぬように厳命し、一日の休息を取らせていた。フォレストルを出ると、休む間もない戦いの日々になる。ヒーリーなりの心遣いだった。

「さて、夕方まで昼寝と……」

大あくびをするヴェルをまくらにゆっくりと昼寝と洒落込もうとしたヒーリーの上に影がかかった。

「ん？」

「ジュ」

「うわっ！ メアリ！」

天敵である参謀長を見たヒーリーは飛び起きた。

「お目覚めですか？ 軍団長閣下」

美貌の参謀長は鋭い眼鏡を上げて言った。

「提督にご挨拶にいきますよ」

「叔父上は苦手なんだ。メアリとピット爺だけでいいじゃないか」

「だめです。あなたは総司令官なのよ。兵の輸送を水軍にお願いするのだから、あなたが挨拶に行かないでどうするの？」

「そうだぞ、ヒーリー。それが総司令官の筋つてもんじゃ」

メアリとヒーリーは同時に後ろを振り向いた。そこには右目を眼帯で隠した大男が立っていた。フォレストアル王国国王ジェイムズの実弟であり、フォレストアル水軍総司令官、ウォルター・エル・フォレストアルその人だった。

第四章 決戦前夜 第四十六話（後書き）

フォレスタル編突入です。

現在、アルファポリスファンタジー大賞にエントリー中です。

投票お願いします。

第四章 決戦前夜 第四十七話

「こちとら、可愛い甥っ子に会いに来たと言うのにお。苦手と言われると、悲しいもんじゃき」

ウォルターは腕を大きさに振り上げて涙を拭く仕草をした。

「よしてください、叔父上！大人げない」

ヒーリーは立ち上がると泣きまねをする叔父に駆け寄った。

ウォルター・エル・フォレストルは45歳、フォレストル国王ジェイムズの実弟である。14歳のときに船上の盟約にともない、3年間の人質生活を余儀なくされたが、王太子エリクシルの誕生と共にフォレストル王国に帰還した。その際船上から見たガスパール川の美しさに魅了され、水軍に入隊。以後頭角を現したウォルターは数々の実戦を経験し、30歳で水軍提督に昇格した。また、剣の達人としても知られ、ピット、ジェイムズというアルマダ屈指の剣豪と互角に渡り合えるほどの腕の持ち主だった。

ヒーリーはメアリ以上に、このアルマダ唯一の提督を苦手としていた。メアリは数々の体罰から来るトラウマから苦手であったし、ウォルターはその芝居がかった行動そのものが苦手だった。もともと、何事にも無関心であったヒーリーには、何事にも暑苦しく自分にからんでくるウォルターが嫌だったのである。

「わかった、わかった。ところで、仕事の話にもどるがお、ヒーリー。水軍の船総数600隻、メルキド増援軍輸送の任、確かに承ったぜよ。あとはお前らをのせるだけじゃき」

船乗り特有の焼けた肌に白い歯をまぶしくきらめかせて、ウォルターは笑った。

「ありがとうございます。提督。つきましては提督にもう一つお願いがございます」

「なんじゃ？いきなりかしまつて。気持ち悪いのお。わしとお前の仲ぜよ。なんでも言ってみい」

「ミュセドーラス平野まで、我々増援軍の補給部隊の護衛をお願いしたいのです」

第四章 決戦前夜 第四十七話（後書き）

ただ今、アルファポリスファンタジー大賞にエントリー中です。
良かったら、投票お願いします。

第四章 決戦前夜 第四十八話

ウォルターの表情がわずかに固まった。ウォルターは声の抑揚を抑えてヒーリーに尋ねた。

「お前……わしらに運び屋のまねことをせいと言うちよるのか？」

「……そういうことになります」

ヒーリーはウォルターから目を背けて言った。ウォルターはきつとヒーリーをにらむと剣を抜き、ヒーリーの眉間につきつけた。

「提督！！」

「メアリ。お前は黙っちゃね。ヒーリー。お前、わしらをなめちよるのか？わしらは船乗りじゃ。自然を相手に命のやり取りをやつちよる。その勇気と誇りはアルマダのどの軍団にも負けんつもりじゃ。じゃがお前はその船乗りの誇りを汚そうとしちよる。わしはそれが許せんじゃ」

ヒーリーは背けていた目をまっすぐウォルターに定めると、ウォルターに言った。

「提督。この戦い、遠いメルキドの地まで物資を輸送する補給戦が鍵になります。戦いを有利に運ぶためには提督達の力が必要なのです。メルキド軍がミュセドーラス平野以西を確保しているとはいえ、万全とは言えません。ワイバニアの伏兵もあるかもしれせん。この任務を託せるのはフォレストアルの中でも第一軍団と並ぶ武勇を持

「水軍陸戦隊だけです」

ウォルターは静かに剣を引いて尋ねた。

「わしら水軍を馬鹿にしちよるのではなく、その力を見込んでということか？」

「はい」

二人の間に数秒ほどだが沈黙が流れた。その間、恐ろしいほどの緊迫感が二人の間を包み込んでおり、そばにいたメアリは声をかけることも動くこともできなかった。

「わかった。了承しよう。ベスにもちゃんと言うつけ。水軍陸戦隊5,000を束ねちよるのはあいつじゃからの」

「はい」

ウォルターは剣を一閃して鞘に納めると、踵を返して歩いていった。

第四章 決戦前夜 第四十八話（後書き）

昨日は累計アクセス数25万アクセスを達成！

ご愛読ありがとうございます。

ただ今、アルファポリスファンタジー大賞にエントリー中です。
良かったら、投票お願いします。

第四章 決戦前夜 第四十九話

メアリはその迫力に圧倒され続けていたせいか、ぺたんと腰を落としました。ヒーリーは冷静さをいつも崩さない普段の参謀長の姿に少し笑いながら手を差し出した。

「立てるか？メアリ」

「ええ………」

メアリはヒーリーの手を握ってゆっくりと立ち上がった。

「叔父上の次はベスか………難題だな」

メア리를立ち上がらせるとヒーリーは腕を組んで考え始めた。

「仕方ないわ。補給のためには彼女達の力は必要よ」

「そうだな。……メアリ。少しだけ、ガスパール川を眺めさせてくれ。もう少しだけ見ていたいんだ」

「わかったわ。もう一人味方呼んでくるから、あなたはそれまでそこで待っていて」

メアリはそう言うと、ヒーリーに背を向けて走っていった。ヒーリーは地に腰をおろして、愛騎ヴェルにもたれかかると、相棒に尋ねた。

「ヴェル。味方だってさ。誰だろうな？」

ヴェルは目をぱちくりさせると、首をひねった。

「そうだよなあ。わからないよな。……もうすぐ夕焼けだ。ヴェル、よく見ておけよ。しばらくは見えないからな」

ヒーリーの言葉に、ヴェルは短く鳴いて応えた。

「こんどは、ポーラも一緒に……」

ガスパール川の夕日を見つめるヒーリーの脳裏にポーラの笑顔が映った。必ず生きて帰る。もう一度、ポーラをガスパール川に連れてくる。彼女に広い世界を見せるんだ。ヒーリーは心に固く誓った。

第四章 決戦前夜 第四十九話（後書き）

ただ今、アルファポリスファンタジー大賞にエントリー中です。
良かったら、投票お願いします。

第四章 決戦前夜 第五十話

ほどなくして、メアリはフォレストル史上初の混成連隊長になった。元ワイバニア軍第七軍団長アンジェラ・フォン・アルレスハイムを連れて来た。

「参謀長殿が急用だと言うことで参りましたが、何用ですか？」

アンジェラはメアリからの突然の呼び出しに戸惑っているようだった。ヒーリーはメアリの意図を少しだけ察すると、苦笑してアンジェラに言った。

「はは……お恥ずかしいのですが、少し説得にご同道願いたいと思ひまして」

「説得？」

恥ずかしげに頭をかくヒーリーはアンジェラに事の顛末を話した。アンジェラは話を聴き終えると、ヒーリーとの同行を快く承諾した。

「では、総司令官、いつてらっしゃいませ」

メアリは軽く会釈をすると、ヒーリーとアンジェラを送り出した。

「参謀長殿は同行なさらないのですか？」

アンジェラは当然とも言える問いをヒーリーに投げかけた。

「説得相手と言うのが、非常に頑固というか、その性格に問題があ

るといふか、とにかく、メアリには彼女のような相手は説得に不向きなのです」

「水軍陸戦隊長と言う者はそれほどの者なのですか？」

「まあ、会えばわかります」

アンジェラとヒーリーは話しながらアークプリマスの街を歩いた。酒場と言う酒場、店と言う店は贈援軍の兵士達で溢れかえり、フォレストル唯一にして最大の港町は活況を呈していた。純白の外壁が美しい石造りの港町をあるいて15分、二人は水軍陸戦隊総司令部にたどり着いた。

ヒーリーは軍服の襟に取り付けられた軍団長章を門の衛兵に見せると、衛兵はすぐに陸戦隊長との面会を取り次いだ。ヒーリーとアンジェラは衛兵に礼を言うと、総司令部の庁舎へと入っていった。

「これは……………ここが本当に軍隊の隊舎なのですか？」

総司令部の中の異様な光景を見たアンジェラは思わずヒーリーに尋ねた。石造りの二階建て庁舎の一階部分は陸戦兵達の待機所になっている。有事に備え、屈強の水兵、約200名がここに常駐しており、その待機所の内部は庁舎と言うよりも場末の酒場と形容した方が正しかった。

「ははは。普段の態度は悪いですが、なかなかの武勇の持ち主達ですよ」

荒れ果てた一階部分を横目にヒーリーとアンジェラは二階を目指した。

第四章 決戦前夜 第五十話（後書き）

次回！さらなる新キャラ登場！！？

現在、アルファポリスファンタジー大賞にエントリー中です。よか
つたら投票お願いします。

第四章 決戦前夜 第五十一話

フォレストル水軍陸戦隊はフォレストル軍内部では、勇名よりも悪名でその名がとどろいている。素行の悪さと蛮行が遠く王都シンベリンにまで報告されていた。これに頭を痛めた国王ジェイムズが水軍の責任者である実弟ウォルターに再三注意をしているのだが、その度にウォルターは

「河の男は大概そんなもんじゃき」

と笑って聞き流した。しかし、その気性の荒さや素行に反して、フォレストル水軍の強さは、フォレストル軍最強、最精鋭の第一軍団と互角と言われ、兵士個人の強さとしては第一軍団をも凌ぐ最強の部隊であった。

ウォルターは水軍の強さが河の民の気質にあると考えており、それをそぐことは隠れたフォレストル最強部隊の力を失わせることになると考えていたのだった。

ヒーリーはアンジェラに水軍の事情、そしてその強さを説明しながら2階の陸戦隊長室に向かった。二階は総司令部の中枢があることもあり、荒廃した一階部分とは違って、整然とされていた。すれ違いの兵士や士官もヒーリーとアンジェラに敬礼を忘れず、そのことは少なからずアンジェラに安堵感をもたらした。

「司令部自体の統率は行き届いているようですね」

「まあ、一筋縄でいってくれる連中なら良いのですが」

ヒーリーは陸戦隊長室の前に立つとそのドアをノックした。

「ヒーリー・エル・フォレストアルだ」

「入れ」

若々しいが、艶やかな声がドア越しに聞こえた。ヒーリーはドアを開け、アンジェラを導いた。二人の前にはマントを羽織った濃緑色の長髪の美女が立っていた。フォレストアル水軍陸戦隊を率いる女傑、エリザベス・イル・フォレストアルである。

第四章 決戦前夜 第五十二話

「久しぶりだねえ。ヒーリー。女を引き連れての来訪とは、ずいぶんという男になったもんじゃないか」

手に持ったキセルをくわえ、ベスは不敵に笑った。

「彼女は付き添いだよ。ベス、こちらは……」

ヒーリーがアンジェラを紹介する前に、アンジェラはヒーリーの前に出て、名乗りを上げた。

「フォレストアル軍第五軍団、アルレスハイム連隊隊長アンジェラ・フォン・アルレスハイムです」

毅然としたアンジェラの態度にベスは少し面食らい、片眉を器用に上げたが、すぐに目を閉じ低く笑った。

「フォン・アルレスハイム……貴殿があのか。仮面の女傑」か。このような片田舎にてお会い出来るとは光栄至極」

「ベス。彼女は俺の仲間であり、友人だ。彼女に対する非礼な態度はやめて欲しい」

少し皮肉めいたベスの笑みにむっとしたのか、ヒーリーは彼女に抗議した。

「これは失礼した。私の性分故、貴殿の名誉を軽んじるつもりはなかった。許していただきたい」

ベスの言葉にアンジェラは小さく頷いた。世間話もそこそこに、ベスは本題に入るべく、二人にソファへの着席を促した。

「父上からだいたいの話は聞いている。父上は了承したらしいが、私の答えはノーだ」

ソファに深く腰掛けて、キセルを一服ふくんだベスは煙を吐き出した。ヒーリーは、緑色の髪をくしゃくしゃとかくと、ため息をついて言った。

「そう言うと思ったよ。君は小さい頃から俺を困らせるのが好きだったからな」

ヒーリーの不安を鼻で笑ったベスは、ソファにもたれると、ヒーリーに返した。

「それだけだと思っかい？ ヒーリー」

「違うのか？」

「昔と違って、私にも立場があるんだよ。ヒーリー。私は水軍陸戦隊長さ。立場ってのは部下の生活、命、いろんなものを背負うんだよ。もちろん、名誉もね」

煙をふつと吹き、ベスは静かに語った。

「あたしたちは水の上、陸の上で常に命を張ってるんだよ。あたしたちはガラは悪いかも知れない。けどね、フォレストル最強という名誉を常に背中をしょってるんだ」

キセルをくるくるともてあそびながら、ベスは抑揚を抑えて話した。

「けどね！」

ベスはもてあそんだキセルを握り折ると机に拳を叩き付けた。

「補給部隊の護衛っていう、運び屋の真似事をすると、どうやって部下に言うつもりだい？ あたし達の誇りを、お前は何だと思っているんだい！」

言い終わるとベスは荒く息をついた。

「ベス。君はこの任務がどれだけ、どれだけ重要かわかっているはずだ。そして、だからこそ、俺は君たちにこの任をやり遂げて欲しいんだ。フォレストル最強の兵士集団である君たちに。君ほど、フォレストルで部下思いの指揮官はいない。そのことも俺はわかっているつもりだ」

従兄弟の言葉にベスは少しだけ顔を赤く染めた。

「まったく、相変わらず嫌な男だね。ヒーリー」

「そうか……」

ヒーリーは自嘲気味に微笑んだ。

「ふ、ふふ……なるほど。今、合点がいました。参謀長殿が何故、副軍団長でなく、私をヒーリー殿の付き添いに選んだのかを」

アンジェエラは立ち上がると、眼前の者を魅了するほどの美しい動きで剣を抜くと、エリザベスに切っ先を突きつけた。

「抜け。エリザベス・イル・フォレストル」

第四章 決戦前夜 第五十二話（後書き）

次回！アンジェラとエリザベスの決闘が始まる！？二人の勝利の行方は！？

現在、アルファポリスファンタジー大賞にエントリー中です。よかつたら投票お願いします。

第四章 決戦前夜 第五十三話

総司令部庁舎裏にある練兵場。ここで、アンジェラとベスの決闘が行なわれることになった。ベスの側には水軍陸戦隊の精兵達が声援を贈り、アンジェラの側にも、ヒーリーが呼び出したアルレスハイム連隊の精鋭達が固唾をのんで新隊長を見守っていた。

対峙する二人をじつと見つめるヒーリーに、アルレスハイム連隊副官兼参謀のレイ・ロックハートが声をかけた。

「おい、ヒーリー。お前とんでもないことをしでかしてくれたな。相手は剛腕のエリザベスだぞ。連隊長にもしものことがあつたら、どうするんだよ」

同期であるレイの遠慮のない言葉にヒーリーは苦笑した。

「勝てばいいだけさ。お前はともかく、連隊の兵士達も彼女が戦う姿を見ることは初めてだろう？それに勝てば、補給の安全度は増す上に、連隊内での彼女の信頼も確固としたものになるはずだ」

「お前…….そこまで読んで…….」

「さあね。それよりも決闘が始まるようだぞ」

翡翠色と金色の髪を互いに風になびかせた女将二人はそれぞれの愛剣を手にした。

「いくよー!」

先に仕掛けたのはベスだった。ベスは華奢な体躯に似合わぬスピードとパワーでカトラスを横なぎに振るった。アンジェラは細剣で受け止めたが、ベスの斬撃は重く、アンジェラはその衝撃で弾き飛ばされた。地に倒れたアンジェラをベスは容赦なく斬り掛かった。

「くっ！」

アンジェラはすぐに身を翻し、ベスの一撃をかわすと、わずかに半歩距離をとった。

「どうした！？大口叩いてこの様は。ワイバニアの軍団長ってのは、こんなにも腑抜けばかりなのかい！？」

ベスは言い終わると、距離を詰め、アンジェラに何度も攻撃を加えた。アンジェラはベスの剣を受け止めてはかわしを繰り返し、次第に防戦一方になっていった。

「おい。連隊長防戦一方になっているじゃないか。どうするんだよ。ヒーリー」

形勢を極めて不利と見たレイが隣のヒーリーにつめよった。

「大丈夫だ。アンジェラ殿なら。お前も副官なら、連隊長を信じたらどうだ？」

ヒーリーは横目でレイを見ると、落ち着いた調子で言った。

「信じちゃいるさ。ただ、怪我をするのを見たくはないだけだ」

レイは腕を組むと、アンジェラの方をじっと見つめた。かつての同

輩のかわいらしい仕草を見て、ヒューリーは少し笑った。

第四章 決戦前夜 第五十三話（後書き）

ついに始まった女将同士同士の戦い。エリザベスの剛剣を前にアンジェラはどう戦うのか!!!?

次回、決着!!!お楽しみに。

ただいま、アルファポリスファンタジー小説大賞にエントリー中です。

良かったら投票お願いします。

第四章 決戦前夜 第五十四話

「笑うな！」

「ははは。ごめんごめん。それよりもほら、見てみるよ」

ヒーリーは剣を交える女剣士二人を指差した。レイはその様子を見て驚いた。ベスの動きが明らかに鈍く、遅くなっていた。

「あんな攻撃をして、そんなに長い間体力が保つ訳はない。すぐに限界が来るに決まっている」

「連隊長はそれを読んでいたのか!？」

レイの問いにヒーリーは頷いた。ベスの斬撃は並の男とは比較にならないほどの剛剣である。しかし、華奢なベスには、それだけの一撃を放つ筋力はない。ベスは全身の筋肉のバネを絶妙の感覚で利用して、一撃を放っていた。

だが、そんな無茶は長い間続かない。全力で戦える時間はごく限られていた。ベスもそのことを知っており、アンジェラに対して短期決戦を仕掛けたのだった。

むろんのことだが、アンジェラは一撃を受けた瞬間、ベスのそれが長く続かないことに気づき、最小の動きでベスの攻撃を防ぎながら彼女の自滅を待っていた。

「どうだ？　これがワイバニア軍団長の戦い方と言うものだ」

再びベスと距離をとったアンジェラは片手で細剣を構えると、ベスに切っ先を向け嘲笑のおまけつきで、自信満々に言い放った。

「こ、の……、ふざけるなああああ！」

ベスはアンジェラの挑発に乗ると、顔を真っ赤にして突進した。

「うわああああ！」

ベスは力一杯カトラスを横に振ったが、手応えはなかった。アンジェラは高く跳躍すると、愛剣を振りかぶった。誰もがアンジェラの勝利を疑わなかったが、一同の信じられないことが起きた。ベスが振り抜いたカトラスを構え直し、空中のアンジェラに突きを放ったのである。

「まずい！」

このままでは、アンジェラは怪我では済まない。死んでしまう。ヒリーは愛銃ポルツクスを抜こうとした。だが、とうのアンジェラは取り乱さなかった。振りかぶった細剣の持ち手を変え、カトラスの軌道を反らし、地面に着地した。さらにアンジェラは間合いを詰め、ベスの懐に入ると、カトラスを弾き飛ばし、ベスのど元に細剣をつきつけた。

「う……」

「お前の負けだ。エリザベス」

金色の髪をなびかせ、眼光鋭くアンジェラは言った。ベスは負けを認めると、力なく膝を屈した。その瞬間、アルレスハイム連隊の兵

士達が歓声を上げた。

「やったぜ！ ヒーリー！ あはは！ やっぱり信じた甲斐があったよ」

肝を冷やしたヒーリーの肩をバンバン叩いて、レイは大笑いした。友人の調子の良さに半ば呆れたヒーリーはため息をつくと、ポルツクスを胸のホルスターに納めた。

「まったく、調子のいい奴」

歓声が響く中、アンジェラは膝をつき、ベスに手をさしのべた。

「立てるか？ エリザベス」

ベスはアンジェラをにらむと、アンジェラの手を振り払った。

「哀れみはごめんさ。あたしにだってプライドはある。勝者の施しは受けないよ」

「その割には、立てなさそうだがな……よっと！」

アンジェラは無理矢理ベスの手をつかむと、肩を担いで立ち上がった。

「良い剣だった。あれほどの剛剣の使い手は、ワイバニアでもそうはいない。大した腕だ、エリザベス」

「あんたこそ。あたしの剣を受けきる女なんて初めてだよ。マーガレットだって、こうはいかなかったさ」

「それは光栄だな」

アンジェラはベスに向け、優しく微笑んだ。刀傷を負った顔ではあったが、その顔はとても美しく、聖女のようにであったという。ベスはこれがついさっきまで厳しい顔をして剣を交えて戦っていた女の表情だったかと思うと、そのギャップに笑い出した。

「ああ、そうだな。あははははは！」

星王暦二一八三年六月二三日、ヒーリー・エル・フォレストル率いるフォレストル王国メルキド増援軍はフォレストル水軍陸戦隊という、強力な味方を引き入れることに成功した。

第四章 決戦前夜 第五十四話（後書き）

現在、アルファポリスファンタジー大賞にエントリー中です。良かったら投票お願いします。

第四章 決戦前夜 第五十五話

アーデン要塞を陥落させたワイバニア軍は、アーデン盆地を抜けた最初の街であるベルゼンを苦もなく占領した。と言うよりも、市内はもぬけの殻でベルゼン市民はワイバニア軍襲来の報を知るや、いつせいに街から脱出していた。着の身着のままに脱出したのか、市民の家々の中には家財道具がそのままに残されていた。

皇帝ジギスムントはそれらの財産を兵士達に分配させようと、略奪を許可したが、街を陥落させた第三軍団長のシラーが略奪の禁止を厳命した。

「我々は侵略者には違いないが、略奪者でも、殺戮者でもない。禁を犯したものはいかに皇帝陛下がお許しになろうと、この俺が許さん」

陥落直後のベルゼンで、シラーは配下の兵士を集めて宣言した。占領後のワイバニア統治を考慮する上で、シラーの判断は正しいものであったため、外交総責任者である第二軍団長マレーネ・フォン・アウブスブルグは皇帝に進言し、略奪の禁止を認めさせた。

ベルゼンの市庁舎に前線司令部を設置したジギスムントは各軍団の兵の休養と戦力の再編のため、十日間の逗留を決定した。

「つまんなーい!」

ベルゼン逗留二日目、ベルゼン市庁舎、ワイバニア軍前線司令部の一室にて、第七軍団長ベティーナ・フォン・ワイエルシュトラスは不服そうに叫んだ。

「はいはい」

第三軍団長のマンフレート・フリッツ・フォン・シラーは副官から渡される書類に目を通すとサインをいれていった。ベルゼン市は規模は小さいものの、市庁舎の造りはしつかりしており、軍団長の人数分の部屋を十分に確保出来る余裕があった。シラーは副市長室を執務室代わりに間借りしていた。むろん、ベティーナにも専用の部屋が与えられていたが、自分の仕事を早々と切り上げると、退屈のぎにシラーの部屋へとしげこんだのだった。

「あ！シラー君冷たいんだ！！先輩命令よ。なんか面白いこといいなさい！！」

理不尽な先輩命令にシラーはペンを置くと、少し肩を落とした。

「先輩。先輩の序列は？」

「七番よ」

「俺は三番です。本来なら、俺が先輩に命令出来る立場なんですけど」

「だって、私は君の先輩だよ！後輩は、先輩の命令に絶対服従なの！あーもう！！つまんないつまんないつまんない！ハイネ君帰っちゃおうしさ」

帰したのは先輩だろうが。口についた言葉を鉄の意志で封じ込めたシラーは、サインした書類を副官に手渡すとベティーナに言った。

「だいたい、先輩は仕事終わったんですか！？こんなところに来ている場合じゃないでしょう！！？」

「あら、終わったわよ。あんなの」

「え！？」

見つめていた書類から、シラーは退屈そうに足をばたつかせているベティーナに目を移した。書類の山は一週間程度で片付くような代物じゃない。シラーは改めて先輩に畏怖感を覚えた。

もともと、有能な参謀であるベティーナは兵を動かして戦うよりも、このような事務処理に長けていた。アーデン要塞攻防戦において、皇帝ジギスムントに戦況の詳細を報告した監視警戒網もベティーナだからこそ可能な芸当であった。左元帥のハンス・フォン・クライネヴァルトがシラーの他にベティーナを軍団長候補として推挙したのはベティーナのこの能力によることが大きかったのである。

「ところで、シラー君。お願いがあるんだけどお〜〜」

ベティーナは猫なで声でシラーににじり寄った。

第四章 決戦前夜 第五十五話（後書き）

今回から少しだけ閑話休題。コメディタッチです。
アルファポリスファンタジー大賞にエントリー中です。
良かったら投票お願いします。

第四章 決戦前夜 第五十六話

「嫌です」

「まだ、何も言っていないのに！」

「普段の先輩のやることにろくなことはありませんから」

ベティーナを冷たくあしらいながら、シラーは書類に次々とサインしていった。ベティーナとは異なり、騎兵出身のシラーは事務仕事を最も苦手としていた。

北方守備軍にいた頃は副官に任せていたこともあったが、一個軍団を率いる身になると、そうはいかない。それでも、参謀長のアルバートが忙しい身にも関わらず手伝いを申し出てくれ、何とか十日で終わるめどがついたのだった。

「あの……軍団長、今日の分の書類もあと少しで終わりますし、ワイエルシュトラス閣下のお相手をしてよろしいのでは……」

「あつ！しーっ！……！」

副官のヘルマンの一言を反射的にシラーは制した。第七軍団長を立てるための精一杯の思いやりだったが、シラーにとっては逆効果だった。シラーの目には先輩の頭から猫の耳が生えたように見えない。ヘルマンの言葉に反応したベティーナは椅子から飛び上がる、頭を抱えた後輩の副官を指差した。

「さすが、ヘルマン君！！話が分かる！！！！実はね、シラー。これを着て！」

ベティーナは懐からなにやらごそごそと探すと、黒と白に彩られたフリルに満ちた服を取り出した。

「先輩。これ、メイド服……ですよね？」

「うん！この間の補給で届いたの！」

「先輩が着るんですよね？」

「ううん。シラーとハイネ君。でも、ハイネ君は帰っちゃったし」

「何ですか!？」

「そんなこと……面白いからに決まってるじゃない！ハイネ君なら、絶対似合うと思うんだけどなあ」

シラーの脳裏にメイド服を来たハイネの姿が映った。男のシラーからしてみれば、親友のメイド服姿は異様に見えるのだが、このベティーナは違うようだ。ハイネ……お前を帰してよかったよ。シラーはベリリヒンゲンで休暇中の親友に思いを馳せた。

第四章 決戦前夜 第五十六話（後書き）

アルファポリスファンタジー大賞にエントリー中です。良かったら投票お願いします。

第四章 決戦前夜 第五十七話

「さあ、シラー。着て！」

「嫌です！ もう、先輩帰ってください！ 俺だって忙しいんですよ」

シラーがベティーナを叱りつけたその時、執務室の扉をノックして、第十二軍団長のヴィクター・フォン・バルクホルンが入って来た。

「失礼します。シラー軍団長、騎兵大隊の運用についてシラー軍団長の意見を伺いたく来たのですが……」

年少の来訪者の登場に、ベティーナの目が輝いた。ヴィクターの目の前には顔を抑えたシラーと、嬉しそうに目を輝かせたベティーナがいた。ベティーナはシラーを見るやいなや、目にも止まらぬ速さで近づいた。

「ねえ、ヴィクター君。ヴィクター君は第十二軍団長よね？」

「は、はい……」

「私は第七軍団長だから、私はヴィクター君に命令出来る権利があるの。わかるわよね？」

「は、はい……」

有無を言わさぬベティーナの様子にヴィクターは後ずさりした。

「でね、ヴィクター君。命令よ！これ、着なさい！」

嬉しそうにベティーナはメイド服をヴィクターに見せた。自分の数分後の未来を予期した若き軍団長は小刻みに首を振りながらさらに後ろへと下がった。

「い、いやです。そんなの。ベティーナさん……あつ！」

いつの間にか、ヴィクターは壁まで追いつめられていた。

「うふふ……大丈夫よ。ヴィクター君。嫌よ嫌よも好きのうち……お姉さんが手伝ってあげるから……」

「ちょ、やめて……シラーさん、助けて！ あーっ！」

ベティーナは目をきらめかせヴィクターの軍服をはぎ取ると、無理矢理メイド服を着せた。その様子を背後に聞きながら、シラーは無精髭まじりの顔を伏せた。

済まない。ヴィクター。ここで、お前を助けては俺まで先輩の魔の手にかかってしまう。お前の犠牲、無駄にはしない。シラーは心の中でヴィクターに謝った。

第四章 決戦前夜 第五十七話（後書き）

次回で通算200回！！

累計27万アクセスを突破しました。

現在、アルファポリスファンタジー大賞にエントリー中です。よかったら投票お願いします。

第四章 決戦前夜 第五十八話

「ふう。できた。ヴィクター君、よく似合っているわよ」

「なんてことするんですかあ？ ベティーナさん……」

床に手をつけ、ヴィクターは大粒の涙をこぼした。痛ましい。痛ましいが、ここでベティーナに文句を付ければ、自分たちもどんなとばっちりを受けるかわからない。第三軍団長とその副官は、ヴィクターに同情しながらも、目の前の光景から目をそらし続けていた。

「いい？ ヴィクター君。次にだれか入って来たら『お帰りなさいませ。ご主人様』って言うのよ。こうやってね」

ベティーナはヴィクターにメイドらしい仕草を伝授した。ヴィクターは泣きながらベティーナの講義を受けた。

「なんでこんなことするんですかあ……？」

「決まってるじゃない！ 面白いからよ」

涙でぐしゃぐしゃになったヴィクターにベティーナはのけぞるくらい胸をはって言った。もう、誰もこの人には逆らえない。ヴィクターは観念してベティーナの言うことを聞くことにした。

時を経ずして、シラーの執務室にノックの音が響いた。

「ほら、ヴィクター君。やってやって！」

「お、お帰りなさいませ！ ご主人様」

ベティーナに教えられた通りにヴィクターは動いた。一体誰がシラーの客だったのだらう。ヴィクターは恐る恐る顔をあげた。すると、驚愕のあまりヴィクターは目を見開いた。ヴィクターの眼前には、第十二軍団参謀長のローレンツ・フルトヴェングラーと第十二軍団龍騎兵大隊長のコンラート・フォン・シュレヒトが立っていた。二人は数秒の間、口をぽかんと空けていたが、その後正反対の表情を浮かべていた。ローレンツは苦虫をかみつぶした表情で眉間に人差し指をあて、コンラートは腹を抱えて大笑いした。

「はははははは！ 何やってんだ、ヴィクター！ こんな可愛い格好なんかしちゃってよ。よく似合ってるぜ！」

「コンラートさん……」

「ワイエルシュトラス君！ 君かね！ こんなことをしたのは？」

ローレンツはこそこそ隠れようとするベティーナを見つけると、ずかずかと大股で近づいていった。

「うわっ！ フルトヴェングラー教官！」

永年士官学校で教鞭をとっていたローレンツは軍内部に教え子も多い。ベティーナもその一人だった。ローレンツは逃げるベティーナのマントをむんずと捕まえると、説教を始めた。

「まだ、こんなことをやっているのか？ ベティーナ君！ だいたいい、君は軍団長としての自覚がなさすぎる！ いいかね。そもそも、軍団長と言つものは……」

くどくどと、いつ果てるともなく続くローレンツの説教、泣きじゃくる最年少軍団長に、大笑いするその部下。今日の仕事はもうできまい。シラーは机に突っ伏した。

「軍団長……」

「なんだ？ ヘルマン」

ヘルマンの呼びかけに、シラーはだるそうにこたえた。

「わたしは第七軍団長に逆らえそうもありません」

「今頃気づいたか？ 俺は、十年前からだよ」

机に沈み込んだシラーは遥か遠くの親友を思った。ハイネ……お前、帰して本当に良かったよ。自分の仕事を終えられぬまま、シラーの一日は更けていった。

第四章 決戦前夜 第五十八話（後書き）

現在、アルファポリスファンタジー大賞にエントリー中です。良かったら投票お願いします。

第四章 決戦前夜 第五十九話

星王暦二一八三年六月二四日、フォレストル王国宰相マクベス・エル・フォレストルは財務大臣であるローリー・エイヴオンを呼び出していた。

「エイヴオン卿、一会戦分の予算しか下ろさないというのはどういうことだい？」

エイヴオンからの報告書に目を通したマクベスはかけていたモノクルをきらめかせた。彼が数年かけて作り上げた補給網をもってすれば、三会戦分の物資が運用出来るはずだった。

「確かに、物資の面から言えば、三会戦分は供給出来ます。しかし、それを前線に送る荷駄部隊は地方軍、水軍だけでは到底足りるものではありません」

エイヴオンの報告書には国内に分散配置させた軍需物資をアークプリマスに運ぶためには商人の協力が必要不可欠であること、そしてその費用は極めて多大なものになるであろうと書くことが書かれていた。

マクベスはエイヴオンの報告に頷かざるを得なかった。その試算は全く公正、適正なもので、批判しようのないものだったのである。

「さらに申し上げれば、我がフォレストル王国がメルキド公国と力を合わせたとは言え、戦いに勝利出来るとは限りません。フォレストル本土での決戦を考えた上でも一会戦分の予算が……」

エイヴォンは言葉を詰まらせた。マクベスがエイヴォンを睨みつけていたのである。メルキド増援軍の敗北。これは、マクベスの弟であるヒーリーの死を意味する言葉だった。職務とは言え、うかつなことを言ってしまった。エイヴォンは肩を落とした。

「申し訳ありません」

「いや、こちらこそ済まない。君の方が正しい」

「わたしとしても、我が軍の勝利を信じたいのですが……」

「職責がそれを許してはくれない……か。そうでなくては、大臣は務まらない。わかっているよ。エイヴォン卿」

机を立つたマクベスは、窓の外を眺めた。それはいつもと変わらぬ穏やかな景色だったが、ガスパール河の向こうでは、幾万の人間が死んでいることだろう。マクベスは、辛そうに目を閉じた。

「宰相閣下」

「ああ、ありがとう。エイヴォン卿。引き続き、戦時下の財政計画の立案と、国防予算の試算に取り組んでくれ」

エイヴォンは背を向けるマクベスに一礼すると、部屋を辞した。

第四章 決戦前夜 第五十九話（後書き）

現在、アルファポリスファンタジー大賞にエントリー中です。良かったら投票お願いします。

第四章 決戦前夜 第六十話

「ふう……………」

人気のなくなつた執務室で、マクベスは大きく息を吐いた。兄として、フォレストル王国宰相として、命がけで戦う弟を何とかして助けたいと考えていたマクベスだったが、現実にはあまりにも厳しすぎた。兄としての思いと、宰相としての立場。マクベスはこの二つの間で揺れに揺れていた。

「ヒーリー……………。君のことをあまり助けてやれないかもしれないな……………」

そのとき、執務室の扉をノックする音が聞こえた。マクベスが入るように促すと、扉を開けて、豊饒とした老人が入って来た。王室政務顧問ロバート・リードマンである。

「どうした？ ずいぶん浮かない顔じゃのう？ マクベス」

「ええ、無力な兄で、ヒーリーに申し訳が立たないと思つていたところですよ」

リードマンの遠慮のない言葉にマクベスは苦笑した。二人きりになると、リードマンはマクベスに遠慮がない。それはかつて、マクベスがリードマンの元で政治、経済を学んでいたからであり、現在も師弟関係が続いていた。マクベスは時間を見つけてはシンベリン市内にある王立大学のリードマンの研究室を訪れていたし、リードマンもまた、週一度の参内の折りには必ずマクベスのもとを訪れていた。

「そんなことはない。お前は十分すぎるほど、弟のために働いておる。だからこそ、いつもお前を頼りにしているのだから」

リードマンはマクベスを諭した。マクベスは恩師の言葉に少しだけ肩が軽くなった気がした。

「さて、今日はラグの奴とチェスをする予定だな。お前も一緒に来んか？ 実は妙手を思いついての……」

「お供します。リードマン教授」

年甲斐もなく目を輝かせて話す師を見て、マクベスは微笑んだ。仕事はたまっているが、たまには息抜きも必要だ。マクベスは嬉しそうに扉を開けるリードマンの後ろをついていった。

第四章 決戦前夜 第六十話（後書き）

現在、アルファポリスファンタジー大賞にエントリー中です。良かったら投票お願いします。

第四章 決戦前夜 第六十一話

リードマンとのチェス対決を楽しみにしていたラグは彼のために腕によりをかけて紅茶を入れていた。長い間、城の給仕長に頼み込んでいたフィデック産の高級茶葉が手に入ったのだ。ラグは嬉しさと緊張の入り交じった表情で茶葉に向かい合っていた。

お湯が沸いたとラグが火に目を移した瞬間、ラグは空間が歪む感覚を覚えた。五〇〇年以上前、一度だけ感じた感覚に、ラグは一筋汗を垂らした。

「シモーヌか……？」

声が震えているのが自分でもわかった。すぐ背後に師の仇、親友の仇がいるのだから。

「久しぶりね。ラグエル。どうしてわかったの？」

「”転送”の護符を持っている者はこの世に二人しかいない……僕と、君だけだ！」

ラグは隠し持っていた魔術銃ペルセウスを構えると、間髪入れずに発砲した。低く唸るペルセウスの銃声はラボの外にまで響き渡った。

「あの音は？」

「ラグに何かあったのでしょうか。急ぎましょう！ 教授！」

「ま、待て！ 年寄りを走らせるでない！」

ラグの異変に気づいたマクベスとリードマンはラグのいるラボに向かった。

「ぐっ……！」

床にはペルセウスが転がっていた。発砲の直前、シモーヌは一瞬で間合いを詰めてラグに近づき、ラグの腕をつかむと、そのまま壁に叩き付けた。華奢な体に似ずシモーヌの握力は強く、とうとうラグはペルセウスを手放してしまった。

「あなたがわたしに勝てると思って？ 彼は英知と創造を司る者としてあなたを。力と破壊を司る者としてわたしを創った。あなたがどうあがいても、わたしには勝てないわ。ラグエル」

「その名前で僕を呼ぶな！」

両腕をシモーヌにつかまれ、身動きのできないラグは声を限りに叫んだ。

「その名で僕を呼んでいい者はもういない。君が殺したんだ。サマエル……」

「そう、わたしが殺したの。でないとなんかあなたは、いつまでも彼のものだったから」

シモーヌはゆっくりとラグに顔を寄せて来た。

「何を、する気だ？ よせ、サマエル……！」

「あなたはわたしのもの。あなたを手に入れるためなら、わたしは……」

シモーヌはラグに唇を寄せた。

第四章 決戦前夜 第六十一話（後書き）

現在、アルファポリスファンタジー大賞にエントリー中です。よかったら、投票お願いします！

第四章 決戦前夜 第六十二話

「んう！？……ん……ふあっ……！」

シモー又は舌をラグの舌に絡めた。恋人同士の長い長い口づけ。シモー又はラグの中をいとおしむように動き回った。全てを吸い付くすかと思うと、お互いの唾液を絡めあつた。

「はあ……」

一心不乱にラグを求めていたシモー又は腰から隠し持っていたナイフを抜いた。

「あなたはわたしのものよ……ラグエル」

唇を離し、妖艶な笑みを浮かべたシモー又はラグの腹にナイフを突き刺した。

「ぐっ！？ ああああああっ！」

「愛しているわ。ラグエル。あなたの血も、その身体も全てわたしのもの……」

「違う！ 僕は……ああっ！」

血を吐きながらラグはシモー又は言葉を否定した。腹からは血が止めどなく流れ、血だまりをつくり始めていた。

「ふふ……きれいよ……ラグエル」

「サマエル……！」

そのとき、二人の間を翡翠色の閃光が引き裂いた。二人を引き裂いた影はラグを背にナイフを構えると穏やかに言った。

「ノックもせずに失礼するよ。ラグ」

「マク……ベス？」

「マクベス・エル・フォレストル……」

愛するものとの蜜月のときを邪魔されたシモーヌは呪詛のまなざしをマクベスに向けた。

「あなたが、ワイバニア右元帥、シモーヌ・ド・ビフレストですか？ わたしの親友に怪我を負わせるとは、感心出来る真似とは言えませんね……」

ナイフをシモーヌに向けて、マクベスはシモーヌに言った。表面上は平静を装ってはいたが、内面は怒りで荒れ狂っていた。

「うふっ！ あはははは！ あなた一人でわたしに立ち向かうのも？ ちょうどいいわ。ラグエル。あなたの大切なものが死ぬ様を見ているさかい」

「待て……サマエル！」

「やれやれ……年寄りを置いていくとは、何とも薄情な生徒を持ったものじゃ……」

シモーヌの背後で老人の声が出た。シモーヌが声の方向へ振り向く
うとしたとき、光の円が彼女の足下に出現した。

第四章 決戦前夜 第六十二話（後書き）

現在、アルファポリスファンタジー大賞にエントリー中です。本日はよいよ最終日。是非、お願いします！

第四章 決戦前夜 第六十三話

「これは……」 捕獲”の護符？ ……おのれ、老いぼれが……」

シモーヌは後ろで杖を構えたリードマンを見た。光の円から無数の光の縄が生え、シモーヌに絡み付くと身体の自由を奪った。

「失敬じゃな。わしはまだまだ若いぞ。マクベス！」

「はい！」

シモーヌを倒すべく、マクベスは駆け出したが、二人の意図しなかった事態が生じた。足の方からシモーヌの身体が消え始めたのだ。

「今日のところは引き上げてあげる。ラグエル、今度会う時はあなたはわたしのもの……。愛してるわ。ラグエル」

腹の傷を押さえたラグを見下ろしながら、シモーヌは姿を消した。マクベスとリードマンは怪我を負った親友の元に駆け寄った。

「大丈夫かい？ ラグ」

「ああ……マクベス。大丈夫だ……。急所は、外れているから……」
力なく微笑んだラグだったが、腹からは止めどなく血が流れ続けていた。

「このままだと危険じゃ。早く医者の方へ……」

「お師匠様？ いやあああああああ！」

リードマンの声を大きな物音がさえぎった。材料の買い付けに出かけていた助手のメルが顔を青ざめさせていた。幼いラグ唯一の弟子は泣き叫びながら師匠のもとに駆け寄った。

「お師匠様！ ああ、なんてこと。お師匠様？」

「メル。少し落ち着きなさい」

マクベスは取り乱すメルの肩を抱き、気持ちを落ち着かせた。

「マクベス様……」

「そうだよ……メル」

「お師匠様？」

師匠の声を聞いたメルは少しだけ平静を取り戻したようだった。

「僕に”治療”の護符を……」

メルは頷くと、ラボの奥の方へ入っていった。治療の護符を手に戻って来たメルは、ラグの傷口に護符をあてて、手当を開始した。

「大丈夫かの？ メル……」

「はい。傷口を塞いで、消毒と解毒を行なっています。ですが、回復までには時間が……」

悲しそうな目で、メルはラグを見つめた。

「たくさんの血を失ったからね。それだけは自分で作らなきゃならないのさ」

「ラグ！」

「だめです。お師匠様、しゃべっては！」

「わかったよ……メル。少し、休むとしよう……」

そう言うと、ラグは目を閉じて、長い眠りについた。

「お師匠様の身体に施された自己修復機能が働き始めたようです。

一ヶ月ほど目覚めることはないでしょう」

「一ヶ月か……。長いな」

マクベスは腕を組んだ。ラグが眠りについたひと月の間、世界はめまぐるしく変わっていくだろう。ワイバニアとの決戦、シモーヌとの確執。全てがラグの目覚めたときには終わっているはずだ。自分たちの未来はどのようになっているか、マクベスは思いを馳せずにはいられなかった。

星王暦二一八三年七月、後に”嵐の七月”呼ばれる月はこうして始まった。

第四章 決戦前夜 第六十三話（後書き）

第四章 最終話です。

次回から、ついにヒーリー達がメルキド本土に到着！！
クライマックスに向けて全力で頑張ります！！
アルファポリスファンタジー大賞にエントリー中です。

こちらもよろしく願います！

第五章 決戦！ 第一話

星王曆二一八三年六月二十五日、公都ロークラインを脱出したメルキド公国公女イスラ・デ・ピノスはロークライン市民と共に、メルキド公国西方最大の城塞都市コリオレイナスを目指していた。

第一軍団長のヴィヴァ・レオの命をかけた足止めによって、十分な時間をえられたメルキド陣営は、順調に市民の公都脱出を終えることができたが、安心はできなかつた。いつワイバニア軍が追いつくとも限らなかつたためである。ボナ・ムール率いるメルキド軍第三軍団は市民達の最後衛に位置し、ワイバニア軍の襲来に備えつつ、市民を護衛していた。

公都放棄という、半ば絶望的とも言える状況の中で、イスラは諦めていなかった。彼女は公女たる自覚を持って行動し、絶望と悲嘆にくれる市民達と勇気づけていた。

「大丈夫ですわ。きっとメルキド軍とフォレスタル軍がワイバニアを打ち破ってくれますわ。勇気を出して歩きましょう」

イスラの笑顔は長い道程を歩く市民にどれほどの勇気と元気を与えたかわからない。

公女に応えるため、市民は気力と体力をふりしぼって自らの足でコリオレイナスを目指した。軍もまた、市民達を守るために全力を尽くしていた。彼らはあるあわせの材料をつかって車を作ると、巨兵隊の戦象をひかせて、歩けない老人や子ども、病人、けが人に乗せたのだった。

メルキド軍と市民は、文字通り一丸となって先を目指したのである。散っていったヴィヴァ・レオ達の思いを無にしないために。

「イスラ様。フォレストル王国増援軍がアークプリマスの港を出港したそうです」

「ヒーリー様がいらっしやるのね？」

イスラ付きの侍女、マミー・テイラーの報告にイスラは表情を変えた。

「はい。増援軍四万がガスパール河を渡りきるまでに数日はかかると思いますが……イスラ様？」

「私、ヒーリー様にお会いしてくるわ！ マミー！」

「お待ちください！ お一人では危険です！ それに、ヴェローナまでどれだけかかるか……」

「大丈夫。翼竜ならひとつ飛びよ！ アテナ！」

マミーの制止も聞かず、列から飛び出したイスラは愛騎の名を呼んだ。すると、甲高い鳴き声を上げて、桃色の翼竜がイスラの前に降り立った。世界でも3例しか発見されていないエメラルドワイバーンの変異種、サファイアワイバーンである。

地上で最も美しきものと形容されるエメラルドワイバーンの中でも別格ともいえる美しさを放っていた。

「イスラ様！」

「大丈夫よ！ マミー。心配しないで！」

アテナにまたがったイスラは大声でマミーに呼びかけると、一気に飛び去っていった。

第五章 決戦！ 第一話（後書き）

第五章始まりました！

第五章 決戦！ 第二話

星王暦2183年6月28日午後、フォレストル軍メルキド贈援軍総司令官、ヒーリー・エル・フォレストルは船上の人になっていた。騎馬、武器、兵士を満載した600隻のフォレストル船団はガスパール河対岸の街、ヴェローナを目指していた。

日の光に反射してキラキラ光る水面を滑るように、水鳥の群れが飛んでいた。生命の恵みにあふれたフォレストルの富の源。ヒーリーは川風を浴びながらガスパール河の風景を眺めていた。

「どつじゃ。ヒーリー。河はいいもんじゃろつ？」

「ええ………」

叔父上さえいなければねと言っ言葉を飲み込んで、ヒーリーは叔父に生返事をした。

フォレストルの対岸が遙か彼方の水平線に消えかけたとき、ヒーリーの愛騎ヴェルが何かの気配に気づき、首を上げた。

「ヴェル。どうした？」

ヒーリーの問いかけに、ヴェルは耳を立て、嬉しそうな鳴き声で返した。仲間の気配を感じたのだ。

「おい、空に何かいるぞ」

望遠鏡で空を見ていたウォルターは桃色をした点のようなものを見つけた。ヒーリーはウォルターから望遠鏡を借りてそれを見た。桃色の点は次第に大きくなり、翼竜の形に姿を変えた。

ヒーリーも幾度となく見たことがある桃色の龍の出現。この事象が導き出す答えをヒーリーは知っていた。

「ま、まさか……」

桃色の龍はヒーリーの船の上空で静止すると、その主は真逆さまに飛び降りた。

「ヒーリー様!!」

「イスラ!!?」

第五章 決戦！ 第三話

ヒーリーは落下して来たイスラを受け止めたが、落下の衝撃に負け甲板上を転げ回った。

「ヒーリー様！ お会いしとつございました！」

痛そうに頭をさするヒーリーをよそに、イスラはヒーリーをぎゅっと抱きしめた。

「イスラ、どうしてここに？」

「もちろん。ヒーリー様と共に戦うためですわ！ 妻たるもの、いついかなるときも夫とともにあるものですわ！」

そんなものじゃないんだ夫婦っていうのは。ヒーリーは口に出そうとした言葉を再び飲み込んだ。一度も結婚をしたことがないヒーリーにとっては夫婦とはどういうものか。イスラに説明出来る自信がなかったのである。

ヒーリーはなおも抱きつこうとするイスラを身体から離して言った。

「イスラ。ここから先は、戦場になる」

「大丈夫です。ヒーリー様と一緒になら」

「死ぬかも知れないんだぞ」

「ヒーリー様と一緒になら平気です！」

ヒーリーは頭をくしゃくしゃとかいた。何を言っても、イスラはここに残ろうとするだろう。ヒーリーは戦うとき以上に頭脳をフル回転させた。

「ヴェル、お前も……」

ヒーリーは相棒に目を向けると、そこには仲睦まじい翼竜のカップルの姿があった。ヴェルとアテナ、二匹の翼竜は互いにほほを寄せあっていた。エメラルドワイバーン同士が愛を確かめあう行動である。

「……」

ヒーリーは何も言えず顔を押しえた。

「ほら！ これでもヒーリー様は私を帰すとおっしゃるのですか？」

いたずらっぽく片眉を上げて、イスラはヒーリーに詰め寄った。ヒーリーは真剣な顔になると、イスラの頭にそつと手を置いた。

「イスラ、さつきも言ったように俺たちは戦場に行くんだ。ここにいる何人かは俺を含めて戻れないかもしれない」

「……」

「イスラの知っている人だって命を落とすかもしれない。悲しい目にだって幾度遭わせるかわからない」

「耐えられますわ！ そんなの！！」

イスラの反論にヒーリーは首を振った。

「戦場は地獄だ。どれだけの人間が屍を地にさらすか。君を伴い、君に地獄を見せることが俺には耐えられない」

「ヒーリー様……」

「お願いだ。皆のもとに戻ってくれ。イスラ」

しばらくの沈黙の後、イスラは黙ってうなづいた。ヒーリーは妹のような公女の頭を優しく撫でた。

「さて、女の子一人でメルキドまで帰すわけにはいかないな。スチユアート隊長、悪いが、イスラ公女をメルキドまで送ってやってくれないか？」

ヒーリーは背後に控えていたアレックスにイスラの護衛を命じた。しかし、スチユアートの返事はヒーリーの期待したものと真逆のものであった。

「申し訳ありませんが、その任、謹んでご辞退申し上げます」

第五章 決戦！ 第四話

「何だつて？」

「河上とは言え、上空警戒は必要です。龍騎兵大隊を預かるものとして、ここを離れる訳には参りません」

アレックスの言は正論ではあったが、言行が一致している訳ではなかった。質実剛健なアレックスの口元がわずかに緩んでいるのをヒリーは見逃さなかった。恐らく彼なりに気を遣っているのだろう。ヒリーにしてみれば、大きなお世話であったが、イスラを思うと説明する気も失せ、隣のアンジェラに救いを求めた。

「アンジェラ殿。彼女を……」

「申し訳ありませんが、わたしは騎兵の出身、翼竜の扱いはいささか不得手で……」

ヒリーの頼みをにべもなく断ると、アンジェラは向こうを向いた。

そんなはずはない。出撃に先駆けてアンジェラと訓練飛行をした時は、龍騎兵が舌を巻くほどの卓越した騎乗技術を見せつけていた。きっと彼女はヒリーの見ていない方で舌を出しているに違いない。ヒリーは僚友を恨んだ。

「仕方ないな……。ヴェル！」

ヒリーの声にアテナと愛を確かめあっていた愛騎はびくつと顔を上げた。

「イスラとアテナをメルキドまで送るぞ」

ヴェルはヒーリーの言葉に嬉しそうにうなづいた。ヒーリーとイスラはそれぞれの愛騎にまたがると、空へと舞い上がった。

「メアリ。ヴェローナで合流しよう！ それまで、軍団の指揮は君とピット爺に任せる！」

「わかりました！ 軍団長！」

次第に小さくなっていくヒーリーにメアリは声を限りに叫んだ。空を翔る二人は二、三回船の上を旋回するとメルキド方面へ飛んでいった。

第五章 決戦！ 第五話

「……さてと、我々も続くぞ！第一小隊は俺についてこい！」

「やはり、行かれるのですか。副軍団長殿」

「むろんです。今、我々はあの方を失う訳には参りませんから」

「同感です。レイ、副軍団長殿と少し空の散歩に行ってくる」

アレックスの言葉にうなづいたアンジェラは、副官のレイに言った。

「大丈夫ですか？ お一人では……」

「一人ではない。副軍団長殿と一緒にだ。何かあったとき、戦力は一人でも多い方がいいからな」

「では、私も……」

「いや、お前は連隊の指揮を頼む。心配するな。ヒーリー殿には失礼だが、翼竜の扱いにかけては私の方が上だとお前もわかっているだろう？」

アンジェラは不敵に笑うと、レイもまた苦笑で返した。

ヒーリーの出立から一五分後、アンジェラ、アレックスら護衛隊はウォルター座乗の水軍旗艦、「エンディミオン」から飛び立った。

アンジェラ達が飛び立った頃、ヒーリーとイスラはメルキド公国の

河岸都市ヴェローナの上空を通過していた。港ではフォレスタル船団受け入れのために、メルキドの商船が下流へと退避していく姿が見えた。

「久しぶりだな！　メルキドの上を飛ぶのは」

「はい、二年前になりますわ！　ヒーリー様が私の国に来ていただいたのは」

二年前の星王暦二一八一年、メルキド軍新軍団長として就任したデイサリータの祝賀の特使として、ヒーリーはメルキド公国に派遣されていた。以前より、妹のように思っていたイスラと会うのはヒーリーにとって楽しみであり、式典が終わった後は公都ロークラインの上空を飛び回ったものだった。

月明かりの下、銀に輝くメルキドの大地を二人かけた記憶は少女の中に今も美しい思い出として刻まれている。

「あのときは、楽しかったな！　デイサリータも空に連れて行って、あとでアリーにどやされたっけ！」

「そうですね。あのときは本当に楽しくって……」

イスラは胸を押さえた。よみがえる楽しかった思い出、ずっと抱き続けていたヒーリーへの想い。もう二度と会えないかもしれない恐れ。それらが全てないまぜになってイスラの胸を締め付けていた。

イスラは手綱をひねり、アテナをヴェルの近くに寄せると、ヴェルに飛び移った。

第五章 決戦！ 第六話

「お、おい。イスラ!？」

「お慕いしています。ヒーリー様」

驚くヒーリーの唇にイスラは自分の唇を重ねた。ヒーリーはさらに驚き、目を見開くと唇を離そうとして頭をうしろに下げた。しかし、イスラはヒーリーに腕を絡めて身体を密着させた。

長い口づけのあと、イスラをようやくヒーリーを解放した。急で意に反する口づけをされたせいか、ヒーリーはイスラから顔を背けた。

「イスラ………済まない。俺には好きな人がいるんだ。だから、君の気持ちを受け入れられない」

「あの侍女のことですか？」

「………」

「どうして彼女なんですの!?!私の方がずっと前からヒーリー様のこと………」

「すまない。イスラ」

目に涙を浮かべたイスラの抗議にヒーリーはただ謝ることしか出来なかった。イスラはアテナを呼ぶとその背に飛び乗り、ゆっくりと離れていった。

ヒーリーはどこかでこのことを恐れていた。自分を慕う妹のような

存在をなんとかして傷つけまいとして。けれど、イスラにとって、ヒーリーにとつても、今のような関係がつづくのは彼ら二人により残酷な結果をもたらしたのではないか。ヒーリーは遠ざかるイスラの背を見て思った。

二人の口づけから数時間後、ヒーリーとイスラはメルキド難民のもとに降り立った。

「これは、ヒーリー殿下。自らお出ましとは、仮面と車椅子のまま失礼いたします。公女殿下を無事お送りいただき、ありがとうございます」

ロークライン避難民の護衛を担当する第三軍団長ボナ・ムールは仮面のまま頭を下げた。ヒーリーは車椅子の軍団長に跪き、目線をおわせた。

「いえ、ワイバニアとの戦争の最中、殿下をお一人でお帰しする訳には参りません。大した護衛もつけられず、申し訳ありません」

ボナ・ムールに返事をしながらも、ヒーリーはときどき目線をイスラに移した。空を飛んでいる間、ヒーリーに悟られぬように泣いていたのだろう。肩は力なく落ち、目は真っ赤に腫れていた。その姿はヒーリーをいくらかかりか傷つけた。イスラは侍女のマミーに肩を抱かれ、群衆の中に消えていった。

「フォレスタル軍は、今日中にはヴェローナに上陸します。半月後にはメルキド軍本隊に合流出来るでしょう」

「ありがとうございます。総司令官のタワリツシ大將軍に早速伝令を……」

「いえ、それには及びません。すでに伝令の龍騎兵が大将軍のもとに向かっているはずですよ」

「さすが、歴史を変えたと言われる”翡翠の龍将”。行動が速いですな」

ボナ・ムールの賞賛の言葉にヒーリーは少し気恥ずかしげにほおをかいた。

「いえ、私の軍団に一人切れ者がいるものでして」

第五章 決戦！ 第七話

「はつくしゅ！……誰か、私の噂でもしているのかしら？ 大方、ヒーリーでしょうけれど」

ヴェローナの港に上陸を果たしたフォレストル軍は直ちに兵士の上陸と物資の荷揚げを行っていた。

四〇〇〇人分の物資の荷揚げを行なうのは容易ではなく、二日はかかるかとメアリら増援軍首脳部は試算していた。

「ヒーリーの奴、まだ帰ってこないのか？ もしかして、メルキドのお姫様と仲良く……」

何もない空間を抱き、口を尖らせてキスのまねごとをするレイをメアリは殴り飛ばした。

「そんな訳ないでしょ！ ほら、人手が足りないんだから、あなたも働きなさい！」

「いつてえな……。だから、二六にもなって男の一人もできないんだ……」

「何か言った？」

「い、いえ！ なんでもありません！」

レイは後ずさりすると、殺気をみなぎらせて眼鏡を上げた参謀長から逃げるように船に戻っていった。

「やれやれ、こりゃ結構時間がかかりそうだねえ」

「エリザベス！」

メアリの隣に立ったベスは兵士や人足が忙しく行き来する船を見上げると、キセルを一服吹かした。

「あたしらも一緒に行くよ。あんたたちのケツと口、きっちり守ってやるから心配しなさんな」

「ありがとう。エリザベス……。ついでに言葉遣いも直さない？
一応、女の子なんだし」

メアリの言葉にベスは一瞬面食らった表情をすると、大口をあけて笑い出した。

「あはははは！ あたしが女の子だって？ 違うないねえ！ あはははは」

「本気よ！ 私は！」

「生憎と男に囲まれて暮らして来たからねえ。そうそう簡単には直せないよ。それより、ヒーリーに料理の一つでも、ごちそうしてやるんだね。好きなんだろ？ あいつのこと」

軍団の中の誰かがいたら、卒倒していたかもしれない。冷静無比の参謀長が顔を真っ赤にしていたのだから。

「まあ、あいつにゃ、好きな子はいるみたいだけどねえ。あたしが

言つのもなんだけど、女は度胸だよ！　せいぜい頑張りな」

ベスはキセルをくわえながら言つと、手をひらひらさせて船に戻つていった。

第五章 決戦！ 第八話

「言うほど簡単じゃないのよ……」

顔を真っ赤にしたメアリはつぶやいた。港にたたずむメアリをよそに、ヴェローナのフォレスタル軍は、昼夜を徹しての荷揚げ作業に追われたのだった。

「それでは、私はヴェローナに戻ります」

「私達もコリオレイナスに市民を送り届け次第、本隊に合流します。この次は戦場でお会いすることになるでしょう」

「はい」

ヒーリーとボナ・ムールは固い握手を交わした。ヒーリーはヴェルにまたがると、翼をはばたかせ、一気に空高く舞い上がった。高度を上げたヒーリーは月の光に照らされて浮かび上がる十ほどの影を見つけた。影に近づくと、そこにはアレックスにアンジェラとよく見知った仲間達がいた。

「お帰りなさい。軍団長」

「ただいま。副軍団長。なんだ。皆来ていたのか？」

「軍団長達を二人でいかせる訳にはいきませんから」

アレックスは器用に片目をつむって微笑んだ。

「まさか、イスラのことも見ていたのか？」

「大丈夫。参謀長には口外しません……！」

アレックスは言い終えた途端、手で口を覆った。

「見ていたのか。一部始終……」

ヒーリーは静かな怒りを副軍団長に向けた。

「ヒーリー殿。どうか、副軍団長殿をお許し願いたい。あなたの無事を誰よりも案じたのは副軍団長殿なのですから」

アンジェラの助け舟にヒーリーはひとつ息を吐くとアレックスに言った。

「このことは他言無用だぞ。スチュアート隊長。特に君は、口が軽いところがあるから」

「はっ！ 気をつけます！」

ヒーリーの命令に若き龍騎兵隊長は背筋を伸ばした。真面目なのか不真面目なのかわからない隊長の姿に隊員達は小刻みに肩を震わせた。

「笑うな！」

「副軍団長殿、他言は無用にした方が良い。何せ、我が軍団と城には軍団長よりも怖い存在がいるのだから」

アンジェラはアレックスの愛騎とランデブーすると、微笑みを浮かべながら忠告した。アンジェラなりの冗談なのだろう。軍人然とした金髪の副軍団長は苦笑した。同時刻、ヴェローナとシンベルンで、二つのくしゃみが同時に鳴った。

「くしゅー！」

「はつくしゅー！……もう、ヒーリーね！ 城に帰ったら、とっちめてやるんだから！」

ぬいぐるみを乱暴に引っ張ると、ポーラは部屋の窓を眺めた。同じ月をヒーリーも見ているのだろうか。ポーラは引っ張ったぬいぐるみを今度はやさしくなでて、ぬいぐるみに語りかけた。

「ヒーリー。生きて帰って来てね。私はまだ、何も言っていないんだから……」

そのときのポーラの表情はぬいぐるみにしかわからなかった。もの言わぬぬいぐるみはそのつぶらな石の瞳でポーラを見つめ続けた。

「さあ、皆！ これからは気を引き締めてかかるぞ。メルキド軍が安全を確保しているとはいえ、ここは戦場なんだからな」

「はいー！」

月明かりを背に、ヒーリー率いる十余騎の龍騎兵はメルキドの空を駆けていった。

第五章 決戦！ 第九話

ワイバニア帝国帝都ベリリヒンゲン。クリスチーネ・フォン・ウィットフォーゲルはカーテンから差し込む陽光に目を覚ました。ベッドの毛布を胸にたくり寄せたクリスチーネは、傍らに眠るハイネを見た。クリスチーネは長い髪をかきあげ、ハイネに顔を寄せると、そっと唇を重ねた。

「……………ん」

普段と異なる感覚に、少し違和感を覚えたのだろう。ハイネは眉を少しだけ動かすと、安らかな眠りから覚めた。

「おはようございます。ハイネ様」

唇を離れたクリスチーネは艶やかな笑みをハイネに向けた。

「おはよう。クリスチーネ」

ハイネは笑顔で返すと、恋人を抱き寄せた。二週間の休暇も今日で終わる。午後には戦地に向けて飛び立たなければならない。ハイネにとっては、恋人と過ごす最後のひとときだった。

「ハイネ様。クリスチーネは幸せです。こんなにも長く、ハイネ様と同じ時を過ごせたのですから」

そう言うと、クリスチーネはハイネの胸に身を預けた。ハイネは愛おしそうに恋人の肩を撫でると、ベッドから起き上がりガウンを羽織った。

「支度をしなければならぬ。再び戦場にもどらなければ」

「はい……………」

クリスチーネに背を向けたハイネはクリスチーネの恋人ではなく、ワイバニア第一軍団長ハイネ・フォン・クライネヴァルトに戻った。ひとたび戦士に戻ったハイネはしばらく、クリスチーネの元に戻ってこないだろう。クリスチーネは悲しそうに目を伏せた。

午後2時、支度を終えたハイネは自邸の庭で愛騎レイヴンにまたがった。

「それでは行ってくる。クリスチーネ」

「どうかご武運をハイネ様……………」

寂しそうにクリスチーネは言った。ハイネは恋人を片手で引き寄せると固く抱きしめた。

「ハイネ様……………」

「必ず生きて帰る。だから、待っていてくれ」

「はい」

恋人の言葉に安堵したクリスチーネはハイネから離れると、先ほどとは違って変わった幸せそうな笑みを浮かべた。気持ちを通じ合っていると確認出来た。そのことがクリスチーネにとっては大切なことだったのである。

「レイヴン!!」

クリスチーネの表情を確認したハイネは愛騎に呼びかけた。紅の鎧を身にまとった翼竜は甲高い声で主に応えると、大きな翼を羽ばたかせ、空へと舞い上がった。

星王暦2183年6月28日、ワイバニア軍第一軍団長ハイネ・フオン・クライネヴァルトは戦線に復帰した。

第五章 決戦！ 第十話

翌六月二九日午後、レイヴンを最高速で飛ばしたハイネは、アーデン盆地にて補給、再編中の第一軍団と合流した。二週間の休暇から戻ったハイネを第一軍団参謀長のエルンスト・サヴァリツシュがたたくかく出迎えた。

「おかえりなさい。軍団長」

「気遣い、すまなかつたエルンスト」

あいさつも程々に、エルンストは歩きながらハイネに報告を始めた。

「兵力の補充と補給はすでに終わっています。いつでも本隊に合流出来ます」

「そうか……墓もつくつたのか？」

エルンストの報告を聞きながら、ハイネは第一軍団宿営地の横にある十字架の群れに目を向けた。

「ええ、我々だけでなく、メルキド軍のものも作りました。あれほどの勇者達です。懇ろに弔わないのは戦士として、軍人として非礼と言つものでしょう」

「そつだな。感謝する。参謀長」

ハイネの感謝の言葉にハイネより少し年長の参謀長ははにかんだ。

「すぐに本隊に合流するぞ。エルンスト。明朝、出立する。進路はメルキド公都ロークラインだ」

「わかりました」

星王暦二一八三年六月三〇日、戦力再編を終えたワイバニア軍第一軍団は公都ロークラインに向け進軍を開始した。

ハイネら第一軍団がアーデン盆地を離れたのと時を同じくして、ワイバニア軍本隊もまた、ベルゼンを出発していた。

「ヴィヴァ・レオを倒したとて、メルキドの軍団長はあと五人を残しておる。油断は禁物だろうて」

全軍の中でも最後衛を任された第四軍団長のグレゴール・フォン・ベッケンバウアーは馬上にて小さくつぶやいた。

「軍団長らしからぬ慎重なお言葉ですな」

グレゴールの背後に片方の顔を鉄の仮面で隠した若い男が現れた。第四軍団龍騎兵大隊長ベルハルト・フォン・ディースカウである。

第五章 決戦！ 第十一話

「なんじゃ、お前か」

「この度の最後衛の任に不満の議があつてまかりこしました」

「そのことか」

グレゴールはため息をついた。老練沈着な第四軍団にあつてベルハルトは唯一とも言える猛将であつた。優れた龍騎兵であり、指揮官でもある彼はその能力に比例して功名心も強く、全十二軍団最大の兵力を持ちながら最後衛にある現在の第四軍団の現状に不満を抱いていた。

「我が軍団は現在、第五軍団残余も合わせ、全十二軍団中最大の兵力を誇ります。それなのに、なぜ、後衛に甘んじているのですか！？」

「それ故じゃよ。敵軍の背後を狙うは常道。退路を経たれば、我々は敵中に孤立し、そのことごとくがメルキドの大地に屍をさらすことになるであらう。故に強大な軍団が背後を守ることが必要なじゃ」

「それならば、第二、第三軍団があたれば良いではありませんか！？」

「第二、第三軍団ともに我が軍の柱石、どちらも中軍、先陣には外せぬ」

「しかし！」

「聞き分けのないがきじゃのう」

グレゴールはザビーネとジギスムントを昏倒させた殺気を放った。ベルハルトはその重圧に耐えきれず、玉の汗を吹きながら地に伏した。

「貴様のようながきが戦のなんたるかを語るにはまだ、早いわ。しばらくそこで頭を冷やしておれ」

グレゴールは失神したベルハルトを馬上から見下ろすと、吐き捨てるように言った。星王暦2183年6月30日、ワイバニア軍10万は公都ロークラインに向け進軍した。

第五章 決戦！ 第十二話

「全軍の足を急がせるんだ。メルキド軍の合流を急がねばならない」
星王暦2183年6月30日、ヴェローナを出たフォレスタルのメルキド増援軍司令官ヒーリー・エル・フォレスタルは一時軍の足をとめ、主立った増援軍幹部を集めて言った。

「急がなければならないのは当然だが、改めていうとは、一体どうしたんだ？」

フォレスタル軍第三軍団長ウィリアム・バーンズがヒーリーに尋ねた。

「先ほど、メルキドから使者が来た。内容はヴィヴァ・レオの戦死だ」

ヒーリーのもとに集まった指揮官達がざわついた。

「しかし、これは十分に予想される結果じゃ。大した問題ではあるまいて」

第一軍団長のフランシス・ピットが言った。ヴィヴァ・レオの戦死とその時期は当初からメルキド、フォレスタルの両軍の戦略に折り込まれており、さして重要なこととはピットには思えなかったのである。むしろ、有能な将の死を明かすことが、全軍の士気を下げるのではないか。このことをピットは危惧していたのである。

「ピット卿。たしかに予想された結果だが、敵の進撃速度がこちら

の予想よりも早い。もしかしたらメルキド軍の合流後、すぐに戦いが始まるかもしれない。その事態は避けたい」

「では、私の軍団だけ先行すればよいではありませんの？私達だけなら、一週間もかからずミュセドーラス平野にたどり着けますわ」

第四軍団長のマーガレット・イル・フォレストルがヒーリーに言った。フォレストル最速と名高い第四軍団の力を絶好の機会と考えたのだろう。しかし、ヒーリーは勝ち気な妹の提案を却下した。

「それでは戦力分散の愚を犯してしまうことになる。一個軍団が間に合ったところで大勢に影響は無い。全軍で動いた方が得策だ」

「それで、俺たちにどうしろっていうんだ？」

ウィリアムの問いにヒーリーはメルキドの地図を広げて言った。

「見てくれ。当初の予定ではこの街道を通ることになっていた。こちらの方が道路と宿場が整備されているため、補給と休養に都合がいい。だが、少しだけミュセドーラス平野には遠回りになってしまつてメリットがある」

「なるほど。脇街道かー!!」

ウィリアムは指を弾いた。

「そうだ。現在の地点から半日行軍したところに街道の分岐点がある。脇街道は大軍の行軍には多少難はあるが、予定よりも4日は早くミュセドーラス平野に到着出来る。この時間は大きい」

「確かに物資の面からも有益ですね。大分節約が出来ますね」

「上空警戒を龍騎兵大隊が行なえば、安全も確保出来るだろうて」

ヒーリーの案にマーガレット、フランシスが頷いた。ウィリアムもまた、反対の意思を示さななかった。増援軍の各前線指揮官の同意を得たヒーリーは全軍に命令を発した。

「では、これより増援軍は脇街道を抜け進軍する。各軍団長は周知を徹底するように」

ウィリアムら各軍団長はヒーリーに敬礼すると、それぞれが指揮する軍団に散っていった。

第五章 決戦！ 第十三話

「すっかり総司令官らしい顔になったわね。ヒーリー。わたしの教育の賜物かしら？」

会議が終わり、メアリは馬車に戻ったヒーリーに言った。

「そうだね。週一回の昼寝しか許してくれない参謀長のおかげかな」

ヒーリーはどこか皮肉めいた笑みをメアリに向けた。

「ところで、さっきの進路変更。あのことと関係があるの？」

メアリは核心となる質問をヒーリーにぶつけた。ヒーリーは頷くと、一通の書類をメアリに手渡した。

「これは……ミュセドーラス平野の作戦図。それに、これ……」

驚くメアリに、ヒーリーは馬車の椅子にもたれて言った。

「さすが、メルキド最高の知勇を誇るタワリツシ大將軍。向こうも考えていることは同じってことさ。大將軍は一刻も早い合流を要請している。メルキド軍の人足だけでは足りないということだろう」

「だから、進路変更をしたのね。でも、それだけじゃないでしょう？」

「ああ、作戦図に穴を見つけたんでね。それを埋めにいくのさ」

メアリの問いにヒーリーは不敵に笑った。以前のヒーリーとは何かが違う。メアリは小さな不安を感じ始めた。

「ヒーリー、あなた……」

「あー！ 今日考えるのはやめだ、やめ！ メアリ、君も休んでくれ。明日も大変な一日になるんだからな」

「はい。軍団長」

メアリはそう言うと、ヒーリー専用の馬車を出て行った。メアリを見送ったヒーリーは馬車の屋根に上ると、てっぺんに腰掛けた。メルキドの月を眺め、ヒーリーはいつになく険しい顔をしてつぶやいた。

第五章 決戦！ 第十四話

「非情になれ。ヒーリー・エル・フォレストル……でなければ、ワイバニアには勝てない……」

月を睨みつけていたヒーリーに小石があたった。下を見ると、そこには酒瓶を掲げたフランスの姿があった。

「いい月じゃ……」

「ああ」

フランスはヒーリーと同じように馬車の屋根に上ると、手に持った酒を飲んだ。酒瓶をヒーリーに手渡すと、老将は月を見上げながら言った。

「何年ぶりになるかのう。坊と酒を飲むのは」

「たぶん。俺が成人したとき以来じゃないかな。あのときはピット爺とウィリアムに無理矢理飲まされて大変だったっけ」

ヒーリーは懐かしそうに笑った。アルマダ最高の武人、フォレストル三剣豪、救国の英雄、ピットの代名詞は両手両足で数えきれないほどあるが、そのどれもに共通して言えるのはフランスが全フォレストル軍人の憧れ存在であると言ったことだった。軍人ならば、彼と会話するのも緊張が伴うはずであるのに、ヒーリーはいたって自然体でフランスと会話していた。

「坊。お前、何か隠していることがあるだろう？」

「ピット爺にはかなわないな」

ヒーリーは苦笑した。

「坊。今回の作戦は……………」

フランシスはヒーリーにそつと耳打ちした。その内容を聞き、ヒーリーは愕然とした。作戦内容の細部に至るまで、ヒーリーの腹案と同じだったからだ。

「どうして……………」

「わしは、むしろ坊がこの作戦を思いついたのが聞きたいくらいじゃ。この作戦はタワリッシとわしが20年前に話し合った作戦じゃからのう。それだけに、何が必要かもわかる。坊、非情になれ。お前はまだ優しすぎる」

「ピット爺……………」

「心残りはメアリの花嫁姿が見れんことじゃ……………坊。心配いらん。メアリとて軍人じゃ。ちゃんとわかってくれる。非情になれ。いいな」

そう言うと、フランシスは屋根から飛び降り、自分の軍団へと戻っていった。ヒーリーはフランシスを見送ると

「非情になるんだ……………非情に……………」

一人になったヒーリーは屋根の上に寝そべり、静かに目を閉じた。

第五章 決戦！ 第十五話

星王曆二一八三年七月四日、公都ロークラインに到着したワイバニア軍先鋒、第三軍団長マンフレート・フリッツ・フォン・シラーは目を疑った。

「何……だと……」

ワイバニアの大軍を迎えたのは、無人の石造りの建物達だった。

「公都をまるごと空にするとは……やられな」

副将として帯同した。第六軍団長オリバー・リピッシュが言った。

「ベルゼンの街に入ったときはまさかと思ったが、公都まであっさり放棄するとは……これは大変なことになるぞ」

シラーの頭に敵地に誘い込まれつつあると言う認識が芽生え始めていた。現在のところ勝ち続けているが、実は敵地深く侵攻させて、退路と補給路を絶って後、全滅させる作戦なのではないか。少壮の上級軍団長に一抹の不安がよぎった。リピッシュも同様に感じており、話し合った二人は撤兵を皇帝ジグスマントに進言することを決めた。

「ならん」

ワイバニア軍後方、皇帝専用馬車の豪華な椅子に腰掛けた21歳の若き支配者は二人の進言を即座に却下した。

「そのような進言は憶測に基づいたものに過ぎぬ。その程度の理由で全軍を撤兵するのは愚行以外の何ものでもない」

「しかし……」

「もういいわ。シラー軍団長、リピッシュ軍団長」

食い下がろうとするシラーをシモーヌが制した。

「陛下のご裁断は下りたはずよ。それに単なる可能性で大親征を止める訳にはいかないの。それはあなたもわかっているでしょう？ シラー軍団長」

「ですが、軍団を預かる身として、いたずらに兵を失うことは……」

「黙りなさい」

シモーヌの冷徹な声がシラーの耳を叩いた。

「右元帥である私に軍団長が意見するつもり？ 私の権限で、あなたを軍団長の任から解いても構わないのよ」

シラーは拳を握った。ハイネが二人を斬ろうとした気持ちは今ならわからないでもないが、シラーは部下のため、友のために引き下がることに決めた。二人の軍団長は、皇帝と右元帥に一礼すると持ち場に戻っていった。

第五章 決戦！ 第十六話

「何を慌てている？ シモーヌ」

ジギスムントは普段の態度とは違うシモーヌに不審感を抱いていた。見下していた相手に心を見透かされたのか、シモーヌは少し不機嫌そうに言った。

「別に何も慌ててなどないわ。あなたはそのまま、メルキドを滅ぼせばいいのよ。私の言ったようにね」

「影はメルキドの中に潜ませている……か。その割にロークラインが空だということを知らなかったじゃないか」

ジギスムントは嘲笑を浮かべた。ジギスムントの態度に激昂したシモーヌはジギスムントの頬を張った。

「言葉に気をつけなさい……あなたなど、私がいなければ何も出来ないくせに」

ジギスムントは舌打ちすると、顔を背け、シモーヌに口を聞こうとしなかった。シモーヌは煽情的なドレスを翻すと、皇帝専用馬車を出て行った。

「ウーヴェ」

シモーヌは小さく低い声で影を呼んだ。

「これに」

シモーヌの背後に仮面をつけた黒装束の男が跪いた。

「ロークラインの潜入、失敗したことをどうして報告しなかったの？」

「申し訳ございません。しかし……」

「しかし、何……？」

「メルキド軍には既に影を潜入させております。現在主力はミュセドーラス平野に集結中とのことです」

「分かったわ」

シモーヌは短く返事をする、ナイフでウーヴェを斬りつけた。ウーヴェの仮面が地面に落ち、美しい素顔が露になった。シモーヌの一撃を微動だにすることなく受け入れた素顔からは鮮血が滴り落ちていた。

「今日の失敗はこれで許してあげる。二度はないわ」

頷いた影は再び姿を消した。

翌七月五日ワイバニア軍全軍はミュセドーラス平野へ進軍を開始した。

第五章 決戦！ 第十七話

同日、ロークライン手前30kmの街、ラシードに到着したハイネは、全軍ミュセドーラス平野に向けて進軍せよとの命令書を受け取っていた。

「ミュセドーラス平野とは遠いですね。ここからでは、2週間以上かかりますよ」

命令書を覗き込んだ第一軍団参謀長エルンストは言った。

「補給線が伸びつつあります。もし後方攪乱されたら、厄介です。早いうちに我々は進軍限界点に達してしまうでしょう」

「その程度のことはマンフレートも、マレーネ殿も心得ていよう。それでも命令書が届いたと言うのであれば、進言が却下されたと見た方が言いだろう」

ハイネは親友と皇帝の行動を正確に予測していた。しかし、皇帝と右元帥との間に亀裂が生じ始めていることまでは読むことは出来ていなかった。ハイネは全速で本隊に戻るよう指示を出した。

「軍団長、フォレスタルの増援軍がメルキドに上陸したとの報告が入りました」

「それは本当か？」

「はい。メルキド上空を警戒飛行していた第七軍団所属の龍騎兵からの情報です。ロークライン西方に龍騎兵らしき影を見た」

伝令の報告にハイネの顔色が変わった。

「ついに来たか……だが、規模までは分かるまい。ゲルハルトを呼べ」

ハイネは伝令に命じた。エルンストはハイネの言わんことを読み取ると、金髪の軍団長に尋ねた。

「では、第一軍団本隊は、全速でワイバニア軍本隊へ向かい、龍騎兵一個中隊は強行偵察に出撃で、よろしいですか？」

「よくわかったな」

「軍団長とは長い付き合いですから」

「敵に貴公のようなものがいて欲しくないものだ。腹の中が見透かされているようで気持ちが悪いらな。軍団の指揮は一時貴公に預ける」

ハイネはらしくない冗談を言うと、エルンストに軍団の指揮を任せた。ちょうどそのとき、レイヴンと共に龍騎兵大隊長ゲルハルト・ライプニッツがハイネのもとに降り立った。

第五章 決戦！ 第十八話

「軍団長、我々に任務とはいったい？」

愛騎からおりたゲルハルトはハイネに一礼すると、任務について尋ねた。ハイネが直にゲルハルトを呼ぶ時は、戦局を急転させる時か、少数精鋭による敵拠点急襲など、第一軍団の中でも極めて危険でレベルの高い任務の時だけだった。その他の場合はほとんどゲルハルトに一任されており、ハイネからの信頼の高さを示していた。

「私と共に、龍騎兵一個中隊を率いてフォレストル増援軍中枢を奇襲する」

ゲルハルトは色を失った。アドニス要塞群を急襲した時とは比較にならない。敵の位置も戦力も分からぬまま、まだ見ぬ敵の本陣を少数の龍騎兵で奇襲するのである。あまりに無謀な行動だった。

「戦力も、場所さえも分からぬ敵を急襲すると言つのですか？」

「そうだ。だが、今回の戦術行動の目的は、主として強行偵察にある。敵の数、位置、予測進路を特定する。このことが、これからの戦局に大きく関係することになるだろうからな」

「急襲はおまけということですか？」

「いや、そういうわけではない。今回、フォレストル増援軍を束ねているのは、ヒーリー・エル・フォレストルに違いない。フランシス・ピットに器が無いわけではないが、外征ともなると、王族が出ばって来るに決まっているからな」

ハインは自信ありげに笑うと、すぐに真剣な顔つきに戻った。

「だからこそ、ヒーリー・エル・フォレストルの将器。この目で見極める。尊敬に値する敵かどうかをな」

ハインの瞳に宿った光を見て、ゲルハルトは思った。最初に言った通り、敵陣を急襲し、敵將の器を見極めることが真の目的なのだろう。やはり、ハイン・フォン・クライネヴァルトは真の戦士なのだ。だからこそ、我々はこの方を信じ、ついていくのだ。世界最強の龍騎兵を束ねる若き大隊長はゆっくりと頷いた。

第五章 決戦！ 第十九話

「了解しました。では、直ちに準備に入ります。一時間以内に出撃可能にいたします」

「頼んだぞ。ゲルハルト」

ゲルハルトはハイネに敬礼すると、愛騎にまたがり、自分の隊へ戻っていった。次第に小さくなっていくゲルハルトを見送るハイネにエルンストが話しかけた。

「楽しそうですね。軍団長」

「顔に出ってしまったか？エルンスト」

「いえ、分かるのは私かシラー軍団長、それにレイヴン殿くらいのものでしょうか」

エルンストはウィンクした。エルンストの言葉に反応したのが、レイヴンは短く鳴いた。

「それにしても、どのような人物なのでしょう？ヒーリー・エル・フォレストルは」

「私も龍の眼の映像でしか見たことは無いが、なかなかの男のようだ」

ハイネは空を見上げた。メルキドの空は故郷のベリリヒンゲンよりも澄み渡っているように見えた。同じ空をヒーリーも見上げている

のだろう。ハインはまだ見ぬ敵手との対戦を心待ちにしていた。

「ふわあゝあ」

「うら」

あくびをする同期の頭をメアリはこづいた。夜が明けて、フォレストル増援軍はミュセドールス平野に向けて動き出していた。作戦室を設置した大型装甲馬車の中で、ヒーリーとメアリはメルキド軍との共同作戦の細部を詰めていた。

「人に休むように言うておいて、自分は夜更かし？おじいさまと飲んでたんでしょ？ちゃんと知ってるわよ」

「ピット爺のおしゃべりめ」

「軍団長の生活を知るのも、参謀長の務めですから」

「そんな務めなんて、聞いたことが無いな」

「あなたは特別よ。ポーラにも言われているの。『メアリ姉、ヒーリーがぐーたらしないようによろしくね』って」

「皆、俺のことをぐーたらだと思ってるんだな」

「日頃の行いよ」

舌打ちするヒーリーに、メアリは眼鏡を上げて言った。

作戦室のテーブルの上には、ミュセドールス平野の地図が広げられ

ていた。ミュセドーラス平野は平野とは名ばかりの盆地に近い地形をしている。周囲を馬蹄形のなだらかな山地で囲まれ、その中を幅200mばかりの川が縦断していた。平野への出入り口は二つに限られ、守りやすく、攻めにくい天然の要害だった。

第五章 決戦！ 第二十話

「メルキドの自然の力には恐れ入るよ。道理で古来からワイバニアとフォレストルの侵入を許さなかったわけだ」

ヒーリーは地形図を見ながら、改めてメルキドの財産に嘆息していた。先にミュセドーラス平野に陣取ったメルキド軍はワイバニア軍に対して、一方的に包囲できる態勢にあった。しかし、問題が無い訳ではなかった。メルキド軍の兵力は少なく、ワイバニアの大軍相手に戦線を維持しうるだけの力は無かったのである。

「ここで、俺たちの登場ってわけか」

ヒーリー率いるフォレストル軍は4個軍団。メルキド軍の5個軍団を合わせると、ワイバニア軍とほぼ互角の戦いが出来る。メルキドとフォレストル両軍で入り口から入ったワイバニア軍を包囲する。山に阻まれたワイバニア軍は大軍を運用出来ず、崩壊する、これが作戦図から読み取れた作戦だった。

だが、ワイバニア軍とて馬鹿ではない。自殺覚悟の突撃など行ないはしない。膠着状態になるのは必死だった。作戦の第二段階を実行するためにはこの事態の解決は絶対に必要なことだった。

「メアリ………」

「なに？ヒーリー？」

「いや、何でも無い」

ヒーリは口をつぐんだ。ヒーリがそのことを口にするということ
はメアリにとって最も残酷な言葉を口にすることになる。そのこと
がヒーリをためらわせた。「非情になれ」フランシスの言葉がヒ
ーリーの心を深く突き刺していた。

「ヒーリー。もしかして、あなた……………」

メアリの問いを伝令のノック音が遮った。伝令はヒーリー軍の先頭
が脇街道の分岐点に到着したことを告げた。ヒーリーはこのまま脇
街道を進軍させるよう告げると、メアリに目を向けた。

「どうした？メアリ……………」

「いえ、何でも無いわ」

メアリは慌ててヒーリーに返事をした。作戦図とヒーリーから聞いた
作戦内容からでは大事なことが一つだけ抜け出ている。もし、そ
れを埋めるのであれば自分自身にとって最も最悪で、残酷な答えを
得ることになるだろう。フォレストル最高の才媛は導き出された答
えを知りながらも口には出さなかった。それが自分の甘さであるこ
とを知りながらも、肉親と戦友を失う言葉を出す選択肢を避けたの
である。

「急がなければならないわね。決戦の地へ」

メアリは装甲馬車の小さな窓から外を見た。どこまでも続く青い空
と、のどかな田園風景が広がっていた。青々と生命力に満ちあふれ、
天へと葉先を伸ばす麦畑。戦いに負ければ、いずれこの風景も踏み
荒らされることになるだろう。勝たねばならない。しかし、親しい
人には生きていて欲しい。メアリの中では相反する感情が渦巻いて

いた。

「メアリ……………」

「ヒーリー。席を外してもいいかしら。少し風にあたっていたの……………」

メアリは表情を崩さず、抑揚の無い声で言った。ヒーリーは退出を許可すると、机の上に肘をつき、頭を抱えた。ヒーリーの思いもメアリと同じだった。ワイバニアに勝たねばならないが、自軍の被害は最小限でなければならぬ。しかし、ヒーリーにはこの作戦以上に味方の犠牲を最小限に食い止められる方法が考えられなかった。

「考える……………考えるんだ……………」

作戦室で一人呪文のようにヒーリーはつぶやいていた。

第五章 決戦！ 第二十一話

「軍団長、出撃準備整いました」

準備を整えた龍騎兵一個中隊とともにワイバニア軍第一軍団龍騎兵大隊長ゲルハルト・ライプニッツはラシード郊外にある第一軍団仮説司令部に降り立った。

「よし。直ちに攻撃する。エルンスト。しばらくの間、頼んだぞ」

司令部の仮設テントを出たハイネは居並ぶ100人のドラゴンライダーを見ると、続いてテントを出た参謀長のエルンストに言った。

「お任せください。軍団長、ご武運を」

「行ってくる……レイヴン!!」

ハイネは愛騎に跨がると高らかにレイヴンに呼びかけた。レイヴンは高いいななきを発すると、大きな翼を羽ばたかせた。百を超える龍の群れは、空高く舞い上がると整然と隊列と整えながら、西方に向けて飛び去っていった。

「全騎！警戒陣形！！龍将三十六陣”鷹眼”発動！！散開せよ！！」

ハイネの号令一下、百騎の龍が三騎単位の小集団に分かれて散開した。第一軍団独自の上空警戒陣形、鷹眼である。翼竜は人間よりも遙かに優れた感覚器官を持つ。その感覚器の限界ぎりぎりまで哨戒網を広げる。これが鷹眼の正体だった。

もつとも、他の軍団でこのような陣形をとるのは容易ではない。個体毎に異なる感覚器の限界を把握し、かつ万一敵と遭遇戦を行なった場合、高確率で生還しうる高い戦闘能力を持つことが必須条件だった。それを満たすのは十二軍団中随一の技量と練度を誇る第一軍団だけだった。

天空に広がる龍の網。その網にヒーリーがかかるのをハイネは待っていた。

ヒーリーとハイネ。両軍の雄が激突する時が刻一刻と近づきつつあった。

第五章 決戦！ 第二十二話

星王暦2183年7月4日、ワイバニア帝国帝都ベリリヒンゲン中心部にある帝国軍大本営翼将宮左元帥執務室に思いもよらぬ客が訪れていた。マクシミリアン・フォン・クライネヴァルト内務大臣。ワイバニア帝国ナンバー2にして、ハイネの兄である。

「内務大臣閣下自らお出ましとは、いったいいかなるご用向きですか？」

左元帥ハンス・フォン・クライネヴァルトは来客用のソファに腰掛けて尋ねた。マクシミリアンは父の態度に苦笑しながらもあくまで儀礼的に返した。

「左元帥殿。実は内々にてお話ししたいことがあります。お人払いをお願いします」

ハンスは傍らに控える補佐官に目配せすると、補佐官は一礼して執務室を出て行った。人の気配が周囲に無くなったことを確認したハンスは、ソファから立ち上がると陽光差し込む執務室のカーテンを閉めた。

「どうした？マクシミリアン。内々の話とは？」

「父上。大親征を止めていただきたい」

息子の提案にハンスの眉がわずかに動いた。

「何故だ？」

「分かっておりましょう。このままでは、我が軍が崩壊しかねないからです。我が軍はロークラインにせまり、その進撃速度は破竹の勢いです。しかし、敵中深く入り込んでおり、補給線は伸び、いつ寸断されてもおかしくはない状況です。ここで一旦兵を退き、メルキドの東方とロークラインまでのメルキド公国領土の3分の1を領有すればよいではありませんか」

マクシミリアンは補給の困難さを父に説いた。

「見くびられたものだな。マクシミリアン。政治、外交ならともかく、軍事の面から私に意見しようとは。その程度のこと、私がかからないとも思っていたか？」

眼光鋭く、ハンスはソファに腰掛けるマクシミリアンを見下ろした。

第五章 決戦！ 第二十三話

「いえ、ここからは私の領分です。父上、ワイバニアがいくら豊かとはいえ、全ての領民を豊かに暮らせるほど、我が国は富にあふれているわけではありません。ワイバニアが古来よりメルキドとフォレストルに戦争を仕掛けて来たのはそのためです」

ハンスはソファにどっかりと腰を下ろすと、息子の話に耳を傾けた。

「知つての通り、翼竜は強大な力を持ちますが、その維持には莫大な費用がかかります。また、メルキドとの戦争にかかる費用も莫大です。このままでは、民に重い税を課すこととなります」

「そんなことは分かっている」

「いいえ、分かっておりません。父上。我々は一年前にも第十軍団の半数が壊滅する惨事に見舞われています。今は加えて第五軍団。彼ら兵士達の遺族に支払う保証金も我が国の財政を圧迫しつつあるのです。予算を計上し、問題解決に努めるのが各大臣の責務。そして、その大臣を束ね、予算を承認するのが私の責務です。国政を預かるものとして、我が軍の暴挙は止めねばなりません。父上。いたずらに民の命や生活を脅かしてはならないのです。どうか、陛下にお口添えを」

ハンスは腕を組み、目を閉じた。マクシミリアンは少壮気鋭の政治家である。30歳という若年ながら国をまとめ、大臣のみならず若手の貴族や国民からも多くの支持を得ていた。先代のワイバニア皇帝もマクシミリアンの手腕に信頼を置いていた。「その目は慈愛と理想に満ち」というのは彼に近い友人の言葉であるが、常に民を思

い、国を愛した政治家だった。

しかし、若さ故の理想がマクシミリアンの絶対の弱点だった。民に目を向けるあまり、皇帝の野心と恐ろしさと言うものを理解していなかった。彼が撤兵を進言すれば、恐らく即日マクシミリアンの首が飛ぶ。それだけではなく、皇帝に反するものは残らず公職を追放されるか、逆賊の汚名を着せられ、殺されるだろう。

そうなれば、血を見るのは十や二十ではきかなくなるだろう。若いマクシミリアンには、それが理解出来ていなかった。ハンスは目をあけると、息子に言った。

「軍は退かぬ。帰れ。マクシミリアン」

「何故です！？大臣の了承は得ています。兵の命をむざむざ失わせたくないのはあなたも同じでしょう!？」

テーブルに乗り出したマクシミリアンは大臣の連署を叩き付けた。そこには署名していない大臣も数名おり、大臣間が決して一枚岩で結ばれていないことを証明していた。これが外に漏れたら、皇帝はマクシミリアン処断の決定的な証拠として上げてくるだろう。机に乱暴に突きつけられた連署がハンスにとっては息子の死刑宣告書のような気がして、ならなかった。

「馬鹿者が……………」

「父上!!!」

「話は終わりだ。マクシミリアン。この話はなかったことにしておいてやる。帰れ」

怒りに震えるマクシミリアンをハンスは冷然と突き放した。マクシミリアンはそのまま席を離れると、左元帥執務室を出て行った。乱暴に閉じられたドアの音がハンスしかいない執務室の中にこだました。

「馬鹿者が……」

ハンスは悲しそうにつぶやくと、ソファに身を預けた。

第五章 決戦！ 第二十四話

星王曆二一八三年七月六日夜半、ワイバニア軍第一龍騎兵大隊第一中隊はミュセドールラス平野から北へ二〇〇キロ離れた平原で野営を初めた。たき火の前で腰を下ろし、じつと火を見つめるハイネにゲルハルトは話しかけた。

「フォレスタル軍はまだ網にかかっておりません。軍団長」

「当たり前だ。今はまだ、決戦の地を通り過ぎたばかりだ。もう少しはかかるだろう」

愛剣を肩にかけ、いつでも抜剣が出来る体勢でハイネは答えた。戦士としては当然の体勢だが、ハイネのそれは大理石像のように洗練された美しさを放っていた。

「ですが、ミュセドールラス平野の配置は分かりました。平野の入り口を東半分、三軍団が陣取っているようです」

「おそらく、フォレスタルをあてにしているのだろう。たかが三軍団で我々を倒せるはずは無いのだからな」

「しかし、決戦を前に三軍団とは、いささか兵が少ないと思います。……」

「戦力を分散したな。ロークラインを脱出した領民の護衛のために一個か二軍団を割いたのだろう。司令部に伝令を出さなければならぬ。ミュセドールラス平野の兵は寡兵なり。直ちに叩きつぶすべしとな」

ハイネの予測はある意味では正しく、その対応は完璧なものだった。もし、ワイバニア軍が進撃速度を速めたら、メルキド軍はたちまちのうちに敗北しただろう。しかし、現実にはハイネの思惑通りにはならなかった。ハイネもまた全能ではなく、これから自らの身に待ち受ける運命を予知しえなかったのである。

「明朝、夜明けと共に出発する。貴公も休んでおくといい。ゲルハルト」

そういうと、紅のマントに身をくるんだ若き剣士は静かに目を閉じた。翌七月七日、紅の剣士と翡翠の龍将はその剣を交えることになる。

第五章 決戦！ 第二十五話

ハイネがメルキドの地で眠りについたので同じ日、ハイネの兄マクシミリアンは自邸で書状をしたためていた。遠征軍撤兵の奏上書である。

「父上はどうして理解されないのか。今は兵を退くことがワイバニアにとって、民にとって最良の道ということを……」

奏上書を書き終えたマクシミリアンはペンを置いた。父と激論を交わして二日、最後まで分かりあえなかったことがマクシミリアンの心にしこりとなって残っていた。

「あなた。あまりご無理をなさらないください。あなたもお義父さまも、この国になくてはならない人なのですから」

「すまない。マリア。心配させてしまったね。私のことなら、大丈夫だから」

書斎に入った妻に、マクシミリアンは優しげに微笑んだ。マリアは表情を幾分和らげたが、安心しきってはいないようだった。マクシミリアンは苦笑すると、再び机に向かった。

「国民の命と富を吸い上げてまで戦争を行なうなんて、父上も陛下も間違っている。陛下もきちんと誠意を尽くせば、理解してくださるはずだ」

実務家としてのマクシミリアンの手腕はワイバニア帝国の中でも傑出していた。フォレストル王国きっての英才と呼ばれたマクベスを

も凌いでいたともされている。しかし、マクシミリアンはマクベスほど現実的な思考を持っていなかった。このことが彼の命を縮める結果になるとは、彼自身思いもよらなかったであろう。

翌朝、マクシミリアンは彼付きの護衛である、ドルニエに皇帝への奏上書を手渡した。

「これを何があっても、陛下に手渡して欲しい。戦闘が始まる前にできるだけ早く」

ドルニエは黙って頷くと、翼竜に跨がり、マクシミリアン自邸を飛び立った。

「民のため、国のため、愚かなことは止めるべきなのだ。父上もきつと、私のしたことをお認めになるはずだ」

戦争終結の望みを託した使いをマクシミリアンは見送った。しかし、自分自身の死刑宣告書を送り出したことに彼はまだ気づいていなかった。

第五章 決戦！ 第二十六話

星王曆2183年7月7日午後、脇街道を進み始めて6日目、フォレストル軍がミュセドーラス平野まで確実に近づいていた。

「ようやく、半分か」

ヒーリーは装甲馬車から身を乗り出した。軍勢は長い谷あいの道を抜け、大きく開けた平野に出た。大地の匂いのする心地良い風がヒーリーの身体をすり抜けていった。隊列の遙か前方には、ミュセドーラス平野を取り囲む山地が見え、いよいよ決戦の時が近づいていることを増援軍に告げていた。

「いよいよ、決戦ですね。軍団長」

装甲馬車から、のっそりとアレックスが身体を出した。根っからの職業軍人である彼も、かつてない大決戦にいても立ってもいられないようだった。

「まだだ。スチュアート隊長。あと4日はかかる。今はまだ、落ち着くことだ。とりあえず、上空警戒は厳にしておいてくれ」

スチュアートが敬礼したとき、馬車の上空に一騎の龍騎兵が舞い降りた。

「総司令官に報告！前方に龍騎兵、一個中隊を発見！あと30分で接敵の様！」

「迎撃しますか？」

「いや、モルガン隊長とレイ、それとメアリを呼んで来てくれ」

ヒーリーはスチュアートに命じると、空に目を向けた。まだワイバニア軍は見えないが、その気配だけは感じ取ることが出来た。戦場の勘というものが、戦争を嫌っているはずなのに、自分の中で何か心躍るものをヒーリーは感じていた。

ほどなくして、アレックスは司令部大隊長のモルガンとレイ、メアリをつれてやって来た。

「レイ、敵についてどう思う？」

「軍団長の思われる通りです。少数精鋭による拠点強襲。こんなことが出来るのは、ワイバニアの中でも一人しかいない。第一軍団長、ハイン・フォン・クライネヴァルトに間違いありません」

レイは表情を崩さなかった。フォレストル軍の中でも、レイほどアルマダの戦術、将帥の情報に長けている者はいない。一個中隊規模の龍騎兵が襲来したという知らせだけで、戦術、率いる部隊までも推察出来るのは彼の能力の証明でもあった。

「やはり……な。モルガン隊長、直衛の一個中隊に例の準備をさせておいて欲しい。それから……」

ヒーリーの命令に一同は皆、絶句した。

「本気ですか？」

モルガンの問いにヒーリーは頷いた。

「ハイネ・フォン・クライネヴァルトが俺の思った通りの人物ならばね。おもしろい話だが、敵を信じてみたい」

「軍団長、私も反対です。一個中隊をみすみす失いかねないので
よ」

メアリもヒーリーの命令に反対した。参謀長としては兵を犬死にさせる訳にはいかない。反対するに十分すぎる理由であった。

「もし、そうになったら、ハイネもろとも、龍騎兵隊を俺が皆殺しにする。それに、彼らだけ危険にさらしたりはしないよ」

ヒーリーは三人を見た。その意志は固く、彼らとてこれ以上の説得は出来なかった。

「ハイネの強さ。この目で見届ける」

まだ見ぬ敵との立ち会いを、ヒーリーは心待ちにしていた。

第五章 決戦！ 第二十七話

フォレストアル軍に捕捉される直前、ワイバニア軍はフォレストアル増援軍の隊列を発見していた。

「軍団長、フォレストアル軍を発見しました。あと30分ほどで接敵します」

「よし、鷹眼を解除。密集隊形で突撃する。そのあとは……」

「

ハインはゲルハルトを見た。ハインの信頼厚い龍騎兵は頷いた。

「わかっております」

「そうか、あと……」

ハインはゲルハルトに小さく告げた。

「本気ですか!?!」

「私が奴なら、同じことをするだろう。これで少なくとも、奴の将器が分かる」

「しかし……」

「でなければ、私が直に奴を斬って、この戦いは終わりだ」

ゲルハルトはハインを見た。もうハインはゲルハルトを見てはいな

い。まだ見ぬ敵を見据えているのだろう。ゲルハルトはハイネの策に首を縦に振らざるを得なかった。

「よし、全隊突撃。フォレストアル軍を急襲する」

ヒーリーとハイネの戦いが、今はじまろうとしていた。ハイネ率いる龍騎兵隊は、陣形を組み、高空から一気に降下すると、フォレストアル軍四個軍団上空を駆け抜けた。

「軍団長！敵龍騎兵隊、密集隊形で接近！！数100」

伝令の報告にヒーリーは笑みをこぼしつつも冷や汗を一筋たらしめた。

「来たか……各軍団に手出し無用と厳命してくれ。司令部第一直衛中隊は手はず通りに展開を急いでくれ」

「分かりました」

モルガンは敬礼すると、そのまま装甲馬車を下りていった。

「軍団長、私も空へ上がります。部下には攻撃禁止を徹底させていただきますから、ご安心ください」

「ああ、頼む副軍団長」

スチュアートも装甲馬車から飛び降りると、愛騎に跨がり、一気に空高く舞い上がった。

「敵龍騎兵、あと500！！」

「軍団長……………」

「メアリ、君は下がっていてくれ。女の子に怪我はさせられない」

「ちょ、待ちなさい！ヒーリー！！」

メアリの制止も聞かず、ヒーリーは装甲馬車を飛び出した。

「馬鹿……………どうしてあなたは、昔から……………」

装甲馬車の手すりを、メアリは握りしめた。ぐうたらで、どうしようもないサボリ魔。けれど、一度戦いになれば、自分のことはおかまいなしに誰よりも危険な場所に飛び込もうとする。そんなヒーリーがあぶなっかしくて放っておけなかった。メアリはヒーリーの後ろ姿を見送った。

「死なないで。ヒーリー……………」

第五章 決戦！ 第二十八話

ヒーリーは兵士達に場所をあけさせると、その中央に陣取った。

「さあ、来い。ハイネ・フォン・クライネヴァルト！」

密集隊形でフォレストル軍陣地に突入したハイネだったが、一向に迎撃してこないフォレストル軍に違和感を感じていた。

「妙だな。対空攻撃が来ない。龍騎兵なり、弓兵なりの攻撃があってもいいはずだが……」

愛騎を飛ばしていると、真正面に円状に開いた空間と、その中央にたった一人立つ人影が見えた。ハイネは敵の意図を察すると嬉しそうに笑みを浮かべた。

「そういうことか……。味な真似をする！ ヒーリー・エル・フォレストル！ 龍騎兵全騎、命令あるまで手出し無用！ 円陣で上空待機せよ！」

紅の鎧に身を包んだ龍の群れがヒーリーの上空に押し寄せた。

「来たか！」

ヒーリーが上空を見上げると、龍騎兵隊の戦闘を飛んでいた翼竜から金の髪と紅のマントを翻した剣士が飛び降りた。

「くっ！」

ヒーリーは胸のホルスターからカストルとポルックスを抜くと、剣士に向けて発砲した。魔術によって加速された弾丸が、うなり声を上げながら、ハイネに向かっていった。

「ふっ！」

ハイネは短く呼吸を吐いて抜剣すると、ヒーリーの放った弾丸を斬り捨てた。続く、2、3発目を首と身体をひねってかわすと、ヒーリーに向かって愛剣を振り下ろした。

「いやあああっ！」

メアリの叫びと共に、周囲に金属音が響いた。ヒーリーはカストルを盾にハイネの一撃を受け止めていた。

「く、ふふ……」

「は、ははは……たあああっ！」

ヒーリーはハイネの腹を蹴り、距離をとると再び魔術銃を撃った。一発でもあたれば命は無い。急所を狙った超高速の弾丸である。だが、ハイネは弾道を見切り、ヒーリーの弾をことごとくかわすと、瞬時に間合いを詰めて、愛剣を一閃した。ワイバニア最強の一撃をポルックスで受けたヒーリーはカストルをハイネの頭めがけて振り下ろした。ハイネはヒーリーの打撃を腕でガードすると、ヒーリーを蹴飛ばした。

「くそ！」

バランスを崩しながらもヒーリーは魔術銃を連射した。苦し紛れの

攻撃でハイネにダメージは与えはしなかったが、時間は十分に稼ぐことが出来た。戦闘態勢を整えたヒーリーは万全の状態でハイネに銃を向けた。一発必中の構え。ヒーリーはハイネの急所に的確に狙いを定めた。

ハイネもまた、一撃必殺の構えでヒーリーに応じた。ほんの数瞬、ハイネとヒーリー、二人にとって永遠とも感じる時間が流れた。

互いに最強の一撃を放とうとした瞬間、ハイネの剣が砕け落ち、ヒーリーの銃が細切れになって地に落ちた。だが、両者は勝負を捨てた目をしていなかった。

第五章 決戦！ 第二十九話

「ヴェル！！」

「レイヴン！！」

ヒーリーとハイネは相棒の名を呼んだ。二人の背後に翡翠と紅の翼竜が舞い降りた。ヴェルとレイヴンは口を開くと、同時に火炎を放った。

「くっ！！」

「ちいい！！」

炎は翼竜の主達にも容赦なく襲いかかった。ヒーリーとハイネはマントを翻すと、二人を襲う火勢をしのいだ。

火炎では勝負がつかないと考えたのか、2匹のエメラルドワイバーンは翼と脚の爪で組み合った。レイヴンもヴェルも戦いの無い時はおとなしいが、百戦錬磨の翼竜である。その力とスピードも互角だった。

「翼竜同士の戦いでも決着がつかぬか……ならば！」

ハイネは手を高く掲げた。ヒーリーはハイネの戦術を読むと、モルガンに叫んだ。

「モルガン隊長！！」

「龍将三十六陣が一つ!!」

「第五軍団対空防御陣形!!」

「銀の雨!!」

「炎の回廊!!」

二人は同時に号令した。次の瞬間、第五軍団の頭上から矢の雨が降り注ぎ、地面からは幾本もの火柱が上がった。銀の雨と炎の回廊は空中で交差すると、両軍の兵士達に襲いかかった。

「あ……あ……あ……あ……」

あまりの壮絶な戦いに、メアリは膝をついた。火柱が上がったときに立った土煙で周囲は何も見えなかった。どちらかが勝っているかは土煙が晴れるまでは分からなかった。

「軍団長!!」

上空から二人の戦いを見ていたアレックスはすぐさま救援に向かうとしたが、出来なかった。目の前にゲルハルトが立ちはだかったのである。

「貴殿も分かっているよう。この戦いは手出し無用。それとも、ここで私と立ち合うか？」

ゲルハルトは馬上槍をゆらりと構えた。遅いが無駄も隙も無い動き。戦えば、どちらも無傷ではすまないほどの手練。アレックスはスピアを構え、ゲルハルトに相對した。

「ヒーリー……ヒーリー！」

メアリは声を絞り出した。それはあまりにも小さく、弱々しい声だった。それはメアリ自身よく自覚していた。この戦いには自分は好きな人に声すらかけられない存在なのだ。メアリは土煙が晴れるのをただ待つしか出来なかった。

第五章 決戦！ 第三十話

激闘から数分が経過していた。その間、両軍は互いに水を打ったように静まり返り、どちらも身動き一つとらなかつた。両者は土煙が晴れるのをひたすら待った。ようやく炎の回廊によって生じた土煙が晴れ、ハイネとヒーリーと共に、攻撃を受けたワイバニア、フォレストル軍の姿が明らかになった。

「あ……」

銀の雨はフォレストル軍の直衛中隊を避けるように地に突き刺さり、炎の回廊もワイバニアの龍騎兵を一兵たりとも焼き払いしなかつた。両軍損害皆無。それがこの戦闘の結末だつた。

「見事……」

ハイネは戦闘体勢を解くと、ヒーリーに言った。

「これほどの手腕、名乗りなど不要と思うが、聞いておこう。わたしは、ワイバニア軍第一軍団長ハイネ・フォン・クライネヴァルト。貴公の名は？」

「フォレストル軍第五軍団長兼メルキド公国増援軍総司令官、ヒーリー・エル・フォレストル」

ハイネはヒーリーの名を聞くと、満足そうに頷き、レイヴンに跨がった。

「再び貴公と戦場で相見えることを楽しみにしている。さらばだ」

「ああ」

ハインは愛騎を急上昇させると、したがえていた龍騎兵を引き連れ、空に消えていった。

ハインを見送ったヒーリーは、地面に落ちた愛銃を見つめた。

「カストル、ポルツクス……」

カストルとポルツクスは大地に無惨な姿をさらしていた。銃身は砕け散り、バネや破片は粉々に飛び散っていた。ただ一つ原形をとどめていたグリップもひび割れ、ハインの斬撃の重さと早さの凄まじさを物語っていた。

「今まで、ありがとう。カストル、ポルツクス」

このまま地にさらしておくのが忍びなかったか、ヒーリーはメルキドの大地に愛銃を懇ろに葬ると、装甲馬車へと一歩一歩歩いていった。

第五章 決戦！ 第三十一話

「ヒーリー！」

「軍団長！」

装甲馬車に戻って来たヒーリーをモルガン、レイなど、第五軍団幹部が出迎えた。疲れた笑みをこぼしたヒーリーに、メアリは一步踏み出すと、ヒーリーに平手打ちを食らわせた。

「……痛いな。メアリ」

「あなた、何を考えてるの？ 指揮官がいきなり格闘するなんて、ここで死んだら、どうするつもりだったの？」

「ごめん、メアリ……」

いつにない剣幕で怒り出したメアリにヒーリーは動揺していた。あのメアリがこれほど感情を露にすることは。一〇年近くの付き合いになるが、今までには無かったことだ。ヒーリーはばつが悪そうにメアリから目をそらした。

「ヒーリー！ こつちを見なさい！」

「参謀長殿……」

激昂するメアリの肩をアンジェラはつかんだ。振り向くメアリにアンジェラは小さくかぶりをふるると、装甲馬車へ連れて行った。時々嗚咽を漏らすメア리를気遣いながらも、アンジェラはヒーリーの方

を向いた。何か言いたいことがあったのだろう。アンジェラの心中を察すると、ヒーリーは小さく一礼した。

立ちすくむヒーリーの前にアレックスが空から下りて来た。

「申し訳ありません。軍団長！ 救援に出向くことが出来ませんでした」

「いや、いいんだ。スチュアート隊長。敵の力の程はわかったらろう？」

ヒーリーは軽く手をあげると、アレックスに言った。

「はい。これまでの相手と格が違います。おそらくあの大隊長は私より遥かに……」

「スチュアートですらかなわれない相手だっというのか？」

アレックスの表情を察したレイは驚きの表情を浮かべた。アレックスの勝てない相手、それはすなわちフォレスト軍のどの龍騎兵も敵わないと言うことを意味していた。

「おそらく、最高によくできて相討ちと言つところでしょう」

第五章 決戦！ 第三十二話

一方、司令部直衛中隊の一人一人も、ワイバニア第一軍団の恐ろしさを思い知らされていた。

彼らの足下数cmの位置に矢が突き刺さっており、彼らの一人たりとも傷を付けず、かつ身動きのできない場所を銀の雨は正確に射抜いていたのである。その精度の高さに直衛大隊長のモルガンですら顔を青ざめさせていた。

「勝てる気がしない……こんな化け物達を相手に俺たちはどう戦えっ言うんだ！！？」

直衛中隊の一人が叫んだ。彼をはじめに軍団がざわつき始めた。第五軍団の周囲に敗北感が漂い始めた。

「ヒーリー……」

レイもまた心配そうな表情をヒーリーに向けた。世界の軍事情報に詳しいレイも絶望感は拭いきれなかった。圧倒的な技量を見せつけられたのだ。ワイバニアの中位軍団ならまだしも、上位軍団には歯が立たない。

レイはそう、目で語っていた。ヒーリーは軍団の空気を察すると、息を大きく吸い込み、ひと際大きな声で叫んだ。

「うるたえるな！！」

ヒーリーの叫びは軍団の中心から広がり、軍団は落ち着きを取り戻

した。

「彼が素直に退いたのは何故だと思っ！？俺たちを脅威と認識したからだ。彼の攻撃に対して、俺たちも負けてはいなかった。去り際に、彼は俺たちを『見事』と賞賛したんだ。俺たちはワイバニアの上位軍団だつて戦える。自信を持って！俺たちはフォレストル最強の軍団だつてな！！」

ヒーリーの言葉を兵士達は歓声と勝ちどきで返した。はじめは小さな声に過ぎなかったが、その声はやがて軍団中に広がり、大きな叫びに変わった。

先行していたフォレストル第一軍団長、フランシス・ピットは野戦指揮所になる専用の装甲馬車の中でそれを聞いた。

「坊め。ひとつでかくなりおったか……………これで、思い残すことはないな。トマス……………」

愛弟子の成長を素直に喜んだピットは椅子に深く腰掛け、目をつぶると伝令を呼んだ。

「ワイバニア軍の来襲はもうあるまいが、警戒態勢を維持しつつ、進軍せよ。後続の第三から第五軍団にも伝令。忘れるでないぞ」

フォレストルの老雄は伝令に伝えると目を閉じ、眠りの世界へおちていった。

第五章 決戦！ 第三十三話

星王暦2183年7月8日午前11時、ワイバニア帝国軍本隊は皇帝専用馬車にハイネからの使者が到着した。

「ご苦労。休むがよい」

報告にジギスムントは表情を変えずに言うと、速やかに使者をさげさせた。

「意外と早いわね。フォレスタル軍は」

右元帥のシモー又はジギスムントの肘掛けに座ると、ジギスムントから手渡された報告書に目を通した。

「俺たちは大軍だからな。遅くていかん」

少し不機嫌そうにジギスムントは言った。シモー又は彼の不機嫌の元を見透かしたように、酷薄な笑みを向けた。

「クライネヴァルトがフォレスタル軍を見つけたことがそんなに嫌だったかしら？」

「別にそうは思っていないさ。ただ、奴らに先手を打たれたことが気に食わないだけだ」

「あら、そう？とてもそうは見えなかったわ」

ジギスムントの一言に、シモー又は細長い眉をぴくりと動かした。

「口を慎みなさい、ジギスムント。誰があなたを皇帝にしてあげた
と知っているの?」

「お前こそ、誰が皇帝か忘れるな。お前を消すことなど、今の俺に
は容易いことだ」

しばらくの間、二人の間を沈黙が支配した。至尊の冠を戴いた若き
皇帝には、いつまでも同列と想っているシモーヌが邪魔になり始め
ていたし、シモーヌにとつても、御しやすいと思っていたジギスム
ントが増長し、邪魔になり始めていた。

いつの間にか二人の間に生じ始めた亀裂は時を経るごとに回復不可
能なものになっていた。二人の沈黙を破ったのは、マクシミリアン
からの使者ドルニエだった。

第五章 決戦！ 第三十四話

ドルニエはジギスムントに奏上書を手渡した。マクシミリアンからの書状を読み終えたジギスムントは、一瞬表情をゆがめると、再びもとの表情に戻った。

「マクシミリアンよりの書状、確かに余の耳に届いた。マクシミリアンに伝えるがよい。一兩日中に撤兵するとな。民のためだ。致し方あるまい」

「ありがとうございます」

ドルニエは表情を明るくさせると深く皇帝に一礼した。

「長旅、疲れたであろう。兵舎を用意させよう。ゆっくりと休むがよい」

ジギスムントは横に控えていた側近のフリードリヒを近くに寄せ、耳打ちすると、ドルニエを下がらせた。ほどなくして、フリードリヒがドルニエに追いつくと、隊列の外へと彼を導いた。

「どうしたのですか？列から離れているのですが」

その返答をドルニエは永遠に聞くことはなかった。フリードリヒは抜剣すると一刀のもとにドルニエの首をはねたのである。最期の瞬間、ドルニエは何が起こったのかわからなかった。全てが一瞬のうちに終わっていた。

「ドルニエ殿、陛下が兵を退くことにはございません。そして、早晚

のうちに、内務大臣もみまかられることになるでしょう。主の死に目にあつ前に亡くなるは、せめて陛下のご慈愛によるものとご理解ください。……もつとも、もうお聞きにはなれぬでしょうが……」

血の雨が降りしきる中、フリードリヒはもの言わぬドルニエの首に語りかけた。フリードリヒは返り血を浴びたマントを脱ぐと、遺体に投げかけた。

「せめてもの手向けです。私もいずれ、あなたのようになっているでしょうから……」

眉目秀麗な皇帝の側近は地面に転がったドルニエに言うと、愛騎の名を呼んだ。

「ロムルス！」

フリードリヒはロムルスに飛び乗ると、ベリリヒンゲン目指して急上昇させた。

第五章 決戦！ 第三十五話

「いいの？内務大臣を消してしまつて。後々、面倒なことになるんじゃないかしら？」

皇帝専用馬車の中、二人だけになった空間で、シモー又はジギスメントに尋ねた。

「かまわんさ。内務大臣など、替わりはいくらでもいる。むしろ、マクシミリアンが消えてくれた方が都合がいい」

「そう？」

「ああ、前からうるさい奴だつたからな。父上のお気に入りを良いことに、民のため、民のためと俺に意見しやがつて……」

「でも、兄が死んでしまつたら、あの子、私達を殺しにくるかもしれないわね」

「大した問題じゃない。マクシミリアンは殺されるのではない。不幸な事故で死ぬのだからな」

そう言うと、ジギスメントは低く笑つた。ジギスメントに分からぬよう、シモー又は彼をにらんだ。以前は自分の力では何も出来ず、シモー又は全てを依存していたものだが、最近になって、彼は明らかに変わり始めていた。思考と行動に自分と言うものを持ち始めたのである。それは、彼が暗愚な皇帝ではないことの証明であり、彼自身、自覚の無いままに王者への階段を上り始めていることの証でもあつた。

シモーヌにとってはそれが面白くなかった。操り人形であるはずの彼の増長は彼女の高い自尊心を傷つけたばかりか、彼女自身に畏れを抱かせていた。

皇帝となったジギスムントの権力は絶大である。アルマダ征服までは彼女を必要としていても、それ以後は……恐らくマクシミリアンの比ではないほどの凄惨な結末が待っているだろう。メルキド軍崩壊の謀をめぐらすと共に、ジギスムントの葬り方を考えねばなるまい。ワイバニア帝国に500年以上根を張り続けたアルマダ最高の悪女は思考を働かせていた。

第五章 決戦！ 第三十六話

フォレストル第五軍団野戦指揮所となる装甲馬車の中、第五軍団参謀長のメアリは作戦室の椅子に腰掛けていた。

「すまない、参謀長殿。急だったので、これくらいしか用意できなかった」

アンジェラは水の入ったコップをメアリに手渡した。

「ありがとう。アルレスハイム連隊長……」

メアリは苦笑しながらアンジェラからコップを受け取ると、水を一口含んだ。少し落ち着いたことを察したアンジェラはぼつりとつぶやいた。

「ヒーリー殿のこと、好きなのですね」

アンジェラの唐突な一言に、メアリは少し驚いたがすぐに元の調子に戻って言った。

「ええ……ポーラには悪いと思っているけれど……」

「おそらく、ヒーリー殿は……」

「知らないと思うし、分からないでしょうね。昔から、そういうの本当に気がつかない奴だったから」

アンジェラの言葉を遮ってメアリは言った。自分の気持ちに気づい

ていても、迷いがあるのだろう。メアリは手の平でコップを弄んでは、コップの水面に揺れる自分の顔を眺めていた。

「それで、参謀長はどうされるおつもりなのですか？」

「どうって……言えないわ。ヒーリーにはポーラの方がお似合いよ。わたしのようにかわいげのない女なんて魅力ないわ」

アンジェラは目を閉じた。数ヶ月前、ベリリヒンゲンで起きた出来事を彼女は思い出していた。彼女の腕の中で微笑みながら死んでいった人のことを。自分自身、彼をどう思っていたのだろうか。素直になっていれば、別の未来が拓けていたかもしれない。アンジェラは再び女性としての想いをよみがえらせた。アンジェラはメアリの隣に座ると、彼女の手を握って話しかけた。

「参謀長殿、いえ、メアリ。わたしにはひとつ後悔していることがあります。かつて、わたしに想いを寄せてくれた男がいました。しかし、わたしは彼の前で素直になることが出来なかった。その死の直前ですらも……今思えば、彼のことが好きだったのかもしれない。ですが、わたしにはもう彼に想いを伝えることは永遠に叶いません」

「アンジェラ……」

「メアリ、わたし達は軍人です。後悔をしてはならない。これから先、我々に何が待ち受けているかわからない。素直になるべきです。例え、結果がどうであろうとも」

メアリの目を真っすぐに見つめる青い瞳にメアリは顔を赤くした。メアリはほんの一瞬、アンジェラから目をそらすと、再び視線を戻

し、アンジェラに告げた。

「ありがとう。アンジェラ」

アンジェラは頷くと席を立った。ドアを開けたアンジェラの背中にメアリは語りかけた。

「わたしはときどき、あなたがうらやましくなる時があるわ。いつもまっすぐで、純粹で……」

「わたしはあなたがうらやましい。あなたは、わたしの持っている全てを持っている。……ヒーリー殿にはあなたのことは言いません。ご安心ください」

アンジェラはメアリの方を振り向かずにと、作戦室を出ていった。

第五章 決戦！ 第三十七話

「なあ、おい！ ヒーリー！ いつまでおれ達は空の散歩をしているんだ！？ いい加減下りようぜ！」

「仕方ない。レイ参謀。二人だけの話というものがあるのだ。察してやらなければ」

「そういうわけじゃありませんよ、スチュアート隊長。おれが言いたいのは。馬車なら、おれ達の連隊の馬車を使えばいい。何も軍団幹部が上空警戒しなければならぬこともないでしょう？」

「まあ、そうだが……わたしはこの方が性に合っている。何せ空はいいからな」

快活に笑うアレックスにレイは少し不満そうにむくれた。レイの翼竜騎乗技術はヒーリーと同程度ぐらいで、全く乗れないわけではなかったが、意味も無く空を回っていることは納得出来なかった。先頭を飛ぶヒーリーは心がここにはないようで、時々ヴェルをなでては、左右に旋回を繰り返していた。

「わたしにも経験がある。悩み事や頭で整理出来ないことがあった時は、空へあがる。そうすると不思議と頭が真っ白になって、解決策が思いつくことがあるのだ。軍団長も同じことを考えているんじゃないか？」

アレックスは前を飛ぶヒーリーを見ながらレイに言った。レイは「そんなもんですか」と苦笑いすると、下に目を落とした。レイの視線の先には、アンジェラが大きく手を振っているのが見えた。

「おおい！ ヒーリー！ 話は終わったみたいだぞ！」

「……わかった！ 下りるとしよう！ ヴェル」

ヒーリーはヴェルの頭をなでた。ヴェルは縦に首を大きく振ると、地上まで一気に降下した。

「おい！ 待て！ ヒーリー！」

急降下するヴェルを見た二人は、すぐに愛騎をひねると、地面まで降りていった。装甲馬車の上面は指揮官が戦況を見渡すことが出来るよう、屋根が平坦に作られている。ヒーリー達は馬車に速度を合わせると、屋根に飛び降りた。

「お手間をおかけしました。ヒーリー殿」

「こちらこそ、ありがとうございました。アンジェラ殿が助けてくださらなければ、どうしたらよかったものか……」

「いえ、女でしかわからぬこともあります。お気になさいますな」

「いずれ、彼女の方には伝えます。ありがとうございました」

ヒーリーは重ねてアンジェラに礼を言った。アンジェラの言いたいことも、メアリの言いたいことも理解しているのだろう。アンジェラはヒーリーを察すると、小さく頷いた。

「それでは、わたし達も連隊に戻ります。作戦の細部を詰めねばならない故。レイ、もどるぞ」

レイはアンジェラに敬礼すると、それぞれの愛騎に乗り、隊へ戻っていった。

「さて、おれたちも部屋に戻るか、スチュアート隊長。メアリが待っているからね」

ヒーリーは後ろに控えるアレックスに告げると、馬車のはしごを下りていった。星王暦二一八三年七月七日、ハイネとヒーリーの最初の戦いはこうして幕を閉じた。

第五章 決戦！ 第三十八話

星王曆二一八三年七月九日、フォレスタル王国王都シンベリンの王城の一隅。宮廷魔術師ラグニール・ド・ビフレストの研究室にヒールー付きの侍女、ポーラ・ワイズマンの姿があった。

ポーラは研究室の分厚い木の扉をノックすると、中の人物を呼んだ。

「メルー？ いるんでしょ？ 返事して！」

ノックからほどなくして、木の扉がゆっくりと開き、隙間から金色の髪をした少女が顔をのぞかせた。

「ポーラ……？」

メルはポーラを見上げた。ポーラから見たメルは明らかに憔悴しており、師匠の傷のシヨックが癒えていないことを示していた。

「そんな疲れきった顔をして。可愛い顔が台無しよ！ お茶しない？ お菓子も持って来たんだから」

「今、そんな気分じゃ……」

そう言つて、メルは研究室の扉を閉じようとしたが、ポーラは素早く足を間に挟み込み、扉を閉めないようにさせた。

「す・る・の！ ……ね。いいでしょ」

有無を言わせないポーラのテンションにメルは目をぱちくりさせる

と、苦笑して頷いた。

「あれ？ 前に来たときは、もっとごちゃごちゃしていたと思ったけど……」

ラボに入った途端、ポーラは違和感に気づいた。以前は足の踏み場の無いほどに散らかっていたラボがきれいに整理されていたのである。道具は作業机にきちんとおさまり、うず高く積みまわっていた資料は本棚に入っていた。

「こんなときでないと、きれいに整理出来ないから……」

ティーカップをテーブルに用意しながら、メルは力なく笑った。

第五章 決戦！ 第三十九話

「あ！ 待って。私がやるから。それに、ダメよ。子どもが遠慮がちに笑っちゃ。もつと無邪気に笑うものよ」

ポットに火をかけたポーラはメルに振り向くと、息がかかるくらい近くまで顔を寄せた。一九〇歳近く下の女の子に説教をされるとはメルは滑稽な事態に思わず笑ってしまった。

「うーん……まだ、笑顔が固いなあ。もつと笑って！ ほーら！」

メルは笑顔を見たポーラは腰に手にうなると、メルの頬をつかんで引っ張った。

「ひよ……ほーら、ひらい……」

よくのびるメルの頬を引っ張ったポーラはようやく、メルを解放すると、メルの頬に優しく触れた。

「メル。あなたが悲しい顔をしてちゃだめ。ラグニール様だって、そんな顔を見たくないと思うよ」

「……ポーラ」

メルはポーラの手に触れた。ポーラの手がわずかに震えているのが分かった。ポーラもヒーリーがない寂しさに耐えているのだ。メルは小さな手でポーラの白い手をぎゅっと握った。

「ほら。辛気くさい顔しないでお茶しよう！ もつすぐお湯も沸く

から！」

ポーラは、ぱつと明るい顔になると、メルに言った。小さな宮廷魔術師はポーラの明るさにあてられ、元気を取り戻していった。

ほぼ時を同じくして、フォレストル王城の謁見の間、国王ジェイムズ・エル・フォレストル、王子エリクシル、宰相マクベスらにヒーリーとハイネの激闘の様子が伝えられた。

「ワイバニアの第一軍団長と交戦したと言っるのは初めてだな」

玉座に腰掛けたジェイムズは唸った。三十年前、ワイバニア帝国軍と幾多の死闘を演じたジェイムズも第一軍団と戦った経験は無かった。それ故に今回の戦いはフォレストル首脳にとって、最も大きな関心事であったのだ。

「使者の話だけで、その強さが分かります。ヒーリーはよく戦いました。父上」

玉座の傍らに立つ王子のエリクが口添えした。不肖の息子の敢闘を父はぶっきらぼうに言った。

「あれにしてはよくやったな。だが、まだまだだ」

王子と宰相は父親の素直でない一言に顔をほころばせた。

「父上。ヒーリーは魔術銃を失いました。並の武器では龍騎兵は防ぎきれません。新たな武器をとどけようと思うのですが、いかがでしょう？」

マクベスは真剣な表情になると、父王に伺いをたてた。

「だが、宮廷魔術師は眠りにについている。あれをつくることはもう……」

「いいえ、あるのです。父上。宮廷魔術師ラグニール・ド・ビフレ
スト最新にして、最高の一丁が……」

第五章 決戦！ 第四十話

「ラグニール様、まだ目覚めないのね……」

ポーラはラボのベッドに横たわるラグを見た。眠りについた宮廷魔術師の顔色は白く、さながら大理石の彫像のような美しさを放っていた。このままずっと目覚めることはないのではないか。そのあまりに安らかな寝顔は、若い侍女にそう錯覚させるほどだった。

「急所は外れたけど、シモーヌにつけられた傷が深くって」

メルはぎゅっと拳を握りしめた。シモーヌが憎いのだろう。無理も無い。生まれてから二〇〇年もの間、ずっと二人きりで過ごしてきたのだ。半身を傷つけられたのと同じ痛みを感じているに違いない。ポーラはメルの表情と気持ちを察すると、頭を下げた。

「ごめん。嫌なこと、思い出させちゃったね」

「ううん。いいの……？」

メルが言いかけたその時、ラボにノックする音が響いた。

「メルかい？ マクベスだ。君たちに用事があつて来たんだ」

マクベスの声を聞いたメルはドアを開けた。マクベスの隣にはエリクの姿もあった。マクベスは奥にポーラの姿を見つけると、優しく微笑んだ。

「ポーラもいたんだね。ちょうどいい。大事な話があるんだ」

マクベスたちはメルに奥へ導かれると、今日の戦いの顛末を話した。

「それで、ヒーリーは無事なんですか？」

「大丈夫。彼は無事だよ」

聞き終えた早々、ポーラは椅子から立ち上がり、二人に詰め寄った。エリクはポーラの様子に驚きながらも、座るように促した。

「だが、魔術銃は破壊されてしまった。それでね、メル。あれをヒーリーに渡したいんだ。出してくれるかい？」

「……はい。マクベス様」

メルは静かに席を立つと、ラボの奥から大きめの黒い鞆を持ってやってきた。その黒い鞆の表には金で箔押しされた文字が記されていた。

「アス……ト、ライア？」

ポーラが金の文字を読んだ。メルは頷くと、鞆を開けて一同にその中身を見せた。大きさはカストルとポルツクスよりも一回りほど大きいだろうか。片手で扱えるぎりぎりの大きさだった。銃身はむき出していたが、長く、その下の面を固い鋼板で守られていた。そして、銃の各所には魔術文様が彫り込まれ、機能美と造形美を両立させていた。

第五章 決戦！ 第四十一話

メルはベッドに眠るラグをちらつと見た。頑丈に造られているとはいえ、魔術銃は飛び道具。格闘戦には不向きだった。まして、龍騎兵との戦いともなれば、陣形を飛び越えて指揮官を倒しにやってくる場合もありうる。ラグはこのことを予想して、格闘戦にも強い魔術銃を発明していたのだった。

「それと、これを……………」

メルはテーブルに小さな箱を置いた。

「新型の魔術弾丸です。数は少ないですが、役に立つと思います」

「ありがとう、メル。早速ヒーリーに届けさせてもらおうよ。それと、ポーラ。君もついて来て欲しい」

エリクはメルに礼を言うと、ポーラに視線を向けた。

「私も……………ですか？」

「ああ、ヒーリーも会いたがっているだろう。それに、カストルとポルックスを渡したのは君だとヒーリーから聞いている。げんをかっつぐというわけではないが、今回も君からアストライアを渡して欲しい」

「はい。エリク様」

エリクの頼みにポーラは頷いた。

「それでは、早く支度をしないとね。メルキドは遠い、それに戦いに間に合わなくなってしまう」

「明朝、出発しよう。ポーラ。俺がヒーリーの許に連れて行く」

「エリク様が!？」

「そのこともあって、兄上とここに来たんだよ。ポーラ。これを預ける人物は信頼の置ける人物でなければならぬ。そして、翼竜の扱いに長けている人物でなければならぬ。その両方の資格を満たしているのは、兄上だけだ」

マクベスはエリクを見た。エリクはマクベス、ヒーリー、二人の影とジェイムズに隠れてはいるが、知勇、そして翼竜の扱いにかけては二人よりも遥かに優れている人物だった。マクベスやヒーリーほど、突出した才能を持っている訳ではなかったが、政戦すべてに精通し、的確な判断を下せる有能な指導者であり、だからこそ、兄妹の信頼と尊敬を一身に浴びている人物だった。

「ですが、エリク様はお出ましになるなんて、危険すぎます!もしものことがあつたら……」

ポーラはテーブルから身を乗り出した。エリクが単身戦場へ乗り込むのは自殺行為に等しい。エリクの死もまた、フォレストルの終焉を意味するのだから。だが、エリクは弟の想い人の頭を優しくなでると、迷いもなく言った。

「俺は王太子である前に、ヒーリーの兄だ。こんなときでしか、俺はあいつの役に立ってやれない。俺なら大丈夫だ。ピット卿か、父

上。私を倒せるのは、この二人しかないのだからな」

エリクになでられたポーラは少し赤くなった。大きく、暖かい手。ヒীরリーの優しい手とは違った感触だった。この大きな手にヒীরリーは守られて来たのだろう。先ほどまで抱いていた不安感はいとも簡単にぬぐい去られた。

「さあ、ポーラ。明日は早い。今日はもういいから、旅支度を始めるんだ。いいね」

「はい……………」

ポーラはうなづくのと、三人に一礼し、ラボを出て行った。

第五章 決戦！ 第四十二話

「すまないね。メル。せつかくの友達とお茶を邪魔してしまった」

「いえ、マクベス殿下。それよりもヒーリー殿下とアストライアを頼みます」

メルは椅子から離れると、ヒーリーの兄二人に深く頭を下げた。マクベスとエリクは少女の思いに応えるべく、深くうなづいた。

翌、7月10日早朝、城の中庭には、エリクの家族、マクベス、メル、ジエイムズが集まっていた。

「お気をつけて。あなた。どうか、ご無事で……」

エリクの妻、アルカディアが愛する夫を抱きしめた。

「行ってくる。アルカディア」

「父上、お土産を買って来てね」

エリクの息子トマスが無邪気なお願いを言っつて父のすねにしがみついた。エリクは笑うと、息子を抱え上げ、自分の方に乗せた。

「ははは、父上はあそびにいくわけじゃないからな。お土産は無理だ。トマス、一週間で戻る。だからそれまで、母上を守ってやるんだ。できるな？」

「うん！」

「ようし、いい返事だ！」

エリクは肩に乗せた愛息の頭をくしゃとなでると、妻に息子を抱かせた。

「ポーラ、準備はいいか？」

「はい」

アストライアが収められた鞆を抱えたポーラは頷くと、エリクと共に翼竜に跨がった。

「アトラス！！」

エリクは愛騎に呼びかけると、アトラスは大きな翼を広げ、天へと飛翔した。

星王暦2183年7月10日、フォレストル王国王太子エリクシルと侍女ポーラはメルキド公国ミュセドーラス平野に向け旅立った。

第五章 決戦！ 第四十三話

同日午後、ワイバニア帝国帝都ベリリヒンゲン郊外、財務大臣ヘニング・エーベルトの別宅を極秘裏に訪れた内務大臣マクシミリアン・フォン・クライネヴァルトはベリリヒンゲン中心部にある行政府白虹宮をめざして馬車を走らせていた。

翌年の親征中止後の財政予算について、財務大臣と打ち合わせたマクシミリアンは草案を他の大臣に知らせる必要があったのだ。

「やはり、来年度は赤字になるのはやむを得ないな。新規領地からの税収はまず期待出来ない。どこから予算を捻出するか……」

草案を見たマクシミリアンはその内容を見て頭を抱えた。メルキドとの戦闘が予想以上の損害を出したことが、財政上あまりに痛かったのだ。総兵力にして一個軍団以上、実働兵力にして2個軍団をワイバニア軍は失っている。さらに戦争を継続し、兵を失うことは国家財政を圧迫することに他ならなかった。

「早く、陛下が撤兵してくだされば……ん？なんだ？これは？」

マクシミリアンは窓を見て、今、自分の置かれている状況に気づいた。

馬車は人一人いない田園の道を疾駆しているのだ。白虹宮に向かっているのなら、石畳と石造りの市街地へ出るはず。青々と広がる麦畑は、まったく逆方向を進んでいることを意味していた。

「どうしたんだ？逆方向へ向かっているようだが……」

マクシミリアンは御者に尋ねた。御者と思われた男は低いうめき声をあげると、横に倒れた。

「な!？」

「方角は合っていますよ。内務大臣閣下。あなたはもうベリリヒンゲンには帰れないのですから」

馬車の扉が開き、20歳ほどの若者がゆっくりと中に入って来た。

「何者……!」

若者は素早い動きでマクシミリアンの背後に回ると腕を首にまわした。

「フリードリヒ・フォン・ヘンデル。陛下の側近を務めているものです」

驚愕にマクシミリアンの目が限界まで見開かれた。マクシミリアンの命を手中にしたフリードリヒは落ち着いた口調で語り始めた。

「内務大臣閣下。陛下が兵を退くことは絶対にあり得ません。あなた方は覇者の階段を上りつつあるのです。覇者は戦いによって、自らの道を切り開くもの……そうでしょう?」

「それが……民に苦しみを強いることであってモか?」

「はい」

首を絞められたマクシミリアンに眉ひとつ動かすことなく、美しい側近は答えた。

「お話が過ぎました。内務大臣閣下。あなたはあまりに優秀で、あまりに優しすぎた。そして、あまりに愚かだったので。陛下の人となりを少しでもご理解出来ていたら、あと幾ばくか長生き出来たものを……それでは、さらばです。閣下」

いい終えると同時に不気味な音が車中に響いた。マクシミリアンの命を奪った若き側近は馬車から飛び降りると、何事もなかったかのように歩き去っていった。

「いずれ、地獄でお会いしましょう、閣下。……いや、私はきっとあなたと同じ場所に逝くことはないでしょう。私もいずれ、業に報いるときが訪れます故……」

御者を失った馬車は、バランスを崩すと、麦畑に落ちていった。

星王暦2183年7月10日、ワイバニア帝国内務大臣、マクシミリアン・フォン・クライネヴァルトは30歳の生涯を閉じた。

第五章 決戦！ 第四十四話

「ふむ。補給は順調のようだな」

7月10日夕刻、空の色がオレンジに変わりつつある頃、ワイバニア帝国左元帥ハンス・フォン・クライネヴァルトは部下からの報告書に目を通していた。

「はい。未だ補給線を断とうとする部隊は現れません。敵も余力のある別働隊がないと言ったところでしょう」

左元帥補佐官のアントン・メーリングは稟議の終えた書類をハンスから受け取りながら、上司に言った。

「そうだな。彼らの準備はどうなっている？」

「雁部隊は現在、ミュセドーラス平野を迂回し、脇街道の北方に展開しています」

「敵が脇街道を使っていると分かった以上、ここが補給路になるだろう。そろそろ彼らを出すのも頃合いと言っものだ」

「はい。閣下の命があれば、フォレストアル軍の後方をいつでも脅かすことが出来ます。……しかし」

そう言うと、メーリングはハンスから目をそらした。

「私は彼らを信用出来ません。流れに利がなければ、平気で裏切るのが傭兵と言うものです。彼らを作戦に折り込むのは……」

「だからこそ、高い金を支払っているのだ。金を見合った働きをするのが傭兵だ。それに彼らの強さは上位軍団に優るとも劣らぬ。後方攪乱でまず遅れはとるまい。ただちに作戦の実行にうつれと知らせよ」

ハンスはメーリングに命じた。特務部隊「雁」。ワイバニア軍が有する傭兵部隊である。その数は約3,000名程であるが、それぞれが高度に訓練された兵士であり、右元帥直属の「影」と対をなす特務部隊であった。

メーリングはハンスに敬礼すると、左元帥執務室を出て行った。メーリングと入れ違いに左元帥府の伝令が執務室の扉をたたき叩いた。

「何事だ？騒々しい」

ハンスは伝令を執務室に入れたが、その気配にただならぬものを感じた。

「どうした？」

「内務大臣マクシミリアン・フォン・クライネヴァルト閣下が本日も午後、ご逝去されました……………」

伝令は顔面蒼白になりながらもハンスに悲痛な事実を告げた。

「それは……………事実、なのか？」

沈着なハンスも思わず席から立ちあがった。星王暦2183年7月

10日、クライネヴァルト家に暗雲が立ちこめ始めていた。

第五章 決戦！ 第四十五話

「なんとということだ。マクシミリアン……何故、死んだ？」

ハンスは伝令に尋ねた。

「事故にございます。閣下。ベリリヒンゲン郊外の農道で馬車が横転し、それに巻き込まれたとのことですよ」

「事故なものか。帝国の首脳ともあるう者が供も連れずにこのこ畑などに出向く訳がない。マクシミリアン……愚かなことだ……」

英明なハンスはそれだけの情報でおおよその事情は推察出来た。独断で皇帝に親書を出し、逆鱗に触れたのだろう。おそらく皇帝はそれだけにとどまるまい。反戦派を一気に肅清するつもりなのだろう。表立っては動けないが、息子の不始末のせいで、人が死ぬのは彼にとっては我慢ならないことだった。

「左元帥書記室のシラー室長を呼べ。大急ぎだ」

ハンスはすぐに伝令に命じた。命令から15分後、白髪頭の大男がのっそりと姿を現した。クリストフ・ザムエル・フォン・シラー。ハンスの親友にして第三軍団長、マンフレート・フリッツ・フォン・シラーの父であった。

「よう！どうした？ハンス。うちのドラ息子が何かしでかしたか？」

「残念ながら私の愚息がな。……さつき、マクシミリアン

が死んだとの報告が入った」

快活に笑っていたクリストフはすぐに笑うのをやめると、ハンスに頭を下げた。

「すまなかつたな。あのマクシミリアンがな……惜しい男をなくした」

「私にしてみれば、まだ世間知らずの愚か者だ。……ここから先は、息子を亡くした親の独り言だ」

ハンスはクリストフに背を向けた。独り言。それは確たる証拠はなく、表立って自分自身が動けず、立場上公式に発言することが出来ない内容のものであると察することが出来た。クリストフは親友の背中をじっと見つめていた。

「マクシミリアンは反戦派だった。私に陛下へ口添えするように頼みに来た。私が拒んだからだろう。おそらく独断で陛下に奏上し、消された」

クリストフはわずかにハンスの肩が震えているのがわかった。

「陛下は軍によって、力によって世界を征服するとお考えだからな。あれのような軟弱な考えは邪魔だったのだろう。だが、あれに賛同した者までは死なす訳にはいくまい。早晚陛下の手の者が始末に行くことだろう。その前に……」

「地下に潜らせろってわけか」

クリストフは一息吐いた。

「こんなことを頼めるのはお前しかいない。やってくれるか？」

「ああ、あと大事なことを忘れているだろうか？」

「何だ？」

「嫁さんだよ。お前の息子。結婚していたらどう？早くしないと、彼女も消されるぞ」

クリストフの言葉にハンスは表情を変えた。

「すぐに行動に移る。お前は待っている！」

クリストフはドアを破らんばかりの勢いで押し開けると、自分の職場まで戻っていった。

「馬鹿が……親より先に死んで……愛する者にまで危険にあわすとは……本当に馬鹿者が……」

ハンスは誰もいなくなった事務室で大粒の涙をこぼした。内務大臣の死が発表されるのは、さらに2日後のことになる。

第五章 決戦！ 第四十六話

翼将宮地下一階、ここにクリストフの城である左元帥書記室がある。主な業務は帝国軍に関連する文書の筆記と管理であるが、その性質上、機密書類を扱うことから通常の事務職とは一線を画した特務機関となっていた。

「お帰りなさい。室長。どうしたんですか？ 血相を変えて」

配属されたばかりの職員であるアウグスト・フィッシャーがクリストフに尋ねた。

「のんきに構えてんじゃねえ！ アウグスト。仕事だよ。それも、とってもスリリングな奴だ」

クリストフは新米に怒鳴りつけると、うずたかく資料が積まれたデスクに腰を下ろし、書記室の面々を集めた。

「ちまちま説明してる暇はねえ。かいつまんで説明するぞ」

クリストフは彼を中心に集まった職員たちにハンスから聞かされたことを話した。

「急ぎましょう！ 早くしないと、殺されちゃいますよ！」

アウグストは顔を真っ赤にさせると、クリストフに顔を近づけた。

「アホ！ 声がでかい！ だが、お前の言う通りだ。マリア・フォーン・クライネヴァルトの保護を最優先とする。加えて、他の閣僚の

保護も行なう！ 急げ！」

机に肘を立てたクリストフは部下たちに言った。クリストフの優秀な部下たちは、クリストフの命令一下、書記室を出て行った。

「ば、僕も！」

先輩たちに負けじとアウグストは飛び出したが、襟首をクリストフにつかまれた。

「アホウ！ この新米が！ お前は俺とくるんだよ。おい、クララ！」

クリストフは他の職員と出て行こうとする女性を呼び止めた。

「はい。室長」

「お前も俺と来い。こいつだけじゃ、危なっかしくてしょうがない。黒髪を後ろでまとめた才媛にクリストフは言うと、二人を従えて部屋を出た。目指すはベリリヒンゲン中心部、マクシミリアンの私邸。間に合ってくれ。クリストフは柄にもなく神に祈っていた。

ベリリヒンゲンはアルマダの中でももっとも精密に計画された都市のひとつである。皇帝居宮である水晶宮を中心に、軍中枢である翼将宮、行政府である白虹宮、最高司法機関である審聖宮が配され、その重要度に応じて放射線状に住宅地、銀行、商店街が広がっていた。例え敵勢力が攻撃をしかけてもそう簡単に占拠されないことを考慮してのことだった。

内務大臣として、国の重責にあつたマクシミリアンの私邸は翼将宮、白虹宮などの最重要地区のすぐ外縁にあつた。郊外にあるハイネの私邸ほど大きくはないが、夫婦と住み込みの数人の侍女が暮らすには十分な大きさだつた。

星王曆二一八三年七月一〇日、午後五時一五分、招かれざる客が到着したのはそのときだつた。

第五章 決戦！ 第四十七話

「はい？」

マクシミリアン私邸で最初の犠牲者になったのは若い侍女だった。

「私、白虹宮から参りました。ヴィルヘルム・フォン・ヘッセと申します。クライネヴァルト夫人に至急お取り次ぎを……」

「はい、少々お待ちくださいませ」

来訪者を家に迎え入れた彼女は、広間の階段を上がるとマリアを呼びに向かった。用済みだと考えたのだろう。来訪者は侍女に向けて投擲用のナイフを放った。

「がっ……」

短く呼気の音と、血しぶきが吹き出す音が静謐な館内にこだました。しかし、それ以上に響いたのは侍女の悲鳴だった。

「きゃああああ！！」

一階にいたもう一人の侍女を刺し殺した来訪者は、ゆっくりと二階まで歩を進めようとした。

「何ですか？ いったい？ ……ひっ！」

異変を察した二階の侍女が惨劇のあとを目撃したのだった。

「お、奥様！ お逃げください！ 早く！」

来訪者はさらに侍女の口を塞ごうとナイフを投げたが、幸運なことに侍女に当たることはなかった。まだ、二階に上り終えていなかった賊は侍女にわずかばかりの時間を与えることになった。侍女はマリアの部屋をノックすると、声を限りに叫んだ。

「奥様！ お逃げください！ 賊が、賊が、ああああ……」

声の様子から、マリアが事態が尋常ならざるものだとすぐにわかった。

「分かったわ。あなたも、早く」

「いいえ、奥様。鍵をおかけください。少し時間を稼ぎます。賊がすぐ、そこに……」

侍女の声は死への恐怖で震えていた。動くことも出来ないのだろう。マリアは目を固く閉じると、ドアの鍵を閉めた。その数秒後、ドアの外側で侍女の断末魔の声が聞こえた。

第五章 決戦！ 第四十八話

「あ、あ………」

マリアは恐怖で蒼白になった。彼女に出来たのはゆっくりと、後ろに下がることだけだった。扉の向こうでは来訪者が邪魔な侍女の死体をのける音が聞こえていた。なぜ、自分が命を狙われるのかわからない。彼女はゆっくり後ずさりしながら、窓へとにじり寄った。不意に乱暴に扉をたく音がし始めた。鍵がかかったことを知った暗殺者が扉を破壊しようというのだ。音は徐々に大きさを増し、彼女の心を恐怖で締め付けた。音が鳴り始めて数分後、彼女を守り続けた扉はついにその役目を終えた。扉は無惨に倒され、その背後から返り血にまみれた外套を羽織った暗殺者が姿を現した。

「内務大臣夫人、マリア・フォン・クライネヴァルト様とお見受けします」

冷酷な表情を浮かべた暗殺者は恭しくマリアに一礼した。

「あ、あなたは………」

「フリードリヒ・フォン・ヘンデル。あなたのご主人のお命を頂戴した者です」

マリアは口を塞いだ。朝まで暖かな笑顔を浮かべていた夫が、もはやこの世の者ではなくなっているとは。恐怖と悲しみでマリアは大量の涙をこぼしていた。

マクシミリアンの私邸に向けて、猛スピードで疾駆する馬車があっ

た。クリストフ、アウグスト、クララが乗った高速馬車である。

「おい、アウグスト！ もっとスピード出せ！」

「馬に言うてくださいよ！！ これで全開ですよ！」

上司に頭をわしづかみにされたアウグストは理不尽なクリストフに抗議した。

「室長、そこの角を左です」

「よおし、新米！ 一気に曲がれ！！」

「のおおお！」

三人を乗せた馬車はスピードを殺すことなく、一気に角を曲がっていった。

第五章 決戦！ 第四十九話

「あなた……」

夫の死をフリードリヒから知らされた Марияは、その場で泣き崩れた。

「ご心配なく。すぐにご主人の許へ送って差し上げます」

フリードリヒは Марияの許に歩み寄ると、血に濡れたナイフを構えた。

「！」

フリードリヒに遅れること一〇分あまり、三人を乗せた高速馬車はようやくマクシミリアンの私邸にたどり着いた。

「ん？ おい、まずいぞ、こりゃ。様子が変だ。アウグスト、門につける！」

「はい！」

アウグストはクリストフに命じられた通り、馬車を止めた。

「……ふっ」

ナイフを弾かれたフリードリヒは冷酷な笑みを浮かべて Марияを見下ろした。

「この外道……」

そう言つて、気丈に自分自身に睨みつける標的に戸惑ったのか、愉しみを覚えたのか、フリードリヒは笑いをこらえられなくなった。

「くっくっく。あはははは！……！」

「……」

「楽しませてくれますね。あなたは。ひと思いに死なせてあげようと思いましたが、気が変わりました」

フリードリヒは端正な顔を歪めていった。その表情はマリアを立ち上がらせるには十分だった。マリアは暗殺者から距離をとった。だが、マリアのいじらしいまでの抵抗はフリードリヒにとってはささいな抵抗に過ぎなかった。フリードリヒはマリアに近づくと、隠し持っていたナイフで斬りつけた。

「……っ」

フリードリヒは鮮血したたるナイフの刃を舐めると、深手にならないう程度に何度も斬りつけた。痛みを耐えながら、マリアは暗殺者から逃げ続けたが、バルコニーに追いつめられた。

「それでは、さらばです。クライネヴァルト夫人……」

第五章 決戦！ 第五十話

フリードリヒはマリアに向けてナイフを投げた。彼の思い通りに事が進めば、ナイフはマリアの心臓をつらぬいたであろう。しかし、実際はそうはならなかった。小さな矢がナイフを弾き飛ばしたのである。

「やりましたね！ 先輩！」

「バカ！ すぐによけなさい！」

身を乗り出したアウグストを、クララは叱り飛ばした。間髪入れずに、アウグストとクララに、暗殺者のナイフが飛んで来た。

「ちっ！」

木を壁にナイフを防いだクララは、暗殺者に向けて矢を連射した。携帯用連射弓、バネの力によって六連装の弾倉から発射する、殺傷力は低いが連射力に優れた武器だった。

「あっ！」

アウグストはバルコニーから落ちるマリアを見た。救援が来たことで緊張の糸が切れたのか、迫り来るナイフを見て自分の死を悟ったのかは彼には分かるべくもなかったが、マリアは崩れるように地面へと落下していった。

「くそっ！」

アウグストは危険を省みずに飛び出した。

「馬鹿やろっつ！ 戻れ、新入り！ 殺されるぞ！」

クリストフの制止も聞かず、アウグストは真つすぐマリアに向かって行った。

「あの、バカ……」

クララは向こう見ずな後輩に毒づきながら矢を連射した。少しでも牽制したかったが、装弾数が全部で6発しかない連射弓はすぐに矢が尽きてしまった。

「矢切れ！？ しまった！ アウグスト！」

クララはマリアのもとにかけよったアウグストを見た。いつ暗殺者が彼に攻撃をするか分からないのだ。だが、幸運の女神は彼に微笑んだ。バルコニーから暗殺者が消えたのだ。救援が来た以上、暗殺は失敗に終わってしまったている。あとはどうやって逃げおおせるかが暗殺者にとって最重要の課題だった。ほどなくして、一階の裏側の窓が割れる音がした。

「逃がすか！ この野郎！」

クリストフが威勢良く向かったが、時既に遅く、クリストフが来たときには血染めのマントがただ残されているだけだった。

第五章 決戦！ 第五十一話

「だーっ！ くそっ！」

クリストフは地面を蹴り上げた。暗殺者が去った中庭では、アウグストが応急処置を行っていた。マリアは意識を失っており、断続的に息をしては、時折血を吐き出していた。

「まずいな。骨折もひどい……一刻も早く病院に運ばないと……」

「おい、大丈夫か？ 夫人の状態は？」

クリストフはアウグストに尋ねたが、新人は上司の問いに答えることなく診断と処置に没頭していた。クリストフは隣に立っていたクララに目を向けたが、クララは黙って首を振った。彼の耳には何も入っていないのだろう。クリストフはかっとなって、アウグストの肩をつかんだ。

「おい！」

「静かにしてください！ 診断の邪魔です！」

「大丈夫なのか？ 夫人は？」

いつにないアウグストの剣幕におされながら、クリストフは尋ねた。

「正直よくはありません。脚と腕に骨折があります。それに、吐血が見られたことから、落下の衝撃で内臓を傷めたと思います。それ

に、頭だつて打っているかも。すぐに病院へ運ぶ必要があります」

「病院つて言つたつて……それは、マズいだろう。いつまた襲われるとも限らないんだ」

クリストフの言葉に、アウグストは少し考えると、上司に答えた。

「僕に、心当たりがあります。そっちに運びましょう。室長は木の棒とシート、クッションを使って、簡単な担架を作ってください。クララ先輩。先輩は馬車をこちらに寄せてください。状態は一刻を争います。急いで！」

「お、おう！」

「わかつたわ」

普段とはまったく違うクリストフの態度に戸惑いながらも、クリストフとクララはそれぞれの仕事に駆け出していった。

星王暦2183年7月10日、ワイバニア帝国本土でも嵐が吹き荒れていた。

第五章 決戦！ 第五十二話

星王暦2183年7月11日、ヒーリー率いるフォレストル軍は当初の予定から1日ほど遅れながらも決戦地であるミュセドールス平野に到着した。かねてからの打ち合わせ通りにフォレストル軍はミュセドールス平野の東半分、鶴翼の右翼に陣取ると、ヒーリーら各軍団長はメルキド軍最高司令官タワリツシがいる本陣を訪れた。メルキド軍の本陣は幾百の重装歩兵と巨兵によって守られ、巨兵国家メルキドの威容をヒーリーたちに見せつけていた。

「さすが武門の国家、ここに極まれりという感じだな」

フォレストル軍第三軍団長のウィリアム・バーンズが黒光りする鎧の群れを見回した。

「みつともないですね。バーンズ卿。私達はフォレストルを代表してここに馳せ参じているのです。国の威信を下げる行いはせぬように願いますわ」

「はいはい」

第四軍団長のマーガレットにたしなめられたウィリアムは口を尖らせた。マーガレットはヒーリーやレイ、ウィリアムには特に厳しい。表立って喧嘩はしないものの、ウィリアムとの仲は最悪だった。

「ははは………」

妹のつんけんした態度に苦笑するヒーリーだったが、背後のお目付役の気配に背筋を凍らせた。

「あなたもよ。ヒーリー。もう少し背筋をのばしなさい。総司令官なんだから」

第五軍団参謀長のメアリ・ピットは鋭角三角形の形をした眼鏡を上げて言った。

「なあ、おいヒーリー。いいのか？ 出席は軍団長クラスだけだろっ？」

「ああ、メアリはいいんだ。増援軍総参謀長だからな。全軍の配置と作戦の詳細を知る権利があるのさ。それに……」

「それに、何だ？」

「いや、いいんだ。何でもない」

ウィリアムの問いに茶を濁したヒーリーは、そのまま歩き続けた。本陣の中心、総合指揮所になる総帥専用馬車の扉の前で、ヒーリーらは立ち止まった。

「フォレスタル王国軍総司令官、ヒーリー・エル・フォレスタル以下、軍団長格5名、軍議のためにまかりこしました」

ヒーリーは扉の前で大きく息を吸い込むと、声を張り上げた。

「入れ」

低い音が、よく通る声がドアから響くと5人を圧していた扉がゆつくりと開いた。作戦室の中は広く、大きな机の上にはミュセドーラス

平野の地図が広げられ、メルキド軍の軍団長たちが自軍の打ち合わせ行なっていた。ヒーリーはその中心、長い髪を背中まで下ろし、マントを羽織った男に視線を向けた。男はヒーリーに気づいたのか、背筋を伸ばすと不敵に微笑んだ。

「久しぶりだな。ヒーリー。さっきの声、多少はらしくなったと言
うところか？」

「ごぶさたしています。タワリツシ大將軍」

ヒーリーはメルキド軍最高の将に頭を下げた。タワリツシ、メルキド軍総司令官であり、ヒーリー以上にワイバニア軍が警戒している武人だった。40代後半であるというのに、30代とほぼ変わらぬ姿に初めて会うウィリアムとメアリはいぶかしげな表情を浮かべたが、タワリツシはまるでその反応を楽しむかのように笑うと、一同に着席を促した。

第五章 決戦！ 第五十三話

「スプリッツァー総帥は？」

ヒーリーは作戦室を見回した。総大将であるはずのスプリッツァーがいないのだ。ワイバニア帝国は皇帝自ら出馬している。メルキドも総帥が前線に立たねば、全軍の士気に関わる。勝敗を分ける重要な要素だけに、ヒーリーはタワリツシに尋ねなければならなかった。

「総帥が前線に立つなど危険きわまりないことだ。安全な後方にて督戦されるが最良なので、下がっていたのだ。……とでも、俺が言うと思ったか？ ヒーリー、総帥もこのことは十分に分かっておられる。だからこそ、今、前線に立っていらっしゃる」

「前線に？」

「ああ、今全軍を視察中だ。もうすぐお戻りになるはずだ」

タワリツシの言葉も終わらないうちに、作戦室の扉が開いた。最高指揮官のタワリツシを置いて、ノックもせずに入ることが出来る人物は一人しかいない。メルキド公国総帥、スプリッツァーだった。金の髪に浅黒い肌、端正な顔立ち。王者たる風格をたたえた青年は、ヒーリーの姿を見ると、さわやかに言った。

「久しぶりだな。ヒーリー。君たちが来てくれるとなると百人力だ。国を代表して歓迎しよう」

「ありがとうございます。総帥」

ヒーリーとスプリッツァーは軽く握手すると、話もそこそこに、軍議の席についた。総帥であるスプリッツァーが上座に立ち、その両脇をメルキドとフォレストアルの将帥がかためる形で軍議が始まった。

「このミュセドーラス平野にて、ワイバニア帝国軍を撃滅する！」

作戦の提案者であり、全軍の総指揮官となるタワリツシが高らかに言った。

「ワイバニア軍は現在ロークラインより街道を通って進軍中だ。総数は10万5千、約10個軍団の兵力である。物見からの報告を総合すると、ミュセドーラス平野到着は7月16日と予測される」

タワリツシは続けた。ワイバニア軍が到着するまでに、あと5日。作戦準備が整いつつある今、さらに時間が出るといふのはありがたいことだった。脇街道を進んで来てよかった。ヒーリーはタワリツシの話聴きながら、人知れず胸を撫で下ろした。

タワリツシ、いやヒーリーの立てた作戦は、ミュセドーラス平野にワイバニア軍をおびき寄せ、鶴翼陣形でワイバニア軍を包囲殲滅するものだった。だが、タワリツシもヒーリーもそれだけでワイバニアの精兵を撃滅出来るとは思っていなかった。

そこでヒーリー、タワリツシは残酷な作戦を考案した。味方の一個軍団を囷に敵軍をおびき寄せ、乱戦状態を作り出し、そこにかねてからせき止めておいたミュセドーラス平野に流入した全ての川の堰を切り、濁流で味方もるとも10万以上の兵士を押し流すというのである。

これは盆地に似たミュセドーラス平野の特殊な地形でしか出来ない作戦であり、タワリツシとスプリッツァーもそのことを考慮して、ワイバニアのメルキド侵攻時から準備を重ねていた。はからずも、ヒーリーとまったく同じ作戦を、メルキド軍は考えていたのだった。だが、味方軍団を囿にすることは、タワリツシ、スプリッツァー、ヒーリー、フランススだけが知っていた。この作戦によって、一個軍団が確実に全滅するということが何を意味するかを理解していたのである。

第五章 決戦！ 第五十四話

ここで、タワリツシは味方軍団を囿にするというアイデアを初めて打ち明けた。作戦室にいた諸将はざわついた。メアリも驚きを隠せず、ヒーリーを見た。ヒーリーは全てを知っていたかのように冷静にタワリツシの方を見つめていた。

「……………それで、誰を囿にするおつもりですか？」

メルキド軍第六軍団長のラシアン・フェイルードがタワリツシに尋ねた。彼は一同の疑問を真っ先に尋ねたのである。でなければ、会議は紛糾し、諸将は一心にならないだろう。冷静なラシアンならではの判断だった。

ヒーリーはフランススの顔を見た。ヒーリーと目が合ったフランススは目を閉じると満足そうに頷いた。

「我が軍の第一軍団が、その任を果たしましょう」

ヒーリーはタワリツシとスプリッツァーに告げた。

「おい、ヒーリー！ お前、何を言っているのかわかってるのか！？」

フォレストル軍第三軍団長のウィリアム・バーンズが激昂して席を立った。

「私も同感だな。貴軍らは援軍。これはメルキド軍とワイバニア軍の戦いだ。友邦を率先して犠牲にしたとあっては武門の名が廃ると

「いつものだ」

メルキド軍第二軍団長ヴィア・ヴェネトがヒーリーを睨みつけた。今のメルキド軍は彼の親友とその軍団を犠牲にした上に立っている。フォレスタル軍の自己犠牲は彼のプライドに傷をつけた。

「ヴェネト軍団長……失礼な物言いを承知を話をさせていただきます。現在のメルキド軍の中で、ワイバニア軍を引きつけるだけの価値のある人物はタワリツシ大將軍のみ。そして、我が軍にもそれだけの人材はピット軍団長しかいない。タワリツシ大將軍が全軍の指揮のためここを動けないとなると、直率できる兵力を持ち、ワイバニア軍を長期にわたってひきつけることができるのは、ピット軍団長だけです」

ヒーリーは退かずに話した。テーブルの机の下で彼は拳を握りしめていた。彼の味方はフランシスとタワリツシしかいなかった。メルキドの誇りに傷をつけ、味方に、それも自分の師に「死ぬ」と言うのである。会議室に重苦しい雰囲気が始めた。ヒーリーはメアリの方をちらりと見た。メアリは茫然自失していた。自分の好きな人が実の祖父を死に追いやる言葉を口にしたのだ。軍人としてヒーリーの考えは理解出来た。理と情の間で、メアリは揺れに揺れていた。

「ヒーリー殿下の言う通りだ。殿下、かたじけなく思います。フォレスタル軍からの申し出、ありがたくお受けする」

「大將軍！」

タワリツシは彼に反対しようとした第五軍団長のローサ・ロツサを手で制した。

「ローサ・ロツサ。ヒーリー殿下の指摘の通りなのだ。この作戦、我々だけではワイバニア軍をおびき寄せすることは出来ない。我々の中でそれが出来たのは、ヴィヴァ・レオだけだった。彼を失った今、同じことが出来るのはピット卿だけなのだ」

メルキド軍もフォレストル軍も認めざるを得なかった。それほどフランスとヴィヴァ・レオの才が傑出していたということ。タワリツシは一時小休止を提案すると、軍議を一時中断させた。

第五章 決戦！ 第五十五話

ウィリアムはヒーリーを無理矢理馬車の外に連れ出すと、渾身の力を込めてヒーリーを殴り飛ばした。

「お前……何を言ったかわかってるのか？ てめえの師匠に『死ぬ』っていったんだぞ」

「ああ。わかってるよ」

ゆらりと起き上がるヒーリーの襟をつかむと、ウィリアムは馬車の壁にヒーリーを叩き付けた。

「ふざけるなよ。ヒーリー。俺はあんな作戦、絶対認めねえぞ！」

「よさんか！」

フランシスはなおもヒーリーに殴り掛かるうとするウィリアムを怒鳴りつけた。

「冷静になれ、ウィリアム。だからお前は半人前なんじゃ」

「けどよ、師匠！」

「わしのことはいい。既に覚悟は出来ておる。それに、この作戦はもともとわしとタワリッシが立てたもの。わしが囿になるのは最初から決まっていたことじゃ。それとも、お前はわしの作戦にケチを付ける気か？」

師の言葉にウィリアムは何も言えなかった。

「ピット卿、この作戦以上のものがあるかもしれませんが。皆で知恵を絞れば……」

マーガレットはフランスに言ったが、フランスはかぶりをふつた。

「マギー、この作戦以上のものはないんじゃない。坊が考えた作戦案もこの作戦とまったく同じものじゃった。だからこそ、わしを囿に推したんじゃない。フォレストルで最高の戦術家二人がまったく同じ結論に達しておる。これが何を意味するかわかるじゃろう？ メアリ、総参謀長はお前じゃ。代案はあるかの……」

フランスは孫娘に尋ねた。3人と離れた場所にいたメアリは顔を伏せたまま声を震わせた。

「いいえ、ありません……この作戦以上のものは」

ウィリアムは木の幹を殴りつけた。マーガレットも拳を握りしめ、立ち尽くしていた。4人は思い思いの姿で、運命を受け入れようとしていた。

「くそう、出来るかよ……こんなこと、納得出来るか！」

「坊を責めるな。あいつはずっとこのことで苦しんでいる。お前たちの何倍もな」

ヒーリーは誰とも目を合わせられなかった。自分の師を、友の肉親を失わせる命令を出すことに、ヒーリーはずっと苦しみ抜いて来た

のだ。それは、フランススがいくら言葉を重ねようともぬぐいされはしない。恐らく彼はこの十字架をずっと背負い続けていくことだろう。

「さあ、作戦室に戻れ。…………坊、強くなったな。これでわしは思う存分戦える」

フランススは力なくたたずむヒーリーを立たせ、肩を叩いた。フランススは軍団長二人を引き連れて作戦室に戻っていった。

第五章 決戦！ 第五十六話

馬車の外に残されたヒーリーは相棒に語りかけた。

「メアリ……………」

「どうして言うてくれなかったの……………」

「ごめん」

「私は軍人よ！ 作戦だつて理解出来る！ これ以上の作戦がないことも、お祖父様を囮に使わなければならぬことだつて……………」

ヒーリーは何も言えなかった。彼女を思い告げられなかったことが、かえつて彼女を苦しめることになるとは。だが、それはヒーリーの自分可愛さのためのごまかしではなかったか。ヒーリーはメア리에頭を下げることに出来なかった。

「ごめん……………メアリ」

ヒーリーはメア리를背に作戦室の扉に向かった。

「ヒーリー！」

メアリはヒーリーに追いつくと、彼の背中を抱いて泣き崩れた。10年来見せたことのない親友の涙。ヒーリーは振り向くことなくただただ、メア리에背中を差し出していた。

小休止ののち、タワリツシ主導で軍議が再開された。作戦の骨子は既に伝えられていたので、あとは各軍団の配置が決定された。鶴翼陣形中心部は守勢に優れたメルキド軍第二軍団と第五軍団、左翼には第四、第六軍団、右翼にはフォレストアル軍第三、第四軍団が配置された。ヒーリー率いるフォレストアル軍第五軍団は、本陣直衛と予備兵力として、後方に配置され、囷となるフランシス率いる第一軍団は先陣としてミュセドーラス平野入り口に配備された。

さながら翼を広げた翼竜の陣。これが決戦における連合軍の陣容であった。

「フォレストアル軍総司令官として、一軍団長として自分の軍団の指揮は自分に全て委ねて欲しい」

ヒーリーはタワリツシに提案した。タワリツシがフォレストアル軍を捨て駒にする人物ではないと信じていたが、作戦に関して独自の裁量権を得ることで、フォレストアル軍の安全と王国の体面を守ろうと考えたのだ。タワリツシはヒーリーの政治的配慮を見抜いた上で、これを承認した。ワイバニア撃滅という確固たる戦略目的がある以上、ヒーリーはメルキド軍の不利になるようには動かないと判断したのである。

星王暦2183年7月11日、最初の軍議は多少の衝突はあったものの、滞りなく進んでいた。

第五章 決戦！ 第五十七話

星王曆二一八三年七月十二日、帝都ベリリヒンゲン中心部、内務大臣マクシミリアンの私邸から馬車で一〇分ほど走ったところにあるとある邸宅で、内務大臣夫人マリア・フォン・クライネヴァルトは目を覚ました。

「ここは……」

マリアは周囲を見回した。白い壁に簡素なベッド、そして消毒液の香り。彼女の身の回りのもの全てが気を失うまで親しんでいたものと異なっていた。

「お気づきになりましたか？」

傍らで本を読んでいた女がマリアに尋ねた。マリアが小さく頷くと女は優しく微笑んだ。

「今、人を呼んで参ります。そのまま気を楽になさっていてください」

女はマリアに一礼すると、部屋を出て行った。マリアは理解出来なかった。自分は殺されたはず。夫を殺した暗殺者に。……けれど、今、自分はベッドに寝かされている。誰かが助けに来てくれたのだろうか。しかし誰が？ 考えても答えは出なかったが、すぐに答えになる人物がやって来た。白髪の大男が姿を現したのである。

「シラー様……？」

「ああ、俺だ。ハンスに頼まれてな。マリアさん、生きていてよかった」

クリストフは神妙な面持ちで言った。シラーの背後にはマリアの枕元にいた女性と、若い男が二人立っていた。

「二人は俺の部下でな。クララ・フォン・マイネッケとアウグスト・フィッシャーだ」

クリストフから紹介されたクララとアウグストはマリアに軽くお辞儀した。

「そちらの白衣の方は？」

マリアは三人の隣にいた白衣の男を尋ねた。軍服姿の三人とは明らかに異なる白衣の男の方が、この場にはあまりにも似つかわしかったのである。

「ハルトムート・フィッシャーと申します。内務大臣夫人。あなたの処置を担当させていただきました」

「そうですか……。ここは病院なのですね」

マリアはそういうと天井の方を向いた。事態をようやく把握したのだろう。声に落ち着きの色が戻り始めていた。ハルトムートは自嘲めいた笑いをすると、マリアの問いを否定した。

「いいえ、夫人。ここは私の私邸です」

「私邸……？」

「フィッツシャー家は代々医学者の家系です。ここには病院ですら存在しない、最新最高の研究施設と設備が揃っています。夫人がお命を取り留めることができたのも、そのおかげなのです」

「そうですか……ありがとうございます」

夫人の礼にハルトムートは笑顔で返した。

「お疲れでしょう。今はゆっくりとおやすみください。何かありましたら、すぐに参ります」

患者の負担を考えたのか、ハルトムートはクリストフ達を連れて病室を出て行った。

第五章 決戦！ 第五十八話

「まさか、中心街にこんな施設があるなんてな」

ハルトムートの自室で、クリストフは煙草に火をつけて言った。

「せめて、部屋の主に喫煙の許可くらいとって欲しいものですね。
シラー室長」

ハルトムートは一服煙草を吹かして笑った。ハルトムート・フィッシャー。フィッシャー家現当主であり、天才と評される腕を持つワイバニア医学界の異端児だった。

「固いこと言うな。これほどの設備を上にも黙っておいてやると言うんだからな」

クリストフは煙を吹き出した。フィッシャー家は代々医学者の家系として知られている。彼らは、時に革命的な術式を考案し、医学の発展に寄与して来た。彼らの医学への貢献の原動力は医学に対する飽くなき探究心と、知識欲にあり、彼らはどん欲に研究を続けていたのである。世間の耳目が届かぬ遙か深淵の闇の中で、人体実験や特殊な医療器具の開発に明け暮れ、敵国とも密接なパイプを持ち、その技術と知識を高めていったのである。

「こんなことが明るみに出れば、お前さん達も破滅するだろうからな」

クリストフは冷酷な表情を浮かべた。しかし、本心では彼はこれを告発する気などなかった。非合法の医療施設があるということは、

マリアを匿いやすいということだった。今まで帝国の暗部に隠れていた場所である。それだけに暗殺者の目を欺くことが出来る。マリアを助けたい一心でアウグストが連れて来た場所は、はからずも絶好の隠れ家になったのである。

「すみません！ 兄さん、一族の秘密を話してしまって……」

アウグストがハルトムートに頭を下げた。兄は煙草の火を消すと、弟の頬をはった。部屋中に乾いた音がこだました。

「この愚か者が……」

「おい！」

クリストフの制止を聞くこともなく、ハルトムートは弟を見下ろした。

「フィツシャー家の秘密を他人に話すとは……何のために我が一族がこの秘密を守り続けていたと思っている……」

「ごめんなさい……」

「医者にも研究者にもならず、軍に入って……あげくこの様とはな。フィツシャー家の面汚しが」

兄からの厳しい罵倒をアウグストは黙って受け入れていた。一族の秘密を漏らすことは、死にも等しい大罪であったのだ。

「言い過ぎだろう！ やむを得なかったんだ！ 病院に運んでいた

ら、彼女は間違いなく死んでいた。彼女の命を救ったのはあんたの弟のおかげだ！」

「室長・・・・・・・・・・」

クリストフはハルトムートに迫った。ハルトムートは自分の椅子に腰を下ろすと、クリストフらに言った。

「今日はお引き取り願おう。患者はしばらく動かすことは出来ん。見舞いも好きにするがいい。ただし、この中でのことは他言無用だ。わかったな」

「・・・・・・・・・・ああ」

クリストフは吐き捨てるように言うと、席を立ち、二人を連れて外に出て行った。扉が閉じる音を聞いたハルトムートは鼻筋に指を当てると、大きなため息をついた。

「命を救ったか・・・・・・・・そんなことは俺が一番良く分かっている・・・・・・・・よくやったな。アウグスト」

星王暦2183年7月12日、若き天才医師は人知れず、弟の功績を賞賛した。

第五章 決戦！ 第五十九話

「兄上が！？」

星王暦2183年7月13日、ワイバニア軍本隊と合流を果たした第一軍団長、ハイネ・フォン・クライネヴァルトに凶報がもたらされた。

「死因は、……なんと？」

「事故死とのことです。馬車が横転し、首の骨を折られたと……」

第一軍団参謀長兼副官であるエルンスト・サヴァリツシュが報告した。

「そうか……」

「軍議を欠席してはいかがですか？　このような事情なら、致し方ありますまい」

深くうなだれたハイネにエルンストは言った。本来ならば、喪に服さなければならぬのだが、父のハンスもハイネも戦時下であることを考慮して軍務に精励することを選んだ。そのほうが、家族を失った悲しみを紛らわすことが出来ると考えたのだ。

「他に、何か報告はないか？」

「い、いえ、別に……」

「そうか……」

エルンストは焦った。報告にはマクシミリアン邸の惨劇も含まれていた。マクシミリアンの死に続いて、義姉が行方知れずになっていることを伝えたら、今度こそ、ハイネはどんな行動に出るかかわからない。有能で、上官思いの参謀は胃がきりきりと痛むのを感じていた。

「補佐役というものは、存外大変なものだな」

軍議に向かうハイネを見送ったエルンストは小さくつぶやいた。

この日見送った背中程、ハイネの背中が小さく感じられたものはなかったと言う。戦場では無類の強さを誇るハイネも、肉親を失った時の衝撃は計り知れないものだったのかもしれない。

第五章 決戦！ 第六十話

「連合軍、恐るるに足りず！」

ワイバニア帝国皇帝、ジギスムントは軍議が始まって早々、居並ぶ軍団長達に言い放った。

「それはどういことですか？」

ワイバニア軍第二軍団長のマレーネ・フォン・アウグスブルグが玉座に腰掛けた皇帝に尋ねた。ミュセドールス平野で連合軍が待ち受けているのだ。数の劣勢を覆す策を講じているに違いない。史上空前の大軍勢を有しているとはいえ、楽観視出来る状況ではなかった。

「決まっているだろう。アウブスブルグ軍団長。我々の方が遙かに数が多い。物見の報告では敵兵力は八個軍団、我々は一〇個軍団。これだけでも十分に有利だ。その上……」

「これからの説明は私がするわ」

ジギスムントに続いて、右元帥のシモーヌ・ド・ビフレストが席を立った。軍服とは思えないほど煽情的な服に身を包んだ美貌の女軍師は指揮杖を手に身を翻すと、ダンスと見まごうばかりのしなやかな動きで陣形図を指し示した。

「様々な情報を総合すると、連合軍は私達の侵入口を取り囲むように鶴翼陣形を敷いているわ。侵入口を変えれば敵の裏をかけると思うけれど、残念ながら、十万を超える兵が侵入できるのは、ここしかないわ。そこで、全軍を魚鱗の陣形で突入させ、敵軍左翼から各

個撃破するの。突入口はメルキド軍第四軍団よ」

シモーヌは自軍の陣形をさした。ワイバニア軍の先陣がメルキド軍の中央を突破しつつ、左翼を打ち破る姿が示されていた。敵左翼を撃破した後は、追いつがる敵右翼を牽制しつつ、残存兵力を掃討し、ミュセドールス平野にそって円運動を描きながら、牽制されていた敵右翼を正面から撃滅する。それが、ワイバニア軍の戦略だった。

第五章 決戦！ 第六十一話

「作戦の骨子としては、了解した。だが、疑問点がひとつ存在する。今の作戦経過がそれだ。メルキド軍の防御の要であるはずの第二軍団が動いていない。まるで、敵第二軍団が存在しないかのように。これはどうしてだ？」

腕を組んだ、ハイネはシモーヌを眼光鋭くにらんだ。シモーヌはその質問を待っていたかのように笑うと、ハイネに言った。

「良い質問よ。クライネヴァルト軍団長。その第二軍団は存在しないの。だから、攻撃もしないし、動きもしない。それだけよ」

成る程とハイネは頷いた。おそらく、敵第二軍団は戦う前に瓦解するのだろう。アーデン要塞のときと同じように。表面で平静は装いつつも、ハイネは内心怒りで荒れ狂っていた。一度ならずも武人の戦いを汚すか……ワイバニア最強の軍団長は、帝国を裏で操ろうとする女狐に明確な殺意を抱き始めていた。

「では、我々は初手で、実質二個軍団を相手にすれば良い訳ですな？ 右元帥閣下」

第六軍団長のオリバー・リピッシュがシモーヌに言った。ワイバニア軍の中で最も冷静沈着な軍団長である彼は、この作戦の骨子が局地戦で常に数的優位を保つことであるということをよく理解していた。ここの戦いにおいて、ワイバニア軍は敵軍の3倍近い兵力をぶつけられる。皇帝の言う、数の上で優勢ということは、あながち間違った発言ではなく、戦況はワイバニア軍に圧倒的有利だった。

「そうよ。リピッシュ軍団長。これに対して、私達は敵に五個軍団を投入するわ。局地戦で、わたし達は優位に立てるのよ」

シモーヌは指揮杖をとると、上座に立った。

「この戦いで、全てに決着を付ける！ この戦いで勝利すれば、アルマダは我々のもの。各軍団長はそれぞれ最善をつくせ！」

十人の軍団長は席を立つと、右腕を胸に宣誓した。

「龍の旗に誓って！」

星王暦二一八三年七月二三日、それぞれの思いを胸に、ワイバニア軍十万五千はミュセドールス平野に向け進軍を再開した。

第五章 決戦！ 第六十二話

星王暦2183年7月14日、フォレスタル、メルキド連合軍後衛、ヒーリー・エル・フォレスタル率いる第五軍団の野戦指揮所に第五軍団アルレスハイム連隊連隊長、アンジェラ・フォン・アルレスハイムが訪れていた。

「お呼びですか？ ヒーリー殿」

野戦指揮所には参謀長のメアリ、副軍団長のアレックス、司令部大隊長のモルガンが詰めていた。アンジェラは司令部の面々を見回すと、ヒーリーに尋ねた。

机に肘をついたヒーリーはアンジェラを見た。目にくまができ、生気がない。ここ連日の疲れが出ているのだろう。

「アンジェラ隊長、連隊を率いて、先陣まで行って欲しい」

「ピット軍団長を援護するといつのですか？」

「ああ。だが、君は伏兵だ。これを見てくれ」

ヒーリーは地図を広げると、作戦室の全員に見せた。

「見てくれ。ミュセドラス平野の入り口に小さな溪谷がある。ここに敵の一隊をおびき寄せて欲しい」

「一隊とはいえ、恐らく軍団単位で敵は行動するでしょう。我が連隊の5倍以上の兵力ですが……」

「できないかな？ アンジェラ隊長」

ヒーリーは挑戦的な笑みを浮かべた。と彼は思っただろう。しかし、周囲の目は逆だった。目だけが異様にぎらついていた。ヒーリーの心中を察したアンジェラは不敵に笑うと、ヒーリーに返した。

「そのための遊撃混成連隊。アルレスハイム連隊です。お任せください」

アンジェラは金の髪を凜々しく翻すと、作戦室を後にした。

第五章 決戦！ 第六十三話

「軍団長。少し、お休みになってください。昨日も寝ていないのでしょう?」

司令部大隊長のモルガンが立派なカイゼル髭を揺らした。百戦錬磨の大隊長は戦場での力の抜き方を知っていたが、若いヒーリー達はそうはいかない。モルガンなりの思いやりだった。

「ありがとう。モルガン隊長。だが、休んではいられないよ。ワイバニア軍はもうそこまでできているのだからね」

「モルガン隊長、副軍団長。悪いけど、少し席を外してもらえるかしら?」

メアリは二人に目配せをすると、作戦室から人払いさせた。

「どうしたんだ? メアリ」

「あなた。昨日からずっと、私に目を合わせないわね。お祖父様のことでしょう?」

「ああ……」

「作戦のことは理解していると言ったはずよ。今度のことは、私もお祖父様も納得してる。だから、もう責めないで」

ヒーリーはうなだれた。いつそのこと、メアリに罵倒された方が気が楽だったかもしれない。覚悟していたこととは言え、ヒーリーの

精神は半ば壊れかけていた。

「すまない……本当にすまない……」

机に敷かれた作戦図に染みが出来た。ヒーリーは大粒の涙を流し、泣いていた。声にならない叫びが作戦室に響いた。メアリはヒーリーを抱きしめると、一緒に泣いた。涙の意味が何を意味するか、それは本人達にしか分からなかった。どちらも数日後に親しい人を失うことになる。それだけは確かだったから。

ひとしきり泣き終えた二人は、抱きしめあつた姿勢のまま、時を過ごしていた。どちらも離れようとすれば出来たのだが、ヒーリーもメアリもそれをしようとしなかった。

「ねえ、ヒーリー」

メアリはヒーリーの耳元でささやいた。

「私、ヒーリーのことを好き。……ずっと、ずっと前から」

「ごめん。でも、俺は……」

「わかってる。ポーラのことでしょう？ だから言えなかったの」

「メアリ……」

「ごめんなさい。今は何も言わないで。あなたを抱きしめさせて。それだけで、それだけで私はいいいから……」

ヒーリーは頷くと、メアリに体を委ねた。叶わない想いだった。メ

アリは涙を一筋流すと、ヒーリーを優しく抱きしめた。

第五章 決戦！ 第六十四話

星王曆二一八三年七月十四日午後、フォレストアル王国王子エリクシル・エル・フォレストアルとヒーリー付きの侍女、ポーラ・ワイズマンを乗せたエメラルドワイバーン、アトラスはメルキド・フォレストアル連合軍総合指揮所、総帥専用馬車に着地した。

ヒーリーの陣中見舞いこそが目的であつたが、礼儀上、連合軍を率いるタワリツシ、スプリッツァーにあいさつをする必要があつたのである。エリクはスプリッツァーと固い握手を交わした。

「お久しぶりです、義兄上。お元気そうで何よりです」

「元気なものか。作戦とはいえ、公都を放棄し、親友を死なせたのだ。この上、お前達の師をも殺そうとしている。不出来な義兄を笑いたければ笑ってくれ。……この度の援軍、公国を代表して感謝する。これで、我々は奴らと互角に戦える」

自嘲めいた口調をしていたが、スプリッツァーの目は死んでいなかった。どんな犠牲を払ってでも敵を打ち倒してみせる。スプリッツァーは気迫と意志に満ちていた。この主の許に集つた兵ならば、犬死にはない。エリクはうなづいた。

「エリク殿下。ヒーリー軍団長はこの指揮所の後方にいる。今回の目的はそれだろうか？」

タワリツシは遠慮なくエリクに言った。幼少の頃、メルキドの人質であつたエリクに戦術論を叩き込んだ師である。エリクの将器と武器を父ジエイムズ以上に認めつつも、やはり弟子はいつまでも弟子

というようだった。エリクは師の態度に苦笑すると、タワリッシに言った。

「大將軍にはかないませんね」

「お前は戦わないのか？」

「戦いたいのはやまやまですが、国を代表するものが二人もいたのでは、指揮系統が混乱しますし、ヒーリーもいます」

「お前もヒーリーと同格の戦術家だろうか？」

「わたしにはあいつほどの才能はありませんよ」

「独創性はな。だが、常に選択は間違いなく、戦理にかなっている。それに強い精神も持ち合わせている。それはヒーリーに欠けているものだ」

エリクは師に背を向けると、ドアノブに手をかけた。

「大將軍、わたしの思いはヒーリーと共にある。ヒーリーのとる戦術は、わたしのとる戦術です」

「信じているんだな」

「王太子である前に、兄ですから」

エリクはドアを開き、作戦室を出て行った。ドアのそばではポーラが魔術銃アストライアの入った鞆を重そうに抱えていた。

「ポーラ、待たせてすまなかった。ヒーリーは後方の陣にいる。急ぐとしようか」

エリクはポーラの手を引くと、主を待つ翼竜へと連れて行った。

第五章 決戦！ 第六十五話

二人を乗せたアトラスはヒーリーの司令部がある装甲馬車に降り立った。大きな翼を広げた雄々しいエメラルドワイバーンを見たモルガンは膝を屈した。

「え、エリク殿下！ どうして、こちらに？」

「久しいな。モルガン隊長。弟の陣中見舞いだよ」

アトラスから降りたエリクは親指を立てて後ろのポーラを指すと、さわやかに笑った。エリクに手を引かれたポーラはアトラスから降りると、真つすぐ作戦室の扉目指してかけていった。

「ヒーリー！」

作戦室の中では、メアリとヒーリーが抱き合っていた。

「メアリ……そろそろ離してくれ。皆を呼ばないと……」

「ヒーリー！！」

二人だけの作戦室の扉が勢いよく開いた。一瞬、時が止まった。ポーラの目にはメアリとヒーリーが仲睦まじく抱き合っているように見えただろう。いや、誰が見てもこの状況をそれ以外説明出来る者はいなかったであろう。ポーラは髪を逆立てると、鞆を持ち上げ、ヒーリーの頭上めがけて一気に振り下ろした。

「こ、この、バカヒーリー！」

「ま、待て！ ポーラ！ うわああああ！」

ポーラの一撃はヒーリーに見事命中した。昼間であるのに、星が降ったようにヒーリーは感じただろう。星の雨を見ながら、ヒーリーの意識は遠のいていった。

「ヒーリー！ 大丈夫！ ちょっと待って、ポーラ！ 誤解よ！」

「何が誤解よ！ メアリ姉！ メアリ姉も一緒よ！ ひどいじゃない！」

ポーラはそう言うと言戦室から駆け出した。

「待って！ ポーラ！」

メアリはポーラを追いかけた。モルガンとエリクがそつと扉を覗き込むと、そこには失神したヒーリーが残されていた。

「我が弟ながら……朴念仁の割にもてるものだな」

エリクは呆れ気味に笑うと、モルガンに衛生兵を呼ぶように指示した。ワイバニア軍の動向を考えると、滞在出来る時間はごくわずかしかない。ヒーリーがそれまでに目覚めてくれるといいが……。エリクはため息をついて作戦室の壁にもたれた。

第五章 決戦！ 第六十六話

メアリとポーラは走った。給仕服姿とは言え、ポーラの足は速かった。軍服のメアリの方が圧倒的に動きやすかったが、二人の間はなかなか縮まらなかった。

「ポーラ、待って！」

息を切らし、メアリは叫んだ。第五軍団の陣地から少し離れた木の下で、ポーラは立ち止まった。二人は何も言わず、肩を揺らし、大きく息をした。

「ポーラ……っ！」

顔を上げたメアリの頬にポーラの手が飛んだ。メアリの眼鏡が飛び、崖の遙か下まで落ちていった。

「ごめんなさい……。私」

「何それ！？ メアリ姉、私の気持ち知ってたじゃない！ 何で……」

「ごめんなさい。ポーラ……。本当に、でも、でも……」

「いいよ……。メアリ姉の気持ち、分かったから……」

ポーラはメアリを無視して歩き去ろうとした。メアリはそのまま一瞥もしないポーラの肩をつかむと抱きしめた。

「メアリ姉、離して！」

ポーラは言ったが、メアリはポーラにしがみつき、離そうとしなかった。

「聞いて、ポーラ。私、ヒーリーにふられちゃった。彼に気持ちを伝えたわ。けど、好きな人がいるからって」

「そんなことで怒ってるんじゃない。メアリ姉、離してよ！」

「あなたを裏切り続けていたのだもの。嫌われて当然よ。でも、こんな思いでヒーリーに会って欲しくない。私が好きなあなたで、ヒーリーが好きなあなたのまままで彼に会って欲しいの！」

「そんなの……。メアリ姉の勝手じゃない！ 私、私は……」

「そこまでにしてあげなさい」

ポーラの頭上で、優しげな声がした。ポーラが後ろを見上げると、顔に大きな傷を負った金髪の美女が立っていた。

「アルレスハイム様……」

ヒーリーの信頼厚い盟友は優しく微笑むと、ポーラを抱き寄せた。

「軍団司令部に所用があつて戻ったのだが、ただならぬ様子のあなた達を見つけたので、すまないがあとをつけさせてもらった。ポーラ。ヒーリー殿に非はない。あなたのことを懸命に想っている。それに、参謀長殿を責めるな。ずっとあなたのことで、自分を責めていた。苦しんでいたんだ。分かってくらって欲しい」

ポーラは泣き崩れたメアリを見た。言葉にならない嗚咽を漏らすメアリにポーラは何も言えなかった。

「ポーラ、参謀長殿を許せとは言わない。ただ、参謀長殿を理解してやって欲しい。もうすぐ、ここは戦場になる。ヒーリー殿に会える時間は少ない。彼も、そして私も命をかけた戦いをする事になる。もちろん、参謀長殿も。これが、最後になるかもしれない。分かってやって欲しい。後悔のないように……」

アンジェラの言葉に、ポーラは頷いた。アンジェラはメア리를助け起こすとその胸に抱いた。

「ごめんなさい……。ごめんなさい」

うわごとのように謝罪を繰り返すメア리를抱いたアンジェラは、ポーラに言った。

「さあ、戻ろう。ヒーリー殿が待ってる」

三人は森をかきわけ、司令部へと帰っていった。

第五章 決戦！ 第六十七話

第五軍団司令部、軍団長専用の装甲馬車の中にしつらえた作戦室で、ヒーリーは目を覚ました。

「俺は………？」

「目を覚ましたか？ ヒーリー」

椅子をいくつも並べて作った簡単なベッドに寝かされたヒーリーに、兄エリックはさわやかに言った。

「兄上……」

「間が悪かったな。よりによってメアリと一緒にの時だとはな。ピット卿もさぞ、激怒するだろうな」

「茶化さないでください。兄上……。それは？」

ヒーリーはアストライアの入った鞆に目を向けた。

「お前の新しい魔術銃だ」

「そんな。だって、ラグは……」

「ラグは今眠りに付いている。だが、その前に彼はもう一丁の魔術銃を完成させていたんだ。本当は、ポーラに渡して欲しかったのだが……」

エリクは足元の鞆に視線を落とした。ヒーリーは顔を天井に向けると、兄に言った。

「兄上、その銃。アストライアは受け取りませんよ。受け取るのは、ポーラからだ」

「そうだな。立てるか？ 疲れているのは分かっているが、まだ、お前の力が必要だ」

「ええ、もう大丈夫です」

ヒーリーは、兄に微笑むと、ゆっくり体を起こした。ちょうどそのとき、作戦室の扉が開いた。ゆっくりと開いた扉の陰から、ヒーリーのもつとも会いたがっていた人が姿を現した。

「ノックが欲しかったね。ポーラ」

エリクはポーラに目を向けた。とがめているが、怒ってはいない。そんな表情だった。

「すみません、エリク様」

「謝るのは俺ではない。そうだろう？ ポーラ」

エリクはヒーリーを立たせると、勢い良く背中を叩いた。エリクはさらに足元の鞆を持つと、ポーラにそれを手渡した。

「これを渡すのは、君の仕事だ。ポーラ。弟を頼む」

「頑張れよ。ヒーリー」

作戦図を見ながら、エリクはつぶやいた。戦いに対して、ヒーリーの不器用な恋に対しての声援だった。空前の作戦を前に、兄にはそれくらいのことしか出来なかった。

第五章 決戦！ 第六十八話

作戦室周囲の人払いをさせたヒーリーは馬車近くにある大きな木の下にポーラを連れて行った。

「ごめん。ポーラ」

「当たり前ね。メアリ姉を抱いてたんだから」

謝るヒーリーにポーラは腕を組んでそっぽを向いた。王城では当たり前の主従の逆転劇がシンベリンから遠く離れたメルキドの地でも繰り広げられていた。

「本当にごめん。ポーラ……」

申し訳なさそうに頭を下げるヒーリーに、ポーラは顔を真っ赤に染めると、勢い良く鞆を投げつけた。鞆のロックが外れ、中から大きな魔術銃がこぼれ落ちた。

「あーもう！ メアリ姉といい、ヒーリーといいメソメソしちゃって！ アンタ、4万の兵を率いる大将なのよ！ しゃきつとしなさいよ！ 私に好きと言えないで、どうしてワイバニア軍なんか倒せるの！？ どうして、4万の兵がついてくるのよ！」

ポーラが言い終えた数秒、二人の間を沈黙が支配していた。

ポーラは前とは別の意味で顔を紅く染め、ヒーリーはヒーリーで、ポーラの剣幕に圧され切ってしまったのである。ヒーリーは地面に落ちたアストライアを拾うと、器用に銃をまわし始めた。ヒーリー

にしては、何の考えもない、手のごまかしに過ぎない動きで、何かを必死で落ち着かせようとしている。そんな動きだった。アストラエアが空気をきる音が、ポーラの心臓をより高鳴らせていた。

「かつこわるいなあ……。気持ち打ち明ける時は、俺から言おうと思っただけだなあ……」

ヒーリーはアストライアを回転させるのをやめると、ポーラの目を見た。その目は自信に満ち、数秒前のヒーリーとは別格の精悍さを漂わせていた。

「君のことが好きだ。ポーラ」

「好きだ」単純なこの言葉を口にするのに、二人はどれだけの時間と勇気を必要としたことだろう。ヒーリーは一步一步、ポーラに近づいた。

「わ、私もヒーリーのことが好き」

「うん」

ポーラは固まったまま、自分の気持ちとは裏腹の言葉を吐き出した。

「私は、メアリ姉やイスラ様のように家柄も良くないし」

「でも、俺はポーラのことを好きだ」

「陛下やエリク様だって、きっと許さないわ」

「大丈夫。そんなことはしない。仮にそうであったとしても、俺が

皆を納得させる」

「私なんかより、ずっと綺麗で、素敵な人が……」

ポーラの唇をヒーリーの唇が塞いだ。ポーラは驚いて体をじたばたさせたが、ヒーリーが彼女を強く抱きしめると、抵抗をやめ、ヒーリーに身を預けた。いつの頃からだろうか。ヒーリーに想いを抱くようになったのは。手にかかるご主人様から、いつの間にか、かけがえない人にならなくなっていったのだ。

ヒーリーとポーラは、時が許すまで、固く抱きしめあっていた。

第五章 決戦！ 第六十九話

「それでは、ヒーリー、後を頼む」

「お任せください。兄上」

アトラスに跨がったエリクはポーラを後ろに乗せると、ヒーリーに言った。

「頑張つてね。ヒーリー」

「ああ」

ポーラは少し心配そうな表情を浮かべたが、ヒーリーは笑って返した。彼の手には新しい魔術銃アストライアが握られていた。「神の妻」を意味する最新最強の魔術銃。ポーラに渡されるのを、制作者であるラグ自身が願っていたのかもしれない。

夕方に近い時刻、本来なら、陣中に留まるべきところだったが、エリクは出立を決意した。出立の時期が遅れるほど、危険度が増大するためだった。ワイバニア軍との激突まで数日。連合軍が制空権を握っていられるのもあとわずかだった。いかに最強の翼竜に乗り、フォレストル最強クラスの武人に匹敵する武勇を持っていても、ポーラを守りながらでは戦闘に巻き込まれた時、不利は必至だった。そのため、エリクは一刻も早く安全圏に避難する必要があった。

「では、また、王城でな！ ヒーリー！」

エリクはアトラスの翼を羽ばたかせると、空へと舞い上がった。

「……無事で！ 兄上！ ポーラ！」

小さくなるアトラスの影をヒーリーはいつまでも見送っていた。

ミュセドールス平野に続く脇街道の北方の森。息をひそめて集結する集団があった。特務部隊「雁」ワイバニア軍の非正規戦部隊である。

森の中に設営された小さなテントに筋骨隆々した男が入っていた。テントの中は小さな机がひとつあり、上には酒瓶と地図が置かれていた。テントの中にいた男達はどれも一癖も二癖もある男達ばかりで、体についた無数の傷が、彼らのくぐってきた修羅場の数の多さを物語っていた。男は上座に座っていた男に敬礼した。

「ベールト隊長、見張りから報告です。敵補給部隊の隊列を発見したとのことですよ」

雁隊長のダーヴィド・フォン・ベールトは閉じていた目を開いた。

「ようやく、お出ましときたか。こいつらを盛大に燃やせば、連合軍の奴ら、慌てふためくぞ」

「翼将宮の左元帥閣下からは、攻撃を許可すると通知が来ています」

「そうか……」

ベールトは椅子から立ち上がると、軍服を羽織り、テントの外に出た。外に出た彼を、心地の良い殺気が襲いかかる。触れた途端に、並の人間を殺してしまうほどの禍々しい殺気。獣すらおびえて逃げ

出した死の森に、彼の配下3、000人がじつと牙を研ぎすましていた。

「待ちわびた時が来たぞ！ 狼ども！ 目標は敵連合軍補給部隊。脇街道を西上する部隊を側面から奇襲する！」

ベーレトは鞘から剣を引き抜くと、高らかに号令した。彼の声に、兵士達は沈黙で答えた。感じただけでも人を殺しかねないほどの殺気。その研ぎすまされた殺気だけが兵士の答えだった。

星王暦2183年7月14日、フォレストル軍補給部隊に危機が迫っていた。

第五章 決戦！ 第七十話

星王曆2183年7月14日、脇街道に行くフォレストル水軍陸戦隊長エリザベス・イル・フォレストルは馬車の中で大あくびしていた。

「ふあゝあ。まったく、退屈な任務だねえ、護衛つてのは、引き受けるんじゃないよ」

「仕方ないですよ。姐さん。アルレスハイム連隊長に負けちゃったんですから」

「それを言うんじゃないよ。ああ、退屈だねえ！ 敵でも攻めて来ないかねえ」

エリザベスはキセルを持つと、ゆっくりと火をつけた。時間をつぶすタネにも尽き、エリザベスのいらだちはよいよ限界に達していた。カトラスを振るうにも狭い馬車の中ではそうはいかず。まして、部隊は移動中。読書にもキセルにも飽き飽きしていた。

副官は、隊長のご機嫌をいかになだめるか頭を悩ませていた。

エリザベスの任務は退屈な時間と労力に比べて余りあるほどに重要なものだった。フォレストル軍の最新式長弓および、連射弓。これはワイバニア軍に対する切り札とも言える兵器だった。通常の弓矢を凌ぐ長射程と連射力は、必ず戦況を覆す奥の手になる。本国のマクベスが生産を急がせて、ようやく配備が可能になった新兵器だった。

これが、戦闘に遅れてはならないし、ワイバニア軍に捕獲されることがあってもならない。絶対に失敗は許されない重要な任務だった。

「敵さんも、あたし達に食らいついてくれるといいんだがね」

エリザベスは吐き出した煙を器用に輪っかにして言った。ワイバニア軍とフォレストル軍。二度目の激突の時が迫っていた。

第五章 決戦！ 第七十一話

「あれか……」

ワイバニア軍特務部隊雁隊長のダーヴィト・フォン・ベーレトは双眼鏡越しにフォレストル軍の隊列をとらえた。護衛を伴っているが無防備に近く、馬車の速度も遅い。まるで、襲ってくださいと言わんばかりの隊列だった。

「妙だな」

ベーレトは双眼鏡を下ろした。ダーヴィト・フォン・ベーレトは今年36歳。実戦経験だけならば、ワイバニア最長の軍歴を誇るグレゴールにも匹敵するほどの猛者だった。グレゴールが対外の会戦を戦い抜いてきた生粋の将とするならば、ベーレトは生粋の戦士だった。地方都市の反乱から、メルキド、フォレストルとの対外戦、ありとあらゆる戦場で戦い、生き残ってきた彼は戦闘という戦闘を知り尽くした戦術家であった。

実力のみで出世出来る軍団長という職に彼は縁がなかったわけではない。軍団長位が空位になるたび、彼を推す声が上がったが、彼はその度に固辞し続けた。

戦争の空しさ、戦闘の悲惨さ、むごさを人一倍知る彼は、軍と言う組織を常に否定し続けていた。彼は軍から離れ、家庭生活を営んだが、戦場は彼を手放さなかった。

戦いが彼の精神を知らず知らずのうちに蝕んでいたのだ。ベリリヒンゲンの平和な光景、幸福な家族との会話。常に命のやり取りを交

わしてきたベーレトの目には戦場よりもおぞましいものに映ったのかも知れない。彼の心は血と闘争を渴望するようになっていた。

そんなベーレトに手を差し伸べたのが、一時彼の上官だった左元帥ハンス・フォン・クライネヴァルトだった。ハンスは戦士としての心と父、夫としての心の板挟みで苦しんでいたベーレトに戦う場所と生きるべき場所を与えた。これが、傭兵特務部隊「雁」のはじまりである。

戦いに苦しんでいた男を救うことが出来たのが、戦いであつたとは、何と言う矛盾であり、皮肉であり、悲劇であつただらう。以来、彼らは、ワイバニア正規軍の影で戦いを続けている。

「妙ですね。隊長」

副官のツエルナーがベーレトに言った。

「お前もそう思うか」

「敵の隊列は素人です。信じられません」

敵方のお粗末な隊列は百戦錬磨の二人に警戒心を抱かせた。敵の正規軍が補給に兵力を割くほどの余裕はない。味方ですら同じ状況なのだ。練度、武装で劣る地方軍が護衛についたとしても。隙がありすぎる。攻撃命令を出したくても出せない。ベーレトは戸惑っていた。

第五章 決戦！ 第七十二話

エリザベスがこの場にいたら、高笑いしていたであろう。ことはエリザベスの思う通りにすすんでいたのだから。

エリザベスは隊列にあからさまに隙を見せるように心がけていた。外の護衛は少なく、そして、隊列の速度は遅く。あまりに見え透いた罠ではあるが、それ故に効果がある。敵が勇んで攻めてくれば、経験不足と弱兵の証明である。一気に撃滅すればよい。逆に経験豊かな敵であれば、警戒して出てくることはない。それでも、出てくるのであれば……。

エリザベスは戦う前から、既に自分たちが最も有利になる状況を作り上げていたのである。敵将グレゴールをして、「食わせ者の血脈」と言わしめるフォレストル一族。エリザベスもまた、その名を背負うにふさわしい智将だったのである。

もともと、当の本人は、自分の馬車の中でのんきにキセルを吹かしていたのではあるが。

攻めるか、攻めざるか。ベールトは決断に迫られていた。獲物は大きい上に、ミュセドールラス平野からも火の手が見える絶好の位置。時期も本隊が士気を上げるには最良だろう。だが、彼の勘は時期、位置に反して「否」と警鐘を鳴らし続けている。ベールトは生唾を飲み込んだ。

「どうしますか？ 隊長」

ツエルナーはベールトに尋ねた。これは雁部隊全員を代表する言葉

だった。ベーレトの号令があれば、すぐにでも、脇街道を血の海にすることが出来る。それだけの技量と練度を部下達は持っていたし、その部下達も今まさに爆発寸前だった。

勘を信じるか。部下を信じるか。ベーレトは目を閉じた。ひとつの感覚を閉じると、他の感覚が研ぎすまされてくる。部下達の息、鼓動、そして何より、自分自身の昂りをベーレトは全身で感じていた。ベーレトは目を開くと、右手を高く掲げた。彼らが待っていた時が来たのだ。ベーレトは掲げた右手を一気に振り下ろした。

「全軍、突撃！」

星王暦2183年7月14日、ワイバニア帝国軍特務部隊「雁」はフォレストル軍補給部隊に一斉突撃を敢行した。

第五章 決戦！ 第七十三話

「姐さん！」

ノックもなく、エリザベスの私室のドアが開いた。

「なんだい？ 騒々しいねえ」

エリザベスはだるそうにソファから身を起こした。

「敵襲です。数、およそ三〇〇〇！」

「……なんだって？」

部下からの報告に、エリザベスは端正な眉をぴくりと上げた。

「全部隊、戦闘準備は出来ています！ あとは姐さんの下知を待つだけですぜ！」

「そのまえに、敵さんを見ないとどうにもならんさね。ついといで」

エリザベスは自分の馬車の屋根に上がると、敵の隊形を観察した。まだ、自陣まで攻め込まれるには時間があるが、隙がなく、しかも訓練の行き届いた陣形だった。敵はエリザベスの予想の最悪をいつていた。経験を積んだプロ中のプロ。正規軍以上の強さだろう。並の将なら震え上がるところだったが、フォレストル最強の戦闘集団を率いるフォレストルきつての女傑は笑みさえ浮かべていた。

「くつくつく……。ヒーリーに感謝しないとねえ。フォレストル水

軍陸戦隊が本気を出して戦う時が来たようだ。全装甲馬車中隊は進軍中止。敵が射程に入り次第、一斉掃射をかける。第一、第二狙撃中隊は射程に入り次第各個に射撃開始。頭を出してきた馬鹿どもを射抜いておやり！ 第十一から第十五上陸歩兵中隊は斬り込むよ！馬車に隠れて準備しな！ あたしらにケンカを売ったことをとくと後悔させてやんな！」

エリザベスは羽織ったコートを翻して命令した。

「はい！ 姐さん！」

「……ちよつと、姐さんはやめとくれよ。これでも、お姫様なんだからね。泣けてくるよ」

男ですら恐れおののく陸戦隊長は部下に言った。

「さあて。水軍陸戦隊の力、見せてやるよ。見物料は、あんたらの命で支払いな」

ウェーブのかかった濃緑色の髪を風になびかせ、戦姫は不敵に微笑んだ。彼女の遙か前方には、歴戦の傭兵達が雪崩をうって攻め込んでいた。

第五章 決戦！ 第七十四話

息を殺し、気配を消す。茂みの中、木の影。様々な場所に彼らは潜んでいた。狙うはワイバニア兵の首ひとつ。卓越した腕を持つ射手たちは、敵の襲来をスコープ越しに待っていた。

雁部隊の先陣が、狙撃手の射界に突入した時だった。

「敵陣まであとわずかだ。全員、気を……」

先頭の方隊長は、そこまで言って倒れた。彼の首からは鉄の矢が生えていた。

「身を低くしろ！ 狙撃手がいるぞ！」

二人目の犠牲者は味方に危機を知らせることが出来ただけ、幸福だったかもしれない。二人目は頭を射抜かれ即死した。どこから来るかわからない狙撃手からの攻撃に、傭兵達はその進撃の足を止めた。

「長距離からの狙撃を受けて、先鋒の足が止まっています。いかがなさいますか？」

副官のツエルナーの言葉に対し、ベレートの返答は極めて冷淡だった。

「突撃」

「そんな……。狙い撃ちにされますよ」

「一度に3、000人殺されるわけではない。今のように動かない方が危険だ。伝令を走らせる」

ベーレトはツエルナーに命じた。ツエルナーは翻意を促そうとしたが、ベーレトの表情を見てそれが無駄だと悟った。餓えた狼のような眼差し、いや、鬼神に取り憑かれたというべきか。戦いの最中のベーレトは他の誰にも止められない雰囲気を持っていた。

ベーレトの命令を受けた傭兵達は整然と隊列を組んで、エリザベス達の許へ押し寄せた。陸戦隊最精鋭の狙撃手達は果敢に敵を狙い撃ちにしたが、大きな波に小石をぶつけてもせんないこと。ベーレトの予言通り、多少の損害は出したものの、雁部隊はほぼ順調に敵陣へ向かっていた。

第五章 決戦！ 第七十五話

「大したもんだよ。敵の親玉は。第一次攻撃で足が止まると思ったんだけどね。第二次攻撃用意。弓兵中隊は掃射用意！」

敵の進撃にエリザベスは舌打ちすると、次の命令を下した。

一方、フォレストアル軍の隊列まであとわずかのところまで攻め込む部下達にベーレトは満足そうな表情を浮かべていた。

「油断するな。狙撃兵を仕込むくらいの奴らだ。次は何をしてくるかわからんぞ」

顔は笑みさえ浮かべていたが、目はまったく笑っていないかった。エリザベスが食わせ者であることを彼はよく承知していた。彼はエリザベスに気づかれぬように、5個中隊を後方にさがらせた。予備兵力として7個中隊、700の兵を残していたが、彼は最終局面で工夫を凝らすためにさらに兵力を必要としたのだった。

「ようし……あともう少しだね。装甲馬車中隊、カタパルトとバリスタを用意……」

双眼鏡も必要のないくらいに近づいた敵を見たエリザベスは次の攻撃の準備を命令した。

時を同じくして、互いの軍がそれぞれの弓兵の射程に入った。

「隊長、敵軍が射程に入りました！」

「姐さん、敵が射程に入りましたぜ！」

「撃てえ！」

両軍の隊長は、ほぼ同時に号令した。両方の軍からはおびただしい数の矢が飛び交った。ワイバニア軍の矢は一定時間飛ぶとひとりで発火し、隊列の幌馬車に襲いかかると、馬車を火だるまにした。馬の悲鳴が聞こえたが、幌馬車は静かに燃え盛っていた。

一方で、フォレストアル軍の矢はワイバニア兵に殺到すると、その多くを串刺しにした。

「ふっ……仕込みをするまでもなかったな……？」

ベーレトは双眼鏡を覗き込んだ。不自然。不自然なのだ。幌馬車の中は兵員だけではない。可燃物を満載している。ならば、大きな火柱を上げて燃えるはず。しかし、幌馬車は燃え上がるどころか鎮火し始めている。崩れかけた幌馬車の残骸から、ベーレトの予想もしないものが姿を現した。

「あれは……」

「第二次掃射用意！カタパルト、バリスタ、撃てえ！」

幌馬車の残骸から、鋼鉄の板で守られた装甲馬車が現れた。小さな銃眼からは矢が、屋根からは大型の攻城弓、バリスタの大きな矢と投石機からの砲丸が放たれた。

第五章 決戦！ 第七十六話

「やられた……！」

ベーレトは歯がみした。エリザベスの術中にまんまとはまってしまったのである。

「あつはつは。こいつはいい！ 面白いくらい敵が引つかかってくれたよ」

ベーレトとは反対にエリザベスは高笑いしていた。エリザベスは脇街道に入る前に隊を二分していたのである。ひとつは補給物資と護衛隊2,000を振り分けた本隊。もう一つはエリザベスが直率する陽動専門の特殊部隊。脇街道より南の街道は未だメルキド軍の勢力圏内であり、比較的安全が確保されていたのである。エリザベスは遠回りになる街道を行く本隊に快速馬車をあてがって合流を急がせると同時に、鈍足の装甲馬車を陽動部隊に振り分けて囮としての価値を増したのである。

自分が襲撃した部隊が真つ赤な偽物であると知ったベーレトは撤退を指示した。

「野郎ども！ 斬り込むよ！ 第十一から第十五中隊は正面。第一から第三中隊は左翼、第四から第六中隊は右翼だ！ さあ、いけいけいけえ！」

エリザベスは持てる戦力のほとんどを前面の敵に投入した。敵も一騎当千の傭兵ではあるが、エリザベス達も劣らぬ武勇の持ち主である。しかも、数も多い。たちまちのうちに雁部隊は劣勢になってい

った。

「隊長からは退却命令が出ているんだぞ！ さっさと退くんだ！」

「こいつら……やる！」

雁と陸戦隊の激闘は続いていた。意外なことに劣勢にありながらも傭兵達は善戦していた。これは陸戦隊の強さが兵士個人の實力に依存するものだったのに対し、雁部隊はそれに加えて、小部隊による兵力の運用も得意としていたためである。彼らは隊伍を組み、効率的な射撃と、防御、そして白兵戦闘によって、エリザベスら陸戦隊と局地的には互角の戦いを演じていたのである。

「ちいい、やるねえ……」

自慢の剛剣で屈強な傭兵を一刀のもとに斬り捨てたエリザベスは舌打ちした。雁の1.5倍の兵力を投入しているのにも関わらず、敵を壊滅に追い込むことが出来なかったのである。

第五章 決戦！ 第七十七話

エリザベスらフォレストタル水軍陸戦隊と雁部隊が死闘を演じている頃、ミュセドールラス平野に補給部隊本隊が到着した。

「予定よりも一日早かったな。ありがとう、任務ご苦労だった。アーサー隊長」

ヒーリーは補給部隊隊長であるアーサー・キングスレーに労いの言葉をかけた。比較的安全な経路を通ってきたとはいえ、遠回りになる道である。予測よりも一日上回る速度でたどり着いたのは彼の手腕によるところが大きかった。

「いえ、エリザベス隊長の方が遥かに大変な思いをなさっているでしょう」

「エリザベスは……？」

「ここに来る2時間ほど前に、ワイバニア軍襲来の知らせを受け取りました。独断とはいえ、護衛の陸戦隊一個大隊を差し向けました。申し訳ありません」

「いや、隊長の判断はただしい。しかし、ワイバニア軍の地力は恐ろしいよ。まだ、戦闘集団を隠し持っているのだから」

「はい。エリザベス隊長の読みは当たっていたということです。…それでは、一時兵を休ませた後、我々もエリザベス隊の救援に向かいます」

「ああ、よろしく頼む」

アーサーは敬礼すると、ヒーリーの作戦室を出て行った。

ヒーリーは報告書に目を通した。最新鋭のバリスタ、連射弓、そして対空魔術散弾。これだけの装備があれば、ワイバニアの龍騎兵と互角の戦いが出来る。エリザベス達が文字通り、命をかけて届けてくれたものである。ヒーリーは戦いの最中にいるガスパールの姫君に心の中で礼を言った。

「ベス……死ぬなよ」

星王暦2183年7月15日、戦いの幕はゆっくりと、しかし確実に明けつつあった。

第五章 決戦！ 第七十八話

「第一小隊、第二小隊は盾で矢を防げ。第三小隊はロングボウで牽制だ。第四小隊から負傷兵を引き上げながら、順次兵を退け！ おら、さつさと下がれ！」

鉄兜で身を守った雁部隊の中隊長は声を張り上げた。前からは雨のように降ってくる矢と敵の水兵。左と右には、満身創痍の味方達。敵の数が多すぎる。初陣のひよっこですら、この戦は分が悪いと分かる。これ以上は大損だ。すぐに退かなければ死ぬ。滴り落ちる自分の血を舐めながら、敵の隙をうかがっていた。

「中隊長！ 十二中隊の生き残りが合流しました！ 少しは楽になりますよ！」

傷ついた腕を引きずった部下が彼に報告した。

「よし、弓を持つてるやつは第三小隊に、あとは第五、第六小隊にいられて退却の援護をさせる。負傷兵はそのまま第四小隊に連れてってもらえ！ おら、何してる。お前も……」

突然横に強い力がかかった。首に何か強い痛みを感じる。目の前の部下は泣きそうな顔でわめいている。何だ？ 何年も戦場で戦い抜いてきたが、こんなことは初めてだ。首に固い矢？ そうか……。俺は……。地面に倒れると同時に中隊長の視界は黒く閉ざされた。

「中隊長！」

「中隊長！」

部下達はしきりに呼びかけたが、男はもう、応えることはなかった。

「中隊長戦死！ 指揮は第一小隊長の俺が引き継ぐ！ 前線は第一から第三小隊が援護する。第四小隊からとつとと下がれ！ 死んだ中隊長の命令、無駄にするんじゃないぞ！」

指揮を受け継いだ小隊長は叫んだ。不思議と涙は出なかった。戦場で仲間の死に慣れ過ぎているせいかな。それとも、人の死に多く直面して、感覚が麻痺したのかは分からない。彼は目の前の戦いに生き残る全てをかけていた。

「ベールト隊長、先に突撃した部隊は壊滅状態です。救援を」

「出せん。今使えるのは直衛の2個中隊だけだ。兵力を小出しにしていては、犠牲が増えるだけだ」

「しかし！」

「もう少し待て。ツエルナー。あとわずかだ」

ベールトはのたうち回る部下達を見た。善戦している。奮戦している。投入された兵力に比べて、味方の損害は予想以上に少ない。ベールトは一人、また一人戦場に散っていく部下達をじっと見つめていた。

第五章 決戦！ 第七十九話

「姐さん！ 奴ら強い。こっちの損害も無視出来ませんぜ！」

「しくつたねえ。まさか、これほど強いとは……」

10人目の敵を斬り終えたエリザベスは、荒く息をついた。不愉快なことに敵の強さは彼女の予想の遙か上をいつていた。鍛え抜かれた白兵戦能力と射撃力に加えて、巧みな集団戦法。それも軍団単位のものではない。小隊、分隊単位の統率された戦術。陸戦隊の常識にはない戦術にエリザベスは戦場を支配しながらも、翻弄され続けていた。

「いまましいねえ。両翼の中隊の包囲をせばめるよ。逃げられないようにするんだ。伝令、頼むよ！」

敵兵の返り血にまみれた美姫は、部下に命じた。

伝令がエリザベスのもとを離れてすぐ、別の伝令が血相を変えてやってきた。

「姐さん！ 背後から敵襲！ 数、1,000！ 後衛の第七から第十中隊が交戦中！」

「なんだって!?!」

「第七、九、十中隊は壊滅！ 第八中隊は健在ですが、いつまでもつか……」

「くそ、なんてこつた」

エリザベスは地面を蹴り上げた。背後から攻めてくることは十分に予想できた。そのため、彼女は精鋭の4個中隊を後衛にまわしていたが、ここでも、傭兵達は彼女の予想を裏切った。ベーレトは後方に下げた兵力と予備兵力をあわせた兵力1,000あまりを陸戦隊の後方に迂回させて攻撃を仕掛けたのである。

フォレスタル後衛は果敢に応戦したが、倍以上の数である。戦線を維持するのは困難だった。

エリザベスは判断に窮した。全部隊の反転が間に合いそうにない。後衛の3個中隊は壊滅。反転して救援に向かうにも時間がなさ過ぎる。優勢であるはずの水軍陸戦隊は、一瞬にして窮地に陥った。

「できるだけのこととする！ 弓兵中隊、装甲馬車中隊は反転、第八中隊を援護。残りの機動歩兵は……ああ、いまいますい！ 機動歩兵中隊は残敵を掃討しつつ、一個中隊ずつ反転、後方の敵に当たれ」

最悪の命令だった。自分でも胃液が逆流しそうなくらいだ。だが、これが彼女に出来る最善の策だった。勝っていた。今も勝ちつつある。それなのに、今、彼女の中を敗北感が満たしていた。

「く、くそつたれえええ！！」

カトラスを地に刺し、エリザベスは天に向けて絶叫した。戦場に、エリザベスの叫びがこだましていた。

第五章 決戦！ 第八十話

「こいつは負け戦だ。敵を皆殺しにしても意味がない。敵方のタイミングに合わせて、こちらも退却するんだ」

双眼鏡を下ろすと、ベーレトは感情を抑えて言った。なんということだ。甚大な被害を受けていながら、敵の補給部隊を逃がしてしまふとは。信じられないほどの醜態だった。しかし、彼にはエリザベス隊を全滅させるほどの兵力は残っていなかった。彼女を襲った10個中隊が、彼の投入出来るほぼ全ての兵力だったのである。

双方の将はどちらも、自分が敗北したと感じていた。

戦略的に言えば、補給物資をヒーリーに届けた時点でエリザベスの勝利であっただろう。しかし、戦術的にはベーレトの勝利だった。エリザベスの背後を襲った部隊は、彼女の後衛を壊滅状態に追い込み、彼女の命をほとんど手中に収めていたのだから。

エリザベスの攻撃が緩んだ瞬間、ベーレトは左手を上げた。「全軍退却」の合図だった。エリザベスの後衛を血祭りに上げた別働隊は、整然と退却を始めた。

「姐さん、敵が退却を始めましたぜ」

「ああ……。そうか。敵は見逃してくれたんだねえ……」

「姐さん……」

エリザベスは低く笑い出したが、すぐにそれは嗚咽へと変わってい

った。完敗だった。敵は自分の命をいつでも奪える状態だった。だが、そうしなかった。彼女のプライドはずたずたに引き裂かれた。敗北感が彼女の心を満たし、地面に幾滴も雫が落ちる。命が助かった。だが、それは自分の手でつかみ取ったものではなく、敵からの施しによるものだった。悔しい。けれど、心のどこかでは喜んでさえいた。命長らえたことに対する喜びだった。その喜びは彼女が甘受しえないものだった。優秀な戦士であり指揮官である彼女は敵の施しを潔しとする性格を持ち合わせていなかったたのである。

「あ、あああああつ……！」

声にならない叫びがいつまでも虚空に響いていた。星王暦2183年7月15日、脇街道の攻防戦は双方に甚大な損害を出して幕を閉じた。

第五章 決戦！ 第八十一話

星王暦2183年7月16日、フォレストアル軍第五軍団アルレスハイム連隊連隊長、アンジェラ・フォン・アルレスハイムは連合軍先陣であるフォレストアル第一軍団の本陣を訪れていた。

「これは、アルレスハイム卿、よくぞ来てくださった。礼を言います」

フォレストアル随一と言われた英雄はアンジェラを暖かく出迎えると、作戦室の椅子に着席を促した。アンジェラはピットに一礼すると着席した。自分の孫のような年齢のものにも、丁寧な態度で接するフランスに、アンジェラは戸惑った。

「ピット軍団長、私は貴族ではなく、ただの王室の食客に過ぎません。それに、格としても軍団長よりも下です。そのような態度をとられては……」

「困るか……。いや、すまんかった。わしとて、お主とはそれほど話しておらんかったものでな。どうやって接したものかと……。ふふ、明日死ぬと分かっている、こういうことはいまだに良く分からないものだ」

「ピット軍団長……」

「……それで、お主が来たのは坊の差し金か？」

「はい。軍団長殿を援護して欲しいと……」

「坊らしいな……」

ピットはため息をついた。非情になれと言ったはずなのに、まだ優しさを捨て切れていない。それとも、これが優しさの最後のひとかけらなのか。フランシスには分からなかった。

「私は、あなたと一度話をしたいと思っておりました」

「ふ。わしもだ。ワイバニアの軍団長。……とくにグレゴールとは幾度となく戦ったものだが、話したことはなかった。敵と語り合いたいとは……。武人とは変な生き物じゃ。お主はかつての仲間と刃を交えることになる。それでいいのか？」

「はい。それも私が望んだ道ですので」

アンジエラは顔色を変えずに言った。

「お主の目はそうは言うておらんぞ。敵を憎むことは当たり前だが、お主の場合は違う。敵はお主の戦友達じゃ。彼らを憎むにはお主の目はあまりに優しすぎる」

フランシスは諭すように言った。アンジエラは目を見開いた。老雄は彼女の気持ちを見透かしていたのだ。敵を殺す覚悟は決めていた。しかし、本心では、彼女は迷い、葛藤し続けていた。いざ戦いになった時、自分は非情になりきれなのか。冷静な表情の下で、彼女は悩み苦しんでいた。

「ピット軍団長。お教えてください。私はどうしたら、どうしたら戦うことが出来るのですか……」

アンジェラは小さい声で言った。それは普段のアンジェラからは想像もつかない弱々しい声だった。恐らく誰にも見せたことのない本当の姿。誰よりも強い女であろうと彼女はずっと心に仮面を付けていたのかもしれない。

「アルレスハイム殿。お主はつよい。じゃが、強いものほど、本当は弱いんじゃない。強固な堤も、小さな穴ひとつで崩れてしまうように。いつもどこかにもろさはある。素直になれ。弱さも見せるのだ。そうすれば、いつでも自然体でことに向き合える」

仮面をとるといふことか。美貌の女将はそう理解した。なき盟友ヨハネスも、ずっと仮面をとって欲しいと言っていた。もしかしたら、仮面そのものではなく、心の仮面をも取り去って欲しいと思っていたのかもしれない。

「ありがとうございます。ピット軍団長。我々は第一軍団を援護いたします。一個軍団くらいは、引き受けて見せましょう」

アンジェラは、細く白い手をピットに差し出した。ピットは笑うと、アンジェラの手を固く握った。

「無理はするな。お主達は生き残らねばならん。坊や、マクベス、エリク達のために、フォレスタルの未来のために。そして、何よりお主達自身のために。そのためになら、この老骨の命。いつ差し出しても惜しくはない」

もとワイバニア、フォレスタルを代表する英雄二人は互いに背を向けると、それぞれが役割を果たす場所へと戻って行った。

第五章 決戦！ 第八十二話

星王曆2183年7月16日夜、ワイバニア軍はミュセドラス平野入り口目前で、最後の野営を行なっていた。連合軍の夜襲があるかもしれない。中級指揮官は戦々恐々としていたが、軍団長達は悠然としていた。

「夜襲を仕掛けるのは、まるで意味がない。唯一絶対の勝機である地の利を捨てて我が軍と戦うのだ。自殺行為以外の何者でもない」

第六軍団長のオリバー・リピッシュは部下に言った。冷静にして剛胆な彼の言葉は、そのまま第六軍団の気質を表していた。ワイバニア第六軍団は、山のように悠然とミュセドラス平野に向けて展開していた。

他の軍団長も彼に倣い冷静に部隊を展開させていた。ただ一人をのぞいては。

「見張りを倍に増やしな！ いつでも軍団が動けるように準備を怠るんじゃないわよ！ 夜襲を仕掛ける奴がいたら、真っ先に皆殺しにしてやるんだから！」

第十一軍団長のザビーネ・カーンは楽しそうに命令したという。それもまた、彼女の気質を色濃く表していたと言える。十二軍団中最も血塗られた軍団である第十一軍団はいつでも獲物を求めていた。だが、これが彼女達の運命を変えることになるとは、その時のザビーネは知る由もなかった。

第二軍団長専用テントの前に、初々しい少年の姿があった。第二軍

団長付き副官、エアハルト・シュライエルマツハである。

「エアハルト・シュライエルマツハ、報告のため参上いたしました」
「ぶっぞ」

テントに入った少年は目を覆った。あこがれの軍団長が、艶やかな寝間着に身を包んでいた。その生地は薄く、マレーネの白く美しい身体が見えるほどだった。

「も、もも、申し訳ありません！ 僕、後ろを向いてますから！」

耳まで真っ赤にした副官の初々しい反応に、マレーネは微笑むと、ガウンに袖を通し、ベッドに腰掛けた。

「いいのよ。私が入つてと言ったのだから。男ばかりの軍に長くいるのも。裸を見られても、どうってことないわ」

「ま、マレーネ様が気になさらなくても、僕は……」

「大丈夫だから。今、ガウンを着たから、こっちを向きなさい。それとも、こんなおばさんの身体を見るのは嫌かしら？」

「そ、そんなこと！」

エアハルトはかぶりをふつてマレーネの方を向いた。女神様のようにだ……。17歳の若き副官は思った。ほのかなるうそくの光に優しく照らされる金髪。ガウンの下からのぞく肌、すらりと長く伸びた手足、母性をたたえた微笑み。自分の上官はこんなにも美しい人だったのか。エアハルトはマレーネから視線を外せずにいた。

第五章 決戦！ 第八十三話

「どうしたの？ エアハルト。私に報告があったのではないの？」

マレーネの問いに、エアハルトは我に返った。

「あ、はい！ 現在、第二種警戒態勢に移行完了しました。2時間おきに歩兵大隊が交代で見張りにつきます」

「ありがとうございます。……本当は皆を休ませてあげたいのだけれど、樂觀は出来ないから……」

「はい。いつ、敵が襲ってくるか分かりません」

「その可能性は低いんだけど……。エアハルト、怖いのかしら？」

ワイバニア第二の実力を持つ軍団長は副官の手のわずかな震えを見逃さなかった。

「は、はい……」

マレーネの前で嘘はつけない。少年は正直に頷いた。

「エアハルト、その堅琴をとってもらえるかしら」

マレーネは、エアハルトのすぐ近くにある棚に置かれた堅琴を指差した。エアハルトは堅琴を両手に持つとおずおずとマレーネに手渡した。

「ど、どござ。……あっ」

マレーネは豎琴ではなく、エアハルトの手首をつかむと、一気に自分の近くに引き寄せた。豎琴が落ち、テントの中に大きな音が鳴った。音が収まる頃、二人はお互いの息がかかるくらい顔を近づけていた。エアハルトの目が驚きで見開き、彼女の顔を見つめていた。

「ま、マレーネ様……」

「何……？」

マレーネは普段の彼女とはかけ離れた艶のある声で尋ねた。エアハルトは、それこそ、心臓が飛び出るかと思っただろう。彼のすぐ下には、マレーネの美しい顔が、さらに下には寝間着からのぞく彼女の裸身があった。何と恐れ多いことだろう。少年は身を起こそうとしたが、マレーネは彼の手首を握り、一向に放そうとはしなかった。マレーネはさらに手首を引くと、顔を彼の耳元に寄せた。

「エアハルト……」

どんな楽器にも優るマレーネの声と共に、彼女の吐息がエアハルトの耳を刺激した。女性に対してまるで免疫のない少年は、自分の気持ちをどう制御したらいいか分からなかった。

「震えがおさまったわね。よかった……」

いつの間にか、彼の手の震えは消えていた。マレーネはエアハルトを解き放つと、落ちていた豎琴を拾い上げた。

「恋人を誘う時は、強引にね。エアハルト」

「からかわないでください！ マレーネ様……。僕には、恋人なんていりません！」

「……でも、いつかは欲しくなるわ。誰かを愛しく思うようになる。それまで、いえ、それからもずっと生き続けるのよ。エアハルト」

いたずらっぽく舌を出したマレーネはすぐに表情を真剣なものに戻した。国のため、戦い死ぬのが軍人の務めとはいえ、彼のような若者が死ぬことはマレーネにとって耐え難いことだったのである。

「……あら、笛の音。敵方かしら。こんなことをする人たちと正直、戦いたくないものね」

マレーネは笛の音に合わせて、豎琴をつまびいた。

「あ、あの……マレーネ様」

「何？ エアハルト……」

「僕、もう少しここにいてもいいですか？」

ワイバニアの聖母は微笑んだ。エアハルトは椅子に腰掛けるとマレーネの旋律に耳を傾けた。

第五章 決戦！ 第八十四話

ワイバニア軍の灯りが見える高台、フォレスタル軍アルレスハイム連隊参謀レイ・ロックハートは遠くにワイバニア軍を見据えながら、笛を吹いていた。灯り、旗印、夜の闇にまぎれてはいたが、レイはその陣容を詳細に把握していた。

もともと、ヒーリーやメアリと並ぶ英才である。その陣容を見ずとも、おおよその陣形を予測出来た。自分の仮説が正しいかどうか、彼は確認する必要があった。

「いい、音色だな」

レイの背後から女の声が出た。

「連隊長。私の数多い趣味の一つですよ。戦うにも、戦うのを止めるにしても、芸術はその糸口になりますから」

「そうか……」

アンジエラは短く言うと、レイの笛に耳を傾けた。美しい調べ。遙か遠くからの豎琴の音とあわせるかのように笛を奏でるレイの背をアンジエラはじっと見ていた。

「音楽だけだったら、こんなにも分かりあえるのに、どうして明日戦わなければならないんでしょうね」

「レイ……」

悲しそうにつぶやくレイにアンジェラは何も言えなかった。自分だけではない。部下もまた、戦うことに悩んでいるのだと。アンジェラは一步前に出るとレイの肩を叩いた。

「戦うことに迷いはあるか？ レイ」

「いいえ。ただ、悲しいだけです。豎琴の音を聞くんじゃない……」

「向こうも同じことを考えているだろうな……」

レイは遠くワイバニアの陣を見渡した。恋人を思うような遠い目をしてしたが、すぐに視線をアンジェラに戻して言った。

「連隊長。俺は、奴らと戦います。連隊長の同胞を殺すことになります。それでも、俺たちには、フォレストルには死んで欲しくない奴が大勢いるのです。彼らを守るために、俺は戦います」

レイはアンジェラに言った。暗がりでも分かるほどの鋭い眼光。もう、迷いはない。アンジェラは確信した。

「ああ、私もだ」

アンジェラもレイに応えた。ワイバニア軍には今も彼女の師や戦友、部下が大勢いる。

だが、フォレストルにもアンジェラの仲間が大勢出来た。自分を信じてくれた友も部下も、そしてアンジェラにあとを託し死んでいく先達も。彼らのために戦いたい。月光に金の髪をきらめかせた美しき女将は密かに覚悟を決めた。

第五章 決戦！ 第八十五話

同じ頃、ワイバニア軍皇帝専用テントのほど近くにある第一軍団長専用のテントに三人の軍団長が集まっていた。第一軍団長ハイネ・フォン・クライネヴァルト、第三軍団長マンフレート・フリッツ・フォン・シラー、第七軍団長ベティーナ・フォン・ワイエルシュトラスの三人が一同に会し、互いに酒を酌み交わしていた。

「ところで、どうして貴公がここにいる？ 私はマンフレートと酒を飲む約束をしていたのだ」

盃の中のぶどう酒を飲み干したハイネが不機嫌そうに尋ねた。

「いいじゃない。私をのけものにするなんてひどいよ。ハイネ君の意地悪。それに、男二人で飲むなんてやーらしんだ。何か変なこと考えてるんでしょ？」

「貴公……っ！」

目を輝かせ、くるくると回るベティーナをハイネは睨みつけた。今すぐにでも剣の錆びにしてやると言わんばかりのハイネにシラーは新しいぶどう酒をつぎ直し、一触即発の事態を回避した。

「悪いな。俺がうつかり先輩に喋ってしまったんだ。あの性格だから、断れなくてな」

「何言ってるの、シラー。大勢で飲む方が楽しいに決まってるわ。本当はヴィクター君も誘いたかったけど、あの子はまだ子どもだから、大人の時間はダメなの」

28歳という年齢とはとても思えない口調でベティーナは胸を張った。

「それに……ハイネ君、お兄さん亡くなられたでしょう？ 少しは明るい方が気分がまぎれるかと思って……」

「貴公……」

「先輩……」

ベティーナはベティーナなりにハイネを思いやって、ここに来ていた。恐らく、シラーの約束などなくとも、ハイネのもとにやってきて、自己流の慰めをしたであろう。多少屈折しつつも、面倒見のよいのベティーナをシラーは笑った。

「何？ シラー。笑っちゃって、気持ち悪いわよ」

「は、ははっ。そんなことないですって！ 先輩、お酒なくなってるじゃないですか。つぎますよ。ハイネ、お前も飲め。明日に支障がない程度にな！」

「ああ、分かっている。マンフレート」

「シラー！ ちょっと、そっちのおつまみとってよ」

こうして、三人の奇妙な宴は夜が更けるまで続いた。

「それじゃ、ハイネ。明日戦場でな」

「ああ、武運を祈っているぞ。マンフレート」

ハイネは親友と固い握手を交わした。後輩達のやり取りに、一同の最年長であるベティーナは優しく微笑んだ。その表情をみたハイネは意外そうにベティーナの顔を見下ろした。

「貴公にも、そのような顔が出来たとは驚きだな」

「あつ、ひどーい、ハイネ君。私だって女なんですからね。それくらい顔はしますよー。……ハイネ君、死なないでね」

ベティーナはハイネに舌を出すと、深刻な表情に戻した。

「その言葉、そっくり貴公にお返しする」

「何？ 私が頼りないって言うの？」

「それ以外に聞こえなかったか？」

「ひどいよね。そんなに冷たいと、女の子にモテないよ？ ハイネ君。……生き残ったらお菓子いっぱい買ってくるね。ヴィクター君と一緒に食べましょう？」

「断る」

ハイネはベティーナの提案をにべもなく断った。

「……貴公の買う安い駄菓子では私の舌が曲がってしまう。ケルンの一日限定20個の特製ザツハトルテなら、喜んでいただきます」

「は、はは……。朝イチから並ばないと大変だ……」

「決して、死に急ぐな。私にザツハトルテを持ってくるまでな」

そう言うと、ハイネはベティーナに背を向けた。ハイネなりの素直でない思いやりだった。美しく伸びたハイネの金髪からは朱に染まった耳が見え隠れしている。決して弱みを見せない筆頭軍団長のかわいらしい姿に、ベティーナは吹き出した。

「笑うな！ 斬るぞ」

「ふふ。それじゃ、斬られる前に退散しないとね。シラー、行くわよ」

「は、はい」

自分よりも上位の軍団長であるシラーを従えて、ベティーナはハイネのテントを出て行った。

第五章 決戦！ 第八十六話

夜の野営地をシラーとベティーナは二人歩いていた。平野を吹く風がやけに冷たい。7月だというのに、どこか亡霊に魅入られたかのような寒気すら感じる風だった。

「いやな風ね……」

ベティーナは愛剣に手をかけながら歩いていた。何かにおびえるような、得体の知れないものをおそれているような感じをシラーは抱いていた。

「どうしたんですか？ いつもの先輩らしくありませんよ」

「嫌な予感がするの。今までとは何か違う。きっと悪いことが起きる。……そんな気が」

ベティーナは立ち止まると、身震いを抑えるように両手で身体をつかんだ。

「先輩、大丈夫ですって。右元帥の作戦は悪くない。俺たちがうまくやれば、勝利は確実です」

「違う！ いちばん心配なのは、あなたよ！！……もしかしたら、ハイン君や、ヴィクター君、私のために命を投げ出しかねないもの。私、嫌なの……。あなた達を失うのが……」

ベティーナは顔を伏せて泣いた。言いようもない恐怖感と喪失感を感じているのだろう。少し長くなった髪をめんどくさそうにかいた

シラーはマントを脱ぐと、ベティーナにそつとかけた。裏には小さく第三軍団の紋章である、稲妻の蒼龍が刺繍されていた。

「先輩。俺のマント、先輩に預けておきます。きつと取りにいきますから」

シラーはベティーナに言うと、彼女の頭に手を優しく乗せた。

「シラー……」

「そんな顔しないでくださいよ。後輩とはいえ、上位軍団長からのお願いです。たまには聞いてください」

涙でぐしゃぐしゃになったベティーナの顔から目を背けて、シラーは言った。苦しい戦いになりそうだ。ベティーナをなだめたシラーは思った。アルマダ史上最大、そして、最後になるであろうミュセドラス平野の会戦前夜は、それぞれのワイバニア軍団長の思いを秘め更けていった。

第五章 決戦！ 第八十七話

「……………あ、あああああつ！」

ワイバニア軍の野営地の中心、皇帝専用テントに女の嬌声が響いた。女は男に体を重ねると、激しく動き回った。

「ん！ ……んうっ！」

女は短く声をのむと、男の胸に倒れ込んだ。女の息が荒く男の胸を打つ。男は女を自分のもとに引き寄せると、唇を寄せた。男が主導権を握るのを許さなかったのだろう。女は男をベッドに押さえつけると、自分から唇を押し付けた。

「ん……………ん、ん！ んうううっ！」

まるで、男を蹂躪するかのように女は暴れた。理知的な印象は影もない。獣のように女は男をむさぼった。

「……………シモーヌ。何を考えている」

情事を終え、ガウンを羽織ったワイバニア皇帝ジギスムントはベッドから身を起こし、シモーヌに尋ねた。汗に濡れたシモーヌの裸身はろうの灯りに照らされ、怪しくぬめぬめ光っていた。

「なんでもないわ。ただ、最後の夜を愉しみたかっただけ」

シモーヌは艶やかに笑った。この世に生を受けて数百年。この笑みで、幾多の男を籠絡させてきたことだろう。ジギスムントは吐き捨

てるように笑い返した。

「そうだな。明日、俺は全てを手に入れる……。今夜はメルキド、フォレストル最後の夜になる……」

わかっていないのね。心の中でシモー又は冷笑した。ジギスムントは過去、どのワイバニア皇帝もなしえなかった覇者の道を信じられないほどの早さで極めつつある。だが、それ故に足許が見えていない。寝首をかく隙は十分すぎるほどある。今のうちに甘い夢に酔いしれているがいいわ。妖艶な姿の下で、シモー又はジギスムントを消す算段を立てていた。

「明日が楽しみだ……。明日、俺は世界の王になるのだからな」

グラスに注いだぶどう酒を一気に飲み干したワイバニアの若き皇帝は声高く笑った。その狂気に満ちた笑いは、テントの外にまで響き渡った。

第五章 決戦！ 第八十八話

メルキド公国の大本営、総合指揮所になる総帥専用馬車に二人の英雄の姿があつた。メルキド公国総帥スプリッツァーと大將軍タワリツシである。

「今夜は眠れんな」

タワリツシは寢酒に用意した強い蒸留酒をあおつた。

「將軍、程々にされよ。酒は薬にもなるが、度を過ぎれば毒にもなる」

メルキドの最高権力者は苦笑いした、アルマダを代表する将もまた、この大決戦を前に穏やかではられないのだ。スプリッツァーは自分のグラスにぶどう酒を注いだ。

「もう、誰も死ぬ姿は見たくはない……。誰も」

「ヴィヴァ・レオのことはすまなかつた。俺が立てた作戦がふがいないばかりにな……」

「いえ、あいつは自分の意志で、勝利を信じて死んでいったのです。將軍が気に病むことではない」

「その上、名高いフランス・ピットのフォレスタル第一軍団まで、確実に失わせるのだ。我ながら、無能さに腹が立つ」

酒毒が回り始めたのか、タワリツシは自嘲した。勇壮、剛胆でなら

すたワリツシがこのような心情を吐露することはめったにない。スピリッツァーが目の前にいるからこそ出せることだった。

「將軍、お気をお鎮めになられよ。アポロンが戦場に現れば、勝利は我らのものです。あれの建造を進められたのは、將軍ではありませんか。明朝は陣頭に立ち、指揮をなされよ。明日は決戦です。將軍の勝利を信じています」

スピリッツァーはタワリツシの手を固く握りしめた。かつてない動員規模、戦術。これらを指揮出来るのは、タワリツシしかいない。人徳にあふれるメルキド総帥はタワリツシに心からの信頼を置いていた。

第五章 決戦！ 第八十九話

ほぼ同じ頃、メルキド第四軍団の指揮所となる軍団長専用馬車の作戦室の扉が開いた。作戦の最終確認のため、作戦室に詰めていた軍師アリー・ゼファアの前に、第四軍団長のデイサリータが寝間着のまま姿を現した。

「お嬢様……」

「アリー。まだ、寝ないの？」

「いえ、作戦の確認をしていただけです。わたしももうすぐ寝ますから。ご安心ください」

メルキド一の美丈夫と言われる青年軍師は、軍服を脱ぐと、デイサリータのそっとかけた。

「ここは冷えます故、お部屋の方でお休みください」

アリーからかけられた軍服の袖をぎゅっと握りしめると、15歳の軍団長はアリーに抱きついた。

「お、お嬢様……」

「……アリーと一緒に寝る」

体にしがみついた主君の髪を優しくひと撫ですると、アリーはそのまま椅子に腰掛け、デイサリータを膝に乗せた。

「申し訳ございません。もう少して仕事が終わりますので、これで、我慢していただけますか？」

頭上から聞こえるアリーの声に安心した少女は軍師の背中に小さい腕をまわして頷いた。

「うん……。アリーといっしょだから大丈夫」

「お嬢様、ゆっくりとお休みください。アリーはお嬢様のおそばを決して離れませぬ故……」

ほどなくして、アリーの胸の中で寝息が聞こえた。主従達の暖かな夜はこうして更けていった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第一話

星王暦2183年7月17日、後に「激動の7月」と呼ばれる星王暦2183年7月、その最も苛烈な一日が幕を開けた。このミュセドーラス平野で行なわれた会戦はミュセドーラス平野の会戦と三国の史書に記されることになるが、巷間に広まった呼び名はいささか異なっている。ミュセドーラス平野大決戦。これが広く流布された呼び名であった。

なぜ、一会戦であるのにも関わらず、このような名が広まったか。それはこの戦いが前例のないほどの大規模であり、三国が同時に激突した史上唯一の戦いであったためである。動員された兵力は、ワイバニア帝国10個軍団10万5千人、メルキド公国4個軍団4万人、フォレスタル王国4個軍団4万人である。また、後方の支援に当たった部隊や非正規戦部隊を含めれば、その数を大きく上回る。これは、現時点で三国が出しうる最大限の兵力であり、この戦いが終わったとき、どの国も戦いを続ける余力はなかったと言われている。

三国最強の将帥と、三国最強の軍団が激突した史上初めてにして、最後、そして、最大の決戦がミュセドーラス平野大決戦であった。

荒れ果てた大地に生暖かい風が吹きすさぶ。ワイバニア帝国軍の巨体がV決戦の地にどっしりとその足音を響かせた。

「これが、ワイバニア帝国軍……」

ワイバニア軍とフォレスタル、メルキド連合軍の双方が見渡せる小高い丘に、フォレスタル軍第五軍団アルレスハイム連隊長アン

ジェラ・フォン・アルレスハイムは立っていた。彼女はその大軍団に身震いした。10個軍団の大進撃である。話や書類で知り尽くしているはずだった。だが、実際目にするると圧倒されてしまう。

有能な軍団長達が指揮する整然と統率された隊列。明確な殺意を持って迫り来る10万の兵。味方に見れば頼もしいが、敵に回せばこれほどの恐怖感を抱かせるとは……。汗が一筋たれるのをアンジェラは感じていた。

「大した軍団ですね。うちの弱小連隊とはえらい違いだ」

隣で双眼鏡を見ていた参謀兼副官のレイが言った。三国の軍事情に明るいレイですら、これほどの進軍を間近で見たのは初めてだった。アンジェラはレイを見た。よく見ると、唇が震えている。恐れているのだ。地上最強の軍団を。恐れているのだ。地を埋め尽くす兵の群れを。アンジェラはレイの肩に手を置いた。

「謙遜するな。私達の連隊は一個軍団に匹敵する。そうだろうか？
レイ」

笑っているように見えただろうか。引きつって見えてはいなかっただろうか。部下達を鼓舞する笑みも、10万の兵の前では、いささかながら曇っているかもしれない。アンジェラは再び副官の顔を見た。

「もちろんです。さすがに、上位軍団には及びませんがね。並の軍団なら渡り合えますよ」

レイは乾いた唇を舐めると、アンジェラに返した。

「ようし。アルレスハイム連隊の初陣だ。せいぜい敵を驚かせてやるように。」

アンジエラとレイの背後に完全武装の2、000の兵の姿があった。フォレストアル軍初の騎兵と歩兵による遊撃機動連隊、アルレスハイム連隊がその全貌を現した。

第六章 ミュセドールス平野大決戦！ 第二話

「全軍、そのままの速度で進撃。菱形陣を崩さぬように、他の軍団にも通達なさい」

ワイバニア軍第一陣の総司令官である第二軍団長のマレーネ・フォン・アウブスブルグは言った。

ワイバニア軍は全軍をほぼ三つの集団に分けていた。一つは第二、第六、第八、第十一軍団で構成される先鋒軍。つづいて、第一、第三、第七、第十二軍団で構成される中軍。そして、最後に第四、第九軍団で構成される後衛軍だった。とりわけ、後衛軍の役割は重大で、万一のときに退路を確保する殿軍と必要時に応じて投入される予備兵力として局面に応じて柔軟に動かねばならなかった。それには、ワイバニア軍の中で最も経験豊富なグレゴールが最適任だったのである。

全軍としては巨大な蜂矢の陣を敷きながら、ミュセドールス平野に突入し、連合軍の両翼をを分断し各個撃破するのがワイバニア軍の戦略構想だった。

「これは大したものじゃ。王者の進軍ここにありと言ったところか」
かつてない大軍を前に、フォレストル第一軍団長フランス・ピットは悠然と笑った。

「笑っている場合ではありませんぞ。軍団長」

からから笑うフランスに長い白髪を三つ編みにした男が言った。

第一軍団参謀長。キングストン・ウエルズリーである。

「相変わらずですな。軍団長は」

自慢の三つ編みをいじりながらウエルズリーは言った。フランシスとウエルズリーが組んで半世紀にもなる。10年前に老齢を理由に引退したが、このミュセドーラス平野の大決戦に先駆け、フランシスの要請により現役復帰したのである。このウエルズリーだけでなく、フランシスは退役した老兵、古参兵に直に声をかけ、現役復帰を呼びかけた。

「若い者を死なせてはならない。アルマダとフォレスタルの未来のためにもう一度力を貸して欲しい」

フランシスは彼らに何度も頭を下げた。しかし、彼らのうちの何人かは頑に復帰を拒んだ。勝っても負けても、この戦いで部隊は全滅するのである。平和な暮らしを手に入れた彼らには受け入れられることではなかった。しかし、それでも、フランシスが声をかけた多くのものが戦線に復帰した。フランシスと共に戦い、散って行きたい。彼らの多くがそう望んだのである。

「お前には本当にすまないと思うとる。キングストン」

フランシスは傍らにいた右腕に声をかけた。

「何。わたしももう、七十二です。十分に生きた。それに、よぼよぼと朽ちて行くのはわたしの趣味ではありませんな」

「そうだった。お前は昔から、洒落にうるさい奴だったからな」

「今もそうです。……それでは、かねてよりの陣形になさいますかな」

「おう！ 第一重装歩兵大隊、第一機動歩兵大隊は横陣用―意！」

七十歳の高齢とは思えぬ程の大きな声で、フランススは号令した。フォレストル軍最精鋭軍団はフランススの号令一下、迅速に兵を動かした。

「坊に伝えい。第一軍団、これより敵と交戦すとな」

急にフランススの表情が変わり、声が低くなった。好々爺の仮面を脱ぎ捨てたフォレストルの戦神の真の顔。ワイバニア軍はこの老境の武人に戦慄することになる。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第三話

フランシスの命令から十数分後、タワリツシ、スプリッツァーの詰める連合軍総合指揮所にワイバニア軍との戦端が開かれたとの報告がもたらされた。

「ついに来たか……」

タワリツシは拳をたたいた。

「將軍、ワイバニア軍がミュセドーラス平野に全て入らなければ、この作戦の意味はありません。第一軍団は意図的に陣形を突破させるはずです」

「わかっている。鶴翼をせばめなければなるまい。だが、問題はその時期だ。判断を誤れば、その時点で我々は負ける」

タワリツシは腕を組んで陣形図を見つめた。そこには10万の大軍に孤軍立ち向かうフランシスの軍団の姿があった。

「全軍、停止」

先鋒軍を率いるマレーネは、フォレスタル軍目前で、その進軍を停止させた。

「マレーネ様！」

副官のエアハルトが泣き出しそうな声を上げた。英明な副官は彼女がどんな行動に出るかよく理解していたのである。

「やっぱり、戦わずにすむならば、そうしたいから。後悔したくないの。心配しないで。エアハルト」

弟を見るような優しい目で、マレーネは言つと、馬を駆り、前線へと走り出した。

「軍団長！ 第二軍団長が！」

「マレーネ殿らしい。全軍停止。一切手出し無用だ」

副官の報告に、第六軍団長のリピッシュは、小さく頷いて命令した。

「何さ！ いいこぶつてね……」

第十一軍団長のザビーネは、あぶみから足を離すと、吐き捨てるように言った。

「そうか……。お前達もよく見ておけ。戦っばかりが戦いじゃないということだ」

第八軍団長のヒッパーは部下達に命じると、事態の静観を決め込んだ。

「ん？ 敵の騎兵が一人、前に出てきたようですね」

「おそらく、この軍を率いる将の一人だろうて……。少し興味がわいた。行ってくる」

フランシスは双眼鏡をウェルズリーに投げると、愛馬を駆け出した。

「あ、ああもう！ 軍団長！ 年のくせに無理して……」

齡七十二。最年長の参謀長はため息をつく、相棒を見送った。

「第一軍団、全員手出し無用だぞ。軍団長が戻るまで待っている」

ウエルズリーは呆れ顔で命令を飛ばした。このようにフランスが無鉄砲でいられるのも、ウエルズリーを信頼したことだった。おそらく、ウエルズリーなしでは、こうも即決を下さなかったであろう。ウエルズリーが引退して以来、フランスは自身の戦術行動に制約をかけていた。用兵において、常に堅実を心がけた。突発的な攻撃、防御に対する柔軟な舞台運用を彼一人では出来なかったからである。それほど、彼が抜けた穴は大きかった。

しかし、ウエルズリーが戻り、古参の熟練兵が復帰したことで、第一軍団は往時の強さを取り戻した。気力、士気ともに十分。軍団全体からみなぎる熱気をウエルズリーは感じていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第四話

フランススは陣形の外に出ると、既に待っていたマレーネに相對した。その様はどちらも威風堂々。凜々しきワイバニアの聖母の姿に、前線の兵士の中には、ため息すら漏らす者もいた。

マレーネはフランススの姿を認めると、馬からおり、深く一礼した。

「初めてお目にかかります。ワイバニア帝国軍第二軍団長マレーネ・フォン・アウブスブルグです。フランスス・ピット軍団長とお見受けいたします」

ピットは馬からおりると、マレーネに返礼した。

「フォレストル王国、第一軍団長フランスス・ピットじゃ。お主がうわさの”ワイバニアの聖母”か。わしの孫娘には及ばんが、このような美しいご婦人に会えるとは、寿命が伸びる思いじゃ」

フランススは冗談まじりに言った。マレーネは聖母のような微笑みを浮かべると、フランススに告げた。

「ピット軍団長。単刀直入に言います。どうか、降伏していただきたいのです」

ピットはマレーネの言葉に片眉をピクリと上げた。

「私達は無益な殺生を好みません。戦わずにことをすすめたいのです。私は兵士の命を、家族を守りたいのです。どうか、聞き入れてはもらえないでしょうか？」

荒野にマレーネのソプラノの聲が響き渡る。風の音すら止んだ、一切の無音。この場にいた兵士、将の誰もがフランスの言葉を待っていた。

「……ふむ」

あごを手に、フランスは考える仕草をした。無言による重圧。木の葉ですら動くことが出来ないほどの緊迫の中で、フランスはマレーネを見据えると、ひとこと言った。

「出来ん相談じゃな」

歴史上、最も爽快で、最も決定的な「NO」が発せられた瞬間だった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第五話

「……なぜ、ですか……？」

マレーネは食い下がるかのように尋ねた。信じられない。そんな表情を浮かべていた。

「お主はたいそう賢い娘さんのようじゃの。交渉の仕方をよく心得ておる。頭のいい人間なら二つ返事で降伏するだろうて」

「私は……」

「わしは頭も悪く、古い人間でな。フォレストルという国が好きなんじゃ。友が、弟子が、息子が、そして部下達が守った森と川、湖にあふれたフォレストルがの」

マレーネの言葉を遮り、フランシスはおだやかに語った。まるで孫娘に語るかのような優しい口調で。フランシスはマレーネに尋ねた。

「仮にお主に降伏したとしよう。メルキドとフォレストルはどうなる？ 民はどうなる？」

「それは……」

マレーネは言葉に詰まった。「寛大な処置」ではこの老人は納得しない。皇帝は恐らく苛烈な占領政策を敷くことだろう。マレーネの立場では善処出来ることなど知れている。いや、皇帝であれば、マレーネの首など容易にすげ替えるであろう。ワイバニア勝利後には何も保証出来るものなど無いとマレーネは思った。

「だから戦うのだ。心付けは嬉しいが、武人は刃で語るもの。美しいご婦人だからとて、手は抜かんぞ」

この強固な意志は崩せない。マレーネは前髪をたらし、下を向いた。

「……残念です……」

「わしもじゃ、お主と旗を違えずに出会っていたらろう……」

「はい。私はあなたに様々な教えを請うたでしょう。あなたのもとで学んだ人たちが羨ましい……」

「……交渉は終わりじゃな」

フランスはマントを翻し、自陣へと馬を走らせた。マレーネは背を向け、フォレストルの英雄に一礼すると、自らの陣へ戻っていった。

「やはり、交渉は決裂か……」

第二軍団に翻った信号旗を見たりピッシュはひとりごちた。

「全軍、戦闘体勢。戦が始まるぞ！ 気を引き締めろ！」

リピッシュは部下達に檄を飛ばした。先鋒4個軍団と、フォレストル第一軍団の戦いがついに始まった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第六話

「マレーネ様！」

陣に戻ったマレーネを副官のエアハルトが出迎えた。

「……だめだったわ。全軍に攻撃命令！ 前方の敵軍団を突破するわ。第一重装歩兵大隊を前へ出し、くさび形陣形で突撃！」

星王暦2183年7月17日は第二軍団の龍旗が最もきらめいた日と言われている。マレーネの性格故に積極的戦闘を行なわなかった第二軍団が、隠していた牙をむき出しにしてフォレストル軍に襲いかかったのである。

「おうおう、何とも整然として、美しい陣形ですな」

望遠鏡でその様子を確認したウエルズリーがため息をついた。

「あの娘御らしいわ。機動歩兵と重装歩兵大隊の準備はどうなっておる？」

「完了していますよ。久しぶりに楽しめそうですな」

老将二人は笑いあった。三十年前、幾度もワイバニア軍団を撃退したフォレストル最強軍団の力が、今発揮されようとしていた。

「いいかあ！ 味方の弓兵と機動歩兵の矢にはあたるなよ！ ついでに、敵の矢にもな！」

がっしりとした筋肉の鎧を身にまとったフォレスト兵が部下を叱咤した。

「むちゃくちゃ言うな。矢を避けながら戦えってか。そんな器用な真似が出来るかよ」

「そうそう」

敵が目前に迫り来ているのに、気負いも恐怖も何も無い。のんきに話ができる余裕すらあった。大軍の突撃が起こす地の震えすら、歓喜に変える。彼らの強さと矜持がここにあった。

「要は死ななきゃいいんだろ？」

「そうだ！……死ぬなよ」

「おう！」

兵士達は互いに構えた槍を重ねあつた。共に死地へと向かう仲間との連帯の儀式。生きて再び重ねあおう。今度は槍ではなく、勝利の美酒で満たされた盃に変えて。兵士達は殺意のかたまりに相対した。

「行くぞ」

両軍の間に轟音が響き渡った。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第七話

「戦いが、始まりましたな」

「うむ」

陣形の中心でウェルズリーとフランスは戦いを眺めていた。ワイバニア軍がどのような戦い方をするか、出方をうかがったのである。

マレーネ率いる第二軍団は重装歩兵による突撃を敢行した。突進力と攻撃力に優れる重装歩兵で一気に突破口を開けようと考えたのだ。これはマレーネでなくとも、どの将も同じ手を考えたであろう。フランスもこのことを予想し、横陣を敷いて防御に徹したのである。

ワイバニア第二軍団はうちつけられたくさびのようにフォレストル軍の防御陣に食い込んでいた。

「マレーネ様。我が軍が勝っています。順調に敵陣を突破しつつあります！」

「そうね……」

エアハルトの報告に、マレーネは目を細めた。もろすぎる。これが名高いフォレストル第一軍団？　ワイバニア屈指の知将であるヨハネスですら手を出せなかった軍団か？　スポンジに指を突っ込んだときのような柔らかな違和感をマレーネは感じていた。

「まさか……！　しまった、全軍後退！　急ぎなさい……！」

「え？」

マレーネは首を傾げる副官に交代を命令した。ワイバニア軍最前線の叫びが悲鳴に変わったのはその直後である。

「うまくいきましたな」

「うむ」

フランススは頷いた。「強いものほど弱い」フランススの極意が陣形に集約されていた。フランススは防御陣の部隊配置をあえて疎にさせ、比較的弱い防御を敷かせた。そして、敵軍を深く攻め込ませることで半自動的に敵を包囲したのである。マレーネが気づいたときには、槍兵の長槍と弓兵の矢が、ワイバニア軍の先頭に殺到していたのである。

マレーネはすぐに先頭の重装歩兵大隊を救出すべく騎兵大隊と歩兵大隊を投入したが、フォレストアル軍弓兵大隊の掃射を前に少なくない犠牲を出していた。

「……なんてこと……」

マレーネは爪を噛んだ。敵方の最強部隊が相手とはいえ、無様な戦いを演じてしまったのだ。このことは次席軍団長である彼女の誇りを大きく傷つけた。苦境にある第二軍団を救ったのは、冷静沈着なリピッシュ率いる第六軍団だった。彼は横陣にわずかな間隙を見つけてると、一個軍団の巨体をむりやりねじりこませ、第二軍団後退の時間を稼ごうとしたのである。

「ほほう、大胆なことをする小せがれもいたもんだのう。褒美をく

れてやれ」

並の軍団なら、全軍崩壊の窮地である局面に、フランスは悠然と笑うと、後方に待機させていた攻城兵大隊に投石機攻撃を命じた。たちまち、第六軍団に石つぶての雨が降り掛かる。

「まともに戦うな！ 機をみて退くぞ！」

リピッシュは投石攻撃が止んだ隙を見計らって部隊を後退させた。フォレストル最強の軍団は、ワイバニア二個軍団を見事に手玉に取っていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第八話

「あのリピッシュですら子ども扱いとは……。恐ろしい老人。第八軍団前進。敵に休む暇を与えな！」

第八軍団長のゲオルグ・ヒツパーは自軍を前進させた。しかし、これは彼にとって大きな賭けであった。第八軍団はヒツパーの資質によつてのみ成立する軍団である。大半が経験の少ない新兵である彼らでは、第一軍団の攻勢に抗しようがない。第二軍団のみで突破可能だと思われていたミュセドーラス平野入り口が、中位と上位二個軍団をもつてしても小揺るぎもしない。さらなる戦力を投入して、事態を打破しなければならぬ。十二軍団長の中でも、グレゴールに次ぐ戦歴を持つヒツパーは判断を下した。

敵第八軍団の動きをいち早く察知したのはウエルズリーだった。

「軍団長！ 敵の右翼に動きがありますぞ」

「そうか……。存分にやれ！」

フランススの指示はたった一言であった。ウエルズリーは後方にさげていた騎兵大隊に攻撃を命じた。

「よちよち歩きの赤ん坊が背伸びして酒を飲んだと見える。ちょっと水でもぶっかけてこい」

第一軍団第一騎兵大隊はすぐさま前進すると、ワイバニア第八軍団に側面攻撃を加えた。

「くそつ！ 脇腹を突かれたか。後退、後退だ！」

フォレストル軍の騎兵がヒッパーの軍団に仕掛けたのは、わずか十五分と言われている。しかし、そのわずか十五分の間で、騎兵隊の先頭は、ヒッパーのいる司令部大隊の目前まで迫っていた。急襲可能なデッドラインを見極めて退いたフォレストル騎兵の手際は見事だったが、ヒッパーの心情は荒れ狂っていた。ワイバニアの中でも戦上手と言われる三人が、そろって一個軍団に翻弄されていたのだから。

「双頭の龍」この戦いに従軍し、生還した一人の兵士がこのときの第一軍団のことをこう評している。一方が左翼と中央を防ぎ、もう一方が右翼を防ぐ。ワイバニア軍を震撼させたフォレストルの英雄が再び戦場に戻って来たのである。

ワイバニア軍後方で殿を守る第四軍団長グレゴール・フォン・ベッケンバウアーは「我が軍苦戦」との報告を受け取った。

「ほほ、さすがにピットじゃ。この手並みからすると、ウエルズリも一緒と見える……。許せ、ピットよ。三十年来の決着、つけられようもない。いずれ地獄で出会うたら、あのときの決着を付けようぞ……。」

アルマダ最古の将は密かに好敵手に詫びた。最前線では、未だ激闘は続いていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第九話

「何と言う男だ。たった一個軍団で、我が軍の精鋭三個軍団を翻弄し、かつ余裕を見せるとは……」

先鋒軍から後方、数キロの地点にいたワイバニア第一軍団長ハイネ・フォン・クライネヴァルトはフランスの戦いぶりに嘆息した。

「お前も戦いたいつて顔だな」

ハイネの背後で声がした。ワイバニア第三軍団長マンフレート・フリッツ・フォン・シラーだった。シラーは笑うと、双眼鏡を構えた。

「……これは、何てじいさんだ。アウブスブルグ先輩と、リピツシユ、ヒツパーのおっさんがまるで子ども扱いじゃないか」

シラーは口笛を吹いた。

「ああ、まさに芸術と言える手並みだ」

「お前にあれだけのこと、できそうか？」

シラーの挑発的な笑いを、ハイネは不敵な笑いで返した。仕合うてみたい。生粋の戦士であり、将であるハイネは血沸き立っているのを感じていた。その様子を見たシラーはハイネに肩を置いた。

「少しは自重してくれよ。ハイネ。また、お前と戦うのはごめんだからな」

「頼んだぞ。第二陣がバラバラになってしまったら、全軍に影響するからな」

シラーは釘を刺した。ハイネは有能な将であり、最強の戦士だ。だが、あまりに若い。若さ故に猪突することも多い。それを止めることが出来るのは唯一シラーだけだった。シラーは敵と戦うことに加えて、ハイネを猪突しないように、見守らなければならなかった。

「すごい……これが、アルマダ最高の将の戦い……」

ハイネとシラーの間を、小さな影がすり抜けた。第十二軍団長のヴィクター・フォン・バルクホルンが双眼鏡をのぞき込んだ。初々しい後輩の姿に、シラーは微笑むと、傍らの親友に言った。

「俺たちはここで待機した方がよさそうだな」

ハイネはうなづくと、前にいるヴィクターに言った。

「バルクホルン。貴公も刮目することだ。このような戦い、恐らくもう二度と見られないだろう。……中軍はこのままの位置を維持。先鋒への手出しは無用。かえって我々の存在が邪魔になるだろうからな」

ワイバニア帝国第二陣は現状を維持した。最前線ではワイバニアとフォレストルの精兵たちが凄惨な戦いを繰り広げていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第十話

「ちくしょう。何だってわたしが動けないのさ。目の前に殺しがいのある獲物がうじゃうじゃいるっていうのに」

第十一軍団長のザビーネ・カーンは腕を組んだ。十二軍団長の中で最も残忍と言われる彼女は動くことが出来ない自分の状況にいらだちを覚えていた。

シモーヌはミュセドーラス平野北側入り口だけが十個軍団の侵入を可能にさせていると断じたが、実際一度に入れるのは三個軍団がやつの幅しか有していなかったのである。これでも広い入り口であつて、他の侵入口がないため、シモーヌの言葉は正しかったと言えるが、大軍にとっては攻めにいく、寡兵にとっては守りやすい地形であつた。

「優等生のおばさんが出しゃばつちゃって、言わんことない。……ああ、じれつたい！ むかつく！」

ザビーネは前方のマレーネに毒づいた。貧民出身の彼女にとっては、上級貴族のマレーネはへどが出る存在だった。

「ザビーネ。少しは落ち着きなさいよ。あたしだって、退屈しているんだからさ」

第十一軍団参謀長、ギーゼラ・ヴァントが言った。重武器であるトマホークをナイフのようにひらひら回した参謀らしからぬ参謀長は、じゃらじゃらついた飾りをいじる軍団長をたしなめた。

「少しは毛嫌いしないで見たらどうだい？ あのワイバニアの聖母が戦っているなんて、めったにないんだからさ」

「あははっ！ それで苦戦？ いい気味！ 日頃すかした顔しちやつてさ。ずっと前から、気に入らなかつたんだ」

ザビーネはあぶみから両足を離すと、腹を抱えて笑い出した。軍団長に出世しても未だ子どものままだ。ベリリヒンゲンの泥臭い貧民街にいたときから、共に人生を歩んで来たギーゼラはザビーネに微笑んだ。

「しばらくは動くんじゃないよ、ザビーネ。動いたら、ただじゃすまないんだからね」

ギーゼラはザビーネに言った。幼なじみは不機嫌そうにむくれると、飾りをいじり出した。

戦闘開始から一時間、ワイバニア軍第十一軍団は爆発しそうなストレスを抱えながら、激闘を繰り広げる三個軍団の後方に留まっていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第十一話

フランスとウエルズリーの芸術的とも言えるコンビプレーによって翻弄されたワイバニア第二軍団だったが、マレーネはこの局面で、上位軍団長らしい手腕を発揮した。リピッシュとヒッパーの助けを借り、後退を成功させると、すぐに戦力を再編して、攻撃を再開したのである。

マレーネは自軍団を三つに分け、フランスの横陣に同時攻撃を仕掛けた。意図的に戦力の不均衡を生じさせて優位に立つピットの戦術を、マレーネは逆手に取ったのである。

マレーネは敵が包囲にかかる直前で部隊を後退させると、さらに全軍を五つに分け、逆突出した敵部隊に再度攻撃を加えた。息つく暇も与えないマレーネの攻撃に、フランスの横陣の鋭鋒はじわりじわりと浸食され、じりじりと後退を始めた。

最前線にいたピットとウエルズリーは馬を走らせ、さらに全軍が見渡せる司令部まで戻っていった。

「さすがは、上位軍団長……。一筋縄ではいかんようじゃの。なかなか恐ろしい娘御だて」

野戦指揮所となる軍団長専用馬車の屋根に上ったフランスは口笛を吹いた。

「……よっと、これは年寄りにはきついですな。……ううむ。あまりいい展開では、ありませんな。前線がこれより後退すると、背後の一個軍団が出しゃばることになります」

息を切らして、やっとのことで屋根に上った老参謀長はフランスに尋ねた。

「いま이지만、仕方あるまい。今のままでは、戦線が保たんからう」

「後ろの一個軍団はどうしますか？」

「たまには、若いものに甘えてみるのもいいだろう。坊の心づけ、無視したのでは師としては失格じゃからの」

「なるほど」

ウェルズリーは自慢の三つ編みをいじって笑った。ワイバニア軍の死角には、未だアルレスハイム連隊が息をひそめている。フランスは彼らに賭けたのだ。フォレストル軍人、アンジエラ・フォン・アルレスハイムの戦いが始まるうとしていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第十二話

「危険です！」

「お前がそんなこと言うとは、意外だな。レイ」

体を張って止めようとするレイをアンジエラは笑った。

「お前だって、わたしの価値を知らぬ訳ではあるまい？」

「しかし……」

アンジエラはワイバニア本国にとって裏切り者である。彼女が姿を現せば、ワイバニアの軍団長たちは彼女をとらえようとするだろう。囷としての価値だけで言うならば、フランス以上のものがあつたかもしれない。

しかし、ワイバニア四個軍団、四万人の矢面に立つのである。しかも作戦に使える兵力はわずか五個中隊五〇〇人。獅子と猫が戦いをするほどの戦力差だった。

「せめて、あと二個中隊……」

「だめだ」

アンジエラはレイの申し出を突っぱねた。

「これ以上、兵力を割けば効果は期待出来ない。わかっているだろうっ？」

「はい……」

「心遣いだけ、ありがたく受け取っておくぞ」

アンジェラはレイに言った。彼女の身を思う副官はアンジェラにマントを手渡した。軍団長クラスのみが羽織ることを許されたマント。ヒトリーが特別に許可をもらい、アンジェラに与えたものだった。アンジェラはマントを羽織ると陣幕を出て行った。陣幕の外には、アンジェラが直率する各隊の隊長が彼女を待っていた。

「アルレスハイム連隊の初陣だ。目標は敵第十一軍団。無茶をするな。訓練通りやれば、恐れるものは何も無い。貴官らの健闘を祈る」

雌伏のときは終わった。各隊の長は剣を高く掲げてアンジェラに返した。敵に位置をさらしてはならない。金髪の女将とその配下は息を殺し、それぞれの持ち場へと散っていった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第十三話

ワイバニア第二軍団は最精鋭と言われた能力を十全に発揮し始めていた。

当初、優勢であったフォレストル軍の戦線を力でおし始めたのである。これには、フランスとウエルズリーも舌を巻いた。万事技巧をこらしたマレーネの戦術から正反対に変わったのだ。これはマレーネ自身の戦術家としての器用さを証明するものにもなるだろう。剛柔組み合わせた戦術展開を行なえる希有の女将。これが、マレーネ・フォン・アウブスブルグの真の姿だった。

マレーネの押し出した敵の戦線をリピッシュ率いる第六軍団と、ヒツパー率いる第八軍団が左右から痛撃した。二人とも確かな経験を持つ、有能な将である。緒戦の愚を再び犯すようなことはしなかった。彼らにはあえて敵を包囲しようとはせず、互いにタイミングをはかると、左右交互に攻撃を繰り出したのである。

「意外とやりますな。さすがは、軍団長だ」

双眼鏡片手にウエルズリーは指で三つ編みをもてあそぶ。くるくる、くるくる。彼の頭脳の中で反撃の策が練られていく。フランスは楽しそうに三つ編みをいじる相棒に微笑むと、彼に少しでも時間を与えた。ほんのわずかだが、戦線を後退させたのである。一瞬だけ、マレーネの軍団に隙が生じる。ウエルズリーは、三つ編みを弾くと、フランスに言った。

「軍団長！ 左翼の軍団に攻撃を集中してください！」

「おう！」

すぐさま、フランススはリピッシュの最先鋒に攻撃を集中した。矢と長槍の雨あられである。第六軍団の鋭鋒はたちまち、ぼろぼろの刃こぼれだらけに変わり果てた。

「全軍、後退！」

リピッシュが後退を命令した直後、フランススは後退した戦線を一気に押し戻した。殺意と鉄の濁流がワイバニア軍を飲み込み、粉砕する。

「持ちこたえなさい！　ここが正念場よ！」

ワイバニアの戦女神が将兵を叱咤した。第二軍団の精兵たちは白銀の鎧を血の紅に染め、傷を負いながら踏みとどまる。がっぷり四つに組んだまま、戦線は膠着し始めていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第十四話

先鋒三個軍団が激闘を繰り広げていたが、残る一個軍団は地団駄を踏みながら、後方で待機していた。ザビーネ・カーン率いるワイバナ第十二軍団である。

ワイバナ第十二軍団は十二軍団中最も残酷で、最も統制のきかない軍団として知られている。一切の降伏を許さず、一切の温情を容れない冷酷非道な殺人集団だった。それだけに兵士個人の戦闘能力は高く、下位軍団でありながら、十二軍団の中でも指折りの戦闘力を有していた。

だが、十二軍団有数の力をもつザビーネの軍団はその戦闘力を発揮出来ずにいた。狭い入り口を三個軍団が占有し続けていたのである。ウエルズリーとフランススのフォレストル第一軍団の手際は巧妙だった。戦線の前進、後退を繰り返し、マレーネ、リピツシュ、ヒツパーを翻弄し続けた。フォレストル第一軍団は狭い侵入口に三個軍団を見事に閉じ込めていた。フランススとウエルズリーはおそろく、にやにやとうす笑いを浮かべていたに違いない。二人は第十一軍団に心理的圧迫を加えていたのである。出られそうで出られない空間に閉じ込めて、気の短いザビーネにストレスを与え続けたのである。

「ええい！ いまいますい！ ム力つく！ いやになる！」

左右にまとめたツインテールの髪を振り回し、ザビーネは叫んだ。もともと、短気な彼女である。戦闘開始から二時間、彼女はよく我慢していたと言える。隣にいたギーゼラはイライラしながら飾りをいじるザビーネに吹き出した。

「また笑ったでしょ！ ギーゼラ」

「ごめんごめん」

ギーゼラはザビーネに謝った。筋肉質の体に愛用の斧。百戦錬磨の戦士を思わせる外見は参謀には似つかわしくなかった。

しかしながら、参謀としての彼女の手腕は確かだった。エルンストやアルバートらトップレベルの参謀には遠く及ばないものの、激発しそうなザビーネを抑え、殺人者の集団をまとめあげた。第十一軍団が軍団としての機能を持っていたのは彼女の能力故だった。ギーゼラはザビーネを横目に前方を見据えた。第八軍団の影に小さな隙間が見える。少しずつではあるが、間が開き始めている。戦線が後退している証拠だ。

ギーゼラはザビーネをつつくと、何も言わずに前を指差した。鼻の頭にそばかすのある少女の面影を残した軍団長はにんまりと残忍な笑みを浮かべるとレイピアを抜いた。

「第十一軍団、左の隙間にねじ込むよ！ ほら、いけいけいけえ！」

殺意をみなぎらせた狼の集団がゆっくりと速度をあげながら前進した。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第十五話

ミュセドーラス平野入り口、その脇に小さな渓谷がある。その幅はわずか数百メートルといったところだろう。大軍の運用など及びもつかない狭く小さな渓谷だった。

物陰に隠れて、アルレスハイム連隊五個中隊五〇〇名が息をひそめていた。

「ふふ」

アルレスハイム連隊第二機動歩兵中隊長アルバート・エイムズが笑った。

「どうした？ 急に」

隣にいた第一機動歩兵中隊長アレックス・コーデイが尋ねた。最新式の連射弓を構えた僚友は再び笑うと、僚友に言った。

「俺たちもずいぶん成長したのかなって。足手まといの第五軍団の中でもえり抜きのはみ出しものの俺たちが、一個軍団を相手に戦うんだからさ」

「ああ」

アレックスは、短く返事をした。エイムズはアレックスを見た。士官学校の同期だったアレックス。勇気と侠気にあふれ、後輩、同輩にも頼られている。そのアレックスが初めて震えている。自分もだ。顔は笑っているが、のどが震えているのが分かる。ちょっとでも刺

激を与えれば、野獣のような軍団はすぐにも襲いかかってくる。かたかたと揺れるスコープをエイムズはのぞいた。

ふと、連射弓の震えが止まった。いや、止められたのだ。アレックスとエイムズが見上げると、アンジェラが二人の連射弓を上から支えていた。

「……連隊長」

「大丈夫だ。お前たちはわたしが育てた精鋭中の精鋭だ。自信を持って」

風と共にアンジェラの金の髪がふわりと浮かび、土煙の中に甘い香りが漂う。アンジェラが常につけている香水の香りだ。機動歩兵中隊二〇〇人を率いる若き隊長たちは、彼らの前に立つ美しき武人の姿に強く引きつけられた。

「さあ、やろっ」

「ふふ、そっだ。やろっ！」

エイムズとアレックスは配下の兵士たちに指で合図した。狭い溪谷の中に金属音が響く。決して小さくはない音だが、第一軍団の激闘の轟音でかき消されることだろう。

アルレスハイム連隊別働隊五〇〇はじつと獲物がかかるとを待っていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第十六話

フォレストル第一軍団は苦境の最中であつた。これは第三者から見れば、確かにそうかもしれない。四番目の新手が突入を開始したのだから。兵力比既に四対一。明らかに絶望的な数字であつた。

しかし、戦いに参加していた将たちの認識はむしろ逆だつたと言えるだろう。狭い侵入口に四個軍団が密集し、動けないでいたのだ。フランスとウエルズリーが意図的にさげた戦線に、四個軍団が見事に誘い込まれる形になつていた。

「軍団長！ このままでは」

「慌てるな。事態はすぐ変わる。第六軍団は前進せよ」

リピッシュはあえて前進を命じた。自軍団が動くことで侵入口を広く取り、味方の動きをよくしようと考えたのである。だが、この判断は誤りだつた。フランスは下げた戦線を弧状に再構築すると、第六軍団の側面から攻撃を仕掛けたのである。

「しまった！」

リピッシュはうめいたが、どうしようもなかつた。横腹をさらした第六軍団は陸に打ち上げられた巨鯨のように身動きを取れないでいた。苦痛にのたうち回る第六軍団に腐乱しすらフォレストル第一軍団は容赦なく責め立てた。たちまちのうちに、両軍の境に死体の山が築かれる。あるものは味方の死体を踏みつぶし、またあるものは、味方の死体を盾にして敵と戦っていた。

「全軍後退！ もっと速く動きなさい！」

マレーネは必死で後退を命令していた。救援を出したかったが、まずはスペースを確保することが何よりも優先だった。このままでは第六軍団はなすすべもなく壊滅してしまう。仲間を失わぬためにも、マレーネは一刻も早く兵を退かねばならなかった。

「何やってんのさ！ ばっかじゃないの！」

愛馬を駆りながら、前線の様子を見たザビーネは大先輩を鼻で笑った。

「このまんまじゃ、危ないね。わたし達は左翼から攻撃するよ」

参謀長のギーゼラは、ザビーネに言った。しかし、一種の疑念を抱いていた。敵軍は半弧状の陣を敷いて第六軍団を痛撃している。しかし、左翼はから空きの隙だらけだ。まるで攻めてくださいと言わんばかりに。畏かもしれない。第十一軍団随一にして唯一の知恵者は自らの判断に迷っていた。

その答えがギーゼラに与えられたのは、わずか数分後のことだった。狭い隙間を通過するため、長く伸びた第十一軍団の隊列。その中央の司令部の側面部にフォレストル軍が放った矢の雨が降り注いだのである。

「敵襲です！ 数、約五〇〇！」

「伏兵だつて！？ 味な真似をしちゃつてさ！」

ザビーネは矢が飛来した方向に目を向けた。何と言う運命、何と言

う偶然だろう。ザビーネは直接、伏兵した将の姿を目の当たりにすることが出来たのだから。

護衛二人の兵士と共に、アンジェラがザビーネの前に立っていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第十七話

溪谷を吹く風に、金色の髪と翡翠色のマントがはためいた。仁王立ちするアンジェラの手には宝珠を頭上にいたたく龍の旗、フォレスト軍の軍旗が握られていた。その姿、凜として堂々。勇壮な美の極致とも言えるだろう。マレーネとはまた異なった戦女神の趣を漂わせていた。

「アンジェラ・フォン・アルレスハイム……。生きていたのか……」
アンジェラの姿を見たギーゼラは驚きに声を失った。馬鹿なことが……。死んだはずだ。ギーゼラは全ての事態を把握した。畏だ。敵が侵入口に長く居座っているのも、第十一軍団が入れるだけの隙間をあけてくれたのも。ギーゼラは慌てて進言した。

「ザビーネ！ これは畏だよ！ 無視するんだ。敵はたった五個中隊。あたしたちに敵う訳がないんだから！」

幼なじみの進言をザビーネは無視した。いや、耳に入っていないかったのだ。ザビーネは驚きと喜び、そして驚喜の入り交じった笑みを浮かべた。

「うふ、ふふふ。あーっははは！ 最っ高！ そう、そうじゃなくちゃ！ よみがえったのなら、何度でも殺してあげる！ 切り刻んで、踏みつぶして、その傷だらけの顔を何度でもえぐってあげる！」

人を殺す愉悦にひたる笑い。ザビーネの軍団長たる証。残忍さと冷酷さを併せ持つ稀代の殺人者、ザビーネ・カーン。この笑みを浮かべた以上、誰にも止められない。たとえ、それが畏であったとして

も。ギーゼラはため息をつき、腹をくくった。恐らく、自分は命を落とすことになるだろう。アンジェラ・フォン・アルレスハイムの知勇にはかなうべくもない。だが、せめてザビーネだけは。悪夢のような日々と地獄のような貧民街から共に這い上がって来た半身だけは守り抜いて死んでやる。ギーゼラは悲壮な決意を固めた。

「第十一軍団、全軍であのゴミを片付けるよ！ いい？ アンジェラは、あの裏切り者だけは殺さずにわたしのもとに連れてくるんだ」
ザビーネは全軍に命じると、馬をアンジェラの方に向けた。ギーゼラは参謀の一人を呼び寄せると、耳打ちした。

「襲撃する兵力のうち、第五歩兵大隊と第二弓兵大隊はここに待機だ。それくらいの兵力なら、ザビーネの目も、相手の目もごまかせる」

「何故、そんなことを……？」

「ヤバいことになるかもしれないからさ。あたしが全責任を取る。もしも、本隊に何かあったときは、後方の第三軍団に合流しな。嫌われ者の第十一軍団だけどね、第三軍団のヘッセ参謀長にはよくしてもらったんだ。少なくとも、この戦いだけは、悪いようにはしないさ」

「参謀長……」

移動を始める軍団の中で、ギーゼラは手紙を急いでしたためると、参謀に手渡した。

「あたしのサインと印だ。部隊の指揮はあんに委ねる。それから

……」

筋骨隆々の男勝りの女参謀長は、一人にしか聞こえない声でささやくと、優しく微笑んだ。

「参謀長……」

部下は最敬礼して上官を見送った。ギーゼラは、ほほを染め、少し照れくさそうに笑うと、「早く行きな」と部下を手で払った。ギーゼラ・ヴァント最後の戦いが始まった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第十八話

「敵軍、転進しました！」

「やった……」

アレックスとエイムズはワイバニア軍が津波のように押し寄せる様子を見た。殺気をみなぎらせて、襲い来る、屍鬼の軍団は訓練を受けた彼らですら、恐れおのくには十分だった。

アレックスとエイムズは背筋に冷たいものが走るのを感じた。

「どうした。二人とも。お前たちには百人からの部下がついているのだぞ。そんな調子でどうする？」

彼らの頭上から涼やかな声が聞こえた。アンジェラが二人に声をかけたのだ。かつて一個軍団を束ね、フォレストル第二軍団と互角の死闘を演じた名將は、悠然と部下に言った。

「計算通りにことは運んだのだ。胸を張れ。部下を叱咤して、前に進め。敵は今にも襲いかかってくるぞ」

一歩間違えれば危機的な状況にも、アンジェラは笑みすら浮かべていたと言う。彼女は二人の肩を叩くと、彼らに部隊を率いらせた。背後に迫り来る敵軍を見据えると、アンジェラは愛馬に跨がった。

「軍団長！ 前方にアルレスハイム軍団長が！」

伝令の声にザビーネは眉をつりあげた。

「アルレスハイム軍団長？ あいつは、もう軍団長じゃないんだ。ただのアルレスハイム。いや、裏切り者のアルレスハイムだ。全軍、全速力で奴のあとを追いな！」

ザビーネは舌なめずりした。彼女にとっては至福の瞬間だった。兵力比は一对二十。獲物はもう、口の中に入りかけている。あとはどう味わうかだ。

ひと思いに首を切るか、兵たちの前で辱めてからなます切りにするか、顔の傷をえぐりながら全身を切り刻むか。苦痛に歪むアンジェラの顔を見ることがどんなに楽しみなことだろう。弱者をいたぶる愉悦に、ザビーネはひたっていた。

「意外と遅いものだな。これでは餌の価値がない」

アンジェラは背後の軍団を一瞥してつぶやいた。敵から見える位置にいなければ、囷の価値がない。手綱をひねり、愛馬の速度を落とす。さあ、来い。もう少し、あと少しだ。あと少しで、敵の軍団を地獄の釜にたたき落としてやれる。目の前に、離れ行く部下をみながら、アンジェラは孤独な戦いに集中していった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第十九話

「ほらほら！ とつとと追い立てるんだよ！ 矢で射かけな！ 獲物が目の前にいるんだ！」

ザビーネは残忍な笑みを浮かべて部下に命令した。その狂気をはらんだ笑いは長年仕えていた部下たちでさえ恐怖させた。

一万人の大軍団がよつてたかつて、たつた一人を追いつめている。ハインがいたら嫌悪と侮蔑の眼差しでザビーネを見たであろう。これは戦争ではない。戦いですらない。ただの狩りだ。後方からやつと追いついたギーゼラは狂気に満ちた軍団を見て思った。

「ザビーネ！ 少し落ち着きなつて。伏兵がいるかもしれない。地形をよく見ないで深入りするのは危険だよ」

「あはは！ どこが危険？ 敵はたつた一人。多くて五個中隊。皆殺しするのはあつという間だつて。ギーゼラ。あんた、何神経質になつてんの？」

「嫌な予感がするんだ。あんただけでも戻つて……」

「何で戻るの？ 獲物が目の前にいるんだ！」

「あんたは軍団長なんだよ！」

腹に響く重低音をかき消して、ギーゼラは叫んだ。

「……本当に、どうしたんだ？ ギーゼラ。いつものあんたらしく

ないよ」

「ザビーネ。相手はあのアンジェラ・フォン・アルレスハイムだ。戦上手なのは皆知ってる。あと数年経てば、上位軍団長入り確定だった女だよ。そんな女が、ただ逃げるだけなんて訳はない。一個軍団を相手にする訳がない。深入りは避けるんだよ！」

「今のうちに、討ち取れば問題ないよ」

ザビーネはボウガンを片手に構えた。照準器の真ん中に翡翠色のマントをなびかせたアンジェラの姿が入る。ザビーネが引き金をしぼろうとした瞬間、照準器の中の女が何かを地面に放り投げた。狭い溪谷に、たちまち煙が充満する。

「煙幕だ！ 全軍停止。毒煙かもしれない。防毒マスクを着用しな！」

軍団長よりも早く、的確な指示を筋骨隆々の参謀長は下した。

「あんたも、ほら！ 惚けてないで、マスクしな！」

ギーゼラはザビーネの馬に飛び乗ると、無理矢理親友にマスクをつけた。悔しいが、視界が完全に閉ざされている。煙が晴れるまで、まったく身動きがとれない。逆に敵は想いのままに攻撃を仕掛けてくるはずだ。音もなく、煙にまぎれて。そうなったとき、狂躁状態になった軍団をまとめることができるか……。嫌な予感が当たってしまったことをギーゼラは思っていた。

「ふ、ふふふ。あははは！ アンジェラあ！ 大したことでくれるよね！ 決めた！ 決めたよ。どうやって殺してあげるか。龍の

爪で体を引き裂いてやるよ！ それから死体は餓えた翼竜にくわせ
るんだ。首だけはちゃんを残してあげる。あたしが遊ぶためにね。
あははは！ 楽しみ！ さあ、あ、出ておいで！ アンジエラ・フ
オン・アルレスハイム！ 愉しんで殺してやるよ」

狂った笑いをする親友を前に、若き戦士は命令を下した。

「龍騎兵大隊を呼びな。最終局面だ」

第十一軍団首脳部は龍騎兵の投入を決定した。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第二十話

「これでは、ちががあかないわ。龍騎兵大隊を投入しましょう。第十一軍団は……。今は無視しましょう。軍団の運用権は軍団長にあるわ。上位だからと言って、おいそれと命令を下す訳にはいかないわ。第六、第八軍団にも龍騎兵大隊投入の旨、通達なさい」

マレーネは副官のエアハルトに命じた。戦線は膠着、いや、むしろフォレストル軍が押していた。フランシスの第一軍団の攻勢をもろに受けたリピツシュ率いる第六軍団は、大きな犠牲を払いながら、なんとか後退に成功していた。マレーネの後退がもう少し遅かったら、リピツシュの首と胴は離れていただろう。フォレストル軍はリピツシュが苦心の末に構築した防御陣を突破し、司令部にまで達したのである。司令部大隊長の機転と武勇によって撃退されたものの、司令部の動揺は大きなものがあつた。態勢の建て直しを図るため、第六軍団はフォレストル軍との距離を保ち、マレーネ率いる第二軍団の左翼前方に後退した。

「悔しいが、兵の強さ、戦術、どれをとっても向こうが数段上手だ。アルマダの掟、今こそ使わせてもらおうとしようか」

マレーネの通達に、リピツシュは頷いた。歩兵同士での戦いは勝てない。「龍騎兵は歩兵に勝つ」古来からのルール通りの戦いをする時が来たのだ。ワイバニア軍背後の空に、幾千の影が広がった。空の支配者、ワイバニア軍龍騎兵隊がその姿を現したのである。

「三十年前を思い出しますなあ……。あの龍の群れ。いよいよ本気を出して来たに見える」

「うむ」

双眼鏡を下ろしたウエルズリーはフランスに言つと、老将は短くうなづいた。

「連合軍全軍に、対閃光、音響防御を命令せよ」

「はい」

フランスは伝令に言った。伝令はその場で一礼すると、司令所屋上に備えられた矢を天に向けて放った。高い音がミュセドーラス平野にこだまする。続いて、平野中から矢の音に應えるように、同じ音が響いた。その音は、遙か後方の連合軍本陣にも伝わったのである。

「この音は……」

「ピット爺、いよいよ、やるつもりだな。……っ！」

ヒーリーは総合指揮所から飛び出すと愛騎の名を呼んだ。

「ヴェル！」

ヒーリーの声に龍の相棒はすぐに応え、地上に舞い降りた。

「ようし、ここら辺はちょっとうるさくなるからな。お前はこれをつけなきや……。いやがるな！ おとなしくしろよ。ヴェル」

ヒーリーはいやがる相棒を押さえつけ、目隠しと耳栓をした。

「心細いなら、俺がそばにいてやるから。……ちよつとの間、じつとしてくれ」

ヴェルの頭を抱いたヒーリーは光よけのゴーグルと耳栓をすると、戦場を見た。

「投石機隊は？」

「既に、用意はできています。あとは軍団長の命令あるのみです」

フランスは目の前の黒い雲を見つめた。ただの雲ではない。恐ろしいほどの戦闘力を秘めた龍の雲。次第に大きくなる恐怖と殺意のかたまりが、さらに大きくなるのをフランスはじつと待った。

一分。フランスはまだ黙っているが、眼光は鋭く空を見据えている。

まだか……。ウエルズリーも、伝令もフランスの言葉を待っている。ウエルズリーのあごから汗が一滴落ちた。その瞬間だった。ピットはひと際大きな声で命令した。

「撃てええええええっ！」

第六章 ミュゼドーラス平野大決戦！ 第二十一話

フランススの号令のもと、第一軍団が保有する全二〇基の投石機から、同じ数の砲丸が放たれた。砲丸は風圧に負け、自壊すると、それぞれ一〇〇の子砲丸に分裂した。

「……なんだ？ まずい！ 全隊、散開……」

先頭を飛ぶ第二軍団龍騎兵大隊長ワルター・フォン・ティボーが叫ぶと同時に、二〇〇〇の砲丸が一斉に炸裂した。

昼間の太陽の数倍は明るくしたような閃光と、地を揺るがすほどの轟音が上空を飛ぶ龍たちに襲いかかる。視覚と聴覚に大きなダメージを受けた龍の群れが意識を失い、次々と落ちていった。龍騎兵大隊の精鋭たちは突然の危機にも懸命に、そして冷静に対処したが、制御を失った龍に彼らが出来ることは、何もなかった。地面に叩き付けられる前に、彼らは泣きながら愛騎を捨てていった。そして龍たちは彼らが属する軍団に真っ逆さまに突っ込んで行ったのである。

「何て……。何てことを……」

落馬し、一時的にはあるが、閃光と轟音で、視覚と聴覚を奪われたマレーネは、痛みと憎しみに顔を歪めた。どんなときも慈愛の心を失わなかったワイバニアの聖母が初めて憎悪の感情を現したのである。

「マレーネ様！ 伝令から、報告です！ ……マレーネ様！ しっかりしてください！」

副官のエアハルトが血相を変えて、マレーネを助け起こした。泣きそうな顔で、彼はマレーネに何か言おうとしていたがマレーネには彼の言葉が聴き取れなかった。マレーネは顔を青くさせながら少し笑うと、紙とペンを取り、指示を書くと言われ彼に手渡した。

「全軍、散開……。わかりました！」

自分自身も耳をやられている。それでも構わずに大声で話した副官は、何とか正気に戻した馬を駆り、伝令に走っていった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第二十二話

「こんな猫だまし。もう二度と通用しないでしょうなあ……」

地に落ちていく龍を見て、ウェルズリーはしみじみと言った。

宮廷魔術師ラグニール・ド・ビフレストの最新作、対翼竜閃光轟音魔術散弾は凄まじいほどの威力を示した。翼竜は人間の数倍も優れた感覚器を持つ。その感覚器、とりわけ目と耳に強烈な刺激を与えることで、敵翼竜を戦闘不能に陥れる兵器。それが対翼竜閃光轟音魔術散弾だった。これにより、最前線上空にいた四個軍団の四個龍騎兵大隊四〇〇〇名は全滅した。それだけではない。光と音の余波は戦場にいた者たち全てに襲いかかった。

この決戦に参加した全十軍団の翼竜が全て戦闘不能になったのである。中でもハイネの愛騎レイヴンの傷は最も深かった。他の翼竜と一線を画す感覚器を持つエメラルド・ワイバーンである。筆舌のしようもない苦しみにのたうち回り、泡を吹き、その巨体をけいれんさせた。

「レイヴン！ 龍医を呼ぶのだ！ 早く！」

目の見えない体を引きずり、相棒にすがりついたハイネは叫んだ。だが、閃光と轟音は馬に、龍に、等しく被害を与えた。練度、土気、共に高い第一軍団ですら、恐慌状態寸前になっており、軍医や翼竜専門の医師である龍医の到着は遅れに遅れたのである。

「レイヴン、待っている！ すぐによくなる！」

愛騎を励まし、ハイネは軍団の統率に努めた。軍団のパニックを抑えることが、医療部隊の展開を早くする近道であると考えたのである。

前線の軍団長たちは敵軍の攻撃に加えて、自軍の戦力の建て直しにも時間と精力を注がねばならなかった。戦端が開かれて三時間、侵入口の戦いは混乱を極めていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第二十三話

「これほどの威力とは……。ラグの作った砲弾は桁違いだ」

ばたばたと地面に落ちていく龍を見て、ヒーリーはつぶやいた。これで、少なくとも今日一日は敵の龍騎兵は使い物にならない。戦いが優位に運べる。ヒーリーはこぶしを小さく握りしめた。

ヒーリーの場所は戦場から距離が離れているが、轟音と閃光はここまで届いている。傍らのヴェルががたと震えていた。大きな音が生み出す振動に当てられたのだ。ヒーリーは相棒を優しくなでた。

「大丈夫だ。ヴェル。お前が怖がるものなんか何も無いぞ。もう終わったから、落ち着け……」

防音、耐閃光の用意をしていたとはいえ、前線ではいささか混乱も生じていた。機動歩兵大隊と、騎兵大隊の軍馬が振動によりパニックを起こしたのだ。数は少なかったものの、少しばかり陣形が乱れてしまっていた。

「やむを得んな。こればかりは……」

「ええ」

馬車の上から、フランシスは息を吐いた。敵軍の統制が乱れている今が好機ではあったが、最前線の歩兵と後方に戻っていた騎兵の足並みが揃っていない現在、うかつに攻め込むのは上策とは言えなかった。

フランスはさらに戦線を下げると、守りを固めさせた。

「せっかくのチャンスですが、まだ、我々が崩れるときではありませんからな……」

ウエルズリーの言葉に、フランスはうなづいた。まだ、まだ崩れる訳にはいかない。敵がさらに本腰を入れるまでは、侵入口を通してやるわけにはいかなかった。

「まだまだ、もう少し、このじじいめに付き合ってもらうぞ」

フランスは敵がひしめきあう侵入口に目を向けた。

一方、ザビーネら第十一軍団の事態はさらに深刻だった。煙幕の中にいたために、閃光からは辛うじて身を守ることが出来た。だが、音はそうはいかない。狭い溪谷を音が反響し、軍馬は驚き、暴れ回った。聴覚を奪われた兵士達は頭蓋を打ち付ける音にのたうち回っていたのである。

「ちくしょう！　ちくしょう！　ちくしょう！」

落馬したザビーネは痛みに顔を歪めて叫んだ。煙幕で前が見えない。聴覚も奪われ、馬は地面に転がり、シヨックで身を震わせている。怒りに我を忘れたマレーネはレイピアを馬の首に突き刺した。音にすらならない、馬の断末魔の鳴き声が谷に響く。馬が音を発するのを止めたあとも、ザビーネは何度も馬に剣を刺し続けた。生暖かい馬の血にまみれ、ザビーネは笑い始めた。命を奪う高揚感に支配され始めたのだ。

「う……う、ザビーネ……」

ギーゼラは腕を抑えながらうめいた。骨は折れていない。だが、打ち身がひどい。鈍い痛みに耐え、立ち上がった彼女の肩を伝令が叩いた。耳鳴りがひどい。ほとんど聞こえない。ギーゼラは、自分の耳を指差し、首を振ると、伝令は紙を手渡した。

「龍騎兵大隊、全滅」

たった一行だけ書かれた紙に、ギーゼラは目を疑った。敵部隊に唯一打撃を与えられる龍騎兵が全滅したのである。これでは敵の思いつぼだ。ギーゼラは頭を押さえ、何も見えない前を見据えた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第二十四話

小さな渓谷では、時折強い風が吹く。平野の外で吹く弱い風が狭い谷間によって増幅されるのだ。音を立てて風が煙幕を吹き飛ばした。

「……………風が、煙を……………」

ギーゼラは空を見上げた。白い煙が晴れ、青く澄んだ空が見える。戦いの無いときもあるときも、ギーゼラは空を見るのが好きだった。どうしようもない殺人者でも、空は優しく包み込んでくれる。このときもギーゼラは空に救いを求めた。しかし、空はときに無慈悲な姿を見せることもある。

谷の上に千を超える兵士が長弓を構え、眼下の第十一軍団に狙いを定めていた。前方にも完全武装の歩兵が弓を構えて威嚇している。第十一軍団は包囲のただ中に置かれたのである。

「ザビーネ……………」

何も言えず、立ち尽くす軍団長の肩をギーゼラは叩いた。この戦いはもう負けだ。ザビーネの命も自分の命も既にアンジェラの手の中だ。ザビーネ自身もよくわかつているはずだった。

「龍将三十六陣、臥龍……………。見よう見まねですが、こんなもんでしたかね？」

谷の上でレイは隣のアンジェラにウィンクした。轟音閃光弾が炸裂する直前、アンジェラは渓谷の上に戻っていた。彼女は副官を驚きと賞賛の入り交じった表情で見つめた。臥龍は上と左右、前から立

体的に敵軍を完全包囲する戦術である。地の利を使ったとはいえ、タイミング、その極意をレイは完全に理解し、それを再現して見せた。士官学校時代はヒーリーをも凌ぐと言われた若き戦術家は、その才能を余すこと無く発揮したのだった。

「……今日ほどお前を見直したことはないぞ、レイ」

「大したことありません。きっと、ワイバニア第一軍団なら、もっと上手にやれたことでしょう」

「見たこともないのに、よくできたものだ。第一軍団は、三十年来、一度もベリリヒンゲンから出たことがなかったというのに……」

「文献ですよ。士官学校に残されていた史料から見ました。これを抜け出せた軍団はありませんでした。……ただ一つをのぞいて」

「フォレストル第一軍団……」

副官はだまつてうなづいた。

「当時、第三軍団長だったペンドルトン卿がいなければ、第一軍団も全滅していたでしょう。恐ろしい戦術です。……連隊長、あとは翼を閉じるだけです」

「ああ、だが、待ってくれ」

「連隊長！」

レイにはアンジェラのすることが予想出来た。あまりにも危険だ。前を歩くアンジェラをレイは追った。アンジェラは兵をかきわけ

と、ザビーネの前に出た。恐らく最後になるであろう、二人の会話の始まりだった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第二十五話

谷の上に立ったアンジェラの姿を見たザビーネは並の兵ならば視線を合わせただけでも殺すほど殺気のこもった眼差しで、彼女を睨みつけた。

「アンジェラ・フォン・アルレスハイム……」

爆音からまだ、完全に聴覚が回復していないザビーネは耳をおさえて言った。言葉を話すのにも、少し耳が痛む。長い間味わったことのない痛みにも、ザビーネは顔をしかめた。

「お前達に勝ち目はない。降伏しろ」

アンジェラはザビーネに言った。ザビーネ本人はアンジェラが何を言ったかまではわからなかった。だが、唇の動きで「降伏」の二字だけは理解出来た。降伏？ 戦いもせず？ たかだか五個中隊に？ あわれみにも似たアンジェラの表情がザビーネのプライドに傷をつけた。ザビーネはアンジェラに向かって叫んだ。

「降伏？ あはは、バツカじゃないの？ 戦いもしないで、そんなことすると思ってるの？」

「頼む、降伏してくれ……」

「連隊長……」

「敵」と認識している。彼らを倒すための作戦も立てて来たが、相手はともに翼将宮で円卓を囲んだ仲だ。苦しいだろう。レイは悲し

げな表情を浮かべる上官を見つめた。

「嫌だね！ 裏切り者のアルレスハイム！ アンタがここで死ねば形勢逆転じゃん！ さっさと死にな！ 裏切り者！」

ザビーネはアンジェラに向けてボウガンを構えた。

「！」

「死ねえ！」

照準器の向こうにアンジェラがすっぽりと収まっている。ザビーネは狂った笑みを浮かべて引き金に手をかけた。

「連隊長！ ……かまわん、撃て！」

「レイ！」

ザビーネが矢を放つ前に、第十一軍団に向かって千を超える矢が殺到した。

「くっ！」

これまでかとザビーネが思った瞬間、黒い影がザビーネに覆いかぶさった。影の中でザビーネは矢が身体を貫き、肉を裂く音を聞いた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第二十六話

「は、はは……。ザビーネ。あんたって……。本当にばかなんだから……」

「ギーゼラ！」

ギーゼラは全身に矢を受け、力なく言った。口からはせきと共におびただしい量の血が流れている。ギーゼラは最後の力を振り絞り、ザビーネの頭を撫でた。

「ギーゼラ！ 死なないで！ ギーゼラ！」

「無茶、言わないでよ……。話すのも、もう、目も……」

ギーゼラは頭を撫でた腕をたらした。もう腕をあげる力を残されていなかった。彼女は身体を震わせた。

「ザ、ビーネ……。死……」

ザビーネにずしりと重み加わった。親友の重みだった。傍らにいた唯一の友。地獄を共に暮らし、這い上がって来た友。ザビーネは永遠にその友を失った。

「あ、うおおおおおー！」

ザビーネの声にならない叫びが溪谷に反響する。聴力を取り戻し始めた兵士達は、軍団長の咆哮を聞いた。

「ザビーネ……」

谷の上からアンジェラはザビーネを見下ろした。親友の亡骸を地に横たえたザビーネは憎悪の眼差しでアンジェラをにらみつけた。

「殺す！ 殺す！ 殺す！」

「ザビーネ。……もういい。降伏しろ」

アンジェラは力なく言った。ギーゼラの死は彼女の本意ではなかった。共に戦って来た仲間を討つのは辛い。憎しみを込めたザビーネの目とは反対に、悲しげな目で、アンジェラは彼女を見つめていた。

「……殺す！」

それ以外の言葉を全て忘れたかのように言った。谷の上で弓を構える音が聞こえる。彼女の殺意にアルレスハイム連隊は、ボウガンの矢をもって応えようとしていた。

「レイ、待て……」

アンジェラは手を挙げ、ボウガンを構える参謀を制した。

「ザビーネ、これが最後だ。降伏しろ」

変わらぬ目で、アンジェラはザビーネで言った。

「その目だ……。あんたは、その目で、あたしの何もかも奪っていく！ 友達も！ 手柄も！ ……好きな人も……」

ザビーネは涙を一筋流した。

「ザビーネ。お前は、ヨハネスのことを……」

アンジエラ言葉がザビーネを激昂させた。怒りと狂気に支配された鬼神は顔を歪めると、再びボウガンを構えた。

「レイ！ よせ！」

レイはザビーネに狙いを定めている。アンジエラがレイに命じた。

「死ねよ！ アンジエラ！」

三度目、心臓を狙った矢はアンジエラに届くことはなかった。ザビーネの額をレイが放った矢が貫いたのだ。鈍い光を放つ流星がザビーネへと降り注いだ。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第二十七話

なんだ？ あたしは……。何をしているんだ。何も聞こえない……。ギーゼラ？ 馬鹿だな。なに、地面で寝てるんだよ。そんなところで寝たら、風邪ひくつて。しかたがないな……。身体が動かない？ 血？ あたしの血？ 矢がいつぱい……。あはは、そうか、死ぬんだね……。あたしも、みんなといっしょに……。

星王暦二一八三年七月一七日、ザビーネ・カーン戦死。二四歳だった。

軍団長を失った第十一軍団は恐慌状態に陥った。要を失い、集団としての秩序を失った。兵士の群れは水の流れのように、出口へと殺到する。

「撃て！」

矢の雨は隊長、兵士の分け隔てなく降り注いだ。恐慌がさらなる恐慌を生み、ワイバニア軍は味方を踏み砕きながら逃げ惑う。溪谷の中は地獄と化していた。

「馬鹿が！ なぜ、撃った！？」

アンジエラはレイを殴り飛ばすと、胸ぐらをつかんだ。レイは唇から血を流し、上官に言った。

「わたしの役目は、作戦面の助言だけではありません。連隊長、あなたの命を守ることも含まれています。……。あなたを死なせたくなかった。あなたを殺そうとする者がいれば、わたしはためらうこと

なく殺します。たとえ、あなたに憎まれたとしても……」

アンジェラに睨みつけられたレイは彼女に言った。アンジェラはレイをつかんでいた手を放すと、顔を伏せた。

「わかった……。すまなかった、レイ。敵はほぼ壊滅状態だ。ヒリー殿に伝令を頼む」

「はい……」

アンジェラは谷底を眺めた。視線の先にザビーネとギーゼラの遺体があった。偶然ではあったが、ギーゼラの手にはザビーネの手が重なっていた。彼女らが望んだ結末ではなかったが、二人はほぼ時を同じくして、天上へと旅立った。共に苦しい時も、楽しい時も分かち合った友は最後まで運命を共有しあった。アンジェラは翡翠のマントを脱ぐと、谷底へと飛ばした。マントは二つの痛々しい亡骸にかかった。

「さらばだ、ザビーネ・カーン。いずれ、地獄で会おう……」

他にを背にアンジェラは静かに言った。風に乗って水滴が一つ、谷へ落ちていった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第二十八話

第十一軍団壊滅。その報は敵味方問わず戦場を駆け巡った。

「やりましたな」

「おお！」

フランスとウェルズリーは互いの手を握りしめた。前哨戦における初の完全勝利だった。フォレストル第一軍団の将兵達は勝利に沸き立ち、その士気はおおいにあがった。

「アルレスハイム連隊に伝令を頼む」

フランスは傍らの伝令に言った。

「伝令には何と？」

「『ご苦労。貴隊の奮戦に感謝する』以上だ」

伝令は短く返事をする、フランスのもとをすぐに離れていった。この伝令が、他の部隊に出したフランス最後の伝令だった。その文言は、明快かつ気遣いにあふれたものであったと言われている。袂を分かったとはいえ、かつての同僚を殺さなければならなかったアンジェラの心情を不器用ながらも、十二分に慮っていた。

この伝令を受け取ったアンジェラは、後退前にフランス隊がいる方角に深く一礼したと言う。

「なんといつぎまだ！」

ワイバニア皇帝ジグスマントは、ザビーネ・カーン戦死、第十一軍団壊滅の報告を受け、激昂のあまり、作戦図が置かれたテーブルをひっくり返した。

「たかだか、老いばれ一人と一個軍団を片付けられぬとは、何をやってる！？ 能無しどもめ！」

「ただの一個軍団ではないわ。アルマダ随一の将が率いている軍団よ。レベルが違う」

「はっ！ 地上最強が聞いて呆れるな。さっきの音のせいで、龍騎兵も使い物にならぬ。お前も能無しには変わらないわ」

ジグスマントはシモーヌを嘲った。確かに新兵器によってワイバニアの龍騎兵が全滅したのは、彼女のミスだった。敵方の情報攪乱と情報収集は彼女の主任務であつたからだ。特に、新兵器を開発したラグの研究所への侵入に成功しながらも、情報収集や、新兵器の破壊を怠つたのは彼女の落ち度だった。そのような情報を得なくとも、連合軍などやすやすと撃破出来ると思つてしまつたのだ。見下した相手に露骨に蔑まれたシモーヌは黙ると、皇帝の陣を出て行った。

「影よ」

シモーヌは怒りの炎を目にたぎらせ、部下を呼んだ。

「これに……。ぐっ!？」

音もなくシモーヌの前に跪いた影の首を即座にはねた女軍師は部下

の死体を何度も切り刻んだ。返り血で軍服が、髪が、白き肌が朱に染まっっていく。

「シモー又様……」

凶行に及んだ主をなだめるため、ウーヴェが前に現れたが、シモー又の怒りは変わらなかった。忠臣の首に血まみれの剣を突きつけた。

「能無しとは笑わせる……。わたしが、……。このわたしが……。ウーヴェ、中軍に伝達なさい。中軍全軍をもって、直ちにミュセドールス平野に殺到せよと」

シモー又の従僕は恭しく一礼すると、シモー又の影に同化するように消えた。ミュセドールス平野大決戦、その前哨戦がいよいよ、終わりを迎えようとしていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第二十九話

「第十一軍団が壊滅！？」

ギーゼラの遺言通り、第十一軍団の残軍をまとめ、最前線の後方の中軍に合流した第十一軍団次席参謀リヒャルト・マイヤーは第三軍団参謀長アルバート・フォン・ヘッセに報告した。

「それで、残存兵力の陣容は……？」

「健在なのは、第五歩兵大隊と第二弓兵大隊の二大隊のみ。溪谷からの生還者で混成大隊を臨時に組織しておりますが……」

「わかった」

マイヤーの言葉をアルバートは制した。突入した兵力の八割がたを失ったほどの敗退だ。混成大隊を組織したとしても、装備、士気ともに、もはや軍とは言えないだろう。同じく組織をまとめるものとして、これ以上の言葉を引き出させることは彼のプライドを傷つけることになる。ワイバニア有数の頭脳は静かに目を閉じた。

「ギーゼラは……。貴隊のヴァント参謀長はどうした？」

あまりにも分かり切った答えだった。マイヤーを傷つけることになってもわかっていた。しかし、聞かずにはいられなかった。マイヤーはうつむき、首を振った。

「そつか……」

「参謀長からは、この書状を渡すように頼まれました。」

手紙にはギーゼラの無骨な字で、「ありがとうございます。わたしたちの軍団を頼みます」と書かれていた。マイヤーは周囲を見回した。マイヤーのまわりには、アルバートの他に中軍を構成する各軍団の軍団長と、参謀長達がいる。ギーゼラ最後の言葉を伝えることに少し逡巡したのである。

「……どうしたの？ わたし達に構わないで言いなさい」

ベティーナが、マイヤーの態度を見て言った。

「わかりました。参謀長から、ヘッセ参謀長に伝言を言付かりました。『ずっと、好きでした』と。そうお伝えするように……」

「そうか……」

アルバートは一言だけ言うと、唇を真一文字に結び、こぶしを握りしめて固まった。まるで、不動の第三軍団を象徴するかのようになじろぎもしなかったと言う。

第六章 ミュゼドーラス平野大決戦！ 第三十話

「マイヤー次席参謀、貴官を臨時の第十一軍団長に任命する」

シラーはごぶしを振るわせ、微動だにしないアルバートを見ると、マイヤーに言った。

「……しかし、わたしは、左右両元帥の推薦も、皇帝陛下の任命も受けておりません」

「問題ない。ワイバニア軍規一〇二条第五項に、戦闘中に軍団長が失われた場合、四名以上の軍団長の承認があれば、筆頭軍団長の名のもとに、軍団長を任命出来る特例がある。……それで、先輩？」

シラーはベティーナに視線を向けた。

「わたしは異論はないわ。上位軍団長の判断ですもの。逆らえないわよ。……ヴィクター君は？」

ベティーナは冗談まじりに笑うと、ヴィクターに同意を求めた。

「僕も異論はありません。うちの参謀長も同意見のようですし」

ヴィクターは参謀長のローレンツに振り向くと、ウィンクで彼を制した。ローレンツ自身もシラーの意見に賛成だったが、彼は彼なりに、ヴィクターに翻意をもとめるべきだと考えたのである。ヴィクターもまた有能な参謀長が何を言い出すかを十分に理解しており、それを知った上で機先を制したのだった。

「……で、その、クライネヴァルト軍団長は……」

軍議の場にいた。全員がハイネを見た。腕を組んだワイバニアの至宝は周囲と傍らのエルンストを見ると、小さくため息をついた。

「ここでわたしが許さなかったら、皆、わたしを悪者と思うだろうな……。 お前も大した食わせ者だ。マンフレートよ」

親友の遠慮のない言葉に、シラーは苦笑した。

「追撃戦で敵が諦めるタイミングをはかったの弓兵射撃、通常の部隊には及ばぬものの、それに準ずるレベルで混成大隊を組織した運営能力。どれを取っても優秀だ。それに、貴公は我々四人の誰よりも軍歴は長い。貴公には軍団の長たる資格がある。リヒャルト・マイヤー次席参謀を、ワイバニア軍規第一〇二条第五項に基づき、ワイバニア帝国軍主席軍団長ハイネ・フォン・クライネヴァルトの名において、第十一軍団長に任命する」

周囲にざわめきが起きる。ハイネは公正な人間である。軍団長の資格がない者を軍団長に任命することは断じてしない。しかし、マイヤーは優秀だった。シラーの助力なくとも、ハイネはマイヤーを遅かれ早かれ軍団長に任命しただろう。マイヤーは改めてハイネら同輩となるべき軍団長にひざまづいた。

「はい、つつしんで拝命します」

星王暦二一八三年七月十七日、第十一軍団に新たな軍団長が誕生した。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第三十一話

「ローレンツ参謀長、ヘッセ参謀長をお願いします」

「軍団長、それは筋が違います。わたし達が……」

「ローレンツ参謀長、俺からも頼む」

「承知しました」

シラーの申し出にローレンツはすぐに了承した。本当はすぐにでもヘッセのあとを追いたかったのだろう。しかし、彼の参謀長としての職責が、彼をとどめさせていた。軍団を率いる者はどんなことがあっても、筋を曲げる真似をしてはならない。たとえ、身を割く思いをしても。根っからの教官は才能にあふれ、前途も明るい若者に伝えなければならなかったのである。ローレンツはヴィクターにとり、よき先達であり師であり続けていた。

ローレンツはアルバートに続き、駆け足で陣を出て行った。

「ヴィクター、すまない。世話をかける」

「いえ」

どちらも若い。若いが、彼らの年代が口に出せる言葉ではなかった。万を超える兵士を率いる責任、さらにそれを数倍する数の家族を背負う生命の重み。それらが彼らを同年輩の人間よりも数段成長させていた。

ローレンツと入れ違いに、皇帝より、中軍の前線投入の勅令が飛び込んで来た。

「わかった。露払いは第一軍団が引き受ける。第三、第七、第十二軍団は前線のすぐ後方で臨戦態勢で待機しておいてくれ」

「待てよ、ハイネ。四個軍団で突入せよとの命令だ。勅令に背く気か？」

シラーはハイネに尋ねた。

「お前も分かっているだろう。侵入口は狭い。このまま進軍すれば、身動きが取れなくなるのは必定。故に我が第一軍団が先発し、敵陣を分断する。あとは、マレーネ殿の先陣とわたしで事足りよう。お前達は敵軍の左翼を撃破するために絶対必要な戦力だ。ここで、一兵たりとも欠く訳にはいかない」

「……わかった」

シラーはハイネの考えに同意した。一個軍団のために八個軍団が谷間にひしめき合う訳にはいかなかったのである。ベティーナもヴィクターも、ハイネの考えに同意した。

「わたしは先発する。残りの三個軍団の指揮はお前に委ねるぞ」

ハイネは親友の肩を叩くと、紅のマントを優雅に翻し、陣をあとにした。

”伝説”と謳われたフォレストル第一軍団、ワイバニア最強の第一軍団、その激突の時が迫りつつあった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第三十二話

「そこにいたのか」

馬車の陰でひとりうなだれていたアルバートに、ローレンツが声をかけた。

「こんな風に声をかけたのはイングリッドが死んだとき以来だったな。お前はあのおときも、涙を流さなかった。ただ、一人になってただけだったな」

ローレンツは参謀の仮面を外し、一人の男として、士官学校の同期、ローレンツ・フルトヴェングラーとしてアルバートに語りかけた。

士官学校を卒業をすぐ、アルバートはイングリッドと言う名の上官と恋に落ちた。それは甘く、悲しい恋だった。他国との戦争の中、いつ死ぬかわからぬ二人は逢瀬を重ねる度に愛を育んでいった。彼女と結婚が決まりかけた矢先、彼らに出撃の命令が下った。

メルキド公国軍一個軍団の激闘。彼らは果敢に戦った。しかし、愛し合う二人に戦場は容赦してくれなかった。小隊長だった彼女に幾本の矢が襲いかかった。彼女はその多くを盾で防ぎ、さらに剣でたたき落とした。しかし、残る一本がイングリッドの胸を貫いた。

アルバートは彼女に駆け寄って、抱き上げた。イングリッドを射抜いた矢は的確に彼女の急所を貫いていた。助からぬ命と悟った彼女は恋人の頬に手を当てると、そのまま力尽きた。

アルバートは彼女の死にわずか数秒だけ、戦いを忘れた。澄み渡る

青空の下、彼は獅子にも似た咆哮を放った。

戦争はワイバニア軍の敗北に終わった。敵方の巨兵大隊の投入が、あまりにも決定的だった。巨象の群れと、統率された石兵集団が、ワイバニア軍の戦線を、文字通り踏みつぶしたのである。

敗北感到うちひしがれ、ベリリヒンゲンへと帰還する途上の野営地で、ローレンツはアルバートを見舞った。野営地の一隅、誰も寄り付かない陰の中、アルバートはいた。半身に近い恋人の死に涙すら流さず、肩を震わせ、深い悲しみと怒りを心の中に閉じ込めているようだった。

今のアルバートも同じ姿をしていた。大切な人を失った悲しみと怒りを、心の奥底に封じ込めて、じっと耐えていた。

「泣かないのか？」

「ああ、泣かないんだ」

ローレンツの問いに、アルバートは返した。

「泣いてしまったら、涙と共に、思い出も、悲しみも怒りも、全て流れ出てしまう。そんな気がするのだ」

「アルバート……。お前は、ヴァントを。ギーゼラ・ヴァントを愛していたのか？」

「おれには分からなかった。彼女の思いには気づいていたが、どう応えたらいいかわからなかったのだ。だが、彼女の最後の言葉を聞いたとき、おれは気づいたのだ。おれは、おれは……」

ローレンツはそれ以上、なにも訊かなかった。泣かないと心に誓っていた戦友の肩が、わずかに震え出した。小さな嗚咽が聞こえてくる。ローレンツはアルバートの肩に手を置いた。

「悲しいのなら、思い切り泣いてやれ。アルバート。それが唯一、彼女の想いに応えてやれることだ」

「お、おおおお……」

アルバートは泣き崩れた。愛する者を失った心の隙間を埋めるように。アルバートの涙が、ミュセドーラス平野の大地を濡らしていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第三十三話

ハイン率いる第一軍団が移動を開始した頃、先遣した騎兵が最前線の第二、第六、第八軍団にたどり着いていた。

「そう、クライネヴァルト軍団長が……。第二軍団は、第一軍団の道をあける。すぐに行動に移りなさい」

ようやく聴力が回復したマレーネは報告を聞くと、秩序を取り戻した部下達に第一軍団の進路をあけるように命じた。

「道が開きつつありますな」

ワイバニア第一軍団参謀長のエルンスト・サヴァリッシュが双眼鏡から目を離れた。ゆっくりと細く、しかし敵に隙をつかれないように厚みをもって整然と移動している。それは各軍団長の能力の非凡さを証明するものだった。

「さすがはベテランの軍団長だな。絶妙の位置取りだ。龍将三十六陣”龍槍”発動せよ」

「龍槍ですって？ 軍団長、しかし、あれは……」

エルンストは耳を疑った。龍槍、龍将三十六陣中、最速にして最強の突進力を誇る突撃陣形。しかし、それ故に弱点の多い陣形でもあった。ワイバニア帝国建国と同じくして誕生したワイバニア第一軍団、その永き戦いの歴史の中で龍槍が使われたのはわずかに一度だけだった。そのときも、第一軍団は大きな犠牲を払っている。まさに封印された陣形だった。

「フランス・ピットの横陣、恐らく常道では破れまい。これを破るのは龍槍以外にない」

ハイネは自らの戦術に自信を持っているようだった。「もう議論している時間はない」ハイネの目が、信頼する参謀に語っていた。

「わかりました」

エルンストは、力強く頷くと、全軍に命令を伝えた。

「龍槍を発動せよ。新設の第五歩兵大隊は、司令部大隊と共に、陣形中央部へ移動せよ」

前の戦いで、第一軍団は創設以来、最大の損害を出していた。ミュセドールス平野の決戦に先駆けて、エルンストは軍団を再編成したが、一個大隊だけは、本国から補充しなければならなかった。戦時下とはいえ、新設された一個大隊は、訓練もなしに実戦投入されることになる。エルンストは、彼と彼の上官が目の届く位置に、新設された大隊を配置させた。

「良い手際だ。エルンスト」

「いえ、まだまだ。あんな手際を見せられれば、無力さを思い知らされずにはいられませんよ」

フォレストル第一軍団の手際を後方で見ていたエルンストは戦術家としての未熟さを痛感していた。参謀としての手腕、戦機を見る目、どれを取っても、エルンストは第一軍団参謀長を名乗るだけの実力を有している。しかし、ウェルズリーとフランスの戦術は彼の常

識の遙か上を行っていた。

エルンストは敵将二人に尊敬の念さえ抱いていた。

「これで、彼らを倒せるでしょうか？」

「わたしたちならできるさ」

ハイネがはじめて紡ぎ出したことばだった。常に自信に満ちていたハイネ。そのハイネが、今自分に言い聞かせるように話している。それは目の前の敵が、あまりにも強すぎることを示していた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第三十四話

一方、ワイバニア軍と対峙していたフォレストル第一軍団は、再び防御を固めて、ワイバニア軍の攻勢に備えていた。熟練の三個軍団と交戦したフォレストル第一軍団の損害は軽微とは言えなかった。陣容がわずかばかり薄い。フランススは眉をしかめた。

「相手は三個軍団です。これだけの損害なら、上出来と言ったところでしょう」

「だが、防御陣の薄さ是否めん。次の攻勢を防ぎきれるかどうか、さらに増援を繰り出して来たら……」

「さすがに四個軍団は……ん？」

ウエルズリーは前方の敵軍が不可思議な動きをしているのに気づいた。対峙している軍団の後方から左右に別れている。まるで、後続の軍団への道をあけるかのように。老練な軍団長は敵の意図に気づいていた。

「軍団長！ 新手です！ 正面から！」

三つ編みを弾いてウエルズリーは言った。フランススは双眼鏡をのぞくと、遙か後方から立ち上る土煙と、紅の鎧に身を包んだ兵の群れを認めた。

「……速い！」

巨人が投げた龍の槍。前の味方を割くように疾駆するワイバニア第

一軍団の隊列は常識を遙かに超える驚くべきスピードでフランスの軍団前衛に突っ込んだ。

「なんだ？　これは？」

フォレストル第一軍団最前線の兵士達は夢でもみているかのように錯覚したかもしれない。目の前の敵軍が左右に割れたと思ったら、ほぼ最高速度にまで加速した騎馬軍団が突入して来たのだから。

フランスの横陣は柔軟性と防御力に優れた陣形である。敵の突進力をスポンジのように吸収し、押し戻す。しかし、どんなものにも許容量が存在し、キャパシティを超えたものは例外なく崩壊する。

ハイネの突撃はフランスの横陣の衝撃吸収限界を遙かに上回る速度と兵力で殺到したのである。龍槍は三個大隊で構成されたフランスの横陣を易々と突き破り、フランスがいる第二陣にまで達した。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第三十五話

「司令部大隊、防御を固めろ！」

ウエルズリーが叫んだが、既に手遅れだった。司令部大隊の防御壁は、猛り狂う龍の槍には無力だった。第一軍団を象徴する紅のワイバニア軍旗をためかせた兵士達がフランスとウエルズリーの前に現れた。

「キングストン、少し下がっておれ……」

フランスは腰の愛剣に手をかけた。馬車の上で、フランスは敵ににらみを利かせる。だが、敵の動きはフランスの予想をここでも裏切った。敵軍はフランスらに目もくれず、後衛の部隊に襲いかかって行く。フランスの首はワイバニア軍にとってのどから手が出るほどの価値を持つ。とくに、武名を至上の戦いを重んじるワイバニア軍第一軍団には最上とも言えるほどのものだろう。それなのに、まるで彼らは、フランスやウエルズリーがいないかのように、目の前を通り過ぎて行く。何故だ。フランスはフォレストル第一軍団の後方へ脇目もふらずに向かって行く敵から、前方にひしめく三個軍団に視線を移した。……まさか。フランスとウエルズリーが敵の意図に気づき、同時に叫んだ。

「しまった！」

侵入口の第二、第六、第八軍団がうごきだしたのは、そのときだった。

マレーネの第二軍団を先頭に、ワイバニア第六、第八軍団が前進を

開始した。ハイネ率いる第一軍団によって左右に引き裂かれた横陣には、もはや、三個軍団の猛攻を食い止めるだけの力は残っていない。第二軍団の精兵達は、ずたずたになったフランスの横陣に浸透すると、横陣を内部から崩壊させていった。どんなに強固な城も、どんなに頑強な生物も、内部ほど弱いものはない。マレーネは自然界の法則を用兵に援用したのである。アルマダでもその人有りとも言える三人が率いる精鋭軍団を長時間に渡って守り切った、歴史上最高の防御力を誇ったフランスの横陣は龍槍のただの一撃で崩壊した。

「予想以上の攻撃でしたな。軍団長」

敵に蹂躪され、辛うじて生命の安全が保障された装甲馬車の作戦室の中で、ウエルズリーは小窓から外をのぞき見る相棒に言った。陣形とは呼べないほど、ずたずたに寸断されたフォレストル第一軍団は侵入口周辺での態勢の建て直しは不可能な状態だった。

この事態にフランスは全軍を百以上の集団に分かれて散開させた。侵入口で敵軍を食い止めるのが不可能な今、あとは本隊に戦闘を引き継ぐことが最善であると判断したのである。ワイバニア第一軍団をはじめとして、ワイバニア帝国の軍団が次々とミュセドーラス平野に侵入した。

「頃合いとは言えないが、我々ではこれ以上の戦線の維持は無理だ」「そうですね。散開した部隊には当初の予定通りの集結地点を指示してあります。……我々にはまだ、仕事が残されていますから」

第一軍団司令部は、ワイバニア軍を避けるようにミュセドーラス平野を構成する山地すれすれを移動している。速度を上げる装甲馬車

の窓から見える景色が、めまぐるしく変わっていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第三十六話

戦場には千を越える死体が転がっていた。味方のもの、敵のもの、戦争で唯一平等に存在するものだった。死体には隊長も兵卒も敵も味方もない。ただの物体としてそこにあるのだ。数十、数百にも及ぶ戦闘で、フランスはそれを見てきた。生き残ることが出来た喜びと、戦友と共に逝けなかつた罪悪感が混沌となる思いを彼は抱き続けて来た。

最後の戦いでもそれは変わらないのか、フランスは運命の皮肉を呪った。

一方、先鋒、中軍の六個軍団に先んじてミュセドーラス平野一番乗りを果たしたハイネら、ワイバニア第一軍団はフォレストル第一軍団を撃破した速度を維持しながらミュセドーラス平野中央部に向けて南下した。これは馬蹄形をした平野外縁に連合軍が展開しており、兵力の空白地である平野中央部が最も安全であつたためである。ハイネは自軍を魚鱗の陣に再編成すると、後続の軍団到着を待った。

平野最南部、連合軍最後衛の本陣にいたヒーリーは好敵手が中央に居座る様子を確認した。

「大將軍、おれは行きます。右翼のフォレストル軍の指揮を最前線で執らなければなりません」

タワリッシは無言で頷いた。総司令官の許可を得たヒーリーは自分が指揮する軍団に戻ると、各部隊に命令を飛ばした。

「これより、フォレストル第五軍団も出撃する。敵は強大だ。皆の

健闘を期待する」

侵入口の緒戦が終わり、ついに互いの本隊同士が刃を交える時が来た。フォレストアル軍総司令官ヒーリー・エル・フォレストアル率いるフォレストアル軍第五軍団七〇〇〇名は右翼の第三、第四軍団がいる東側丘陵地へと進軍を開始した。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第三十七話

ミュセドーラス平野北側入り口、両端を切り立った崖で形成された谷間を六万の兵が駆け抜ける。ハイネらワイバニア第一軍団に続いて侵入を果たしたのはマレーネら先鋒軍三個軍団だった。彼らは東側に展開したフォレストル軍二個軍団をあざ笑うかのように、彼らの真正面を通過して行った。

「この野郎。おれ達が手出し出来ないことが分かかっていて、こんな手に出やがるんだ」

フォレストル軍第三軍団長、ウィリアム・バーンズは悔しさに歯噛みした。

「仕方ありません。迂闊に出れば、六個軍団の攻撃をもらにくらうだけですから」

「そんなことはわかっている。わかっているからこそ、悔しいんじゃないか」

濁流にいくら小石を沈めても、その流れを止めることも帰ることも出来ない。ウィリアムは馬鹿ではない、兵力をいつ、どれだけ投入するのが最適かをよく理解している。それが、彼がわかくして軍団長たる資格を有している由縁だった。

「敵軍が攻撃を加えない限り、第三軍団はこのまま動くな」

作戦室が備え付けられた軍団長専用馬車。その屋上でウィリアムは大きなため息をついた。戦いたい。戦いたいが今はまだ、その時で

はない。足や手を動かし、兵を叱咤して突撃したくなる衝動を彼は鋼の理性で抑えつけた。

「マーガレットはどうだろうな。あのじゃじゃ馬。初の実戦だからって、舞い上がらなければいいが……」

ウィリアムはさらに侵入口に近い、マーガレット率いる第四軍団の陣地を見た。彼女の気性を象徴するかのように、弓を射る女神が描かれた軍団旗が荒々しく風にたなびいていた。

「敵が目の前を通り過ぎていくのに、何も出来ないなんて！」

軍団長専用馬車内部の作戦室、その机に広げられた陣形図にマーガレットは手を叩き付けた。

「し、仕方ありません。兵力の数が違い過ぎますから」

マーガレットを恐れるように、第四軍団参謀長のスタンリー・ホワイトは言った。はげた頭に丸眼鏡、やせっぽちの中年。寒くもないのに、時折ハンカチで汗を拭う参謀をマーガレットは嫌っていた。

(……こんな不潔な男、いつか軍から放り出してやる)

腰も低く、自分にいつもへりくだる態度がさらに気に食わなかった。それでも、彼は第四軍団の参謀長を十年以上にわたって勤め上げて来た古参の参謀だっただけにむげに放り出すわけにはいかなかった。

「……あの、はい、軍団長」

「何ですか？」

「くれぐれも軽拳は……」

「わかっていますわ！ 参謀長ごときが私に意見するなんて、十年早いですわ！」

「は、はい……」

萎縮する参謀長を無視し、マーガレットは親指をかんだ。お兄様のことといい、ホワイトのことといい、面白くないことが多すぎる。早く攻撃して、嫌なことを全て忘れたい。精神的に未熟な軍団長は攻撃のタイミングを密かにはかっていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第三十八話

「全軍の移動が間に合ってくれればいいな」

忙しく伝令や幕僚が出入りする軍団長専用馬車の作戦室でヒーリーはつぶやいた。第一軍団の被害状況、各部隊の展開状況、前衛の軍団の新兵器の配備状況など、ヒーリーの目の前には山のように報告書が積みまわっていた。

「第五軍団全軍の移動の前に、報告書にも目を通してもらわないと。作戦行動に支障が出ますから」

報告書の山の頂に手を触れたヒーリーの横に、さらに山が出来た。その高さにヒーリーは眉をひくつかせた。

「わかっているよ。参謀長、報告書を読み終える頃には、戦いが終わってしまわないかな？」

「軽口を叩いていられるなら、大丈夫でしょう。全軍の移動も順調。第一騎兵大隊とアルレスハイム連隊は既に配置を完了しているわ」

参謀長のメアリの報告にヒーリーは頷いた。ヒーリーがいる司令部大隊は移動する第五軍団の最後尾に位置していた。第五軍団が保有する全戦力の中で、司令部大隊は最も速力の遅い大隊であり、戦力の迅速な展開を行なうためにヒーリーは自分たちをあえて最後に移動させることにしたのである。

「それにしても、メアリがそんな髪型にするとは、意外だったな」

手に持った報告書を読み終えたヒーリーはメアリに視線を移した。決戦の朝、メアリは長かった髪をばつさり切ってヒーリーの前に現れた。谷底に落ちた眼鏡を新しいものに替えることもせず、これまでのメアリとはまったく異なるいでたちをしていた。

「ヒーリーにふられたせいよ。これまでの自分を捨てて、新しい自分になりたかったの」

半分冗談、半分本気で、気丈な参謀長は笑った。失恋の痛みも、これから肉親を失う悲しみも、全て吹っ切れたような晴れやかな顔をしていた。

「それはよかった。ついでにもっと優しくしてくれたら、最高なんだけど……」

「何言ってるの。軍団が配置に付くまでにその報告書に目を通しなさい。少しでも遅れたら、せっかんしますからね」

「やれやれ、何も変わってないじゃないか」

ヒーリーは椅子からずり落ちそうなくらい、腰を落とした。冗談もそこそこに、ヒーリーは姿勢を戻すと、報告書に目を通し始めた。よく開いた目が、めまぐるしく動いている。ヒーリーの目と同様に、戦況も一層激しく動きはじめていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第三十九話

「まだ、攻撃命令はでませんか!?」

四つ目の軍団が目の前を通り過ぎる頃、マーガレットは装甲馬車から飛び出した。戦いたい。マーガレットが軍団長になってから、初めての実戦である。兄に負けられない。とくに、ヒーリーには。武勲が欲しい。ヒーリーを超える武勲が。フォレストルきつてのおてんば姫は斜面に仁王立ちにしてワイバニアの大軍を見下ろした。

「軍団長、くれぐれも軽拳は慎んでください。今はまだ、時ではありません。じっと待つことが肝要です」

「うるさいですわ。わたしに意見しないで!」

最年少の軍団長は参謀長を一喝した。スタンリーはまたハンカチで汗をぬぐう仕草を見ると、軍団長に一礼した。

「参謀長、軍団長はわたしですわ。差し出がましい意見をするのはおやめなさい」

「はい、申し訳ありません」

「兵を率いて戦うのはわたしの役目。参謀長はだまってわたしの後ろについているのが仕事。わかつて?」

「……はい」

第四軍団配属十年の古株は、組織でうまく生きる術を知っていた。

自分を殺し、黙々と仕事をこなすのみ。青々とした空の下、スタンリーは心の中で「ぶしをにぎりしめていた。

マーガレットは目の前を通過する軍団を見た。旗印は第十二軍団、ワイバニア軍の中でも最弱の軍団だ。勝算は十二分にある。相手は安心して前進を続けている。奇襲の価値はある。マーガレットは決断した。

「第四軍団全軍、攻撃準備！」

「軍団長！」

「だまりなさい、参謀長」

後ろを振り向きもせず、マーガレットは言った。

「今の状況では危険です！」

「何度言わせれば分かるんですの？ 軍団長はわたし。あなたはだまってついていけばいいの！」

「軍団長！」

「うるさいですわ！ …… スタンリー・ホワイトを第四軍団参謀長から解任します。司令部にあなたは必要ありませんわ。出て行きなさい！」

マーガレットはスタンリーを解任すると、すぐに愛馬に飛び乗った。この場から一刻も早く離れたかった。虫酸がはしる小男と同じ空気を吸いたくなかったのである。

マーガレットは司令部大隊の陣地の外れまで飛び出すと、伝令の一個小隊に命じた。

「全軍を魚鱗の陣形へ。敵第十二軍団の側面から攻撃します。前進
！」

フォレストル第四軍団長、羽衣のマーガレットは剣を抜き、前進を命じた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第四十話

「このまま、フォレストアル軍を牽制出来るといいですね」

ワイバニア軍第十二軍団長ヴィクター・フォン・バルクホルンはフォレストアル軍の二個軍団を横目に言った。油断は禁物であったが、このときヴィクターはある種の安心感を抱いていた。どこをどう先読みしても、現状でフォレストアル軍が攻め込めば、兵力の浪費に終わる。有能な将ならばなおさらのことそれがわかるはずであり、このままワイバニア軍の兵力展開を待つはずだ。ワイバニアの若き知将は斜面に見える軍団旗を見上げた。

「スタンリーに気をつける」

ヴィクターの背後にいた参謀長のローレンツ・フルトヴェングラーが小さな咳払いをした。

「何ですか？ それは」

「わたしたちが新兵の時代、フォレストアル遠征を行なった軍団に流布したことわざです。フォレストアル軍の中でも、最強の前線指揮官と呼ばれた男だそうです。奇計を用いず、戦いは常に正道を好む。局地戦では負けなしの名将でした。わたしも三度彼率いる部隊と交戦しました」

ローレンツは淡々と過去を語った。しかし、話が進むにつれて、冷や汗をたらし、声が時折裏返るようになった。冷静無比のローレンツが明らかに恐怖を覚えているのが見て取れた。ローレンツはそれ以上のことを語らなかった。いや、語れなかった。

「惨敗だよ。とくに、三度目の戦いは凄惨だった」

ローレンツに代わってもう一人背後にいた大男が口を開いた。

「コンラートさん」

「三度目はこいつが中隊長だったときだ。あつという間だった。スタンリーの中隊が敵陣に突入したんだ。最前線を守備するローレンツの防御陣のいちばん薄い部分をやつはついた。ローレンツのこしらえた陣形だ。薄いと言っても、相当な厚みを持っていた。奴はほんのわずか、針の穴一つほどの隙をついたんだ。スタンリーの突撃の前に、ローレンツは破れた。やつの突撃はこいつを恐怖させるに十分だったのさ。五分もしないうちに前衛の三個小隊が壊滅したよ。そしてローレンツが指揮する小隊まで奴は襲いかかった。信頼する部下達、戦友達がローレンツを守り、死んでいった。おれが率いる龍騎兵中隊がかけつけたときにはもう、遅かった。味方の亡骸の真ん中に一人、ローレンツはたたずんでいたよ。敵味方、双方の返り血にまみれてな」

コンラートは一切の感情を交えずに語った。ローレンツの過去をヴィクターははじめて知った。その深い心の傷も、恐怖も。

「ローレンツさんを破るなんて、それほどの上将なんですか？」

「……はい」

伝説と謳われるほどの男がここにいるかもしれない。将として手合わせ出来る喜びと恐れを、ヴィクターは同時に感じていた。

伝令がヴィクターのもとにやってくる。彼はヴィクターに一礼するとあり得ない事実を報告した。

「敵、第四軍団に動きあり！」

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第四十一話

ヴィクターは再び斜面を見た。フォレストル第四軍団の旗が雪崩のように下っていくのが見える。敵将は馬鹿なのか、あるいは単独でワイバニア軍を破る自信があるのかヴィクターには分からなかった。だが、側面攻撃を受けることになるヴィクターは冷静に事態に対処しなければならなかった。

「後続の第三軍団に伝達！ 我、敵軍の側面攻撃を受けつつあり、援護を要請す。敵はフォレストル第四軍団！」

ローレンツは頷き、伝令に伝えた。さらにヴィクターは自軍の陣形転換を命じた。

「第十二軍団は長蛇の陣から、鶴翼の陣へ。第一、第二重装歩兵大隊は鶴翼中央部へ。第二、第一歩兵大隊は左翼、第三、第四大隊は右翼に回ってください」

弱冠十八歳のヴィクターは常にへりくだる態度を崩さない。弱気ともとられかねない態度をローレンツはいつも注意していたが、ヴィクターは直そうとしなかった。自分よりも経験、技量の優れる人物に敬意を表したかったのだ。

いつもはとがめるローレンツが、このときに限ってヴィクターを責めなかった。辛い過去を思い出したせいか、まだ少年から脱皮し始めたばかりのヴィクターには分からなかった。あえて参謀長に聞こうとしなかった。

「思ったより、敵の動きが速い……。さすがはフォレストル最速の

第四軍団。鶴翼の陣をもう少し下げましょう。それから、第一騎兵大隊を右翼の後方に配置しましょう。弓兵大隊は後衛にて待機です」

フォレストル第四軍団の速さはヴィクターの予想をわずかばかり上回っていた。下りに手間取ると思われた第四軍団はミュセドールス平野に躍り出ると、魚鱗の陣形で突撃を開始した。この時点でマーガレットは奇襲には失敗していても、敵軍の分断には成功していた。しかし、この分断は彼女達にとって死刑宣告に自ら署名したのに等しい行為だった。分断はわずか一瞬のこと、突出した第四軍団にワイバニアの大軍が襲いかかってくるにちがいない。スタンリーが最も恐れていたことだった。

第四軍団動くの報告にもっとも動揺したのは敵ではなく、味方だった。

「マーガレットめ！ 手柄を急ぎやがったか!？」

斜面を下る旗を見たフォレストル第三軍団長、ウィリアム・バーンズは持っていた指揮杖をへし折った。

「後続のヒーリーは知っているんだろうな!？ 司令部にうかがいを立てるのだ。今すぐ伝令を出せ！ おれも斜面を下りたいが、今下るのは……下策だ!」

ウィリアムは悔しさに拳を握りしめた。フォレストル一の勇将は動けないいらだちを作戦室の机に叩き付けた。机が縦に割れ、重い音が響く。

「馬鹿が……」

幕僚を黙らせるほどの低く、殺気のこともった声でウィリアムは言った。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第四十二話

その頃、フォレスタル軍第四軍団元参謀長スタンリー・ホワイトは司令部大隊から翼竜を調達すると、総司令官のヒーリーを屈指し、空を飛んでいた。

自分の諫言ではマーガレットは止まらない。第四軍団も動き始めている。第四軍団の移動速度は参謀長であった自分が最も良く知っている。上層部が制止を命令したときにはすでに第四軍団は敵陣に斬り込んでいるだろう。そうなればあとは自軍の被害を最小に抑えることがスタンリーに残された役目だった。スタンリーはヒーリーの装甲馬車を見つけると、翼竜を降下させた。

「何だつて！？ ……あの、おてんばが！」

作戦室に飛び込んだスタンリーの報告を受けたヒーリーは椅子を蹴飛ばした。スタンリーのはげ頭が汗で光る。

「申し訳ありません。すべてわたしの責任です」

「ホワイト参謀長、今は責任をどうこうしている問題ではないんだ。すぐに救援に向わなければいけない。……総参謀長、現在稼働出来る部隊は？」

ヒーリーはスタンリーを手で制すと、メアリに確認を求めた。

「……アルレスハイム連隊と第一騎兵大隊のみです……」

「実質、一個大隊だけと言う訳か……」

メアリの報告に、ヒーリーは顔をしかめた。アルレスハイム連隊は第十一軍団との戦いの後で疲弊しているはずだ。連戦を強いる訳にはいかなかった。

最悪第四軍団は、敵三個軍団に包囲されることになるだろう。窮地を救うためには少しでも兵力が必要だった。

「ヒーリー殿下。わたしに軍団長を救う機会をお与えください。この失態をわたしにぬぐわせていただきたいのです」

スタンリーはヒーリーに申し出た。

「一個大隊で戦況をひっくり返せる指揮官がいるとすれば、ウエルズリー卿と貴官だけだ。すぐに命令書を出す。第五軍団の陣地へ飛んでくれ」

ヒーリーは略式の命令書をしたためると、スタンリーに手渡した。スタンリーは汗を拭くと、何度もヒーリーに頭を下げた。フォレストル軍の若き総司令官は気まずそうに頭をかいた。ヒーリーを上回る経験と戦術眼を持つ指揮官にへりくだった態度をとられ、少しばかり自尊心が揺らいでいるようだった。

ヒーリーはメアリをはじめとする幕僚達を作戦室から出すと、スタンリーと二人きりにさせた。

「ホワイト卿、おれはあなたを尊敬しています。本当に。ですから、そのような態度はやめてください。頭を足れるのはおれ達なのですから。兄として妹の非礼をお詫びします」

「いえ、殿下。わたしは軍団長をおいさめすることはできませんでした。参謀としては失格です。そのようなことをなさらないでください。上官や王に頭を下げるのは臣下の努め。参謀として落伍した身ゆえ、せめてこればかりは守らせていただきたく思います」

頭を下げるヒーリーにスタンリーは申し訳なさそうに笑って言った。兵の上に立つ者はやすやすと頭を下げてはならぬ。スタンリーなりの教えだった。スタンリーはヒーリーから受け取った命令書を大事そうに胸にしまつと、作戦室の扉を開けた。

スタンリーが出たのと入れ違いにメアリが作戦室に入ってきた。

「大丈夫なの？ ホワイト卿で。彼、わたし達の間であまりいい評判はないわよ。どうして、一個大隊をあずけたの？」

怪訝な顔をしてメアリは尋ねた。スタンリーが第四軍団に配属されて十年。メルキド侵攻に備える形で南方に配備された第四軍団は大規模な戦闘を経験していなかった。それゆえ、参謀としての作戦立案能力も発揮出来ぬまま、スタンリーは毎日を過ごしており、普段の腰の低さもあいまって、参謀内での彼の評判は最悪だった。"軍団長の腰巾着"とあだ名されていた。

「『スタンリーに気をつける』ってことわざをメアリは聞いたことはないか？」

「いえ……。何それ？」

「十五年ほど前にワイバニア軍兵士の中で流行したことわざさ」

ヒーリーはそれだけ言うと、他には何も語らなかった。十年を経て、

伝説がよみがえろうとしていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第四十三話

「ベティーナさんの第七軍団に連絡をお願いします。我が軍団にかまうなど。それから、シラー軍団長にも連絡してください。共同で敵軍を倒しましょうと」

フォレスタル第四軍団の奇襲に対して、ヴィクターは二個軍団の投入を即決した。敵軍が自ら悪手を指したのである。速やかに一個軍団を壊滅させれば、もともと戦力で優るワイバニア軍がさらに有利になる。そして、局地戦においても敵に倍する兵力をぶつけければ、勝利の確率は高くなる。ヴィクターは反転して攻撃に移らなければならぬ前方の第七軍団よりも、そのままの速度と陣形で敵に攻撃を加えられる第三軍団に救援を求めたのである。

陣形の展開を終えたヴィクターは前方のフォレスタル軍を見た。羽衣のマーガレットの名はワイバニア軍にも轟いており、その速さはヴィクターを興奮せしめるものだった。

「さすがはフォレスタル最速の第四軍団です。僕たちよりもはるかに速い。もしかしたら、第十軍団よりも速いんじゃないかな」

迫り来る敵の騎兵を見ながら、ヴィクターは言った。声には少し余裕が感じられる。軍団同士の本格的な交戦ははじめてだと言うのに、ヴィクターはそれを楽しんでさえいた。今まで間近でアルマダの名将達の戦いを見てきたが故か、普段の彼らしからぬ態度だった。背後に控えた参謀長のローレンツ・フルトヴェングラーが軍団長をいさめた。

「軍団長、分かっただけとは思いますが……」

「大丈夫。油断は禁物、でしょう？ 分かっています」

「情報には参謀長にスタンリー・ホワイトの名があります。警戒するに越したことはありません」

ローレンツはかつての生徒に忠告したが、敵軍の動きに違和感を感じていた。「隙がありすぎる」のである。隊列はわずかではあるが、ところどころほころびが見える。若かりし頃とはいえ、スタンリーに針の穴ほどの急所を的確に攻撃され、部隊を殲滅されたローレンツには考えられないことだった。

これも奇計かと警戒したローレンツはいささかながら消極的な案を提示した。

「軍団長、敵軍は突進力こそありますが、重装備ではありません。故に重装歩兵大隊を正面に出し、敵の突撃を受け止め、鶴翼内部に閉じ込めるべきと考えます」

ヴィクターは何も言わず、参謀長の案を了承した。ローレンツが信頼に足る能力の持ち主であることももちろんだったが、彼もまた、「スタンリー」を少なからず警戒したのである。フォレスタル軍の鋭鋒を食い止め、味方の第三軍団が追いついて後、攻勢に出る。これが第十二軍団の戦略であった。

「ヴィクターらしいと言えば、らしい手だな。手堅く勝利をもぎ取るうとするのは」

前方の第十二軍団の陣形を見たワイバニア第三軍団長マンフレート・フリッツ・フォン・シラーは笑った。兵力が揃ってから敵に攻撃を

かける方法は間違つてはいない。だが、勇んで出てきた敵は隙だらけだ。消極的にならなくとも、一個軍団で十分撃破出来るはずだ。シラーは第十二軍団の用兵に疑問を抱いていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第四十四話

「おそらく、第四軍団の奇計を警戒してのことでしょう。敵、参謀長のスタンリー・ホワイトは油断のならない男です」

ローレンツの同期でもある第三軍団参謀長のアルバートもまた、スタンリーの恐ろしさを熟知する一人だった。熟練兵はまだしも、若い軍団長や参謀には、スタンリーの手練を知らぬ者が多い。今年、二十七歳のシラーもまた、スタンリーを知らぬ人間だった。

「参謀長、スタンリー・ホワイトとは何者だ？」

「敵軍の第四軍団参謀長です。わたし達の若き頃、フォレストル戦線で最も有能な前線指揮官と言われていた男です」

シラーが知らないのも無理はない。彼が軍務につきはじめたころには、スタンリーは第四軍団の参謀長としてその任についており、その後はさしたる武勲を上げぬまま時を過ごしていたのだから。

「参謀長がそこまで言うほどの男ならば、警戒するに越したことはないが……。だが、あの陣形を見る限りでは、それほど男とは思えんな。急所をひと突きすれば、瓦解してしまうぞ」

再度第四軍団の魚鱗の陣を見たシラーは首を傾げた。確かに軍団そのものの速度は速い。ワイバニアアの快速と名高い第十軍団を超えるだろう。だが、あまりに隙の多い軍団の指揮官たる者が見せるものではない醜態であった。だが、醜態であるが故に時期と運が味方したのも事実だった。ワイバニア軍は奇計を警戒し、能動的な手段をとることが出来なかった。

シラーは迷っていた。敵軍の隙はあからさまな罠ではないかと。緒戦において、フォレストル軍の神がかつた善戦を見た彼は「食わせ者ぞろい」のフォレストル軍の作戦を警戒したのである。

そして、まだ見ぬ「スタンリー・ホワイト」なる名将の存在が判断力と決断力に富む彼に警鐘を鳴らしていた。

「第三軍団は敵の側面攻撃を警戒しつつ前進。第十二軍団と呼応して敵を討つ！」

シラーは無精ひげをなでると、伝令に命じた。戦いとは思いつりに行かないものだ。ワイバニア第三の実力を持つ男は前方の戦いに苦笑した。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第四十五話

「メアリ、おれも出る」

「だめよ。冷静になりなさい」

ヒーリーの意志をメアリは真っ向から否定した。移動中の軍団を指揮すべき軍団長が飛び出しては今後の戦術行動に支障を来すことになる。加えて、一個大隊を投入後の戦力の逐次投入は下策以上の何ものでもなかった。第四軍団が致命的なミスをした今、これ以上のミスの上塗りは参謀として、メアリの許せることではなかった。

「君のいいたいことは分かる。だけど……」

「分かるなら、出ないで」

意固地ともいえるほど、今日のメアリは頑固だった。第四軍団は参謀長の制止も聞かずに暴走した。他の軍団はどうあっても、第五軍団だけはそうあってはならない。妹を思ってはやるヒーリーの気持ちは理解出来る。だが、それに左右されて千を越える兵士の命を危険にさらす訳にはいかなかった。メアリは自分の職責と命をかけた。彼女は懐にしまった護身用の短剣を抜くとのどに当てた。

「メアリ……」

「この第五軍団を第四軍団と同じ運命には遭わせないわ。それではお祖父さまたちは何のために命を投げ出して戦っていると言っの？ 救援に向うのであれば、わたしに『死ぬ』と命じてからになさい」

ヒーリーは命じることなど出来なかった。メアリの言うことは正しかった。メアリと第五軍団、そしてフランススらの命を軽んじてはいけない。ヒーリーはこぶしを握り、力なく手を下ろした。

「わかった。メアリ、出撃はしない……」

頭を垂れ、前髪をおろしたヒーリーの表情をうかがうことは出来なかったが、心中は複雑であっただろう。「妹を見殺しにした男」「万の兵を無駄死にさせた男」ヒーリーはそうした内なる声に責められていた。

「攻城兵大隊をのぞく第五軍団全軍の移動と展開を急がせる。参謀長……」

ヒーリーはメアリに対して強い命令口調で言った。平時も、二人きりのときもこのような言葉遣いを使ったことはなかった。仲間に対してではなく、部下に使う言葉、「溝が出来た」英明な参謀長は悲しげに目を伏せると、伝令のため作戦室を出て行った。ヒーリーは椅子に力なく腰を下ろし、机に肘をついた。言いようもない怒りと悲しみが、彼の中で混沌と渦巻いている。一人だけの作戦室で、ヒーリーは机に拳を叩き付けた。

「ばかが……」

すぐ前方の戦地で戦う妹を思い、ヒーリーはただ一人頭を抱えていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第四十六話

「第三機動歩兵大隊の足が遅いですわ。急がせなさい」

軍団長専用馬車の屋根の上、移動する第四軍団を見回しながらマーガレットは指示を出していた。大隊の移動速度にばらつきがある。訓練の時はこうはならなかったのに。自分でも、現在の陣形があまりにもろいと分かっていた。しかし、何故このような事態になっているかマーガレットは理解しなかった。それは忌み嫌っていた参謀長の手腕によるところが大きかったことを認めたくなかったのである。マーガレットや他の参謀長に隠れて、評価されることは少なかったが、スタンリーは文字通り軍団の要として必要な人間であったのだ。

（あんな下品な男に頼らなくとも、わたし一人で軍団をまとめてみせますわ）

マーガレットは苦闘していた。思うように動かない味方と、眼前の敵、その二つを相手にしなければならなかった。敵が間近に迫る。敵軍の龍の旗印がはつきりと見えるようになった。

第四軍団第一騎兵大隊長アドルフアス・シスレーが愛槍を片手に構えた。

「騎兵大隊、あえて何も言わん。どんな守りを蹴散らし、踏みつぶし、粉碎しろ！」

アドルフアスは声を張り上げた。あと数分で敵に突入する。目の前に見えるは敵の槍ぶすま。突破しなければ勝利はない。アドルフア

又は左手でかぶとを直した。

突入する第四軍団に第十二軍団の重装歩兵は長槍を構え待ち受けていた。重装歩兵の最前列は身の丈以上の大きな盾を地に刺し、敵騎兵の突撃から大隊を守るうとしてしている。そのうしろの第二列からは長槍の壁がそびえ立ち、敵の騎兵を串刺しにする瞬間を待っている。数分後に展開される戦いはただの力と力のぶつかり合いである。そこには術策の入り込む余地すらない。純然たる衝突。どちらの陣営にも甚大な被害が出ることだろう。

あまりに分かり切った未来だったが、ワイバニア重装歩兵たちは口を真一文字に結び、だまって運命を受け入れていた。

馬のひづめが地を叩く音が彼らの腹に響く。最前線の兵士の耳に、馬の足音以外の声が入ってきた。

「突っ込めーっ！」

大隊長の号令とラツパの音が戦場に鳴り響く。その数十秒後、戦場に兵士達の断末魔の声と馬のいななきがこだました。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第四十七話

「始まりましたわ」

戦いが始まったことを確認したマーガレットは馬車の屋根の上で戦況を確認した。騎兵大隊が敵の重装歩兵大隊に突っ込み、その前線を浸食しつつある。一刻も早く敵陣突破を果たしたいマーガレットは第二陣の投入をいち早く決断した。

「第三機動歩兵大隊を第一騎兵大隊の援護に回しなさい。騎兵が切り開いた道をさらに広げるのです」

「お待ちください、軍団長。それでは陣形に穴を生じさせることになりません！」

マーガレットの後ろに控えた新参謀長のアビー・マクファーデンが彼女に反対した。マーガレットは上品な笑みを浮かべると、アビーの耳に優しく触れた。

「大丈夫よ、アビー。他の大隊が速やかに移動すれば問題ないわ。後衛に配置した第一弓兵大隊を使いましょう。それで大丈夫」

「は、はい」

アビーはマーガレットの考えを了承した。アビーは今年二十六歳の参謀で後ろでまとめた三つ編みの赤毛とそばかすが特徴の女性士官だった。

士官学校ではメアリ、ヒーリー、レイと同期と言うことになるが成

績は彼らに及ぶべくもなかった。彼女は戦闘に対して才能を発揮する人間ではなく、後方において補給や事務に対して才能を発揮する人間だったのである。

それにもかかわらず、マーガレットは第四軍団において経理、総務を担当していた彼女をマーガレットはいきなり次席参謀に引き抜いたのである。マーガレットが何故、このような行動に出たのか諸説あるが、よくわかっていない。

だが、生来生真面目な性格であった彼女は自分の才能以上の能力を三年以上にわたって発揮し続けた。これにはむろん、参謀長のスタンリーらのサポートがあつてこそのものであり、彼女もそれを理解していた。

しかし、新参謀長という重責は彼女の能力を才能以上の限界すらはるかに超えるものであり、一万荷及ぶ強大な兵力を彼女は掌握しきれずにいたのである。

アビーは伝令兵にマーガレットの命令を伝えた。

（大丈夫かな……）

アビーの中で負の予感がよぎった。この十数分後、現実となつて彼女に返ってくるのである。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第四十八話

「敵が右翼から新手を繰り出してきました」

マーガレットら第四軍団が自ら陣形を崩したのを見たローレンツは小さく言った。あえて声を抑えたのはヴィクターがそれを見抜いていると考えたためである。

ワイバニア最年少の軍団長は「そうですね」と短く返事をした。生返事に近い、気の抜けた返事だった。理解しているのだろうか。ローレンツは上官に少し不信感を抱いたが、数秒後にその不信感はぬぐい去られた。

士官学校時代の図上演習においても、実戦においても、ヴィクターはその観察眼をローレンツに見せてきたが、今回においても、ヴィクターはその才を余すことなく発揮したのである。

「第三歩兵大隊に伝達を。凸形陣を敷き、敵左翼の穴をつくようにと。それから後衛の第二騎兵大隊に連絡。第三歩兵大隊が切り開いた道をそのひづめでならせと」

ヴィクターにはいささか詩的な命令ではあったが、内容は至極理にかなっていた。敵軍を前後に分断し、各個撃破を行なおうと言うのである。自分が提示しようとしていた術策とほぼ同じであると考えたローレンツは満足そうに頷くと、目を伏せた。

ヴィクターら第十二軍団を援護すべく移動中だった第三軍団長のシラーはヴィクターの戦いぶりを見ると、傍らの参謀長に双眼鏡を手渡した。

「これはおれ達はいらなかな。あいつひとりで勝ってしまいそう
だ」

懐にナイフを刺され、苦痛にのたうち回るフォレストル軍を見て、
第三軍団参謀長のアルバートはため息をついた。

「……こんなはずは。あのスタンリーがいてこのような醜態をさら
すはずはありません」

「???となると、考えられる理由は一つだな。スタンリーとやらは
いない。敵将は案外間抜けってことだ。おれが出会い、戦ってきた
指揮官でこれほどドジを踏むやつはいなかった。これでは下で戦う
兵達が不憫で仕方ない」

マーガレットがいたら、烈火の如く激怒したことだろう。自らが招
いたこととはいえ、敵将に侮蔑の目で見られたのだから。本人に才
がなかった訳でも、努力がなかった訳でもない。彼女の将としての
美点を挙げるのなら、彼女の部下、そして周囲の者達がそれこそ両
手両足を倍する数をあげたことだろう。

しかし、彼女のそのような数多くの美点を彼女自身の気質というた
だ一つの汚点で塗りつぶされてしまった。

フォレストルの姫君に生まれ、有能な兄に囲まれて育ってしまった。
彼女自身が生まれ持った自尊心とプライドの高さが彼女自身の目と
判断を曇らせてしまっていた。

自ら作り上げてしまった隙をつかれたマーガレットは顔を朱に染め
て指揮を執っていた。

「まだ、戦いは始まったばかりですわ。先陣は攻撃を続行。弓兵大隊を急がせるのです。司令部大隊は守りを固めなさい！」

戦闘が始まって、まだ十数分も経っていない。どうして思うようにいかない？ どうして敵の最弱軍団に劣勢を強いられている？

翡翠色の長髪を振り乱したフォレストル唯一の女性軍団長は苦しい戦いを続けていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第四十九話

先発したスタンリーは第五軍団騎兵大隊が陣地に降り立った。斜面の中、整然と方陣を敷いているのが見える。指揮官の統率力の高さを物語っていた。

「第四軍団のスタンリー・ホワイトです。指揮官にお会いしたい」
近づく兵士達にスタンリーは言った。だが、指揮官は上空からの来訪者に気づいていたようだ。ざわめく兵士達をかき分けて、ひと際屈強そうな男が姿を現した。

顔は岩石を思わせるような真四角で、太い腕。ほんのひとはたきでもすれば、スタンリーは枯れ木のようにぼきりと折れてしまうだろう。騎兵達の小さな嘲笑が聞こえる。大男はスタンリーの前に立つと、背筋を伸ばし敬礼をした。

「第五軍団、第一騎兵大隊長。チェスター・エイプルトンであります！ スタンリー・ホワイト隊長に再びお会いすることが出来て、光栄であります」

「お久しぶりです、エイプルトン君。ご壮健で何よりです。君と一緒に戦ったのは……」

「はい！ 十三年前の北方戦線です。あのとき、自分は新兵で、隊長の足を引っ張ってばかりでした」

十年ぶりの再会を二人は喜んだ。当時のスタンリーとチェスターとの間には天地ほどの差があり、チェスターはスタンリーが自分のこ

となど覚えていないはずがないと思っていたが、スタンリーはかつての部下を詳細に覚えていた。彼の世代ではスタンリーは伝説に等しい存在である。彼に覚えてもらっていたことは、チェスターの胸を熱くさせた。

「エイプルトン君、いや、エイプルトン隊長。今は世間話をしてい
る時間はないのです。第四軍団の件はご存知ですか？」

「はい、苦境に立たされているのは承知しております」

「そこで総司令官より、わたしに第一騎兵大隊を率いて第四軍団を
救出せよとの命令をいただいております」

スタンリーはヒーリーから託された命令書をチェスターに見せた。

「スタンリー・ホワイトを指揮官とし、第一騎兵大隊はただちに第
四軍団を救出せよ」ヒーリーの肉筆で命令が書かれていた。

「わかりました。再びホワイト隊長のもとで戦えるとは光栄です。

第一騎兵大隊はホワイト隊長の手足となって戦います」

チェスターはごつい顔に宝石の輝きをきらめかせて言った。この二
人で戦うだけならば、問題はなかっただろう。しかし、一個大隊を
掌握することに関しては話は別だった。敗北しつつある第四軍団の
人間がいきなり上に立つと言うのである。隊長が許しても、他の兵
士達がそれを良しとするとは限らなかったのである。チェスターの
副官が大隊長とスタンリーに真っ向から反発した。

「お待ちください、大隊長。わたしは反対です。総司令官の命令と
はいえ、このような訳も分からぬ男に従うなど承服出来ません！」

「失礼だぞ、ジャクソン！」

チエスターは副官を制止したが、止まらない。彼は自分自身の才覚と技量に自信を持っていたし、いきなり現れた上司の命令を聞くなど、彼には許されないことだった。それは大隊の多くが同じようなことを考えたにちがいない。命を賭けた絆で結ばれた集団はある意味で排他的だった。仲間と認めない者の下につくのは、彼らのプライドが許さなかったのだ。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第五十話

大きな声でまくしたてる若者の声を黙って聞いていたスタンリーは額の汗を拭っていたハンカチを落とした。チエスターは見た。伝説が未だ生きていると言うことを。一瞬でチエスターの視界から消えたスタンリーはハンカチが地面につく頃には、副官の喉元に短剣を突きつけていたのである。副官の首から一筋だけ血が流れる。

「なかなか優秀な部下をお持ちだ。エイプルトン隊長。微動だに出来るとは、相当の訓練を積んできたのでしよう。さて、ジャクソン君、これでわたしの実力はわかりですか？」

スタンリーはチエスターを見て微笑むと、副官の顔を見上げた。副官は声を出すことはおろか息すら出来なかった。これが参謀の動きか。これがあの腰の低い小男の目か。大隊長など比較にならない底知れぬ戦士の目。気を失いたい。この恐怖から逃れたい。だが、スタンリーはそれすら許してくれそうもない。わずか数秒、いや、一瞬にも満たぬ時間だっただろう。副官は一生分の恐怖を味わった。

「……失礼、大人げないことをしました」

短剣を引き、ハンカチを拾い上げたスタンリーは深々とチエスターに頭を下げた。

「いえ、こちらこそ、部下の非礼をお詫びします。直ちに準備にかかりますので、少しばかりお待ちください」

チエスターはスタンリーに一礼すると、部下にエスコートさせた。

「少しばかり」この言葉はいささか茶を濁らせる言葉でもある。「

少しばかり」と言えば往々にしてかなりの時間がかかるものである。しかし、チエスターは極めて短時間で戦闘準備を整えてのけた。これはもともと、陣地に到着してなお、臨戦態勢を解くことを許さなかつたチエスターの判断によるものが大きかつたが、彼の能力と彼を中心とする騎兵大隊の結束の強さがものを言つた。チエスターの部下達は彼の信頼に応えたのである。

その展開の速さはフォレストル最速の第四軍団をまとめていたスタンリーをも驚かせた。

「素晴らしい。我が第四軍団にも優る手際、感服しました」

「いえ、まだ未熟者故、課題も多くあります。ところで、我々はいかがが動きましよう？」

スタンリーはチエスターに大隊の主立つた指揮官を集めさせると作戦を説明した。現在、ワイバニア第十二軍団はフォレストル第四軍団の前後を分断しようと第四軍団右翼方向から二個大隊を投入させている。このまま、第四軍団が分断されると、それぞれ戦力を半減させられた上に各個撃破されてしまう。しかし、今このときにこそ、勝機がある。幸運なことに後続のワイバニア第三軍団は進撃速度を鈍らせており、合流に時間がかかる。加えて、第十二軍団は左翼の兵力を投入したため、その陣形は大きく乱れている。よつて、フォレストル第五軍団第一騎兵大隊は、第四軍団を分断する敵軍の背後を急襲し、敵が動揺したところをついて、さらにその前衛を切り崩し、第四軍団後退の時間を稼ぐと言つのが作戦内容だつた。

騎兵大隊の指揮官達は腕を組んだ。綱渡りのような作戦だつた。現在の戦況であるから可能な作戦であり、第三軍団が進撃速度を速めても、第十二軍団が陣形の間を直してしまえば、この作戦の優位性

は極端に低下する。一秒でも悩んでいる暇はなかった。

「作戦に賛成の者は挙手してくれ」

チエスターは各指揮官に挙手を求めた。反対する者は誰もいなかった。その代案を提示する暇も、代案もなかったためである。チエスターは各隊の指揮官をぐるりと見回すと、直立の姿勢を取った。

「第一騎兵大隊、出撃！」

指揮官らは敬礼をもって応え、すぐに自分の束ねる部隊へと戻っていった。戦いの第二幕が上がっていく。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第五十一話

「軍団長、後方の第四機動歩兵大隊が窮地に陥っています。このままでは敵に分断されてしまいます！」

第四軍団参謀長のアビー・マクファーデンが悲鳴を上げた。旗色が悪い。第四軍団は苦境に立たされていた。鶴翼の突破も出来ず、前線の攻撃に三個大隊も割いたため、中央部と後方の守りが薄くなり、左右からの攻撃を許してしまっていた。左翼からの攻撃はなんとか防いだものの、右翼の攻撃に対処しきれず、深々と突き刺さった槍は、その傷をじわじわとえぐりながら第四軍団に風穴を開けていったのである。

「第五機動歩兵大隊を弓兵装備にして掃射！ 急がせなさい」

「はい！」

（負ける？ ……このわたくしが？）

マーガレットは周囲の旗を見た。どの旗も穴が開き、痛々しい。まるで自分の軍団のように……。マーガレットは一瞬だけ戦いを忘れた。逃げたかったのかもしれない。敗軍の将となる自分を、プライドの高い彼女は許せなかった。

「軍団長、だめです！ すでに戦線を保てなくなっています。後退を……」

アビーは進言した。負け戦は覆しようもない。退却しなければ、味方の損害を増やすばかりだ。アビーの進言は参謀として当然のもの

だった。

「後退……？ 嫌ですわ。わたくしが負けるなんて、ありえませんか」

「軍団長……」

「第四軍団にあるのは、勝利の二文字だけですわ！ 全軍、突撃！ マーガレットは全軍突撃の陣太鼓を叩かせた。悲鳴と怒号が飛び交う戦場に腹に響く極低音が轟く。兵達の士気を鼓舞する太鼓の音も、今回はその役目を果たさなかった。

第四軍団の兵士達は果敢にワイバニアの防御陣に突撃したが、その動きは精彩を欠いていた。隊長クラスの指揮官のみならず、兵卒レベルでも、この戦いは分が悪いと分かる。いかに結束の固い第四軍団といえども全員が「死中に活を求めろ」とは考えようもない。攻撃せよが命令とはいえ、兵士や前線指揮官の多くが防御と言う選択肢をとったのである。

「勝ちそうですね、ローレンツさん」

「どつやらのようですね」

ローレンツは苦笑した、スタンリーの雷名におびえ過ぎて、いくつかの機を捨ててしまった。敵軍の手練は明らかに三流だ。何故もつと早く、積極的な策を講じようとしなかったのか。ローレンツは自らの未熟を恥じていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第五十二話

第四軍団陣地後方の第五軍団陣地。蜂矢の陣を形成した第五軍団騎兵大隊は臨時司令官、スタンリー・ホワイトの合図を待っていた。

「何も、ホワイト卿自らが先頭に立たなくともよいのではないですか？」

「はは、前に出なくては、敵がよく見えませんからな」

スタンリーは汗を拭った。正確にはその仕草だけだった。死闘を前にして汗一つかいていない。いや、そもそもスタンリーはどんな状況でも汗をかいたことはなかったのではないか。第五軍団騎兵大隊長チェスター・エイプルトンは思った。

仕草、言動その全てが、敵、味方に自分の能力を隠すための擬態ではなかったか。チェスターをはじめ、スタンリーを知る者の多くがそう推論しているが、当のスタンリーは否定している。「要領が悪くて、臆病なだけですよ」スタンリーはこの問いに対して、口癖のように返したという。

スタンリーは眼下の激闘を見た。あまりにも一方的な戦いだった。マーガレットが直接指揮する部隊は後方を分断され、もはや身動きすることも出来なかった。

手足を縛られてのサンドバック状態。戦友、同僚が次々と死んでいく様を、スタンリーは唇をかんで見つめていた。

「騎兵大隊、我に続け。それからエイプルトン隊長は、後方第三中

隊で騎兵大隊の指揮を」

スタンリーは少し低い声で言った。それはチエスターが十数年ぶりに聞く声だった。周囲に緊迫した空気が漂い始める。

スタンリーは腰に差していた愛用の細剣を引き抜くと、頭上に叩く掲げ、一気に振り下ろした。

「突撃！」

翡翠色の軍旗をはためかせ、フォレストル第五軍団第一騎兵大隊はワイバニア軍第十二軍団に対し、突撃を開始した。

木の生い茂る林の中を縫うように、フォレストル騎兵は疾駆した。千人単位での移動は困難かに思われたが、フォレストル騎兵は落伍者なく林の通過に成功した。馬を走らせてすぐ、開けた斜面に出る。第四軍団の陣地跡、そして、スタンリーが第四軍団を連れて帰る場所だった。スタンリーは自軍を魚鱗の陣形へ変化させた。しかしスタンリーのそれは通常よりもはるかに前後に細長いものだった。のちに”スタンリーの針”と呼ばれる陣形を完成させると、騎兵大隊はさらに速力を上げた。

隊列が崩壊するぎりぎりの速度を保ったスタンリーらフォレストル騎兵は斜面をくだり終えると、土煙を上げながら、第十二軍団の側面にある急所に襲いかかった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第五十三話

どんなに固い鎧で身を守ろうと、針の穴ほどの隙間はあるというのがスタンリーの持論だった。フォレストル第四軍団の前後を分断するために崩された鶴翼の陣は彼にとって、風穴に等しかったのかもしれない。

たった一度の突撃で第十二軍団の分断部隊を粉碎したスタンリーはそのままの速度で鶴翼中央部の重装歩兵大隊に襲いかかった。

スタンリーの指揮はここでも際立っていた。第四軍団の先陣が空けつつあった穴を利用して、斜め方向に突入したのである。重装歩兵大隊の防御は前方向には強かったが、斜めもしくは横方向に弱かった。突然現れた一個大隊に第十二軍団はパニックに陥った。

勝ちつつあった。いや、勝っていた状況をわずか十数分で覆されたのである。相次ぐ報告に、ヴィクターは驚愕した。

「いったい、何が起こったと言うんだ？」

それを考える暇もヴィクターには与えられなかった。報告が彼のもとにやってきた時点で、すでにスタンリーの騎兵大隊は前衛の大隊を突破し、第十二軍団司令部大隊至近まで達していたのだから。

「いったい、何が起こったのですの？」

「これは好機です、軍団長。直ちに後退しましょう。敵が足並みを乱している今しか、チャンスはありません」

アビーは三度目の進言を行なった。それでも尚、マーガレットは後退を迷っていた。敗北という事実を最後まで受け入れたくなかったのだ。しかし、第五軍団からの伝令兵が、マーガレットのもとにやってきた時、彼女はついに後退を決断した。

伝令兵が渡した命令書には、「第四軍団は直ちに後退せよ。抗命の意志あれば、総司令官の名において処断もやむなし」と強い字で書かれていた。王女であろうと、実の妹であろうと容赦しないとのヒリーリーの意味表示であった。

マーガレットのプライドは完全に壊れつつあった。いたずらに兵を失い、敵の最弱軍団に敗北したのだから。マーガレットは直ちに全軍を反転させ、前後を分断するワイバニア軍を後衛とあわせて挟撃すると、分断された後衛と合流し、撤退を開始した。

後退に際して、マーガレットはしきりに敵の追撃を気にしたが、敵はその気配を見せなかった。後退開始から三十分後、マーガレット・イル・フォレストルはじめとするフォレストル軍第四軍団は二一六四名という尊い犠牲を払いながら帰陣に成功した。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第五十四話

第四軍団が後退を始めた頃、スタンリー・ホワイト率いるフォレストル軍騎兵大隊はヴィクターのいる第十二軍団司令部大隊に突撃を開始した。敵味方問わず「雷電のごとく」とたたえられたその機動は前衛の重装歩兵大隊を斜めに切り裂いて突破し、急転回すると、高速で司令部大隊の中央部に突進したのである。

司令部直衛中隊五個中隊がが防御にあたったものの、兵力の絶対数と精強さが違っていた。ヴィクターを守る直衛隊はスタンリーの率いる兵力の半分程度しかない。スタンリーの鬼神のような戦いぶりを前に、易々と突破を許してしまった。

「軍団長、お逃げください！ 敵が間近に……」

伝令の報告を聞いた矢先、ヴィクターの司令部の陣幕が馬に蹴破られた。白銀の胸当てをした小柄な騎兵が一人、馬上からヴィクターを見下ろしていた。

「馬上から失礼いたします。フォレストル第四軍団スタンリー・ホワイトと申します。ワイバニア軍第十二軍団長ヴィクター・フォン・バルクホルン閣下とお見受けします」

「はい……」

スタンリーは殺気のコもつた眼差しでヴィクターを見た。蛇ににらまれた蛙のように脂汗が吹き出る。息が出来ない。ヴィクターは地面に膝をつき、胸を押さえた。体が空気を求め、荒く息をつく。

スタンリーは敵の血に濡れた愛剣をひと振りして血を払うと、頭上に高く掲げた。

（殺される！）

ヴィクターの脳裏に、これまでの人生が明滅する。ヴィクターの視界がふつと暗くなった。まるで何か影がかかったように。影はヴィクターの頭を優しくなでると風をまよって消えていった。

「がっ……」

ヴィクターは聞き覚えのある声を聞いた。その声の主が誰であったかがわかったのは、その二秒後のことだった。

「コンラート！」

コンラートは右肩を突かれ、おびただしい量の血を流していた。痛みと出血で意識がもうろうとしながらも、彼はかつての生徒を守るため、敵の前に立ちはだかった。

「かわいい生徒に傷を負わせるなんざ……教官失格だからな……」

痛みを耐え、気丈に笑ったコンラートは、それだけ言うとその巨体を倒した。

「スタンリー！」

倒れた旧友を見たローレンツが至近距離から連射弓を放った。三本の矢がスタンリーに襲いかかったが、そのどれもが彼に当たることはなかった。二本は細剣に落され、最後の一本も難なくかわされた。

ローレンツの矢をかわしたスタンリーは、かわした拳動のまま、太ももに刺したナイフを二本抜くと、返礼とばかりに投げ放った。必殺の一撃をかわされ、さらに虚をつかれたローレンツは、左肩と右腿にナイフを受けた。立つことすらままならなくなったローレンツはスタンリーの前になす術無く膝を屈した。

「く、くそ……」

「ローレンツさん！」

ヴィクターを守ってくれる仲間は今もう、一人もいなかった。圧倒的な力の差を見せつけられ、ヴィクターは生まれてはじめての恐怖と絶対的な死の予感を感じていた。敵将の姿をした死神が、一步一步ヴィクターの前に近づいた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第五十五話

殺される。死にたくない。一万の軍団を統べる者でありながら、ヴィクターは涙を流していた。助かるなら、何でもしたい。あとはどうなってもいい。半ば狂気とも思える生への渴望にヴィクターは支配されていた。そして、今になってローレンツがスタンリーに対して抱いていた畏れをようやく理解した。無慈悲な眼差し、相手との圧倒的な差をスタンリーは見せつけるのだ。死に対する恐怖、味方を殺してでも、自分が生き残りたいという欲求を呼び起こし植え付ける。尊敬よりも恐怖が優る存在もあるのだ。ヴィクターの喉元に師の血に濡れた剣が突きつけられる。あと少しでも剣が前に出てしまえば、ヴィクターはこの世の人間ではなくなってしまうだろう。助かりたいと叫びたい。しかし、敵将はヴィクターが声を発することを許さぬほどの殺気を放ち続けていた。

「バルクホルン閣下、取引させていたただきたく思います」

スタンリーは言った。何故取引を？ そのようなことをせずとも、勝利は最早手の中にあると言っのに。ヴィクターには理解出来なかった。

「あなたを殺せば、たしかにワイバニア軍は大きく力をそがれることになるでしょう。しかし、復讐戦と追撃戦を、残余の兵が仕掛けてくるやもしれません。そうなつては、我々は壊滅。一人の命と、一個大隊千名の命。どちらが大切かは、お分かりでしょう」

スタンリーはヴィクターの命と、自ら率いる一個大隊とを天秤にかけたのである。ただ、この取引はヴィクターにとって、極めて不利なものである。ヴィクターが断れば、彼の死。一個大隊は全滅する

かもしれないが、軍団長の一角を落したとなると、フォレストル・メルキド連合軍の優位に傾くだろう。

スタンリーを見逃したとしても、皇帝が許すはずもない。処罰は免れない。屈辱のまま生きながらえるか、一瞬の死か。ヴィクターは即断した。

「分かりました……。取引に応じます」

どんなに非難されてもよかった。命さえ助かればいい。ヴィクターの短い人生の中で最も利己的になった瞬間だった。醜くも敵の前で命乞いをしたのだ。ヴィクターの目から滝のように涙が溢れ出る。

「ありがとうございます。では、いずれ戦場で」

言い終えたスタンリーは、馬を走らせるとヴィクターの陣を出て行った。護衛の兵の悲鳴が聞こえる。スタンリーが追いつがる兵士達を斬り捨てているのだ。

「伝令！ 誰か！」

ヴィクターは生き残った伝令兵を呼ぶと、傷ついたコンラートとローレンツの手当と追撃の禁止を命令した。

「あとを……頼みます」

慌ただしく兵や幕僚達が動き回る陣を出たヴィクターは陣幕の影で一人泣いた。決定的な敗北だった。命乞いをして生きながらえた。生き残ってしまった憤りにヴィクターは何度も地面に拳を打ち付けた。涙と血が十八歳の少年軍団長の足許を濡らしていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第五十六話

「第十二軍団の救援に行くぞ！ 第三軍団全軍、前進せよ！」

「お待ちください。もう、戦いは終わっております。今から言っても間に合いません」

ヴィクターの救援に向おうとするシラーをアルバートは制した。第三軍団が、再度前進を開始しようとしたとき、戦いはすでに終息に向かつており、フォレストル第四軍団もすでに斜面の陣地に戻りつつあった。そして、電撃的な速さで第四軍団の窮地を救ったフォレストル騎兵隊もまた、ミュセドーラス平野陣地への帰途にあったのである。

陣形を再編する第十二軍団の陰に隠れて進むフォレストル騎兵をシラーは憎らしげに見た。

「くそ、何てやつらだ。たかが一個大隊で一個軍団を手玉にとるとは」

「旗印は見たことがありません。恐らく、新設された第五軍団という者達でしょう」

「あの”翡翠の龍将”の部下か！？ 恐ろしい手並みだ。先刻のアルレスハイムといい、フォレストルはなかなかどうして、寡兵を使うのがうまい」

シラーはいささか慥然としていた。戦場では彼らに常に見せ場を与えてしまう。兵力も、戦力もこちらが優っていると言うのに、武人

として名将を賞賛する礼儀を知っているが、何度も友軍が手玉に取られるのは、彼としては面白くなかった。シラーは自軍の司令部大隊から伝令を出し、第十二軍団の損害も確認させるように命じた。

しばらくして戻った伝令兵からの報告を聞いたシラーは愕然とした。実兵力としての損害は四九七名と第十二軍団全軍の五パーセントほどであったが、犠牲者の半数は司令部大隊に集中していたのである。その中には、第十二軍団副軍団長マルティン・コールも含まれていた。

スタンリーは司令部大隊を襲撃する部隊を二つに分けていた。一つは直衛中隊の攻撃を引き受ける襲撃隊、もう一つはヴィクターのいる本陣を攻める本隊である。司令官と戦力が健在であっても、命令を伝達し、組織をまとめる人間達がいなければ、軍団は成り立たない。第十二軍団はここに戦力を喪失したのである。

「くそつたれ」

シラーは舌打ちした。一個大隊が一個軍団に勝てる道理はない。しかし、スタンリーは決定的な勝利を収めたのである。ローレンツとコンラートは幸い命を取り留めたが、この戦いが終わるまでにはもう、回復は見込めない。師を立て続けに害されたヴィクターも精神に深い傷を負ったことだろう。

「ヴィクターに残存兵力をまとめて後退しろとおれの名で命令を出せ。酷だが、あいつとて軍団長の端くれだ。せめて、これくらいやらなければな。あと、本営に予備兵力の第九軍団の投入を要請しろ」

伝令兵に命じたシラーは悔しさと怒りに体を熱くさせた。「この借りは必ず返す」斜面に座すまだ見ぬ敵將にシラーは誓った。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第五十七話

シラーの要請を受け取ったワイバニア帝国右元帥シモーヌ・ド・ビフレストは直ちに予備兵力である第九軍団の投入を決定した。

「どいつもこいつも役立たずめが！」

相次ぐ敗北の報にワイバニア帝国皇帝ジギスムント・フォン・ワイバニアは激怒した。

「軍団長どもは余の顔に泥を塗るのがよほど好きと見える。不忠者めが！」

玉座の傍らにある台に置かれたぶどう酒の瓶をつかんだジギスムントは瓶に口をつけ、一気に酒を飲み干した。

「これも戦いのうちよ。常に勝つてばかりでは面白くないわ」

怒りに顔を紅くする皇帝を一顧だにせず、シモーヌは戦力の再編に取りかかっていた。情報攪乱を主任務とし、謀略家としての面が大きく印象づけられる彼女ではあるが、軍政のナンバー2にいる手腕は確かなものだった。彼女はシラーらが現場判断によって任命した第十一軍団長リヒャルト・マイヤーを追認すると改めて第十二軍団長に任命、マイヤーの指揮した第十一軍団残余を正式に第十二軍団としたのである。マイヤーの第十二軍団長任命と同時にヴィクター・フォン・バルクホルンを第十一軍団長に昇進させ、彼の率いる軍団を新第十一軍団とした。

これは指揮下の兵力の差と、彼らが軍団長であった期間を勘案した

ためである。新第十二軍団は補給を受けた後、新第十一軍団に一時的に組み入れられることになるだろう。

相次ぐ敗北と苦戦にいらだっていた皇帝ジギスムントもシモーヌの案を容認した。ジギスムントも政治家、軍人としても一定以上の判断力は有しており、感情と政務、軍務を完全に切り離すことが出来たのである。

一方で軍団の再編にはかなりの時間を要するため、フォレストル・メルキド連合軍には唯一と言っていい勝機が現れたのである。

ミュセドールラス平野南方斜面、連合軍総本陣の装甲馬車の屋根の上からこれを見たメルキド軍大將軍タワリツシは背後の幕僚、伝令に高らかに言い放った。

「連合軍全軍。龍の翼を閉じよ！ 攻撃開始！」

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第五十八話

ミュセドーラス平野東方、ヒーリー専用馬車に設置された作戦室の中に、乾いた音が響いた。フォレストル軍総司令官、ヒーリー・エル・フォレストルが実の妹の頬をはった。

「何をなさいますの……。お兄様」

マーガレットはヒーリーに敵意の眼差しを向けた。作戦室には、スタンリー、メアリ、ウィリアムら軍団長、参謀長クラスの間人間達が集められていた。彼らの前で兄から罰を受けることは、マーガレットにとって屈辱だったのである。

「二二三五名……。お前が勝手な判断をして殺した人間の数だ。何とも思わないのか？」

ヒーリーの傍らにいた増援軍参謀長のメアリは、彼がかつてないほどの怒りに支配されていると感じていた。マーガレットの判断が彼とタワリツシの戦略構想の一部を崩したのは疑いもなく、さらに第四軍団は全軍の二割強を失ってしまった。戦傷者の割合はさらに大きく、軍団としての戦力は半減したと見るべきであろう。

まだ後方に大きな予備兵力を温存してるワイバニア軍との戦力差は、さらに決定的となりつつあった。

「そ、それは……」

「参謀の責任でもするつもりか？ 功を焦ったのはお前の責任だ。ホワイト卿を解任したのはお前の誤りだ」

(あえて、尊大に接しているのね……)

将兵の死を意義のあるものにしなければならぬ。二二三五名の命を無為に散らせるのは、彼らに対しても、父を母を、息子を、そして娘を永遠に失った遺族達に対しても失礼なことであつた。マーガレットを処断するだけでなく、全軍に徹底しなければならぬ。総司令部の意向を聞くことなく、兵を動かしてはならないということ。士官学校の時代より、彼と最も長く時を過ごしてきたメアリは悲しげにヒーリーを見た。

ウィリアムをはじめとして、ヒーリーとマーガレット以外の人間は口を開こうとはしなかった。ウィリアムはただ腕組みをしてマーガレットを睨んでいる。部下達を無駄死にさせたことが彼も許せなかつたのだ。ウィリアムら第三軍団は一兵も死なせることはなかつたが、彼らにしても予定外の戦術行動を強いられていた。

ウィリアムは自分に与えられた権限の範囲で軍団の移動を行ない、ベティーナら第七軍団を牽制した。

スタンリーらの騎兵大隊がスムーズに撤退を成功させたのもウィリアムらの働きがあつてこそだつた。示威行動ではあつたものの、第三軍団もまた、完調とは言えぬ状態に陥つた。

第十二軍団を退けたとはいえ、フォレストル軍の消耗は連合軍にとつては大きな戦力低下になつただらう。マーガレットはこの時点であらう、自らの失敗の大きさに気づいていなかった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第五十九話

「メルキド公国増援軍総司令官ヒーリー・エル・フォレストルの名において、戦闘終結後、第四軍団長マーガレット・イル・フォレストルの軍団長号を剥奪する」

マーガレットの体に稲妻が走った。第四軍団長というポストは彼女自身のプライドの根幹とも言えるものである。自らの過失とはいえ、彼女にはあまりに酷な罰だった。

マーガレットは膝を落とすと、その場に泣き崩れた。

「なお、解任された第四軍団参謀長スタンリー・ホワイトはフォレストル王国軍総帥代理ヒーリー・エル・フォレストルの名において、第四軍団参謀長に改めて任命するものとする。以上だ」

処断を終えたヒーリーは軍団長、幕僚を帰らせると、メアリと二人きりになった。作戦室を出て行くウィリアムは苦笑めいた笑いを浮かべ、マーガレットを抱いたスタンリーは彼女に気づかれぬようにヒーリーに何度も頭を下げていった。

「ヒーリー」

「甘いなら、甘いつて笑えよ。厳しくしなければと思ってこれだ。我ながら情けない」

メアリはヒーリーの処断の意図を完璧に理解していた。この戦いが終わったあと、増援軍は解散される。戦闘終結後に増援軍総司令官などと言うポストは存在しない。存在しない役職からの命令、処罰

は無効になる。

王国軍総帥代理は戦いに先駆けてヒーリーが任命された彼の正式な役職である。対外派遣の総指揮官が軍団長と格式が同格では、用兵の裁量に制約が課されることもありうる。父王、兄からの政治的配慮によるものだった。

ヒーリーはこの名目上、実質上の地位を使い分け、二人を処断したのだ。結局のところ、マーガレットは解任されないし、スタンリーは元の参謀長の座におさまる。

大きな犠牲の割に、甘すぎる結末と言えた。

「わたしはあなたの参謀長ですから、無謀な作戦や戦術行動には当然反対するわ。今回何も言わなかったのは、あなたの決定が正しいと思ったからよ」

「ありがとう」

「それにしても、ホワイト卿には恐れ入ったわ。大胆にして、巧緻な用兵……。人は見かけによらないのね」

スタンリーの戦いぶりを賞賛するメアリにヒーリーは微笑んだ。

「『スタンリーに気をつける』って、言っただろう？ 彼なしでは南方の守りはあり得ないさ。ピット爺と同じくらい力のある人間がいなければ、強力なメルキド軍にも対抗出来ないからね」

ミュセドラス平野北東部の戦いは、敵味方双方の大きな犠牲を払って、その幕を閉じた。ミュセドラス平野の決戦はいよいよ佳境

に差し掛かりつつあった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第六十話

ミュセドーラス平野の山々に空を裂く鎗矢の音が何度もこだまする。「全軍攻撃開始」の合図である。フォレストル軍は大きく戦力を削がれたが、それ以上にワイバニア軍に対して打撃を与えている。敵が予備兵力を投入していない今こそが、攻撃の好機だった。

「巨兵大隊、重装歩兵大隊を前に出し前進！」

鶴翼の陣、その中央部に位置するメルキド軍第五軍団長ローサ・ロツサが馬車の屋根の上で指揮杖を振り上げた。彼女率いるメルキド軍一万人の精兵達がゆっくり、そして整然とした隊列を組んで斜面をおりていく。

「待ちに待った時が来たと言っことですね。軍団長」

傍らに立つ副官のプレヴューが声をかける。やせ細った体に青白い肌。頑健で、浅黒い肌を持つメルキド人とは正反対の姿をする彼であったが、その弱々しい身体とは裏腹に、一個大隊にも勝ると言われるほどの能力の持ち主だった。幼少の頃から勉学にのみいそしんだ彼は、国庫の図書館の半数の蔵書を読破し、そのほとんどを暗唱することが出来た。知識量と、記憶力だけでいうならば、歩く軍事図書館と言われた第四軍団軍師、アリー・ゼファーの上をいつていた。

「実戦は二年ぶりだからな。腕が鳴る」

指揮杖を小脇に抱えたローサは指の関節を鳴らした。肩をむき出しにした彼女の鎧からは鍛え抜かれた筋肉が見える。指揮官としてで

はなく、戦士としても優れている証拠だった。

ローサ・ロツサは当年二十九歳になる若き女将である。勇猛果敢なメルキド軍の中でも知勇兼備の名将と知られている。彼女に比すれば、マーガレット、アンジェラは勇に、マレーネ、ベティーナは知に傾いていると言われている。アルマダの女将の中ではマレーネと互角に戦える唯一の存在だった。

背も高く、均整のとれた身体に、ショートボブの黒髪。堂々とした戦いぶりはメルキドの女子のあこがれであり、彼女を慕う国民からは連日花束が贈られているという。

彼女率いる第五軍団はまもなくワイバニア第八軍団をその射程に収めようとしていた。

「相手はゲオルグ・ヒッパ！。老練な男だが、勝機は十分すぎるほどある。恐れるな。全軍、そのままの速度で突進せよ」

伝令兵はローサに一礼すると、馬車の屋根の指揮所に設置された陣太鼓を盛大に打ち鳴らした。太鼓に応えるように戦象達は猛り、兵士達の士気を鼓舞する。

「第二陣、第一から第三歩兵大隊の歩みが遅い。少し速度をあげろ」

「はい」

陣形のわずかな空白を察知したプレヴューがすかさず指示を出す。ローサが傍らの副官を見ると、プレヴューは頭を下げた。

「申し訳ありません、僭越なマネをいたしました」

「いや、いい。わたしも同じことを考えていたところだ。フォレストル軍の愚もある。穴を空けたと感じれば、気がついた方が対処する方が良い」

先だつてのフォレストル第四軍団の敗因は陣形に大きな穴をつくり、自壊してしまつたことによる。中位軍団長とはいえ、相手はヴィクターとは比較にならない経験を持つ強敵である。隙を見せる訳にはいかなかつた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第六十一話

ローサ・ロツサ率いる第五軍団の突撃とほぼ同時に、ロシアン・フェイルード率いるフォレストアル第六軍団も突撃を開始した。

「第一から第三歩兵大隊前進。整然と、後続と足並みを揃えてだ。第二陣、前衛から離れるなよ」

口数の少ないロシアンも、今日だけは必要以上に口数は多かった。彼自身も彼の部下達も三国入り乱れる大会戦は経験がない。はやる部下を統制下に置いたために、彼は普段よりも細かな命令を発していた。

「我ながら、自制が強すぎるな。笑ってしまっ」

足並みを揃えてゆっくりと斜面を下る軍団をみながら、ロシアンは自嘲気味に笑った。もともとは石兵乗りとして名を馳せたロシアン・フェイルードは巨兵大隊による突進攻撃を最も得意としており、歩兵大隊を前にしての攻撃は彼らしくない方法だった。

だが、彼としては巨兵大隊をここの奥の手として使おうと考えており、彼の陣形の突破を目論むワイバニア第二軍団がくさび形の陣形を編成しているのを見るや、彼は自らの作戦が間違っていないことを実感した。

前方の第二軍団を率いるはマレーネ・フォン・アウブスブルグ。ワイバニア第二位の軍団長である。その指揮能力と用兵の妙は先刻のフォレストアル軍との戦いで見せつけられている。

(勝てるのか……やつに)

冷静無比のロシアンは、自らの力に疑問符を持たざるを得なかった。ロシアン・フェイルードは冷静に戦局全体を見渡し、必要な戦力を振り分けて勝利することが出来る一流の軍団長である。

それだけに、彼はマレーネとの実力差を自覚せずにはいられなかった。

斜面を下りたメルキド第六軍団の隊列に、ワイバニア第二軍団が襲いかかる。ロシアンは技巧をこらして整然と重厚な人を築いていたが、敵の軍団の方が先端に戦力を集中している分、攻撃力は高い。ロシアンの前線はたちまちのうちに崩れていった。

「悔しいが、向こうの兵の方が強い。戦線を下げて一つの線となし、しかる後に再突撃をかける」

ロシアンは前線の三個大隊に後退命令を出したが、これが裏目に出た。マレーネ率いる第二軍団は同じ速さで第六軍団を追尾したのである。

「しくつた！ これでは戦線を立て直すことは無理だ。第一、第二歩兵大隊は左翼、第三歩兵大隊は右翼に回れ。急げ」

このときのロシアンの命令は前線には届かなかった。正確に言えば、ロシアンの予測以上に命令が届くまでに時間がかかったのである。

その隙についてマレーネはピットの横陣を攻撃したのと同じ攻撃を、ロシアン率いる第六軍団にも加えた。彼女は軍団を一時後退させると、全軍を五つに分け再突撃し、さらに後退させると、全軍を結集

させ、さらに第六軍団前衛に突進した。

ワイバニア第二軍団の移動と展開の速さは、フランシス率いるフォレストル第一軍団を攻撃したときよりもさらに速く、敵将であるラシアンですら、その用兵を賞賛した。

「何と言う速さだ。想像をはるかに超えている……。これがマレーネ・フォン・アウブスブルグか」

ラシアンは敵將に畏敬の念を抱かずにいられなかった。第六軍団の前衛を突破したワイバニア第二軍団は巨兵大隊が守護するメルキド軍第二陣に突入しつつあった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第六十二話

メルキド軍第二陣は巨兵大隊を中央に、重装歩兵大隊を両翼に配して敵軍の攻撃を受け止めようとしていた。巨象の巨体と、石兵の装甲は敵の突撃を真正面から防ぎきる力を有している。マレーネらワイバニア第二軍団はメルキド軍の強固な防御陣を前にその足を止めた。

指揮能力を備えた大型馬車に、マレーネは司令部を移していた。馬上からの指揮では全軍を見渡すことは出来ない。馬車の屋根に取り付けられた小さな檣の上で、マレーネは指揮を執っていた。

「アルマダの掟を思い出しなさい。歩兵は巨兵よりも強いのだよ。先鋒の騎兵大隊を下げ、第一、第二歩兵大隊を前に出しなさい。機動戦を仕掛けるのだよ」

彼女は即座に歩兵による巨兵の各個撃破攻撃に方針を転換した。集団であたれば、巨兵など恐れるほどのものではない。メルキド軍との戦訓から、彼女はそれを学んでいた。

「予想通りだな。……それでは、作戦の第二段階にかかるとしよう」

ロシアンは鼻を鳴らした。石兵乗りとして勇名を馳せたロシアン・フェイルード以上に巨兵運用に通じた指揮官はいない。彼は、手持ちの弓兵大隊を中隊単位に分け、さらにそのうち五個中隊を巨兵大隊の援護にまわした。それだけならば、弓兵は二個歩兵大隊に勝てない。ロシアンは弓兵を分隊単位に分割した上で、巨兵の陰から敵歩兵を射かけたのである。

「わあああ！」

「この野郎っ！ 剣が、斧が通じない！」

「退け！ 退くんだけ！」

戦場の至る所で、ワイバニア兵の悲鳴が聞こえる。矢に追い立てられ、誘い出された場所には巨人の群れがいる。自分たちの三倍はあろうかという背丈、体を守る分厚い鉄の甲冑は矢も剣も通さない。角を生やした鬼を連想させる石兵は、容赦なく敵の兵に刃を、槌を突き立てる。いかに強く勇敢な戦士が数多くいようと、絶対的な力の前にはただ無力だった。

「何と言うこと……。予想以上ね」

マレーネはロシアンの用兵に舌を巻いた。元々、緒戦において龍騎兵大隊が全滅に等しい損害を受けている上に、フランスとの戦闘での損害もあいまって、マレーネが率いる兵力は完全時の八割強に留まっている。故に防戦ではなく攻勢に出ることで、敵戦力の減少を狙ったのだが、ロシアンの実力が彼女の想定を上回っていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第六十三話

「軍団長、敵左翼に動きが見られます」

副官のエアハルトがマレーネに言った。

「予想通りね。敵の動きに呼応して騎兵大隊に敵左翼と中央部の要に攻撃を加えさせなさい。早く、全力でね。一回突撃したら、全速後退。本隊も同時に退くわよ」

「退却するのですか？」

「そう、悔しいけど、敵も大したものだわ。兵力が少ないわたし達では不利よ」

「ですが、僕は……。第二軍団が負けるのは……」

納得いかない副官の前髪をマレーネはそっと触れた。

「勝とうと思えば勝てるけど、犠牲はきつと大きくなるわ。わたしにはそれが許せないの」

マレーネのもとに伝令兵がやって来る。伝令はロシアン率いるメルキド第六軍団左翼と側面を守る重装歩兵大隊が接敵したことを伝えた。

「あと、少しね……」

ほんのわずかな隙をマレーネは待っていた。左翼の歩兵と中央部の

重装歩兵の間に、わずかな陣形の崩れが見えた。

「今よ！ 騎兵大隊突撃！」

「な！」

騎兵大隊突撃の瞬間をロシアンは見た。まさに電光石火。陣形の一角が瞬く間に崩れていく。

「戦線を立て直せ！ 早く……！」

ロシアンは戦線の建て直しを命じたが、それよりも速く騎兵とワイバニア第二軍団本隊が高速で後退していく。その退却戦の手際はロシアンを嘆息させた。

「やられた……。まさに当代の名將だ。マレーネ・フォン・アウブスブルグ……！」

「軍団長、追撃戦はしないのですか？ 我々は今、敵第二軍団に勝利しつつありますのに……！」

ロシアンの背後に控える若者がロシアンに尋ねた。副官のザザである。ザザは若い士官に多々見られるように血気にはやる部分もあったが、ロシアンの薫陶を受けていることもあり、二十代前半の士官の中では冷静な戦術眼を有している人間だった。

「アルバーティン」

ロシアンはザザの隣に立つ参謀長の名を呼んだ。”ロシアン・フェイルードの分身”とあだ名される参謀長はロシアンに一礼すると若

き副官に言った。

「たしかに局地戦において、我々は勝利したとも言えるが、戦局全体では話は別だ。我々が追撃をかけると、我々だけが突出することになり、逆に敵軍団が我々を包囲する好機を与えてしまう」

ザザは参謀長の言葉に頷いた。

長身瘦躯に小麦色の肌、艶やかな黒の長髪を持つ美男子。アルバーティンの容貌の記述である。戦場でも式典でも、その美丈夫ぶりは映えたことだろう。

ラシアンもまた、アルバーティンに負けず劣らずの美青年であり、二人が並んだ姿を見た女性兵士達は、その光景にため息をもらすほどであったという。

反面、二人はそのような視線をむしる嫌悪感を持って見ていた。

「戦いに格好をつけるのは必要だが、それだけでは勝てはしない。軍務に精励しろ」

二人はそのような視線を向けられる度に兵士に苦言を呈した。

ザザもまた、女性兵士の例に漏れず、二人の容姿に言葉を失っていた。

「何だ？ 貴官もまた、女達と同じくちか？ おれは女に好かれるのは構わんが、男に好かれるのはごめんこうむるぞ」

アルバーティンはザザに言うと、声高く笑った。戦場で笑うのは不

謹慎極まる。ラシアンが参謀長を目線一つで制すると、小さく言った。

「この戦いを勝ちとするならば、たしかに勝ちだろう。ともかく負けはしなかったのだからな。つかの間の喜びにひたっても罰はあたらないだろう」

ラシアンの前にはワイバニア第二軍団が見える。寡黙な軍団長はワイバニアの強者を撃退できた喜びをかみしめていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第六十四話

他の軍団が斜面を下ると時を同じくして、デイサリータ率いるメルキド軍第四軍団もオリバー・リピッシュ率いるワイバニア第六軍団に向けて攻撃を開始した。

「第一から第三歩兵大隊前進！ 弓兵大隊は適宜、歩兵大隊を援護射撃せよ」

装甲に守られた戦象のやぐらの中で、第四軍団軍師、アリー・ゼフアーは声を張り上げた。他の軍団長は後方の陣地や装甲馬車を指揮所にしてしたが、アリーだけは違っていた。

彼は「安全」ということに過剰なまでにこだわった。それは今、彼の後ろにいる主君を守るために他ならなかった。

デイサリータは彼女よりも少し大きめに仕立てられた鎧に身を包み、顔をこわばらせている。

守らなければならぬ、この小さな主君を。若き忠臣はその義務を愚直に守り続けた。デイサリータはもともと望んで軍団長になったわけではない。メルキド公国有数の実力者である彼女の父がたった十五歳の少女を無理矢理軍団長職につけたのである。

望まない地位につき、望まない戦いで命を落とすのは、なんと悲しいことだろうか。幼き頃から彼女の父に才能を見込まれ、デイサリータに仕えてきたアリーは彼女を絶対に死なせてはならないと考えてきた。

一刻も早く戦いから解放され、彼女には幸せになって欲しい。それだけが、アリーの願いだった。

「敵は我々よりも数は少ない。油断せず、臆せずにあたれば、勝ち
は我らのものだ。全軍前進！」

アリーは全軍に檄を飛ばした。万を超える兵達が、雪崩のように第六軍団の方陣へと襲いかかっている。

「大軍の運用としては間違いではないな。小細工をせずに寡兵を粉砕する……か」

第六軍団長オリバー・リピッシュは器用に片目を開けた。フランシス相手には一歩譲ったものの、リピッシュはワイバニアきつての戦上手と知られており、敵の攻撃に対して柔軟に対応できる思考の持ち主だった。その戦場での駆け引きの巧みさは、十二軍団長の誰もが一目置くほどであり、アンジェラ・フォン・アルレスハイムは彼の軍団に所属していた時代に、オリバー自ら用兵学を叩き込んだ直系の弟子とも言える存在だった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第六十五話

「さて、押されるのなら、少し退くか。全軍後退。なるべく潰走を装ってな」

最前線の戦況を確認したりリピッシュは配下に後退を命じた。このとき、彼はあたかも自軍を負けて見えるように演じさせた。敵が攻めて来るのならよし、あからさまな偽装後退を敵が看破し、追撃を諦めるならまたよし。リピッシュは敵に選択肢を与えたのである。

「敵が退却しています。軍師、さらに追撃しましょう」

アリーの隣にいた彼よりも少し若い参謀が声を上げた。もろすぎる。アリーは敵の後退が擬態であることを見抜いていた。このまま敵を追えば、自軍団だけ突出することになり、敵に側面攻撃と包囲の機会を与えることになる。しかし、流れに乗った軍団を止めることは兵達の士気を大きく削ぐことになりかねない。明敏な軍師は迷いを抱いていた。

「ここは、敵の数を減らすことが肝要だ。全軍、さらに前進……」

言いかけたそのとき、デイサリータがアリーの軍服の裾を引っ張った。かぶとを脱ぎ、額に汗を光らせた姫君は無言で首を振った。

「しかし、軍団長。今、敵を倒さねば、敵はすぐに新手をくりだしてきます。早く動かねばなりません」

若い参謀がアリーの気持ちを代弁した。彼の言うことは間違っていない。アリーは心中では彼の考えを支持していた。しかし、軍団長

は頑なだった。

「……だめ」

泣き出しそうな顔を必死で押さえながら、デイサリータはアリーの裾を強く握った。アリーは主君のために身を屈めると、彼女に耳を近づけた。

「お嬢様。何か、お考えがあるのですね？　どうか、このアリーにお教えください。わたしは何も怒りませぬ故」

デイサリータは顔を明るくさせると、アリーをはじめ、幕僚に作戦を説明した。アリー以外の人間にはほとんど口をきくことのないデイサリータは、顔を赤らめながら精一杯話した。その声はとても小さく、聴き取るに難儀なものだったが、彼女の提示した作戦に司令部の幕僚達全てがうなった。

「わかりました。それでいきましょう」

アリーは頷くと、各部隊に対して迅速に指示を出していった。

「……む？　敵軍の隊列に変化があるな。全軍警戒を怠るな。何か仕掛けて来るかもしれん」

敵軍のわずかな乱れを見たりピツシユは敵の作戦を警戒したが、何を仕掛けてくるかまでは予想できなかった。彼は当初の戦術を優先させた。

「軍師、第一騎兵大隊、第一弓兵大隊、ともに準備完了です」

「巨兵大隊の準備はどうだ？」

「まだです！」

アリーは窓から身を乗り出し、司令部大隊前方に展開中の巨兵大隊を見た。まだ陣形が整っていない。この作戦はタイミングが勝負の鍵になる。第四軍団が突出しつつもすぐに退却できる絶妙な時期で攻撃をかけねばならない。鈍重な味方の動きに、いつもは冷静なアリーもいらだちはじめていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第六十六話

「急げ！ 敵は待つちゃくれんぞ！ 軍団長閣下もな！」

巨象のやぐらの窓から、メルキド軍第四軍団巨兵大隊長シオドアが身を乗り出した。

「そんなこと言っても、こっちは精一杯やってんすよ！」

「うるさい！ 口動かす暇があったら、足動かせ！ そのオリオン小隊！ もそつと左だ。ぼやぼやすんな！」

シオドアは眼下の石兵乗りをどやしつけると、直近の小隊に命令を発した。戦象の上からは部隊の展開の様子が見てとれた。最前線には三個歩兵大隊が整然と槍を構えて敵に相対し、そのすぐ後方の両翼には、騎兵と弓兵が均等に五個中隊が配置されている。その中央には自分たち、巨兵大隊があたふたともたついている。

歩兵大隊は堅固な防御陣をしいてくれているが、突破されたら一巻の終わりだった。敵はこちらが攻撃態勢を整えるまで、待つてくれる訳はないのだから。

「ふふん……」

ワイバニア軍第六軍団長オリバー・リピッシュは鼻を鳴らした。

「どうやら、敵はかなり大掛かりなことを企んでいるみたいだな。

どんな手を出すか見てみたいものだが、そうするわけにもいくまい

「よ

リピツシユは指揮下の軍団を密集させると、メルキド軍の隊列に突っ込ませた。弾丸のごとくとたたえられたのはリピツシユのこのときの突撃である。重装歩兵を前面に出し、攻撃力を最前線に集中させたリピツシユの陣形を前に、メルキド軍前線は文字通り粉碎された。

兵士達が散り散りになり、逃げ惑う。

「まずい……」

崩れた陣形を見たアリーは舌打ちした。味方の攻撃準備はまだ整っていない。今、歩兵の壁を突破されたら、第四軍団は壊滅だ。アリーの背筋に冷たいものが走った。

アリーの軍服の袖を少女が引っ張った。少女は忠臣をかがませると耳打ちした。

「かしこまりました。お嬢様。突破された部隊は各隊長の判断で左右に展開。騎兵、弓兵隊も前進せよ。巨兵大隊は戦象を前面に出すように伝えよ！」

アリーはすぐさま指示を出した。アルマダ最年少の軍団長は顔を朱に染め頷いた。デイサリータの策は中、長距離支援用石兵「ヘラクレス」に装備された巨大弓によって敵兵力を分断し、騎兵、弓兵、歩兵で包囲殲滅するものだった。つまり、敵を包囲することに作戦の主目的があるのであって、石兵を運用することには対して重点が置かれていないのである。敵軍の突撃をデイサリータは敵を包囲する好機と考えたのだ。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第六十七話

このミュセドーラス平野の戦いはデイサリータの将としての天分をのぞかせた戦いであった。これまで、デイサリータの軍団長としての評価は内外問わず「お飾り」に過ぎなかった。それは十五歳と言ふ彼女の年齢と人見知りな性格、そして何よりも実戦経験も軍隊経験もなく軍団長に就任したことにある。

「温室育ちのお嬢様に何ができる」

軍団長格の人間は彼女を暖かく迎えたが、それ以外の人間はおおむね彼女が軍団長であることを好意的に見てはいなかった。

彼女の初陣は周囲の予測を大きく裏切った。軍師の陰から常に出ることがなかった彼女が、戦機を読み、的確に指示を出しているのだから。恐らく、戦術における柔軟な思考はアリーの上をいつていただろう。彼女の戦術は卓越した戦術指揮能力を持つリピッシュですら驚嘆せしめた。

「潰走した歩兵が左右に展開しているな。敵第四軍団長は初陣と聞いているが、堂々たる用兵だ。有能な軍師もついていると言うが、おそらくはそいつの手腕だろうな。楽に撃破できると踏んでいたが、なかなかどうして、うまくいくものではないな」

リピッシュの推論は間違っていた。この時点ではアリーはデイサリータの伝聞、報告役に徹しており、彼自身はまだ戦場で十全に力を発揮していなかったのである。

デイサリータの戦術変更はそのままりピッシュの危機に直結した。

現在、デイサリータは敵第六軍団に対し、理想的な包囲戦を展開している。これほどスムーズに包囲が成功することはアルマダ戦史上きわめてまれである。包囲下におくことが出来れば、デイサリータの名は、三国の戦術教本に永久に刻まれたであろう。

しかし、包囲は成功しなかった。リピツシュがデイサリータの包囲を察し、騎兵と弓兵が第六軍団後方に展開を終える前に、後退を終えてしまったからである。

「ん？ おい、ワイバニア軍が逃げていくぞ！ 奴ら、逃げ足だけは一丁前だぜ！」

前線のメルキド軍兵士は全速で後退するワイバニア第六軍団を指差しては大笑いしたが、軍団長クラスの場合は異なっていた。包囲寸前にあつた味方を損害もなく退却させたリピツシュの能力を激賞したのだった。

「……オリバー・リピツシュを相手にしたくないな。参謀長。彼は多分、ハイネ・フォン・クライネヴァルトより厄介だ」

フォレストル第五軍団陣地でリピツシュの戦いを見たヒーリーは傍らのメアリに言った。メアリは双眼鏡で遠方の激闘を観戦している。

「自軍の速度と、包囲されるまでの時間を即座に計算して、全速後退に踏み切ったわね。あの機動を見ると、動きに一切のためらいがないわ。まさに名将ね」

「ああ、彼は目的の達成のためなら、手段を選ばない人間のようだ。……もちろん、いい意味でね。ハイネは戦術の独創性、戦術眼、どれをとっても彼の上をいく。だけど、ハイネには戦士としての美学

がある。そこに勝機があるのだけれど、リピツシユはそう言った口マンチシズムには無縁だろう。それだけに厄介だ。……ピット爺はよくもあんな名将を赤子同然にひとひねりしたもんだ」

ヒーリーは肩をすくめた。メアリは双眼鏡を下ろすと、意外そのような眼差しを彼に送った。ヒーリーがここまで敵将を誉めることは極めてまれである。メアリが経験した中でははじめてのことだ。戦いの中、彼も変わりつつあるのだ。メアリは肌でヒーリーの成長を感じていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第六十八話

「ところで、軍団長、我々も敵軍に攻撃を与えるべきではないでしょうか。大將軍からの命令も届いておりますし」

メアリはヒーリーに言った。敵第十二軍団が退却した現在、フォレストルの前方にいるのは、第三、第七軍団の二個軍団のみ。数的にはフォレストル軍が優位に立っていた。メアリやタワリツシにしてみれば、今こそがワイバニア軍撃滅の好機と見ていたが、ヒーリーの認識は異なっていた。

「我々はまだ動かない」

「どうしてですか？」

メアリの問いにヒーリーは足もとの敵軍団を指差した。

「整然とした隊列だ。彼らは防御を固めている。どうしてだと思っ
？」

「我々の攻撃に備えている。あるいは、我々への牽制……？」

「おれは後者だと考えている。敵の軍団は、メルキド軍の攻撃に対応しているけれど、比較的積極的に彼らはメルキド軍にあたっている。ワイバニア軍第一軍団が南下しているのを見ると、彼らはどうやら、この龍翼の陣を分断した上で、各個撃破するつもりだ。それまで、おれ達の動きを封じるのが前面のワイバニア軍の作戦なのさ。常道だけど、なかなかどうして、スケールがでかい」

ヒーリーはワイバニア軍の戦略を看破していた。

「ですが、それではやはり兵の絶対数において有利な今こそが、ワイバニア軍を撃破する好機であると、小官は考えます」

メアリの部下の参謀がヒーリーに反論した。ヒーリーは立ち上がり、と机に広げられた作戦図を指差した。

「今回の戦いの目的はワイバニア軍を殲滅することだ。回復できないほどの損害を与えなければ、次の戦いでおれ達は確実に負ける。いや、今日だつて勝敗は怪しいものさ。そのためには敵が予備兵力を投入してくれないと困るんだ」

「困る……？」

「そう、それに、第四軍団は、戦力の再編が済んでいない。今戦ったところで、額面通りの働きはできないさ」

前の戦いでフォレスタル第四軍団は戦力の二割を失っている。重軽傷者を考えると、戦えるものは五〇〇〇名ほどだろう。

「だから、我々が出るのはまだ先。敵が予備兵力を投入したそのときが勝負だ」

ヒーリーは麓を見た。後続の兵力はまだ動き出していない。決戦はまだ先に思われた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第六十九話

「まだ、ヒーリーは動かないのか!？」

背後の第五軍団をフォレストル第三軍団長ウィリアム・バーンスはにらみつけた。

「は、はい……。総司令官からは『動くな』との命令が届いております」

参謀のひとりがウィリアムの剣幕に圧され、冷や汗を垂らした。もともと先制攻撃を得意とするウィリアムにとって、このように相手の出方をうかがう戦いは彼に想像を絶する忍耐を必要とした。もつとも、その忍耐力もすでに使い切っている。一刻も早く敵と戦いたい。フォレストルの勇将は目を血走らせて眼前の敵に相対していた。

「ん？ まだ戦わないんですか？」

軍団長専用馬車に設置された作戦室。その隣にある軍団長室から寢癖に瓶底眼鏡をかけた女が姿を現した。第三軍団参謀長、エミリア・バスカヴィルである。

「ままだよ。我らが総司令官殿が動くなとよ」

「だめですよ。上官をそんな風に皮肉っちゃ」

ねむけまなこをこすりながら、エミリアはゆらゆらと歩きながら窓にしがみつき、戦況を確認した。

「ん」

「ん」

目を細め、彼女にしては真剣なまなざしをして唸ると、またゆらゆらと動き出した。

「どうやら、総司令官の判断は正しいようですね。それじゃ、攻撃開始までおやすみなさい」

嬉しそうに軍団長室に戻る参謀長の三つ編みをウィリアムは引つ張った。

「い、痛い！ 何するんですか!？」

「それはこっちの台詞だ！ どの世界に戦いの最中に爆睡こく参謀長がいるんだ!？」

「ここにいます」

胸を張る参謀長の頭上にウィリアムの拳骨が落下した。

「何するんですか?」

「お前な。いくつだと思ってんだ？ 三十二だぞ、三十二。おれより四つも年上なんだぞ！ 少しはしっかりできないのか?」

痛そうに頭をさするエミリアにウィリアムは言った。エミリアは今年三十二歳。ウィリアムよりも四歳年長にあたるが、外見上では四

歳年下に見えてしまう容姿の持ち主だった。参謀長としての能力はキングストーンには及ばないものの、それに最も近いと言われる傑物だったのである。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第七十話

「だって、敵はまだ動く気配ありませんし、敵の目的は牽制にあるみたいですよ。それに、今たたくと、敵の増援に側面攻撃を許してしまいます」

ウィリアムはエミリアをどけると窓に取り付き、斜面と麓の様子を確認した。

「なるほど……」

「それに第四軍団の旗を見ると、どうやら戦力が相当減らされていますね。スタンリー参謀長の手腕でも、建て直しにはもう少し時間がかかるでしょう。戦力が回復しないまま戦っても、やられてしまいますよ」

「なるほど……」

ウィリアムは釈然としないでいた。

(こいつ、一目見てフォレスタル軍と敵軍の陣容を見抜きやがった)

この時代において、エミリアの洞察眼にかなう人物はヴィクター・フォン・バルクホルンしか存在しない。しかし、ヴィクターはエミリアと比べて圧倒的に戦闘経験に劣る。

十八歳で初陣を果たし、大小三十の戦闘に参加し、生き残ってきたエミリアとは大きな差が開いていた。

「それでは、おやすみなさい」

「だめだ。寝るな。ここにいろ」

彼女の寝室と化した軍団長室に戻ろうとしたエミリアにウィリアムは極めて短く命令した。

「何ですか？ 動く必要はないって申し上げたじゃないですか。軍団長のケチ」

反論の代わりにウィリアムからは二度目の拳骨が落ちてきた。

「痛あ……。だから、お嫁さんもらいないんですよ。バカ」

「バカと言いやがったな！ この野郎！ 大体お前だって独身のくせに、人のこと言えないだろうが！」

「軍団長、落ち着いて！」

「相手は参謀長なんですから！」

エミリアに殴り掛かろうとしたウィリアムを幕僚達に取り押さえた。顔を真っ赤にし、怒りを爆発させたウィリアムにエミリアは舌を出した。火に油を注ぐ行為だ……。彼を取り押さえた三人の参謀は血の気が引いていく音を感じた。

「マーシャル次席参謀！」

「は、はい！」

次席参謀のマーシャルはうわずった声を上げて上官に答えた。

「丘をあがって、ヒーリーの馬鹿に第三軍団の出撃命令をとりつけてこい！」

「はい、ただいま！」

マーシャルは敬礼すると、電光石火の速さで作戦室を出て行った。恐らく、出撃命令は出ないだろう。しかし、今は軍団長の怒りが何よりも怖い。顔を青くさせた次席参謀は伝令用の翼竜に飛び乗った。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第七十一話

「だめ」

フォレストル軍総司令官のヒーリーはマーシャルに対し二つ返事で言い放った。

「どうせまた、参謀長のエミリアと喧嘩でもしたんだろう。だから、だめ」

「し、しかし……。我が第三軍団は士気も……」

もつともらしい道理を並べようとしたマーシャルは、ヒーリーの視線一つで抑えられた。彼がどれほどの知略を尽くそうと、ヒーリーやエミリアの論理は崩せない。有能な参謀である彼には、それが十分すぎるほどわかっていた。

「しかし、わたしもこのまま帰る訳にもいきません。軍団長から、命令を受けているのですから」

「そうだな……」

「軍団長……？」

メアリはそっとヒーリーに耳打ちした。名案と思ったのだろう。ヒーリーは笑って参謀長に頷くとマーシャルに言った。

「マーシャル第三軍団次席参謀。貴官の言いたいことはよく分かった。あとで使者に命令書を届けさせるから、そのまま帰ってくれ」

「ですが……」

「大丈夫、ウィリアムはそう言うところは理解してくれるさ」

釈然としないマーシャルを戻らせたヒーリーは作戦室を出ると、相棒の名を呼んだ。

「ヴェル！」

空から舞い降りた翡翠色の翼竜は嬉しそうにヒーリーに身体をすり寄せた。

「よーしよし。なあ、ヴェル。ちょっとお使いを頼まれてくれないか？」

ヴェルはヒーリーの話の聞くと、短く鳴き声をあげた。

「命令はなかっただど!？」

「はい、総司令官はあとで使者をよこすと……」

不機嫌という文字を顔中に貼付けたウィリアムは戻ってきた次席参謀を怒鳴りつけた。エミリアはエミリアで作戦室にはいるもの、うたたねの真っ最中だ。ウィリアムも彼女を叱りつける気は失せたらしい。だからと言って自分を怒鳴って欲しくはないが……。マーシャルは顔を伏せた。

マーシャルが戻って数分後、ウィリアムの作戦室の扉をノックする音が聞こえた。

「お？ 使者だな？ さて、ヒーリーの野郎、どんな命令書を書いたきやがったんだ？」

肩を落とす次席参謀を押しつけ、ウィリアムは扉を開けた。

「ん？」

彼を待っていた翼竜の使者は、その大きな口を開けて彼にあいさつをした。ヴェルは彼を頭ごとはっくりくわえると、愛おしそうに口をもごもごさせた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第七十二話

「おい、どういう冗談だ？ これは……？」

ヴェルにくわえられたまま、ウィリアムは振り向くと幕僚達に尋ねた。

「そ、それは……その……」

「あ、ヴェルさんの脚に手紙がついていますね。よしよし」

エミリアはヴェルの頭をなでると、ヒーリーからの命令書を読み上げた。

「『第三軍団長ウィリアム・バーンズは水でもかぶって頭を冷やせだそうですよ』」

ようやくヴェルから解放されたウィリアムはヒーリーからの使者をよけると作戦室を出て行った。

「ありがとございました。ヴェルさん、もうヒーリー殿下のところに戻って大丈夫ですよ。わたしがちゃんとしておきますから」

エミリアの言葉に短く応えたヴェルは大きな翼を広げて空へと舞い上がった。扉が開いたままの作戦室の中はヴェルが起こした風におられて書類や筆、陣形図など雑多なものが飛び上がっている。

「……大丈夫ですか？ 軍団長は？」

床に落ちた書類を拾い上げながら、マーシャルはエミリアに尋ねた。

「大丈夫よ」

「ー大丈夫だと思うよ」

第五軍団陣地、その中心にあるヒーリー専用馬車の作戦室で、ヒーリーは参謀長であるメアリに言った。

「あいつは勇将だが、猛将ではない。自軍の戦力と敵軍の戦力を正確に把握して戦える男だ。それに猪突して失敗した例をやつは学んでいる。総司令部が手綱を握っていれば、問題はないさ」

「そうね……それに……」

言いながら参謀長は新しい書類をヒーリーの机においた。

「それに、何？」

「エミリア先輩、怒るとわたしより怖いわよ」

「ははは……そいつは、大変だ」

苦笑すると、ヒーリーは書類に目を通しはじめた。フォレストル軍の後方に着陣して以来、ヒーリーのもとにはさまざまな情報が入つて来る。メルキド軍の戦闘詳報、入り口のワイバニア軍予備兵力の動向、そしてフォレストル軍の再編状況。彼が最も気がかりにしていたのはこれだった。時間がかかり過ぎては戦いに間に合わないどころか、逆撃されて壊滅してしまう。スタンリーの手腕が頼りだった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第七十三話

「軍団長……わたし達は戦わなくていいんでしょうか？ その、先鋒軍はずっと戦い詰めですし……」

「誰と？」

幕僚からの問いをワイバニア軍第七軍団長ベティーナ・フォン・ワイエルシュトラスは質問で返した。

「その……目の前の敵です！」

「一人で？」

ベティーナの問いに幕僚は固まった。フォレスタル軍に戦う意志がない以上。戦力に劣る第三、第七軍団が戦いを仕掛けるのは下策だった。

「今戦つても、こちらの損害が増すばかりよ。せめて、あと一個軍団が来るまで待ちなさい」

「軍団長……」

胸甲に身を固めた幕僚が一步前に出た。胸の印が彼が高い位にあることを示している。

「アルトウル、どうしたの？」

ベティーナは副軍団長のアルトウル・フォン・シュレーゲルに尋ね

た。

「やはりここは戦うべきだと愚考します」

「愚考ね」

ぴしゃりと否定したベティーナに、副軍団長は顔をこわばらせた。

「敵第四軍団の残余のことを言っているのでしょうか？」

「はい、敵第四軍団はその戦力を半減させております。今はおそろく戦力の再編中でしょう。となれば、相手は二個軍団、フォレストル相手では十分に勝算があります」

アルトウルは拳を握りしめた。

「敵の総兵力は？ アルトウル……」

「およそ、一万七千かと……」

「残念、二万五千よ。対するこちらの兵力は二個軍団あわせて一万八千。数では明らかに向こうに分があるわ。それに、向こうには無傷の龍騎兵大隊がある。たしかに、敵第四軍団の戦力が再編中であるのは間違いないわ。でも、だからと言って、戦力はゼロじゃないわ。敵の戦力を見誤っていると、大変なことになる。シラーの腕なら、二個軍団は任せられるけど、正面の一個軍団と戦うとなると、攻守の均衡のとれたわたし達第七軍団は不利は免れないわ。相手は、勇猛果敢でならずフォレストル歩兵最強集団ですもの」

ベティーナの予想はおおよそ合っていた。現在のワイバニア軍では

勝つこと自体は不可能ではなかったが、極めて大きな損害をこうむっていただろう。勝利を手堅く勝ち取るためのもっとも有効な手段は、大兵力を投入して敵を粉砕することだったのである。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第七十四話

「アルトウル・フォン・シュレーゲル副軍団長……」

「はい」

「もう少し待ちましょう」

「……は？」

「あわててもろくなことにならないわ。勇み足で失敗した例はフォレストル軍が示してくれたでしょう？ 戦うべきときは必ず来る。待ちましょう」

「は、はい……」

ベティーナは微笑むと、傍らの第三軍団を見た。旗に精気がみなぎっている。時は近い……。第七軍団がその力を発揮するときが近いことをベティーナは察していた。

「我々は不動の第三軍団だ。敵が動くまでじつと我慢するんだ」

ワイバニア軍第三軍団長マンフレート・フリッツ・フォン・シラーはぼさぼさの髪をかいて言った。背後に立つ副官のヘルマンは何か言いたそうな表情を浮かべている。シラーはヘルマンを一瞥すると、小さく息を吐いた。

「何か言いたそうだな。ヘルマン」

「い、いえ……。わたしは……」

「我慢の理由だろうか？ ヘルマン、我々の兵力は？」

「一万八千です」

「敵の兵力は？」

「ええと……。二万です」

「……第七軍団の報告書には目を通していなかったな。彼らの調べは最も公正で客観的だ。彼らの報告には総兵力は二万五千、敵軍は戦力を再編中だが、それを差し引いても二個軍団では少々分が悪い」

「それは分かっております。わたしが言いたいのはー」

ヘルマンが口に出した言葉に、シラーは目を見開いた。敵軍の真の意図に気づいたのだ。同時にシラーは究極の二択を迫られた。どちらに転んでも、損害は大きい。敵将の狙いは、そこにあつたのではないか。ミュセドラス平野に侵入したときからすでに、ワイバニア軍は敵の術中にはまっていたのではないか。シラーは前方の斜面を睨んでいた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第七十五話

「第三軍団、前進！」

シラーは決断した。この時期での軍団の攻勢は第三軍団崩壊の危険性を孕んでいる。翻意を促すべく、第三軍団長のアルバート・フォン・ヘッセは軍団長の前に出た。

「軍団長、危険です」

「ああ、分かっている。だが、今動かなければ、ワイバニア軍全軍が危機に陥るだろう。どれほど愚策かも分かっている。だからこそ、アルバート……。いかせてくれ」

アルバートはもう、何も言わなかった。いや、言えなかった。危険を知りながらあえて前に出ようと言うのだ。シラーの言う通り、ここで敵を攻撃しなければ、後続の予備兵力は混乱の中で壊滅する。自軍の損害を最小限に抑えつつ、敵の攻撃の意志を挫く。綱渡りのような戦いだが、勝たねばならない。アルバートもまた、覚悟を決めた。

「第七軍団はいかがでしょうか？」

「一個軍団ではやりづらい。第七軍団にも連絡を頼む。……先輩にも言い分はあるだろうが、戦ってもらわなければ、二個軍団は各個撃破の好餌にされてしまうだろう。第七軍団への親書はおれが書く。アルバートは第三軍団の戦闘準備を整えよ」

シラーは参謀長に命じると、ペンを取りベティーナへの親書を書き

はじめた。ミュゼドーラス平野大決戦、その中でも最も危険な戦いが始まるうとしていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第七十六話

シラーの命令よりも少し後、彼からの親書を読んだ第七軍団長ベテイナー・フォン・ワイエルシュトラスは指揮座から立ち上がると、親書を握りつぶした。

シラーの言を無視した訳ではない。ベテイナーは敵の意図を看破できなかつた自分自身に腹を立てていた。

「数ヶ月前までは、参謀をしていたのに。我ながら自分自身が情けないわ。どっちが愚考だったか、今となっては……。アルトウル」

ベテイナーは副軍団長の名を呼んだ。

「はい」

「敵はフォレストアル第三軍団よ。全軍に直ちに戦闘準備を。……それから、ごめんなさい。殺気は失礼な物言いをしてしまったわ。結果としてあなたの方が正しかったわ」

副軍団長は目を伏せ、配下の幕僚と伝令に手配すると、少しの間ベテイナーと二人きりになった。

「軍団長、あれしきのことでしたしの忠誠が崩れることはありません。どうか、皆の面前で時分の過ちを認めないでください。軍団長は、いつでも我らにとって、正しい存在であるのですから」

「……ありがとう。でも、わたしは……」

「いえ、あなたは尊敬と忠誠を尽くすに値する人物です。地方軍の万年中隊長に過ぎなかったわたしを正規軍の副軍団長に取り立ててくださいました。感謝の言葉もありません。アルトウル・フォン・シュレーゲル。全力を賭して、あなたをお助けいたしたく思います」

「ありがとう。副軍団長……。すぐに戦いが始まるわ。あなたも準備を怠らぬように」

アルトウルは軍靴のかかとを揃え、背筋をのばすと、作戦室を辞した。作戦室に一人残った。ベティーナは机に広がった作戦室に視線を落した。

「苦しい戦いになりそうね……」

第七軍団を示す駒が窓から差し込む日に当たり、陰って見えた。星王暦二一八三年七月十七日午後、ミュセドーラス平野の東方斜面の戦いがついに幕を開けようとしていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第七十七話

ミュセドーラス平野の上空を翡翠の旗をたなびかせた龍騎兵が飛んでいる。制空権はすでに連合軍の手に落ちていた。

フォレストル軍が閃光轟音弾を使用したことによって、ワイバニア軍の翼竜は戦闘不能に陥った。翼竜専門の医師である龍医だけでは一万を超える龍の手当は出来ないため、龍騎兵がその対処に回っており、ワイバニア軍はその最精鋭を前線に投入できずにいたのである。

フォレストル軍龍騎兵がふもとの異常に気づく。自軍に相對しているワイバニア軍二個軍団がゆっくりと前進を始めているのだ。龍騎兵は笛を口にくわえると力の限り息を吐いた。

「！」

戦場に衝撃が走る。動かないはずの敵軍が動き始めたのだ。各部隊の指揮官はそろってふもとのワイバニア軍を見た。

「ばかが！？ 奴ら、おれ達の失敗を見ていないのか？」

フォレストル第三軍団長ウィリアム・バーンズの大声で鼻ちようちんをふくらませていた参謀長のエミリア・バスカヴィルは目を覚ました。

「え？ どれ、どれ？」

瓶底眼鏡を上げた居眠り参謀長は窓の外を見ると、「ふーん」とひ

と際大きく鼻を鳴らした。

「お前……。本当に嫁の貰い手がなくなるぞ」

「それなら、軍団長にもらってもらうから、いいです」

「ばっ！」

エミリアの突飛な一言に、ウィリアムは真っ赤になった。冗談とも、本気ともつかない参謀長の文句に、顔を赤らめるウィリアムを他所に、エミリアは、戦況分析を続けた。

「それより、こっちの作戦がバレちゃいましたよ。相手は相当賢いです。総司令官の第五軍団と呼吸を合わせないとやられちゃいますよ。総司令官に使者を出してください」

エミリアの声に真剣なものが混じっている。めったなことでは動じないエミリアが動揺しているのだ。ウィリアムは事態の深刻さを悟った。

「マーシャル！」

「はい」

「頼む……」

「了解しました」

次席参謀はそれだけ言つと、ヒーリーのもとへ、文字通り飛んでいった。

第六章 ミュゼドーラス平野大決戦！ 第七十八話

「バレたな。こりゃ……」

軍団長専用馬車の屋根の上に取り付けられた指揮所の上、ヒーリーは冷や汗を垂らした。

「敵もさる者ね。ではBプランの発動をホワイト参謀長に……」

ヒーリーは自分の片腕に目でたしなめた。

「いえ、マーガレット軍団長に連絡しますか？」

ふもとでは魚鱗の陣形を組んで前進する敵軍の姿が見える。本格的な軍団単位での戦闘はヒーリーもはじめてになる。ヒーリーのわずかばかりのふるえをメアリは見とった。

「大丈夫、前の敵は第一軍団よりも弱いわよ。第五軍団参謀長として、作戦を提案したいのですが、お許しいただけますか？」

各隊に指令を出す間にメアリはヒーリーに作戦案を説明した。その内容に満足したヒーリーは少しの訂正を加え、作戦の実行をメアリに命じた。

第五軍団とほぼ隣接する第四軍団陣地。開戦当初布陣した陣地よりやや後方にさがった斜面にマーガレットとスタンリーは司令部を設置していた。

「まずいな……。これは……」

ヒーリーの命令により、第四軍団参謀長に復帰したスタンリー・ホワイトは司令部にて戦力の再編を行なっていた。十二軍団との交戦によって、フォレストアル軍第四軍団の戦力はほぼ半減したと言っており、数字の上では六千の兵力を数えていたが、実質戦えるのは、その四分の三程度しかなかったのである。

部隊の整理に忙殺されていた参謀のもとに、さらに凶報がもたらされた。ワイバニア軍前進。フォレストアル軍の意図が敵に見破られたのである。実働できる兵力は少ない。次席参謀アビー・マクファードンら参謀達はその報告に色めき立った。

「敵軍が動いたということは、ヒーリー総司令官はプランBを発動するでしょう。しかし、わたし達とて、ワイバニアの上位軍団と互角には戦えないですからなあ……」

スタンリーは額に浮かぶ汗を拭った。今までのようにふりではない。本当に冷や汗を垂らしていたのである。それはそのまま、第四軍団が再び窮地に立たされていることを意味していた。

「マクファードン君」

先生が生徒を呼ぶような穏やかで低い声で、スタンリーはアビーを呼んだ。

「は、はい」

「あなたに、第四軍団の再編を全て委ねます」

アビーは顔をあげた。スタンリーの顔は笑っているが、言っている

内容は本気だ。アビーは生唾を飲み込むと、上官に言った。

「待つてください！ わたしには、そんなことできません！ 次席参謀だつて、身に余ることなんです……。ですから、この役目は他の能力のある人に任せてください！ わたしには無理なんです……」

次席参謀は涙を流してスタンリーに再考を迫った。しかし、彼女の上司は首を横に振った。

第六章 ミュゼドーラス平野大決戦！ 第七十九話

「マクファードン君、人間にはできることと、できないことがあるのです。正直に言いましょ。今のあなたには参謀長は務まらない」

「はい……。それはよく承知しています。ですが、今のあなたは次席参謀の任務を滞りなく遂行できます。それは、あなたをずっと見てきたわたしだからわかることです。それに、あなたには後方担当参謀として、目を見張るべき才がある。今はあなたの才を発揮するときなのです」

「参謀長……」

スタンリーはアビーの肩を優しく叩いた。アビーは涙を拭くと、上官に一礼し、仕事に戻っていった。

「それでいい……」

忙しく動き回る部下達を眺め、襟を正したスタンリーは作戦室の隣にある部屋の扉をノックした。

「スタンリー・ホワイト、入ります」

スタンリーは軍団長室を見回した。装甲馬車はもともと、敵の矢から乗員を守るように作られており、採光のための窓などは存在しない。明かりをともしねば、部屋の中は昼までも暗闇に近い状態だった。

暗闇に目が慣れてきたスタンリーは、ベッドに寝そべる軍団長の姿

を見つけた。

「何ですの……？ わたしを笑いにきましたの？ この敗軍の将を……」

スタンリーと同じ空気を吸うのさえ、不愉快と言った様子で、マーガレットは起き上がった。

「ワイバニア軍が、我が軍団の陣地目指して進軍中です」

「そう……。ならば、あなたが敵軍を撃退なさい。わたしのような無能者はここで戦いが終わるのを寝て待っていますわ」

「軍団長！」

スタンリーはマーガレットを起こすべくベッドに手を伸ばした。

「近づかないで……」

午後の光が装甲馬車の覗き窓からこぼれ、マーガレットの顔を照らす。ずっと泣いていたのだろう。目は赤く腫れ、凜々しい戦姫の面影はどこにもなかった。

スタンリーはマーガレットの言葉に背き、無理矢理マーガレットを抱え起こした。

「離さない！ 離して！ この下郎！」

暴れるマーガレットの肩をスタンリーは押さえつけた。

「軍団長！ 失敗や失策は挽回すればよいのです。この第四軍団の長はあなたです。あなたが陣頭に立って戦わねば、第四軍団は戦えません。わたしはいかようにののしられてもかまいません。しかし、フォレストル軍の勝敗は、あなたが立つかにかかっているのです！」

スタンリーの言葉に、マーガレットは暴れるのをやめた。

「出て行きなさい。スタンリー・ホワイト」

「軍団長……」

「この格好で戦場に出ては、敵味方に大きな恥をさらすだけですわ……。湯浴みして着替えます。それまで、外で待っていなさい。夫でもない男に肌をさらすほど、わたしはふしだらではありませんわ」

スタンリーは顔を明るくさせると、上官に言った。

「ただ、待っているのも退屈です。湯浴みの時間まで、敵にも待つてもらおうとしましょう」

「その時間はわたくしも何もできませんわ。軍団の運用は一時あなたに任せます」

スタンリーは敬礼すると、マーガレットの部屋を出て行った。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第八十話

「歩兵大隊、もっと速度を上げろ！ 陣形が多少崩れても構わん」

第七軍団よりも先にフォレストアル軍の攻撃を開始したワイバニア軍第三軍団長マンフレート・フリッツ・フォン・シラーは陣形の小規模な変更を命じた。歩兵大隊を前衛に騎兵大隊を両翼に従えた魚鱗の陣形はやや前方に伸びながら、フォレストアル軍陣地に向けて前進し続けていた。

「前方に陣形が伸びると、敵に攻撃の隙を与えることになりませんか？」

副官のヘルマンがシラーに尋ねたが、シラーは首を振った。

「敵の優位性は、その兵力もだが、斜面に陣地を構えていることだ。我々の位置、動向を一望できるばかりか、斜面を利した戦術が可能だ。そのようなメリットをわざわざ捨ててくれるならありがたいが、そこまで親切にしてくれないだろう。となると、我々は斜面を登る他はない。先頭は速度が下がるから、陣を伸ばして置かないと、より不格好な陣形を形成することになる」

「……なるほど」

ヘルマンは上官の考えに頷いた。外見によらず、シラーは智に傾いた将だと言える。上位軍団長の中では、知勇攻守最もバランスのとれた軍団長だった。専用馬車の作戦室の中で指揮をとっていたシラーはおもむろに立ち上がった。

「軍団長、どちらへ？」

「そろそろ軍団が斜面に着く頃だろう。前線に出て、指揮しなければならぬ」

シラーは笑うと、馬車から飛び降りた。司令部大隊付の騎兵がシラーの愛馬を連れてやって来る。シラーは馬に飛び乗ると、剣を引き抜いて宣言した。

「ワイバニア第三軍団の将兵へ！ 戦いの時はきた！ 他の上位軍団に遅れを取るな！ 敵は強い。決して油断するな！」

シラーは馬を走らせた。ミュセドールス平野は平野とは名ばかりの盆地に近い地形である。フォレスタル軍の様子がよく見える。翡翠色の旗がゆつくりと陣形を形成していく。見たことのない陣形だ。方陣に近いが、不可解な形をしている。ところどころ歯抜けた長方形。

「相手はフォレスタル第五軍団だ……。何を仕掛けて来るかわからんぞ。斜面に差し掛かったら、一気に登れ！」

ワイバニア第三軍団を見下ろす旧フォレスタル軍第四軍団陣地に愛騎から下りたフォレスタル軍第四軍団参謀長スタンリー・ホワイトはいた。

「おお、間に合いましたね。敵はまだまだ斜面に登り切っていない。アーチボルト君、準備は？」

「はい。参謀長の指示通り、すでに……」

第四軍団弓兵大隊長アーチボルト・フェリスは静かに応えた。プランB。それはスタンリー・ホワイトが提案した遅滞戦闘作戦である。フォレストル軍の作戦が敵軍に悟られる可能性がある。準備が整う前に斜面に攻め込んだ敵を寡兵で迎撃するというのが作戦の骨子だった。ヒーリーにこの作戦を報告する前にスタンリーは独断で負傷兵に擬装した一個弓兵大隊と一個攻城兵中隊を旧第四軍団陣地待機させ、敵に備えていたのである。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第八十一話

ヒーリーはそのプランBを了承したばかりか、さらに戦力を増強した。ウィリアム率いる第三軍団を前進させ、斜面全体で斜線陣を形成し、その後第四軍団残余と第五軍団で受け流した敵兵力を各個撃破するというものだった。

初手の心理戦、その後の迎撃戦略においても、ワイバニア軍はヒーリーの策略に乗せられてしまったのである。

ヒーリーの戦術的思考の柔軟さ、そして、配下の軍団の失敗をも取り込む作戦の独創性にスタンリーは舌を巻いた。

「大したものだ。もう斜線陣を形成している。それに隠し方も実に巧妙です……。これを見抜けるのは、エルンスト・サヴァリツシユか、グレゴール・フォン・ベッケンバウアーくらいでしょう。つくづく未恐ろしいものです」

スタンリーは味方の陣容を見て言った。丘を吹く風が少し生暖かい。これから死闘を演じるのだ。何人か、いや、何百人も死ぬことになる。せめて死ぬ前に感じる風はすがすがしいものであって欲しい。スタンリーは密かに願っていた。

「参謀長、攻撃の号令は？」

「まだまだですよ。アーチボルト君。敵が第一次防御線に来た時が勝負です。攻城兵の準備は？」

「作業は終わっています。しかし……、この作戦。はまったら、さ

ぞかし敵は悔しがるでしょうな」

アーチボルトは少し含み笑いを浮かべた。スタンリーの戦術は壮大、華麗とはあまりにほど遠い陳腐で原始的なものだった。しかし、その効果は原始的であるが故に絶大で、心理的効果も狙ったものだった、そして、巧妙でありながら正道をいくヒーリーの戦術と対比されることで実績面でタワリツシらに劣るヒーリーの声望を上げようとも目論んだのである。マーガレットには「湯浴みの時間を稼ぐ」と言った作戦だったが、それを三倍して余りある効果を持っていたのである。

ふもとでは、ワイバニア第三軍団に続いて第七軍団が前進している。スタンリーは普段誰にも見せない不敵な笑みを浮かべた。

「さて、お楽しみはこれからです……」

フォレストル軍第四軍団別働隊一〇〇〇名は手ぐすねを引いてワイバニア軍を待ち構えていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第八十二話

フォレストル軍第四軍団に合わせて、ヒーリー率いるフォレストル第五軍団もまた、その戦闘準備を整えていた。第五軍団指揮下アルレスハイム連隊連隊長アンジェラ・フォン・アルレスハイムはヒーリーの元に着陣した。

「アンジェラ・フォン・アルレスハイム、入ります」

作戦室の中には、攻城兵大隊長とアンジェラ指揮下のふたりの大隊長をのぞく、七人の大隊長が作戦室の机を囲んでいた。アンジェラは二人の大隊長に目配せすると、ヒーリーの左、副軍団長のアレックス・スチュアートの向かいに腰掛けた。

「申し訳ありません。遅れました」

謝るアンジェラをヒーリーは手で制した。

「ついに、第五軍団全軍を上げて、初の戦闘が始まる。敵はワイバナ第三軍団、初陣にしては荷が勝ちすぎるが勝たねばならない。作戦についてはこれから参謀長が話す」

ヒーリーから話をふられたメアリは大隊長達を前にワイバナ軍撃退のための作戦案を説明した。その内容は第五軍団の特徴である遊撃機動戦力による立体波状攻撃だった。作戦がうまくいけば、ワイバナ軍は戦力を漸減させられながら、斜面を下っていくことだろう。その骨子を理解した第五軍団幹部は頷いていた。

「だが、皆。決して油断するな。相手はワイバナ第三軍団だ。」

軍団長が変わったとはいえ、ピット卿と互角の戦いを演じた強さは侮れない。しめてかかれ！……そして、皆。この戦いに絶対に勝たねばならない。ワイバニア軍をミュセドラス平野に閉じ込めなければ、我々に勝ちはない。諸君らの健闘を祈る」

大隊長は全員起立、敬礼すると、それぞれの部隊に散った。副軍団長のアレックスすら出て行った中で、アンジェラは一人作戦室に残っていた。

「すまない、参謀長。席を外してくれないか？」

アンジェラの様子を察したヒーリーはメアリに言うと、メアリは隣の軍団長室に下がっていった。

「どうしましたか？ アンジェラ殿」

「いえ、わたしよりもヒーリー殿の方にこそ、何か言いたいことがあったのではないかと思いましたが……」

メアリが作戦案を説明する最中、たった一度だけヒーリーがアンジェラの方を見たのを、彼女は見逃さなかった。ヒーリーは頭をかけた。

「恥ずかしい話です。勝つためとはいえ、あなたに敵将について聞くとしたのですから。それがあなたを傷つけることになるのだとわかっているのに」

アンジェラはワイバニア軍からの亡命者である。その中枢にいた情報は並の斥候よりもはるかに価値のある情報を持っている。しかし、ヒーリーはあえてその情報を彼女から聞き出そうとしなかった。

好きで亡命した訳ではない。身を守るために亡命したのである。かつて味方だった者を売る行為を賓客にさせてはいけない。そう思い、ヒーリーはずっと彼女を尋問官から遠ざけていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第八十三話

「ヒーリー殿。あなたはもっと汚くなっているいいのです。あなたは優しく純粹だ。わたしはまだ、あなたへの恩義を返せていません」

「いえ、もう十分に返していただいています」

「いや、まだです。あなたはわたしを守ってくれるばかりか、食客であるわたしに地位を与え、保証してくださいました。ただあなたの忠誠に応えるばかりが、恩義を返すことにはなりません」

アンジェラはヒーリーを真つすぐ見た。ヒーリーは苦笑いを浮かべ、ばつが悪そうに頭をかいている。アンジェラは役に立ちたかった。三国の雌雄を決する戦いに。かつての同胞と戦い、殺すことに抵抗はある。迷いがある。それでも、フォレストルの将として兵を率いる以上、全力を賭して戦いたかったのだ。それが、かつての友や部下を殺す痛みを和らげてくれると感じたから。

「ヒーリー殿！ ……どうか、わたしを……」

「アンジェラ殿。あなたは本当におれの恩義を返してくれています。本当に。おれはあなたに必要以上の重荷を背負わせてしまった。かつての同胞と戦うことを強いてしまった。それがもつて、あなたをさらに苦しませている」

「……！」

凶星をつかれたアンジェラは、顔を紅くさせた。

「客分として、おれの話し相手になってくれれば、助言者になってくれればそれだけでよかったはずなのに。大国と戦うために、あなたの武人としての能力と気質を利用してしまった。友人を利用するとはなんて卑怯なことでしょう」

「ヒーリー……」

アンジエラは初めて、ヒーリーに対して敬称を外した。それが真に友として打ち解けあった瞬間か、それとも自身が利用されていたことを吐露された怒りによるものか。アンジエラ自身にもわからなかった。

「だから、せめてその償いはさせて欲しい。あなたがかつての敵と戦うことがあっても、あなたにかつての同胞を売るような真似はさせない。おれの権限と目が行き届く範囲でしか、あなたを守ることが出来ないが、絶対にあなたを守ってみせる」

アンジエラは、ヒーリーを信頼してきた。それは、彼女がヒーリーを信頼するしか彼女の生きる道がなかったからだと思っていたが、本当は違っていた。ヒーリーは強い。それは戦士としての強さではなく、彼の心の強さによるものであり、彼女はそこに惹かれたのだ。弱さをも強さに変え、目に届く全てのものを守るうとする彼の優しさに。

「ヒーリー……」

アンジエラは金色の髪をきらめかせ、ヒーリーの足許に跪いた。

「アンジエラ・フォン・アルレスハイム。ヒーリー・エル・フォレストルに絶対の忠誠と、変わらぬ永遠の友誼を我が剣のもとに誓い

ます。例え死して、屍を野辺にさらすとも、魂は常にあなたと共にあらんことを」

ヒーリーは胸のホルスターから愛銃アストライアを抜くと、銃の柄をアンジェラの肩に置いた。

「ならば、ヒーリー・エル・フォレストル、我が愛銃アストライアのもとに、アンジェラ・フォン・アルレスハイムに永遠の友誼を誓約する。たとえ、この銃、この身がほろぶとも、その魂が共にあらんことを」

ヒーリーもまたアンジェラの宣誓に応えた。彼がここまでの信頼を預けられる共に出会うのは、恐らく最初にして最後であろう。

「では、わたしは連隊に戻ります。……ヒーリー。マンフレート・フリッツ・フォン・シラーはわたしと士官学校時代の同期であり、専門は同じ騎兵でした。勇壮にして大胆、そして深謀遠慮の容易ならざる将です。騎兵の指揮においては、わたしよりもはるかに上です。お気をつけを」

「わかった……」

アンジェラは言い残すと作戦室の扉を閉めた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第八十四話

アンジェラとの話が終わったと見たメアリは軍団長室からゆっくりと姿を現した。

「作戦実行の時は近いわ。急ぎましょう。全軍もそろそろ展開を終える頃よ」

「ああ、そうだな」

ヒーリーとアンジェラは装甲馬車の屋根に上る。装甲馬車は風を切って速度を上げつつある。ヒーリーは前髪をおさえると、双眼鏡を手に取った。横陣を敷いた三重連の隊列が見える。右翼後方にはアレスハイム連隊、左翼後方には騎兵大隊が突撃の時を待っていた。

「相手は不動の第三軍団……。勝てるかな？」

「現実逃避の質問ね。軍団長閣下」

メアリは少し皮肉めいて返した。

「手厳しいな、メアリ」

「ワイバニア軍全十二軍団を向こうにまわす将がただか一個軍団を相手に何を弱気になっているの？ わたしの作戦は完璧よ。あとはあなたの指揮次第。大丈夫、勝てるわよ」

参謀長にしては楽天的に過ぎる言葉だった。しかし、彼女の言葉は的確だった。ヒーリーの実力は客観的に見てもシラーを超えるもの

であつたし、すでに戦略上、勝利を収めているのだから。

「そうだな」

ヒーリーは参謀長の言葉に短く笑つた。

ヒーリー達が斜面への展開を終えようとする頃、マンフレート・フリッツ・フォン・シラー率いるワイバニア第三軍団は斜面を登りはじめていた。

「まったくいまましいものだな。敵に地の利がありすぎる」

シラーは舌打ちした。実質的に戦場はフォレストル軍第四軍団旧陣地に限られている。それ以外はフォレストル軍と森林に囲まれ、大軍の戦術行動には向かない。しかし、フォレストル軍はその戦闘範囲ぎりぎりまで布陣しており、第三軍団の動きは大きく制約を受けていた。

長く伸びていた魚鱗の陣形が元の大きさに戻りつつある。先陣の歩兵大隊が斜面を登ることその速度を大きく減じたためだった。

「ようし、全軍そのまま前進。敵を蹴散らせ！」

それ以上の命令をシラーは口に出さなかった。このままの速度と突進力で敵に突撃するのが、最善の策だったからである。

第四軍団の旧陣地にワイバニア軍の先頭集団がさしかかったとき、信じられないことが起きた。ワイバニア軍の地面が突然無くなり、地面深く開けられた穴に兵士達は次々と落ちていった。

「止まれ、止まれ！ 落っこちちまうぞ！」

「やめろ！ 押すな！」

先頭の兵士達は声を限りに叫んだが、一度ついた勢いは簡単に止まらない。被害が分隊から小隊、小隊から中隊規模になるまで時間がかからなかった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第八十五話

「いやっはっはっは！ 痛快痛快！」

ワイバニア軍が落とし穴におちていく様子を見たスタンリーは破顔大笑した。スタンリーは攻城兵を使い、ワイバニア軍の前方に落とし穴を掘らせていた。戦術としては原始的であり、幼稚なものだったが、他に進路がなかったワイバニア軍にとってはその原始的な罠にはまるより他に、方法はなかったのである。

「アーチボルト君、弓兵隊掃射用意」

第四軍団弓兵大隊長アーチボルト・フェリスは頷くと、右手を上げた。大隊千名がごとごとく長弓を構え、空に狙いを定めている。

敵の前衛が射程距離に入ったことを確認したアーチボルトは上げた右手を一気に振り下ろした。千本の矢が風切り音を立てて、空に吸い込まれていく。その数秒後、ワイバニア軍前衛に矢の雨が降り注いだ。

「下がれ、下がれ！」

ワイバニア前衛集団はパニックに陥った。上からは矢の雨、周囲は秩序を乱し、逃げ惑う味方。絶望を絵に描いた惨状だった。

「軍団長が見ていらっしやるのだ。敵も見ているんだぞ！ 醜態をさらすな！ 隊列を整え、上からの矢は盾で防げ！」

前衛の歩兵大隊長が兵達を叱咤する。上位軍団の兵士達の上位たる

由縁はその精強さと命令を忠実に実行できる能力にある。ごく短時間でワイバニア軍第三軍団前衛は強固な陣を組んだ。

「さすがは上位軍団、大したものだ。もう態勢を立て直すとは」

最前線の様子を双眼鏡で見たスタンリーはワイバニア第三軍団の動きに嘆息した。弓兵大隊は連射を続けているが、もう効果は望めない。奇襲を警戒するかに思われたが、ワイバニア軍にその意志はないようだ。斜面をしっかりと踏みしめて、前進を続けている。時間稼ぎはもうできそうにない。スタンリーは作戦の失敗を実感した。

「全隊、後退！　ワイバニア軍がやってきます。急いで引き上げないと」

ひとたまりもありませんよ！」

スタンリーは手を叩くと、後退を命令した。敵軍とわずかに間隙がある今こそが、後退の好機だった。

「あとは、ヒーリー殿下にお任せして、すぐに第四軍団と合流しましょう。敵はただ者じゃあない。救援が間に合わないと、大変なことになる。さあ、行け行け行け！」

スタンリーは両手を上げて兵達を叱咤した。スタンリー率いるフォレストル第四軍団別働隊は第四軍団の名に恥じない高速で撤退を開始した。

「追撃しますか？」

敵軍の撤退を見た副官のヘルマンがシラーに尋ねた。

「だめだ。そんなことしたら側面攻撃のいいカモだ。全軍、そのままの速度を維持せよ」

ワイバニア第三軍団長マンフレート・フリッツ・フォン・シラーは指揮下の軍団に命じた。前方には遠ざかるフォレストル軍の小部隊と、接近するフォレストル軍の一個軍団が見えていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第八十六話

「前方にワイバニア軍第三軍団が見えます。どうやら、間に合ったみたいね」

馬車の屋根に取り付けられた櫓の上で、メアリは敵軍の動きを見た。隣を第四軍団のスタンリー支隊が後退していく。開戦当初の動揺はどこに行ったのか、秩序を回復したワイバニア軍は完全無欠の陣形を形成し、ヒーリー率いる第五軍団に突っ込んで来る。

「よし、第一陣に攻撃命令。手はず通り、全力で攻撃して全速で後退だ。突撃！」

ヒーリーは即座に命令した。先陣の歩兵大隊が手槍を携えて突撃する。軽装、重武装の機動歩兵がワイバニア軍の前衛に濁流のようになだれ込んだ。

「！」

「なんだこれは！？ あいつら尋常じゃないぞ！」

シラーは目を疑った。不動の第三軍団の密集隊形、これを真正面から打ち破ることが出来るのは、ハイネ・フォン・クライネヴァルト率いるワイバニア軍第一軍団だけだろう。しかし、眼前に映る光景はシラーの予測を超えていた。

巨石を思わせるシラーの陣形の先端部は粉々に粉碎され、無様な形をさらしていた。

ヒーリーらフォレスト軍がワイバニア第三軍団の密集隊形を破つたのにはいくつか理由がある。

ひとつはフォレスト軍とワイバニア軍の交戦領域における戦力分布の差である。先端部を錐形に形成したワイバニア軍と、面状に横陣を敷いたフォレスト軍では、その戦力差に五倍以上の開きがあり、ワイバニア軍の許容量を大きく超えていたためである。

ふたつめはヒーリーが全力突撃を命じた点にある。通常ならば、戦場に長時間留まるために、兵士達はある程度力を温存して戦わねばならない。ヒーリーは短時間で勝負を決するため、あえて全力で攻撃を命じたのである。

「よし、退けえ！ さつさと退くんだ。敵と味方で挟み撃ちになっちゃうぞ！」

ワイバニア兵をひとしきり倒したフォレスト軍中隊長は叫んだ。喧噪にまぎれて突撃のラツパが聞こえる。後方の第二陣がもう向かっているのだ。中隊長や小隊長の命令を聞いた兵士達は敵に構うことなく走り出した。

「よし、第三陣の突撃も用意しておくんだ。とりあえずは作戦成功だ」

第二陣の攻撃を確認したヒーリーは斜面をにらみつけた。反撃する暇も、防戦する暇も与えない。激闘は未だ続いていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第八十七話

「こしゃくな奴らだ。奴ら戦場の狭さを知って効果的に戦力を投入していやがる」

シラーはヒーリーの戦術に舌打ちした。ヒーリーは前衛を三つの集団に分け、間断無い攻撃を敵に与えていた。第一波を防いでも第二波が、さらに第三波が敵に襲いかかるのである。そして、急速と補給を終えた。第一波が再度攻撃を繰り返すという仕組みである。常に全力攻撃を仕掛け、迫り来る新手にシラーは手を焼いた。ワイバニア軍の中で最も守勢に秀でる第三軍団でさえ、息もつかせぬ連続攻撃は防ぎきれなかったのである。

「第三波の集結点には隙がない。悔しいが、ここまでは手詰まりだ」
シラーの言葉に副官のヘルマンは噛み付いた。

「軍団長！ 何を弱気な！」

「まあ、聞け。第三波の集結点には隙がないが、その後になると話は別だ。それなりに防御を固めているようだが、完全無欠とは言えない。両翼の騎兵大隊で敵部隊を分断し、集中攻撃する」

「なるほど……」

「何してる。早く伝令を出せ。タイミングが大事だぞ」

副官は愛馬を翻すと、上官のもとを離れていった。

「退け！ 退け！ 退くんだ！ 少しでもフォレストル軍を引きつけるんだ！」

「真正面から戦いを挑むな！ 奴らの方が強いんだからな！」

ワイバニアの中隊長達は口々に叫んではその戦線を維持し、フォレストル軍の攻勢を防いだ。シラーもまた、中隊長クラスの指揮官に前線の指揮を丸投げした訳ではなかった。前線の指揮官に防戦の指揮を委ねると共に、反撃のお膳立てに努めた。全軍の戦線を少し下げ、フォレストル軍とワイバニア軍との間に距離を置くと、両翼の騎兵隊を左右に展開させた。

斜面の上からワイバニア軍の動きを察知したヒーリーはうめいた。

「まずいぞ！ 補給中の第一陣が危険だ。第二陣……くそっ！」

翡翠の龍将はやぐらの手すりを叩いた。第二陣は全速後退の最中にあり、とても戦える状態ではない。後続の部隊を来援させようにも、混乱の渦中にある第一陣の集結点では混乱に拍車をかけるようなものだった。

策士策に溺れる。優勢を確保していたものの、またしてもフォレストル軍はシラーによってその出ばなを挫かれたのだ。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第八十八話

「申し訳ありません。わたしのミスです。敵軍の反撃方法をもっと十分検討すべきでした」

メアリは唇をかみしめた。作戦の弱点に気づかず、さらにその弱点を責められようとしていたのだ。参謀として、決定的な敗北だった。

「いや、まだ手をあげるのには早い。副軍団長を呼んでくれ」

ヒーリーは咎めようとしなかった。作戦を立てたメアリにも責任はあるが、何よりもメアリの作戦を採用したヒーリーに作戦失敗の責任があり、彼自身、それを十分に理解していた。

彼は伝令の龍騎兵に副軍団長のアレックスを呼びにやった。

「アレックス・スチュアート、お呼びによりまかりこしました」

上空から直接降り立ったアレックスはヒーリーとメアリに敬礼した。ヒーリーはアレックスに現在の戦況と予想されるワイバニア軍の攻撃を伝えた。

「なるほど、それで我々にワイバニア軍を攻撃せよということですね」

「……まあ、そういうことだが、急降下攻撃を最大で三回。それをしたらすぐに引き返すんだ」

「どうしてですか？ 我々はもっと戦えます！」

「だからこそだ。第四軍団のスタンリー支隊の退却が予想より早かったし、我々も今苦境にある。マンフレート・フリッツ・フォン・シラーと言う男は、おれとスタンリー、そしてメアリが束になってもさらに上に行く知将だ。虎の子の龍騎兵を失う訳にはいかないのだから」

アレックスはヒーリーの額に汗が垂れるのを見た。かつてオセロー平原で、ジークムント・フォン・ネルトリンゲン率いるワイバニア第十軍団と戦ったときはまるで様子が違う。フォレストアル軍最強の龍騎兵は事態の恐ろしさをあらためて認識した。

「わかりました。直ちに攻撃に移ります」

同じ頃、シラーも騎兵大隊に命令を下していた。

「騎兵大隊出撃！ 敵の地上兵力が標的の救援に來られない今、援軍として出すのは龍騎兵大隊しかない。警戒を怠るな。連射弓で応戦せよ」

ワイバニア、メルキド、フォレストアル。アルマダ三国の中で、シラーほど傑出した騎兵隊指揮官はいない。その手腕は騎兵出身であり、有能な指揮官であるアンジェラ・フォン・アルレスハイムが高く評価している。卓抜した判断力、組織力。そして、粗野に見えるが計算に満ちた智謀。上位軍団の長として申し分無い能力を有していた。

シラーは次のフォレストアル軍の攻撃が空からのものだと看破すると、すぐさま騎兵に警戒を促したのである。予想される攻撃と予想できなかった攻撃では、その被害に大きな差が出る。シラーは三たびに渡ってフォレストアル軍の作戦による効果を半減させたのである。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第八十九話

フォレストル第四軍団宿营地、戦場から退却を果たしたスタンリー支隊は第四軍団本隊と合流を果たしていた。スタンリー・ホワイトは指揮中枢である第四軍団長専用馬車に入ると、次席参謀アビー・マクファアーデンに敬礼した。

「陣容を見てきました。さすがはマクファアーデン君。戦力として申し分ありません」

「ありがとうございます。参謀長。残りの三個大隊の再編が終わりました。現在補給の最中です。それもあと十五分で終了の予定です」

「結構。……マクファアーデン君、軍団長はどちらに？」

「今は再編した騎兵大隊を見に行っています」

マーガレットは隊列を整えた騎兵大隊の先頭に立っていた。涙のあとを隠すためだろう。騎兵用のかぶとを深く被り、マントを風にはためかせたその姿は、戦乙女そのものだった。スタンリーはその堂々とした美貌に一瞬目を奪われた。

「申し訳ありません。敵を足止めできませんでした」

「湯浴みの時間はしっかりと確保してくれましたわ。これで十分よ。謝るスタンリーを一瞥することなく、マーガレットは言った。

「それで、どうしますの？ お兄様の第五軍団がずいぶん苦戦して

いるようですけれど」

マーガレットは再編なった騎兵大隊を見にきただけではない。ワイバニア軍とフォレスタル軍の戦況を一番近い場所を確認するためもあった。スタンリーは両軍の陣容を確認すると、マーガレットに言った。

「第四軍団は全軍で第五軍団を援護すべきでしょうが、時間と兵力が足りません。当初の作戦である後方攪乱が不可能になります。しかし、アルレスハイム連隊を後衛に配しているのを見ると、最悪アルレスハイム連隊を後方に回すつもりなのでしょう。総司令官は後方攪乱の手をまだ捨てていません」

「では、動くべきではないと？」

「いえ、それでは、我々は遊兵になってしまいます。我々は連隊規模、すなわち二個大隊だけで援護に向かいます」

「それでは戦力の分散になってしまい、かえって敵の優位を招くではありません？」

マーガレットの問いにスタンリーは首を振った。

「軍団長、この戦いはもともと敵に優位性があるのです。単に攻め込むだけで我々にいくつか選択肢をとらせることができ、我々に有利な攻撃のどれかを阻むことが出来ます」

マーガレットはあごに親指をあてた。

「なるほど……」

「軍団長、二個大隊でも十分に戦えます。機動歩兵二個大隊で敵に側面攻撃を仕掛けます」

スタンリーはしゃがむと地面に作戦図を描き、マーガレットに作戦案を示した。士官学校の教官が生徒に教えるように、彼はマーガレットに伝えた。一つ一つ丁寧に彼は質問に答え、マーガレットの提案をも取り入れ、作戦を取り上げていった。

「軍団長、この作戦でいきましょう」

スタンリーは眼鏡を外して立ち上がり、眼光鋭くふもとを見た。最後方にいる龍騎兵大隊がその大きな翼を広げていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第九十話

「龍騎兵大隊、全騎離陸！」

フォレスト軍第五軍団副軍団長兼龍騎兵大隊長アレックス・スチユアートは声を張り上げた。第五軍団において、龍騎兵大隊が経験する初めての实战である。

もしこれが近衛龍騎兵連隊であるならば、彼もそれほど緊張を感じなかったであろう。しかし、第五軍団の龍騎兵の約半数は新兵であり、未だ实战を経験をしていなかったのである。

（軍団長が急降下攻撃を三回に限定したのは、練度の低い龍騎兵を連れているからかもしれない）

アレックスはヒーリーの意図をそう考えていた。それはあたらずとも遠からずと言った推測だったと言える。ヒーリーはワイバニア軍の龍騎兵運用術を誰よりも何よりも恐れていた。龍騎兵を活かす術を心得ているのならば、龍騎兵を殺す術も熟知しているはずだと、彼は考えていた。そして、龍騎兵に対し、地上兵力による弾幕射撃が有効であることは、先年、彼がワイバニア軍の前で実証してみせている。練度の低い龍騎兵が、むやみに突っ込んで、地に屍をさらすのは予想できる結末だった。

「よし、よし。敵さんの龍騎兵は全騎離陸したな」

フォレスト軍後方の空を確認したシラーは笑みをもらした。

「騎兵大隊に対空弾幕射撃の用意をさせる。前年のお返しをくれて

やる」

「はい！」

シラーは伝令に命じた。シラーの意図は戦場をさらに混乱状態におくことであつた。

後続の第九、十一、十二軍団に奇襲をかけることがフォレストル軍の作戦であることを見抜いたシラーは自軍の戦略的勝利に向けて、二つの目的を持って兵を動かしていた。一つは敵の襲撃部隊を壊滅させること。増援を攻撃する兵力がなければ、ヴィクターらはやすやすとミュセドーラス平野に侵入ができる。

二つ目は斜面に長時間留まることであつた。戦場で第三軍団が圧力を加えてさえいれば、それだけ敵の攻撃の意志が鈍り、眼前の敵のために、兵力を割かざるを得なくなる。敵が有能な将であればあるだけ、二正面作戦をとらないだろうというのが、シラーの読みだつた。

騎兵隊による弾幕射撃はフォレストル龍騎兵にもそうだが、さらに後方へ退却中である敵第二陣にも降り注ぐ。混乱状態に輪をかけた状態で騎兵大隊を突撃させれば、あとはフォレストル軍が勝手に血と潰乱の狂想曲を奏でてくれるはずだつた。

ちょうど同じ頃、龍騎兵全騎の離陸を確認したアレックスは右手を上げた。

「よし、総員急降下突撃用意」

「お待ちください、大隊長」

攻撃準備を整え、あとはワイバニア騎兵を食いちぎるだけという段になって、一人の龍騎兵がアレックスを止めた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第九十一話

「どうした？ キートン」

アレックスは龍騎兵大隊副隊長クリス・キートンに尋ねた。

「単なる急降下攻撃では、いたずらに戦力を浪費するだけに終わると思います」

「貴官もそう思うか？」

「はい」

アレックスはクリスの言葉に不快感を抱いたが、すぐに頭の外に追いやった。クリスの言うことは正しい。敵もそう簡単に損害を与えさせてくれないだろう。中隊規模の損害は覚悟しなければならない。そのことをアレックス自身百も承知していたためである。

「では、どうするといふのだ？」

「急降下突撃の案を否定するわけではありません。要は急降下をやりにやすくすればよいのです」

クリスはアレックスに自分が立てた作戦を話した。アレックスは思考の柔軟さには欠けるが、高潔で公正な軍人である。部下の作戦案を一蹴するような人間ではなかった。

「なるほどな。そいつはいい。キートン、それでいこう」

「はい！」

アレックスは隊列を組み直し、大隊をワイバニア軍騎兵大隊上空に向けた。

眼前に龍騎兵大隊の姿を見たワイバニア軍第三軍団騎兵大隊長ハインツ・ヴァイツベッカーは部下に連射弓掃射態勢を命じた。密集していた騎兵がさらに距離と幅を詰める。

「さあ、来い。フォレストルの龍騎兵。オセロー平原の再現だ！」

龍の雲に狙いを定めた騎兵が照準器ごしにつぶやいた。しかし、フォレストル軍は彼らの思うように動かなかつた。数十秒後、彼らの頭上に雨が降った。それは恵みをもたらす雨ではなく、血と死をもたらす矢の雨だった。

「なんだよ！？ これは！」

「ひい！」

ワイバニア騎兵にとっては地獄以外の何ものでもなかつたはずだ。突き刺さった矢の痛みにも軍馬は主を振り落とし、騎兵の五体は愛馬の蹄に無惨に踏みくだかれた。一方では、幾本の矢に串刺しにされた騎兵が馬上でこと切れている。叫びと悲鳴を馬のいななきがかき消す。秩序など、百年も前に忘れてしまったかのような凄惨な情景がそこにあつた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第九十二話

「う、うあああ……」

数十の戦いに参加し、幾多の死線を乗り越えてきたハインツですら、目を覆いたくなる惨状だった。

皮肉にも、神は彼に慈悲をもたらした。ハインツの目は一瞬で、そして永遠に覆われた。フォレストル軍の翼竜がその強靱なあごで彼の肉体を食いちぎったのである。

矢による攻撃が一段落し、敵軍が狂躁状態に陥ったことを見たアレックスはクリスの進言を聞き入れ、急降下突撃を敢行したのである。

クリスの作戦は実に合理的なものだった。

練度に劣る新兵五個中隊を前衛に配置して、弓矢による攻撃を行なう。この場合、敵を混乱に陥れることが目的なので、狙いの正確さは特に必要としない。新兵の射撃でも必要充分だったのである。しかし、ワイバニア軍にとって不運だったのは弾幕射撃を行なうために騎兵を過剰なまでに密集させていたことだった。それによって、矢の効果を倍以上に高めてしまったのである。

そして、混乱に乗じて、最精鋭の五個中隊が二波に分けて急降下攻撃を行なう。混乱と狂躁の渦中にある敵軍は反撃も防御も困難であるため、ほとんど自軍には被害を出さずに攻撃が出来る。

「『龍騎兵は歩兵に勝つ』基本的に空から襲い来る敵に、人間は無防備なものなんです」

両翼の騎兵が壊滅したのを確認したクリスはひとりごちた。

「なんだと……」

作戦失敗と被害報告を聞いたシラーは愕然とした。第三軍団の損害は最悪だった。騎兵大隊の死者九六三名、生存者わずかに三十八名と言う、全滅に等しい状況だった。しかもそのほとんどが重傷者であり、軍馬に至っては騎乗可能なものなし。ワイバニア軍第三軍団はここに遊撃機動戦力の全てを喪失したのである。それは、シラーに一つの重大な決断をもたらした。

「全軍、退却……」

「軍団長……」

参謀長のアルバートは唇から血を流すシラーを見ると、黙って敗北を受け入れた。

「重装歩兵大隊から撤退する。両翼の弓兵大隊は援護射撃を絶やすな。敵の歩兵突撃には面をもって対抗しろ。おれは最後まで残って指揮をとる」

「軍団長！」

「ヘルマン。軍団長のやりたいようにさせてやれ」

「すまない。参謀長」

シラーは自分の片腕に詫びた。アルバートはシラーに敬礼をすると、

司令部大隊を離れていった。

「伝令だけ残して司令部大隊も退却だ。悪いが、頭でっかちばかり残っても足手まといだ。ヘルマン、お前も下がれ。命令だ」

「嫌です。副官は軍団長を補佐するのが仕事です。おそばを離れませんか」

「ふん。勝手にしろ」

シラーは言い捨てると、最前線に向かって馬を走らせた。ワイバニア軍第三軍団敗北。ミュセドラスへ嫌大決戦、最も凄惨な戦いは終焉の時を迎えていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第九十三話

「大した攻撃だ。スチュアート隊長の攻め方ではないな。おそらく、クリス・キートン副隊長の戦術だろう。スチュアート隊長には人望やカリスマ性では及ばないが、戦術家としては非常に優秀だ。彼と組ませて正解だったな」

クリスの戦術の手際の良さをみたヒーリーは独語した。クリスがいなければ、シラーはここまで早く撤退を決断するにはいたらなかったし、第五軍団は窮地に陥っていたことだろう。

「参謀として欲しいところです。龍騎兵にしておくには勿体ないわ」

メアリはヒーリーに言った。クリスは龍騎兵としてよりもむしろ参謀向きの人間であったと言える。組織を作り上げるといふ力は未知数だったが、彼の作戦立案能力はヒーリーもメアリも認めるところだった。

クリスは龍騎兵大隊に配属される前は騎兵大隊、機動歩兵大隊を転々としていた。

「いやあ、わたしはどうやら上司に好かれない性格でして」

転々とした理由を問われる度、クリスは頭をかいて言った。しかし、数多くの兵科を経験した彼は、それぞれの兵科の長所と短所を理解し、独創的な作戦を立案できる能力を手に入れていた。その能力が、今回の斜面の戦いでいかに発揮されたのである。

騎兵が馬を操らねばならないというその性質上、盾を持たず、弓矢

による防御が薄いという弱点を彼は見事に利用したのである。

ヒーリーは攻撃を終えた龍騎兵大隊に即時退却を命じた。一撃離脱。これが、龍騎兵運用の基本である。空陸の戦いは終わりを告げたが、歩兵同士の戦いでは、フォレスタル第五軍団とワイバニア第三軍団は未だ激戦の最中であつた。

フォレスタル機動歩兵が攻め、ワイバニア歩兵が守る。戦いの大勢は変化していないが、ここに着て、ワイバニア歩兵の防御に粘りが増してきた。フォレスタル歩兵が全力で攻撃を仕掛ければ仕掛けるほど、前線の兵力にわずかばかり不均衡が生じてしまう。ワイバニア軍は兵力が疎になるポイントを狙って、ピンポイントで攻撃を仕掛けてきたのである。

「ここにきて、ワイバニア軍の防御が強固になってきたわ。どうする？ ヒーリー」

「おそらく、前線に軍団長自らが出馬してきたのだらうね。不動の第三軍団を束ねる男が出てきたんだ。生半可な攻撃では突き崩せないだらう。……後衛の敵軍が後退しているのが見えるな。龍騎兵大隊が敵に大損害を与えたからね。斜面の攻勢はほぼ断念したと見るべきだらう。となると、敵の目的は味方が退却する時間を稼ぐことにある。殲滅する必要はないし、適当にこちらも戦つてやればいい」

「その適当が一番問題なのよ」

「そうだな。力を抜くと、敵が再び攻撃を再開するかもしれない。アルレスハイム連隊を出して、左右を固める敵の弓兵に揺さぶりをかけるとしよう」

目下、フォレストル第五軍団にとって脅威だったのは、左右から間断無い射撃を行なう敵の弓兵だった。ヒーリーはアルレスハイム連隊の機動力をもって、敵に側面攻撃をかけようと考えたのである。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第九十四話

「軍団長も人使いが荒いものだな。上位軍団相手に側面攻撃を仕掛けるとは」

アルレスハイム連隊長付副官兼参謀であるレイ・ロックハートは頭をかいた。

「そういうな。相手はワイバニア上位軍団長。軍団長格が二人掛かりでかからねば、勝利はおぼつかないからな」

不平を言う副官をアンジェラはなだめた。敵は退却中であるとはいえ、軍団長であるシラー直々に殿軍の指揮を行なっている。守勢に秀でた軍団長が直接指揮をする撤退戦。それは守り手よりも、攻め手が不利な戦いだっただ。事実ヒーリーが指揮する第五軍団の機動歩兵はシラーが強いた防御を崩せないでいる。

このとき、ヒーリーはメアリが提案した車がり戦術を止め、陣形を次々に変えてシラーの防御陣の突破を試みていた。

この戦いに参加した将兵が後に”七色の陣”と称した千変万化する攻撃のことごとくを、シラーは父性で見せた。敵の陣形変換を先読みし、少ない兵力を巧みに集中は位置させて、フォレストル第五軍団に少なからぬ出血を強いたのである。

「ちつ……。不動の二つ名は伊達じゃあないな。マンフレート・フリッツ・フォン・シラー」

自分の攻撃が幾度となく防御されるのを見たヒーリーは舌打ちした。

しかし、それとは正反対に敵将であるシラーを賞賛する気持ちもヒーリーにはあった。頭ではどれだけ否定したとしても、十八の頃から八年間軍務についていた彼は筋金入りの武人になっていた。理性ではなく、武人としての本能で、彼は眼前の有能な敵手に尊敬の念を抱いていた。

「ヒーリー？ 何を笑っているの？」

参謀長のメアリがヒーリーの異変に気づいた。笑っているのだ。戦うまでは震えすらしていたヒーリーが戦いの最終局面を前に笑みを浮かべている。争いごとや命の奪い合いを嫌うヒーリーには考えられないことだった。

(楽しんでいるの？ 戦いを……)

メアリは恐れと不安を同時に抱いた。戦いを忌み嫌う人間だからこそ、ヒーリーはアルマダの戦いの歴史に終止符を打つことが出来る。メアリはそんなヒーリーに尽くしてきたのだ。武人であって、武人でありたくないと思っっている彼に希望を託してきた。

しかし、今のヒーリーは自分と互角の敵との戦いに楽しみを見出した人間の顔をしている。戦いというものが何と甘美で救いがたいものか分かる証だろう。参謀長を拝命してから、常に同じ距離で接してきたメアリの足がわずか半歩だけ後ろに下がった。

「何だって？ メアリ……」

参謀長に言われたヒーリーは振り向いた瞬間気づいた。自分が戦いというどうしようもない麻薬に冒された顔をしていたことに。片手で顔を抑えたヒーリーは数瞬、そのままの状態で固まると、すぐに

自分の顔に何発も拳をいれた。唇が切れ、滴り落ちた鮮血が床を濡らす。

「……メアリ。第一機動歩兵大隊を二手に分け、敵の横陣両端に攻撃をかける。急げ……」

「は、はい……」

「我ながら、なんて顔だ……」

ヒーリーは顔に暗い影を落として言った。自分が常々否定している戦いに魅入られた武人に染まってしまったこと、そして、自分が優れた敵と戦うことに悦びを見出す戦士であることを思い知らされたのだから。

ミュセドーラス平野斜面の戦い。第五軍団最後の攻勢がはじまった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第九十五話

ヒーリーの命令を受けたフォレストル第五軍団第一機動歩兵大隊は二つの凸形陣を形成すると、マンフレート・フリッツ・フォン・シラーが直率するワイバニア第三軍団第一歩兵大隊に向けて前進した。両軍の距離はたちまちの内に縮まり、兵士達の間には剣戟の音が響き渡った。

「弓兵大隊掃射用意。歩兵大隊を援護せよ！」

フォレストル軍の攻撃ポイントに手持ちの歩兵兵力の大半を集中させてヒーリーの攻撃を防いだシラーは叫んだ。シラーの防戦に因應るように、ワイバニア軍は速度を上げながら撤退していく。あと少し、あと少し。後ろを振り返ったシラーにわずかだけ隙が出来た。

「今だ！ 第二機動歩兵大隊突撃！」

ワイバニア第三軍団の陣形の中央が手薄になったそのときだった。第一歩兵大隊の後方に隠れた一個大隊が、鋒矢の陣を敷き、文字通り矢のように飛び出した。

「しまった……」

敵の中央突破は十分予想できた。出来たはずなのに、ヒーリーは彼にそれを備えることを許さなかった。ヒーリーは局地戦において、自軍と敵軍に大きな兵力差があることを利用し、前線に兵力密度の差を生じさせ、中央部の守りを薄くさせた。そして、中央部の兵力が疎になった時期をねらって、歩兵大隊を突撃させたのである。

当時ワイバニア軍の横陣中央部を守っていたのは、わずかに二個中隊のみ。そこにフォレストアル軍の機動歩兵一個大隊が殺到した。いかに不動の第三軍団といえども、持ちこたえられる訳がなかった。

「ちくしょう……」

シラーは間近で押し寄せる人の津波を見た。副官のヘルマンが独断で、シラーの馬を引いて脱出しなければ、それがワイバニア第三軍団長マンフレート・フリッツ・フォン・シラーの最後の光景になっただろう。

「放せ！ ヘルマン！」

「軍団長、死んではいけません！ あなたはワイバニア軍の柱石に……」

そこまで言って、ヘルマンの言葉が止まった。ヘルマンの腹には血に濡れた槍の穂先が生えていた。口からは紅色の血を吐いた副官はシラーの視界から消えるように馬から落ちていった。

「ヘルマン！」

シラーは副官の名を呼んだが、若者はもう、彼の言葉に二度と応えることはなかった。第三軍団長付副官ヘルマン・プファイエル戦死。わずか二十年の短い生涯だった。

「ヘルマン……」

シラーは振り返ることが出来なかった。今、戦場に戻れば、間違いなく死ぬ。前途ある若者が散らして救ってくれた命を無駄にするこ

とが出来なかった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第九十六話

ワイバニア軍第三軍団の中央部を突破したフォレスタル軍第五軍団第二機動歩兵大隊はワイバニア軍の背面に展開すると、前方で戦っていた第一機動歩兵大隊と呼応して敵に挟撃を加えた。前線のワイバニア軍は陣形と言う陣形をなさず、散発的に抵抗を繰り返しながら無様に密集していく。ワイバニア軍歩兵大隊は援護の弓兵大隊との連絡も絶たれ、孤立無援の状態に陥った。

「終わったな……」

「ええ」

敵弓兵大隊を前方に捉えたアルレスハイム連隊連隊長アンジェラ・フォン・アルレスハイムは副官のレイに言った。

「しかし、弓兵大隊は攻撃しましょう。このまま撤退させてやりたいですが、あとあと厄介になりますから」

アンジェラは無言で頷いた。馬上のアンジェラは鞘から愛剣を引き抜くと、配下の騎兵に号令した。

「アルレスハイム連隊騎兵大隊、密集陣形！ 敵の側面をつく」

騎兵は無言でアンジェラに応えた。一糸乱れぬ堂々とした隊列が徐々にその速度を増しながら前進を始めた。レイはその姿を見て微笑むと、騎兵の先頭を行く上官の背中を見送った。

「アルレスハイム連隊機動歩兵大隊、弓兵装備用意！ 騎兵大隊を

援護する！　　いいか、味方一兵たりとも死なせるなよ！」

機動歩兵一〇〇〇名はハンドボウを構え、上空に狙いを定めた。狙うはワイバニア軍弓兵大隊。大隊の中に緊張が走る。

「構え！」

弓兵大隊長の合図と共に、ボウガンの鳴る音が聞こえる。息を殺した精兵達が引き金を引くタイミングを待っている。怒声、叫び声、断末魔のうめき声。戦場は音で満たされているはずなのに、彼らの意識は恐ろしいほどの静寂さだった。

一人の兵士の汗が、ひとしづく落ちる。そのときだった。彼らの意識を破るただ一つの声が、彼らの鼓膜を叩いた。

「撃てえ！」

数百本の矢が空に吸い込まれ、消えていく。敵兵士の声が上がったのはそのわずか後だった。

「かかれーっ！」

浮き足立ち、後退を始める弓兵の一団の脇腹に、フォレストル騎兵が突入した。歩兵と騎兵。その戦闘能力では圧倒的な差がある。まして、逃げ惑う弓兵では次元が異なると言ってもいい。

フォレストル騎兵はその蹄でワイバニア兵の頭蓋を踏みくだき、その剣でワイバニア兵の体を切り裂き、ミュセドーラス平野斜面を血の色で塗りたくっていった。

「深追いはするな！ 不要な殺戮は避ける！」

三人目の弓兵を斬り捨てたアンジェラは部下達に叫んだ。武人は殺人者であつてはならない。無抵抗な人間を殺すことを彼女は許さなかつた。だが、状況は彼女の言葉は矛盾する方向に進んでいく。弓兵は弓を剣に持ち替え、アンジェラに挑んで来る。まるでアンジェラを殺せば、事態が好転すると思つているかのよう。

四人目の襲撃者の首を手槍で突いたアンジェラの背後から、五人目の弓兵が襲いかかつた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第九十七話

「！」

「死ね！ 裏切り者！」

襲撃者が剣を振りあげた瞬間、彼の首に一本の矢が突き刺さった。

「あれは……」

矢が飛来した方向を振り向くと、馬上で長弓を構えたレイが不敵に笑っていた。レイは矢をつがえると、幾本も矢を放った。その早さと射型の美しさはアンジエラすら見とれさせた。

「！」

神話の貴神さながらに、レイの矢はアンジエラを襲撃者から守り続けた。アンジエラの周囲にいた敵弓兵十数名がわずか数分で戦場に伏していた。

レイ・ロックハートがアンジエラの副官に任命された最大の理由。それはヒーリーに比肩される戦術指揮能力でも、三国の戦いを間近で見聞してきた識見でもなく、フォレストル最高の弓使いであるということだった。

アルレスハイム連隊はわずか二個大隊しかない遊撃部隊であり、指揮官も当然に前線に出なければならぬことが多い。混乱する戦場の中でも、近、長距離問わず指揮官を守ることが出来る能力が、何よりも求められたのである。

「レイ、危ない！」

当面の危機が去ったアンジェラはレイに襲いかかる敵兵の姿を見た。その数、三人。レイを囲うように剣を抜き、迫って来る。アンジェラは愛馬を走らせた。

絶体絶命の危機であるはずなのに、レイは動じない。レイは長弓の端に取り付けられた鞘を抜いた。一回転、二回転。レイは弓を回転させた。舞いを思わせる美しさ。レイの周囲にいた人間達はその美しさに目を奪われた。だが、その戦舞は一瞬で、そして唐突に終わりを告げた。敵兵の死によって、レイの前後で赤い水柱があがった。レイの弓によって首をはねられた敵兵の成れの果てだった。二つの水柱、では最後の一人は？ アンジェラの視線の先には、レイの足許で立ちすくむ敵の姿があった。心臓を正確にひと突き。立ったままワイバニアのものふはその短い生涯を終えていた。

「弭槍……」

弓と槍を兼ねた騎兵の完全武器。だが、その完全さ故、扱いがむずかしく、アルマダ三国でも使い手が極めて少ない武器だった。レイは弓を横に構えると、二本同時に矢を放った。アンジェラを避けるように高速で飛んでいく矢はさらに二人の敵を天上の国へと送り届けた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第九十八話

「助けられたようだ。礼を言う」

「いえ、おれはそれが仕事ですから。しかし、そろそろ頃合いかと思えます」

アンジエラはレイに頷いた。ワイバニア軍弓兵大隊は壊滅状態だ。兵士達も我先に戦場を離脱している。アルレスハイム連隊の戦いは終わったのだ。レイは胸にかけた笛を吹いた。彼の笛に応えるように激戦の中、甲高い音がこだまする。「アルレスハイム連隊、退却」の合図だった。

散り散りになり、逃げ惑うワイバニア軍とは対照的に、整然と隊伍を組んだアルレスハイム連隊の兵士達が秩序をもって移動を開始している。

双眼鏡越しに戦いの終焉を見たヒーリーは敵残存兵力に降伏勧告を行なった。勧告を受けたワイバニア軍第三軍団第一歩兵大隊はその勧告を拒絶した。すでに大隊の半数が死に、さらにその半数が戦闘不能であった大隊は、それでも最後の一兵までも戦う気概をフォレストアル軍に見せつけた。

「戦争は狂気の入り交じる地獄だ。そんな狂気に付き合って、無意味な戦いで死ぬことはない」

ヒーリーは再度勧告したが、ワイバニア軍は拒絶した。

「我々は武人として生き、武人として死ぬ。最後に貴隊のような連

合軍最強部隊を敵手と出来たことを誇りに思う」

以後、ワイバニア軍からの返答はなかった。ヒーリーは包囲していた機動歩兵大隊を弓兵大隊に変えると、生き残りの敵歩兵に向けて掃射を命じた。

フォレストル軍弓兵は涙を流し、敵に弓を引いた。命のやり取りをしていた間柄とはいえ、これでは戦いではない。単なる虐殺に堕ちてしまう。しかし、ミュセドールラス平野丘陵部斜面を死に場所を選んだワイバニア歩兵はその矢を受け入れた。中には敬礼しながら、その身を貫かれ絶命したものもあったと言う。敵兵がすべて死体になるまで時間はかからなかった。ワイバニア第三軍団第一歩兵大隊、生存者なし。両軍にとって、悲しすぎる戦いの帰結であった。

「ヒーリー……」

メアリはヒーリーの肩を優しく叩いた。

「あなたは責められることはしていないわ。彼らにふさわしい死に場所を与えただけ。自分を責めないで」

「メアリ……。おれはこんなこと認めたくない。認めてたまるか……。国のために死ぬなんて。誇りのために死ぬなんて……。第五軍団全兵士に命令してくれ。ミュセドールラス平野斜面に散った敵軍將兵に敬意を表し、起立、敬礼せよと」

ミュセドールラス平野斜面にいつにない静寂が訪れた。フォレストル軍の生者は全て激闘を演じ散っていった好敵手に敬礼を捧げた。

ワイバニア第三軍団の損害、二四六八名。対するフォレストル軍の

死者は五十三名だった。フォレストアル軍第五軍団初の戦いはフォレストアル軍の圧倒的勝利で幕を閉じた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第九十八話（後書き）

アルファポリスファンタジー小説大賞にエントリーしました！
皆さん投票、お願いします！

龍の旗の下にページビュー百万アクセスを突破！
ご愛読ありがとうございます。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第九十九話

「第三軍団が！」

シラー率いるワイバニア軍第三軍団が壊滅する様を見たワイバニア第七軍団長ベティーナ・フォン・ワイエルシュトラスは叫んだ。

「すぐにシラーの生存を確認しなさい！ 急いで！」

手持ちの騎兵の十分の一を割いてでも、ベティーナはシラーの安否確認に努めた。

フォレストル第三軍団とワイバニア第七軍団の戦い、戦況はワイバニア軍有利に傾いていた。ベティーナは情報が戦いの帰趨を握るということをよく理解していた。そのため、彼女は機動戦力として有力だった騎兵を全て戦場の情報収集に回し、敵の攻撃の穴を探したのである。勇猛をもって知られるフォレストル第三軍団もベティーナの戦い方に手を焼いた。攻撃を繰り返しても、その度に逃げを打たれ、かつその攻撃の急所を突いて、こちらの戦意をくじくのである。ウイリアムにとって、相性が悪い敵だった。

「敵の指揮官はずいぶん目がいいんですね……。軍団長の馬鹿の一つ覚えがよくわかってる」

フォレストル第三軍団参謀長エミリア・バスカヴィルはうんうんとうなづいた。ウイリアムは重装歩兵と騎兵による突進攻撃を得意とする軍団長である。敵が明確な攻撃の意志を持ち、さらに同数、同種の兵力をぶつけてきたときに彼の戦術が生きるものであって、ベティーナのように、敵軍の攻撃を回避しつつその隙について攻撃でき

るあいてでは、遅れを取ることが多かった。

「うるさいぞ。エミリア……。だが、馬鹿の一つ覚えだ！」

「何回も重装歩兵と騎兵を交互に使うからですよ。もうへとへとじゃないですか。すぐに後退させて、機動歩兵大隊の攻撃に任せるんです」

「わ、わかった」

エミリアの案を受け入れたウィリアムはすぐに実行にうつした。エミリアは分隊単位まで歩兵大隊を分割し、有機的な兵力運用のシステムを作り上げた。整然と、しかし、隙間なく配置されたその戦力分布は、ベティーナが入り込める余地すらなかった。

「さつきと戦い方が変わったわ。もしかして、これが第三軍団の本当の戦い方かしら」

ベティーナはあごに指をあてた。フォレストル第三軍団の戦いは戦端が開かれてから現在に至るまでの戦い方とまるで正反対の形をなしている。何度も突進攻撃をかけたのは、突撃しかないとこちらに印象づけるためではないのか。

アmeerバのようにじわじわと前進する敵軍にベティーナは疑念を抱きはじめていた。

「……と、敵が疑問を抱いてくれればいいんですけどね」

エミリアは机に紙を広げて、今回の作戦を上官に説明した。

「なるほどな。敵にこちらの出方を読ませないようにする訳か」

「ごう言う場合、いくつも陣形を変えるよりも、二者択一で相手に選択肢を与えた方が心理的なプレッシャーは大きいんです」

「どちらにしても、大ばくちという訳だからな。それで、これからどうする？」

「これで終わりです」

「は？」

ウィリアムは目を見開いて参謀長に言った。エミリアはまるで意に介すこともなく続けた。

「ここで重要なのは、敵軍に斜面を登らせないことと、最後方の第四軍団を守ることです。我々はそのどちらの条件も満たしています。ですから、この戦い、もう敵軍の撃破にこだわることはないんです」

「たしかに……」

頭では理解できても、心と体は納得できない。彼の聞き分けのよさも、限界値ぎりぎりまで達していたのである。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第九十九話（後書き）

すみません！ 連載再開です！

週に一回の更新ペースで頑張りますです！ はい。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第一百話

「軍団長、戦いたいんでしょ？」

エミリアはかけていた瓶底眼鏡をきらめかせた。

「何で分かった？」

「軍団長の考えることは、敵の考えることよりもはるかに分かりやすいですから」

参謀長の一言にウィリアムは血管を浮き上がらせた。

「このや……」

殴り掛かろうとしたウィリアムを、エミリアは指一本で制した。その目はよどみなく澄み、ウィリアムに有無を言わせぬ迫力を持っていた。

「軍団長が戦いたいのとは分かります。勇名をもってならすフォレスト第三軍団ですもの。このわたしだって戦いたいんです」

ウィリアムがエミリアの手を見ると、彼女の白い手がぎゅっと握りしめられている。エミリアもまた、戦いたい衝動にかられているのだ。彼女はそれを必死に理性で抑えているのがウィリアムにも分かった。

「エミリア、お前……」

「わたし達には、一万人の命と、フォレストルの運命がかかっているんです。私たちの気持ち一つで、兵士達に死ねとは言えません」

彼女は口を真一文字に結んだ。参謀として、ゼツタに譲れないものがある。ウィリアムは戦う気をため息と共に吐き出した。

「女一人に我慢させるのは、バーンズ家の名折れだ。お前が一万人の命を背負っている顔をするな。軍団長はおれだぞ。お前含めて、一万人の命と責任をしっかりと背負ってやる」

ウィリアムは年上の参謀長の肩に優しく手をおいた。

「軍団長……。今だけはすごくいい男に見えます」

「今だけは余計だ！ ……エミリア。ヒーリーの軍団が敵を撃破したようだ。あとは、敵軍の動きに合わせて、こちらも後退する。それでいいな？」

「はい……」

「さて、それがいつになることやら……」

そう言うと、ウィリアムは双眼鏡を向けた。最前線ではベティーナ率いる第七軍団がフォレストル歩兵に圧され、じりじりと下がりはじめている。だが、まだまだ決定的な瞬間にはほど遠い。ウィリアムはワイバニア第七軍団全面退却の時を待っていた。

「シラーの安否はどうなっているの？」

戦術家として一応の冷静さは残していたが、生死不明のシラーにべ

ティーナは気が気ではなかった。ミュセドールス平野決戦前夜に抱いた彼女の悪い予感が的中した形となったのである。開戦前、第三軍団長専用マントを預けられたときのシラーの顔が、たまらなく懐かしく思えた。

「軍団長……、軍団の指揮をわたしに預けていただけじゃないでしょうか？」

ベティーナの前に副軍団長のアルトゥル・フォン・シュレーゲルが歩み出た。老練な副軍団長はベティーナの尋常でない精神状態を感じ取ったのである。フォレスタル歩兵相手に互角の戦いを演じてきたが、兵力差の均衡が破れた今、どうなるかはわからない。他の軍団にまで気を配っていたら負ける。アルトゥルなりの気遣いだった。

第六章 ミュゼドーラス平野大決戦！ 第一百話

「いえ、大丈夫よ、アルトウル。心配しないで」

「しかし、その様子では、軍団の指揮は……」

「大丈夫……」

アルトウルはベティーナが自分に言い聞かせているように思えた。何かにおびえているようにも見えた。それは、かわいがっていた後輩の死か。アルトウルはそれ以上考えるのをやめた。他人の領域を侵してはならない。数十年の軍隊生活で彼はそれを学んでいた。

他人の心の領域を侵すほど、過剰に接してしまえば、それを失ったときの悲しさやさみしさは計り知れない。常に最前線で戦友や敵と命をやりとりをしてきたアルトウルは幾度も別れを経験してきた。

「わかりました。差し出がましい真似をして、申し訳ありませんでした」

初老の執事を思わせる副軍団長は一礼すると、幕僚の列に戻っていた。シラーの安否確認をした騎兵が、第七軍団本陣である専用馬車に入ってきたのはその時である。

「第三軍団長マンフレート・フリッツ・フォン・シラー閣下、ご無事でございます！」

「本当なの？ それは」

「はい、わたしがシラー閣下と直接お会いし、書状を託されました」
騎兵は懐から小さな封筒を取り出した。ろつで簡単な封をしてあったが、その印はまぎれもなく第三軍団のものであった。ベティーナはナイフで封を開け、シラーからの書状を確認した。

「確かに、筆致は第三軍団長のものだね。第七軍団は後退。敵の追撃が予想されるわ。全軍警戒を忘れないで」

シラーの無事が分かった以上、戦力の合流を急がねばならない。ベティーナは全軍後退を命令した。しかし、斜面の敵が自軍を圧しているため、撤退は困難なものになるだろう。ベティーナは先陣の背後に控えていた第二陣を再編させた。

「敵さん、どうやら退くようだな」

ワイバニア第七軍団の動きを確認したウィリアムは傍らのエミリアに双眼鏡を手渡した。

「そつみたいですね。こちらの出方を警戒して疑似突撃に出るようです」

「何故、わかる？」

「敵第二陣が魚鱗の陣形を形成しました。それも一つではなく三つも。斜面の上に我々がいることが敵は分かっていますから、示威行動と見るべきです。それに対して、わたし達は敵の動きに合わせて後退すれば、損害なく戦いを終えることができます」

「なるほどな……」

ウィリアムは頷いた。ワイバニア第七軍団が全面的な攻勢にうつて出たのは、それから十数分後のことだった。双方の指揮のもと、ワイバニア軍とフォレスタル軍は大きな損害も出さぬまま、戦場からの撤退に成功した。

第六章 ミュセドールス平野大決戦！ 第二百二話

相次ぐワイバニア軍敗走に、ワイバニア軍右元帥シモーヌ・ド・ビフレストはいらだちを隠せずにはいた。彼女の戦略が揺らぎつつある。各個撃破を行なえる戦力は残っている。しかし、連合軍全軍を押さえ込める兵力までは、最早残っていないかった。

ミュセドールス平野を臨む丘に彼女は一人立っていた。彼女の正面の平野には八個軍団分の翼竜、約八千が横たわっている。フランシスが打ち上げた閃光轟音弾の影響である。あるものは口から泡を吹き、あるものは爆音の後遺症にのたうち回っている。

”翼竜の国”を意味するワイバニア。その代名詞と言える龍騎兵の現在の姿がある。彼らは懸命に愛騎の治療に専念し、回復に努めていた。しかし、威風堂々とした彼らも、今はあはれという印象である。「空に生き、空に散る」ワイバニア龍騎兵の誇りが文字通り地に墮ちてしまったのだから。

さらに後方には赤い十字が描かれた大きなテントが幾棟も見える。野戦病院である。現在は第十一、十二、二、六、八軍団の負傷兵が数多く入院しているが、その数はさらに増えるだろう。さらに新しい棟の設営が始まっている。

シモーヌは左元帥のハンス・フォン・クライネヴァルトにも劣らぬ軍官僚でもあることを証明してみせた。野戦病院の設置、負傷兵の後送路の確保、補給体制の確立など、後方支援業務を彼女は陣頭に立って指揮した。彼女の他に指揮しうる人材がいなかったと言えばそれまでであるが、戦功や前線の戦闘に一喜一憂していたワイバニア皇帝ジギスムントと比べて、彼女は後方の兵站がいかに大事かと

いうことをよく理解していた。

そこには皇帝の情婦としての権謀術数に長けた毒婦としての姿はなく、娼婦の衣をまとった女神の姿があった。野戦病院の傷病兵達の中には、時間を割いては彼らを見舞いにやってくる彼女を好意的に見るものも多かった。

「影よ」

ミュセドラス平野を吹きすさぶ風を感じたシモーヌは配下を呼んだ。

「これに……」

シモーヌの後ろに伸びる影が盛り上がる。漆黒のかたまりは人の形をなすと、主に恭しく跪いた。

「メルキド軍第二軍団の様子はどうか？」

「まだ、動く気配を見せておりませぬ。どうやら、正面の第一軍団の動きを警戒しているように思われます」

主従の間に沈黙が訪れる。風が吹いた。そこに血の匂いを感じ取ったのは、シモーヌの血を好む気性故か、それとも……。風になびくマントを握りしめた女元帥は部下に振り返った。

「時がきたわ。ヴィア・ヴェネトの首を取りなさい。将崩しの発動をウーヴェエに伝えるのよ」

「承知」

影は短く言うと、シモーヌの影に取り込まれるように消えた。

妖艶な女将は、唇を舌でなぞった。まるで、獲物を味わうかのように。彼女にとってラグ以外の人間は彼女に供される餌に過ぎないのかもしれない。

ミュセドーラス平野大決戦はさらに混迷を深めていく……。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第三百三話

「まったく、たまったものではありませんわ」

フォレストル第四軍団本陣、集結した四個大隊を背後にマーガレットは腕組みした。密な作戦を立てて、戦いに臨んだにも関わらず。斜面の戦いにおいて、第四軍団の出番はなかった。言わば、遊兵になっってしまったことが、マーガレットにとっては不満だった。

「しかたありません。殿下とアルレスハイム連隊長だけで勝ってしまわれたのですから。もともと、我々は敵の予備兵力と戦わねばならなかったのです。戦っていれば、きっと後々の戦いがやりづらくなっただでしょう」

マーガレットの後ろに控えたフォレストル第四軍団参謀長スタンリー・ホワイトは言った。

「さしあたっての危機は回避しましたが、今度は我々が急がねばなりません。攻撃のタイミングを逃してしまつては、元も子もありませんから」

「わかっていますわ。それぐらい。ですから、騎兵一個中隊を割いているのでしょうか？」

マーガレットは本陣に戻る直前に索敵のため、騎兵一個中隊をミュセドーラス平野侵入口に差し向けていた。ワイバニア軍の侵入を可能な限り詳細に調べるためである。すでに第一次偵察の騎兵がマーガレットのもとに報告にやってくるまで。

「敵、進軍中。侵入口至近なり」

もはや、一刻の猶予もなかった。敵はすぐそこまで達しているのだから。マーガレットは報告書をスタンリーに手渡すと、第四軍団に移動開始を命じた。騎兵、機動歩兵、弓兵の混成大隊が、ミュセドーラス平野北端に向けて移動を始めた。

同時刻、ミュセドーラス平野南方、ハイネ・フォン・クライネヴァルト率いるワイバニア第一軍団はヴィア・ヴェネト率いるメルキド軍第二軍団と対峙していた。整然と隊列を整えた両軍の兵士達が、微動だにすることなく戦場にそのますらおぶりを見せつけている。ともに、練度と士気の高い精兵だけがなせる業だった。

その様子をワイバニア軍第一軍団長ハイネ・フォン・クライネヴァルトは馬上から眺めていた。

「大した兵士達だ。エルンスト。我が軍の上位軍団と優るとも劣らぬ」

やや饒舌だ。エルンストは年少の上官を見て思った。先立ってフォレストル最強の第一軍団を破ったからか、それとも再び上将と兵を交える喜びにひたっているからなのか、エルンストはわからなかった。思索を巡らす彼を伝令兵が邪魔をした。思案の途中を邪魔されるのは不愉快きわまりないことだったが、戦闘中であるからには仕方がない。伝令の報告を聞いたエルンストは我が耳を疑った。

「それは、本当か!？」

「はい」

「どうした？ エルンスト」

ワイバニア第三軍団敗北の報がハイネのもとに届いたのはこのときである。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第四百四話

「まさか……。あのマンフレートを破るとは。ヒーリー・エル・フォレストル。恐ろしい男よ。マンフレートは？ あいつは無事なのか？」

「はい、第七軍団長ベティーナ・フォン・ワイエルシュトラス閣下がすでに確認しています」

「そうか……」

ハイネは安堵の息をもらした。兄に続いて、親友まで失うのは、若いハイネにとつて、どれほどの悲しみであるか計り知れない。ハイネはワイバニア最強の武人であると同時に、まだ二四歳の若者なのである。精神的な部分にいささかのもろさがあった。

「軍団長、いかがしますか？ フォレストル軍側の戦力がやや弱く、牽制の役割を果たすことが出来なくなります……」

「ふむ」

ハイネはあごに人差し指をあて、片方の手を肘に触れた。ハイネがいつも考えるときの癖である。もっとも、即断即決の人であるハイネがこのような長考の姿勢をとるのは珍しい。事態はそれほど、ワイバニア軍不利に傾いているのだ。

戦局全体においては現在、ワイバニア軍は龍翼の陣に取り込まれ、包囲されつつある状態にある。中央部を分断し、メルキド軍を各個撃破する契機をつくりつつ、フォレストル軍を牽制する役目を負う

のが、ワイバニア第一軍団であるが、ヴィア・ヴェネト率いるメルキド軍第二軍団がにらみを利かせており、身動きが取れずにいた。

「エルンスト、貴公はどう思う？」

「わたしは動くべきではないと思います」

ハイネはエルンストに頷いた。ハイネも彼と考えを同じくしていた。現在動くことが出来ないのは、敵がワイバニア第一軍団と同等クラスの精強さを誇っているからだだった。

どちらかが先に動けば、どちらの将もその隙をついて攻撃を仕掛けて来る。この場合、斜面に背を向けているメルキド第二軍団の方が有利である。ハイネが第三、第七軍団を救援に回るためには、メルキド軍第二軍団に脇腹を見せなければならぬ。ハイネら、第一軍団にとって危険すぎる行為だった。

「このにらみ合い、しばらく続くでしょうな」

「わたしはそう思っていない。この均衡は意外に早く崩れるだろう。あの右元帥が言ったのだ。『敵第二軍団は存在しない』とな。女狐め、恐らく何か仕掛けているにちがいない」

ハイネの声が次第に低くなる。ハイネもエルンストも、右元帥がどのような手で敵第二軍団を無力化するか、容易に想像できた。ヴィア・レオをメルキドで最も勇敢だった男を葬った戦術を使うのだろう。軍司令部の暗殺。おそらくはヴィア・ヴェネトの命を直接取りに行くはずだ。だが、ハイネにはどうすることも出来なかった。敵將の命を救いに行く義理もなければ、理由もない。ワイバニアとメルキドは今、国の存亡をかけた殺し合いを演じているのだから。

ハインは軍団に動かないように命じると、前方の軍団に視線を向けた。いい兵士達だ。この兵士達を統率している将とも戦いたかった。ワイバニアを代表する若き軍団長は悲しげに目を伏せた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第一百五話

「隙のない隊列……。ワイバニア最強の名は伊達ではないと言ったところか」

にらみ合いを続けるメルキド軍第二軍団長ヴィア・ヴェネトは息を漏らした。堂々たる陣立て。兵の持つ長槍は高さが揃えられ、天をつかんとそびえ立っている。後方に配された騎兵は動くことなく敵の襲来に備えている。重装歩兵、歩兵、騎兵の三段構えの陣は攻め込む余地すら与えない程完璧だった。

美しささえ感じる敵軍の配置に嘆息しながらも、ヴィア・ヴェネトは思案を巡らせていた。

ヴィア・ヴェネトはヴィヴァ・レオと並び称されるほどの超一級の軍団長である。将器ではハイネにひけをとらない。ヴィア・ヴェネトが採用したのは密集隊形による中央突破だった。

巨兵大隊を先頭に敵前衛の重装歩兵大隊に揺さぶりをかけ、中央突破、背面展開と言う戦術をワイバニア軍に印象づけた後、全速後退、鶴翼陣形にて包囲するというのが、彼の作戦の骨子だった。彼が立案した作戦は、今回参加したアルマダの全軍団長の中でもっとも複雑な術式である。

ヴィア・ヴェネトがこのような複雑きわまりない戦術をとったのは、ひとえに後方の連合軍総司令部の存在にある。背面展開と言う戦術を行なった場合、連合軍総司令部が敵軍の前方にから空きという状態になる。タワリツシヤスプリツツアーらを守る為に、彼は、このような策をとらざるを得なかった。

しかし、この作戦にはいくつかの不安要素が残されていた。鈍足の巨兵大隊を先陣として使用することは、全速後退時に同時に殿軍の役目も果たさねばならず、敵軍に捕捉される危険が大きかった。

しかし、ヴィヴァ・レオと共に、ワイバニア戦線を長年戦い抜いてきたヴィア・ヴェネトにはこのような作戦をやり遂げられる自信があった。兵士達の練度も高く、意気軒昂。自分たちの軍団なら、ワイバニアの最強軍団であっても撃破できる。軍議の席でヴィア・ヴェネトは実感していた。

「よし、らちを開けるとしよう。全軍、密集隊形！」

ヴィア・ヴェネトは命令を発した。しかし、司令部にいた誰も動くとしなない。

「どうした？ 何をしている？」

「残念ですが、その命令は無効になりました」

副官の声がいつもと違い、聞いたことのない人間の声に変わった。振り向いたヴィア・ヴェネトの旨に黒衣の暗殺者の短剣が突き刺さった。彼のトレードマークだった三つ編みの黒髪がはらりとける。

「なっ………？」

肺腑から息の代わりに血を吐き出したヴィア・ヴェネトは彼の周りの幕僚を見回した。彼の視線に応えるように、幕僚達はその皮を脱ぎ、彼を刺す暗殺者と同じ格好になった。

「ば、ばかな……」

彼はようやく気づいた。幕僚達はすでにワイバニアの暗殺者によって殺されていたことを。おそらく、配下の大隊長、そして副官もワイバニアの手に者にすり替わっているだろう。メルキド軍第二軍団は戦う前に敗北したのである。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第百六話

「ぐっ！」

ヴィア・ヴェネトの身体にさらに一本の剣が突き刺さる。剣を伝って、じくじくと血が滴り落ちる。暗殺者の剣は巧妙だった。激痛を走らせても、気を失ったり、死ぬことはないポイントを的確にしている。反撃しようとも、両手はおさえられ、動くことが出来ない。ヴィア・ヴェネトにできるのは、うめき声を上げることと、荒く息を吐くことだけだった。

ヴィア・ヴェネトの前にいた暗殺者の影が盛り上がる。盛り上がった影は黒衣をまとった人間の姿に変わると、フードを脱いだ。顔に刀傷を持つ端麗な美男子。暗殺とは及びもつかない容貌の人間だった。

「はじめまして。ヴェネト閣下。ご気分はいかがですか？ 部下には急所を外すように固く言い含めました故、今しばらくは生きていられます」

「最悪……だな……。お前をすぐにでも殺してやりたいくらいだ……。ぐあああつ！」

暗殺者の一人が剣を握る力を強めた。「上官に対する無礼は許さない」言外にそう言っているようだった。

「わたしの名はウーヴェ。ワイバニア軍右元帥シモーヌ・ド・ビフレストに仕える者です」

「おれに名乗っていいのか？ 生き残れば、お前の名をふれて回るぞ」

もうそんなことは出来ないことはヴィア・ヴェネト自身よく分かっている。自分の命は黒衣の麗人の掌中にあるのだから。

「最後に話をしておきたかったです。名も知らぬ者に殺されては、現メルキド筆頭軍団長に礼を失するというものです」

聞く者を魅了させる声の響き。ハイネと並んだら、さぞ壮観なことであろうが、そのようなことは未来永劫かなうはずはない。ウーヴェはゆっくりと剣を引き抜いた。

「おさらばです。冥府でヴィヴァ・レオ閣下にお会いするがよろしいでしょう」

怪しく光る紫色の両刃の剣。ウーヴェはそれを横なぎに一閃した。ヴィア・ヴェネトの首が宙を舞い、暗殺者が離れ、支えを失った身体はゆっくりと仰向けに倒れた。

血に濡れた剣を一振りして、鞘に収めたウーヴェは部下に命じた。

「全軍反転、攻撃目標、連合軍総司令部！」

迅速に、だが、ざわめきを伴ってメルキド軍は陣形を変えていった。全軍反転、狙うはタワリツシとスプリッツァーの首。明白な裏切りだった。

「司令部は何をやっているんだ!？」

「隊長は!？」

前線の兵士達は上官に確認を求めた。しかし、その命令が変更されることはなかった。

「命令に変更なし。連合軍司令部を撃滅せよ」

大隊長は部下の確認を突っぱねた。すでに影と入れ替わった大隊長はウーヴェからの命令を忠実に、感情もなく伝えていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第一百七話

敵軍を前に反転するメルキド軍を、ハイネとエルンスト、ワイバニア最強軍団を束ねる二人はやるせない表情で見つめていた。

「敵將に同情します。せめて、我々と戦いたかったでしょうに……」

「仕方あるまい。これが戦いというものだ。何が起こるかかわかったものではない」

それはハイネの本心ではないはずだ。エルンストは思った。誇り高く、自分の美学に純粹である青年。それがハイネ・フォン・クライネヴァルトだ。諦めに似た言葉を吐く人間ではない。

「軍団長、いかがしますか？」

「そうだな……」

エルンストからの問いに、ハイネはすぐには答えなかった。戦いに勝つのではない。いかにして、武人として戦いを全うするかハイネは眼前の敵を険しい目で睨んでいた。

「ヴィア・ヴェネトが裏切った！？ 信じられん……」

連合軍総司令部、メルキド・フォレストル両軍を統べる総大将のタワリッシは第二軍団反転の報告に耳を疑った。ヴィア・ヴェネトはタワリッシの信頼厚い良将である。だからこそ、彼は龍翼中央部の守りと、総司令部の防衛を任せたのである。だが、現実には敵に背を向け、総司令部を目指しつつある。ワイバニア軍に善戦を重ねてい

た連合軍は、一転して絶体絶命の危機に陥った。

「総司令部護衛隊、総司令部を守れ！」

タワリツシを含め、総司令部を守護していたのは総帥の親衛隊を含め、わずかに一五〇〇。そのうち、五個中隊五〇〇名は参謀、伝令で構成された部隊であり、戦闘力はなきに等しい。それでも、厚みと深み、そして柔軟さを持った陣を短時間で構築したのは、フランスと並び称される将たる由縁だろう。彼は出せるだけの伝令を各軍団に出し、救援を求めた。

「たかだか一個大隊で、メルキド第二軍団相手にどこまでやれるかわからないが、救援が来るまでは保たせてもらおう」

丘陵地の斜面を全速力で駆け上がる裏切りの軍団を馬車からタワリツシは悠然と見下ろしていた。

「全速力で斜面を登れ。敵はたかだか一個大隊。蹂躪してしまえばいい」

メルキド軍第二軍団長とすりかわったウーヴェは新たに設置した本営となる装甲馬車の中で部下に言った。ただ、行軍を急いだウーヴェは気づいていなかった。速度を上げるあまり、軍団に落伍者が出始めていたことを。しかし、それは彼を責めるべきではない。ウーヴェは、軍勢を率いて戦う軍人ではなく、闇に潜み標的を殺す暗殺者である。事実、ヴィア・ヴェネトを殺すまでは、彼は自分の仕事を完璧にやっていた。人にはそれぞれ適性があり、彼の才能は将に向いていないということの証明でもあった。

そして、彼に将器のないことが連合軍総司令部に救いをもたらすこ

とになる。

「ヴィア・ヴェネトなら、こんな無様な用兵はすまい。……一瞬でも、疑ったおれを許せ……」

謝罪の涙を流したタワリツシが右手を上げた。中、長距離支援石兵「ヘラクレス」の射程に第二軍団が入ったのだ。「攻撃開始」合図を出そうと手を下ろそうとしたそのとき、第二軍団と司令部直衛隊にどよめきが上がった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第百八話

「これは……」

丘の上にいるタワリツシからは斜面の様子がよく分かった。獲物の尾に食らいつく龍と呼ぶにふさわしい光景がそこにはあった。

ハイン率いるワイバニア軍第一軍団がメルキド軍第二軍団の側背を攻撃したのである。

「馬鹿な……。味方だぞ」

ウーヴェはうめいた。その程度のことはハインも当然理解していた。だが、表向きウーヴェが指揮していたのはメルキド軍の裏切り部隊であり、ハインは単に敵前で反転した敵に追撃戦を演じているに過ぎなかった。

ハインは全軍を九つの戦闘集団に分け、それぞれを指揮する大隊長に前線での采配を委ねた。ハイン自身は第一軍団全軍を統括し、互いの部隊が邪魔しないように、舞台の演出に努めた。このことが、ワイバニア第一軍団がハインの才能と能力に依拠することのない最強集団であることを示した。

ワイバニア第一軍団に属する大隊長は軍団長に匹敵する能力の持ち主だということタワリツシに見せつけた。彼らは互いに共闘、連携し、メルキド第二軍団に出血を強いた。左翼が攻めれば右翼が引き、攻撃の限界点に達すれば、右翼が攻撃を仕掛ける。戦場芸術とも呼べる用兵の妙がそこにはあった。

中でも、特に目覚ましい働きをしたのはヴェルナー・テンシュテット大隊長率いる弓兵大隊である。彼はメルキド軍の横腹に一斉射を与えた後、直ちに後退し、味方の突入を援護した。彼の大隊が評価されるのは、素早く味方の戦闘範囲を確保したその戦術機動だけではない。ヴェルナーは全隊を三つに分け、装弾、補給、掃射と効率よく速射できるユニットを作り上げた点にある。この三つのユニットが有機的に連動することで敵に間髪入ることなく、攻撃を加えることが出来た。

「ようし、撃ち終わったな。全隊後退！ 補給を急げ！」

ヴェルナーは予定通りの射撃が出来たことを確認すると、突入する味方の道をあけた。次の彼らの出番は左翼の部隊に押し出された時である。それまでヴェルナーは部下に補給と待機を命じた。

ワイバニア軍での昇進の仕組みは、戦死、昇進、引退などで、欠員が出たとき、能力的に適任である者がそれを埋めるというものである。その中でごくまれに、第一軍団の大隊長と、十二軍団長の席が同時に空位になることがある。

「第一軍団の大隊長か、軍団長。どちらを希望するか？」

左元帥が候補者に打診する場合、書状の冒頭にこう書かれる。ヴェルナーもその打診を受けた一人だった。第一軍団の大隊長がほぼ互角の能力を有するというのはここに由来する。ヴェルナー以外にも、過去五人の候補者がおり、その答えはほぼ決まっていた。

ヴェルナーは第一軍団の大隊長職を選んだ。一万の兵の頂点に立つ。それはアルマダ軍人にとって、まぎれもない誉れである。しかし、三国最強の軍団、そして、無敵無敗の部隊を率いることは、それ以

上の榮譽なのである。ヴェルナー含め、軍団長の地位をふった過去の候補者たちもその道を選んだのである。

ちなみに、このとき空位になった軍団長位をついだのが、アンジエラ・フォン・アルレスハイムである。ヴェルナーもまた、アンジエラと同等クラスの実力者ということである。

ワイバニア第一軍団の歩兵大隊が錐のようにメルキド軍の横腹をえぐっていく。ヴェルナーは愛弓をなでながら、戦況を見守っていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第百九話

「右元帥閣下は、お怒りになるでしょうなあ……」

普通の将であるならば、メルキド軍第二軍団の裏切りに乗じて、タフリツシら連合軍首脳を抹殺するだろう。リピツシュなら、おそろくそうしたであろう。それで、今回の決戦は全て終わるのだから。だが、ハイネはそうしなかった。武人としての誇りに、彼は愚直なまでにこだわり続けた。

一軍を率いる将同士、互いの知力と死力を尽くして堂々と渡り合うべきであり、暗殺や裏切りなどは最も忌むべき手段だと、ハイネは考えていた。だからこそ、先のヴィヴァ・レオの戦いでは、ハイネは戦いを汚した皇帝と右元帥に殺意を抱いたのである。

ハイネはエルンストの言葉に鼻を鳴らした。

「何のことだ？ わたしはただ追撃戦を行なっているに過ぎない。目の前の脅威である敵第二軍団撃破しているだけのことだ。何を責められることがある？」

エルンストは苦笑した。だが、彼の心中は表情ほど穏やかではない。ハイネが何と言おうとも、彼がワイバニア軍の戦略の一端、それも勝敗に直結した部分を邪魔したということには変わりがない。この戦いまでいい。ハイネの能力と兵力はワイバニア軍にとっては有益なのだ。だが、勝った後はどうなる？ このことがハイネの足許をすくう結果になりはしないか。彼は七歳年長の参謀長は、人生経験については、まだまだ自分に及ばない軍団長を慮っていた。

戦況も信じられないほどに変化していた。右と左とサンドバッグ状態に攻められていたメルキド第二軍団は第一軍団の包囲下に置かれている。抵抗すら出来ない程、あわれに打ち据えられていた。

「それにしても、無様なものだ。誰が指揮を執っているかわからないが、さっきの整然とした隊列とは雲泥の差だ。上につく人間が相應の能力を持っていなければ、下はたちまち瓦解するということか」

（軍団長は、敵軍になぞらえて、我が国のことを言っているのではないか）

エルンストは思った。ハイネらしい皮肉だ。メルキド第二軍団は今や、マーガレットのフォレストル第四軍団以上の醜態をさらしている。ウーヴェはもとより、彼の部下も用兵とは無縁の人間ばかりである。その指揮は常に後手に回り、善戦する味方ですらも、上の理不尽な命令によって翻弄され、命を落としていった。

しかし、それも右元帥の作戦なのではないか。敵軍の数を減らし、ワイバニア軍全軍が戦いやすくするための……。第二軍団の裏切り、ハイネによる攻勢、その全てが仕組まれていることではないか。明敏な参謀長はかぶりを振った。

「軍団長、これからいかがしますか？ 敵を全滅させる訳にはいきません」

「そうだな……。敵の指揮系統を寸断する。騎兵大隊と弓兵大隊に命じて、敵軍中枢を射撃させるように伝えろ」

「はっ！」

エルンストはハイネに敬礼すると、伝令に伝えるべく走っていった。

ハイネは両翼で攻撃中の騎兵と弓兵大隊に大隊長を含む各大隊の司令中枢の攻撃を命じた。右元帥の配下は大隊指揮官まで手にかけていたが、中隊長レベルまでは手が回っていないようだった。それは彼ら中級指揮官が自分たち第一軍団を相手に善戦していることからよく分かっていた。敵であっても、彼らを無意味に死なせることはハイネの矜持が許さなかった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第一百十話

ワイバニア第一軍団、騎兵大隊と弓兵大隊はハイネの命令を完璧に実行した。訓練された暗殺者とはいえ、ワイバニア最強の一個小隊からの一斉射を受けてはひとたまりもなかった。多勢に無勢であると感じた影達は矢を受けると、たちまち闇に消えた。影を倒した第一軍団兵士達は顔を見あわせたが、何も分からなかった。ただ、自分たちには到底理解しがたい事象が存在する。それだけは彼らは理解できた。

頭を失った集団はなすすべもなく瓦解する。メルキド軍第二軍団はもう戦えるだけの力を残していなかった。ウーヴェの前にはありの這い出る隙間のないワイバニア第一軍団の防御壁が塞いでいる。もう、ここに留まる必要はない。ウーヴェは舌打ちすると、音もなく闇に消えた。

「よし、全軍退け」

ハイネは各大隊の長に命じた。もう斜面で戦う意味はない。第一軍団は風のような速さで斜面を下っていった。

「まさか敵に助けられるとはな……」

タワリツシは小さく声を出した。タワリツシが構築した防御陣の前方には魂が抜けたように立ち尽くすメルキド軍第二軍団の姿があった。最大の危機はとりあえず回避できた。しかし、連合軍全体の危機はさっていない。龍翼の陣の要が崩れたのだ。左右両翼は分断されているし、連合軍総司令部はワイバニア軍にその無防備な姿をさらしている。

「総司令部が！」

フォレストル軍よりもメルキド軍の軍団長達の方が冷静さを欠いていた。ワイバニア軍の精鋭達とにらみ合いを続けていたメルキド軍であったが、第二軍団の裏切りと崩壊そして総司令部の危機を見て浮き足立った。

たとえ、わずかな隙であつても、それを見逃す未熟な軍団長は先陣には存在しない。陣形の乱れを見たマレーネ、リピツシュ、ヒツパー、三人の熟達した技量を持つ軍団長は申し合わせたかのようにメルキド軍に攻撃を開始した。ヒツパー率いるワイバニア第八軍団はタワリツシの総司令部とローサ・ロツサ率いるメルキド軍第五軍団の間を分断し、横陣に陣形を転換したりピツシュはメルキド軍の右翼に圧力をかけ、マレーネ率いるワイバニア第二軍団はラシアン・フェイルード率いるメルキド軍第六軍団の左前方から攻撃を加えた。ワイバニアの誇る三軍団長は、メルキド軍三個軍団を逆包围した。

「！」

「しまった！」

「……おのれ！」

メルキド軍の三人の軍団長はそろって声を上げたが、それだけでは何の解決にもならなかった。ワイバニアの軍団長達が敷いた鶴翼の陣形は芸術とたたえられるほどに完成されていたのである。ローサ・ロツサもデイサリータも、ラシアン・フェイルードも額面通りの兵力を動かすことが出来ず、防戦するしかなかった。予備兵力もなく、中央部を崩され、メルキド軍はワイバニア軍に抗する力が失われつ

つ
あ
っ
た。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第百十一話

「くそ……。なんとということだ」

タワリツシは悔しさに歯噛みした。たった一個軍団が崩されただけで、戦況はワイバニア軍の有利に傾いた。それだけではない。シモーヌが企んだ戦略通りにことが動き始めていた。

中央分断、のち各個撃破はワイバニア軍の戦略である。これに対抗する手段をヒーリーはいくつか用意していたが、それはどれも、自分の第五軍団を用いる術策だった。しかし、第五軍団は敵左翼を引き受けねばならず、動くことが出来ずにいた。

タワリツシは馬に飛び乗ると、斜面を下りようとした。

「いけない！ 大將軍！」

統率を失った第二軍団に向かう総大将をメルキド公国総帥であるスプリッツァーが止めた。

「將軍がここを離れては、全軍を統率できない！ ここにいるのです、將軍！」

「指揮なら、スプリッツァー、お前がやればいい！ お前は公国を統べる総帥だ！ お前こそが適任なんだ！」

そう言うと、タワリツシは愛馬を駆り、第二軍団のもとへ急いだ。第一軍団の激闘の後とはいえ、敵もいくらかは手を抜いてくれたと見える。全滅を覚悟するほどの戦いであったはずなのに、意外にも

損害は少なかった。

負傷兵を後送し、戦力を再編すれば、三個大隊は十分に動かせるだろう。タワリツシはあえて楽観的に考えた。わずか三個大隊。救援するにしても、敵兵力の十分の一である。戦力はたかがしれていた。しかし、下手に兵力があつても、命令伝達が困難であつては意味がない。幕僚もいない軍団長代理では、命令が部隊に行き渡るまでに時間がかかる。三千人という兵力はタワリツシが扱うには必要十分な数だった。

タワリツシは中級指揮官を集めると、臨時に第二軍団の再編成を行った。第一軍団との戦闘の中で、何人か功のあつた者に対しては大隊長に昇進させ、新編成する大隊の組織を委ねた。タワリツシが行なうよりも、効率が良いという理由もあつたが、前線で戦つていた兵士達は、どの隊がよく戦い、どの隊が戦わなかつたかよく知っている。戦場で直に戦つていた者達に戦力の選抜を委ねたのである。

新しい大隊指揮官はタワリツシの期待に応えた。彼らはたちまち選り抜きの三個大隊を作り上げた。訓練なしでの運用になるため、通常の部隊のような練度と精度の高い運用には及ぶべくもないが、それでも貴重な戦力には違いなかった。

タワリツシは戦力外と見なされてしまった隊に負傷兵の後送と、連合軍総司令部の防衛を命じると、新編成した三個大隊の先頭に立った。

「諸君らの軍団長、ヴィア・ヴェネトは死んだ！ それだけではない。第二軍団の主立った者が、全て、敵の凶刃に倒れたのだ」

第二軍団の兵士達はほぼ無感動にその事実を受け入れていた。彼ら

は戦いの中でそれを感じていた。ワイバニア軍と渡り合えるはずの軍団長が無様な用兵などするはずがないことをよく理解していた。

「志半ばに散った彼らのためになすべきことは一つ。敵を打ち倒し、味方を救うことだ！ 全軍、我に続け！」

騎馬に乗ったメルキドの大將軍は抜いた剣を高く掲げた。三千の兵達がワイバニア軍に向けて移動を開始した。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第一百十二話

「大將軍自らの出撃することになるなんて……」

ミュセドーラス平野斜面にあるフォレストル軍第五軍団陣地で、ヒーリーは独語した。総司令部が攻め込まれるということはヒーリーにとって最悪のシナリオだった。スプリッツァーは戦略家ではあるが、タワリツシやヒーリーに比べれば、はるかに政略家としての側面が強い。メルキド総帥家は優れた軍人の家系ではあるが、それ以上に政治家の家系であったのだ。

タワリツシが出てしまつては、大作戦を指揮する者がいなくなつてしまふ。敗北の二文字がヒーリーの頭によぎつた。

「おそらく、ヴィア・ヴェネト閣下は……」

「十中八九生きてはいないだろう。しかし、この局面、いったいどうすればいいものか……」

ミュセドーラス平野ではハイネ率いる第一軍団が、フォレストル軍とメルキド軍の双方ににらみを利かせている。フォレストル、メルキドの最強軍団を打ち破つたワイバニア軍第一軍団である。おいそれと戦いを挑む訳にはいかなかった。

フォレストル軍の目の前にはワイバニア軍第一、第七、第三軍団あわせて二四〇〇〇の軍勢がいる。兵力ではワイバニア軍とフォレストル軍は拮抗しているが、フォレストル側は敵の予備兵力を攻撃するために、第四軍団の残余を充てなければならず、不利は否めなかった。ヒーリーとしては、タワリツシを救援してやりたいが、とて

もそんな余裕はなかったのである。

一方、タワリツシ率いる三個大隊はハイネらワイバニア軍第一軍団には目もくれず、ヒツパーが率いるワイバニア第八軍団に襲いかかっっていく。ハイネも黙ってみていた訳ではない。ここでタワリツシを倒せば、ワイバニア軍の勝利は揺るぎない。

ハイネは第一軍団に反転を命じると、メルキド軍の小部隊を追撃にかかった。

「全軍、突撃！ 敵はワイバニア軍第一軍団！」

ハイネの反転を見たヒーリーは即座に敵軍の追撃を決断した。

「敵が後ろを見せた今こそチャンスだ。この機を逃しては、ワイバニア軍に勝つ機会を失ってしまう。全軍、鋒矢の陣で、敵を追撃せよ！」

ヒーリーの命令一下、一個軍団が斜面を下りはじめた。ヒーリーがやや後方に陣を張ったのは、最速で右翼の軍団を救援に向かえるためであり、今回はそれが活きる形になった。機動歩兵の名の由来である兵員輸送用馬車が斜面を高速で駆け下り、通常の歩兵ではありえないスピードで第一軍団に追いつがった。

「第一機動歩兵大隊、同航戦用ー意！」

ヒーリーは信号旗をかけた。歩兵と馬車ではその移動速度に雲泥の差がある。駆け足で進むワイバニア軍第一軍団の歩兵の真横をフォレストル軍第五軍団の馬車が二列縦隊で通過する。兵員輸送馬車に開けられた小窓から、歩兵が持つポウガンが現れた。

事態を察知したワイバニア軍の小隊長が叫んだ。

「まずい！ 盾を用意しろ！ 逃げ！」

歩兵と速度を合わせた馬車から、数百本の矢が飛び出した。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第一百十三話

ヒーリーの戦術は彼らの常識を超えていた。本来、水戦で用いられる同航戦、彼はこれを陸戦に転用した。フォレストル軍機動歩兵は移動に馬車を用いる。その窓を利用し、簡易的なガンシップ、つまり射撃専用馬車を作ること対人攻撃に効果的な一撃離脱戦法を可能にした。

「やったか」

ヒーリーは願いにも似た気持ちで前方を見た。下位の軍団なら、おそらく大打撃を与えただろう。しかし、第一軍団には足止め程度の効果しか与えられなかった。彼らは盾を構え、矢から自分の身を守っていた。

「被害状況を確認しろ！」

ワイバニア軍の小隊長は声を張り上げた。機動歩兵の弓の腕は、弓兵のそれと比べて、射程も狙いの正確さでも及ばない。フォレストル第五軍団の奇襲に対して、第一軍団の損害はごくわずかだった。

「軍団長！」

「面白い、ヒーリー・エル・フォレストルが出てきたか！」

ハイネは不敵な笑みを横に向けた。ハイネのところまでフォレストル軍の矢は飛来してこなかったが、騎馬にまたがったままでは、いつ流れ矢に当たるかもしれない。エルンストは馬車に入るように勧めた。

「不要だ。それでは戦場が見えなくなる。死地に赴く覚悟がなければ、兵も付いて来るまい」

指揮官は陣頭に立たなければならぬ。ハイネだけではない。アルマダ軍人共通の美德だった。後方で命令しているだけの指揮官では兵の信頼を勝ち取ることが出来ない。だからこそ、ハイネは騎馬にまたがり、最前線で指揮を執るのだ。

「転進し、敵の攻撃に対応せよ」

ハイネにしては漠然とした命令ではあったが、ハイネには視えていた。フォレストル第五軍団が兵員輸送用の馬車に隠れて、陣形を整えているのを。しかし、その詳細まではわからなかった。

ハイネは騎兵を後方に下げ、重装歩兵を中心に歩兵を両翼に据えた鶴翼陣形を敷いた。フォレストル軍の馬車の影で、ワイバニア第一軍団の真紅の旗がはためている。

精気にみなぎる両軍の兵士が、馬車を境に対峙している。その様を、ヒーリーはひときわ高い軍団長専用馬車のやぐらの上で見っていた。

「なんと堂々たる布陣だ。一個軍団であっても、十個軍団の兵がいるように見えるな」

ヒーリーは苦笑した。お世辞を言っている訳ではない。ハイネの敷いた陣はそれほど完成し尽くした完璧な陣形であったのだ。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第百十四話

ハイネの陣形と戦いぶりに対して、ヒーリーはミスを犯していた。ヒーリーもハイネと同じ鶴翼陣形を敷いていた。しかし、その防御の強固さはハイネの比ではなかった。

第一陣の装甲兵員輸送馬車が敵の突進を阻む防塁となし、第二陣の重装歩兵が敵の進撃を防ぎつつ後退し、両翼に配された弓兵大隊のバリスタが、重装歩兵大隊におびき寄せられた敵を殲滅する。

ヒーリーは即席の要塞をワイバニア第一軍団の前に作り上げた。

兵員輸送馬車による同航戦、簡易要塞の構築。どちらもアルマダ史上初の戦術だったが、戦略的には誤りだった。

今回の場合、ヒーリー率いるフォレストル第五軍団はワイバニア軍に向けて後方から攻撃をしかけなければならなかった。側面よりも後方の方がより守りは薄かったためである。

また、ハイネの本来の目的はフォレストル軍を増援が来るまで、無力化させることにあり、ヒーリーがこのような戦術をとった瞬間、ハイネの戦略的勝利は確定したのである。

ヒーリーもまた一人の人間に過ぎないと言う証明でもある。彼はハイネの戦いにとらわれたばかりか、ミュセドーラス平野でのハイネの攻撃を警戒するあまり、消極的に過ぎる戦術を選択してしまったのだ。

「わたしの買いかぶりすぎか。ヒーリー・エル・フォレストル」

「見事な陣形ですね。ですが、あれでは我々を攻めに出られないでしょう」

「陣形自体で言えば、アルマダ最高度の防御力だろう。あれを抜くことは、わたしですら容易ではない。だが、攻めなければいけない話だ。我々はもう、フォレスタル軍を十分すぎるほど牽制しているのだから」

馬車に隠れているが、馬上のハイネからはヒーリーの陣が辛うじて見える。重装歩兵の配置、弓兵大隊のクロスファイアポイント、そしてその後方で待機する遊撃戦力。ひとたび誘い込まれたら、全滅の憂き目に遭うだろう。フォレスタル軍が反転攻勢に転じた時の攻撃力は、かつてメルキド第一軍団を全滅せしめた龍将三十六陣”臥龍”を倍して余りあるとハイネは試算した。

「惜しいものだ。それだけの力量を持ちながら、過ちを犯すとはな」
ハイネは馬上から全軍待機の命令を出した。

「おれは、奴に負けた……」

ヒーリーもここにきて、自分の過ちに気づいた。陣形は完璧だ。完璧すぎた。もともと、能動的に攻撃を仕掛ける戦術よりも、相手の攻撃を誘い、カウンターによって敵に大損害を与える戦術を得意とするヒーリーである。今回の陣はその極致と言ってもいいだろう。

しかし、ヒーリーの方から動くことが出来ない陣形を作ってしまった。それ故に結果として、ヒーリーは敵の戦略を助けることになった。

対峙していれば、両軍の動きが手に取るように分かる。ここでみだりに兵を動かすことは、第五軍団の敗北につながる。手詰まりの状態になってしまった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第百十五話

敵は一向に動くことはない。動いた時点で今度は戦術的にも敗北してしまふ。ヒーリーの顔に冷や汗が一筋垂れる。

「考える……。奴を崩す方法を……」

長く伸びた濃緑色の髪をヒーリーは指で弄んだ。それと同時に誰も寄せ付けない気が周囲へ発散されていく。彼の頭脳の中で、幾十、幾百の戦いのパターンが取捨選択されていく。傍らのメアリもヒーリーを察すると、無言で彼の側に控えた。

「第一騎兵大隊、アルレスハイム連隊出撃！ 敵右翼後方に攻撃を仕掛ける！」

「しかし、それではこの陣形を崩さねばなりません！」

「わかつてる、参謀長。だからこそ、遊撃戦力を使って敵に包囲の意図がないことを印象づけるんだ。敵はアルレスハイム連隊と騎兵大隊を攻撃するはずだ。そうなったときに勝負だ」

メアリはヒーリーの意図をはかりかねていた。ハイネとヒーリーが当初考えたのと同じように、両軍の陣形はカウンター攻撃にもっとも適している。つまり、先に攻撃を仕掛けた方が不利になるはずだ。それなのに、どうして、損害を作るような真似をするのか。彼女にはわからなかった。

彼女の前に展開されていたアルレスハイム連隊と騎兵大隊が左に動き始めたとき、彼女は理解した。ヒーリーがこの陣形を使って行な

おうとしていることに。

「アルレスハイム連隊、前進！」

「第一騎兵大隊、アルレスハイム連隊に続け！」

別働隊として出撃する連隊長、大隊長は高らかに声を上げ、兵を鼓舞した。アルレスハイム連隊はすでに三度目の出撃になるが、その意気と士気は高かった。

ここ一番の戦局を左右する局面で用いられたアルレスハイム連隊。すでに一個軍団を葬り、上位軍団を敗走せしめた。その戦力はわずか一日にして、フォレストアルの精鋭という名を高めつつあった。

「ついに、第一軍団と戦うか……。おれ達の力を見せてやりましょう」

「あ、ああ……」

参謀のレイの返事をアンジェラは上の空で返した。ワイバニア第一軍団の練度と武力、ハイネの智謀と指揮能力。フォレストアル軍の中でアンジェラほど彼を知る者はいない。亡命の際、ハイネに助けられたアンジェラはその実力をまざまざと見せつけられていた。

元第七軍団長と第一軍団長の力の差。それは天地ほど違うと言っても過言ではない。そして、その部下の力も、例えヒーリーでもこの絶対的な力に勝つことが出来るのか。

「連隊長、大丈夫です。少しは部下の力を信じてください。あなたが育てた連隊なのですから」

アンジェラは一人ではない。部下達に支えられている。いい仲間達だ。ワイバニアにいた頃よりも、ずっと強い連帯感で結ばれているように思える。思えば、自分は部下に命をあずけることをしてきただろうか。アンジェラはこの戦いで、初めて時分の仲間を信じるこ
とが出来たのかもしれない。

「アルレスハイム連隊、決して無理をするな。敵を急襲したら、自分を守ることに専念しろ。陣形はこちらで指示を出す。死ぬな！
これが絶対の命令だ」

「死ぬ」と命じる指揮官は多いが、その逆を命じる指揮官の何と少ないことか。そして、その命令を実行することの何とむずかしいことか。アルレスハイム連隊の兵士達は真剣に笑って、その命令を胸に刻んだ。生きて帰って、再び仲間と笑いあえるために。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第一百十六話

フォレストル第五軍団の動きに、ハイネは衝撃を受けた。はじめはメアリ同様、侮りに似た気持ちを抱いたハイネだったが、騎兵が右翼に急速に接近しつつある姿を見て、その認識を改めた。鶴翼陣形は側面、または背後からの攻撃に弱い。敵の騎兵はそこをついてくる。それだけではない。右翼側から攻撃をかけたということは、ハイネはタワリツシに追撃戦を行なう手を完全に潰されたということに等しい。ヒーリーはハイネへの包囲という手を失ったが、代わりにハイネを自分との戦いに釘付けにさせたのである。

ハイネが再びヒーリーの陣形を確認すると、馬車で築かれた境界の向こうは変化していないことが見てとれる。ヒーリーは鶴翼陣形による包囲を捨てていない。騎兵による強襲作戦は鶴翼陣形に誘い込むための罠にすぎない。ならば、その罠を逆に包囲してしまえば……。

ハイネは命令を下した。

「しかし……。食わせ者のフォレストル。その名は伊達ではないと言ったところか」

ジークムントやヴィクターら、下位軍団の将ならば、ヒーリーの戦術の前になす術もなく壊滅してしまうだろう。かつて、ジークムントの戦いをハイネは無様と評したが、間近で相見えてみると、ヒーリーの戦いの巧みさがよく分かる。一手にして、二手も三手も敵の意図を挫いている。

ジークムントを破り、アルレスハイムを使って、ザビーネを葬り、

そしてシラーをも潰走せしめた。ヒーリーの手腕は脅威に値した。

迫り来る騎兵と歩兵の混成部隊約三〇〇〇を見ながら、ワイバニア最強の軍団長は翡翠の龍将との知略の戦いを楽しんでいた。

「いいか、敵とまともに戦おうとするな。程々に戦って、敵に道を開けてやるのがおれ達の役目だ。何せ、騎兵相手では分が悪いからな」

ワイバニア軍の歩兵中隊長は部下に言った。フォレストル騎兵が攻め込むまで、わずかに時間があった。ワイバニア軍右翼の第三歩兵大隊は騎兵に備え、身を低く長槍を構えていた。歩兵の槍は重装歩兵の持つパイクと比べ、格段に短い。武器で劣っても、防ぐにはやや心もとない武器だが、贅沢は言えない。武器で劣っても練度と素質でカバーする。ワイバニア第一軍団は、それが出来る軍団だった。小隊長が大隊長や中隊長から伝えられた命令を部下に伝えている。敵が来るまであと少し。蹄の音が聞こえている。第一軍団に補充された兵士は、槍をぎゅっと握りしめた。隣で槍を構えた兵士が、彼の手に触れた。

「力を抜いてる。程々って、隊長も言ったろ。力んできると、死ぬぞ」
まだ若い兵士が、少し力を緩める。新入りが、力を抜いたことを確認した。熟練兵が小さく笑った。

「よし、生きていたら、酒でも飲もう」

蹄の音がさらに大きくなる。翡翠の軍旗を翻した一団が、土煙を上げながら、ワイバニア第一軍団右翼、第三歩兵大隊の前に姿を現し

た。

「槍、構え！」

槍の穂先が鳴る音が自分の中で聞こえる。彼は叫んだ。敵を殺すと声を限りに。しかし、彼の耳に届いたのは、彼の声ではなく、矢羽根が奏でる風切り音だった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第一百十七話

歩兵による長槍防御。これが決まっていたら、騎兵に少なからず損害を与えていただろう。しかし、現実にはそうはならなかった。騎兵隊を指揮するのは、アンジェラ・フォン・アルレスハイム。騎兵による戦術、長所、弱点を熟知している。彼女は歩兵防御を矢による弾幕射撃という形でそれを破って見せた。

通常の矢ならば、さしたる被害を与えなかつただろうが、時期と数が違っていた。

防御のため、敵歩兵が両手で槍を握る瞬間を見計らって、彼女は二〇〇本の矢を敵に降らせた。瞬時に盾を構え直すことが出来なかつたワイバニア歩兵は次々と矢にその身を受けていった。

「ぐあっ！」

「ひいっ！」

ここで新兵と古参兵の違いが現れた。熟練兵には矢が飛来する道が見えると言う。彼らは間一髪矢をかわし、難を逃れたが新兵は別だった。彼らは数本の矢をその身に受けた。地面に縫い付けられ、痛み血の涙を流しながら、彼らは母を呼び続けた。

「母さん……。母さん……。」

国のため、命を捧げるとするのは、上官や政治屋のお題目に過ぎない。少なくとも、末端の兵士達は故郷で待つ家族のために戦い、死んでいった。

「騎兵隊……」

アンジエラは敵の惨状に悲しげな表情を浮かべながら、愛剣を高く掲げた。敵を殺さねば、もっと多くの仲間が死ぬ。仕方ないではすまされないことも彼女には、わかっている。だが、彼女は仲間を守るため、戦い、殺すしかなかった。戦いの流れを変えるには敵の陣形が崩れている今しかない。彼女は剣を振り下ろした。

「突撃！」

二個大隊、二〇〇〇の騎兵が敵陣めがけ地を蹴り、疾走する。追いつがる歩兵をはねのけ、踏み砕き、たちまち、敵の鶴翼陣形に大きな穴を開ける。

「第三歩兵大隊に通達。前進し、敵側面に回り込め。第一騎兵大隊にも通達しろ。城門を閉じよとな」

フォレストル騎兵の奮戦に、ハイネは即座に命令を下した。ハイネが採用したのは各個撃破戦術だった。有力な攻撃手段である騎兵を鶴翼包囲下に封じ込め、殲滅し、敵残存兵力を破る。彼の配下の歩兵も騎兵もフォレストル騎兵を閉じ込めるために移動の最中である。

「勝った……」

ハイネがそう考えたのも無理はない。彼の部下達は完璧に命令に応えている。アルレスハイム連隊が包囲下に入ったとき、彼の陣が完成する。

アルレスハイムの指揮も卓越しているが、第一軍団の精鋭の重囲か

ら抜け出せる部隊はこの世界には存在しない。

この過信が、彼の命取りになった。重囲を抜け出せる兵士は存在しない。ならば、それ以外は？ 彼は一瞬だけ失念していた。なぜ、ヒーリーが長射程のバリスタを用意していたのかということ。彼はヒーリーの陣を見た。バリスタが、彼の方向に狙いを定めていた。

「しまった……！」

「撃てえっ！」

ハイネの驚きと同時に、ヒーリーの号令が上がった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第一百十八話

三〇基のバリスタから、大型の矢が一斉に放たれる。一本一本の大型矢の威力は絶大である。それが虚をつかれたワイバニア歩兵へと飛来する。腕一本はあるうかという矢はワイバニア兵の身を両断すると、地面に深々と突き刺さった。

「機動歩兵、掃射用意」

マントを翻し、ヒーリーは冷静に指示を出す。ワイバニア軍はさらに失念していた。フォレスタル軍の馬車は単なる防壁でも兵員輸送車でもない。無数の矢を敵に浴びせかけるガンシップだということ。

「撃て！」

司令部の信号旗を確認した大隊長が掃射命令を出した。バリスタに浮き足立った歩兵に数百本の矢が襲いかかった。

「アルレスハイム連隊、第一騎兵大隊反転。敵歩兵を側面から討つ」

アンジェラは手綱をひき、金色の髪をきらめかせ号令した。騎兵大隊は一瞬足を止めると、蹴散らした敵第三歩兵大隊へと向かって行く。

敵の弱点を突くのは兵法の常道。そこには卑怯と言った感情論が入り込む余地などなかった。ワイバニア軍兵士達は凄惨な事実を受け入れる他はなく、アルレスハイム連隊とフォレスタル騎兵大隊の攻

撃を受け、ミュセドーラス平野の大地に死体を量産していった。

「フォレストル軍め、やってくれる……」

ハイネは端正な顔を歪めた。一個大隊の壊滅。それはワイバニア第一軍団の無敗神話の崩壊を意味した。それだけではない。自分の采配が後手に回ったことが何よりもハイネの矜持を傷つけた。

「軍団長、騎兵大隊が危機に陥っています。敵兵力は三〇〇〇。こちらは一〇〇〇、明らかに向こうに分があります」

「わかった」

そういうと、ハイネは戦線をやや後退させた。陣形自体も変化させねばならなかったが、ハイネは後方に配した弓兵大隊を前に出し、上空と陸上からの攻勢に対抗しようとしたのである。

こうして、ハイネは味方の戦場離脱を成功させた。

「さすがはハイネ・フォン・クライネヴァルト。後退しても隙は見せてくれない」

「勝ったのね……。わたしたち、あの第一軍団に」

メアリは震えた。アルマダの剛将、名将そのことごとくを破って来たワイバニア第一軍団。地上最強とも言える軍団が、今初めて後退するのだ。兵士達の間から歓声がわき起こった。

「まだだ！」

ヒーリーは司令部一隊に響き渡る程の声で喜びにわきたつ兵士や幕僚を抑えつけた。勝利の凱歌をあげてを彼はまだ許さなかった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第百十九話

「まだ戦いは終わっていない。敵はまだ戦う意志を捨ててはいない。気を抜くな。油断するな。おれ達が相手をしているのは、地上で最強の軍団なんだ」

ヒーリーは部下達に告げた。彼率いるフォレストル軍第五軍団とハインのワイバニア軍第一軍団の力は伯仲していたと言える。兵力では第五軍団が勝り、練度では第一軍団が上。勝敗を決するのは上立つ将の采配次第。あるまだの未来を牽引する若き軍団長同士の対決に誰もが刮目した。

「全軍、密集隊形！」

先に仕掛けたのはフォレストル軍だった。ヒーリーは重装歩兵による方陣突撃でハイン率いる第一軍団を潰しにかかった。

対するハインは重装歩兵を前に据えた三重の防御陣を敷いている。フォレストル軍とワイバニア軍、好敵手同士の戦いの第二幕は力と力のぶつかり合いで幕を開けた。

「ファランクスか。ヒーリー・エル・フォレストルめ、古い手を使う」

ファランクスとは古来より伝わる重装歩兵の戦術の一つである。最前列に盾を備えた歩兵、二列目からはバイクを構えた重装歩兵が敵陣目指し突入する、正面攻撃としては最強の攻撃力を誇っていた。

歩兵一個大隊を失ったものの、ハインの顔には、余裕が戻りつつあ

つた。それは互角の力を持つ敵将への賞賛と、至高の戦いを見出した喜び故か、敬意に値する敵手と命のやりとりをすることに悦楽を見出す武人としての気性を表していた。それはハイネがヒーリーとはまったく対局にある武将であることを示している。

ハイネにとっては戦いこそが彼の存在する全てであり、アイデンティティであった。戦いの中に生きる意味を見出し、戦いの中に死を求め、ハイネ・フォン・クライネヴァルトは生粋の戦士だったのである。

ハイネはヒーリーの攻勢を真つ向から受け止めようとしていた。フアランクスは正面の攻撃には強い反面、側面攻撃には弱いと言う欠点がある。ハイネは重装歩兵大隊で敵の威力を受け止め、歩兵と騎兵の機動力を活かした側面攻撃によってフォレストアル重装歩兵を壊滅させようと考えたのである。

「今のところ、おれ達がハイネに勝っているのは兵力だけだ。力攻めで押し切る！」

ヒーリーはあえて緻密な作戦を立てなかった。戦いの中には兵士達の意気や戦いの流れに任せただけの方が良い結果をもたらす局面が存在する。彼はそれに乗じたのである。

歩兵達が動いたことで、戦場に土煙が巻き起こる。黄土色の煙の向こうからは陣形を組んでやってくるフォレストアル歩兵達。ワイバニア重装歩兵は自分の身の丈の数倍の長さを持つパイクを握りしめた。もうもうとたちこめる土煙。ハイネは自分の勝利を確信した。

「弓兵大隊前進！」

「は？」

「分からぬか？ エルンスト。ファランクスは困だ。奴がこだわるのは騎兵大隊を死角から崩すことだ。見るがいい。先ほどは土煙など立たなかったはずなのに、今は前方が見えぬ程だ。敵軍がわざと起こしているのだ。本命の騎兵を叩いた後で敵重装歩兵をも打ち砕く！」

ハイネは陣形転換を命じた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第二百十話

「軍団長閣下もなかなかどうして、こんなときにおれ達を使ってくれるものだ」

ワイバニア軍第一軍団弓兵大隊長ヴェルナー・テンシユテットはかけていたメガネをあげた。年齢は三十三歳、大きな色眼鏡をかけ、金色の髪を後ろに撫で付けた髪型とは裏腹な柔和な顔立ちは学校の教師を連想させる。

事実一時期、彼は士官学校でも教鞭をとっており、「矢の速度と射程の前ではどんな翼竜も騎馬も無力」と言う持論を候補生達に説いていた。弓兵の運用にかけては若くしてワイバニア随一と呼ばれる能力の持ち主だった。

「弓兵大隊、前進！」

ヴェルナーは配下の弓兵大隊をワイバニア軍第一軍団右翼へと前進させた。

土煙は敵から身を隠すだけではない。自分たちの目も見えなくさせてしまう。ワイバニア軍騎兵大隊撃滅の命を受けたアンジエラ・フオン・アルレスハイム率いる連隊は視界ゼロの中、馬を走らせていた。

「いいか、この土煙だ。予測位置に敵軍がいるとは限らない。全員警戒を怠るな」

アンジエラは部下に言った。「警戒を怠るな」その言葉は実に曖昧

極まる言葉だと言える。何に対して、誰に対して警戒をするというのか？ 騎兵に対してか、それとも、ハイン・フォン・クライネヴアルトに対してだろうか。それだけであれば、彼女の警戒は甘いものだった。彼女達は息を殺して前方に潜む敵にはまったく言っていない程無警戒だったのだから。

「いいか、お前達。狙いを定めなくていい。一斉に、弾幕射撃で敵を仕留めるんだ。さあ、サーカスの始まりだ！」

馬の蹄の音に隠れて、きりきり、きりきりと長弓の弦をひく音が聞こえる。ヴェルナーは耳を澄まして敵の音を聞いた。腹の底に響く重低音。

(近い……)

敵が射程に入った瞬間、ヴェルナーは叫んだ。

「撃てえ！」

ちょうどその頃、アンジェラも前方の異変に気づいた。無数に光る星のきらめき。その一つ一つが人を死に追いやる矢じりの輝きだと分かるのに数瞬の時間を必要とした。

「弓兵？ まずい！ 総員防御を……」

アンジェラの声と同時にワイバニア軍の矢がアルレスハイム連隊に殺到した。前方を全速力で疾駆する騎兵に分け隔てなく矢が襲いかかった。

アンジェラの前方を走る騎兵に無数の矢が突き刺さる。アンジェラ

が防御を命じた数秒後、ワイバニア兵が放った矢がアンジェラの体を貫いた。

「うっ！」

後ろにひかれるようにアンジェラは馬から転がり落ちた。地面に体を打ち付けられたアンジェラは鈍い痛みを耐えながら立ち上がった。落馬したことがアンジェラにとっては幸運だった。少し前でアンジェラの愛馬が体中に矢を受けて、巨体を痙攣させていた。

「……っ！」

矢はアンジェラの右肩に突き刺さっていた。アンジェラは地面に落ちていた枝を口にくわえると、矢を一気に引き抜いた。

「ん！ んうううう！」

アンジェラは血が流れ出る肩をきつくしばると、体を引きずって歩き出した。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第二百一話

たった一度の斉射。それだけでアルレスハイム連隊は騎兵の四割を失っていた。

アンジエラの周りは騎兵の墓場と化していた。無数の矢を受け、固まった死んでいるフォレストル騎兵。眉間を貫かれた軍馬。血の臭いと死臭がアンジエラの鼻をついた。

「レイ、どこにいる？ レイ！」

アンジエラは副官の名を呼んだ。アルレスハイム連隊設立以来、常に傍らで補佐していた副官がいない。悪寒がアンジエラを襲った。

「……………長。れ、……………ちょう」

アンジエラのすぐ近くで、男が身を起こした。

「レイ、生きていたか！」

足を引きずり、アンジエラは副官のもとに近づいた。

「申し訳、ありません……………」

レイは低い声で言った。アンジエラも重傷だったが、レイの傷はそれ以上だった。彼は腹部に矢を受け、落馬の衝撃で肋骨が数本と、腕の骨を折っていた。

「しゃべるな。すぐに味方が来る。それよりも早くここを離れるん

だ

アンジェラはレイの肩をかつぐとゆっくりと歩き出した。

「……っ」

一歩一歩歩く度、アンジェラの肩から血がにじみ出る。それでも戦場から離れなければならない。彼女は痛みを耐えながら歩いた。

「連隊長……」

「大丈夫だ。お前の傷に比べたらかすり傷の様なものだ」

「おれを、置いていってください……」

痛みと戦いながら気丈に笑うアンジェラにレイは静かに言った。

「ふざけるな。お前はわたしを守ると言う仕事を途中で放棄するのか？ そんな無責任な者をわたしは部下にした覚えはない」

「連隊長がいれば、アルレスハイム連隊は存続できます。それにおれを置いていけば、連隊長は戦場から早く離脱できます」

「……嫌だ」

消え入りそうな、小さな声だった。その表情はレイの方からはうかがい知ることが出来ない。

レイの耳に馬の蹄の音が入って来た。自分たちが来た方角からではない。敵の騎兵が迫っているのだ。

「連隊長、おれを……」

「嫌……」

レイの枯れた声をさらに小さなアンジェラの声が打ち消した。レイが初めて聞く。アンジェラの女の声だった。それはか細く、弱く、しかしどんな楽器にも勝る声だった。フォレストルの美しき女傑は涙を流しながら前へ歩んでいた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第二百二話

「連隊長、置いていってください！」

「嫌……。もう、誰も失いたくない！」

弱い。こんなにも弱い女だったのか。アンジェラ・フォン・アルレスハイムは。レイの肩を抱く女は普段の上官とは真逆の人間だった。

今まで凜として威厳に満ち、どんな苦境でも堂々たる姿を見せていたアンジェラ。その背は大きく、輝いて見えた。しかし、今自分を背負っている彼女の姿はあまりに弱々しい。彼女を守りたい、その身を犠牲にしても。レイは決意を固めた。力を抜き、レイは全ての体重を上官にあずけると、彼女の細い身体はその重みに耐えきれずに大地に沈んだ。荒く息を吐くアンジェラを気遣いながらも、レイは耳を澄ました。蹄の音が大きくなっている。さらに敵が近づいているのだ。

「レイ、立て。立って……」

「おれは、ここまでです。連隊長と戦えて幸せでした」

「レイ、だめだ……。っ！ん……」

反論するアンジェラの唇をレイは奪った。アンジェラの口の中で鉄の味がする。ほんのわずかな間だけ、アンジェラは副官に身を委ねた。唇を離れた二人から赤い筋がたれる。レイは笑うとその場に倒れた。

「レイ！」

「はは、すみません。でも、最後にいいでしょう？　これ、くらい……」

アルレスハイム連隊発足以来の腹心は静かに目を閉じた。

「レイ！　だめだ！　レイ……」

レイを揺すり起こそうとするアンジェラの耳に騎馬のいななきが聞こえる。レイを守り、戦う力も歩く力も残っていない。絶望を前に自失したアンジェラの鼓膜に小さく低い音が響いた。羽音の様な振動音。彼女が今まで聞いたこともない音だった。

転瞬、凄まじい風が彼女を襲った。とつさに身を伏せ、アンジェラはレイと自分の身を守る。風が止み、土煙が晴れたアンジェラの視界を翡翠色のマントが覆った。この戦場でアンジェラ以外に翡翠のマントを身にまとう者はただ一人しかいない。

「ヒー、リー……」

「すまない、遅くなった」

アンジェラの前に、ヒーリーがただ一人仁王立ちしていた。右手には魔術銃アストライアが握られている。ヒーリーは笛を取り出すと二回吹いた。「総員、対閃光対音響防御」の合図である。

命令を発したヒーリーは二発の銃弾を放った。視界を覆うものが無くなった今、敵の姿も味方の姿もよく見える。騎兵大隊と弓兵大隊、二つの敵大隊に放たれた銃弾は彼らの鼻先で爆発した。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第百二三話

閃光と爆音が再び戦場に轟き、弓兵は目と耳を潰され、騎兵は馬から転げ落ちた。突然の光と音に驚いた馬は主を振り落とし暴れている。それでもアルマダ最強であるワイバニア第一軍団の騎兵は揺るがない。三分の一程の精鋭が優れた技術で馬を抑え、ヒーリーに向かって来た。

「来るか……」

前方の騎兵をにらみつけ、ヒーリーは弾丸を装填した。

「ヒーリー、あなたではこれだけの数を相手に出来ない！ わたし達を置いて逃げてください」

「嫌だ」

にべもなく言い放ったアルマダ唯一の銃使いは騎兵に向け、銃を連射した。

「光った？」

ワイバニア騎兵は小さな光点を認識した。だが、その光に魅入られたが最後、逃げることも避けることも出来ない。銃弾は騎兵の眉間を貫いた。ほんの数秒、いや、もっとわずかな間の出来事かもしれない。ヒーリーは瞬く間にワイバニアの精鋭二個小隊を全滅させた。たった一人に向かっていった。それだけで二十人の精鋭が殺されてしまった。

魔法か奇跡かそれとも、悪夢か。無慈悲な事実を恐れを抱いた騎兵の長は軽く手を挙げて部下を制止した。うかつに攻めるのは被害を拡大させるだけと考えたのだ。

そんな中、一人の弓兵がヒーリーの頭を狙って矢を放った。ワイバニア第一軍団弓兵大隊長ヴェルナー・テンシュテットである。第一軍団弓兵大隊長の放つ矢、それはすなわち百発百中であることを意味する。一本の矢がヒーリーに吸い込まれるように飛んでいく。

風切り音に気づいたアンジェラが声を上げた。

「あ……」

ヒーリーはマガジンを交換すると慌てずに二発の弾丸を放った。一発は矢を弾き落とし、もう一発はヴェルナーの色眼鏡を砕いた。

「なっ……」

ヒーリーの眼が二本目の矢をつがえようとするヴェルナーを真つすぐに見らんでいる。

「次は眉間を狙う」

ヒーリーはヴェルナーに無言の圧力をかけた。ヴェルナーは矢をつがえたまま目を見開いている。狙いの正確さ、魔術銃の早さ、そのすべてが彼にとっては悪夢に等しい衝撃だった。

魔術銃の連射性能と射程距離。これは弓の中でも連射力と射程に優れる長弓をはるかに上回っている。それは弓兵の完全な敗北に他な

らなかった。ワイバニア最高の弓兵はもう、ヒーリーを狙うことは出来なかった。

わずか二十五発の弾丸、ただそれだけでヒーリーは二〇〇〇の兵を黙らせた。たった一人、その気になれば、すぐに殺せるはずなのに、ワイバニアの精鋭は彼を取り囲むだけで何もすることはなかった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第二百四話

「すごい……」

威風堂々と立つ翡翠の龍将。アンジェラにはその姿が神々しく見えた。それはかつて、ハイネに助けられた時のように、何か大きな力を感じていた。

ヒーリーは振り返るとアンジェラに言った。

「遅くなってすまない。……ハイネがおれの読みを上回った。おれの責任だ」

ヒーリーは地に横たわるレイを抱いた。

「おい、レイ。しっかりしろ」

「はは……。女に抱かれたかったんだがな。ヒーリー」

「悪かったな。あいにくアンジェラは手が塞がっているんだ。おれで我慢しろ」

笑いながら咳き込むレイを抱き、ヒーリーは言った。

「ヴェル！」

相棒の名を呼ぶと、一匹のエメラルドワイバーンが舞い降りた。

「ヴェル、重いけれど我慢してくれ、大事な友達なんだ」

ヴェルは力強くうなづいた。誇り高きエメラルドワイバーンは主と認めた人間以外を乗せることはない。翡翠色の肌を持つ相棒はヒーリーの願いを受け入れた。幼竜の頃から共に過ごした翼竜は主の信頼に応えたのだ。

ヴェルは咆哮をあげると、空高く飛び上がった。

アンジェラ達は空から陣容を見た。アルレスハイム連隊が後退していくのがわかる。追撃に移ろうとするワイバーニア軍を龍騎兵大隊が空から牽制している。戦場では多くの軍馬と騎兵の死体が横たわっていた。

アルレスハイム連隊はその戦力の半数近くを失っていた。彼女の部下の騎兵と歩兵はアンジェラとレイを守るため果敢に戦った。彼らが稼いだのはごくわずかな時間だったが、それでもヒーリーに事態を知らせ、彼を出陣させるに十分だった。

ヒーリーはアレックスに出撃を命じると、メアリの制止も聞かず本陣を単騎で飛び出した。

「すまない。おれの失策で、君とレイを……」

「謝らないでください。わたしは、わたしは……、皆を救えなかった。救えなかったんです……」

司令部大隊に戻るまでの数分。アンジェラは声を震わせた。風に乗って、彼女の嗚咽がヒーリーの耳に入ってくる。彼は何も言わず、ヴェルを羽ばたかせていた。

「重装歩兵大隊後退。もう限界ね」

ヒーリー不在の第五軍団司令部でメアリはヒーリーの代わりに指揮をとっていた。その指揮は的確にして堅実。積極的に攻めることもなければ、消極的に守ることもない。ヒーリーのような独創性には欠けるが、その分付け入る隙を与えない戦術だった。彼女はヒーリーが抜けた第五軍団を守り切っていた。

「面白みのない戦術だな」

ハインは馬上からメアリの戦いを評した。後退する重装歩兵を守るように機動歩兵と弓兵がにらみをきかせている。

「だが、優秀だ。おそらく参謀長が指揮をしているのだろうが、奴の片腕になる手腕は持っているようだ。こちらも後退せよ。アルレスハイム連隊をつぶせただけでもよしとしよう」

ハインは第五軍団の後退に合わせるように手持ちの戦力全てを退却させた。上将同士の二度目の激突はハインの勝利に終わった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第二百二十五話

ワイバニア第一軍団とフォレストル第五軍団との二度目の戦闘において、ヒーリーらフォレストル第五軍団が受けた被害は甚大だった。強力な戦力であるアルレスハイム連隊が壊滅したのである。特に連帯付副官兼参謀のレイの傷は重く、最早戦場に立つことは不可能だった。

ヒーリーはアルレスハイム連隊残余を後方に下げると、軍団の再編に着手した。

「さて、どうしたものか……」

装甲馬車の櫓の上に立つヒーリーの眼前には、ハイネ率いるワイバニア第一軍団の陣形が見える。ハイネは盤石の態勢でヒーリーを待ち構えていた。

「あえて、動くまい」

ヒーリーが大きく陣形を変えている頃、ハイネは真紅の旗をたなびかせる軍団を見渡して言った。ここに留まること、それがハイネの勝利を意味するのだ。左翼のメルキド軍を撃破すれば、次は右翼のフォレストル軍を攻める。それまでは中央に位置するヒーリーらを引きつけておけば良いのである。ヒーリーとの決着にこだわる必要はなかった。

ヒーリーとしても、アルレスハイム連隊を欠いた今、正面からハイネ達と当たろうとは考えていなかった。フォレストル第五軍団とワイバニア第一軍団とでは兵力的に拮抗しているが、新兵が半数を占

める第五軍団では練度において大きく劣る。

これ以上の戦闘はさらなる被害を生むだけだった。

「退く訳には、いかないな」

しかし、ヒーリーは動くわけにはいかなかった。軍団を動かせば好
きが出来る。そして、その隙を見逃す程、ハイネは甘い相手ではな
い。あと少しの間だけ、ヒーリーはここでにらみ合いを続けなけれ
ばならなかった。

ミュセドールラス平野侵入口では、ワイバニア軍予備兵力一九〇〇〇
がさしたる妨害のないまま、狭い渓谷を通過しようとしていた。

「あつはつは！ 敵は恐れをなしたのかねえ？ 影も形もありやし
ない」

予備軍司令官のワイバニア軍第九軍団長マルガレーテ・フォン・ハ
イネマンは櫓の上で声を上げた。彼女の後ろには、参謀長のフラン
シスカ・エンツェンスベルガーが控えている。シヨートヘアでやや
荒っぽいマルガレーテとは対照的に、フランシスカはお嬢様然とし
ている。碧い眼に白い肌、そして綺麗にカールされた金色の髪は人
形を思わせた。

「油断は禁物よ。マルガレーテ。敵は前から来るとは限らないのだ
から」

柔らかな微笑みをたたえて、フランシスカは言った。彼女は上官であ
るはずのマルガレーテにも遠慮がない。マルガレーテがそれを許し
ていることもあるが、ワイバニア屈指の富豪の子女である彼女はそ

れ以上に超然としている。フランシスカには上官、部下と言った価値感がないのであろう。ハーフマントに特注のロングスカート、彼女がしつらえた軍服に身を包んで、お嬢様参謀長は渓谷の風を浴びていた。

「わかってるよ、フランシスカ。後続のヴィクターと、リヒャルトにも伝えてある。でも、敵にはそれほどの戦力は残ってないんじゃないのかい？」

「四個大隊……」

「何だつて？」

「わたしなら、四個大隊あれば守りきれるわ」

フランシスカは上官に確言した。ワイバニア軍はこの後、わずか四個大隊に振り回されることになる。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第二百一六話

ミュセドーラス平野侵入口、その断崖に翡翠色の軍服に身を包んだ男女が立っていた。

「敵はわたくしたちの五倍。これを食べ止めろだなんて無茶な任務を押し付けられたものですわ」

「確かに無茶ですが、無謀ではありません。この狭い谷です。地形を味方につければ、十分に戦えます」

フォレストル第四軍団参謀長、スタンリー・ホワイトは自信ありげに言った。戦いの中でスタンリーは変わりつつあった。いや、意識して考えるべきであろう。第四軍団の半数を失ったマーガレットの猪突以後、スタンリーは積極的に前に出て、作戦の立案や戦闘指揮を行なった。

その働きはマーガレットに信頼を寄せられるまでになっていた。マーガレットも全幅の信頼を寄せていたというわけではない。しかし、この小さなはげ頭の参謀に抱いていた悪印象の大半は消え失せつつあった。

「谷を下ります。そろそろ敵と遭遇する頃でしょうから」

マーガレットは手綱を引くと、眼下の戦場へと戻っていった。そのころ、ワイバニア軍予備兵力はその前方にフォレストル軍三個大隊を捉えつつあった。

「軍団長、先行の騎兵大隊より連絡！ 敵軍、約三個大隊侵入口出

口付近に確認とのことですよ！」

伝令からの連絡を受け取ったマルガレーテは鼻を鳴らした。

「たった三個大隊で、あたし達の前に出るなんて、大した冗談だね」

「待った」

笑いを浮かべようとするマルガレーテをフランシスカが止めた。

「何さ、フランシスカ」

「前衛の騎兵大隊を下げましょう。第一陣は第三歩兵大隊。第二陣は弓兵大隊。直ちに戦闘準備を」

「は？ 何を言い出すんだい？ たかが三個大隊くらい、騎兵大隊で十分撃破できるだろう？」

「わたしだったら、二重の馬防柵の中に騎兵を閉じ込めて、弓兵で狙い撃ちするわ。それで騎兵は壊滅ね」

マルガレーテは参謀の言葉に目を見開いた。

「少しは慎重にならないと。こんな局面にこんな寡兵で戦いを挑むなんて、誰が指揮を執っているかわかるでしょう？」

「『スタンリーに気をつける』か……」

マルガレーテの世代にも、スタンリー・ホワイトの雷鳴は轟いている。ワイバニア第十二軍団を一時的にでも戦闘不能に陥れ、上位軍

団に一撃を与えたスタンリーの手腕。十数年を経ても衰えることを知らないその強さ、その戦術は、警戒してもなお足りないものだった。

マルガレーテはフランシスカの進言を聞き入れ、陣形の再編に着手した。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第二百二十七話

「予想より早く動きましたな。敵には、ずいぶん勘のよい参謀がいるようですね」

谷の上から、スタンリーは第九軍団の陣形転換を確認した。第九軍団九〇〇〇の後ろには、新第十二軍団となった旧第十一軍団残余二〇〇〇と、新第十一軍団となった旧第十二軍団八〇〇〇が続いている。フォレストル軍によつて、大きな損害を受けた後続二つの軍団はよく統制がとれていたが、司令部大隊を失つたことが大きく、隊列はやや乱れていた。

「さて、あとは時期を見るだけ。軍団長、あとは頼みますよ」

スタンリーは視線をマーガレット率いる三個大隊に向けた。いい布陣だ。過去の失敗から、マーガレットは確実に学んでいる。あとは、自分達の六倍にもなる敵とどう戦うかだった。

「す、すごい数です」

第四軍団次席参謀アビー・マクファーデンは背後の味方と前方の敵を見比べてつぶやいた。一九〇〇〇の兵力はさほど大軍とは言えない。現在、狭い平野にはその十倍する兵力がひしめき合っているのだから。しかし、アビーには地を覆い尽くす様な大軍が彼女めがけて押し寄せているように感じられた。

何と言う大軍、何と言う回復力。兵力の差は、そのまま国力の差につながる。二万に届く軍団、その背後にある巨大な力に、小さな一人の人間であるアビーは飲まれようとしていた。

小さく震え始める次席参謀の視界を小さな手が覆い隠した。

「臆することはありませんわ。あなたの前にはわたしがあります。羽衣のマーガレット。あなたはわたしの羽衣だけを見ていれば良いのです」

手袋の隙間から見えるフォレストル唯一の女性軍団長は戦乙女にふさわしい出で立ちと気品を漂わせている。

騎兵用の胸甲と動きやすい鎧に身を包み、深くかぶった甲は彼女の口元まで隠している。微かに見える彼女の小さな口はわずかな笑みをたたえている。

頼もしい……。第十二軍団と戦ったとき以上に、アビーには前に立つ上官が大きく見えた。強大な敵の前に彼女は微塵もたじろいでいない。櫓に立つ女将はマントを翻すと、アビーの方を向いた。

「馬上にて指揮を執ります。ことここに至って、馬車での指揮は不要ですわ。アビー、あなたはこの馬車に残って本陣へ戻りなさい」

「いえ、わたしも軍団長と共に参ります。軍団の次席参謀はわたしです。スタンリー参謀長が不在の今、軍団長の補佐はわたしの仕事です」

アビーは引き下がった。戦わなければならない。否応なく巻き込まれたのではない。これからは自分の意志で戦うのだ。強い意志の光を瞳にたゆたえて、アビーは味方に背を向けた。

新第四軍団、最初の戦いが、今、幕を明けようとしていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第二百二十八話

「いい布陣だね。 たった三個大隊の割に、重厚なもんだ」

前方のフォレストル第四軍団を見たマルガレーテはマーガレットの布陣を賞賛した。

マーガレット率いる三個大隊は侵入口の幅ぎりぎりに布陣している。前衛に二個大隊、後衛に一個大隊を配し、横一文字に陣を敷いている。

第一列に弓兵、第二、三列に槍兵、最後列に騎兵を配置して、歩兵の突撃に対抗する構えである。

「こんなもんでは、それほど時間はもたないさね。さて、魚鱗の陣形で突撃だ。数を頼みに押し出すよ」

マルガレーテは腕を振り上げた。露出の高いプレートメイルの隙間に戦場焼けした肌がのぞく。三十二歳と言う年齢とは思えない瑞々しい肢体。彼女の周囲の評価とは裏腹に、マルガレーテは女性として魅力的な面を持っていた。

「マルガレーテ、くれぐれも言っておくけれど……」

「わかってるよ。『用心しろ』だろ？」

フランススカの進言をマルガレーテは流した。彼女は油断も侮りもしていない。敵軍の陣形は確かによくできているが、警戒する程ではない。全軍をそのままぶつけてもよかったが、彼女はここで慎重

さを發揮した。

マルガレーテは全軍を五つの戦術集団に分け、マーガレットに対した。

五つの集団を交互に前進させ、敵の数をゆつくりと減らしていく作戦である。この作戦では、敵に大切な時間を与えてしまうことになるが、合流を急いで、敵の奇計にはまってしまうのは、ワイバニア軍にとって避けなければならないことだった。

参謀長のフランシスカも、マルガレーテの策に賛同した。

「突撃！」

マルガレーテ・ハイネマン率いるワイバニア軍予備兵力第一陣が前進を開始した。歩兵が軍靴を響かせ、迫り来る。槍が鳴り、戦場につわものどものときの声が響き渡る。

「……来たようですわ」

敵の前進を見たマーガレットは指揮杖を高く掲げた。

「構え！」

弓兵達が新型連射弓を構え、狙いを定めた。照準器の真ん中に、敵兵の姿が入る。あとは、引き金を引くだけ。弓兵達は息を吸い、吐いた。

羽衣の二つ名を持つ女将は敵が射程距離に入ったことを確認すると、杖を大きく振った。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第二百二十九話

「射て！」

弓兵隊長の命令と共に、一斉に矢が放たれた。バネの反発力によって飛び出す矢は精度と威力に難はあるが、十分な殺傷力を有している。矢を受けた最前列のワイバニア兵がバタバタと倒れていく。

「矢は盾で防げ！ ひるむな、前進！」

歩兵指揮官は細剣を振り上げ、兵達を叱咤した。ワイバニア歩兵は武器を槍から盾に持ち替え、矢を防ぐ。盾の緩やかな丸みは矢を弾き、そのことごとくを地に落とす。フォレストル軍の矢をかわしながら、ワイバニア歩兵はさらに前進を続けた。

「さすがはワイバニア軍、地上戦でも堂々とした戦いぶりですね。後衛から二個中隊を割いて左翼の厚みを増やさない。同時に右翼は後退、急ぎなさい！」

前回の戦いとは違ってかわった指揮。マーガレットはここに来て、”羽衣のマーガレット”の真価を發揮しはじめていた。先の十二軍団の戦いの敗因はマーガレットが冷静さを欠く程、功に焦っていたことと、マーガレットの力量以上の兵力を彼女が直率してしまったことにあった。

しかし、三〇〇〇という兵力はマーガレットにとっては必要充分な数だった。狭い谷間は兵力の展開を良く見せてくれる。マーガレットは斜線陣をしくと、ワイバニア軍の前進力を受け流した。

「よし、そろそろ頃合いですわ」

ワイバニア軍が策にかかったことを認めた彼女は、マーガレットは手を高く掲げた。

「参謀長、軍団長からの合図です」

「よし、くさびをうちこみなさい」

スタンリーは指揮下の部隊に命じた。彼直属の攻城兵達が「そうれ！」とかけ声を上げて地面にくさびを打ち込んだ。不快な音を立てて、彼らの足もとの地面にひびが入りはじめた。

「あれは、まずい！ 全軍、後退！」

異変に気づいたマルガレーテは全軍後退の指示を出したが、全ては遅かった。自軍の真上から地面が降って来たのだ。ありえない……。マルガレーテは傍らの参謀長を見た。

柔らかな表情を崩したことのないフランシスカもまた、その表情を硬化させていた。

「よける、よけるんだ！」

「どこへ！ うわあああ！」

前線の兵士達は断末魔の叫びを上げながら崩された岩盤に押しつぶされていった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第三百十話

「何てこと……」

ワイバニア軍第九軍団参謀長フランシスカ・エンチエンスベルガーは色を失った。上からの攻撃は彼女の予測の範囲内だった。しかし、その規模は彼女の予想をはるかに超えていた。落石は先鋒四個大隊の半数を飲み込み、さらに侵入口の四分の一を塞いだ。数分の間、ワイバニア軍は動きを止めた。それは、彼らにとって、致命的とも言える時間だった。

「突撃！」

馬上から、マーガレットは手を振り下ろした。彼女率いるフォレストル軍第四軍団の兵士達が狭くなった侵入口へと押し寄せた。槍兵が隊列を組み、立ち尽くすワイバニア軍に襲いかかる。戦いというよりも虐殺と言った方が近かった。

「まずい、後退だ。後退！ 早くしな！」

マルガレーテは声を張り上げた。先鋒の残軍は我先に戦場を離脱しはじめている。眼前の惨状から何もかも放り出して逃げたいのだ。それはどの国の兵士達も同じ、血の通った人間であることの証明だった。

人であること。それは本来人間として当然とも言える気質であり、誇るべき性質であったらう。しかし、こと戦場においては何よりも邪魔なものに変わってしまう。戦いがいかに愚かで救いようのないものかを物語る良い例と言えよう。

だが、さらに救いがたいのは、人としての良心や恐怖心を捨てた方が生き残る確率が高いという事実だった。

攻勢に転じたフォレストル軍は統制を失い、散り散りになって逃げ惑うワイバニア軍に追いつき、効率的で効果的な弓兵射撃と、槍兵の密集隊形による突撃で確実に敵を葬っていたが、わずかに残ったワイバニア軍数個小隊は攻撃を巧みに防ぎ、一時はフォレストル軍の攻勢を押し戻すことに成功した。

「溪谷が狭いというのは奴らにとって最大の武器だが、それは我々にとっても同じことだ。味方が退却する時間を稼ぐのだ」

ワイバニア軍第九軍団第一歩兵大隊第三中隊長アルノ・ペルクセンは部下達にいうと、自ら陣頭に立って殿軍を指揮した。彼が率いる中隊は負傷兵を含め八三名、対するフォレストル軍は三千名。あまりにも無謀すぎる戦いだった。しかし、彼は彼を含め部隊が全滅するまでの四十五分もの間、フォレストル軍を足止めすることに成功した。

弓兵を放射線状に分散配置させ、火力の集中によって敵兵力に損害を与えた他、三度の歩兵突撃を行なうなど、彼は四十五分間にわたって、フォレストル軍を翻弄し続けた。部隊の全滅という結末ではあったものの、寡兵でありながらも四十五分間戦場を支配し続けた彼の戦術は敵味方問わず激賞を受けた。のちに”ペリクセンの四十五分”とたたえられたこの戦いは、退却戦の範として、三国の士官学校の教本に載ることになったと言つ。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第三百一話

「三個大隊を相手にわずか一個中隊でこれほどの時間を稼ぐとは死なせるには惜しい指揮官でしたわ。追撃を中止しなさい。これ以上の深追いは危険ですわ」

マーガレットは敵将ペリクセンの才能を惜しみつつ、自軍に追撃の中止を命じた。スタンリー支隊が落とした岩盤によって新たに区切られた戦線まで後退したフォレストアル軍は左翼の兵力を薄くした斜線陣をしいた。

「ああ、いやらしい戦い方だねえ。もつとすつきりやれないのかい？」

マーガレットの斜線陣を見たワイバニア軍第九軍団長マルガレーテ・フォン・ハイネマンは舌を鳴らした。

「迂闊に攻め入ってはだめよ、マルガレーテ。攻め込んだら最後、今度は右翼から岩を落とされるわ」

「そんなことわかってるさ。だからいらだってるんじゃないか」

参謀長のフランシスカの言葉をマルガレーテはいらただしげに返した。フォレストアル軍を攻撃したらどうなるかは、この戦場にいる誰もが分かる簡単なことだった。

「攻撃できるものなら攻撃してみる」

マーガレットのしいた斜線陣はワイバニア軍への挑発と示威行為だ

った。

マルガレーテの心は揺れていた。攻撃すれば、数十分前の二の舞。攻撃しなければ、この戦いの敗北。大損害を被るという点では、どちらも変らなかつた。わずか数秒。目をつむつた女司令官は、静かに目を開いた。

「全軍、密集隊形！ 小細工はなしだ。大兵力をもって、敵軍を叩き潰す」

軍団長の命令に、フランシスはゆっくりと首を縦に振つた。

単純きわまりないが、敵軍の五倍する兵力で陣形を正面突破するか、マーガレットの戦術を破る策はない。スタンリー支隊が岩盤を落とすより早く、敵陣を突破するかが勝敗を分かつ鍵だつた。

「前進！」

陣形を整えたワイバニア軍第九、第十一、第十二軍団はフォレストル軍に向けて前進を開始した。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第三百三話

ワイバニア軍一五〇〇〇は濁流のようにフォレストル軍へと殺到した。侵入口に迫る兵の群れは一步進むごとにその速度を上げていった。

大軍による正面突撃はマーガレットが最も恐れていた戦術だった。兵力差は一对五、まともに戦えばまず勝ち目はない。回避行動を行なうフォレストル軍を目に、マルガレーテは声を上げた。

「はっ！ それでよけたつもり？ そのまま敵を押し崩せ！」

「もうすぐ……、もうすぐ……。今！」

マーガレットは羽衣の名に恥じめ高速機動を指揮してのけた。極端な鋭角を描いた斜線陣に素早く陣形を組み直すと、ワイバニア軍の突進力を受け流し、ワイバニア軍第九軍団に出血を強いた。

さながら、かなで削るようだというのはこの戦いに参加したワイバニア軍第九軍団参謀長フランシスカ・エンチェンスベルガーの言葉であったという。損害自体は軽微だったがその速度は大きく削られている。このままでは頭上から再び岩盤を落とされてしまう。明敏な参謀長は敵の旗印を見た。

「まずいわ。旗に生気が満ちている……」

「何ロマンチックなことを言ってるんだい？ 力で押すよ！ 魚燐の陣形へ。あの薄っぺらい敵をうちやぶってやるんだ」

マルガレーテは浅黒く戦場焼けした腕を振り上げた。

フォレストル軍の戦術は巧みだが、一万五千の大軍にしてみれば、あまりにも小勢だ。何度も攻撃を繰り返しているが、損害は小さい。いつでも倒すことが出来る。マルガレーテは楽観的だった。

しかし、マルガレーテに反して、参謀のフランシスカは焦っていた。一刻も早く、侵入口から離脱したかった。マルガレーテとは対照的に、フランシスカは目の前のフォレストル軍三個大隊にそれほど脅威を感じていなかった。彼女が恐れていたのは、マーガレットの背後にいるスタンリーの存在だった。たった一個大隊で一個軍団を無力化させ、上位軍団を足止めた手腕、その存在はたった一人で数個軍団に匹敵する。ハイネ、ヒーリー、タワリツシ。アルマダ最強、最高の将からの尊敬と畏怖を一身に集める達人、フランシス・ピット彼に最も近い境地にある指揮官がスタンリー・ホワイトだった。

「スタンリーに気をつける……」

フランシスカは傍らの盟友に気づかれぬ程小さな声でつぶやいた。

彼女の目は常に崖の上を向いていた。はるかな高みから万を超える軍団を押しつぶすかのような重圧を明敏な参謀長は感じていたのである。

「勘の鋭い娘ですな。ヒーリー殿下を見ているようです」

双眼鏡越しに、スタンリーは崖下のフランシスカを見た。恐怖で顔を青ざめさせているが、戦う意志を捨ててはいない。マーガレットとの戦いに専念している上官の代わりに、自分が警戒しようというのだ。優等生を見る先生のようなまなざしで、伝説の男は敵軍の参謀

長を見下ろしていた。

「向こう側の崖に命じなさい。地を落とせと」

フォレストル屈指の知将は眼光鋭く部下に命じた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第三百三話

侵入口左側の崖に並んだ攻城兵たちが、スタンリーの合図と共に大きな槌を振り上げる。これが地に突き刺さるくさびに打ち付けられたとき、砂岩質の崖はもろく崩れさる。一糸乱れぬ整然とした動きで槌が振り下ろされようとしたりしたそのときだった。攻城兵の一人が、聞こえるはずのない音を聞いた。

「おい！ あれ……」

隣りの兵に声をかけようとした瞬間、彼の五体は彼の仲間もろとも翼竜の牙によって引き裂かれた。彼だけではない、スタンリーの対岸の崖にいたフォレストアル攻城兵五個中隊は龍騎兵の急襲を受けていた。

「ようやく、間に合ったな……」

上空警戒していたワイバニア軍第一軍団龍騎兵大隊長ゲルハルト・ライプニッツはつぶやいた。フォレストアル軍の閃光、轟音攻撃を受けたワイバニア軍の翼竜達は人間よりもはるかに優れた感覚器官をもつが故に、そのほとんどが、戦闘不能に陥っていた。しかし、翼竜にはそれぞれ個体差があり、感覚器が鈍化している個体も中には存在する。ワイバニア軍右元帥シモーヌ・ド・ビフレストは傷の程度が軽微で、かつ戦闘可能な翼竜を選出させた。

その数は総数わずか、百にみたぬ程度であったが、彼女は臨時の龍騎兵隊を編制すると、予備兵力の援護にあてた。

「右元帥閣下もよくやる……」

ゲルハルトは眼下の龍騎兵を見た。彼率いる百人の龍騎兵隊は各軍団の大隊長、中隊長クラスが顔を揃えている。いわば、ワイバニアのトップクラスのドラゴンライダーのみで結成された最精鋭部隊である。例え五倍の兵力差であろうと、自分の愛騎でなかるうと、フォレスタル軍を圧倒する戦いぶりを見せていた。

「隊列を組み直せ！ 一人であたるんじゃない！」

圧倒的不利な状況の中、フォレスタル軍中隊長は果敢に抵抗を試みた。しかし、運命は彼に味方することはなかった。崖の上のさえぎるもののない場所で密集隊形をとるフォレスタル軍は、空の支配者たるワイバニア龍騎兵にとって格好の獲物に過ぎなかったのである。

「歩兵は龍騎兵に弱い」

彼はアルマダの不文律をその死の瞬間まで何度も繰り返しつつやっていた。次々と部下達が翼竜の牙と爪で切り裂かれていく中、ようやく彼の番がやって来た。

真正面から飛来した翼竜は、彼の視界を覆うと、一息で彼の上半身を食いちぎった。彼にとつてせめてもの幸福だったのが、彼率いる中隊が無惨に全滅した姿を見ることなく死を迎えたことと、痛みを感じることなく逝けたことだろう。五個中隊を蹂躪し尽くしたワイバニア龍騎兵は勝ちどきをあげ、本営へと戻っていった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第三百三四話

「何と言うことだ……」

スタンリーは驚愕に目を見開いた。龍騎兵隊の攻撃は彼が想定する最悪の事態であり、最も実現の可能性が低いシナリオだった。もはや反対側の崖を崩すことは出来ない。スタンリーは拳を握りしめた。

「攻城兵二個中隊を割いて、反対側の崖に回しましょう」

「しかし、半分の数では崖を崩すことは出来ません」

スタンリーの命令に攻城兵を率いるそれぞれの中隊長は反対した。崖は長い。五個中隊の大半以上が横一列に並んでなお、余ある程である。上空の脅威は去ったとはいえ、わずか二百名の攻城兵が護衛もなく並ぶのは危険極まることだった。

「気持ちは分かりますが、ここで崖を崩さねば、作戦全体が崩壊します。わたしも全軍で崖に当たりたい。しかし、上からの援護がなければその時間を稼ぐことも出来ません」

スタンリーはマーガレットの戦いを見せた上で、部下達に現状を説いた。マーガレットは善戦しているが、次第に数で押し切られつつある。崖を崩して退路を絶つには、時間も兵力も不足していた。

「時間がありません。すぐにでも反対側の崖へ向かうのです」

スタンリーは光る汗を拭いて部下に言った。中隊長達は敬礼すると無言で崖を下っていった。一方、崖下のマーガレット本隊はマルガ

レーテ率いるワイバニア第九軍団相手に劣勢に転じつつあった。マルガレーテ直率の軍団だけであるならば、マーガレットはまだ戦いようはあっただろう。マルガレーテは力でマーガレット本隊を後退させると、両翼後方に配していたヴィクター率いる第十一軍団と、リープクネヒト率いる第十二軍団を投入した。

両軍団合わせて一万の兵が左右からマーガレット率いるフォレストル第四軍団に押し寄せた。

「後退！ 後退しなさい！ 早く！」

マーガレットは自軍を後退させた。マルガレーテ率いる第九軍団との激闘で疲弊しつつある第四軍団には戦線を維持するだけの力は残っていないかった。

「これはまずい」

崖の上から、スタンリーはうめいた。このままでは攻城兵の展開が間に合わないまま、戦線を突破されてしまう。「作戦失敗」スタンリーは崖から退却を決意した。

「あれは……」

スタンリーは陣形を変える見方第四軍団の姿を見た。敵の大軍に圧されながらもその流れを受け流そうとしている。マーガレットは未だ戦いを捨てていない。

「全機動歩兵は弓兵装備のまま待機。本隊を援護します。諸君、ここが正念場ですぞ」

スタンリーは崖下の姫君を助けるべく、行動を開始した。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第三百三五話

「右翼を厚くさない。敵第十二軍団を受け流すのです」

三個軍団の攻撃を受けながら、マーガレットはまだ冷静さを保ち、指揮を続けていた。後ろにはミュセドーラス平野の広々とした大地が広がっている。突破は時間の問題だった。

「軍団長、限界です。もう持ちこたえられません」

第四軍団次席参謀、アビー・マクファードンが声を上げた。味方は満身創痍。最早満足に戦える状態ではない。退却を進言した。

「あと一撃……。あと一撃……」

マーガレットは次席参謀を半ば無視し、自分に言い聞かせるようにつぶやいた。何かを待っている。若き女参謀は前線を見据える上官を見て思った。

「敵もやりますね。わずか三〇〇〇でここまで戦うとは……。重装歩兵大隊突撃！ 眼前の敵を蹴散らしてください」

ワイバニア第十一軍団長に昇進したヴィクター・フォン・バルクホルンは重装歩兵の密集突撃を選択した。歩兵対歩兵の戦いにおいて、重装歩兵の突撃にまさるものはない。数時間前、同じフォレストル第四軍団を打ち破った歩兵突撃にヴィクターは自信があった。

第十一軍団の旗印を掲げた歩兵が傷ついたフォレストル歩兵に猛牛のように迫り来る。甲を深くかぶったマーガレットの眼が輝いた。

「今ですわ！ 陣形転換！ 全軍前進！ 敵と崖の隙間に入り込みなさい！」

マーガレットは愛剣を振り上げて部下に命じた。フォレスト王国最速を誇る第四軍団が、驚くべきスピードで敵軍と崖が作り上げた間隙に向かっていく。

「しまった！」

「やられた！」

マルガレーテとヴィクターは同時に叫んだ。マーガレット率いる第四軍団はその異名に違わぬ羽衣の様な動きでヴィクター率いるワイバニア第十一軍団の突撃をかわすと、彼らの背後に展開し、攻撃を加えたのである。

「くそ、坊やが焦るから……」

マルガレーテは悔しさに歯がみした。ヴィクターの洞察眼は十二軍団中随一だが、実践経験が少ない。マーガレットも実戦経験が乏しい点ではヴィクターと同じであったが、彼女は敗戦から戦訓を学び取ることを忘れなかった。この差が今回の戦いに現れたのである。

「第一撃を加えると同時に、全速後退！ 攻城兵中隊の展開のための時間を稼ぐのです」

マーガレットは戦場を支配し続けた。傷つきながらも堂々とした戦術機動は見事に敵の目を引きつけたのである。

「速い！」

マーガレット本隊の陰に隠れるように、スタンリーが用意した攻城兵二個中隊がせまい谷あいを横切っていく。その様子を見たマーガレットは甲の下で微笑した。

第六章 ミュゼドーラス平野大決戦！ 第三百三六話

「いまましい！ ここまでコケにされるなんてね。第九軍団、あの死に損ないどもを片付けるよ！ あたしも出る！」

後退しつつあるフォレスタル第四軍団を目の前に、マルガレーテは青筋を立てた。

「待ちなさい。これ以上動いてはだめ。わたし達の目的は平野内の戦力バランスを崩すことよ！」

フランシスカは僚友に言った。彼女は敵軍の戦術的後退が偽装でないことを見抜いていたが、同時に後退の陰にさらなる悪魔的な戦術が隠されていることを看破していた。

より損害が少ない状態で戦うにはさえぎるものいなくなった溪谷出口を目指す他はなかったのである。

「あんたの言いたいことは分かるよ、フランシスカ。けど、このままやられ放題はあたしの腹の虫が収まらないんだ！」

マルガレーテの焼けた肌が紅潮しているのが、傍らの参謀長にもよくわかった。今日、この日だけは、マルガレーテを止めねばならない。お嬢様然とした参謀長は汗ばむ手をにぎりしめた。ここで指揮官を制止しなければ、全軍の勝利はおぼつかないのだから。

「待ちなさい。マルガレーテ！」

「フランシスカ、軍団長はあたしだ。全軍、全速で前進！」

フランシスカの制止を振り切ったマルガレーテ率いる第九軍団先鋒に、黒金の流星が降り注いだ。

「ちっ！」

舌打ちするマルガレーテの頭上に、翡翠色の軍旗が翻る。それはフオレストアル軍の旗の色だった。

「スタンリー・ホワイト……」

頭上の崖をにらみつけるマルガレーテは敵將の名を呼び、齒ぎしりした。マルガレーテの前には、すでに追跡不可能な程遠ざかったマーガレット本隊の姿が見える。もう、この戦いは終わったのだ。ワイバニア軍指折りの勇將は静かに愛用のウォーハンマーを下ろした。

「マルガレーテ……」

僚友を思いやるフランシスカの後方で、低く重い音が響いた。攻城兵中隊が予備軍団後方の崖を落としたのである。はるかに狭められた侵入口には、もう大軍が入り込める余地はない。ワイバニア軍は完全に退路を塞がれる形になった。

「そう、これで完全に終わったのね。この戦いが……」

フランシスカは一言つぶやいた。

ワイバニア第九軍団長マルガレーテ・ハイネマン率いるワイバニア軍予備兵力は多大な犠牲を払いながらも侵入口の突破に成功した。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第三百三七話

ワイバニア軍全軍、ミュセドーラス平野に集結す。それをいち早く確認できたのは、ワイバニア軍の諸将でも、作戦を立案したタワリツシでも、ヒーリーでもなく、連合軍本陣で指揮をとっていた連合軍最高司令官スプリッツァーだった。

「ついにこのときが来たか……」

スプリッツァーは身震いした。三軍合わせて十六個軍団、これほどの軍勢が同じ場所にひしめき合うことは史上かつてない。タワリツシやヒーリーが前線に立った今、これを後方で目の当たりに出来たのは彼しかいなかった。そして、その空前の作戦を指揮できるのも……。

「ぐっ」

あげようとする右手をスプリッツァー鉄の意志で抑えつけた。まだまだ足りない。ワイバニア軍を地獄の釜にたたき落とすまでは、時間も準備も足りなかった。

「伝令を出せ。敵軍が我が軍がフォレストル軍のどちらかに攻撃を開始したら、作戦の第一段階に移る……とな」

スプリッツァーは一〇〇名を超える伝令を出して、各軍団に作戦の開始を伝えた。史上最大の作戦その第一幕が開けようとしていた。

ワイバニア軍とフォレストル、メルキド軍が激闘を繰り広げていた頃、戦場から遠く離れたワイバニア帝都ベリリヒンゲンにて、ごく

小さな戦いがあった。

ワイバニアの医家、ハルトムート・フィッシャーの邸宅に忍び寄る黒い影。往來を歩く人々にも、誰にも気づかれることなく、彼は侵入を果たしていた。

先日の愚を繰り返してはならない。彼は一度獲物をを取り逃がしている。今度こそ、確実に目標を殺す。彼は短剣を手にすると、屋敷の中を疾走した。侵入してすぐ、彼はある違和感を抱いた。主の書斎、客間、ベッドルーム。どこにも目標はいなかった。目標だけではない、屋敷には誰一人として存在しないのだ。使用人も、主も。ワイバニア屈指の医家にはありえないことだった。

「知りたいか？」

彼が疑問を抱いたのと、時を合わせるかのように、その答えを知る者が彼の前に現れた。

「ハルトムート・フィッシャー……」

ハルトムートは笑みを浮かべた。それが何を意味するか影には分かっていなかった。医師という職業からはおよそかけ離れた酷薄な笑みに、彼は挑発以外の何も感じなかった。

まだ殺しはしない。目標の居場所を吐かせてから切り刻んでやる。フリードリヒ・フォン・ヘンデルは地を蹴ると、ハルトムートへ距離を詰めた。

その時である。ヘンデルの横にあった壁が崩れ、白髪の大男が飛び出した。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第三百三八話

「！」

「おおおらああっ！」

大男はヘンデルの頭をつかみ、床に叩き付けた。回避することも受け身を取ることでもできなかった暗殺者は泡を吹き、無様に床に沈んだ。小さくうめき声を上げたヘンデルをボウガンで武装した兵士が取り囲む。

「手かせと足かせをかけておけ。逃げられないようにな」

ヘンデルを倒した大男が部下に指示を飛ばした。左元帥書記室長クリストフ・フォン・シラーである。内務大臣を暗殺し、内務大臣私邸を襲撃した暗殺者が内務大臣夫人マリア・フォン・クライネヴァルトを再び襲うのは容易に予想できた。クリストフはフィツシャー邸を餌に暗殺者をおびき寄せたのである。

「年の割に無茶をするものだな。治療するこっちの身にもなって欲しいものだ」

ボウガンを構える兵士をかき分け、ハルトムートがヘンデルのもとにしゃがみこんだ。

「まだまだ若い奴らには負けん。それに、殺しちゃおらん。手加減したからな」

「ふん。わたしの屋敷に大穴を開けて……。あとで修理代を請求さ

せてもらおう」

「おう。名前は左元帥にしてくれよ。俺は、あいつの命令を聞いただけだからな」

からからと笑うクリストフは、すぐに表情を改めた。倒したはずのヘンデルが自由を奪われたにもかかわらず、ゆらりと立ち上がったからである。

「まだ動けるのか……」

警戒していた兵士達がボウガンを構え直した。放射線を描くように矢の先はヘンデルに集中している。フードをおろした美麗な暗殺者の口からは一筋の血が流れ、うつろな眼差しで自分を殺そうとする人の群れを見回していた。

「観念しろ。もう逃げられんぞ」

クリストフの声を聞いた暗殺者は目の輝きを取り戻すと、殺気のもった眼差しを周囲に叩き付けた。

「フリードリヒ・フォン・ヘンデルだな。内務大臣殺害容疑で我々と共に木てもらおう。ワイバニア刑法第六五条により貴様を拘束する」

ワイバニア刑法第六五条、それは陰謀による大臣間の争いとそれによる国政の停滞を防ぐために設けられたものだった。皇帝すら特赦を与えることのできぬこの法は、クリストフにとって最大の切り札だった。暗殺者には絶体絶命の危機。しかし、ヘンデルは動じることなく、冷笑を浮かべている。クリストフを含め、彼の周囲にいた

ものは一生忘れることが出来ないであろう。見る者を戦慄させるには十分に恐ろしく、狂気をはらんだ笑みだった。

「大人しく、わたしが来るとお思いか？」

「お前にはいろいろ聞かせてもらおう」

「断る。わたしは陛下の影、影は闇に生き……」

「奴を止める！ 死ぬ気だ」

「闇に死す……」

最後の笑みを浮かべたヘンデルはそれだけ言うと、白目をむき、床に崩れ落ちた。

ハルトムートはヘンデルのもとにかけよったが、すぐに首を横に振った。

「死んだのか……」

「ああ……」

クリストフの問いに、ハルトムートは短く答えた。ヘンデルの死によって、マリアの危機は去った。だが、戦地から遠く離れた帝都では、未だ帝国内部をめぐる目に見えぬ争いが続いていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第三百三九話

ワイバニア帝国帝都ベリリヒンゲン。その中心にある軍司令部ではワイバニア軍左元帥ハンス・フォン・クライネヴァルトが軍務に追われていた。クリストフより、マリアの無事と暗殺者の死が伝えられたのは、その最中だった。親友からの密書を受け取ったハンスは静かに目を閉じると、何も言わず密書を焼き捨てた。

「南方軍の展開は進んでいるか」

ハンスは左元帥補佐官アントン・メーリングに尋ねた。

「はい。しかし、勅令無しに南方軍全軍を動かしてよろしいのでしょうか？」

「かまわぬ。地方軍は左元帥直轄軍だ。それに、今からでは間に合わぬかもしれん」

ハンスはジギスムントに無断で南方軍一個軍団をメルキド公国に派遣していた。もともと地方軍は地方貴族の反乱鎮圧と災害救助のために編成された左元帥直轄の部隊である。出撃に関して皇帝の勅許を得る必要はなかった。

前線からの情報では戦いはワイバニア軍優位に展開しているが、戦力は拮抗しており、地の利のある連合軍の方が長期戦となれば有利であった。後方から戦局を冷静に分析できる彼にはいい状況とは思えなかった。

「我が軍は勝っております。……閣下は、我が軍が負けるとお考え

なのですか？」

「軍人たる者、負ける場合のことも考えねばならん。連合軍は総力を結集している。兵法にも『互いの兵力が同数なら逃げよ』とある。絶対的な数的優位があればこそ、古来よりワイバニア軍は上将であり続けることが出来たのだ」

立ち上がったハンスは窓の外に広がる庭園と青空に目を向けた。

事態はハンスの予想の最悪をいつている。その一つがフォレストル王国全軍による参戦である。フォレストル王国はその国力から、出せる軍団は地理的に近い第四軍団のみと考えられていた。しかし、フォレストル王国は現状保有するほぼ全ての戦力でワイバニア軍との戦闘に突入したのである。

戦争は数と国力がものをいう。先代皇帝アレクサンデルの傍らで政軍両面を補佐して来た忠実な元帥は、そのことを誰よりも理解していた。

「万が一我が軍が敗北した場合、敵は追撃戦を挑んでくるだろう。皇帝陛下をお救いするために、少しでも兵力は必要なのだ」

言葉を紡ぎながらも、ハンスの心中は複雑だった。皇帝ジギスムントのために彼は愛息マクシミリアンを失っている。明敏で、理想に燃え、誰よりも平和と国を愛した息子。皇帝はそのマクシミリアンを殺した。ハンスは息子の仇を守るために兵を出しているのだ。

臣下としての忠誠心と父性愛の間で、ハンスは言い表せられない何かを感じていた。

「閣下？」

「何でもない。決済の書類が山積みだな。くだらぬ無駄話は終わりにして、職務に取りかからねばな」

ハンスはメーリングにそう言うと、作業を再開した。

（わたしも、愚かなものだな……）

実直な左元帥は心の中で自嘲した。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第四百十話

フォレストル第四軍団を破ったマルガレーテ・ハイネマン率いるワイバニア郡予備兵力三個軍団はミュセドーラス平野に突入すると、左翼に展開しているワイバニア第三、第七軍団との合流を目指していた。

ワイバニア軍第九軍団を中核とした増援部隊は数こそ一五〇〇〇と出撃時から大きく数を減らしはしたが、それでも対峙するフォレストル軍よりも数は多かった。

戦略的に、ワイバニア軍は初期の目標を達成しつつあった。連合軍右翼はワイバニア軍第二、第六、第八軍団によって半包囲され、連合軍中央部もハイネらワイバニア第一軍団によって身動きが取れずにいる。

ワイバニア軍は龍翼の陣の分断に成功し、各個撃破への足がかりをつかむ一方で、連合軍は絶体絶命の危機に陥ったのである。

ローサ・ロツサが、ディサリータが、ラシアン・フェイルードが勇戦しようと、老練極まるワイバニアさん軍団長が作り上げた鶴翼陣形は身じろぎもしない。

ウィリアム率いるフォレストル第三軍団の武勇をもってしても、自軍の三倍近い兵力差はくつがえしようもない。

メルキド軍もフォレストル軍も、左右で、ただただ大軍にすりつぶされるのを待つばかりになっていた。

戦場の後方、ミュセドーラス平野入り口からやや離れた斜面で、戦況をうかがう老武人の姿があった。フォレスタル軍第一軍団長フランス・ピットである。齢七十を超えるフォレスタル軍随一の将軍は長いあごひげをひとなですると、持っていた双眼鏡を傍らの老参謀に手渡した。

「ふむ、ワイバニア軍のほぼ全軍が出て来てくれたが、どうしたもののかの。これでは退くこともままなるまい」

老将は隣の参謀を見やった。彼は右手に双眼鏡を持ち、左手の指先は自分の長い三つ編みをくるくるともてあそんでいる。器用なことをするとフランスは笑ったが、彼はその動きをやめることはなかった。

「さすがにワイバニアの上位軍団ですなあ。軍団同士の連携がとれている。軍団の連絡部を狙おうかと考えていたのですが、なかなかどうして」

老参謀はそう言うと、双眼鏡をおろした。フォレスタル軍第一軍団参謀長キングストン・ウエルズリーである。

「それで、どうする？ キングストン」

フランスはウエルズリーに尋ねたが、答えは決まっていた。数十年来にわたってコンビを組んで来たウエルズリーにはフランスの意図が手に取るようにわかる。単なる確認のために問うているにすぎない。ウエルズリーはもてあそんでいた三つ編みをピンと弾くと、相棒に言った。

「敵が連絡部の防御を固めるのであれば、自然、その付近の防御は

弱くなりましょう。密集隊形で敵第二軍団の側背を急襲し、これをもって鶴翼陣形を分断します」

ウエルズリーの作戦案にうなづいたフランススは背後を顧みた。ミユセドールラス平野斜面、その森の中に無数の星が瞬いている。フォレストル第一軍団の精兵達である。その眼光はするどく土気は高い。まだまだ、十二分に戦える。フランススは再び戦場に身体を向けると、覚悟を決めた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第四百一話

その頃、メルキド軍とワイバニア軍との戦いは終局を迎えようとしていた。ワイバニア軍は徐々に包囲をせばめつつある。メルキド軍の軍団長達も密集隊形をとり、防御を固めていたが、ワイバニア軍の攻勢を前に、一人、また一人と倒れていった。

「どつやら、与えられた仕事はこなせたみたいね」

白銀の甲冑に身を包んだ女将がつぶやいた。ワイバニア軍第二軍団長マレーネ・フォン・アウブスブルグである。彼女の目の前には、整然と槍を構え前進する軍団が見える。彼女の統率のもと、よく組織された白銀の軍団は、前方のラシアン・フェイルード率いるメルキド軍第六軍団に出血を強いていた。

「え、あの、それはどういうことでしょう？」

傍らに立つ副官のエアハルト・フォン・シュライエルマツハが尋ねた。士官学校を卒業したばかりの新人士官では、まだまだ実戦経験が足りない。"ワイバニアの聖母"の異名を持つ美貌の軍団長はその二つ名に違わぬ微笑をたたえると、エアハルトに教えた。

「わたし達は敵軍を分断し、その右翼を包囲下に置いているわ。予備兵力が侵入できたということは、左翼のフォレストル軍に対しても絶対的な数的優位が確保できる。両翼同時に各個撃破できるの。これは、右元帥閣下の両翼分断、時間差による各個撃破という戦略目的を達成したことになるのよ」

副官は目を輝かせながらうなづいた。彼にとっては戦術の理解より

も、年長の上官に対するあこがれが勝っていた。マレーネもまた、彼の気持ちには気づいているだろう、しかし彼女はそれを表情に出さぬまま、戦闘指揮を続けた。

「もつとも、敵がこのままの状態で行ってくればの話だけれど……」

エアハルトにも聞こえぬ声で、マレーネは独語した。まだ何か連合軍は策を隠しているのではないか。シモーヌの戦略すらも、自軍をおびき寄せるための罠ではないか。明敏な軍団長は用心せずにはいられなかった。

ミュセドーラス平野南側斜面、連合軍総司令部が設置された大型装甲馬車、その檣の上に立っていたメルキド公国総帥スプリッツァーは右手を高く掲げた。彼の背後では伝令兵が矢をつがえている。スプリッツァーが右手を大きく振り下ろすと、伝令は天に向け、矢を放った。耳を痛める不快な高音が戦場に響く。その意味を解した伝令は命令を伝えるべく、馬を走らせた。

「全軍後退、斜面へ退避せよ」

百を超える伝令騎兵が、四方へと散っていった。

第六章 ミュセドールス平野大決戦！ 第四百二話

最も至近でスプリッツァーの命令を受けたのは、ヒーリー率いるフォレストル第五軍団だった。ハイン・フォン・クライネヴァルト率いるワイバニア最強の第一軍団と対峙する彼には、あまりにも無茶な命令だった。

「総司令部も時期と相手を考えてほしいよ。まったく」

ヒーリーは命令に悪態をつき、翡翠色の紙をくしゃくしゃにかきまわしたが、これは彼の八つ当たりすぎなかった。彼もスプリッツァーと同じ立場におかれていたら、全く同じ命令を同じ時期に出していたことは間違いない。それはヒーリー自身よく理解していた。

しかし、理性的な判断と現状が、必ずしも一致する訳ではない。今回のことは、まさにそれであった。

現在、連合軍は絶体絶命の危機に陥っているが、ワイバニアのほぼ全軍がミュセドールス平野に集結しており、連合軍が斜面への後退に成功してしまえば、この戦いは勝ちなのである。加えて、日も高く、夜も近い。今、作戦を発動しなければ、連合軍は勝機を自らの手から永久に逃してしまふのである。

「軍団長。後退しなければ、我々も危険です。ご決断を」

参謀長のメアリが一步前に出て、ヒーリーに言った。

「わかっているよ。全軍、斜面まで後退だ」

ヒーリーの命令一下、フォレストル第五軍団はこの日最後になるであろう、大移動を開始した。

命令を受け取ったのは、ヒーリーだけではない。フォレストル軍が後退するのと同じくして、ワイバニアの包囲にあえぐメルキド軍三軍団長にも、後退命令が届けられた。

もし、千里を見通す能力を持つ者がいたとしたら、このときの三軍団長の表情をみるべきであったろう。メルキド軍が誇る戦巧者たちは、一様に口を真一文字に結び、重苦しい顔を浮かべていた。一同の中で最年少のデイサリータですら、同じ顔をしていた。三人の軍団長と一人の軍師は、その命令を実行することの困難さを誰よりも理解していた。

彼らと対するのは、ワイバニア軍の中でも熟達した用兵の腕を持つ軍団長であり、今もその手腕によって身動きが取れないでいる。ひとたび後ろを見せれば、メルキド軍は総崩れになってしまう。しかし、後退する時期は今しかなかったのである。

旗色に戸惑いの色が見せ始めた頃、フランシス・ピットらフォレストル第一軍団はミュセドーラス平野北側斜面に身を潜めていた。四十年もの永きの間、生ける伝説の名をほしいままにしてきた老境の武人は、傍らの相棒に尋ねた。

「そろそろか?」

相棒は無言でうなづいたが、その目には確かな意志の光が宿っている。フランシスは指揮杖を手に持つと、前に振り上げた。

「お前たちの命、わしが貰い受けた! フォレストル第一軍団、全

「軍突撃せよ！」

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第四百三話

軍団長フランス・ピットの号令一下、斜面に兵士たちのときの声が響いた。マレーネも、マルガレーテも、フランスらの近くにいた者なら、誰もが振り向いた。特大の大將旗をなびかせて、五〇〇〇の兵が突如平野に現れたのである。

このフランスの登場に驚愕したのは、マレーネとリピッシュである。彼らは後退を始めつつあるメルキド軍第六軍団と第四軍団を攻撃するために陣形を転換している最中であつたのだから。このこしやかな奇兵に対し、すみやかに陣形を再編し、防御を固めたのは二人の非凡さの証明だつた。並の将ならば、その守りの堅さに、時間を浪費したであろう。しかし、彼らが相手にしているのは、アルマダで最も傑出した軍団長と参謀長であつた。

フランスは、二人が技巧を凝らし、守りを固めた連結部には目もくれず、そのさらに根元、わずかに兵力が疎になつた部分に自軍の鋭鋒を突き刺した。騎兵の槍と機動歩兵の戦闘馬車が、ワイバニア歩兵をなぎ倒していく。

このままでもフランスは難なくマレーネの軍団を突破できたが、フランスとウエルズリーは、ここで老獪さを発揮した。突出した部隊を下げると、第二陣をさらに三つの戦闘集団に分け、救援に現れたワイバニア兵に痛撃を加えると、さらに一つの陣形に戻し、さらに薄くなつた防御を堂々と突破したのである。

ほぼなす術もなく、自軍を崩壊させられたマレーネはわずかに数瞬ではあつたが、自失させられた。エアハルトの呼びかけで現実に引き戻されたマレーネが見たのは、次の獲物を求めて移動するフォレ

スタル軍と高速で戦場から離脱していくメルキド軍第六軍団の姿だった。

「司令部総員、フォレストアル第一軍団に敬礼」

ラシアン・フェイルードは部下に敬礼を命じた。自分たちを逃がす隙を作ってくれたフォレストアル第一軍団がどうなるか、彼らは知っている。知っているからこそ、謝意と敬意を送らずにはいられなかった。

一方、フォレストアル軍第一軍団先鋒は、デイサリータ率いるメルキド軍第四軍団を攻撃するワイバニア第六軍団をとらえていた。

「よし、横槍を受けようぞ。突出した重装歩兵大隊を側面から攻撃せよ」

整然と隊伍を組んだワイバニア重装歩兵に騎兵大隊がなだれこんだ。その突進力に、陣形はなすすべもなく崩されていく。

「側面から攻撃されたのなら、こちらも側面から攻撃すればよい。何を慌てることがある」

ワイバニア第六軍団長オリバー・リピッシュは冷静に言った。すぐに予備兵力として温存されていた歩兵大隊が、重装歩兵の救援に向かったが、フランスとウェルズリーのコンビは冷静無比のリピッシュの先を読んでいた。フォレストアル軍は歩兵の進路に戦闘馬車を横付けさせると、鋼鉄のシャワーを浴びせかけたのである。

全身にボウガンの鉄矢を受けたワイバニア歩兵は、ミュセドーラス平野の大地と永遠の口づけをかわした。ワイバニアが誇る軍団長が

また一人、フランスの前に敗れ去ったのである。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第四百四話

「全軍、速やかに後退せよ」

よく響く声で言い放ったのは、メルキド軍第五軍団軍師アリー・ゼファーだった。彼らはワイバニア軍と戦いながらも、味方の退却準備を行い、フランスの攻撃に呼応して一氣に行動を起こした。巨兵大隊を先頭に、歩兵、弓兵が続いている。一糸乱れぬ整然とした退却。またたく間にメルキド軍第四軍団はリピッシュ率いるワイバニア第六軍団の攻撃範囲から離れていった。

「さあ、次の獲物にかかろうぞ」

フランスは部下に命じようとしたとき、わずかに笑みがこぼれた。ウエルズリーは相棒の表情に首を傾げたが、フランスの目線の前にあるものを見たとき、彼の笑いの意図を了解した。

「なるほど。これは早くどかねばなりませんな」

ウエルズリーの言葉に、フランスは小さくうなづいた。全軍移動の命令を出したのは、この直後である。ワイバニア第六軍団の側面を攻撃したフォレストル第一軍団は次の目標であるワイバニア第八軍団に向けて移動を開始した。

手痛い損害を受け、陣形の再編にとりかかろうとした矢先、ワイバニア第六軍団に不幸が訪れた。メルキド騎兵一個大隊が大きく陣形を乱した最前列のワイバニア歩兵大隊に襲いかかったのである。

メルキド騎兵の蹄がワイバニア兵の甲ごと頭蓋を踏みつぶす。ワイ

バニア歩兵も、槍を剣に持ち替え反撃する。剣戟の音が前線各所で鳴り響いたが、すぐに止み、メルキド騎兵もまた本隊を追って疾風のように走り去ってしまった。

「やられっぱなしというのも、いささか面白うございませぬ。お嬢さま」

メルキド騎兵の活躍を戦象の窓から眺めていたアリーは彼の袖をつかむ主人に言った。

アルマダで最も若い軍団長は、口をぎゅっと真一文字に結び、アリーを見上げている。アリーの戦術をほめている訳ではない。彼の判断を了承したデイサリータだったが、このときの彼女の意識は、忠実な軍師にも、退却する味方にも向けられていなかった。

幼少時代より、彼女の傳役として共に時間を過ごしてきたアリーはデイサリータの心情を十二分に読み取っていた。

「ピット卿のことですね」

デイサリータはだまっとうなづいた。アリーは主君に目線を合わせるように膝をついた。

「ピット卿はすでに覚悟しておいでです。我々にできるのはいち早く斜面に避難し、ピット卿に感謝することです」

軍師の優しい声に、デイサリータは再びうなづいた。この戦いより前に、フランシスとデイサリータに面識はない。しかし、この数ヶ月間に幾たびもの別れを経験した少女は、隣国の老将を惜しんだ。

この後、デイサリータはさらにつらい別れを経験することになるだろう。成人せぬ彼女には酷すぎるかもしれない。戦いに身を置くことのなんと無慈悲なことか。メルキドの若き軍師は否応なく戦場に立たされた少女の運命を悲しまずにはいられなかった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第四百五話

メルキド軍を攻めていたワイバニア三軍団長の中で、最も苦境に立たされていたのは、ワイバニア軍第八軍団長ゲオルグ・ヒツパーだった。

フランススの急襲に呼応してメルキド軍大將軍タワリツシとメルキド軍第五軍団長ローサ・ロツサ、二人の軍団長格がワイバニア第八軍団に前後から攻勢をかけたのである。ヒツパーは前方のローサ・ロツサ、側面のフランスス、後方のタワリツシを同時に相手しなければならなかった。ヒツパーも三国に戦上手として知られた名将である。しかし、タワリツシ、フランスス、ローサ・ロツサの三人は彼に勝るとも劣らぬほどの勇將、知將である。三人を相手に戦うには彼では荷が重すぎた。

「防御を固めよ」

ヒツパーは部下に命じたが、ヒツパーには彼の思い通りに動いてくれる兵力は持っていなかった。ワイバニア第八軍団は新兵の実地教練のための部隊である。いくらかの実戦を経験しているとはいえ、動きは他の軍団と比べても精彩を欠いていた。

「敵軍は隙だらけだ。前方の歩兵を蹴散らして、本隊が後退する時間稼ぐ」

前線の混乱を見たローサ・ロツサは即座に騎兵の正面突撃を決断した。彼女は後退する第五軍団本隊を副將に預けると、自分は騎兵一個大隊を直卒し、最前線に立ったのである。槍を携えたメルキド騎兵が彼女の命令のもと、隊列を整えてワイバニア軍に押し寄せてい

く。ローサ・ロツサも剣を抜き、愛馬を駆って敵に向かっていった。メルキド人特有の浅黒い肌に、動きやすいよう短く切られた髪。すらりとのびた長身。凜々しく、力強い彼女の勇姿は、戦場に映えた。「ローサ・ロツサの征く所に敵はなし」とメルキドの歌物語にも記されている。戦場を疾駆する戦女神の姿にメルキド軍の士気はますますあがり、ワイバニア歩兵を次々と血祭りにあげていった。

「敵の騎兵と正面から戦うのは得策ではない。こちらも騎兵を出して、敵の側面をつく」

ヒッパらしい、堅実な命令だった。単純にローサ・ロツサだけと戦うのならば確かな指示だった。しかし、命令変更によって生じたわずかな隙を見逃さない将軍がいた。

「ローサ・ロツサが美人なのはわかるが、俺にも振り向いてもらわないと、寂しいものだ。それでも、美丈夫で通っているのだからな」メルキド公国大將軍タワリツシは冗談めかして言った。すぐ隣にいた大隊長は心の中で肩をすくめた。どうやら、大將軍は戦ほど冗談は上手ではないらしい。

「ワイバニア騎兵と歩兵の移動が交差するポイント狙って集中攻撃する。一斉に矢を射かけよ」

タワリツシの命令が速やかに伝達され、ワイバニア騎兵と歩兵の頭上に矢が降り注いだ。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第四百六話

「後方の防御を固めよ」

タワリツシの来襲を知ったヒツパーは防御を固めた。しかし、このときのヒツパーの指揮は醜態と言ってもよかった。少なくとも、ヒツパー自身はそう思っていた。ワイバニアでもメルキドでもヒツパーの名は堅実な用兵を行う良将として評価が高い。だが、ローサ・ロツサとタワリツシの攻撃を前に指揮が後手に回っている。良将であるからこそ、無様な用兵を行った自分が齒がゆかったのである。

ヒツパーの苦闘を見たタワリツシは腰の大剣に手をかけると、さやから引き抜いた。

「敵の陣形は乱れているぞ。騎兵隊は俺に続け！」

タワリツシは騎兵隊の先頭に立つと、愛馬を全速力で走らせた。メルキド騎兵五〇〇もそれに続いている。

「敵はわずかだ。手柄をあげる機会だぞ」

ワイバニア軍の中隊長は声を上げた。熟練兵にしても、新兵にしても、これほど魅力的な言葉と局面はなかなか存在しない。敵軍の最高司令官の一人が、寡兵で突っ込んでくるのだから。槍の柄に自然と力が入る。絶好のえさを大口を開けて待ち構えたワイバニア軍は、そのえさがとげに守られていることを見落としていた。

最前線の歩兵に数百の矢が突き当たった。一瞬、ワイバニア軍は何が起ったのかわからなかったであろう。

砂塵の中で陣形を変えたメルキド騎兵が馬上から矢を放ったのである。第一射、第二射……。前方から迫り来る鉄の暴風に、ワイバニア歩兵は槍を捨てて、敵に背を向けた。

「醜態を見せるな！ 軍団長閣下も、敵も見ているのだぞ！」

大隊長、中隊長、古参兵は口々に新兵を怒鳴りつけたが、希望と期待を裏切られた新兵の狂躁は制御しようがなかった。

「突撃！」

崩壊しかけたワイバニア軍の戦線に、武器を弓から剣に持ち替えたメルキド騎兵が殺到した。戦闘で突入したタワリツシは愛剣を振り、わずかな間で三人の敵歩兵を血祭りに上げた。

「陣形を崩すな。崩せば敵と同じ目に遭うぞ」

タワリツシは怒鳴った。寡兵であるにもかかわらず、自軍が優勢なのは、何も自分たちが強い訳ではない。敵が混乱してくれているからだ。敵も有能な軍団長であることには疑いない。自分が指揮しているにしても、にわかづくりの部隊では正規軍を前にひとたまりもないということは彼自身、もっともよく理解していた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第四百七話

およそ、どの軍においても、軍団の総指揮官たる者は、戦場で先頭に立って指揮など行わない。全軍を統率する者が戦死してしまつては、軍団そのものが崩壊してしまつたためである。

ローサ・ロツサもタワリツシもそのことはよく理解している。しかし、二人はあえて味方の先頭に立って戦つた。ひとつには苦戦の最中にあるメルキド軍の兵士たちを鼓舞すること。そして、もう一つには、敵に軍団長、大將軍が自ら指揮を執つていることを敵に印象づけることだつた。

軍団長指揮下にある大隊長クラスが相手なら、軍団長クラスは二、三人相手取つても優位に戦える。大隊長クラスでも、軍団長に迫る能力を持っている者もいるが、それでも一万人の兵力を指揮統率する人間は、それ相応の能力を有しているのである。

戦場に軍団長が二人も三人もいる。それだけで、攻められる側は判断に迫られるのである。二正面作戦を避け、各個撃破するか。どちらかの部隊に対する防御を固めるべきか。陣形は？ 様々な思考がめまぐるしくヒツパーの脳内で回転し、最善の戦術が導きだされている。

しかし、メルキドの上将二人は巧妙だつた。示し合わせたかのように、同時攻撃したかと思えば、片方は引き、片方は攻めると言つた具合でワイバニア第八軍団をきりきり舞いさせた。ヒツパーが堅実な手腕を持っていたとしても、部下の大半はそうではなかつた。未熟な伝令兵が未熟な伝達を行い、指揮官を困らせる。指揮官の当惑は陣形の乱れにつながる。無様な陣形のほころびを見せたワイバニ

ア軍にメルキド軍が襲いかかる。崩壊して行く自分の軍団を、ヒツパーは苦々しく見て言った。

「全軍、密集隊形をとれ」

ヒツパーの声はやや震えていた。ヒツパーが指揮する兵力は八〇〇〇あまり。攻撃するメルキド軍はわずかに一五〇〇。自軍の四分の一にも満たぬ数の敵に、ワイバニアきつての戦巧者が翻弄されているのだ。

タワリツシ、ローサ・ロツサの実力はどちらもワイバニアの上位軍団長に匹敵する。敗北しても、彼を責める者はいない。だが、現在の状況は彼の武人としての矜持を大きく傷つけた。

前にローサ・ロツサ、背後にタワリツシ両将の攻撃を受けてのたち回るワイバニア軍を馬車上から眺める二人がいた。フォレストル軍第一軍団長フランシス・ピットと参謀長キングストン・ウエルズリーである。

「そろそろかの」

フランシスの問いに、ウエルズリーは無言のうなずきで返した。

アルマダ三国で最長の軍歴を持つ軍団長は指揮杖を振り上げた。

「全軍に通達！ 目標は前方の敵歩兵大隊。一戦してメルキド軍に退却の時間を与えてやれ！ ……突撃！」

フランシスの命を受けたフォレストルのものふたちは剣を抜き、雄叫びをあげた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第四百八話

「側面よりフォレストル軍」

伝令兵からの報告を受けたヒツパーは背筋に冷たいものが走るのを感じていた。

ワイバニア軍第八軍団はローサ・ロツサとタワリツシによってもはや崩壊寸前だった。ここに来て、五個大隊が押し寄せては軍団は壊滅するだろう。まして、敵将はアルマダ最高の軍団長の一人であるヒツパーの予感限りなく現実に近かった。

「重装歩兵大隊を出し、側面の守りを固めよ」

堅実で有能なワイバニアの指揮官は命令を発した。最大限の努力はしたが、自身の声が震えるのを、彼は自分の中で感じた。

フォレストル第一軍団がワイバニア第八軍団に突入したのは、ヒツパーが声を発した直後だった。魚鱗の陣形で突入したフォレストル軍が肉食魚のごとく獰猛にワイバニア軍の脇腹をえぐっていく。ワイバニア軍も大隊長の各個の判断でフォレストル軍に対する防御を行っていたが、フランシスらの武勇の前ではきわめて脆弱だった。突入後わずかの間に、第一陣が突破された。

「よし、ひけ！」

「退却。全速で斜面に向かえ」

フランシスの動きをみたメルキド軍の二人の指揮官は馬首をひるが

えして、部下に命じた。最後まで戦場に残り続けていたメルキド騎兵と歩兵が後方の丘へとかえっていく。

「深追いはするな！ 全力でフォレスタル軍にあたれ」

ヒッパーははやる部下を押さえようとしたが、その必要はなかった。味方を一方的に殺戮した強さを持つ部隊を好んで追撃しようとは誰も考えなかった。ワイバニア兵はつかの間の生を得られたことを喜んでいた。

このことが、ワイバニア第八軍団の崩壊を決定づけた。フォレスタル軍は錐のような鋭さで最早陣形とは言えなくなったワイバニア軍の隊列に切り込み、穴をあけた。

「あの二人に攻められては仕方ないでしょうが、もろかったですな」
参謀長の言葉にフランスは無言で応えた。彼の目には、突破しつつある第八軍団は映っていない。さらに次の標的を見据えていた。

「次はワイバニア第一軍団を討つ。フォレスタル第一軍団全軍、魚鱗の陣で敵側面を攻撃せよ」

声低くフランスは命令を下した。フランスと彼の軍団の眼前には、ミュセドーラス平野の荒れた大地が広がっていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第四百九話

フランススが第八軍団と戦っている頃、ハイネ・フォン・クライネヴァルト率いるワイバニア第一軍団は、ヒーリー・エル・フォレストル率いるフォレストル第五軍団と対峙していた。

見張り兵より第八軍団苦戦の報告を受け取ったハイネはしばらくの間沈黙を守っていた。

「こんどは、我々が不利になりました。いつまでもここにとどまっていれば、側面攻撃の餌食にされてしまいます」

参謀長エルンスト・サヴァリツシユの言葉にハイネは沈黙で返した。フォレストル軍の意図が側面攻撃にあることはわかつている。問題はどうかである。ワイバニア第八軍団を蹴散らしているフォレストル軍を率いる将はハイネがこれまでに戦ったどの男よりも強い。数の上で優勢に立っていたが、死兵と化したフォレストル第一軍団が相手では、ワイバニア最強のワイバニア軍第一軍団であっても、少々部が悪かった。

「フォレストル第一軍団を攻撃しましょう。軍団長」

「何故だ？」

「フォレストル第一軍団は我々よりも数は少なく、既に我が軍三個軍団と戦っているため、兵も疲弊しているでしょう。強力な戦力であるフォレストル第一軍団を撃破すれば、敵の戦意をくじくこともなります」

「貴公らしい考えだ。エルンスト」

エルンストは戸惑っていた。ハイネのことは軍団長になる前から知っている。果断即決のハイネが長考に入るのは今日で二度目である。このようなことはかつてあり得なかった。ハイネがエルンストの言葉に耳を貸さなかったことも何かがおかしい。ワイバニア軍の中でも指折りの頭脳を持つ参謀は、冷や汗をたらしていた。

「ワイバニア第一軍団、攻撃待機」

「攻撃、待機……？」

エルンストは耳を疑った。敵が迫りつつある。そして、眼前にも敵がにらみを利かせている。どちらかに対応して動かなければ、自分たちが全滅する。反論のまなざしを彼は自分の上官に向けた。

「貴公の言わんとすることはわかる」

ハイネはエルンストを見ずに言った。

「敵第一軍団の意図は二つある。一つはメルキド軍の救援。もう一つは我々の注意を自分たちに惹き付けることだ。ここで側面の敵と戦えば、相手の思うつぼだ」

「それでは、軍団長は……」

「そうだ。我々ワイバニア第一軍団は正面のフォレストル第五軍団を撃破する」

ハイネの眼に意志の光が輝いている。ワイバニア第一軍団とフォレ

スタル第五軍団の二度目の戦いが始まるうとしていた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第一百五十話

ワイバニア第八軍団を撃破したフォレスタル第一軍団が、全速力でハイネらワイバニア第一軍団に向かう様子を、ヒーリーは戦闘馬車のやぐらから見つめていた。

「ピット爺……」

手すりを握る手が汗ばんでいる。ヒーリーは眼を背けることが出来なかった。師の最後の戦いを、そして老将の悲しくも強い覚悟を。メルキド、フォレスタル連合軍の勝利の為に、フランシスはその命を差し出していた。

「ヒーリー……。わたしはもう……」

ヒーリーの傍らに控えていた、参謀長メアリ・ピットが唇を手で覆った。遠くない未来、彼女は確実に祖父を失うことになる。どんなに覚悟していても、体はそれを許してくれなかった。

この場にいることすら辛いだろう。だが、ヒーリーはその場を去ることを許さなかった。

「参謀長、酷だとは思いますが、君だけは、この戦いを見届けなければならぬ。君は、ピット爺や、いや、フランシス卿の孫娘だ。彼の最期を看取る義務がある」

「はい」

メアリから大粒の涙がこぼれた。ヒーリーはあえて優しい言葉をか

けようとしなかった。どんなに言葉を重ねても、それが彼女の言葉を癒すものになり得ないことを、彼は一番分かっていたからである。

（冷たい男だな。ヒーリー・エル・フォレストル）

ヒーリーは心の中で自嘲した。だが、部下と師を気遣ってはかりでいられない。目の前には、ハイネ・フォン・クライネヴァルトという強敵が控えているのだ。そして、作戦の実行まであまり時間が無い。ヒーリーら、フォレストル第五軍団は一刻も早く斜面に退避しなければならなかった。

「第五軍団、後退準備」

ヒーリーは、伝令兵を呼び寄せると、短く言った。

「しかし、それでは敵に追撃されてしまいます！」

参謀の一人が顔を青ざめさせた。今、敵に後ろを見せては間違いなく、追い討ちをかけられる。万全の備えをしていても、第五軍団は大きな損害を受けるだろう。それはヒーリーもよく承知していた。

「分かっているさ。だが、斜面に退避しなければ勝利はない。俺たちも全滅してしまうだろう。第一軍団がワイバニア第一軍団に攻撃を仕掛けたときが、唯一のチャンスだ」

側面の友軍と前方の敵をにらみながら、ヒーリーは言った。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第一百五十一話

「次は敵第一軍団じゃ。再びワイバニア最強軍団と戦えるとはの。腕が鳴るわい」

疾走する戦闘馬車のやぐらの上でフォレストアル第一軍団長フランシス・ピットは不敵に微笑んだ。

「しかし、我々の兵力は三〇〇〇を切っております。どこまで戦えるか……」

「珍しいな、キングストーン。弱音を吐くとはお前らしくないぞ」

「ははは、わたしも人間ですから。最後に、今まで言ったこともないことも言いたくなります」

「それで、どうする？」

「敵さんに聞きたいものです。何せ、我々に向かってきてくれなければ、我々が戦う意味がありませんからなあ……」

フォレストアル第一軍団参謀長キングストーン・ウェルズリーは肩をすくめた。フォレストアル第一軍団の役目はワイバニア軍全軍の注意をミュセドーラス平野にひきつけることにある。ワイバニア軍の動きはフォレストアル第一軍団にとって戦いの結末以上に大事な意味を持っていた。自分たちが犬死にならないために、ミュセドーラス平野に生きた証を残す為に、彼らは敵の動きを知りたがったのである。

フランシスは周囲を見やった。わずかに敵の動きが見える。フォレ

スタル最強の軍団長は老獪な笑みを浮かべた。

「キングストーン。どうやら犬死にはならなさそうだぞ」

「おお……」

ウエルズリーはその眼で見た。ワイバニア軍第二、第六軍団が反転しつつあること。さらに北へ双眼鏡を向けると、ワイバニア軍の予備兵力が自分たちに方向を向けつつあるのが見えた。

ワイバニア軍は、フォレストアル第一軍団を最優先に倒すべき敵であると認識したのだ。

幾多の修羅場を経験したウエルズリーでさえ、身震いを押さえられなかった。

「全軍、速度陣形そのまま。目標、ワイバニア第一軍団」

激突まであとわずか。フォレストアル第一軍団は、ワイバニア第一軍団にまっすぐ向かっていった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第百五二話

メルキド軍を取り逃がし、フォレストル第一軍団に蹂躪されたワイバニア軍は戦力の立て直しをはかっていた。

「第二軍団全軍反転。フォレストル軍第一軍団を撃破します」

「マレーネ様！」

ワイバニア軍第二軍団長マレーネ・フォン・アウブスブルグはフランシスらフォレストル第一軍団撃滅を決断した。

「分かっているわ、エアハルト。ここで敵に背を向けたら、わたし達は後ろから攻撃を受けるかもしれないというのでしょうか？」

「はい」

「でも、とりあえずは大丈夫。敵は斜面に退避しているから、わたし達に追いつくまでに時間がかかるはずよ。敵はもう寡勢。それをワイバニア全軍がたたき、さらに反転してメルキド軍を攻撃するの」

「すごい……」

確かに成功すれば、完全勝利は間違いない。追撃しようと言う敵の心理を逆用した戦術だった。しかし、数々の仮定の上に成り立っていることも確かだった。一つにはフォレストル第一軍団が短時間で撃破されなければならないこと。そして、もう一つがフォレストル、メルキド連合軍が斜面を下って攻撃してくれるかということだった。このとき、マレーネはなぜか楽観的だった。

「鶴翼陣形による包囲が完成されつつあるのよ。敵は獲物であるわ
たし達を倒したくてたまらないはずよ」

（そうだろうか？）

エアハルトの中にマレーネへの一種の疑念が浮かんだが、彼は頭を
振ってそれを捨てた。エアハルトにとって、マレーネは姉であり、
母であり、教師であり、上官だった。彼の女性の理想像を具現化し
た存在でもあり、女神と等価値だった。信仰と言い換えても良い感
情も持っている。そんな彼女に対して疑念を抱くなど、あつてはな
らないことだった。

（マレーネ様は勝つ。絶対に）

目の前で第二軍団を指揮する白銀の女神をエアハルトは見た。母性
と慈愛に満ちた女神。自分の理想。普段のマレーネと変わるものは
何もない。勝利はマレーネとともにある。

少年副官は改めて思った。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第百五三話

フォレスタル軍攻撃のために陣形を転換するワイバニア軍。それは第二軍団だけでなく、オリバー・リピツシュ率いるワイバニア軍第六軍団も同じだった。

「そうか、アウブスブルグ殿も同じ考えか」

笑みとも無然ともつかぬ表情でリピツシュは言った。

「軍団長、敵が追撃戦をかけるとは考えられないでしょうか？」

「そのときは、我々が敵の前に立ちはだかつてやればよい」

「は？」

「わからぬか？ 何も全軍でわずか三個大隊を攻撃せずとも良いということだ。我々は第二軍団の後方に展開、前後の敵に備えるのだ」

「はあ……」

参謀の気の抜けた返事に内心舌打ちしながら、リピツシュは命令を伝えた。用兵としては中途半端に考えられるが、この位置は戦うには最も困難な位置取りだった。前後の敵に警戒しながら、絶妙のタイミングで攻撃と防御を行わねばならない。ただでさえ、ワイバニア軍によるフォレスタル軍への攻撃は紙一重で行われるのだ。リピツシュの行動はさらに神業的な呼吸を要求される。戦上手のリピツシュでさえ、成功の確率は低い作戦だった。

「敵軍の動き、味方の動き、どれが欠けても作戦は成功しない。こんなに気が張る作戦ははじめてだ……」

リピッシュは自分の軍団旗を見た。ミュセドールス平野の風になびく第六軍団の旗印。その色はやけに色あせて見えた。

「これが、最後の戦いになるかもしれんな」

十二軍団長中、最も冷静で寡黙な男は小さくつぶやいた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第百五四話

一方、ミュセドーラス平野突入に成功したワイバニア軍予備兵力は司令官マルガレーテ・ハイネマン指揮のもと、兵力の展開を行っていた。

「よし、第九軍団はこれより、敵第一軍団に攻撃を開始する。マイヤーとヴィクターの坊やには自分の判断にゆだねるって言っときな！」

マルガレーテは怒鳴りつける様に伝令に告げた。

「大人げないわよ。マルガレーテ」

ワイバニア第九軍団参謀長フランシスカ・エンチェンスベルガーは上司に釘を刺した。

「気が立ってるのは分かるけれど、こんなときこそ落ち着かなきゃだめ。中位軍団長だからって、あの二人に指揮を丸投げしないで、きちんと責任を果たしなさい」

参謀長にいわれ、マルガレーテは小さく「わかったよ」とだけこたえた。

「バルクホルン軍団長の第十一軍団はフォレストル軍の備えとして待機させましょう。連れて行くのはマイヤー軍団長の第十二軍団だけで十分でしょう。フォレストル一個軍団だけが戦っているのは明らかに怪しいもの。でも、あの一軍団を放置すれば、大変なことになるわ」

「スタンリーのようにかい？」

「それ以上よ」

フランススカは即答した。

「三十年前の激戦を知っているのは、上級指揮官クラスでは、グレゴール様だけ。戦史を学んでいれば、どんなに凄まじい戦いだっかわかる。フランスス・ピットはそれを生き抜いたフォレストル軍の中でも数少ない存在よ」

「今更戦史の講義なんて受けたくないよ」

「聞いて。そんな軍団長が後方で暴れ回ったら、たとえ一個大隊であつても、危険よ」

「それなら、坊やの十一軍団も使うべきさ。あの子の兵力はマイヤーよりもはるかに多いんだから」

相棒の問いにフランススカは首を振った。

「怖いのはフランスス・ピットだけじゃないのよ。全軍がミュセドーラス平野に密集することも危険なの。敵第一軍団の登場で、戦局は再びわたし達が不利になってしまったわ。分断したはずの鶴翼陣形が元に戻ってしまったから、敵はいつでもわたし達を包囲できる状態にあるのよ」

マルガレーテの額から汗が一筋たれた。自分たちがいかに危険な状態にあるかを知らされたのである。数的優位は揺るがない。しかし、

敵は地の利を手に行っている。ワイバニア軍を包囲下に置いた連合軍が再び反撃に出るのは予想できたことだった。

「わたし達が勝つには、フォレストル第一軍団を倒し、返す刀で連合軍を倒すしかなくなってしまうたのよ」

明敏な第九軍団参謀長は声を震わせた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第百五五話

ワイバニア軍第十二軍団長リヒャルト・マイヤーは、マルガレーテからの命令を受け取っていた。

「第十二軍団は、第九軍団に続いて、敵第一軍団の殲滅にあたられたし……か」

マイヤーの視線の先には魚鱗の陣形に転換しながら移動する友軍の姿があった。さらにその先には、小さく陣形を組む敵軍がいた。その数、わずかに三〇〇〇。対するワイバニア軍は四万に及ぶ。いかに相手が精強であっても、十倍以上の兵力差はいかんともしがたいものだった。

「軍団長、いつでも準備はできてますぜ。動かなくてもいいんですかい？」

参謀の一人が、慣れぬ口調でマイヤーに言った。マイヤーは沈黙で返した。たかが三個大隊を全軍の三分の二で包囲する。そのことがいかに危険か、マイヤーは理解していた。

「我々はわずか二個大隊。動いたところで、戦局に影響はないだろうに……」

「しかし、ハイネマン軍団長の命令は『我に続け』でしょうか？ 動かなかつたら命令違反になりますぜ」

「そつだな」

数瞬の間を置いた後、マイヤーは全軍前進の命令を下した。

「おおおう、集まってくる。集まってくるわ」

自軍めがけて襲い来る兵の群れを見たフランススはうれしそうに笑った。

「我々に来るのは、第二、六、八、九、十二……。あとは第三軍団も。ざっと四万弱ですなあ。全軍と言う訳ではありませんが、まあ、悪くはない数でしょう」

傍らのウェルズリーも悠然とわらった。フランスス率いる第一軍団は目的を十分に達していた。

「さて、あとは前方の敵第一軍団をどう料理するかだの。何せあやつはあのヴィヴァ・レオを破ったほどの手練れだからのう」

「知恵を尽くし、戦いたいところですが、我々には時間も兵力も残されていません。とる戦術は限られています。ここは密集隊形を組んで側面攻撃といきましょう」

「そうじゃな……」

フランススは指揮杖を振り、配下の部隊に命令を下した。三個軍団を相手に激闘を繰り広げた兵士たちは疲れてはいたが、まだ士気は落ちていなかった。最後の瞬間まで戦い抜く覚悟と気迫に満ちていた。

フランススの前に真紅の軍団旗が見えた。ワイバニア第一軍団の龍の旗。その龍の眼をにらみつけたフランススは指揮杖を前方に突き

出した。

「全軍、突撃！」

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第百五六話

「軍団長、フォレスタル軍が！」

「陣形転換！ 龍将三十六陣”龍槍”！ 目標、フォレスタル軍第五軍団！」

ハイネの号令一下、ワイバニア軍第一軍団はまたたく間に陣形を変えていく。ワイバニア軍三個軍団を防ぎきったフランススの横陣を一瞬にして突き崩した龍将三十六陣、龍槍である。ワイバニア最強最速の突進力を持つ龍の槍にヒーリー率いる第五軍団はなす術もなく壊滅すると思われた。

「突撃！」

ハイネは引き抜いた剣を高く掲げると、一気に振り下ろした。ミュセドーラス平野大決戦、その最終局面が幕を開けた。

一方、退却準備を整えていたフォレスタル第五軍団はワイバニア軍の来襲に色めき立った。

「速い！」

指揮所になる大型装甲馬車の窓から、参謀の一人が悲鳴に近い声を絞り出した。ワイバニア軍の異常なまでの早さは第五軍団首脳部を震え上がらせた。紙一重のタイミングをものにしたのはハイネだった。

「ここまでの速さとは……。退却を急がせるんだ！」

やぐらの上から龍槍を見たヒーリーは即座に退却を急がせた。速度が遅い部隊から順に斜面を登り始めているが、有利な斜面で戦いを行うには時間が足りなさすぎる。大損害は免れそうにない。ヒーリーは奥歯を強くかんだ。

「軍団長、作戦があります」

傍らのメアリがヒーリーに言った。そのまっすぐなまなざしはヒーリーに予感を感じさせるのに十分だった。うなづくヒーリーにメアリはそつと口を寄せた。

「陣形を鶴翼陣形に変えるんだ。なるべく戦線を長くとり、縦深陣に敵を誘い込め」

二列縦隊のフォレストル第五軍団の隊列が左右に分かれていく。追いつがる龍槍がフォレストル第五軍団を射程にとらえたのはこのときだった。

「進め、進め！」

ワイバニア兵はそれしか言葉を知らぬ様に叫び、走った。こうありたいと念じ、言葉に出せば、体はそれに応えてくれる。強力な自己暗示によって狂戦士と化したワイバニア兵たちは前方に横付けするフォレストル軍の装甲馬車にとりついた。

同じ頃、ヒーリーは装甲馬車にいた司令部大隊長ウォーリー・モルガンを呼び出した。

「モルガン大隊長、ついに番が来たようだ。我々第五軍団は総力

を挙げて、敵第一軍団を撃滅する。司令部大隊護衛隊に鶴翼中央部を任せる」

「はい！」

モルガンは若き軍団長に敬礼した。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第一百五七話

司令部大隊長と他の大隊長とは性質が異なる。司令部大隊は軍団長、参謀長などが属し、軍団の頭脳とも言える存在である。それを預かるものは、戦闘における統率力の他に、軍団長から全幅の信頼を得られるものでなければならない。

他の九人の大隊長が裏切ったとしても、決して裏切らない人物。それが司令部大隊長なのである。

フォレストル第五軍団司令部大隊長ウォーリー・モルガンもその一人である。

モルガンは三十年前のワイバニア軍の大侵攻で初陣を飾り、幾多の死線をくぐり抜けてきた、叩き上げの大隊長だった。

モルガンはヒーリーの馬車を辞すと前線に戻り、部下に指示を出した。

「全護衛中隊は防御陣形をとれ。第一、第二、第三中隊は弓兵装備。第四中隊は槍を構え。中央部に。第五中隊は遊撃戦力として騎兵装備で後方に待機。軍団長も敵も待つてはくれんぞ！ さあ、急げ急げ！」

自慢のカイゼル髭を揺らしてモルガンは声を張り上げた。その姿は軍団長よりも軍団長らしいと揶揄されるほどの威厳に満ちていた。

モルガンの働きをヒーリーとメアリは馬車のやぐらの上から見ていた。

「さすがはモルガン大隊長ね。もう陣形を固めているわ」

「だが、相手はあのハイネだ。五個中隊では荷が重いはずだ。両翼の速さがその勝敗を分けることになるか……」

ヒーリーはさらに前方の敵軍を見た。敵の先頭部はもう、防壁の装甲馬車を乗り越えている。軍団最後尾が追いつかれるのは時間の問題だった。

「殿の第一機動歩兵大隊に連絡。味方の退却時間を確保するんだ。だが、決して無理はするな、一戦交えたら後退し、左右両翼につけ」

ヒーリーは伝令の騎兵に伝えた。龍槍の前に一個大隊の防御が通用しないことは百も承知である。しかし、作戦を敵に気取られる訳にもいかなかった。

敵の目を覆うように、フォレストル軍機動歩兵が立ちはだかった。

脆弱な防御陣にハイネは鼻を鳴らした。

「その程度の防御で、我々を止められると思ったか。全軍、陣形、速度このまま。敵陣形を粉碎せよ」

フォレストル軍にワイバニア第一軍団が襲いかかったのはその数分後だった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第一百五八話

「力と力でぶつかれば、数が弱い方が不利に決まっておる。だが、あえてここは力で押すのだ。まさか、敵も我々が退かずに齒向かってくるとは思つまい」

モルガンはそう副官に告げた。敵の突進力を間近で見たモルガンは、敵の心理を逆手に取った作戦を選択した。

「しかし、相手は一個軍団。こちらは五個中隊。とても、勝ち目は……」

「ないな」

「大隊長！」

「だがそれは、長期にわたって戦線を維持した場合の話だ。敵の軍団の最大の弱点は側面にあることは明白。側面からの攻撃が来るまでのわずかな時間を稼げば良いのだ。合図とともに一斉射、のち突撃だ」

機動歩兵大隊が突破され、二列縦隊だったフォレストル軍が左右に分かれていく。完全に両断された陣形の末端では、フォレストル軍五個中隊の姿があった。

「あれを崩せば、フォレストルの首は取つたも同然だ。全軍、速度陣形を崩すな！」

ハインは勝利を確信した。自軍の十分の一にも満たぬ兵力は、たと

え司令部大隊の精鋭であったとしても、ワイバニア軍の戦力をもつてすれば、十二分に撃破しうるものだった。

一秒、一瞬ごとに大きくなる敵の足音に、モルガンは口が渴いているのを感じていた。

「さあ、来るぞ！ 勝負のときだ！」

モルガンはサーベルを握りしめ、高らかに言った。ごうと響く重低音の号令と、カイズル髭の堂々たる姿は、恐れる味方に、敵に立ち向かう勇気を与えた。

「敵を蹂躪せよ！」

「第一陣、第二陣斉射！ ぶちかませい！」

三基のバリスタと二百の連射弓から一斉に矢が放たれた。連装式の連射弓はわずかな間に五本の矢を連射できる。千本の矢がワイバニア第一軍団先陣三個中隊に襲いかかった。

「何が起こった」

「疾走する馬車は急に止まれん。無理に止まれば……」

モルガンの指摘通り、足下を崩された龍槍は一気に崩壊した。敵陣の中で停止し、減速できぬまま、ワイバニア兵は味方の屍を踏み越え、つまづき、さらに味方に踏まれ死体を量産していく。

「全軍、密集隊形。急げ」

冷静に事態を処理し、陣形の再編に取りかかったのは、ハイネの非凡さの現れであろう。しかし、ハイネの手腕を見せてやるほど、フォレストル軍は甘くなかった。左右に分かれたフォレストル軍が凄まじい速さでワイバニア第一軍団に攻勢をかけたのである。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第百五九話

前と左右から襲い来るフォレストアル軍に、ワイバニア第一軍団は色めきたった。

「うおっ！」

「ぎゃあああ！」

フォレストアルの重装歩兵が、機動歩兵が致命的な隙をさらけ出した敵を攻める。フォレストアル第五軍団は短期間で幾度もの実戦を経験し、その戦闘能力は他の軍団とひけを取らぬほどに成長していた。兵士達は指揮官の命令を忠実に実行し、的確に敵の急所をついた。

「陣形を固めよ！ 前方の陣容は薄い！ 血路を拓いて突破する！」

ハインは高らかに声を上げたが、すぐに自嘲じみた笑みを浮かべた。その声、仕草に芝居がかったものを感じたからである。しかし、戦意をくじかれた軍団の態勢を立て直すには必要な手段であった。

エルンストが配下の参謀、伝令に次々に指示を飛ばす。ハインの片腕は、第一軍団の参謀長としてその手腕を十二分に発揮した。浮き足立つ軍団をまたたく間に再編し、フォレストアル軍再攻撃の準備を整えるとともに、フォレストアル軍の陣形の弱点をハインに助言した。やぐらから敵の動きをみたヒーリーは額に手をあてた。

「やってくれるよ。まったく。こっちはのんびり戦ってられないところだ。」

「モルガン隊長の護衛隊が突破されれば、わたしたち司令部は丸裸よ」

「並の軍団ならあきらめるか全滅しているのに、ワイバニア最強の名は伊達じゃないな。スチユアート隊長を呼んでくれ」

ヒーリーは軍団後方で待機している龍騎兵大隊長アレックス・スチユアートを呼び出した。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第一百六十話

「お呼びですか。軍団長」

「龍騎兵大隊に出撃を命じる。ワイバニア第一軍団の足を止めてくれ。陣形、作戦は隊長にまかせる」

金髪碧眼の美丈夫は居直すとヒーリーに敬礼した。

「何か言いたげだな。スチュアート隊長」

「は。我が龍騎兵大隊の力ならば、敵軍を撃破できると思います」

「スチュアート隊長は先年のオセロー平原の戦いを覚えているだろう？」

「はい。忘れる訳がありません」

史上はじめて龍騎兵が一方的な敗北を喫した戦い、オセロー平原の戦い。スチュアートがヒーリー指揮下ではじめて参加した戦いでもあった。

この戦いで、スチュアートは敵龍騎兵大隊長を討ち取る戦果をあげている。

スチュアートは大空から見た。魔術散弾にとって地に墮ちていく龍騎兵を。数百の矢に貫かれ、息絶えていく龍騎兵を。

フォレストアル軍人として、彼は勝利に沸き立つ気持ちを抱くとも

に、龍騎兵として底知れぬ恐怖を感じていた。

「前線に、優れた弓兵隊指揮官がいる」

「ヴェルナー・テンシュテットですか？」

「知っているのか？」

「龍の眼を持つ獵兵」道化師ヴェルナー”数々の異名を持ちますが、共通しているのはワイバニア最高の弓兵であり、我々龍騎兵の天敵だということです」

「龍騎兵大隊は俺たちの切り札だ。だからといって、温存させておくつもりはさらさらないが、あのアルレスハイム連隊を破ったほどの手腕だ。これ以上の戦力低下はさげたい」

「分かりました。直ちに第一軍団攻撃に向かいます」

そういうと、スチュアートは再度敬礼し、司令部を辞した。

「珍しいわね、あなたが逃げを打つなんて」

傍らのメアリがヒーリーに言った。おそらくスチュアートも同じ気持ちであっただろう。

これまでの戦いでヒーリーは消極的な戦術をとったことはない。たとえ退却しても、常に勝利と結びついていた。

「アンジェラを倒したほどの大隊長だ。実力は軍団長にも匹敵する。慎重にもなるさ」

「嘘。今のあなたは恐れているのよ」

「何……」

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第百六一話

ヒーリーは険しい眼でメアリをにらみつけた。それはヒーリーが今まで誰にも見せることがなかったまなざしだった。

「あなたは恐れている。仲間を失うのが怖いのだよ。アンジェラも、スチュアート隊長もモルガン隊長も。今誰も死なせない様に戦っている」

メアリはヒーリーに臆すことなく続けた。

「うるさい」

「レイがやられたから？ アンジェラが傷を負ったから？ あなた、お祖父様の言葉を忘れたの？ 何のために苦しんだの？ 何のために、皆は命をかけているの？」

メアリの言葉が容赦なくヒーリーの心に突き刺さる。彼のすべてを見透かしたかのような言葉がヒーリーにはただただ不快だった。非情になると心に決めたはずなのに、友の傷が決意を鈍らせた。誰も失いたくない。その思いがヒーリーを支配し続けていた。

「うるさい、だまれ！」

何も言い返せない。そのことがより一層ヒーリーをいらただせた。二人の間に張りつめた空気が漂う。それを破ったのは伝令からの報告だった。

「敵第一軍団、密集体型で尚も前進中！ このままでは、司令部護

衛中隊に達します！」

ハイネ率いるワイバニア第一軍団は左右から攻撃を受けながらもヒリーの本陣に向けてなおも前進を続けていた。

「両翼の攻撃を厚くしろ。決して、手を緩めるな。敵の攻撃は、もう少いで限界に達するはずだ」

ヒリーは伝令に命じると敵軍に目を向けた。ワイバニアの真紅の旗印は目に見えて近くなっている。自軍が優勢ではあるが、樂觀でない状況だった。

「軍団長、龍騎兵による徹底した航空攻撃を具申します。たとえ龍騎兵の大半を失ったとしても、敵第一軍団を殲滅できれば、我々の勝ちです」

ヒリーはメアリの意見にすぐに答えようとしなかった。

「ヒリー！」

「両翼の攻撃を維持だ。わかったな、参謀長」

「はい……」

メアリはそれ以上言葉を重ねようとしなかった。悲しげに目を伏せると、ヒリーの後ろに控えた。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第百六三話

ミュセドーラス平野中央部、フランスス・ピット率いるフォレスタル第一軍団は反転したワイバニア軍によって包囲されつつあった。

「全軍、密集隊形。決して陣を崩すな」

フランススは平野中央部に向けて、さらに前進させながら、兵を密集させた。この戦いはワイバニア軍の主力がミュセドーラス平野に閉じ込められないと意味がない。敵を一兵でも多くひきつけるため、フランススらは時間を稼がねばならなかった。

フランススの部隊にもっとも早く到着したのは、マレーネ・フォン・アウブスブルグ率いるワイバニア第二軍団であった。

「攻撃」

わずか一日、三度の手合わせでマレーネは、フランススの戦い方を熟知していた。彼女はフランススら第一軍団の進路を遮ると、陣形の急所となるポイントに攻撃を集中させた。

意図的に兵力が疎と密になるポイントを作り出し、点を線で結ぶ様に攻撃を仕掛ける。まるで、たまねぎの皮を剥く様にマレーネは強固なフランススの密集隊形を崩していった。

「いまましい攻撃だのう。こちらが付け入る隙を与えないとは…」

「味方を待っているのでしょうか。真に恐ろしいのは、これからです」

「そうじゃな」

やぐらの上からはワイバニアの軍団旗がみるみる近づいてくるのが見える。第二軍団の後方には、第六軍団、さらにフランシスらの前には第九、第十二軍団、少しおくれで第三軍団の姿があった。

「それにしても……。はかったように、鶴翼陣形。それも、少しの乱れもないとは、大したものよ」

「ええ」

「我らも、戦うとしようぞ。彼らに負けぬくらい、堂々とな」

「はい」

フォレストラーの老軍団長は指揮杖を振り、最後の命令を発した。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第百六四話

「全軍、突撃！ 敵は寡兵だ。突き崩せ！」

「隙を見せるな。攻めて攻めて攻めまくれ」

「他の軍団に遅れてるよ！ 早くしないかい！」

ワイバニアの軍団長達は細やかな命令を下そうとはしなかった。少数の敵を倒すには自軍の数的優位を利用して力でねじ伏せるのが最良の策であると考えていたためである。

ワイバニア軍は攻め、フォレストル軍は守る。天地創世以来、その図式が決まっていたかのように、敵味方は理想的な兵力移動と展開を行っていた。

「中位と下位軍団はとりあえず無視してもいいでしょう。やっかいなのは第二軍団です。こちらの痛いところばかりついてきますな」

「大した娘御じゃて……。敵の陣形転換の隙について槍兵を前進させようぞ」

マレーネが三度の手合わせでフランシスの特性を理解した様に、彼もまた、彼女の戦術を理解していた。

フランシスはワイバニア第二軍団が更なる攻撃にうつる瞬間、槍兵による突撃を仕掛けたのである。予想外の攻撃にうろたえた第二軍団先陣は死体を量産しながら後退を開始した。

「やっぱり、思う様にはいかないわね。難しいことを考えすぎてたみたい」

マレーネは傍らの副官に言った。

「次は力で押し切るわ。歩兵を前に出し、陣形を崩しなさい」

マレーネは陣形を再編すると、他の軍団と同じ様に兵力を頼みにした攻勢を開始した。フランスのもとに、撃破された部隊の報告が入る。

ワイバニア軍の攻勢は苛烈を極めた。兵力差はそのまま武装の差につながる。援護射撃にすぎない矢もフォレスタル軍にとっては致命の一撃であった。さながらスコールのようにたたきつける矢にフォレスタル軍の精鋭達は次々と倒れていった。

またたく間に陣形はずたずたにされ、戦闘は乱戦状態に突入した。中でも目覚ましい働きをしたのは、リヒャルト・マイヤー率いるワイバニア軍第十二軍団であった。新編成の軍団であり、しかも効率的で組織的な運用ができない弱点をマイヤーをよく理解しており、彼はその弱点を逆手にとった作戦を考案し、実行したのである。

「敵は疲れている。だからこそ、兵力が少ない我々にも奴らを倒すことが出来るはずだ。さあ、勝利は目前だ。攻撃の手を緩めるな」

マイヤーはとにかく単純な命令に終始した。「前進」「前進」「突撃」ここに、マイヤーの指揮官としての有能さが凝縮されていたといえる。指揮官の前提条件として、自軍の能力を正確に把握していることがあげられる。戦場に散った参謀長ギーゼラ・ヴァントのもと、ならず者集団である旧第十一軍団をまとめあげたマイヤーは誰

よりも自軍の特性を理解していたのである。

「敵の大將首は目の前だ。討ち取って手柄を立てろ」

第十二軍団はフォレスタル第一軍団ののど元まで迫りつつあった。

第六章 ミュセドーラス平野大決戦！ 第百六五話

「敵軍、至近」

「見えておる」

血相を変えてやってきた伝令に、フランススは悠然と返した。リヒヤルト・マイヤー率いるワイバニア軍二個大隊が司令部大隊めがけ、猛然と迫り来るのが見えた。乱戦状態にあっても、司令部大隊とその周辺の部隊は整然と隊列をととのえている。フランススは後退を命じると、戦線を縮小し、防御を固めた。

さらにフランススはウエルズリーの献策を取り入れ、予備兵力として温存しておいた三個中隊を投入し、マイヤーら第十二軍団の側面から攻撃を仕掛けた。

「しまった」

マイヤーはうめいた。自身の戦術が裏目に出たのだ。フランススとウエルズリーはさらに巧妙だった。ただでさえ隊列らしい隊列を組んでいなかった第十二軍団を分断し、先鋒二個中隊を包囲したのである。このとき投入された兵力は四個中隊。倍の兵力で包囲された上、集団としての統制が取れていなかった敵二個中隊は瞬間に壊滅した。こうして、局地戦ながら勝利を収めたフォレストル第一軍団はさらに第十二軍団を押し戻すことに成功した。

しかし、フォレストル軍の奮戦も長くは続かなかった。マンフレート・フリッツ・フォン・シラー率いるワイバニア軍二〇〇〇がフォレストル軍の側背攻撃を仕掛けたのである。

フランススの背後を守るのは、わずか三個中隊三〇〇名のみ。七倍する兵力を前に、第一軍団の後衛は総崩れになった。

“その攻めたるや雷電が如し”というのは、後世の歌物語の一節であるが、守勢に長けた指揮官であるとのシラーの評価を再考するよい証左になるであろう。ともかくシラーは立ちはだかるフォレストル軍の精鋭を撃破し、フランススの司令部に迫った。その進撃速度と攻撃力はフランススでさえ、最期を覚悟した。

「これまでか……」

司令部大隊至近まで肉薄したワイバニア三個軍団は突如その歩みを止めた。

「何故前進をやめるのですか？ 敵の大将首まであとわずかではないですか！」

指差し、激昂する軍団幹部にシラーはだらしない髪をかきあげながら答えた。

「……まあ、俺は軍団長としては新参だからな。目上の者の顔も立てなきゃならんというわけだ」

シラーが指差した先には、ワイバニア第二軍団の白い旗があった。旗があわただしく動いている。何か大きな陣形転換をしているのだろう。参謀にもそれは理解できた。

「それに、背後から敵を討つたとあれば、我が第三軍団の名折れだ」

「軍団長は名誉のために勝利をお捨てになる、ということですか？」

「俺個人としては、な。とりあえず、ワイバニア軍人として、理由はそれで充分だ。敵の耳目に後背に引きつけることに成功した。これ以上は、ここに留まる理由はない。後退する」

敵陣に静止したワイバニア第三軍団は後退を開始した。

第六章 ミュセドールス平野大決戦！ 第百六六話

第三軍団が後退しても、フォレストル第一軍団の危機は去らなかつた。マレーネ・フォン・アウブスブルグ率いるワイバニア軍第二軍団五〇〇〇がフォレストル第一軍団に攻撃を仕掛けたのである。

自軍に倍する兵力を叩きつけられては精鋭といえども防ぐ術はない。たちまちのうちに戦線は崩壊し、分断された第一軍団の残存兵力は後続のワイバニア軍に各個撃破されていった。

フォレストル兵が次々とミュセドールス平野に倒れていく中、フランススら二〇〇の兵は未だ秩序を守って敵の攻勢を支えていた。

「これまでのようじゃな」

「はい」

フランススは参謀長のキングストン・ウェルズリーと目を合わせた。

「よくやった。よく戦った。これで思い残すことはないのう」

晴れやかに笑うフランススにウェルズリーが杯を差し出した。別離の酒である。老将二人は杯を合わせると、一気に酒をあおった。

「いい酒だな、キングストン」

「はい」

杯を放り投げ、フランススは愛剣を引き抜いた。

ワイバニア軍先鋒はフランススらが築いた防御陣を突破し、司令部にまで迫っていた。装甲馬車から降りたフランススに一本の矢が襲い掛かった。

武芸に秀でたつわものですら、深手は避けられなかったであろう矢を、フランススは苦もなく素手でつかむと、地面にたたきつけた。

「さて、いくとするかの……」

「軍団長、おさらばでございます」

手槍を携えたウエルズリーがフランススに敬礼した。

「長い間、世話になった。あちらでも酒を酌み交わそうぞ」

「はい」

ウエルズリーはフランススの前に出ると、敵兵に向かっていった。これ以後、ウエルズリーの姿を見た者はいない。ある者は戦場で散ったといい、またある者は戦いを生き抜き、家族と再会したとも言われている。これは乱戦のため、誰によって討ち取られたかが分からないことによる。しかし、名将フランススを支え続けた参謀の死を惜しむ者が多かったことも事実であり、このような生存説がまことしやかに流れたのではないかと推測されている。

相棒を見送ったフランススの視界に金色の槍を背負う白銀の龍の紋章旗が入ってきた。ワイバニア第二軍団の旗印である。

「さあ、来るがいい！」

フォレストアル随一の老将は裂帛の声をあげた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2516g/>

龍の旗の下に

2011年11月28日08時54分発行